

京都府遺跡調査報告集

第178冊

1. 平成27～29年度国営緊急農地再編整備事業
「亀岡中部地区」関係遺跡
佐伯遺跡第7～9次
2. 平成25～27・29年度主要地方道亀岡園部線
防災・安全交付金事業関係遺跡
出雲遺跡第17・19・20次
中古墳群第2・3次
三日市遺跡第12～14次
車塚遺跡第11・12次

2019

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

佐伯遺跡第7～9次



(1) 第7・8次調査地遠景(東から)



(2) 4・5トレンチ全景(垂直上が北)

佐伯遺跡第7～9次



(1) 第8次調査地遠景(北東から)



(2) 第9次調査地遠景(南西から)

佐伯遺跡第7～9次



(1) 第9次16・C-1・C-5 トレンチ遠景(西から)



(2) 第9次C-5 トレンチ全景(上が北)

佐伯遺跡第7～9次



(1) 第9次D-2トレンチ調査地遠景(東から)



(2) 第9次D-1・2トレンチ遠景(東から)

中1号墳第3次



中1号墳第3次検出状況(南東から、後方右丘陵麓に坊主塚古墳)

三日市遺跡第12・13次、車塚遺跡第11次



(1)三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次調査区全景(南から、左後方に千歳車塚古墳)



(2)三日市遺跡第12次3トレンチAT火山灰検出状況(南から)

序

平成31年4月には文化財保護法の一部改正が施行され、文化財の保護とともにその活用が一層重視されます。国内屈指の文化財を有し、文化庁の移転も控えた京都府として、文化財の保護と活用に期待されているところです。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、38年間にわたり京都府内の各地域に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その調査成果を『京都府遺跡調査報告集』として刊行するとともに、セミナーや速報展などで公表してきました。

本書は、平成25、27～29年度に農林水産省近畿農政局、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した、佐伯遺跡、三日市遺跡、中古墳群、出雲遺跡、車塚遺跡の発掘調査報告を取録したものです。本書を学術研究の資料として、また地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された上記の各機関をはじめ、亀岡市教育委員会などの関係各機関、ならびに調査にご参加、ご協力をいただきました多くの皆さまに厚くお礼申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

(1) 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

佐伯遺跡第7～9次

(2) 主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業関係遺跡

出雲遺跡第17・19・20次、中古墳群第2・3次、三日市遺跡第12～14次、車塚遺跡第11・12次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
佐伯遺跡第7～9次	京都府亀岡市稗田野町 佐伯	平成27年5月25日～ 平成27年12月4日、 平成28年5月9日～ 平成29年3月2日、 平成29年5月9日～ 平成30年2月19日	農林水産省近畿農 政局	村田和弘 黒坪一樹 竹村亮仁 荒木瀬奈 武木典子 浅田洋輔
出雲遺跡第17・19・20 次 中古墳群第2・3次 三日市遺跡第13・14次 車塚遺跡第11・12次	京都府亀岡市千歳町千 歳、馬路町上三日市	平成25年7月1日～ 平成25年10月30日、 平成26年8月22日～ 平成27年3月6日、 平成27年5月7日～ 平成27年12月4日、 平成29年12月5日～ 平成30年1月24日	京都府南丹土木事 務所	高野陽子 黒坪一樹 筒井崇史 伊賀高広

3. 上記事業は、本部事務所(向日市寺戸町)で整理・報告作業を実施した。なお、本部での整理・報告作業については、現地担当者の指示のもと、調査課企画調整係が協力して実施した。

4. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は、原則として農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

6. 本書の編集は、調査課担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7. 現場写真は主に調査担当者が撮影した。

本文目次

1. 平成27～29年度国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡 佐伯遺跡第7～9次発掘調査報告	1
2. 平成25～27・29年度主要地方道亀岡南部線防災・安全交付金事業関係遺跡発掘調査報告 出雲遺跡第17・19・20次、中古墳群第2・3次、三日市遺跡第12～14次、車塚遺跡 第11・12次	209

挿図目次

1. 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡 佐伯遺跡第7～9次	
第1図 調査地位置図	4
第2図 年度別トレンチ配置図及び大地区・中地区割図	6
第3図 小地区割図	8
第4図 A-3区平面図及び土層断面図	10
第5図 A-5区平面図及び土層断面図	10
第6図 A-6区平面図及び土層断面図	11
第7図 B-1区平面図	12
第8図 C-2区平面図及び土層断面図	13
第9図 C-3a区平面図及び土層断面図	13
第10図 C-3b区平面図及び土層断面図	14
第11図 C-4a・b区平面図及び土層断面図	14
第12図 C-5b・c区平面図及び土層断面図	15
第13図 C-5d区平面図及び土層断面図	16
第14図 C-6a・b区平面図及び土層断面図	16
第15図 小規模調査D・E地区調査区配置図	17
第16図 D-1d・e区平面及び土層断面図	18
第17図 E-1a・b区平面及び土層断面図	19
第18図 E-2a・b・c区平面及び土層断面図	20
第19図 E-3a・b・c区平面及び土層断面図	21
第20図 E-3d・e区平面及び土層断面図	22
第21図 E-3f・g・h区平面及び土層断面図	23
第22図 E-3i・j・k・lトレンチ平面及び土層断面図	24

第23図	1トレンチ遺構配置図	25
第24図	1トレンチ出土遺物実測図1	26
第25図	1トレンチ出土遺物実測図2	27
第26図	2トレンチ遺構配置図	28
第27図	2トレンチ出土遺物実測図	28
第28図	3トレンチ遺構配置図	29
第29図	3トレンチ出土遺物実測図	29
第30図	4トレンチ遺構配置図	30
第31図	4トレンチ竪穴建物SH101実測図	31
第32図	4トレンチ竪穴建物SH102実測図	31
第33図	4トレンチ竪穴建物SH103実測図	32
第34図	4トレンチ竪穴建物SH104実測図	32
第35図	4トレンチ竪穴建物SH105実測図	33
第36図	4トレンチ竪穴建物SH133・134実測図	33
第37図	4トレンチ竪穴建物SH172実測図	34
第38図	4トレンチ竪穴建物SH179実測図	34
第39図	4トレンチ竪穴建物SH225・226実測図	35
第40図	4トレンチ竪穴建物SH227実測図	35
第41図	4トレンチ掘立柱建物SB13実測図	36
第42図	4トレンチ掘立柱建物SB14実測図	37
第43図	4トレンチ掘立柱建物SB15実測図	38
第44図	4トレンチ掘立柱建物SB16実測図	39
第45図	4トレンチ掘立柱建物SB17実測図	40
第46図	4トレンチ掘立柱建物SB18実測図	41
第47図	4トレンチ掘立柱建物SB19実測図	42
第48図	4トレンチ掘立柱塀SA20実測図	43
第49図	4トレンチ土坑SK118・180、ピットSP331実測図	44
第50図	4トレンチ出土遺物実測図1	46
第51図	4トレンチ出土遺物実測図2	47
第52図	4トレンチ出土遺物実測図3	48
第53図	4トレンチ出土遺物実測図4	49
第54図	4トレンチ出土遺物実測図5	50
第55図	4トレンチ出土遺物実測図6	51
第56図	4トレンチ出土遺物実測図7	51
第57図	4トレンチ出土遺物実測図8	52

第58図	4トレンチ出土遺物実測図9	53
第59図	4トレンチ出土遺物実測図10	54
第60図	4トレンチ出土遺物実測図11	54
第61図	5トレンチ遺構配置図	55
第62図	5トレンチ竪穴建物SH01実測図	56
第63図	5トレンチ出土遺物実測図	56
第64図	6トレンチ遺構配置図	57
第65図	6トレンチ竪穴建物SH17実測図	58
第66図	6トレンチ竪穴建物SH20実測図	59
第67図	6トレンチ土坑SK19実測図	60
第68図	6トレンチ掘立柱建物SB242実測図	61
第69図	6トレンチ出土遺物実測図1	62
第70図	6トレンチ出土遺物実測図2	63
第71図	6トレンチ出土遺物実測図3	64
第72図	7トレンチ遺構配置図	65
第73図	7トレンチ掘立柱建物SB1実測図	66
第74図	7トレンチ出土遺物実測図	67
第75図	8トレンチ遺構配置図	68
第76図	溝SD3・落ち込みSX15土層断面図	69
第77図	8トレンチ出土遺物実測図	70
第78図	9トレンチ平面置図	71
第79図	10トレンチ遺構配置図	72
第80図	10トレンチ井戸SE2実測図	72
第81図	10トレンチ出土遺物実測図	73
第82図	11トレンチ遺構配置図	76
第83図	11トレンチ出土遺物実測図1	77
第84図	11トレンチ出土遺物実測図2	78
第85図	11トレンチ出土遺物実測図3	78
第86図	12トレンチ遺構配置図	79
第87図	12-aトレンチ掘立柱建物SB10実測図	80
第88図	12-aトレンチ掘立柱建物SB11実測図	80
第89図	12-aトレンチ土坑SK8・9実測図	81
第90図	12-bトレンチ溝SD12実測図	82
第91図	12-aトレンチ出土遺物実測図1	83
第92図	12-aトレンチ出土遺物実測図2	83

第93図	12-b トレンチ出土遺物実測図1	84
第94図	12-b トレンチ出土遺物実測図2	85
第95図	13 トレンチ遺構配置図	86
第96図	13 トレンチ出土遺物実測図	86
第97図	14 トレンチ遺構配置図	87
第98図	14 トレンチ掘立柱建物 S B 3 実測図	88
第99図	14 トレンチ掘立柱建物 S B 14 実測図	88
第100図	14 トレンチ出土遺物実測図1	90
第101図	14 トレンチ出土遺物実測図2	91
第102図	14 トレンチ出土遺物実測図3	92
第103図	14 トレンチ出土遺物実測図4	93
第104図	14 トレンチ出土遺物実測図5	93
第105図	15 トレンチ遺構配置図	94
第106図	15 トレンチ出土遺物実測図	95
第107図	A-1 トレンチ遺構配置図	96
第108図	A-1 トレンチ出土遺物実測図1	97
第109図	A-1 トレンチ出土遺物実測図2	97
第110図	B-2 トレンチ遺構配置図	98
第111図	B-2 トレンチ出土遺物実測図1	100
第112図	B-2 トレンチ出土遺物実測図2	100
第113図	B-2 トレンチ出土遺物実測図3	101
第114図	B-3 トレンチ平面図	101
第115図	B-3 トレンチ出土遺物実測図	102
第116図	B-4 トレンチ遺構配置図	103
第117図	B-4 トレンチ掘立柱建物 S B 126 実測図	104
第118図	B-4 トレンチ土坑 S K 26・28・35・37・84 実測図	105
第119図	B-4 トレンチ出土遺物実測図	106
第120図	B-5・6 トレンチ遺構配置図	107
第121図	B-5 トレンチ掘立柱建物 S B 85 実測図	108
第122図	B-5 トレンチ掘立柱建物 S B 112 実測図	108
第123図	B-5 トレンチ掘立柱建物 S B 23 実測図	109
第124図	B-5 トレンチ井戸 S E 38 実測図	110
第125図	B-5 トレンチ溝 S D 1・遺物出土状況図・土層断面図	111
第126図	B-5 トレンチ大日堂古墳実測図	112
第127図	B-5 トレンチ土坑 S K 80 実測図	113

第128図	B-6トレンチ土坑SK2実測図	113
第129図	B-5トレンチ出土遺物実測図1	114
第130図	B-5トレンチ出土遺物実測図2	115
第131図	B-5・B-6トレンチ出土遺物実測図	116
第132図	B-6トレンチ出土遺物実測図	117
第133図	16・C-1トレンチ遺構配置図	119
第134図	C-1トレンチ瓦溜まりSX04出土状況図	120
第135図	C-1トレンチ瓦溜まりSX06出土状況図	121
第136図	C-1トレンチ掘立柱塼SA1実測図	122
第137図	C-1トレンチ竪穴建物SH70・84・85実測図	124
第138図	C-1トレンチ竪穴建物SH07実測図	125
第139図	C-1トレンチ出土遺物実測図1	126
第140図	C-1トレンチ出土遺物実測図2	126
第141図	C-1トレンチ出土遺物実測図3	127
第142図	C-1トレンチ出土遺物実測図4	128
第143図	佐伯遺跡出土軒丸瓦分類図	129
第144図	C-1トレンチ出土遺物実測図5	130
第145図	C-1トレンチ出土遺物実測図6	131
第146図	C-1トレンチ出土遺物実測図7	131
第147図	C-1トレンチ出土遺物実測図8	132
第148図	C-1トレンチ出土遺物実測図9	133
第149図	C-1トレンチ出土遺物実測図10	134
第150図	C-1トレンチ出土遺物実測図11	135
第151図	佐伯遺跡軒平瓦分類図	137
第152図	C-1トレンチ出土遺物実測図12	138
第153図	C-1トレンチ出土遺物実測図13	139
第154図	C-1トレンチ出土遺物実測図14	140
第155図	C-1トレンチ出土遺物実測図15	141
第156図	C-1トレンチ出土遺物実測図16	142
第157図	C-1トレンチ出土遺物実測図17	143
第158図	C-1トレンチ出土遺物実測図18	144
第159図	C-1トレンチ出土遺物実測図19	145
第160図	C-1トレンチ出土遺物実測図20	146
第161図	C-1トレンチ出土遺物実測図21	147
第162図	C-1トレンチ出土遺物実測図22	148

第163図	C-1 トレンチ出土遺物実測図23	149
第164図	C-1 トレンチ出土遺物実測図24	150
第165図	C-1 トレンチ出土遺物実測図25	152
第166図	C-1 トレンチ出土遺物実測図26	153
第167図	C-1 トレンチ出土遺物実測図27	154
第168図	C-1 トレンチ出土遺物実測図28	155
第169図	C-1 トレンチ出土遺物実測図29	156
第170図	C-1 トレンチ出土遺物実測図30	157
第171図	C-1 トレンチ出土遺物実測図31	158
第172図	C-1 トレンチ出土遺物実測図32	159
第173図	C-1 トレンチ出土遺物実測図33	159
第174図	C-5 a トレンチ遺構配置図	160
第175図	C-5 トレンチ溝SD2土層断面図	161
第176図	C-5 トレンチ出土遺物実測図1	162
第177図	C-5 トレンチ出土遺物実測図2	163
第178図	C-5 トレンチ出土遺物実測図3	164
第179図	C-5 トレンチ出土遺物実測図4	165
第180図	C-5 トレンチ出土遺物実測図5	166
第181図	C-5 トレンチ出土遺物実測図6	167
第182図	C-5 トレンチ出土遺物実測図7	168
第183図	C-5 トレンチ出土遺物実測図8	170
第184図	C-5 トレンチ出土遺物実測図9	171
第185図	C-5 トレンチ出土遺物実測図10	172
第186図	C-5 トレンチ出土遺物実測図11	174
第187図	C-5 トレンチ出土遺物実測図12	175
第188図	C-5 トレンチ出土遺物実測図13	176
第189図	C-5 トレンチ出土遺物実測図14	177
第190図	C-5 トレンチ出土遺物実測図15	178
第191図	C-5 トレンチ出土遺物実測図16	178
第192図	C-5 トレンチ出土遺物実測図17	179
第193図	C-5 トレンチ出土遺物実測図18	180
第194図	C-5 トレンチ出土遺物実測図19	181
第195図	C-5 トレンチ出土遺物実測図20	182
第196図	C-5 トレンチ出土遺物実測図21	183
第197図	C-5 トレンチ出土遺物実測図22	184

第198図	C-5トレンチ出土遺物実測図23	185
第199図	C-5トレンチ出土遺物実測図24	186
第200図	C-5トレンチ出土遺物実測図25	187
第201図	C-5トレンチ出土遺物実測図26	188
第202図	D-1・2トレンチ全体平面図	190
第203図	D-1トレンチ遺構配置図	191
第204図	D-1トレンチ出土遺物実測図1	192
第205図	D-1トレンチ出土遺物実測図2	192
第206図	D-2トレンチ遺構配置図	193
第207図	D-2トレンチ掘立柱建物S B02実測図	194
第208図	D-2トレンチ出土遺物実測図	194
第209図	佐伯遺跡出土軒丸瓦I類范傷	197
第210図	佐伯遺跡出土軒平瓦I類范傷	199

2. 主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業関係遺跡 出雲遺跡第17・19・20次、中古墳群第2・3次、三日市遺跡第12～14次、車塚遺跡第11・12次

第1図	調査年度別調査区位置図	210
第2図	調査対象区南部・北部調査地点配置図	212
第3図	調査地及び周辺主要遺跡分布図	214
第4図	調査対象地区地区割り図	215
第5図	南部調査地点1区(出雲遺跡第17次)土層断面図	216
第6図	1区平面図	217
第7図	1区土坑SK47及び柱穴平面・断面図	218
第8図	北部調査地点土層柱状図	220
第9図	北部調査地点(3・4トレンチ)平面・断面図	221
第10図	平成25年度調査出土遺物実測図(1)	223
第11図	平成25年度調査出土遺物実測図(2)	224
第12図	平成26年度北部調査地点(出雲遺跡第19次)配置図	226
第13図	5・6トレンチ平面・土層断面図	227
第14図	7・8トレンチ平面・土層断面図	228
第15図	9トレンチ平面図	230
第16図	9トレンチ東壁・北壁土層断面図	231
第17図	9トレンチ溝SD901・枕列SX910平面・断面及び遺物出土状況図	232
第18図	10・11・12トレンチ平面・土層断面図	234
第19図	13・14・15トレンチ平面・土層断面図	235

第20図	平成26年度南部調査地点配置図	236
第21図	中古墳群第3次・出雲遺跡第19次(2区)平面図	237
第22図	2区東壁・南壁土層断面図	238
第23図	2区周濠S D201平面・断面図	239
第24図	2区周濠S D201平面合成図	241
第25図	2区周濠S D201下層、葺石S X270平面・立面図(1)	242
第26図	2区周濠S D201下層、葺石S X270平面・立面図(2)	243
第27図	2区周濠S D201下層、葺石S X270平面・立面図(3)	244
第28図	2区周濠S D201下層断ち割り葺石断面・立面図	245
第29図	2区中1号墳墳丘復元図	246
第30図	2区北部遺構平面図	248
第31図	2区北部遺構平面・断面図(古墳時代)	249
第32図	2区中世遺構平面図	250
第33図	2区溝S D201土器溜まり1・2、杭列1平面・断面図	251
第34図	2区溝S D201による中世遺構復元案	252
第35図	2区土坑S K202・井戸S E225平面・断面図	254
第36図	平成26年度調査出土遺物実測図(1)	255
第37図	平成26年度調査出土遺物実測図(2)	256
第38図	平成26年度調査出土遺物実測図(3)	257
第39図	平成26年度調査出土遺物実測図(4)	258
第40図	平成26年度調査出土遺物実測図(5)	260
第41図	平成26年度調査出土遺物実測図(6)	261
第42図	平成26年度調査出土遺物実測図(7)	262
第43図	平成26年度調査出土遺物実測図(8)	263
第44図	平成26年度調査出土遺物実測図(9)	264
第45図	平成26年度調査出土遺物実測図(10)	266
第46図	平成27年度調査地点配置図	268
第47図	出雲遺跡第20次(3区)平面図	269
第48図	3区溝S D310・306・315平面・断面図	270
第49図	3区土坑S K312・313、井戸S E302平面・断面図	271
第50図	三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次調査地点(1～3区)配置図	272
第51図	三日市遺跡・車塚遺跡(1～3区)平面図	273
第52図	1区南壁土層断面図	274
第53図	1・2区溝S D50・31・35平面・断面図	275
第54図	1区中世土坑群平面・断面図	277

第55図	3区南壁土層断面図	279
第56図	2区及び3区南壁土層断面図	280
第57図	平成27年度調査出土遺物実測図(1)	282
第58図	平成27年度調査出土遺物実測図(2)	284
第59図	平成27年度調査出土遺物実測図(3)	285
第60図	平成27年度調査出土遺物実測図(4)	286
第61図	平成27年度調査出土遺物実測図(5)	287
第62図	平成29年度調査区配置図	289
第63図	三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次(4区)平面図	290
第64図	4区西壁・南壁土層断面図	290
第65図	4区掘立柱建物S B101、柱列S A102、S P119・156平面・断面図	291
第66図	三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次(5区)平面図	292
第67図	5区北壁・西壁土層断面図	293
第68図	5区土坑S K201平面・断面図	294
第69図	平成29年度調査出土遺物実測図(1)	295
第70図	平成29年度調査出土遺物実測図(2)	296
第71図	平成29年度調査出土遺物実測図(3)	297
第72図	発掘調査地点と主な検出遺構	300
第73図	火山灰検出範囲、理化学分析試料採取地点位置図	302
第74図	昭和40年地形図における調査地位置図	303
第75図	中古墳群と出土遺物	305
第76図	中古墳群の群構成復原配置図	306
第77図	中古墳群周辺古墳分布図	307
第78図	丹波地域主要古墳消長図	309

付 表 目 次

1. 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

付表1	調査年度別調査区一覧	7
-----	------------	---

2. 主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業関係遺跡

付表1	年度別府営ほ場整備・府道建設に伴う発掘調査一覧(平成24～29年度)	213
付表2	出土遺物観察表	339

図 版 目 次

- 巻頭図版 1** 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡
(1) 第7・8次調査地遠景(東から)
(2) 4・5トレンチ全景(垂直上が北)
- 巻頭図版 2** 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡
(1) 第8次調査地遠景(北東から)
(2) 第9次調査地遠景(南西から)
- 巻頭図版 3** 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡
(1) 第9次16・C-1・C-5トレンチ遠景(西から)
(2) 第9次C-5トレンチ全景(上が北)
- 巻頭図版 4** 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡
(1) 第9次D-2トレンチ調査地遠景(東から)
(2) 第9次D-1・2トレンチ遠景(東から)
- 巻頭図版 5** 主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業関係遺跡
中1号墳第3次検出状況(南東から、後方右丘陵麓に坊主塚古墳)
- 巻頭図版 6** 主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業関係遺跡
(1) 三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次調査区全景(南から、左後方に千歳車塚古墳)
(2) 三日市遺跡第12次3トレンチA T火山灰検出状況(南から)
- 1. 国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡**
- 図版第 1** (1) A-3a区全景(南から)
(2) A-3b区全景(南から)
(3) A-5区全景(西から)
- 図版第 2** (1) A-6区全景(南から)
(2) B-1区全景(南から)
(3) C-2区全景(西から)
- 図版第 3** (1) C-4a区全景(北から)
(2) C-4b区全景(北西から)
(3) C-5c区全景(南東から)
- 図版第 4** (1) D-1d区全景(西から)
(2) D-1e区全景(西から)
(3) E-1a区全景(南西から)
- 図版第 5** (1) E-1b区全景(北から)

- (2) E-2b区全景(北西から)
 (3) E-2c区全景(北東から)
- 図版第6 (1) E-3a区全景(南東から)
 (2) E-3b区全景(西から)
 (3) E-3c区全景(西から)
- 図版第7 (1) E-3d・e区全景(西から)
 (2) E-3f区全景(北東から)
 (3) E-3g区全景(西から)
- 図版第8 (1) E-3h区全景(西から)
 (2) E-3k区全景(北から)
 (3) E-3l区全景(北から)
- 図版第9 (1) 第7次調査地全景(北西から)
 (2) 1トレンチ全景(南から)
 (3) 2トレンチ全景(西から)
- 図版第10 (1) 3トレンチ全景(北から)
 (2) 4・5トレンチ遠景(東から)
 (3) 4トレンチ全景(上が北)
- 図版第11 (1) 4トレンチ竪穴建物S H101全景(南から)
 (2) 4トレンチ竪穴建物S H101須恵器出土状況(南から)
 (3) 4トレンチ竪穴建物S H102全景(南東から)
- 図版第12 (1) 4トレンチ竪穴建物S H103全景(西から)
 (2) 4トレンチ竪穴建物S H103ピットS P113遺物出土状況(西から)
 (3) 4トレンチ竪穴建物S H104全景(西から)
- 図版第13 (1) 4トレンチ竪穴建物S H105全景(西から)
 (2) 4トレンチ竪穴建物S H133・134全景(南から)
 (3) 4トレンチ竪穴建物S H172全景(西から)
- 図版第14 (1) 4トレンチ竪穴建物S H225・226全景(西から)
 (2) 4トレンチ掘立柱建物群全景(南から)
 (3) 4トレンチ掘立柱建物S B14全景(南から)
- 図版第15 (1) 4トレンチ掘立柱建物S B15全景(南から)
 (2) 4トレンチ掘立柱建物S B17全景(南から)
 (3) 4トレンチ掘立柱建物S B18全景(北西から)
- 図版第16 (1) 4トレンチ掘立柱建物S B19全景(南から)
 (2) 4トレンチ土坑S K118全景(南東から)
 (3) 4トレンチ土坑S K180全景(南から)

- 図版第17 (1) 4 トレンチ土坑 S K 180遺物出土状況(南東から)
 (2) 4 トレンチピット S P 63遺物出土状況(東から)
 (3) 4 トレンチピット S P 331遺物出土状況(南から)
- 図版第18 (1) 5 トレンチ全景(南から)
 (2) 5 トレンチ竪穴建物 S H 01全景(北から)
 (3) 5 トレンチ S K 07遺物出土状況(東から)
- 図版第19 (1) 6～11 トレンチ遠景(南から)
 (2) 6 トレンチ全景(垂直上が北)
- 図版第20 (1) 7 トレンチ全景(垂直左が北)
 (2) 8 トレンチ全景(垂直右が北)
- 図版第21 (1) 9 トレンチ全景(垂直右が北)
 (2) 10・11 トレンチ全景(垂直右が北)
- 図版第22 (1) 12～15・B-4～B-6 トレンチ遠景(南東から)
 (2) 12・B-4～B-6 トレンチ全景(垂直上が北)
- 図版第23 (1) 13 トレンチ全景(垂直上が北)
 (2) 14・B-2 トレンチ全景(垂直上が北)
- 図版第24 (1) 15 トレンチ全景(垂直下が北)
 (2) A-1 トレンチ全景(垂直右が北)
- 図版第25 (1) 6 トレンチ全景(西から)
 (2) 6 トレンチ竪穴建物 S H 17全景(南東から)
 (3) 6 トレンチ竪穴建物 S H 20全景(西から)
- 図版第26 (1) 6 トレンチ土坑 S K 176全景(東から)
 (2) 7 トレンチ全景(西から)
 (3) 7 トレンチ掘立柱建物 S B 1 全景(北から)
- 図版第27 (1) 8 トレンチ溝 S D 3 完掘状況(北から)
 (2) 8 トレンチ自然流路 N R 14完掘状況(東から)
 (3) 9 トレンチ自然流路 N R 14完掘状況(西から)
- 図版第28 (1) 10 トレンチ全景(南から)
 (2) 10 トレンチ井戸 S E 02全景(北西から)
 (3) 11-a トレンチ全景(北から)
- 図版第29 (1) 11-a トレンチ溝 S D 1 全景(西から)
 (2) 11-b トレンチ全景(南から)
 (3) 11-c トレンチ全景(北から)
- 図版第30 (1) 12-a トレンチ全景(垂直上が北)
 (2) 12-a トレンチ掘立柱建物 S B 10全景(北から)

- (3)12-a トレンチ掘立柱建物 S B11 全景(南東から)
- 図版第31 (1)12-a トレンチ土坑 S K 9 遺物出土状況(東から)
 (2)12-b トレンチ全景(南から)
 (3)12-b トレンチ溝 S D12 土層断面(南から)
- 図版第32 (1)13 トレンチ全景(南西から)
 (2)14 トレンチ南半部(垂直上が北)
 (3)14 トレンチ掘立柱建物 S B 3 検出状況(西から)
- 図版第33 (1)14 トレンチ掘立柱建物 S B14 検出状況(東から)
 (2)14 トレンチ土坑 S K 1 完掘状況(東から)
 (3)14 トレンチ土坑 S K 1 緑軸陶器出土状況(南から)
- 図版第34 (1)A-1 トレンチ全景(北東から)
 (2)B-2 トレンチ全景(西から)
 (3)B-2 トレンチピット S P06 灰軸陶器出土状況(北から)
- 図版第35 (1)B-3 トレンチ全景(北から)
 (2)B-4 トレンチ全景(垂直上が北)
 (3)B-4 トレンチ掘立柱建物 S B126 全景(南西から)
- 図版第36 (1)B-4 トレンチ土坑 S K35 遺物出土状況(西から)
 (2)B-5・B-6 トレンチ全景(垂直上が北)
 (3)B-5 トレンチ掘立柱建物 S B85 全景(南西から)
- 図版第37 (1)B-5 トレンチ掘立柱建物 S B23 全景(東から)
 (2)B-5 トレンチ井戸 S E38 井戸枠検出状況(南から)
 (3)B-5 トレンチ大日堂古墳検出状況(西から)
- 図版第38 (1)B-5 トレンチ大日堂古墳全景(垂直左が北)
 (2)B-5・B-6 トレンチ溝 S D1 全景(北西から)
 (3)B-6 トレンチ土坑 S K 2 全景(南から)
- 図版第39 (1)16 トレンチ全景(西から)
 (2)C-1 トレンチ全景(上が北)
- 図版第40 (1)16 トレンチ溝 S D96 全景(西から)
 (2)16 トレンチ溝 S D97 全景(西から)
 (3)16 トレンチ南半部全景(西から)
- 図版第41 (1)C-1 トレンチ瓦溜まり S X04・06 検出状況(南から)
 (2)C-1 トレンチ掘立柱塀 S A1 全景(西から)
- 図版第42 (1)C-1 トレンチ瓦溜まり S X01 検出状況(北から)
 (2)C-1 トレンチ瓦溜まり S X01 軒丸瓦Ⅲ類出土状況(西から)
 (3)C-1 トレンチ瓦溜まり S X06 検出状況(西から)

- 図版第43 (1) C-1 トレンチ瓦溜まり S X04(部分)検出状況(北西から)
(2) C-1 トレンチ瓦溜まり S X04軒平瓦IV類出土状況(北東から)
(3) C-1 トレンチ溝 S D05全景(南西から)
- 図版第44 (1) C-1 トレンチ掘立柱塼 S A 1 柱穴 S P99瓦片出土状況(南から)
(2) C-1 トレンチ掘立柱建物 S B 2 全景(北西から)
(3) C-1 トレンチ堅穴建物 S H07全景(西から)
- 図版第45 (1) C-5 トレンチ全景(垂直上が北)
(2) C-5a トレンチ溝 S D02全景(北西から)
- 図版第46 (1) C-5a トレンチ溝 S D02墨書土器出土状況(西から)
(2) C-5a トレンチ溝 S D02墨書土器出土状況(北から)
(3) C-5a トレンチ溝 S D02木簡出土状況(北から)
- 図版第47 (1) C-5a トレンチ溝 S D02下駄出土状況(北から)
(2) C-5a トレンチ溝 S D02木製皿出土状況(西から)
(3) C-5a トレンチ溝 S D02木製品出土状況(北から)
- 図版第48 (1) D-1 トレンチ全景(垂直下が北)
(2) D-2 トレンチ全景(垂直右が北)
- 図版第49 (1) D-1 トレンチ溝 S D01全景(北から)
(2) D-1 トレンチ溝 S D02全景(南東から)
(3) D-1 トレンチ溝 S D03全景(北から)
- 図版第50 (1) D-1 トレンチ溝 S D03鬼板出土状況(西から)
(2) D-2 トレンチ掘立柱建物 S B02全景(南東から)
(3) D-2 トレンチ溝 S D01全景(南から)
- 図版第51 出土遺物 1
- 図版第52 出土遺物 2
- 図版第53 出土遺物 3
- 図版第54 出土遺物 4
- 図版第55 出土遺物 5
- 図版第56 出土遺物 6
- 図版第57 出土遺物 7
- 図版第58 出土遺物 8
- 図版第59 出土遺物 9
- 図版第60 出土遺物 10
- 図版第61 出土遺物 11
- 図版第62 出土遺物 12
- 図版第63 出土遺物 13

- 図版第64 出土遺物14
- 図版第65 出土遺物15
- 図版第66 出土遺物16
- 図版第67 出土遺物17
- 図版第68 出土遺物18
- 図版第69 出土遺物19
- 図版第70 出土遺物20
- 図版第71 出土遺物21
- 図版第72 出土遺物22

2. 主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業関係遺跡

- 図版第1 (1)南部調査対象区全景(空中写真、南から)
(2)1区全景(北西から)
- 図版第2 (1)1区南西部全景(南東から)
(2)土坑SK1(東から)
(3)柱穴SP13(南西から)
- 図版第3 (1)北部調査地点調査前全景(東から)
(2)3トレンチ(東から)
(3)4トレンチ(東から)
- 図版第4 (1)3トレンチ北壁(南から)
(2)同 AT層検出部分(南から)
- 図版第5 (1)北部調査地点調査前(東から)
(2)5トレンチ(東から)
(3)5トレンチ北壁(南から)
- 図版第6 (1)6トレンチ全景(東から)
(2)7トレンチ(南東から)
(3)8トレンチ北壁(南から)
- 図版第7 (1)9トレンチ(北から)
(2)溝SD901(西から)
(3)溝SD901土層断面(西から)
- 図版第8 (1)溝SD901西端杭列SX910(東から)
(2)溝SD901矢板検出状況(北東から)
(3)溝SD901下駄出土状況(西から)
- 図版第9 (1)10トレンチ(南から)
(2)11トレンチ(南から)

- (3) 12トレンチ(南から)
- 図版第10 (1) 13トレンチ(南から)
(2) 14トレンチ(南から)
(3) 15トレンチ(南東から)
- 図版第11 2区中1号墳葺石検出状況(南東から)
- 図版第12 (1) 2区全景(北から)
(2) 2区全景(東から)
- 図版第13 (1) 2区全景(南から)
(2) 2区南部全景(上が西)
- 図版第14 (1) 2区中1号墳周濠S D201下層、葺石S X270(東から)
(2) 2区中1号墳周濠S D201下層、葺石S X270(北東から)
- 図版第15 (1) 2区中1号墳周濠S D201下層、葺石S X270北部(東から)
(2) 2区中1号墳周濠、葺石S X270中央部(東から)
- 図版第16 (1) 2区中1号墳周濠、葺石S X270南部(東から)
(2) 2区中1号墳周濠、葺石S X270南端(東から)
- 図版第17 (1) 2区中1号墳周濠、葺石S X270北部1(東から)
(2) 2区中1号墳周濠、葺石S X270北部2(東から)
- 図版第18 (1) 2区中1号墳周濠、葺石S X270北部3(東から)
(2) 2区中1号墳周濠、葺石張り出し部S X272(東から)
- 図版第19 (1) 2区中1号墳周濠北部(東から)
(2) 2区中1号墳周濠、断ち割り断面②(南東から)
(3) 2区中1号墳周濠、断ち割り断面①(南から)
- 図版第20 (1) 2区中1号墳周濠、断ち割り断面③(東から)
(2) 2区中1号墳周濠、断ち割りc-c'断面(南から)
(3) 2区中1号墳周濠、断ち割りe-e'断面(南東から)
- 図版第21 (1) 2区北部全景(南から)
(2) 2区S D213(7号墳周溝)断面(南から)
(3) 2区土坑S K227(東から)
- 図版第22 (1) 2区溝S D201(南から)
(2) 2区溝S D201断面②(南から)
(3) 2区溝S D201 杭列1(南西から)
- 図版第23 (1) 2区溝S D201土器溜まり1(南から)
(2) 2区溝S D201土器溜まり2(南西から)
(3) 2区井戸S E225(西から)
- 図版第24 (1) 2区溝S D204・205(東から)

- (2) 2区溝 S D207(南東から)
 (3) 2区溝 S D201掘削作業(南から)
- 図版第25 (1) 出雲遺跡第20次3区全景(空中写真、南東から)
 (2) 出雲遺跡第20次3区全景(空中写真、北西から)
- 図版第26 (1) 出雲遺跡第20次3区全景(空中写真、東から)
 (2) 出雲遺跡第20次3区全景(南から)
- 図版第27 (1) 3区 北部(南から)
 (2) 3区溝 S D310(西から)
 (3) 3区溝 S D315(南西から)
- 図版第28 (1) 3区溝 S D306(西から)
 (2) 3区溝 S D301(南から)
 (3) 3区井戸 S E302(北西から)
- 図版第29 (1) 1～3区遠景(空中写真、東から)
 (2) 1～3区遠景(空中写真、西から)
- 図版第30 1～3区全景(空中写真、西から)
- 図版第31 (1) 1区全景(東から)
 (2) 2・3区(西から)
- 図版第32 (1) 1区溝 S D50(北から)
 (2) 2区溝 S D31(南から)
 (3) 2区溝 S D35(南西から)
- 図版第33 (1) 1区西部遺構群(西から)
 (2) 1区土坑 S X 6 検出状況(東から)
 (3) 1区土坑 S X 6 出土曲物(南から)
- 図版第34 (1) 1区西部土坑 S X19(南東から)
 (2) 1区西部土坑 S X22(南東から)
 (3) 1区土坑 S X17(北東から)
- 図版第35 (1) 2区東部火山灰層検出面(東から)
 (2) 2区南壁断面火山灰検出状況(北から)
 (3) 3区全景(西から)
- 図版第36 (1) 3区東部断ち割り火山灰層検出状況(北から)
 (2) 3区東部断ち割り南壁AT火山灰層(北から)
 (3) 3区南壁東端火山灰検出状況(北から)
- 図版第37 (1) 4区全景(南西から)
 (2) 5区全景(北東から)
- 図版第38 (1) 4区掘立柱建物 S B101・柱列 S A102検出状況(北から)

- (2) 4区土坑SK118(南東から)
 (3) 5区西部全景(南東から)
- 図版第39 (1) 5区土坑SK201(北西から)
 (2) 5区東部北壁断面(南から)
 (3) 5区北西端断ち割り(南東から)
- 図版第40 (1) 出土遺物1 1区出土弥生土器・玉類
 (2) 出土遺物2 1区出土土器(古墳時代～中世)
- 図版第41 (1) 出土遺物3 2区中1号墳 出土土器
 (2) 出土遺物4 2区中1号墳 埴輪
- 図版第42 出土遺物5 2区溝SD201、9トレンチ溝SD901・902出土土器
- 図版第43 (1) 出土遺物6 2区溝SD201出土土師器皿
 (2) 出土遺物7 2区溝SD201出土瓦器碗
- 図版第44 出土遺物8 2区溝SD201出土瓦器碗・土師皿
- 図版第45 出土遺物9 2区溝SD201出土瓦器碗・瓦質羽釜・土師器皿
- 図版第46 (1) 出土遺物10 2区溝SD201出土須恵器・陶器類
 (2) 出土遺物11 2区溝SD201出土青白磁・青磁・白磁類
- 図版第47 (1) 出土遺物12 2区溝SD201区出土白磁類
 (2) 出土遺物13 2区溝SD201区出土白磁・青磁碗
- 図版第48 出土遺物14 2区溝SD201出土土器(須恵器・緑釉陶器・白磁他)
- 図版第49 (1) 出土遺物15 平成26年度9トレンチ溝SD901・2区溝SD201他出土土器
 (2) 出土遺物16 平成27年度3区出土弥生土器
- 図版第50 出土遺物17 1～3区出土土器類
- 図版第51 (1) 出土遺物18 平成26年度9トレンチ溝SD901出土下駄
 (2) 出土遺物19 平成27年度1・2区土坑SX6出土曲物
- 図版第52 (1) 出土遺物20 1区近世瓦生産関連遺物
 (2) 出土遺物21 1区瓦質土器火鉢(天明八年銘)
- 図版第53 (1) 出土遺物22 平成29年度5区出土縄文土器・弥生土器・石斧
 (2) 出土遺物23 平成26・27年度出土石器類
- 図版第54 (1) 出土遺物24 4・5区出土瓦
 (2) 出土遺物25 5区出土瓦

1. 平成27～29年度国営緊急農地再編 整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡 佐伯遺跡第7～9次発掘調査報告

1. はじめに

佐伯遺跡の調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の工事に先立ち、遺構・遺物の内容を把握するとともに、正確な記録を作成することを主たる目的として発掘調査を実施した。

国営緊急農地再編整備事業は、京都府中部に位置する亀岡市の一級河川桂川右岸に位置する水田地帯において区画整理を行うものである。この地域は、桂川右岸の比較的緩やかな傾斜の農業地帯であり、水稲を中心とした土地利用型農業が行われている。しかし、現在のほ場が狭小で不整形であることや、近年の機械の大型化に伴い道路の整備、用排水路等の整備を行うため、対象農地面積444haを新たに区画整理し、計画的に再編することを目的としている。

今回の発掘調査は、計画された亀岡市葺田野町工区内に所在する佐伯遺跡の発掘調査を農林水産省近畿農政局の依頼を受けて、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成27年度から平成29年度まで工事に先行して発掘調査を実施し、平成30年度に整理報告作業を実施した。

なお、発掘調査に係る経費は農林水産省近畿農政局が全額負担した。

現地発掘調査及び整理作業時には、葺田野町自治会ならびに吉川町自治会、曾我部町自治会、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、綾部市教育委員会、上原真人、菱田哲郎(順不同・敬称略)のご協力とご指導を得た。また、発掘調査には多くの地元の方々にご参加いただいた。記してお礼申し上げたい。

(村田和弘)

〔調査体制等〕

<第7次調査(平成27年度)>

現地調査責任者	調査課長	有井広幸
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 主 査	黒坪一樹・村田和弘
	同 副 主 査	引原茂治・伊野近富
	同 調 査 員	橋本 稔・武本典子・清水早織
調査場所	京都府亀岡市葺田野町佐伯	
現地調査期間	平成27年5月25日～平成27年12月4日	
調査面積	4,920㎡	

<第8次調査(平成28年度)>

現地調査責任者	調 査 課 長	森 正
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 主 査	黒坪一樹・村田和弘
	同 副 主 査	引原茂治
	同 調 査 員	竹村亮仁・荒木瀬奈・武本典子・ 浅田洋輔・内藤 京
調 査 場 所	京都府亀岡市葎田野町佐伯	
現地調査期間	平成28年5月9日～平成29年3月2日	
調 査 面 積	14,500㎡(表土掘削：800㎡)	

<第9次調査(平成29年度)>

現地調査責任者	調 査 課 長	小池 寛
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 主 査	村田和弘
	同 副 主 査	引原茂治・黒坪一樹
	同 調 査 員	荒木瀬奈・武本典子・浅田洋輔・ 中谷可奈
調 査 場 所	京都府亀岡市葎田野町佐伯	
現地調査期間	平成29年5月9日～平成30年2月19日	
調 査 面 積	7,342㎡	

<整理作業体制(平成30年度)>

整理作業責任者	調 査 課 長	小池 寛
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 主 査	村田和弘
	同 調 査 員	浅田洋輔
整 理 期 間	平成30年4月2日～平成31年3月31日	

2. 位置と環境

1) 地理的環境

佐伯遺跡の所在する亀岡盆地は、大悲山付近を水源とする桂川(大堰川)が盆地の中央を北西から南東に流れ、東西に二分されている。佐伯遺跡は、この桂川の西側に位置する。

亀岡盆地の西側と南側を囲むのが摂丹山地である。それに連なる朝日山と丁塚山にはさまれた谷と、行者山東麓斜面に発達した湯の花の谷が出会う扇状地に佐伯遺跡は立地する。この扇状地は、山内川とその支流である菰川により段丘上に形成されている。段丘の形成は古く、およそ3万～5万年前とされる。

2) 歴史的環境

旧石器時代について佐伯遺跡周辺では、この時代の遺跡は見つかっていない。今から1万6千年前から始まる縄文時代になると、萩田野町鹿谷遺跡で草創期の黒曜石製の尖頭器が出土している。形態からみて縄文時代の始まり頃の資料で、なおかつ黒曜石という遠隔地からの搬入品である。また、佐伯遺跡の南東に広がる天川遺跡では、流路内から縄文時代中期の土器が出土している。さらに弥生時代の遺跡として著名な太田遺跡からも晩期の土器が出土している。このように、佐伯遺跡周辺では、縄文人の生業や交流を伺い知ることができる。

弥生時代には、重要な遺跡として萩田野町太田遺跡がある。弥生時代前期の墓とみられる土坑群や、中期前半の集落を取り囲む環濠がみつかった。環濠の内側における遺構の様相は明らかではないが、環濠内から当時の技術水準の高さを示す多くの土器・石器・木製品、自然遺物(イネ科花粉など)が出土した。さらに、大井町にまたがる南金岐遺跡や先述の天川遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓が調査された。佐伯遺跡では弥生時代の資料の存在は希薄であるが、周辺には重要な遺跡が多い。

亀岡盆地における古墳時代には、前期古墳とされる糠塚古墳(旭町)から榎塚古墳や坊主塚古墳に代表される中期(5世紀後半)の方墳、さらに後期の前方後方墳である千歳車塚古墳(6世紀前半)を経て、群集墳が7世紀前半の終末期まで築造される。弥生時代末から古墳時代前期にはすでに一人の首長のために規模の大きな墓を造る体制が整い、中期では政権との関わりの中で方墳が伝統的に造営されていく。その後出現した前方後円墳の千歳車塚古墳は、雄略大王から継体大王への政変期に築造される。しかしそれ以後、口丹波地域にいくつかの前方後円墳は造られるが、その規模は小さく、ついにその姿を消していく。こうした流れの中で、佐伯遺跡の西側丘陵部にある佐伯古墳群も、在地豪族により造営された後期における古墳群の一つであろう。1号墳から3号墳までの3基の円墳からなり、このうち2号墳は横穴式石室をもつ。

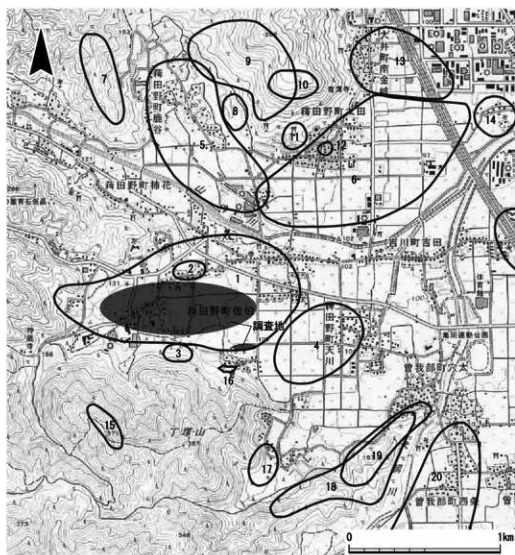
古墳時代の集落遺跡では、萩田野町鹿谷遺跡や大田遺跡において、堅穴建物や溝、土壘墓などの遺構が多くみつかっており、古墳と集落、周辺の集落間での交流の様相が研究されてきている。

奈良～平安時代の資料としては、佐伯遺跡から出土している古代の瓦などがある。さらに、佐伯遺跡を含めてこのあたりは、「延喜式」兵部省諸国駅伝馬条などから平安時代の山陰道駅路と

して、亀岡市余部から西へ向かい曾我谷川を渡り、吉田～茶屋～湯ノ花へと近世篠山街道をもとに推定されている地域である。佐伯遺跡は古代交通路の要衝の一つであった可能性がある。

歴史的・民俗的文化財としては、佐伯古墳群のある丘陵部に、延暦9(790)年に最澄が開いたとされる神蔵寺や、和銅2(709)年に丹波国司大神朝臣伯麻呂が五穀豊穡を祈願して祀った式内社の蔦田野神社がある。この蔦田野神社を中心とし、御霊神社、若宮神社、河阿神社の4社が、出会い祭り(佐伯灯笼)を執り行い、現在も貴重な民俗文化を継承している。

(黒坪一樹)



- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|--------------|
| 1. 佐伯遺跡 | 2. 佐伯館跡 | 3. 出山館跡 | 4. 天川遺跡 |
| 5. 鹿谷遺跡 | 6. 太田遺跡 | 7. 蔦田野西山古墳群 | 8. 鹿谷池田古墳群 |
| 9. 鹿谷古墳群 | 10. 太田山城跡 | 11. 太田館跡 | 12. 太田館跡 |
| 13. 南金岐遺跡 | 14. 野寺庵寺 | 15. 高丘城跡 | 16. 佐伯若宮神社遺跡 |
| 17. 口山古墳群 | 18. 穴太古墳群 | 19. 穴太城跡 | 20. 穴太遺跡 |

第1図 調査地位位置図(国土地理院 1/25,000 亀岡)

3. 調査の経過と方法

1) 調査に至る経緯

今回の国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の工事に先立つ佐伯遺跡の発掘調査は、調査回数としては平成27年度が第7次調査に、平成28年度が第8次調査に、平成29年度が第9次調査にそれぞれ当たる。また、当該事業に関連して平成19年度(第2次調査)に亀岡市教育委員会が、平成26年度に京都府教育委員会がそれぞれ試掘調査を実施している。このほか、菰川の河川改修及び付け替え工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて平成18年度に当調査研究センターが発掘調査を実施したが、顕著な遺構は確認されていない^(註1)。

本事業に伴う発掘調査では、水田等の区画整理工事に伴い切り土となる範囲を対象に調査を実施した。また、調査にあたっては、京都府教育委員会及び亀岡市教育委員会による試掘調査の結果などを受けて全面調査対象とする本調査地区と、遺跡内の遺構の拡がりや遺物の出土状況などを確認するための小規模調査地区に分けて調査を実施した。小規模調査で遺構・遺物が確認された場合、関係機関と協議の上、調査区を拡張して本調査地区として発掘調査を実施した。

佐伯遺跡の発掘調査は、平成27年度から開始し、平成29年度に発掘調査を終了した。

平成27年度は、1～5トレンチの本調査地区の発掘調査を実施した。

平成28年度は、6～15トレンチの本調査及び、A～C地区の小規模調査を実施した。A地区では、A-1～6区の小規模調査を実施し、A-1・2・4区で遺構等を確認したため、調査区を拡張して本調査を実施した。また、B地区でもB-1～6区の小規模調査を実施し、B-2～6区で遺構等を確認したため拡張して本調査を実施した。さらに、C地区でもC-1～6区の小規模調査を実施し、遺構等を確認した調査区の本調査を平成29年度に実施した。

平成29年度は、16トレンチの本調査と前年度のC地区の小規模調査の結果を受けてC-1・C-5区の調査区を拡張して本調査を実施した。また、D・E地区の小規模調査を実施した。D地区では、D-1・2区の小規模調査を実施し、両調査区ともに調査区を拡張して本調査を実施した。E地区でも、E-1～3区の小規模調査を実施した。

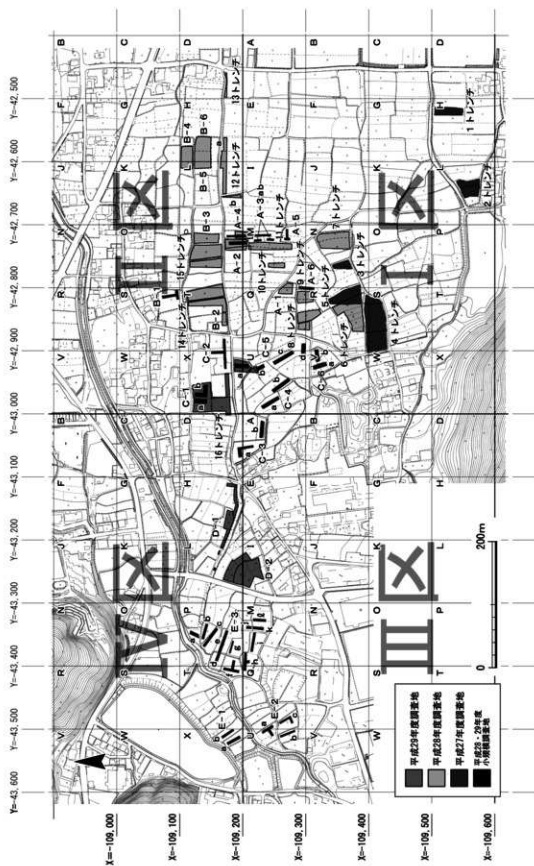
以上、一連の調査で実施した調査区の位置及び調査面積については、第2図ならびに付表1を参照されたい。

2) 調査の方法

①地区割りの設定について

今回の佐伯遺跡の発掘調査を実施するにあたり、第7次調査から第9次調査までの調査地全体を覆う地区割りを国土座標系(世界測地系)に基づいて設定した。

第7次調査の着手にあたって、最初に調査に着手する1トレンチを基準として、調査対象範囲に地区割りを行った。調査対象地が広範囲にわたるため、大地区として東西600m、南北400mを1つの大地区とし、ローマ数字による地区名としてI区からIV区を付けた(第2図)。この大地区を国土座標値の100m単位を基準として、一辺100m四方に区切り、中地区としてアルファベット



第2図 年度別トレンチ配置図及び大地区・中地区別り図(1/6,000)

付表1 調査年度別調査区一覧

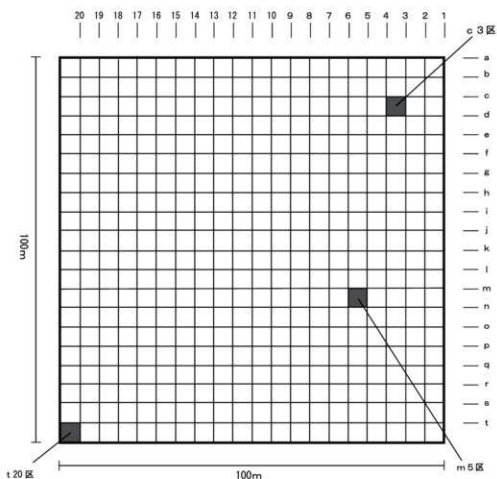
調査年度	回数	調査区名	調査区分	調査面積	備 考
平成27年度	第7次	1トレンチ	本調査	510㎡	
		2トレンチ	本調査	760㎡	
		3トレンチ	本調査	190㎡	
		4トレンチ	本調査	2,440㎡	
		5トレンチ	本調査	1,020㎡	
平成28年度	第8次	6トレンチ	本調査	1,326㎡	
		7トレンチ	本調査	1,263㎡	
		8トレンチ	本調査	719㎡	
		9トレンチ	本調査	424㎡	
		10トレンチ	本調査	201㎡	
		11トレンチ	本調査	868㎡	A-2区・A-4区と統合
		12トレンチ(a・b)	本調査	710㎡	
		13トレンチ	本調査	92㎡	
		14トレンチ	本調査	1,672㎡	
		15トレンチ	本調査	1,585㎡	
		A-1トレンチ	小規模調査→本調査	290㎡	
		A-2区	小規模調査→本調査	389㎡	11トレンチと統合
		A-3区	小規模調査	54㎡	
		A-4区	小規模調査→本調査	416㎡	11トレンチと統合
		A-5区	小規模調査	65㎡	
		A-6区	小規模調査	75㎡	
		B-1区	小規模調査	140㎡	
		B-2トレンチ	小規模調査→本調査	146㎡	
		B-3トレンチ(a・b)	小規模調査→本調査	586㎡	
		B-4トレンチ	小規模調査→本調査	605㎡	
		B-5トレンチ	小規模調査→本調査	701㎡	
		B-6トレンチ	小規模調査→本調査	556㎡	
		C-1区	小規模調査→本調査	261㎡	平成29年度に本調査を実施
		C-2区	小規模調査	197㎡	
		C-3区(a・b)	小規模調査	245㎡	
		C-4区(a・b)	小規模調査	307㎡	
		C-5区(a・b・c)	小規模調査→本調査	415㎡	C-5aを拡張、平成29年度に調査
C-6区(a・b)	小規模調査	192㎡			
平成29年度	第9次	16トレンチ	本調査	917㎡	
		C-1トレンチ	本調査	1,369㎡	
		C-5トレンチ	本調査	525㎡	さらに南側へ再拡張
		D-1トレンチ(a～c)	小規模調査→本調査	776㎡	a・b・cを拡張
		D-1区(d・e)	小規模調査	14㎡	
		D-2トレンチ(a～g)	小規模調査→本調査	2,120㎡	対象範囲をほぼ拡張
		E-1区(a・b)	小規模調査	169㎡	
		E-2区(a・b・c)	小規模調査	300㎡	
		E-3区(a～l)	小規模調査	1,152㎡	
				合計	26,762㎡

の大文字のA～X区とした。さらに、中地区に5m四方のグリッドを設定し、小地区とした。小地区の基準線はそれぞれの国土座標系と一致させ、東西方向は東から1、2、3、・・・20とし、南北方向は北からa、b、c、・・・tとした。小地区は北東交差ラインの記号・番号を付した。したがって、地区名は「II-H・b6区」のようになる。なお、遺物の取り上げは小地区を基準として行った。

②遺構番号について

検出した遺構は原則として、調査トレンチごとに通し番号を付け、遺構を示す略号を付けた。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は調査時のものである。ただし、調査時に番号がなかった遺構については、本報告作成時に新たに付した。使用した略号は、竪穴建物：SH、掘立柱建物：SB、掘立柱塼：SA、溝：SD、土坑：SK、柱穴・ビット：SP、井戸：SE、不明遺構・その他：SX、自然流路：NRである。

(村田和弘)



第3図 小地区割り図

4. 基本層序

佐伯遺跡が所在する地形は扇状地に立地している。北側には菰川が西から東へ流れ、南側には低丘陵がある。地形は南西側から北西へと傾斜し、段丘状に形成されている。現代では、広域に水田地や耕作地として耕作されている。

1・2トレンチの基本的な層序は、耕作土・床土・砂礫層となる。1トレンチでは、自然流路を検出し縄文土器が出土した。砂礫層上面の標高は約109mである。2トレンチは、耕作土・床土・古墳～鎌倉時代の遺物を含む洪水堆積層(砂礫層)を確認した。標高は約106mである。3～6・9・A-1トレンチは、低段丘上に立地する。4トレンチでは、耕作土・床土・茶褐色礫混じり粘質土・灰褐色砂礫層(遺構検出面)で、遺構検出面の標高は、西側で約115m、東側で約113.4mを測る。低段丘の裾にあたるA-1トレンチでは、耕作土・床土・褐色粘質土・遺構検出面の褐色粘質土となり、標高は約112.4mを測る。また、7・10・11トレンチでは、低段丘の下になり、現地表面は低くなっている。7トレンチでは、耕作土・床土・灰褐色礫混じり粘質土・遺構を検出した暗灰褐色礫混じりシルトとなり、標高は約110mを測る。10・11トレンチでは、耕作土・床土、黒褐色礫混じり細砂・遺構検出面の黒褐色粘質礫混じり細砂となり、標高は約109mを測る。

14・15・B-2・B-3トレンチでは、遺構は希薄で南半部に集中し、北側では遺構はなく湿地状になる。層序は、耕作土・床土・褐色細砂・黒褐色礫混じり細砂・遺構検出面のオリブ褐色礫混じり細砂で、標高は約111～109mである。さらに東側の12・13・B-4～6トレンチは、耕作土直下で遺構を検出し、標高は約108mを測る。16・C-1トレンチは、創祀が大同元(806)年とされる御霊神社の南側に位置し、耕作土・黒褐色礫混じりシルト(瓦堆積を含む層)・黒褐色礫混じり細砂・遺構検出面の暗褐色礫混じり細砂で、標高は約116mを測る。また、C-5トレンチでは、南側が低段丘の裾部にあたり、南北方向の溝を検出している。

西半部では、D-1・2トレンチは段丘上に立地し、南から菰川に向かって北へ傾斜する。南側のD-2トレンチでは、耕作土・床土・褐色砂礫層・遺構検出面の灰褐色砂礫層となり、標高は南側が約122mを測る。南側で約1mの段差があり、D-1トレンチでは、耕作土・床土・暗褐色細砂・遺構検出面の明黄褐色細砂となり、標高は約119mを測る。

佐伯遺跡の南側の段丘上または低段丘上の遺構検出する層は礫層で、北東部以外の広域に広がっている。堆積した年代は不明であるが、土石流や洪水の堆積と考えられる。南西部の丘陵から西側の床土以下の遺構検出面までの堆積層は0.2～0.3mと厚く、東側では堆積層は存在しない。なお、B-3トレンチを除いて基本的に遺物包含層の存在は確認していない。

(村田和弘)

5. 調査報告

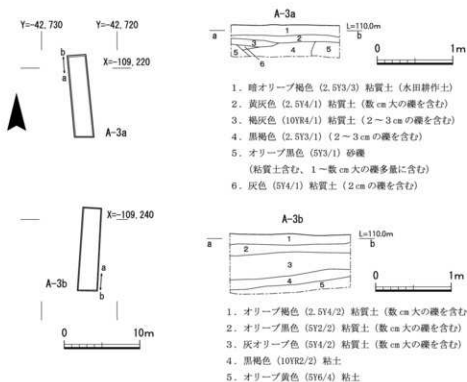
1) 小規模調査

(1) 小規模調査A地区

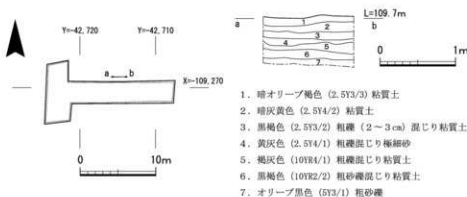
平成28年度は、A～C地区の小規模調査を実施した。小規模調査で遺構・遺物を確認した調査区については、拡張して本調査を実施した。本調査となった調査区については、別項で報告する。

調査対象地の東半部中央にA-1～6区の6か所の調査区を設定した(第2図)。そのうち、A-1・2・4区で遺構・遺物を確認したことから、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会及び近畿農政局亀岡中部農地整備事業所との協議の上、調査区を拡張して本調査を実施した。

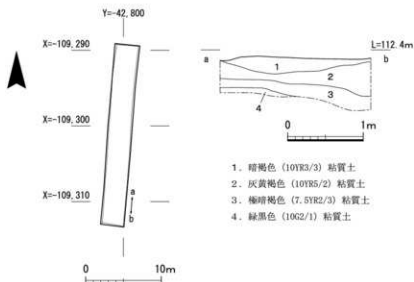
A-1区 I-M区とI-Q区内に調査区を設定した。調査の結果、土坑や柱穴などの遺構を検出し、平安時代の須恵器壺や緑釉陶器碗の破片などが出土したことから、調査区を拡張して本



第4図 A-3区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)



第5図 A-5区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)



第6図 A-6区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)

調査を実施した。

A-2区 I-M区・II-P区に設定した南北方向に長い調査区である。11トレンチの北端部の東側の水田地に位置する。調査の結果、直径約0.3mの円形の柱穴や東西方向の溝の一部を確認したため、拡張して本調査を実施することになった。対象範囲が11トレンチに隣接しているため、11トレンチと調査区をつなげることとした。

A-3 a・b区(第4図) I-M区の南北方向の長方形の水田2か所に設定した調査区である。北側をA-3 a区、南側をA-3 b区とした。遺構検出を進めたが、遺構・遺物は確認できなかった。

A-4区 I-M区・II-P区に位置する南北方向に長い水田に設定した調査区である。調査区はA-2区とA-3区の水田の東隣にあたり、現地表面は約0.3m低い。調査区の中央半部で、東西方向の溝の一部や南北方向に並ぶ円形の柱穴を検出したことから、拡張して本調査を実施することとなり、近接する11トレンチと統合して調査を行った。

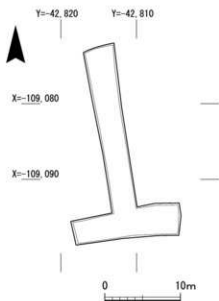
A-5区(第5図) I-M区の南東部に設定した「T」字形の調査区である。遺構の検出作業を進めたが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。また、周辺から水の流入が著しく安定した土壌は確認できなかった。

A-6区(第6図) I-M・N・Q・R区の接点部分に設定した南北に長い調査区である。遺構の検出作業を進めたが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

(2)小規模調査B地区

調査対象地の東半部北寄りにB-1～6区の6か所の調査区を設定して調査を実施した(第2図)。そのうちB-2～6区で遺構・遺物を確認した。遺構・遺物を確認した調査区については、協議の上、調査区を拡張し本調査を実施した。

B-1区(第7図) II-S区に南東隅に逆「T」字形に設定した調査区である。耕作土を除去



第7図 B-1区平面図(1/500)

南側に隣接する。B-4区と同様に耕作土直下で柱穴や土坑、溝などの遺構を確認した。B-4区と同様に協議の結果、拡張して本調査を実施することとなった。

(3)小規模調査C地区

次年度調査のため、調査対象地の中央にC-1～6区の6か所の調査区を設定して調査を実施した(第2図)。そのうちC-1・5区の2地区で遺構・遺物を確認したため、平成29年度に本調査を実施した。

C-1区 御霊神社の南側に位置し、II-X区の調査対象地内の西側にC-1a区、東側にC-1b区の2か所の調査区を設定し調査した。その結果、C-1b区の床土直下で瓦類が堆積した状態を確認した。瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがあり、軒瓦には綾部市綾中庵寺出土の軒丸瓦・軒平瓦と同范の軒瓦があることを確認した。出土状況から、近隣に瓦を葺いていた建物の存在が想定された。以上のような調査成果を受けて、協議の結果、翌年度に対象区全域を拡張して本調査を実施することとなった。

C-2区(第8図) II-T・X区にまたがって逆「T」字形の調査区を設定した。耕作土・床土の直下は粘土が混じる礫層の暗褐色粘質土で、遺構の検出作業を行ったが遺構・遺物は確認できなかった。さらに下層の状況を確認するため、約0.3m掘削したが土層に変化なく地山と判断した。

C-3区(第9・10図) III-A・IV-D区にまたがって、2か所(a・b)を設定した。C-3a区では、耕作土直下は黒褐色の礫層が約0.3mあり、その下層では黄褐色粘土層を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。C-3b区では、耕作土直下にはぶい黄褐色土層があり、約0.8mまで層ごとに掘削したが、遺構・遺物は確認できなかった。

C-4区(第11図) I-U区で2か所(a・b)を設定した。C-4a区は、耕作土直下にはぶい黄褐色粘質土の床土があり、その下層に厚さ約0.3mの灰黄褐色礫混じり土層を確認した。遺構・

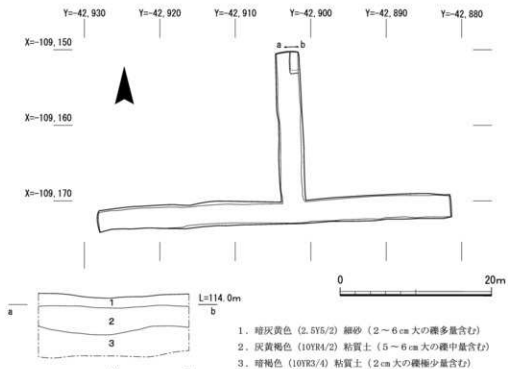
し、約0.05mの厚さの床土を除去したところ、安定面を確認し遺構の検出作業を行ったが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

B-2区 II-T区の中央部に東西方向に設定し、遺構の検出作業を行った結果、柱穴や土坑を検出したことから、拡張して本調査を実施した。

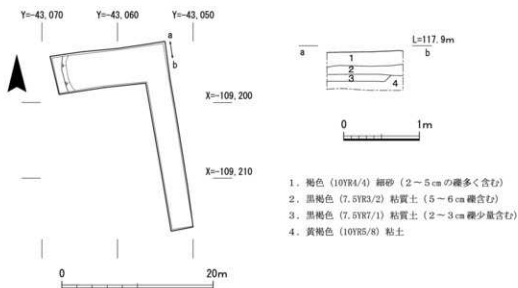
B-3区 II-P区に設定した。須恵器や瓦などを含む遺物包含層を確認したことから、拡張して本調査を実施した。

B-4区 II-H・L区に位置する。耕作土を除去したところで柱穴などの遺構を確認した。このため、協議を行い、拡張して本調査を実施することとなった。

B-5・6区 II-H・L区に位置し、B-4区の



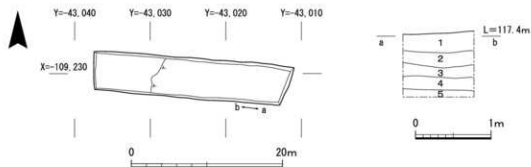
第 8 図 C-2 区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)



第 9 図 C-3 a 区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)

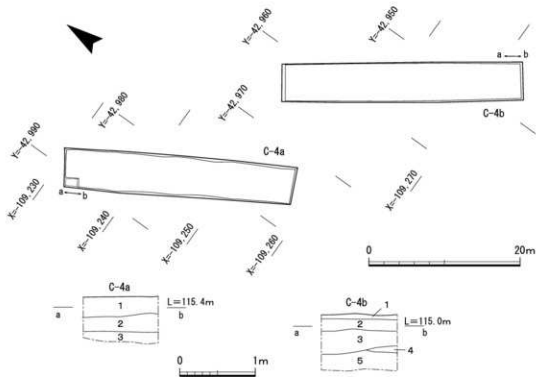
遺物は確認できなかった。C-4 b 区では、耕作土直下にはぶい黄褐色粘質土の床土があり、その下層に厚さ約0.4mの灰黄褐色土層を確認した。暗褐色土層上面で遺構の検出作業を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

C-5 区(第12・13図) I-U-II-X 区に4か所(a~d)調査区を設定した。C-5 a 区は、調査の結果、遺構・遺物が確認されたため、協議のうえ、本調査を実施することになった。C-



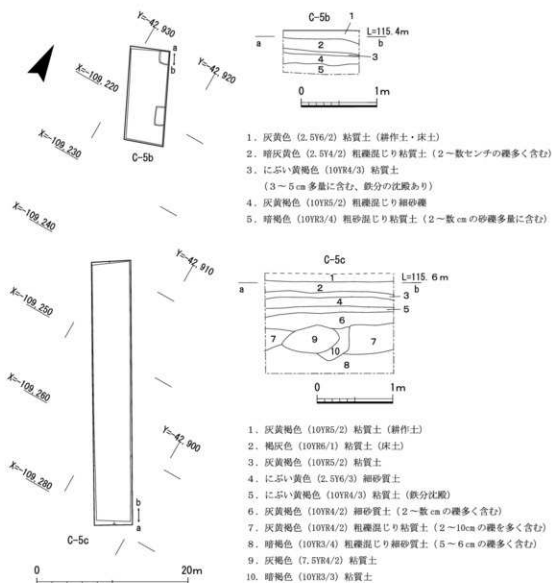
- | | |
|---|---|
| 1. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 角礫混じり粘質土
(2~3cmの礫多く含む) | 3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粗礫混じり細砂質土
(2~数cmの礫多量を含む) |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂礫混じり粘質土
(1~数cmの礫多量を含む) | 4. 褐色 (10YR4/4) 粗礫混じり粗砂礫 (2~数cmの礫多量を含む) |
| | 5. 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂 |

第10図 C-3b区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)



- | | |
|--|---|
| 1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
(1~数cmの礫多く含む) | 1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
(1~数cmの礫多く含む) |
| 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂質土
(2~10cmの粗礫多量を含む) | 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂質土
(2~10cmの礫多く含む、粘質土も含む) |
| 3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗礫混じり粘質土
(2~10cmの粗礫多量を含む) | 3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗礫混じり粘質土
(2~10cmの礫多量を含む) |
| | 4. 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 (数cmの礫多量を含む) |
| | 5. 暗褐色 (10YR3/4) 粗砂・粗礫混じり粘質土
(2~数cmの礫多く含む) |

第11図 C-4a・b区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)

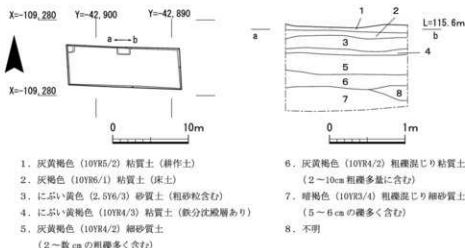


第12図 C-5 b・c区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)

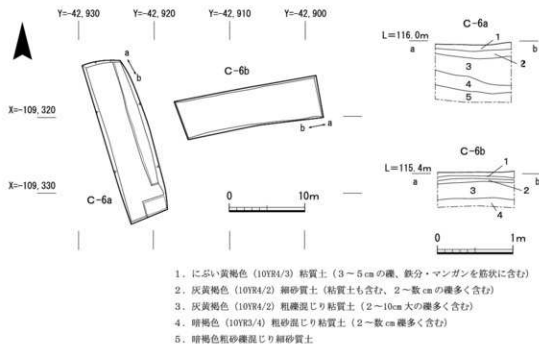
5 b 区は、C-5 a 区の南側に設定した。床土である灰黄色粘質土の下層は、暗灰黄色土・にぶい黄褐色土と遺物を含まない土層が続き、灰黄褐色土上面で遺構の検出作業を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。暗褐色土層を掘削したが、同様であったため終了した。C-5 c 区では2面の耕作面があり、灰褐色土層・暗褐色土層で暗渠を確認した。灰黄褐色粘質土上面で遺構の検出作業を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。C-5 d 区では、灰黄褐色土層を掘削し、暗褐色土上面で遺構の検出作業を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

C-6 区 (第14図) I-V 区で2か所 (a・b) 設定した。C-6 a 区では、耕作土直下約0.5～0.7mで地山と思われる暗褐色粗砂礫混じり細砂質土層を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。C-6 b 区は耕作土直下約0.3mで地山と思われる暗褐色粗砂混じり粘質土を確認した。遺構・遺物は確認できなかった。

(村田和弘・黒坪一樹)



第13図 C-5d区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)



第14図 C-6a・b区平面図及び土層断面図(1/500・1/50)

(4) 小規模調査D地区

平成29年度は、D・E地区の小規模調査を実施し、地点ごとにまとめて枝番号を付けて調査区の細分を行った。D地区は、Ⅳ-H・L、Ⅲ-I区に位置し、調査地区を大きく2区に分けて、東側をD-1区、西側をD-2区とした。さらに細分し、D-1区は5か所の調査区(a~e)を設定して調査を実施した(第15図)。

小規模調査の結果を受けて、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・亀岡中部農地整備事業所と協議を行った。遺構・遺物を確認した調査区については、調査区を拡張し、D-1トレンチ・D-

2 トレンチとして本調査を実施した。

D-1 区 5か所の調査区(a～e)を設定して調査を実施した。D-1 a区では狭く長い調査区ではあるが、須恵器が出土する南北方向の溝などを確認した。その結果を踏まえて協議した結果、D-1 a・b・c区については調査対象範囲全域を拡張し、D-1 トレンチとして本調査を実施することになった。D-1 d区では、遺構・遺物は確認できなかった(第16図)。また、D-1 e区では、溝の埋土と思われる堆積状況を確認したが、調査対象範囲が狭幅のため、これ以上広げることができず、土層断面の記録のみとなった(第16図)。

D-2 区 7か所の調査区(a～g)を設定し、調査を実施した。D-2 a～d区で溝、D-2 g区で柱穴などの遺構や遺物を確認したことから、調査対象範囲のほぼ全域を拡張し、D-2 トレンチとし、本調査を実施した。

(村田和弘・黒坪一樹)

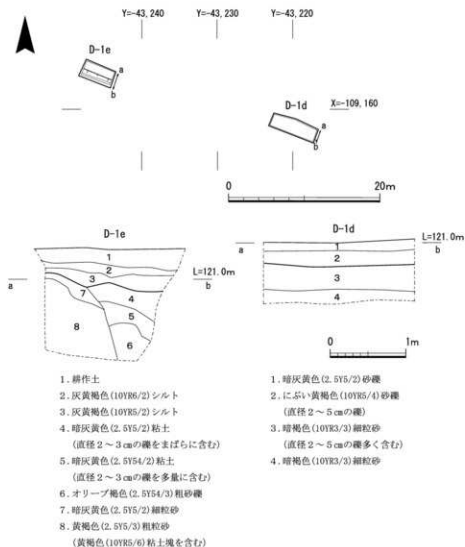
(5) 小規模調査E地区

E地区は、Ⅲ-M・Q・U区とⅣ-P・T・X区に位置し、対象地を大きく3つの調査区に分け、その中をさらに細分して調査区を設定した。E-1区で2か所(a・b)、E-2区で3か所(a～c)、E-3区で12か所(a～l)、合計17か所の調査区を設定した(第15図)。

E地区は、標高は西側が約130m、東側が約125m、北側が約123mを測り、東へ向かって菰川が流れている。このあたりは湯の花の渓谷を削り押し流されてきた河川堆積層により形成された合成扇状地の端緒に当たっている。平成19年度の亀岡市教育委員会による遺構・遺物の存在及び拡がりを確認する試掘調査では、地表下およそ0.35～0.40mで、安定した層が確認されている。その成果をもとに小規模調査を実施した。



第15図 小規模調査D・E地区調査区配置図(1/4,000)



第16図 D-1d・e区平面及び土層断面図(1/500・1/50)

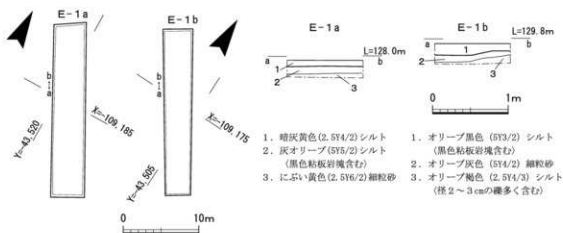
①E-1地区

E-1a区(第17図) 菰川の西側に隣接する調査区で、北西から南東方向に長さ23m、幅4.5mの調査区を設定した。掘削深度は現地表下約0.25mである。西壁中央部の柱状図(第17図)で見ると、1層:暗灰黄色シルト、2層:灰オリーブシルト、3層:にぶい黄色細粒砂である。遺構・遺物は確認できなかった。

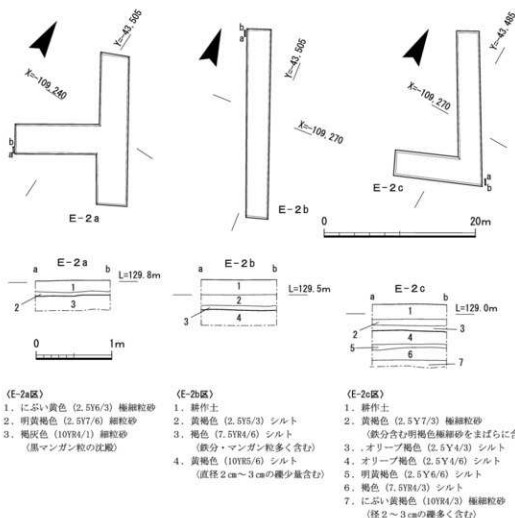
E-1b区(第17図) a区の北東側に平行して、一段低い旧水田部に設定した長さ22m、幅3.5mの調査区である。掘削深度は耕作土下約0.3mである。南西側の壁断面中間で見ると、1層:オリーブ黒色(5Y3/2)シルト、2層:灰オリーブ色細粒砂、3層:オリーブ褐色シルトである。この礫を多く含んだ3層の広がりを確認したが、遺構・遺物はまったく確認されなかった。

②E-2地区

E-2地区は、E-1地区から菰川を挟んだ南東側に広がる小規模調査区である。菊芋などを栽培していた畑地で、標高は130m前後を測る。佐伯遺跡の範囲では、金藏寺や佐伯古墳群が立



第17図 E-1 a・b区平面及び土層断面図(1/500・1/50)



第18図 E-2 a・b・c区平面及び土層断面図(1/500・1/50)

地する丘陵の裾部に、佐伯遺跡の北西端にあたる。a～cの3つのトレンチを設定した。

E-2 a区(第18図) 北西から南東に大きく振って「T」字形に設定した調査区である。トレンチの規模は、北東から南東に長さ20m、幅4m、南西から北東に長さ11m、幅5mである。掘削深度は0.4～0.7mを測る。土層の堆積状況を南西側に延びたトレンチ先端部の柱状図で示すと、1層：にぶい黄色極細粒砂、2層：明黄褐色細粒砂、3層：褐灰色細粒砂である。遺構が存在したような安定した層の堆積はまったく認められなかった。遺物の出土も皆無である。

E-2 b区(第18図) a区から農道を挟んで南西側の畑地に設定した調査区である。トレンチの規模は、長さ25m、幅3mである。耕作土の除去後、平均約0.4mの深さまで掘削した。西壁の北端において、1層の耕作土下約0.6mまで掘り下げて土層を観察した。層序は、2層：黄褐色シルト、3層：褐色シルト、4層：黄褐色シルトである。大小さまざまな礫を含む層の堆積がみられ、遺構・遺物の存在は認められなかった。河川の氾濫による痕跡が顕著であった。

E-2 c区(第18図) b区の南東側に当たる。北西から南東に振って長さ20m、幅4mと、長さ8.5m、幅4mの「L」字形に設定した。掘削深度は、平均約0.5mを測る。北東側の長辺南端で、土層断面を柱状図に記録した。1層の耕作土の下の堆積状況は、2層：黄褐色極細粒砂、3層：オリーブ褐色シルト、4層：オリーブ褐色シルト、5層：明黄褐色シルト、6層：褐色シルト、7層：にぶい黄褐色極細粒砂である。ここでは7層を除き、主に粗砂や礫よりもシルトが堆積している。遺構・遺物の存在は認められなかった。

③E-3地区

E-3地区はE-2地区の北東側に広がる田畑で、扇状地性の平野部に向かって傾斜していく地点に当たる。標高は124m～125mを測る。a～1までの12か所の調査区を設定した。

E-3 a区(第19図) 護岸工事された現在の菰川にほぼ隣接する調査区である。トレンチの規模は長さ16m、幅5mを測り、掘削深度は約0.3mである。土層の堆積状況は、1層：暗灰黄色極細粒砂、2層：にぶい黄色極細粒砂、3層：褐色粗粒砂である。河川堆積による粗い砂礫が堆積し、遺構・遺物の存在は確認できなかった。

E-3 b区(第19図) aトレンチの南側に東西方向に設定した調査区である。トレンチの規模は長さ25m、幅4m、掘削深度は約0.4mを測る。土層の堆積状況は、1層：暗灰黄色極細粒砂、2層：にぶい黄色極細粒砂、3層：褐色細粒砂、4層：暗褐色細粒砂である。洪水による河川堆積による粗い砂礫の堆積はみられなかったが、遺構・遺物は確認できなかった。

E-3 c区(第19図) b区の南側に平行して設定した調査区である。トレンチの規模は長さ35m、幅4m、掘削深度は約0.5mを測る。南壁東端で基本層序を見ると、1層：暗灰黄色極細粒砂、2層：にぶい黄色極細粒砂、3層：にぶい褐色極細粒砂、4層：暗灰黄色粗粒砂礫である。河川堆積による粗砂礫の堆積が4層で確認されたが、遺構・遺物は確認できなかった。

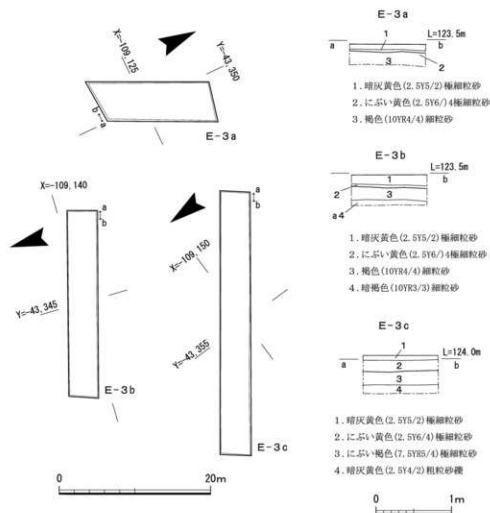
E-3 d区(第20図) c区より一段高い水田部に設定した調査区である。トレンチの規模は長さ12m、幅4m、掘削深度は約0.5mである。土層の堆積状況を南壁西端でみると、1層：暗灰黄色極細粒砂、2層：にぶい黄色極細粒砂、3層：にぶい褐色極細粒砂、4層：黒褐色粗粒砂、

5層：暗灰黄色極粗粒砂である。遺構・遺物は確認できなかった。

E-3 e区 (第20図) 畦を挟んでd区と連続する調査区である。トレンチの規模は長さ37m、幅4m、掘削深度は約0.8mである。土層の堆積状況は、1層：耕作土、2層：暗灰黄色極細粒砂、3層：にぶい黄色極細粒砂、4層：黒褐色粗粒砂、5層：暗灰黄色粗粒砂である。ここでは3層から土師器の瓶の破片が1点出土した。瓶の年代は、古墳時代後期～終末期のもので、完成品の約半分近い破片の量である。周辺を精査したが、人為的な掘り込みは確認できず、遺構に伴うものではないことが判明した。河川の水流による器表面の摩滅はあまり見られず、体部外面のハケメ調整も観察し得ることから、当地における河川氾濫が治まった時期に包含されたものであろう。

E-3 f区 (第21図) d区の南西側に「T」字形に設定した調査区である。南北の調査区は長さ25m、幅4m、東西の調査区は長さ14m、幅4mで、掘削深度は1mを測る。灰黄色極細粒砂やオリーブ褐色細粒砂などの堆積層が確認できるものの、水平に安定した層位面が形成されておらず、遺構・遺物は確認されなかった。

E-3 g区 (第21図) e区の南側に平行する調査区である。トレンチの規模は、長さ20m、幅2.5mを測る。掘削深度は0.4m～0.7mである。土層の堆積は、1層：暗灰黄色極細粒砂、2層：



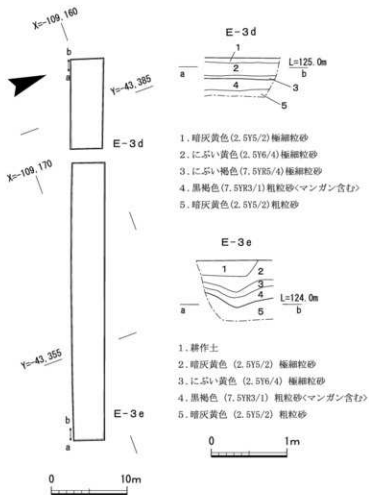
第19図 E-3 a・b・c区平面及び土層断面図(1/500・1/50)

にぶい黄色極細粒砂、3層：褐色極細粒砂、4層：にぶい黄褐色細粒砂、5層：黒褐色粗粒砂、6層：黒褐色粗粒砂である。東西端で層位が大きく相違することからも、遺構を検出し得るような安定した堆積層は確認できなかった。遺物についても出土していなかった。

E-3 h区(第21図) f区の南側に設定した「T」字形トレンチである。トレンチは、東西の長さ28m、幅4m、南北の長さ4.5m、幅4mで設定した。土層の堆積状況は、北壁東端でみると、表土直下の1層：黄色極細粒砂、2層：灰黄色細粒砂、3層：灰白色粘性砂礫である。1層から3層まで、シルト・極細粒砂・粗砂礫の互層や、黒色マンガン塊の厚い堆積がみられ、遺構・遺物は確認できなかった。

E-3 i区(第22図) h区の東に細長く設定した調査区である。規模は、長辺30m、短辺3.8m、掘削深度は1mを測る。土層の堆積状況は、1層：灰黄色細粒砂、2層：灰黄色細粒砂、3層：暗褐色極細粒砂、4層：灰褐色極細粒砂、5層：暗褐色細粒砂、6層：暗黒褐色細粒砂である。1層から4層まで、シルト・極細粒砂・粗砂礫の互層や、黒色マンガン塊の厚い堆積がみられ、遺構・遺物は確認できなかった。

E-3 j区(第22図) i区の北東に位置する調査区である。トレンチの規模は、長さ8m、幅4mを測る。掘削深度は1～1.2



第20図 E-3 d・e区平面及び土層断面図(1/500・1/50)

mである。南のk区より耕作面は0.5m下がる土層の堆積状況は、1層：オリーブ褐色極細粒砂、2層：黒褐色細粒砂、3層：暗褐色極細粒砂、4層：オリーブ褐色粗粒砂、5層：褐色シルト、6層：暗褐色シルト、7層：褐色シルト、8層：暗褐色シルトとなる。遺構・遺物は確認できなかった。

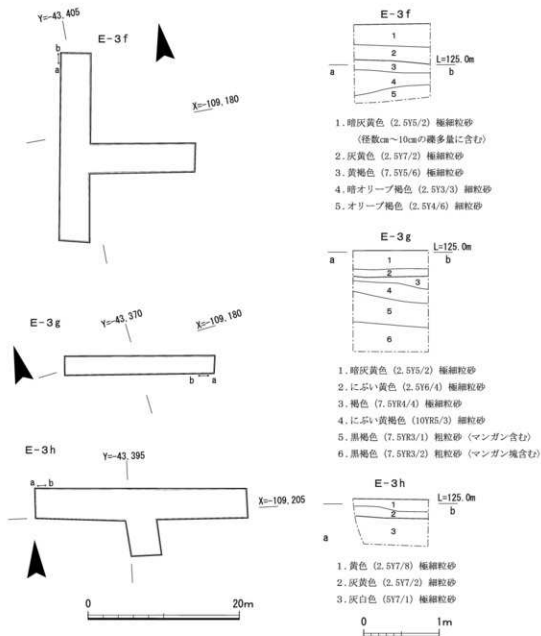
E-3 k区(第22図) j区の南に長さ16m、幅4mで設定した。掘削深度は最大1.2mである。西壁北端での層序は、1層：灰黄色、2層：暗褐色極細粒砂、3層：黄褐色細粒砂、4層：褐色細粒砂礫、5層：暗褐色粒砂である。シルト層の堆積はみられず、細砂及び粗礫の堆積がみられたが、遺構・遺物とも検出

されなかった。

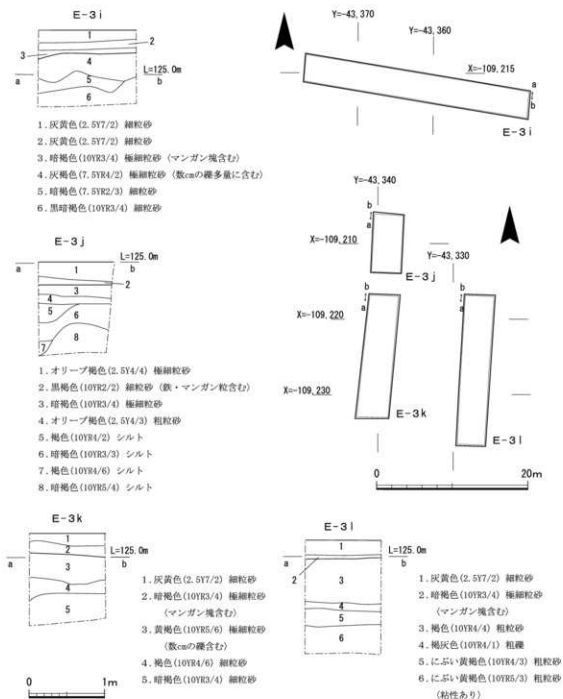
E-3 I 区(第22図) k トレンチの東側に平行して長さ20m、幅4mに設定した。掘削深度は最大1.5mを測る。西壁北端の層位は、1層：灰黄色細粒砂、2層：暗褐色極細粒砂、3層：褐色粗粒砂礫、4層：褐灰色粗粒礫、5層：にぶい黄褐色粗粒砂礫、6層：にぶい黄褐色粗粒砂礫である。大きな礫や粗砂が北東から南西に流れている。遺構・遺物は確認できなかった。

④小結(E地区)

E地区の小規模調査では、e区の耕作土直下で土師器片が出土したが遺構にともなうものではなかった。本梅盆地に通じる峠道に差し掛かる丘陵裾部で、佐伯古墳群に近いため遺構・遺物の検出が期待されたが、河川堆積の粗砂礫がほぼ全体を覆い、さらにマンガンの厚い堆積層がみ



第21図 E-3 f・g・h区平面及び土層断面図(1/500・1/50)



第22図 E-3 i・j・k・lトレンチ平面及び土層断面図(1/500・1/50)

られるなど、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

(黒坪一樹)

2) 平成27年度の調査

(1) 1 トレンチの調査

① 調査の概要

今回の佐伯遺跡の調査範囲で最も南東寄りの、南側丘陵部に近い調査区である(第23図)。I-I区に位置する。調査区は矩形を呈し、南北45m、東西12mを測る。

層序は水田耕作土及び床土直下で、暗灰青色シルト層や褐色砂礫層が堆積し、遺物包含層は存在しない。

調査区の北半部では、古墳～鎌倉時代の土器を出土したピットや土坑を検出した。また、中央部から南半部にかけては縄文時代中期(船元式期)以降の自然流路及び沼地状のくぼみを検出した。ピットは20基前後検出したが、断面観察から柱痕跡を確認できたものはなく、杭跡や木本植物などの痕跡とみられる。土坑は遺物の出土がみられず、黒色シルトの埋土のみであることから、風倒木の痕跡と考えられる。自然流路NR1と沼状のくぼみSX2についても、人工的な遺構ではないと判断した。

なお、佐伯遺跡より北に所在する天川遺跡では、縄文時代中期～弥生時代にかけての遺構・遺物が確認されており、第23図 1 トレンチ遺構配置図(1/500)それらとの関係が考慮される。

② 検出遺構

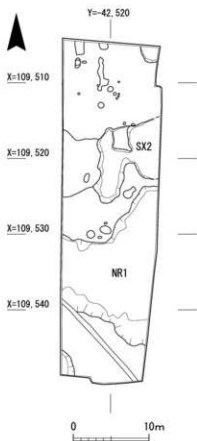
自然流路NR1 調査区南半部を、西から東に流れる自然流路である。検出長12m、幅9～21m、深さ0.1～0.4mを測る。暗灰色粗砂礫が暗褐色シルトのベースをえぐって約0.4mの厚さに堆積し、粗砂礫の中に黒灰色シルトがラミナ状に複数堆積していた。

③ 出土遺物

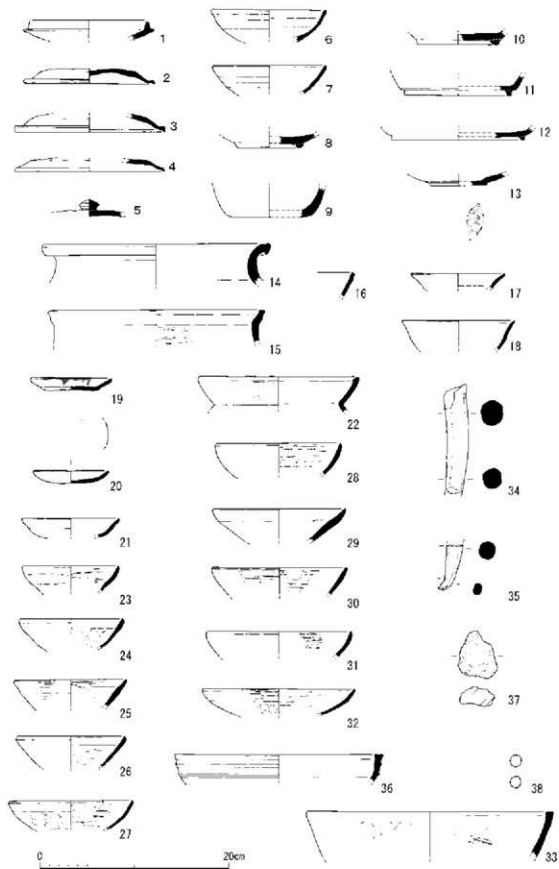
遺構面精査時(第24図1～第25図41) 1は古墳時代の須恵器の杯身片である。2～5は須恵器の蓋である。5は宝珠形つまみ部分である。6～8は須恵器の椀である。6・7は口縁部、8は底部片である。9は須恵器の杯の底部片、10・11は須恵器杯Bの高台部分である。12は須恵器の皿Bの高台部分である。13は須恵器椀で、底部は糸切りである。14は須恵器の壺の口縁部である。15は瓦質の鉢の口縁部である。16～18は須恵器杯の口縁部片である。

19は瓦器の皿で、口縁部には煤が付着している燈明皿である。20は土師器の皿の破片で、内面の底に暗文がみられる。21は土師器皿の口縁部片である。22は土師器の甕の口縁部片である。23～32は瓦器椀の口縁部片である。33は瓦質の鉢の口縁部片である。34・35は瓦質の三足鉢の脚部分である。

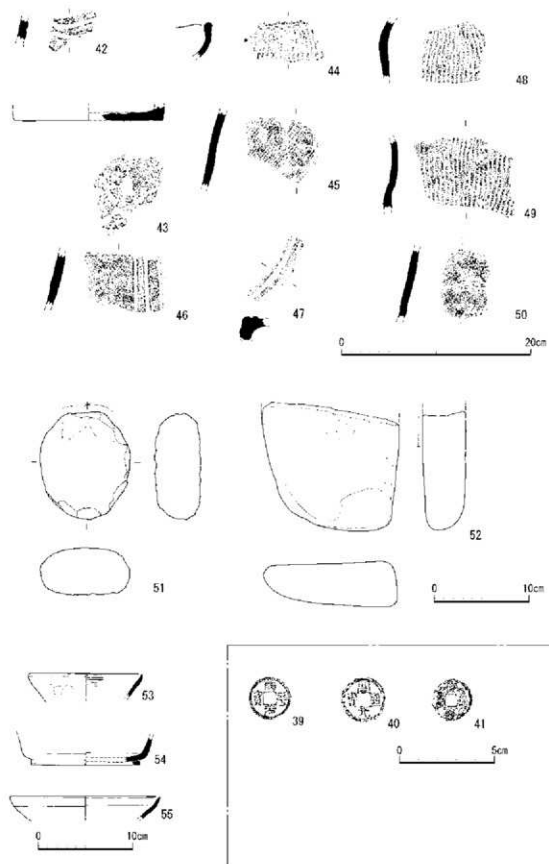
36は陶器の鉢の口縁部片である。37は鉄滓である。38は鉛の鉄砲玉である。



第23図 1 トレンチ遺構配置図(1/500)



第24図 1トレンチ出土遺物実測図1(1/4) 遺構面精査時・遺構ほか



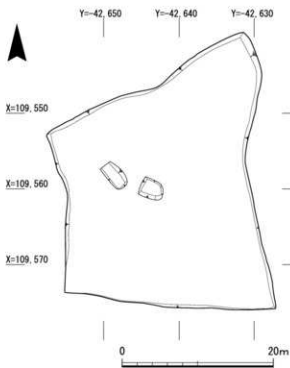
第25図 1 トレンチ出土遺物実測図2 (1/4・1/2) 遺構面精査時ほか

39は、遺構精査時に出土した治平元寶である。治平元(1064)年に初铸の北宋銭である。40は、遺構精査に出土した開元通寶である。唐代において武徳4(621)年に初铸され、唐代のみならず五代十国時代まで約300年にわたって流通した貨幣である。41も同じく遺構精査に出土した開元通寶であるが、錆が付着している。

縄文土器(第25図42~50) 1トレンチ出土の縄文土器は中期のものである。42は胴部と見られる破片である。器面の湾曲状況から天地を決定した。弧状の沈線が横走し、胴部上半のものであろうか。北白川C式の資料である。43は底部の断片で、平底である。44は波状口縁部である。北白川追分町の船元・里木式の資料を参考にすると、口縁部の波状の頂部は8波程度にならう。上縁に半截竹管の連続する刺突がみられ、地文は摺糸文である。沈線などはみられないが、施文の特徴から中期後半の里木Ⅱ式に位置付けられようか。45は縄文がみられる胴部の破片である。46は幅広の沈線が3条垂下する胴部片である。中期末の北白川C式である。47は深鉢Cの口縁部片である。^(註3)凹面となる内面が長く残り、筒形になる可能性がある。この場合には、北白川C式の古相に位置付けられる。^(註4)48・49は摺糸文とみられる地文をもつ胴部の破片である。50は無文の破片である。

その他の遺物(第25図51~55) 51・52は石器である。51は敲石で、側面に打撃痕がある。52は磨石の台石である。擦り込んだ面と中央に打撃痕がある。52・53は土坑S X 14から出土した。52は瓦器碗の口縁部片である。54は須恵器の皿の高台部分である。55は土坑S X 15から出土した須恵器の碗の口縁部片である。

(村田和弘・黒坪一樹)



第26図 2トレンチ遺構配置図(1/500)

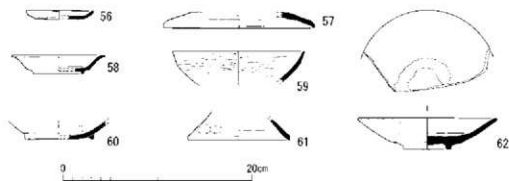
(2) 2トレンチの調査

①調査の概要

1トレンチから西へ100m、I-L区に位置する調査区である(第26図)。トレンチの形は方形であるが、北東隅が突出する。東西約28m、南北約36mを測る。西側には広い用水池が造成されており、後世にかなりの削平を受けていると考えられる。

層序は、水田耕作土と床土を除去すると、粗い砂礫の面となる。

調査の結果、水路や河川の流水にともなう粗い砂礫層の堆積が調査区全体を覆い、顕著な遺構は存在しなかった。遺構面の有無を確認するため、さらに1mの深さまで掘削したが、粗い砂礫層にほとんど変化は



第27図 2トレンチ出土遺物実測図(1/4) 精査時

なく、遺構面は確認できなかった。

ただし、砂礫層から古墳～鎌倉時代にかけての土器が多く出土した。調査地周辺に集落等の存在をうかがわせるものである。

(黒坪一樹)

②出土遺物

56～62は砂礫層から出土した。56は土師器の皿である。57は古墳時代の須恵器の蓋の口縁部片である。58は中国製白磁の皿で、16世紀前半のものと思われる。59は瓦器碗の口縁部片で内外面にミガキ調整がみられる。60は瓦器碗の高台部分である。61は須恵器の高杯の脚端部片と思われる。62は唐津の皿である。

(村田和弘)

(3) 3トレンチ

①調査の概要

I-N区の中央に設定した調査区である(第28図)。

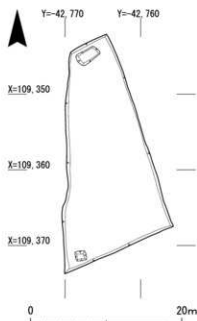
基本的な層序は、耕作土、床土、耕作に伴う整地土(無遺物層)、灰褐色粘質土(上面にマンガン層)である。

灰褐色粘質土上面まで重機で掘削し、その後、人力による遺構の検出作業を行ったが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。後世の土地利用によって削平された可能性が考えられる

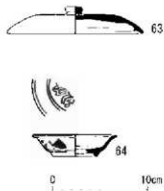
②出土遺物

遺物は重機掘削時に床土層から、天井部につまみが付く須恵器の蓋(第29図63)の小片と、中国製青花と思われる16世紀に属する磁器の皿(第29図64)の小片が出土した。

(村田和弘)



第28図 3トレンチ遺構配置図(1/500)



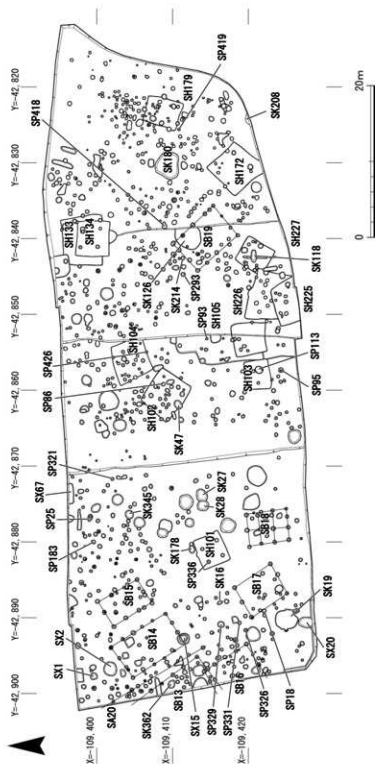
第29図 3トレンチ出土遺物実測図(1/4) 重機掘削時

(4) 4 トレンチ

① 調査の概要

I-S区の北辺部とI-R区の一部にかけて設定した調査区である。

調査区は南北の最長約90m、東西の最大幅約35mの東西に長い矩形を呈する(第30図)。調査



第30図 4 トレンチ遺構配置図(1/500)

区は水田 4 筆分であり、東に向かって水田ごとに 0.2m 前後ずつ低くなっている。周辺の現地形は緩やかに西から東へ傾斜している。さらに、調査区の東端部で約 0.3m の段差がみられる。

調査区の西側の遺構検出面の高さは約 115m、東側の遺構検出面は約 113.4m である。

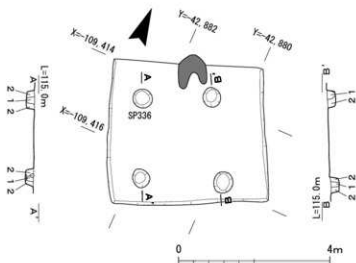
基本的な層序は約 0.2m の耕作土と約 0.1m の床土層があり、無遺物の茶褐色粘質土を除去すると、10cm 前後のマンガンが沈着する層があり、その直下で遺構を確認した。遺構検出面は、最大 10cm 程の礫を含む層で、遺構の検出作業は非常に困難な状況であった。さらに、後世の土地利用によって遺構面が削平を受けており、遺構の残存状態は良くなかった。近世以前の遺物は、遺構検出面より上層では出土しなかった。

検出した遺構は、竪穴建物 12 基、掘立柱建物 7 棟、掘立柱塀 1 条、土坑、ピットなどである。また、調査区西側では、直径約 1.2～1.8m の円形の土坑状遺構を検出したが、いずれからも近代以降の遺物が出土しており、廃棄土坑と考えられる。

② 検出遺構

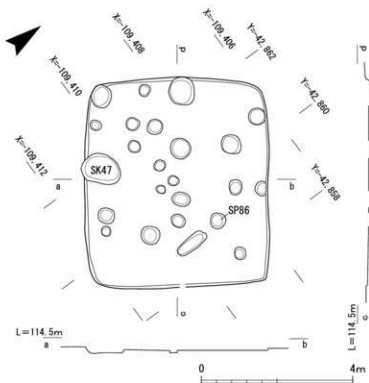
竪穴建物 SH101 (第31図)

調査区西部で検出した方形の竪穴建物である。規模は、長辺(東西)約 4.2m、短辺(南北)約 3.4m を測る。遺構は後世の土地利用等によって、遺構検出面より 0.05m 程度しか残存していない。北辺中央には、竈の痕跡を確認したが炉床部が残るのみで、上部構造は不明である。周壁溝は確認

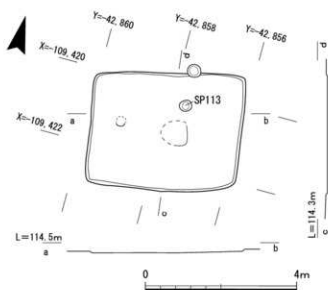


1. 褐灰色 (5Y4/1) 粘性砂
2. 灰褐色 (5Y6/2) 粘質土 (礫を多く含む)

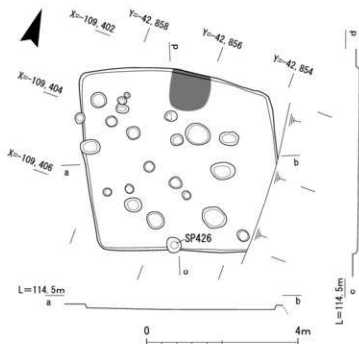
第31図 4 トレンチ竪穴建物 SH101 実測図 (1/100)



第32図 4 トレンチ竪穴建物 SH102 実測図 (1/100)



第33図 4トレンチ堅穴建物SH103実測図(1/100)



第34図 4トレンチ堅穴建物SH104実測図(1/100)

できなかった。主柱穴は4基検出した。建物の主軸は北から20°西に振る。遺物は、須恵器杯身が床面上で出土した。6世紀後半(TK43型式並行期)と思われる。

堅穴建物SH102(第32図)

調査地中央部で検出した方形の堅穴建物である。規模は長辺約5.5m、短辺約4.8mを測る。残存する遺構の深さは0.05~0.1mである。炉または竈、周壁溝、主柱穴などは確認できなかった。建物の主軸は北から33°東に振る。遺物には須恵器の蓋などがある。6世紀後半(TK43型式並行期)と思われる。

堅穴建物SH103(第33図)

調査地中央部、南辺寄りで検出した方形の堅穴建物である。規模は長辺(東西)約4m、短辺(南北)約3.1mを測る。残存する遺構の深さは0.05m程度である。炉または竈、周壁溝、主柱穴などは確認できなかった。建物の主軸は北から10°西に振る。遺物

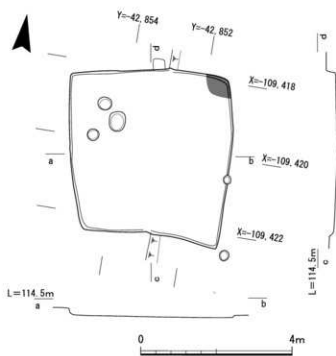
には須恵器の皿などがある。時期は不明である。

堅穴建物SH104(第34図) 調査地中央部、堅穴建物SH102の北東側で検出した方形の堅穴建物である。規模は長辺(東西)約5.1m、短辺(南北)約4.8mを測る。残存する遺構の深さは0.05~0.1m程である。北辺で焼土を確認した。炉の痕跡と思われる。建物の主軸は北から30°西に振る。遺物には土師器の甕などがある。時期は不明である。

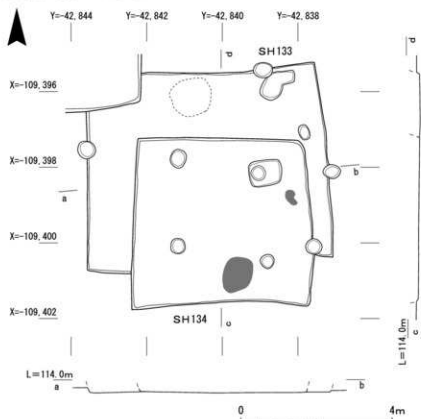
堅穴建物SH105(第35図) 調査地中央部、堅穴建物SH103の東側に接して検出した方形の堅穴建物である。規模は東西約4.3m、南北約4.2mを測る。残存する遺構の深さは0.03~0.1m程で

ある。建物の北東角で焼土を検出した。周壁溝や支柱穴は確認できなかった。建物の主軸は北から30°西に振る。遺物には須恵器の杯や甕、土師器の高杯・甕などがある。時期は不明である。

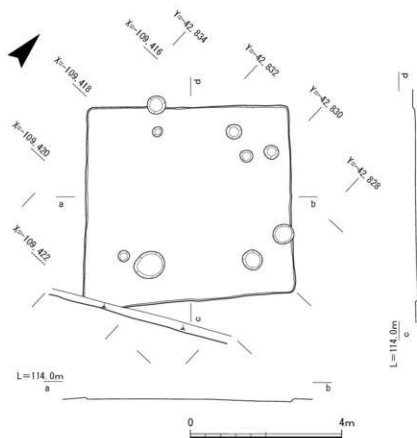
竪穴建物 SH133 (第36図) 調査地北東部で検出した方形の竪穴建物である。後述する SH134 と重複し、SH133 の方が古い。規模は長辺(東西)約6.4m、短辺(南北)約5.2mを測る。残存する遺構の深さは0.05m程度である。北辺中央で焼土を確認した。周壁溝や支柱穴は確認できなかった。建物の主軸はほぼ真北を指向する。遺物には土師器の甕などがある。



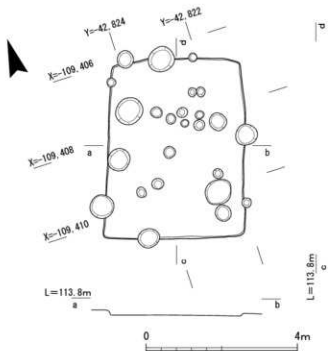
第35図 4トレンチ竪穴建物SH105実測図(1/100)



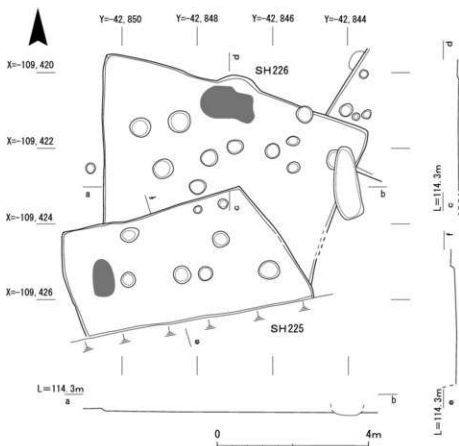
第36図 4トレンチ竪穴建物SH133・134実測図(1/100)



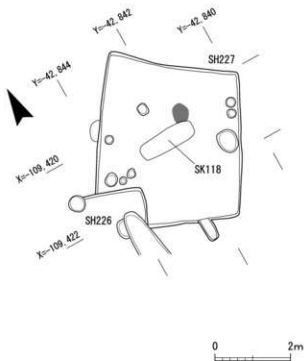
第37図 4トレンチ型穴建物 S H172実測図(1/100)



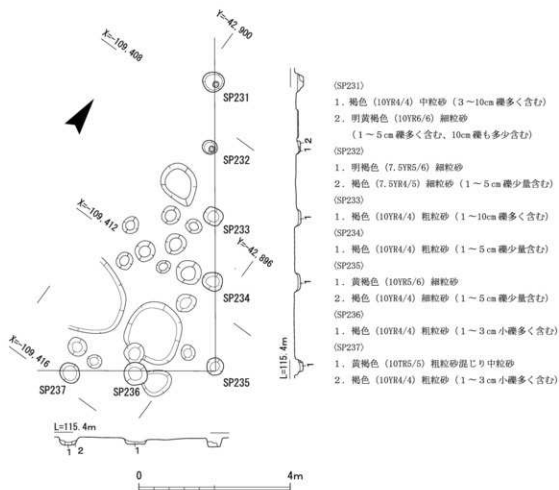
第38図 4トレンチ型穴建物 S H179実測図(1/100)



第39図 4 トレンチ型穴建物 S H 225・226実測図(1/100)



第40図 4 トレンチ型穴建物 S H 227実測図(1/100)



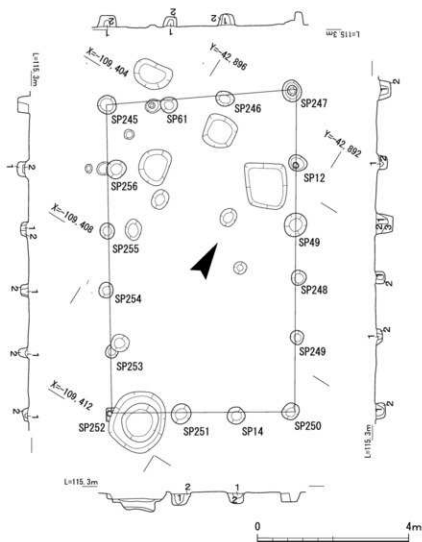
第41図 4 トレンチ掘立柱建物 S B13実測図(1/100)

詳細な時期は不明である。

竪穴建物 S H134 (第36図) 調査地北東部で検出した方形の竪穴建物である。竪穴建物 S H133と重複し、S H134の方が新しい。規模は長辺(東西)約4.7m、短辺(南北)約4.4mを測る。残存する遺構の深さは0.05m程度である。建物内の南辺中央で焼土を確認した。また、主柱穴は4基検出した。建物の主軸は、ほぼ真北を指向する。遺物には、土師器の甕などがある。詳細な時期は不明である。

竪穴建物 S H172 (第37図) 調査地南東部で検出した方形の竪穴建物である。規模は長辺約5.4m、短辺約5.3mを測る。残存する遺構の深さは0.05m程度である。炉または竈、周壁溝、主柱穴などは確認できなかった。建物の主軸は北から40°西に振る。遺物には、須恵器の杯Bなどがある。詳細な時期は不明である。

竪穴建物 S H179 (第38図) 調査地東端で検出した方形の竪穴建物である。規模は長辺約4.8m、短辺約3.6mを測る。残存する遺構の深さは0.05m程度である。炉または竈、周壁溝、主柱穴は確認できなかった。建物の主軸は北から20°東に振る。遺物は出土していない。詳細な時期は不明である。



(SP245)

1. 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂混じり細粒砂 (3～5cm 礫含む)
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じり粗粒砂 (3～8cm 礫多く含む)

(SP61)

1. 黄褐色 (10Y5/6) 細粒砂
2. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細粒砂混じり粗粒砂 (1～4cm 礫含む)

(SP246)

1. 暗褐色 (10Y3/3) 粗粒砂混じり細粒砂
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂混じり粗粒砂 (1～3cm 礫多く含む)

(SP247)

1. 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂質細粒砂
2. 褐色 (10YR4/4) 粗粒砂 (1～5cm 礫多く含む)

(SP12)

1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂 (土師器片含む)
2. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂混粗粒砂 (1～5cm 小礫多く含む)

(SP49)

1. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂
2. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂 (1～5cm 礫含む)
3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗粒砂 (1～8cm 礫多く含む)

(SP248)

1. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂 (土師器片含む)
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細粒砂 (1～3cm 礫含む)

(SP249)

1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂 (1～4cm の礫含む)
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂まじり粗粒砂

(SP250)

1. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗粒砂混じり細粒砂
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂 (3～8cm の礫多く含む)

(SP14)

1. 黄褐色 (10Y5/6) 細粒砂
2. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂混じり粗粒砂 (1～5cm 礫少量含む)

第42図 4 トレンチ掘立柱建物 S B14実測図(1/100)

(掘立柱建物 SB14 土層名続き)

(SP251)

- 1: 橙色 (7.5Y6/6) 細粒砂
- 2: 黄褐色 (10YR) 細粒砂含粗粒砂 1~5cm

(SP252)

- 1: にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂 (1~5cm 雜含む)
- 2: 暗灰黄 (2.5Y5/2) 中粒砂 (1~5cm 雜含む)

(SP253)

- 1: にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂
- 2: 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細粒砂

(SP254)

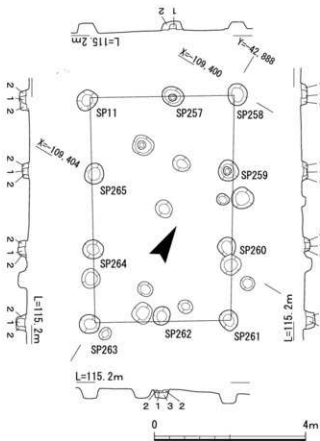
- 1: 褐色 (10YR4/4) 細粒砂 (5~15cm 雜含む)
- 2: 灰黄褐色 (10YR4/2) 細粒砂含む粗粒砂 (1~5cm 雜多く含む)

(SP255)

- 1: にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂
- 2: にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗粒砂混じり細粒砂 (1~5cm 雜多く含む)

(SP256)

- 1: 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗粒砂 (1~20cm 雜多く含む)
- 2: 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粒砂 (1~5cm の雜を含む)



(SP11)

1. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂混じり細粒砂
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂 (雜少量含む)

(SP257)

1. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂
2. 黄褐色 (10YR5/6) 細粒砂 (1~5cm 雜多く含む)

(SP258)

1. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂
2. 暗褐色 (10YR3/4) 粗粒砂含む細粒砂 (1~5cm 雜少量含む)

(SP259)

1. 褐色 (10YR4/6) 細粒 (1~3cm 雜少量含む)
2. 暗褐色 (10YR3/3) 細粒砂混じり粗粒砂 (1~10cm 雜少量含む)

(SP260)

1. 褐色 (10YR4/4) 細粒砂 (1~5cm 雜少量含む)
2. 暗褐色 (10YR3/4) 粗粒砂 (1~5cm 雜少量含む)

(SP261)

1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗粒砂含む細粒砂
2. 暗褐色 (10YR3/4) 粒砂粒 (SP262)

(SP262)

1. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂 (1~2cm 雜少量含む)
2. 褐色 (10YR4/6) 細粒砂
3. 暗褐色 (10YR3/4) 粗粒砂含む細粒砂 (3~8cm 雜含む)

(SP263)

1. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗粒砂 (1~3cm 雜少量含む)
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂 (1~2cm 雜多量含む)

(SP264)

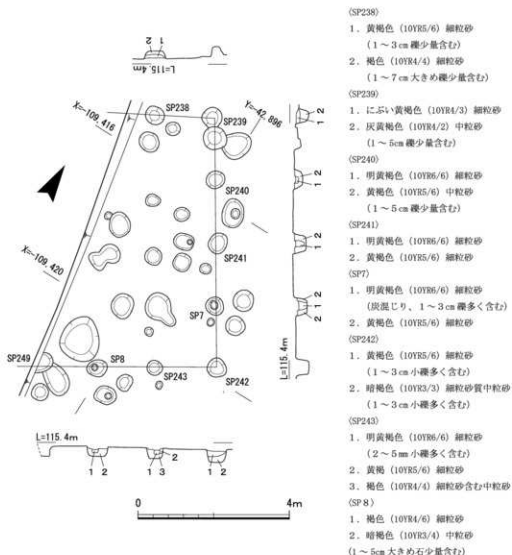
1. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粗粒砂
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂 (1~2cm 雜少量含む)

(SP265)

1. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂含む細粒砂 (雜少量含む)

2. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗粒砂含む細粒砂 (雜多く含む)

第43図 4 トレンチ掘立柱建物 SB15実測図(1/100)

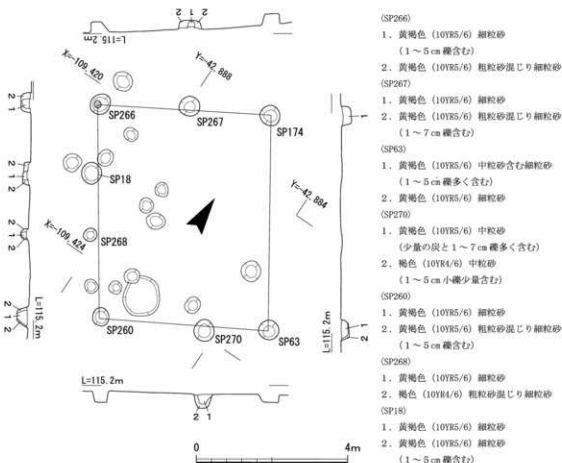


第44図 4 トレンチ掘立柱建物 S B16実測図(1/100)

竪穴建物 S H225 (第39図) 調査地中央部南辺で検出した方形の竪穴建物である。竪穴建物 S H105の南東側に位置する。後述する竪穴建物 S H226と重複しており、S H225の方が新しい。規模は長辺(東西)5.9m、短辺(南北)の検出長は約3.5mを測る。残存する遺構の深さは0.05m程度である。主柱穴として、直径約0.4mの柱穴を2基検出した。建物内の西側で焼土を確認したが、周壁溝は確認できなかった。建物の主軸は北から20°西に振る。遺物には須恵器の杯などがある。詳細な時期は不明である。

竪穴建物 S H226 (第39図) 調査地中央部南辺で検出した方形の竪穴建物である。先述の竪穴建物 S H225が南半部に重複する。規模は北辺(東西)約7.2m、南北の検出長は約4.4mを測る。残存する遺構の深さは0.05m程度である。周壁溝や主柱穴は、確認できなかった。建物内の北辺中央で焼土を確認した。建物の主軸はほぼ北から18°西に振る。遺物には須恵器の蓋や杯などがある。詳細な時期は不明である。

竪穴建物 S H227 (第40図) 調査地中央部南辺で検出した方形の竪穴建物である。竪穴建物 S



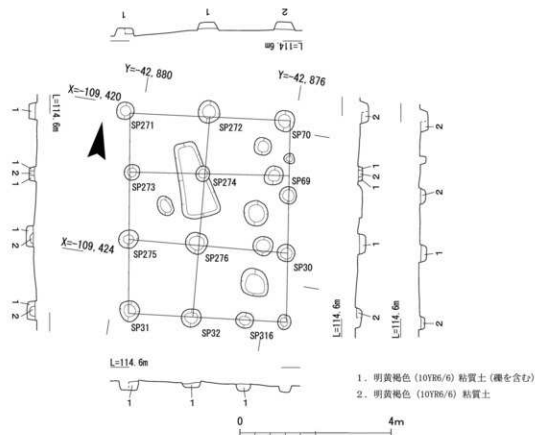
第45図 4 トレンチ掘立柱建物SB17実測図(1/100)

H226が南西隅に重複し、SH227の方が古い。平面形は台形状を呈し、規模は長辺が約4.3m、短辺が約3.5mを測る。残存する遺構の深さは0.03m程度である。周壁溝や主柱穴は確認できなかった。建物の中央よりやや北東で焼土を確認した。建物の主軸はほぼ北から30°東に振る。遺物は須恵器の蓋や土師器の甕などがある。6世紀後半(TK43型式並行期)と思われる。

掘立柱建物SB13(第41図) 調査地西端部に検出した。西側は調査区外となるため正確な規模は不明であるが、桁行4間(7.5m)以上、梁行2間(3.9m)以上の建物である。柱穴はSP231・SP232・SP233・SP234・SP235・SP236・SP237の7基を確認した。柱痕は直径約0.2mを測る。柱穴の深さは、0.4m前後である。建物の主軸は北から36°西に振る。土師器甕が出土しているが、時期は不明である。

掘立柱建物SB14(第42図) 調査地西部、掘立柱建物SB13の東側に検出した。桁行5間(8.1m)、梁行3間(4.8m)の建物である。柱穴はSP12・SP14・SP49・SP61・SP245・SP246・SP247・SP248・SP249・SP250・SP251・SP252・SP253・SP254・SP255・SP256の16基で構成される。柱痕は直径0.15~0.2mを測る。柱穴の深さは、0.5m前後である。建物の主軸は北から32°西に振る。古墳時代後期の須恵器が出土しているが、混入の可能性もある。

掘立柱建物SB15(第43図) 調査地西部、掘立柱建物SB14の東側に検出した。桁行3間(5.9



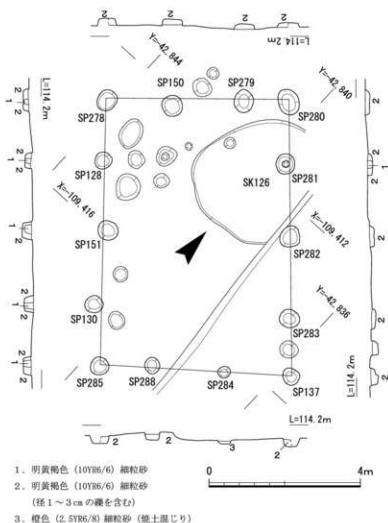
第46図 4 トレンチ掘立柱建物 S B 18 実測図(1/100)

m)、梁行 2 間(3.8m)の建物である。柱穴は S P 11・S P 257・S P 258・S P 259・S P 260・S P 261・S P 262・S P 263・S P 264・S P 265 の 10 基で構成される。柱痕の直径は約 0.2m を測る。柱穴の深さは、0.4m 前後である。建物の主軸は北から 32° 西に振る。須恵器の蓋などが出土しているが、時期は不明である。

掘立柱建物 S B 16(第 44 図) 調査地西端部、掘立柱建物 S B 13 の南辺に重複して検出した。西側は調査区外のため正確な規模は不明であるが、桁行 4 間(6.6m)、梁行 3 間(4.7m)以上の建物である。柱穴は S P 7・S P 8・S P 238・S P 239・S P 240・S P 241・S P 242・S P 243・S P 249 の 9 基を確認した。柱痕は直径 0.2～0.25m を測る。柱穴の深さは、約 0.4m しか残っていなかった。建物の主軸は北から 32° 西に振る。須恵器蓋などが出土しているが、時期は不明である。

掘立柱建物 S B 17(第 45 図) 調査地西部南寄りて検出した。桁行 3 間(5.6m)、梁行 2 間(4.5m)の建物である。柱穴は S P 18・S P 63・S P 174・S P 260・S P 266・S P 267・S P 268・S P 270 の 8 基で構成される。検出できなかった東辺の 2 基の柱穴は後世に削平されたと考えられる。柱痕の直径は約 0.2m である。柱穴の深さは、0.3m 前後である。建物の主軸は北から 35° 西に振る。S B 17 は掘立柱建物 S B 13～16 とほぼ同じ主軸であるが、1 棟のみ南東に離れて建てられている。須恵器の杯や竈などが出土しているが、混入の可能性があり、時期は不明である。

掘立柱建物 S B 18(第 46 図) 調査地西南部で検出した。桁行 3 間(5.4m)、梁行 2 間(4.3m)の



第47図 4 トレンチ掘立柱建物S B 19実測図(1/100)

成される。柱痕の直径は約0.2mを測る。柱穴の深さは、0.2m前後である。建物の主軸は北から43°西に振る。須恵器杯蓋などが出土しているが、混入の可能性があり、時期不明である。

掘立柱塼A 20 (第48図) 調査地西端部、掘立柱建物S B 13とS B 14の間で検出した掘立柱塼である。調査地内では6間分(13.6m)を検出した。柱痕は確認できたもので、直径約0.1mであった。塼の主軸は北から31°西に振る。柱穴から遺物が出土しておらず、時期は不明である。

ビットSP 25 トレンチ北辺の西側で検出した。直径約0.3m、深さ約0.2mを測る。須恵器片などが出土した。

ビットSP 18 土坑SK 19の北側で検出した。直径約0.4m、深さ約0.3mを測る。須恵器の甕などの破片などが出土した。

ビットSP 86 竪穴建物SH 102内の埋土上面で検出した。直径約0.2m、深さ約0.25mを測る。鉄鏝が出土した。

ビットSP 93 竪穴建物SH 105の北側で検出した。直径約0.3m、深さ約0.3mを測る。須恵器の小型壺片などが出土した。

総柱の建物である。柱穴はS P 30・S P 31・S P 32・S P 69・S P 70・S P 271・S P 272・S P 273・S P 274・S P 275・S P 276・S P 316の12基で構成される。柱痕の直径は約0.2mを測る。検出した柱穴の深さは、0.3m前後である。建物の主軸は北から10°西に振る。平安時代の須恵器杯Bなどが出土している。

掘立柱建物S B 19 (第47図) 調査地東部で1棟のみ検出した。桁行4間(7.0m)、梁行3間(4.8m)の建物である。柱穴はS P 128・S P 130・S P 137・S P 150・S P 151・S P 278・S P 279・S P 280・S P 281・S P 282・S P 283・S P 284・S P 285・S P 288の14基で構

ビットSP95 堅穴建物SH103の南側で検出した。直径約0.3m、深さ約0.3mを測る。須恵器杯Bなどが出土した。

ビットSP113 堅穴建物SH103内で検出した。直径約0.4m、深さ約0.2mを測る。ビット内から櫛の羽口が出土した。堅穴建物SH103との関連は不明である。

ビットSP183 ビットSP25の西側で検出した。直径約0.4m、深さ約0.35mを測る。土師器の高杯などが出土した。

ビットSP293 土坑SK126の西側で検出した。直径約0.3m、深さ約0.2mを測る。須恵器の蓋などが出土した。

ビットSP321 ビットSP25の南東側で検出した。直径約0.25m、深さ約0.2mを測る。不明鉄製品が出土した。

ビットSP326 トレンチの南西側の掘立柱建物SB16の南側で検出した。直径約0.25m、深さ約0.3mを測る。須恵器杯蓋の破片などが出土した。

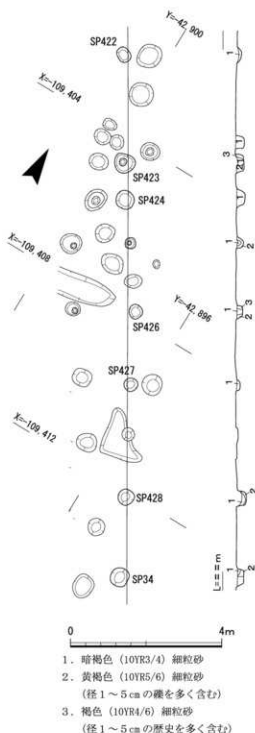
ビットSP331 (第49図右下) トレンチの南西側の掘立柱建物SB17の北側で検出した。最大幅約0.48mを測る楕円形を呈し、深さは約0.16mを測る。ビット内の埋土上層部で、外面の底部に「×」のヘラ記号がある須恵器の杯身が出土した。

ビットSP336 堅穴建物SH101内で検出した。建物の埋土上面から掘り込まれたビットである。建物の主柱穴とは別の遺構である。直径0.4m、深さ約0.3mを測る。須恵器杯身などが出土した。

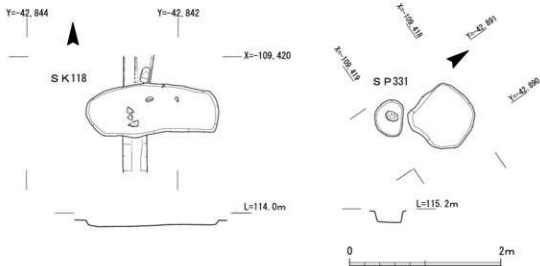
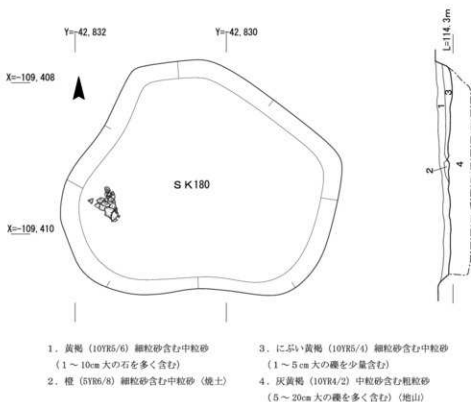
ビットSP418 土坑SK126の北側で検出した直径約0.3m、深さ約0.2mを測る。須恵器蓋の破片などが出土した。

ビットSP419 堅穴建物SH179の南西側で検出した。直径約0.25m、深さ約0.2mを測る。土師器の杯の破片などが出土した。

ビットSP426 堅穴建物SH104の南辺で検出した。直径約0.2m、深さ約0.25mを測る。須



第48図 4トレンチ掘立柱塼SA20実測図(1/100)



第49図 4トレンチ土坑SK118・180、ピットSP331実測図(1/50)

恵器の蓋の破片などが出土した。

土坑SK16 竪穴建物SH101の西側で検出した土坑である。楕円形を呈し、南北約0.4m、東西約0.25m、深さ約0.2mを測る。陶器片などが出土した。

土坑SK19 トレンチ南西隅で検出した楕円形を呈する土坑である。南北約3m、東西約2.2m、深さ約0.2mを測る。須恵器杯身や土師皿などが出土した。

土坑SK27 竪穴建物SH101の西側で検出した土坑である。楕円形を呈し、南北約1.2m、東西約1.6m、深さ約0.4mを測る。土坑SK28より後に掘り込まれた遺構である。土師器杯片が出

土した。

土坑 S K 28 土坑 S K 27 の西側で検出した。直径は約 1.4m、深さ約 0.4m を測る円形の土坑である。陶器碗などが出土した。

土坑 S K 47 堅穴建物 S H 102 の南辺、埋土上面から掘り込まれた楕円形を呈する土坑である。長さ約 1m、幅約 0.8m、深さ約 0.4m を測る。須恵器の蓋や杯が出土した。

土坑 S K 118 (第 49 図左下) 堅穴建物 S H 227 内の東西方向に長い隅丸方形の土坑である。南北幅約 1.74m、東西の長さ約 0.7m、現存する深さは約 0.06m を測る。土坑内からは須恵器の蓋や杯の破片が出土しているが、堅穴建物 S H 227 と関連する遺構かは不明である。

土坑 S K 126 掘立柱建物 S B 19 と重なって検出した。この土坑が建物の柱穴より後に掘り込まれた円形の土坑である。直径は約 3m、深さ約 0.1m を測る。須恵器杯の破片などが出土した。

土坑 S K 178 堅穴建物 S H 101 の北辺、埋土上面で検出した楕円形の土坑である。南北約 1m、南北約 0.7m、深さ約 0.2m を測る。土師器の皿などが出土した。

土坑 S K 180 (第 49 図上段) 土坑の埋土からは、須恵器の杯身や須恵器の皿、土師器の甕などが出土した。

土坑 S K 208 トレンチの南東隅で検出した土坑であるが、南半分は調査区外となる。南北検出幅は約 0.4m、東西幅約 0.6m、深さ約 0.2m を測る。須恵器の蓋などが出土した。

土坑 S K 214 土坑 S K 126 の西側で検出した直径約 0.5m、深さ約 0.3m を測る円形の土坑である。須恵器の杯などが出土した。

土坑 S K 329 土坑 S K 16 の西側で検出した直径約 0.8m、深さ約 0.4m を測る円形の土坑である。須恵器の杯蓋などが出土した。

土坑 S K 362 トレンチの西辺中央で検出した直径約 0.9m、深さ約 0.4m を測る円形の土坑である。埋土内から土師器の皿などが出土した。

土坑 S K 345 土坑 S K 178 の北東側で検出した楕円形の土坑である。南北約 0.8m、東西約 1m、深さ約 0.4m を測る。無軸陶器などが出土した。

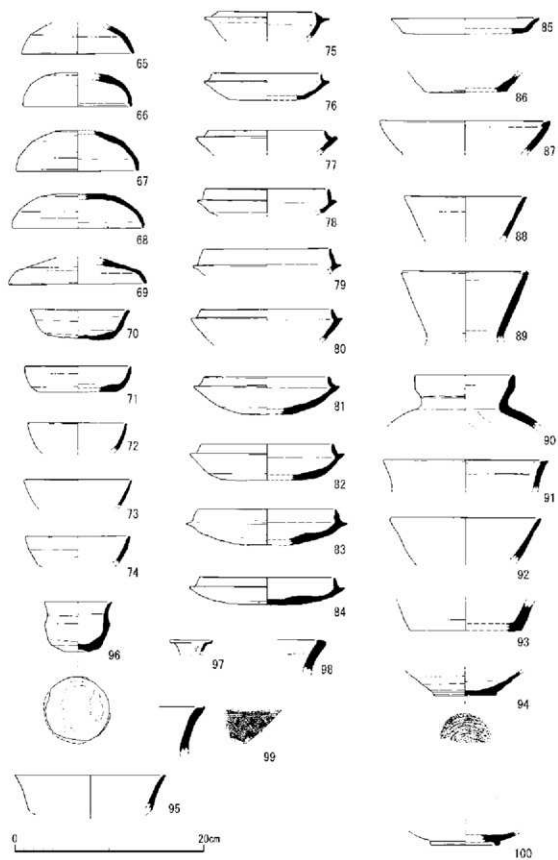
不明土坑 S K 1 トレンチの北西部で検出した、直径約 1m、深さ約 0.5m の土坑である。須恵器の杯身など、古墳時代から近世までの土器が出土した。

不明土坑 S K 2 トレンチの北西部で検出した。楕円形を呈し、直径最大約 1.9m、深さ約 0.7m を測る土坑で、近代の陶磁器のほかに古墳時代の杯身片 (264) が出土している。

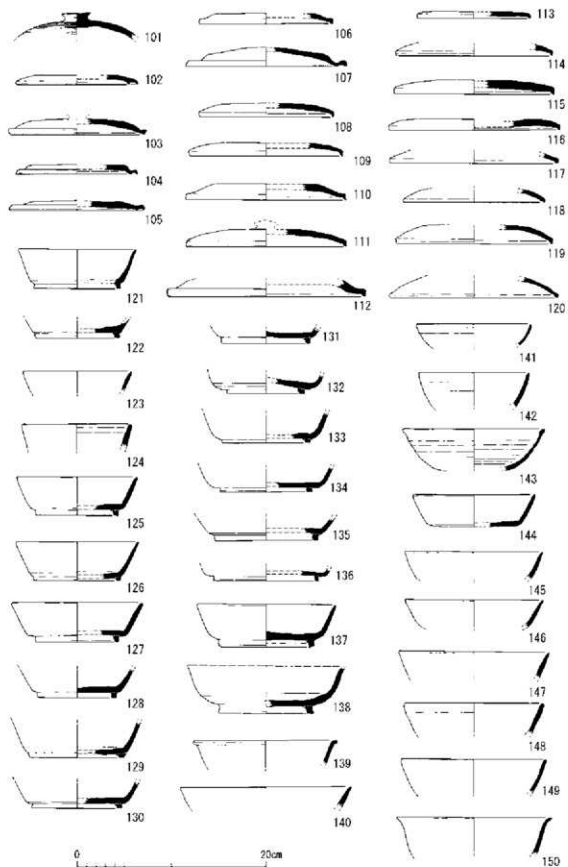
不明土坑 S K 15 トレンチの西辺部で検出した直径約 1.6m、深さ約 0.6m の円形の土坑である。白磁碗の破片などが出土した。

不明土坑 S K 20 トレンチの南西部で検出した。楕円形を呈し、南北検出長さは約 2m、東西幅約 1.4m、深さ約 0.3m を測る。青磁碗の破片などが出土している。

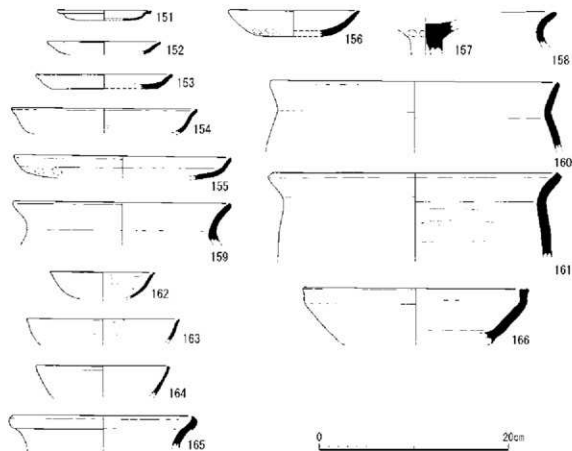
不明土坑 S K 67 トレンチ西半の北辺で検出した。遺構のほとんどが調査区外となる。おそらく方形と思われる、南辺は約 3m・深さ約 0.3m を測る。須恵器杯の破片が出土した。



第50図 4トレンチ出土遺物実測図1(1/4) 遺構面精査時



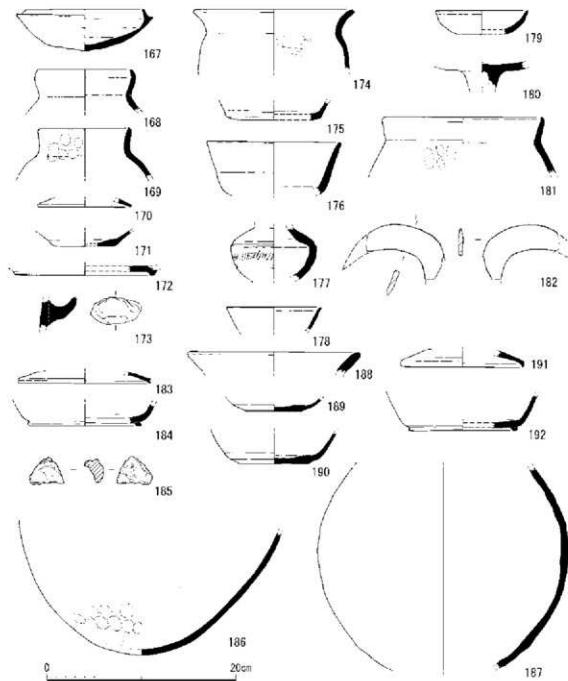
第51図 4 トレンチ出土遺物実測図2 (1/4) 遺構面精査時



第52図 4トレンチ出土遺物実測図3(1/4) 遺構面精査時

③出土遺物

遺構面精査時(第50図65～第52図166) 65～69は須恵器の杯蓋である。陶邑編年ではTK10～43型式並行期の6世紀後半に相当する。70～74は須恵器の杯である。75～84は須恵器の杯身である。陶邑編年のTK43型式に相当する。85は須恵器の皿Aである。86は須恵器の杯Aの底部である。87は土師器の甕の口縁部で、内外面ともに摩滅している。88・89は須恵器の壺の口縁部である。90は須恵器の壺の口縁から頸部にかけての破片である。91は須恵器の壺の口縁部と思われる。92は須恵器碗の口縁部である。93は須恵器の壺の底部と思われる。94は須恵器の碗の底部である。底部は糸切り痕が残る。95は須恵器杯Aである。96は子持ちの特殊器台で小型壺である。底部に貼り付け痕がある。97は小形壺の口縁端部である。98は須恵器の甕の口縁端部である。99は須恵器の壺の口縁端部で、2条の波状文がある。100は唐津の碗の底部で削り出し高台である。また、内面の底にはトチン痕がある。101は須恵器の蓋で、つまみが付く。頂部にはカキメが施されている。102は須恵器の杯蓋の口縁部である。103～120は須恵器の蓋である。121・122は須恵器の杯Bである。123・124は須恵器の杯の口縁部である。125～138は須恵器の杯Bである。139～142は須恵器の杯の口縁部である。143は須恵器の碗である。144～150は須恵器の杯の口縁部である。151～155は土師器の皿である。156は土師器の杯である。外面底部にはユビオサエ痕がある。157は土師器の高杯で杯部と脚部の接合部分の破片である。158・159は土師器の甕の口縁部片である。

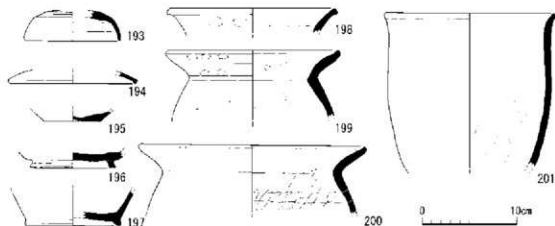


第53図 4 トレンチ出土遺物実測図4 (1/4) 竪穴建物1

160～161は土師器の甕である。162・163は黒色土器の碗の口縁部である。内面には横方向のミガキが施されている。164は陶器の碗の口縁部である。165は陶器の甕の口縁部である。166は陶器の鉢の口縁部である。

竪穴建物SH101(第53図167～169) 167は床面で出土した須恵器の杯身である。編年ではTK43型式、6世紀後半と思われる。168・169は土師器の甕である。168は摩滅しており調整は不明であるが、169は外面にはユビオサエ痕、体部内面にはハケメが残る。

竪穴建物SH102(第53図170) 170は須恵器の蓋である。



第54図 4トレンチ出土遺物実測図5(1/4) 竪穴建物2

竪穴建物SH103(第53図171・172) 171・172は須恵器の杯の底部である。

竪穴建物SH104(第53図173・174) 173は土師器の鍋の把手部分、174は土師器の甕である。

竪穴建物SH105(第53図175～179・181・182) 175は須恵器の杯の底部、176は須恵器の杯、177は須恵器の甕の体部で列点文がある。178は須恵器杯の口縁部、179は土師器の杯の口縁部である。

竪穴建物SH227(第53図180) 180は土師器の高杯の杯部と脚の接合部分である。181は土師器の甕の口縁部である。182は鉄鎌である。

竪穴建物SH172(第53図183・184) 183は須恵器の蓋で、184は須恵器杯Bである。

竪穴建物SH133(第53図185～187) 185は鉄滓と思われる。186は土師器の大形の甕の底部である。摩滅が著しいが、外面にハケメやユビオサエ痕が一部に残る。187は土師器の大形の甕の体部片である。

竪穴建物SH134(第53図188) 188は土師器の甕の口縁部である。

竪穴建物SH225(第53図189・190) 189・190は須恵器の杯Aの底部である。

竪穴建物SH226(第53図191・192) 191は須恵器の蓋の口縁部、192は須恵器杯Bの底部である。

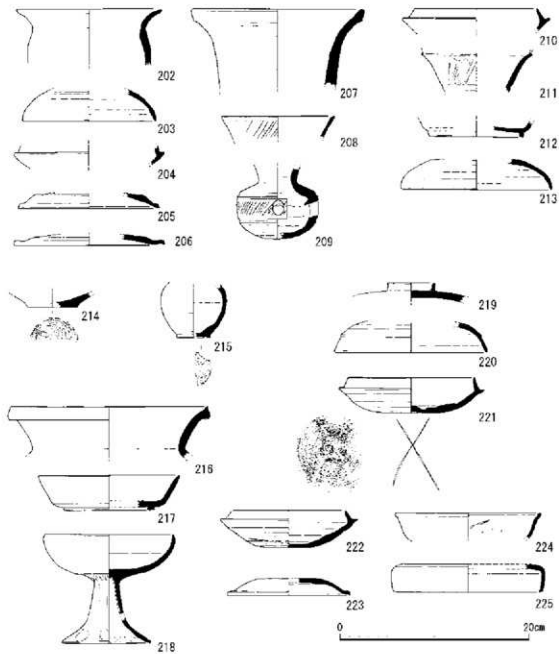
竪穴建物SH227(第54図193～201) 193は須恵器の杯蓋で6世紀後半と思われる。194は須恵器の蓋である。195は須恵器の杯Aの底部、196・197は須恵器の杯Bの底部である。196は貼り付け高台である。198～200土師器の甕で、「く」字状の口縁である。201は土師器の甕と思われる。

掘立柱建物SB13(第55図202) 202は柱穴SP231から出土した土師器の甕の口縁部である。

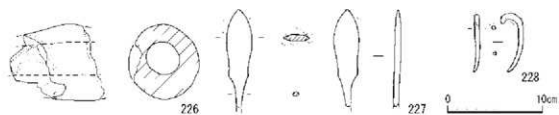
掘立柱建物SB14(第55図203・204) 203は柱穴SP246から出土した須恵器の杯蓋の破片である。204は柱穴SP49から出土した須恵器の杯身の破片である。

掘立柱建物SB15(第55図205～207) 205・206は柱穴SP11から出土した須恵器の蓋である。207は柱穴SP265から出土した須恵器の甕の口縁部である。外面にはカキメが施されている。

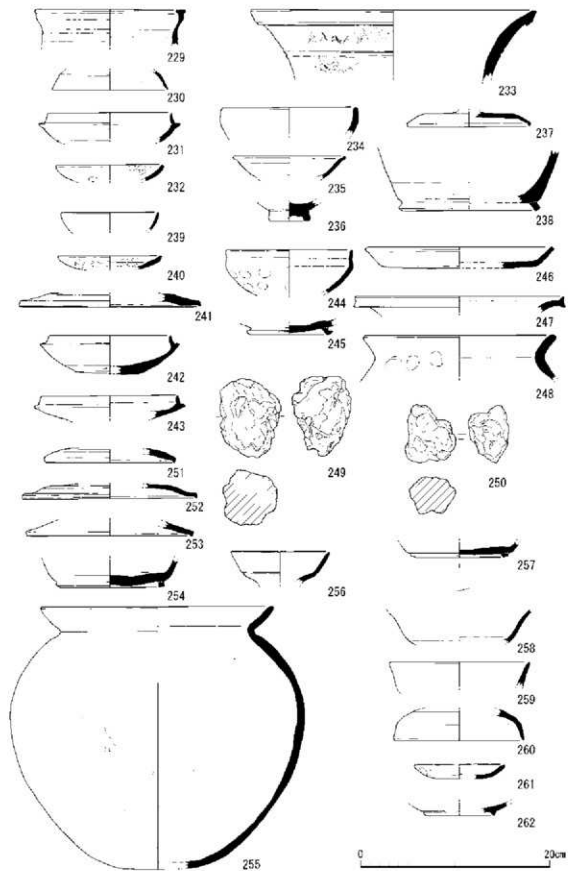
掘立柱建物SB17(第55図208～211) 208は柱穴SP63から出土した須恵器の甕の口縁部片である。外面には斜行するヘラ描きがある。209は柱穴SP63から出土した須恵器の甕の体部である。



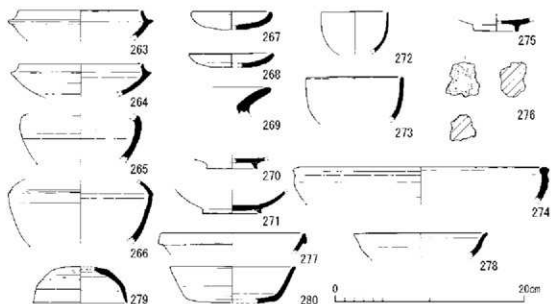
第55図 4トレンチ出土遺物実測図6 (1/4) 挿立柱建物・その他の柱穴



第56図 4トレンチ出土遺物実測図7 (1/4) 鉄関連



第57図 4トレンチ出土遺物実測図8(1/4) 土坑



第58図 4トレンチ出土遺物実測図9 (1/4) 土坑ほか

円形のスカシがあり、列点文が施されている。210は柱穴S P 266から出土した須恵器の杯身の破片である。211は柱穴S P 63から出土した須恵器の壺の口縁部片である。

掘立柱建物S B 18(第55図212) 212は柱穴S P 32から出土した須恵器杯Bの底部である。

掘立柱建物S B 19(第55図213) 213は柱穴S P 137から出土した須恵器の蓋である。

ビット群(第55図214～第56図228) 214はビットS P 25から須恵器の椀で底部は糸切りである。215はビットS P 93から出土した小形壺の体部から底部で、底部は糸切りである。216はビットS P 18から出土した須恵器の壺の口縁部である。217はビットS P 95から出土した須恵器杯Bである。218はビットS P 183から出土した土師器の高杯である。219はビットS P 293から出土した須恵器の蓋で、環状のつまみが付く。220はビットS P 326から出土した須恵器の杯蓋の口縁部である。221はビットS P 331から出土した須恵器の杯身で、6世紀後半のTK43型式に相当すると思われる。外面底部には「×」のヘラ記号がある。222はビットS P 336から出土した須恵器の杯身で、6世紀後半のTK43型式に相当すると思われる。223はビットS P 418から出土した須恵器の蓋である。224はビットS P 419から出土した土師器の杯である。225はビットS P 426から出土した須恵器の短頸壺の蓋の口縁部と思われる。226～228は鉄関連の遺物である。226はビットS P 113から出土した輪の羽口である。227はビットS P 86から出土した鉄族である。228はビットS P 321から出土した鉄製品であるが、用途は不明である。

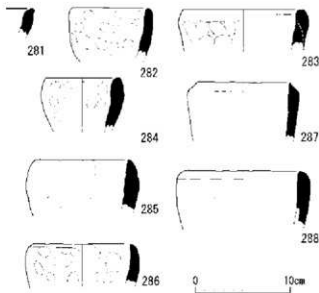
土坑S K 16(第57図229) 229は陶器の鍋の口縁部である。

土坑S K 19(第57図230～233) 230は須恵器の蓋の口縁部、231は須恵器の杯身、232は土師器の皿、233は須恵器の壺の口縁部で、外面には2条の波状文がある。

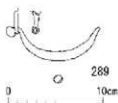
土坑S K 27(第57図234) 234は土師器の杯の口縁部である。

土坑S K 28(第57図235・236) 235は施釉陶器の口縁部で、236は施釉陶器の高台部分である。

土坑S K 47(第57図237・238) 237は須恵器の蓋、238は須恵器の壺の高台部分と思われる。



第59図 4 トレンチ出土遺物実測図10(1/4) 製塩土器



第60図 4 トレンチ出土遺物実測図11(1/4) 鉄製品

土坑 S K 126 (第57図239) 239は土師器の杯の口縁部である。

土坑 S K 178 (第57図240) 240は土師器の皿である。

土坑 S K 180 (第57図241~250) 241は須恵器の蓋、242・243は須恵器の杯身で、6世紀後半のTK43型式に相当すると思われる。244は土師器の杯である。245は須恵器壺の高台部分と思われる。246は須恵器の皿A、247は陶器の甕の口縁部で、248は土師器の甕の口縁部である。249・250は鉄滓である。

土坑 S K 208 (第57図251~254) 251~253は須恵器の蓋、254は須恵器杯B

の底部である。255は土師器の甕である。摩滅しているが外面には不定方向のハケメが残る。256は須恵器の甕の口縁部と思われる。

土坑 S K 214 (第57図257~259) 257は須恵器の杯Bで、底部にヘラ記号がある。258・259は須恵器の杯の口縁部である。

土坑 S K 329 (第57図260) 260は須恵器の蓋である。

土坑 S K 362 (第57図261) 261は土師器の皿である。

土坑 S K 345 (第57図) 262は無軸陶器の椀の底部である。

不明土坑 S K 1 (第58図263) 263は須恵器の杯身である。

不明土坑 S K 2 (第58図264~271) 264は須恵器の杯身である。265・266は須恵器の壺の体部である。267・268は土師器の皿、269は土師器の甕の口縁部である。270は瓦器椀の高台部分で、内面底部に暗文がある。271は瓦器椀の底部である。

不明土坑 S K 15 (第58図272~276) 272は白磁椀の口縁部である。273は陶器の椀の口縁部である。274は陶器の鉢の口縁部である。275は施釉陶器の高台部分である。276は鉄滓である。

不明土坑 S K 20 (第58図277) 277は青磁椀の口縁部である。278は須恵器の椀の口縁部である。

不明土坑 S X 118 (第58図279・280) 279は須恵器の蓋で、6世紀後半のTK43型式に相当すると思われる。280は須恵器の杯である。

製塩土器 (第59図281~288) 281は竪穴建物 S H 227から出土した。282は竪穴建物 S H 105から出土した。283は土坑 S K 180から出土した。284~288は遺構精査時に出土した。

鉄製品 (第60図289) 289は遺構精査時に出土した。何に使用していたかは不明である。

(村田和弘)

(5) 5 トレンチ

① 調査の概要

3 トレンチの西約300mに位置する。I-R区の南東部とI-N区の一部にかけて設定した調査区である(第2・61図)。

基本層序は耕作土、床土、整地土(無遺物層)、淡黄褐色粘質土(遺構検出面)である。

東半部で古墳時代後期の竪穴建物1棟や土坑などの遺構を検出したが、4 トレンチの遺構密度に比べると希薄な状況である(第61図)。また、遺構精査時に古墳時代の耳環が1点出土した。

② 検出遺構

竪穴建物 SH01 (第62図) 調査区の東辺、やや南寄りで見出した方形の竪穴建物である。建物の東半分は調査区外となる。南北辺が約4.9m、北辺の検出した長さ約1.8m、南辺の検出長は約2.2mを測る。深さは後世の削平によ

り、0.05m前後しか残っていなかった。建物の主軸は北から西に20°振る。建物内で柱穴2基と土坑1基を検出した。2基の柱穴は屋根を支える主柱穴と考えられる。北辺には焼土があり、竈の痕跡と思われるがほとんどが調査区外のため詳細は不明である。建物内からは須恵器杯や土師器高杯などが出土した。建物の時期は古墳時代後期と考えられる。

溝 SD04 現代の水田の畔に沿って検出した南北方向の溝である。最大幅は約0.2m、検出した長さは約20m、最も深いところで約0.1mを測る。北から西に25°振る。土師器皿などが出土したが、近現代の耕作に伴う溝と思われる。

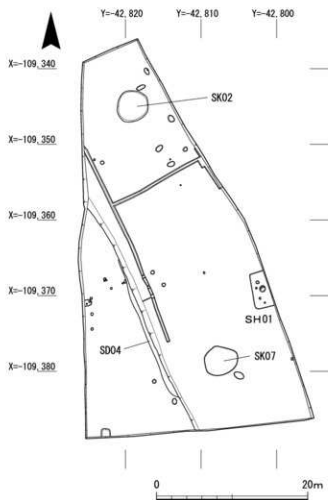
土坑 SK02 調査区の北側で検出した円形に近い土坑である。東西約4.1m、南北約4m、深さは0.2mを測る。土坑内から須恵器杯が出土した。

土坑 SK07 調査区の南側で検出した円形の土坑である。東西約4.4m、南北約3.8m、深さは0.3mを測る。土坑内から須恵器杯や土師器高杯などが出土した。

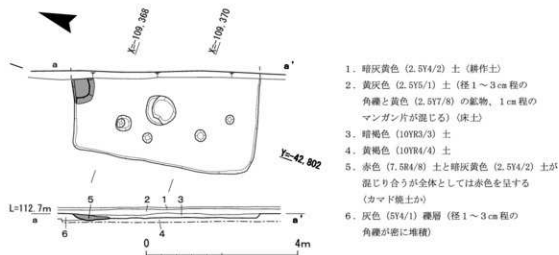
③ 出土遺物

遺物は少量であるが遺構精査時や遺構から出土した(第63図290～307)。

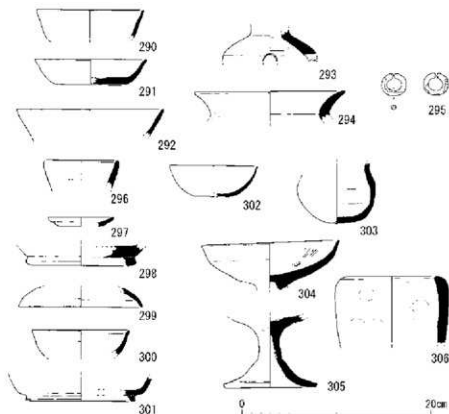
遺構面精査時(第63図290～295) 290～292は須恵器杯である。293は須恵器甕の肩部片である。



第61図 5 トレンチ遺構配置図(1/500)



第62図 5 トレンチ竖穴建物 S H01実測図(1/100)



第63図 5 トレンチ出土遺物実測図(1/4) 遺構面精査時・遺構

294は土師器甕の口縁部である。295は金銅製の耳環である。金メッキがはがれており、中空であることが観察できた。直径は2.5cmを測る。

土坑 S K 02 (第63図296) 296は、須恵器杯の口縁部片である。

溝 S D 04 (第63図297・298) 297は土師器の小皿である。298は須恵器壺の高台部分である。

土坑 S K 07 (第63図299~305) 299は須恵器の杯蓋の口縁部である。300は須恵器杯の口縁部、301は須恵器杯で底部に高台が付く。302は土師器の杯であるが、摩滅が著しく調整は不明である。

303は土師器の小型丸底壺の体部で、外面に縦方向のハケメが残る。304は土師器高杯の杯部で、内面にミガキ調整が施されている。305は土師器高杯の脚部である。摩滅が著しく調整は不明であるが、脚柱には8面の面取りが確認できる。

竪穴建物 SH01 (第63図306) 306は、掘削中に出土した製塩土器である。内外面ともにユビオサエ痕が残る。(村田和弘)

3)平成28年度の調査

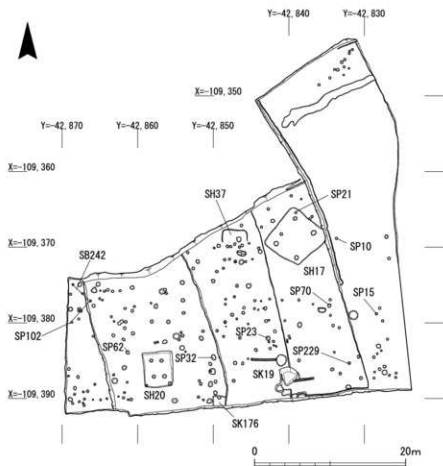
(1)6トレンチ

①調査の概要

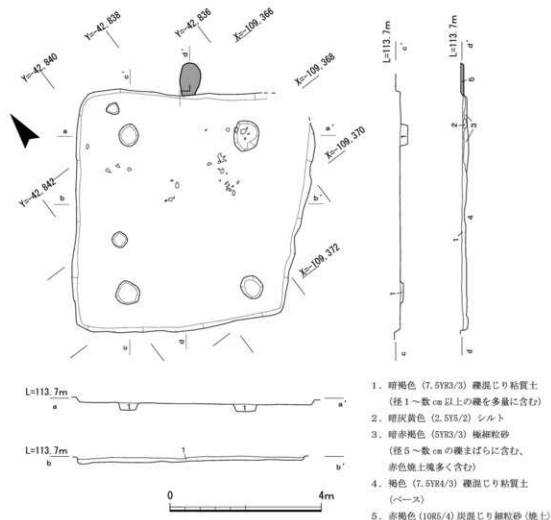
I-R区に位置する5トレンチの西に隣接し、4トレンチの北側に位置する。形状は不定形で、西辺が約18m、東辺は北で湾曲するが約49m、南辺約46mを測る。

基本的な層序は、水田耕土、水田床土、暗黄褐色礫混じり極細砂、褐色礫混じり粘質土である。遺構面より上層で遺物包含層の存在を確認できない。遺構面は褐色礫混じり粘質土面で、竪穴建物などの各遺構の埋土は、主に暗褐色礫混じり粘質土である。

遺構は、竪穴建物4基、掘立柱建物1棟、焼土と炭化物を多く含む土坑のほか、多数の柱穴等



第64図 6トレンチ遺構配置図(1/500)



第65図 6 トレンチ竖穴建物SH17実測図(1/100)

を検出した。時期は、竖穴建物が古墳時代中期～後期、その他の遺構が古墳時代～鎌倉時代前半である。

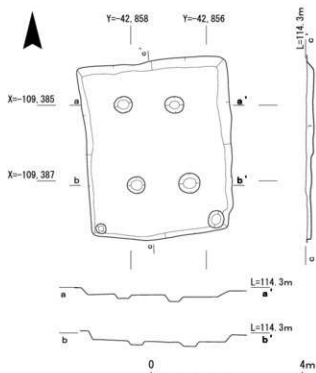
②検出遺構

竖穴建物SH17(第65図) 調査区の東部北寄りで検出した。平面形は、ほぼ正方形である。長辺6.4m、短辺5.8m、深さは約0.2mである。主軸は北から約50°東に振る。埋土は暗褐色礫混じり粘質土で、主柱穴は4基検出した。柱穴の深さは約0.15～0.2mである。北東側の一辺の中央に、焼土・炭化物の散布がみられ、粘板岩の板石1点が出土した。竈が存在したと推測される。また、土師器鍋の破片の集積がみられた。遺物は、須恵器杯蓋(TK23型式併行期)、布留式甕の口縁部、土師器壺などが出土した。これらの土器から、建物の時期は古墳時代中期後半とみられる。

竖穴建物SH20(第66図) 調査区の西部南寄りで検出した。平面形は長方形で、長辺4.6m、短辺3.9mを測る。深さは約0.25mである。主軸は北から2°西に振る。埋土は暗褐色礫混じり粘質土である。建物に伴う主柱穴は4基あり、深さは0.15～0.2mである。柱痕跡及び竈や周壁溝などは確認できなかった。遺物は、検出面及び埋土から須恵器杯身・杯蓋、高杯脚部、土師器甕・甌な

どが出土した。また、床面から土師器甕、甌などの破片が出土した。須恵器杯はMT15～TK10型式とみられ、おおむね古墳時代後期である。

竪穴建物 S H37 調査区中央部北辺寄りで検出した。平面形は方形とみられる。東西4.6m、南北4.2m以上を測る。深さは約0.2mを測り、南に向かって浅くなり消滅している。埋土は、焼土が混じった暗赤褐色礫混じり粘質土である。建物そのものは部分的な残りで柱穴などは確認できなかった。遺物は、土師器甕口縁部や把手、須恵器杯Bなどが出土した。平安時代のもが多い。古墳時代住居の削平が進んだ結果であろう。



1. 暗褐色(10YR3/3)極細粒砂(径10cm以下の礫を多く含む)

第66図 6トレンチ竪穴建物 S H20実測図(1/100)

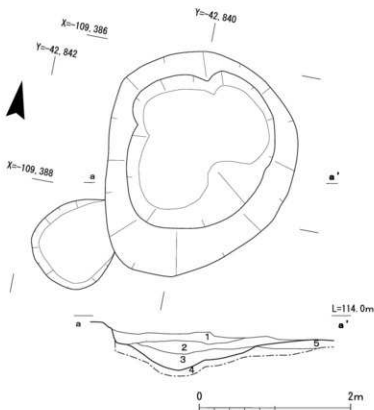
土坑 S K176 現代の水田棚の段差

により東側が大きく削平されている。東西3.8m以上、南北1.9m以上を測り、深さはおよそ0.2mである。埋土は暗褐色極細粒砂である。遺物は、埋土から飛鳥時代～平安時代までの須恵器杯身・杯蓋が多く出土した。また、古墳時代後期の須恵器甕の体部片や土師器甕の破片なども少量出土した。時期は、底面からTK43型式並行期の須恵器杯身や土師器甕片などが出土したことから、古墳時代後期である。

土坑 S K19 (第67図) トレンチ中央の南辺部で検出した楕円形の土坑である。南北長は約3m、東西長約2.5m、深さは約0.4mを測る。旧水田地の畔の段差にあたり、東側が0.2m前後低くなっている。土坑の埋土は、第2層の暗褐色極細粒砂(礫と感化物を含む)と第3層の暗褐色極細粒砂である。埋土からは古墳時代の須恵器杯や土師器の甕などが出土した。

掘立柱建物跡 S B242 (第68図) 桁行、梁行ともに2間分を検出した。建物の主軸は北から40°東に振る。柱穴の平面形は円形で、直径0.2～0.25m、深さ0.1～0.15mを測る。埋土は暗褐色極細粒または、褐色粘質細砂である。柱間寸法は東西2.7m、2.85m、南北2.7m、2.96mである。柱穴内から遺物は出土していないが、周辺から出土した遺物などから、平安時代後期～鎌倉時代初めにかけての時期の可能性が高い。

柱穴・ピット群 柱穴・ピットは約240基検出した。直径0.25～0.45m、深さ数～0.3mのものまでである。70基ほどで土器が出土した。断面形で柱痕跡を確認できたものはわずかに18基である。暗褐色砂礫混じり極細粒砂を主な埋土とする。遺物は、瓦器椀、古式土師器甕、土師器皿・把手、須恵器杯・蓋などが出土した。これらは古墳時代後期、平安時代、鎌倉時代初頭の遺物である。



1. 暗褐色 (10YR3/4) 極細粒砂 (径3~10cmの礫、遺物・炭化物含む)
2. 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂 (径2~3cmの礫、炭化物含む)
3. 暗褐色 (10YR3/3) 極細粒砂
4. 暗褐色 (10YR3/4) 極細粒砂 (径2~3cmの礫を極少量含む) (ベース)
5. 暗褐色 (10YR3/4) 極細粒砂 (径2~3cmの礫多い・径5~8cmの礫含む)

第67図 6トレンチ土坑S K 19実測図(1/50)

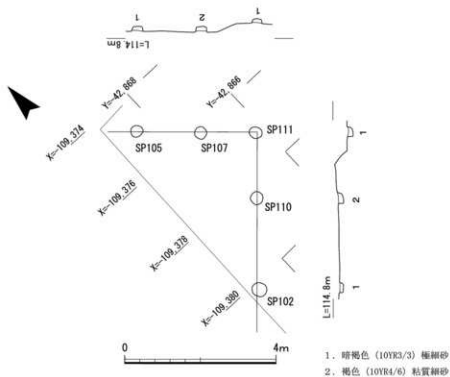
のツマミを有する。325~327は須恵器杯、328は須恵器杯A、329~334は高台をもつ須恵器杯Bである。335は須恵器皿Aである。体部下半に回転ヘラケズリによる稜が認められる。336は土師器杯である。337・338は土師器甕の口縁部片である。339は土師器鍋である。口縁端部直下に鈎をめぐらせ、体部外面に縦方向の粗いハケメが施される。

竅穴建物SH17 (第70図340~352) 古墳時代中期~後期にかけての須恵器と土師器がある。340~343は須恵器杯蓋である。天井部と口縁部との境に段がある。340の段は特に顕著である。344と345は須恵器杯身で、内傾する口縁部が長く、端部を丸くおさめる。346は土師器椀である。内外面ともナデとユビオサエによる調整がみられる。347は須恵器高杯の脚部である。348は須恵器甕の口縁部である。大きく外反し端部はやや上下を拡張させている。349は土師器甕の口縁部である。中間部は丸みを帯び、端部は丸くおさめる。350は土師器の甕の把手の断片である。351は土師器甕である。体部から緩やかに外反し、口縁部はやや肥厚し端部は丸くおさめる。内外面ハケ調整される。352は土師器鉢である。内外面ハケ調整される。端部は狭い面をもつ。

竅穴建物SH20 (第70図353) 353は布留式甕である。口縁端部が肥厚する。体部外面はタテハケのちヨコハケの調整が入る。

③出土遺物

遺構面精査時 (第69図307~339) 遺構に伴わないが、本トレンチの遺構群の成り立ちを考える際に重要である。307・308は須恵器杯身、杯蓋である。308はその形態から古墳時代後期(陶邑T K43型式並行期)のものである。309・310は短脚1段スカシの須恵器高杯脚部である。311は穿孔をもつ甕の体部片である。312・313は須恵器壺の口縁部である。314は土師器甕で、端部は丸くおさめる。315は弥生土器壺の口縁部である。316~324は須恵器蓋である。8世紀中頃~後半の時期であろう。天井部をヘラケズリ、それ以外の内外面をナデ調整する。324は低い環状



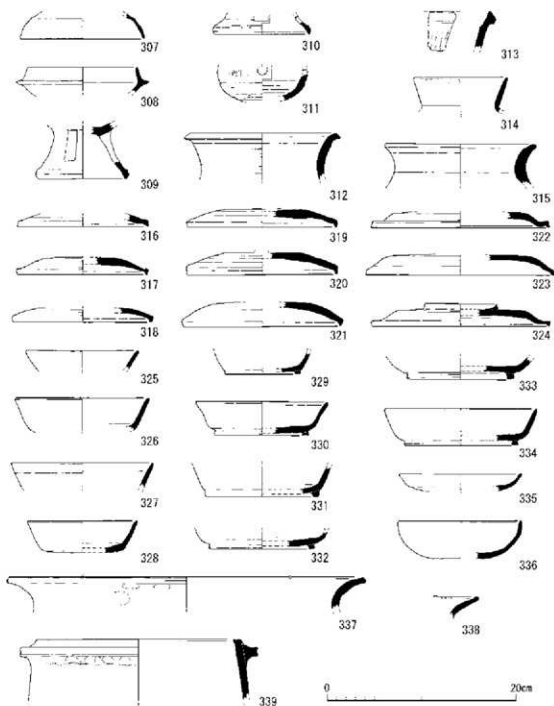
第68図 6トレンチ掘立柱建物S B 242実測図(1/100)

竪穴建物 S H 37 (第70図354～357) 354は回転ナデ調整の須恵器杯Bである。355は土師器甕である。体部内面にケズリを施す。356は須恵器甕の口縁端部片である。端部には沈線がめぐる。357は土師器鍋である。丸底で体部は滑らかに立ち上がり、口縁部は大きく外反する。内外面ハケメ調整の痕跡が残る。

土坑 S K 176 (第70図358～361) 358は口径12cm、器高4cmを測る杯蓋である。回転ヘラケズリを施した天井部から口縁部との境に明瞭な段差を有し、端部は面をもつ。359・360は土師器甕である。359は球形に近い体部から直立気味に延びる口縁部をもち、体部内面はヘラケズリ調整する。360は口縁端部が肥厚する。361は土師器甕の把手である。

土坑 S K 19 (第71図362～382) 362は口径13.1cm、最大径16cmを測り、口縁部が内方に延びる須恵器杯身である。陶邑編年 T K 209 型式に比定される。363・364は須恵器蓋である。365～380は須恵器杯である。366～368・370・372・376は杯 A、377～379は高台付きの杯 B である。380は高台付きの須恵器皿 B である。381・382は土師器甕である。

柱穴・ビット (第71図383～393) 383はビット S P 15より出土した貼り付け高台を有する須恵器壺底部である。384～386はビット S P 23より出土した。384は口径14.9cm、器高2.2cmを測る土師器皿である。385・386は須恵器杯 A である。回転ナデによる調整である。387はビット S P 16出土の須恵器蓋である。口径10.8cm、器高5cmで腰高の蓋である。ツマミをもたない天井部は回転ヘラケズリ、その他の面は回転ナデによる調整である。388はビット S P 32から出土した須恵器蓋のツマミである。389はビット S P 62から出土した、内傾する口縁部を有する古墳時代須恵器杯身である。390はビット S P 102から出土した土師器皿である。内外面ナデ及びユビオサ

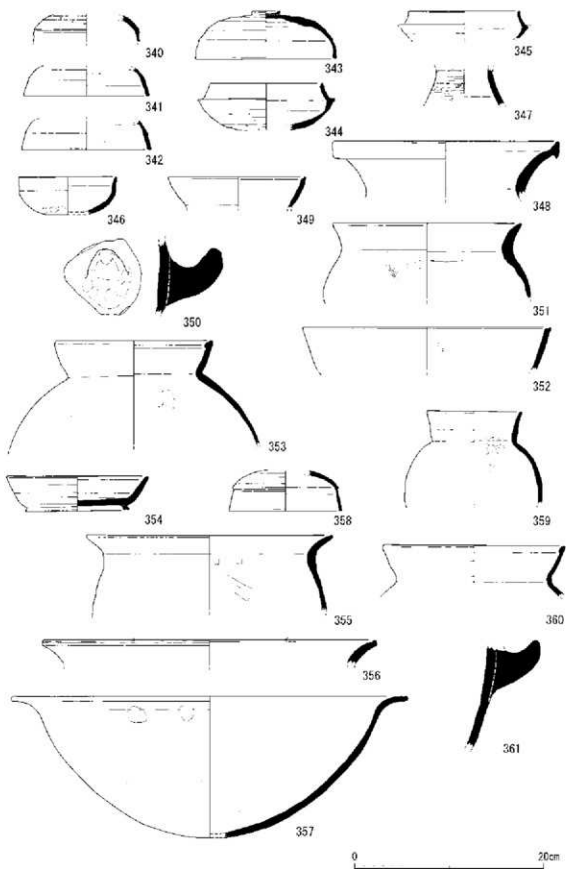


第69図 6 トレンチ出土遺物実測図1 (1/4) 遺構面精査時

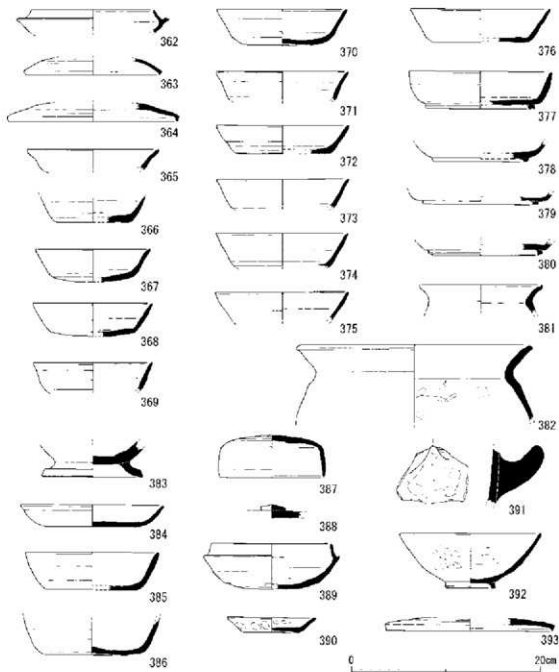
エにより成形している。391はビットS P21から出土した土師器甕または鍋の把手である。392はビットS P70の柱痕内から出土した瓦器椀である。口縁端部は丸くおさめ、内外面に横方向の細かなヘラミガキを施す。しっかりとした高台を貼り付ける。

393はビットS P229から出土した須恵器蓋である。内外面とも回転ナデにより成形する。

(黒坪一樹)



第70図 6トレンチ出土遺物実測図2(1/4) 竪穴建物・土坑



第71図 6トレンチ出土遺物実測図3(1/4) 土坑・柱穴

(2) 7 トレンチ

① 調査の概要

I-N区に位置し、6 トレンチから東へ100mに設定した調査区である(第72図)。南北に長い長方形で、北辺が円形にふくらむ形である。南北の長さは約52m、東西は約28mを測る。基本層序は、耕作土・床土・灰褐色礫混じり粗砂・暗灰褐色シルトとなる。

遺物包含層は残存せず、河川の氾濫堆積物である粗砂・礫の堆積や、黒色シルトの堆積した沼地状のくぼみなどを確認した。

南半部には比較的安定した暗灰褐色シルトの面が拡がり、ここで掘立柱建物SB1を検出した。さらに、SB1の西側で直径0.3～0.5mを測る柱穴群を検出した。

また、遺構面の精査中に出土した蹄脚付円面硯の破片1点が出土した。

② 検出遺構

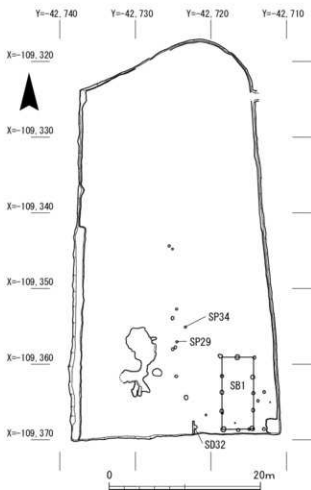
掘立柱建物SB1(第73図) 調査区の南東隅で検出した。桁行4間(9.4m)、梁行2間(4.2m)の南北棟の建物である。柱穴の平面形は隅丸方形に近いものもあるが、基本は円形である。

直径0.4～0.6m、深さは0.1～0.15mである。柱間寸法は、東西が2～2.1m、南北が2.4mと2.1mを測る。後世の削平が著しく、柱痕跡はいずれの柱穴においても確認できなかった。

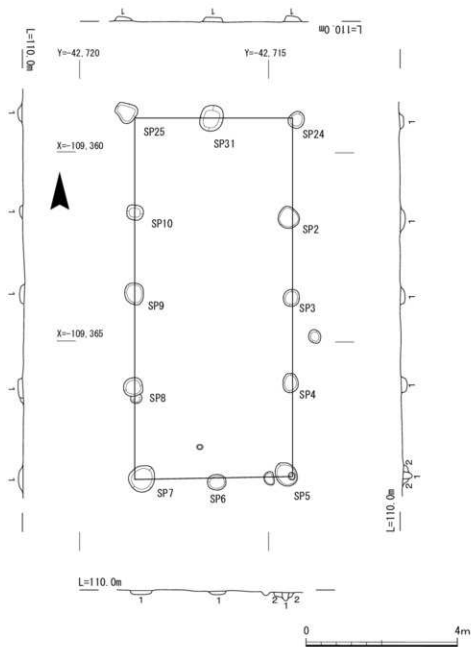
主軸は正方位である。柱穴から出土した遺物がなく、建物の時期は不明であるが、周辺から出土した遺物などから平安時代後期であろう。

溝SD32 掘立柱建物SB1の西約4mのところ、南北方向に掘られた溝である。検出長2.7m、幅0.3m、深さ0.15mを測る。出土遺物はないが、SB1に関係する遺構と推察される。

柱穴・ピット群 掘立柱建物SB1の周辺で直径0.2～0.5mを測るピットを10基前後検出した。深さは数～0.15mを測る。直径0.5m大のピットが2基あり、そのうちの1基から緑釉陶器の小破片が出土したが、図示できなかった。



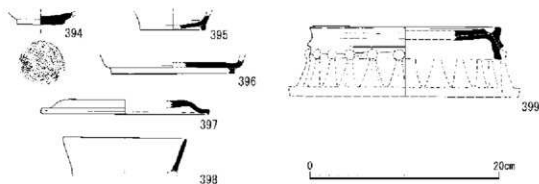
第72図 7 トレンチ遺構配置図(1/500)



- (SP2)
1. 黒褐色(10YR3/2)粘質土(径1~3cmの礫を多量に含む)
- (SP3)
1. 暗灰黄色(2.5YR4/2)粘質土(径1~3cmの礫を多量に含む)
- (SP4)
1. 褐色(10YR4/6)粘質土
- (SP5)
1. 黒褐色(10YR3/2)極細砂(径0.2~1cmの礫を微量に含む)
2. 暗褐色(10YR3/3)粗砂(径0.3~3cmの礫を少量に含む)
- (SP6)
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
- (SP7)
1. 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土(径3~4cmの礫を少量に含む)

- (SP8)
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土(径1~4cmの礫を含む)
- (SP9)
1. 灰黄褐色(10YR5/2)粗砂(径1~5cmの礫を少量含む)
- (SP10)
1. にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土(径1~4cmの礫を含む)
- (SP24)
1. オリーブ褐色(2.5YR4/3)細砂(径1~5cmの礫を少量に含む)
- (SP25)
1. オリーブ褐色(2.5YR4/3)細砂(径1~5cmの礫を多量に含む)
- (SP31)
1. 暗灰黄色(2.5YR4/2)粘質土(径1~3cmの礫を多量に含む)

第73図 7トレンチ掘立柱建物SB1実測図(1/100)



第74図 7トレンチ出土遺物実測図(1/4)

③出土遺物(第74図)

全体に掘立柱建物の周辺以外は、洪水砂礫に覆われ、遺物の出土は少ない。また、精査中に出土したものが多く、遺構から出土したものは397と398の2点のみである。

394は底部糸切りの土師器皿である。底径4.8cmを測る。395は須恵器杯あるいは壺の底部片である。高台は底部の最も外周側に貼り付けられる。396は須恵器皿または杯Bの底部である。

397はピットS P34から出土した須恵器蓋である。内外面に回転ナデ調整を施す。398はピットS P29より出土した須恵器杯の体部片である。

(黒坪一樹)

399は蹄脚付円面硯Aの破片である。平坦な硯面の周囲に「U」字状の溝をめぐらせて海部とする形式(C種^(注5))で、硯部に動物の蹄を象った脚部と脚台部をもつが、本例は脚台部下半を欠損し、逆三角形のスカシ孔もみられない。最大径10.4cm、残存高1.5cm、硯面の直径10cmを測る。硯面はよく研磨されている。中国の唐で完成し、それを模したものとされる。7世紀末～9世紀まで生産されたもので、本例の時期を特定するのは難しい。亀岡市蔵内垣遺跡からも同種の硯が出土しているが、ほかの形式の硯と比較しても出土点数は極めて少なく、官衙遺構や寺院に出土が集中している点は重要である。トレンチ南半部精査時に出土した。

(内藤 京)

(3) 8トレンチ

①調査の概要

8トレンチは、I-R・Q区の境界にあり、6トレンチの北、約80mの地点に位置する(第2・75図)。調査前は東西に並ぶ2つの耕作地で、西側が一段高くなっている。地表面の標高は西側が113.2m、東側が113.6mである。西側の調査区は南北19m、東西15mのやや台形を呈した長方形である。また、東側の調査区は南北に長い五角形状を呈し、南北30m、東西14mである。

基本的な層序は、耕作土の下で0.02~0.06m大の礫を少量含む粗砂がそれぞれ厚さ0.1~0.2mで堆積していた。その下に粘質層が厚いところで約0.2m、薄いところで約0.1m堆積していた。遺物はなく堆積の時期は不明であるが、これらの層を除去して溝SD3を検出していることから、それ以降の堆積である。基盤層は1~5cm大の礫を多量に含む暗灰黄色粘土層である。

遺構としては8~9世紀頃の溝SD3、自然流路NR14、地形の落ち込みであるSX15などを検出した。

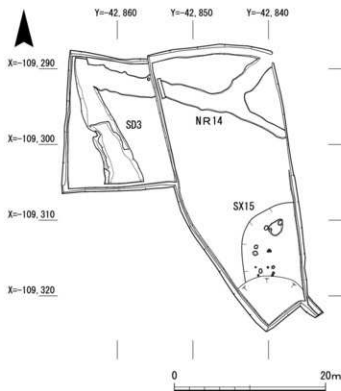
②検出遺構

溝SD3(第76図) トレンチ西部で検出した南北方向の溝である。検出長は約18mで、幅は南側が5.5m、北側が1.5mで、北側が狭くなっている。深さは深いところで0.4m程度である。溝の埋土は褐色粘土やオリーブ褐色粗砂が堆積する(第76図1層)。埋土から、8~9世紀頃の須恵器の杯や壺などが出土した。

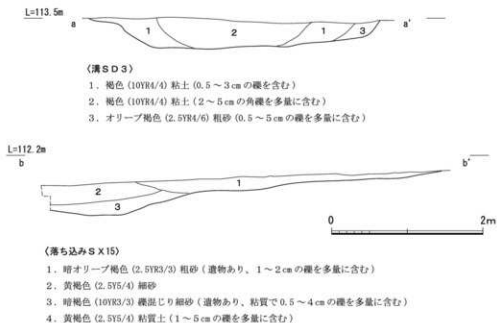
落ち込みSX15(第76図)

トレンチ南東部では、上層の砂礫層の下層に南北10m、東西4m、深さ約0.15mにわたり暗オリーブ灰色粗砂が拡がる。さらに、それに重複して南北10m、東西1.7m、深さ約0.25mの暗褐色礫混じり細砂が堆積する(第76図3層)。上層の砂礫層が形成された際に堆積した層と推定される。東は調査区外となる。これら2つの土層から、須恵器杯・蓋や天目茶碗などが出土している。また、周辺からは白磁碗や緑釉陶器も出土した。

自然流路NR14 調査区を東西方向に流れる流路である。東西方向の長さは約27mを測



第75図 8トレンチ遺構配置図(1/500)



第76図 溝 S D 3・落ち込み S X 15土層断面図(1/50)

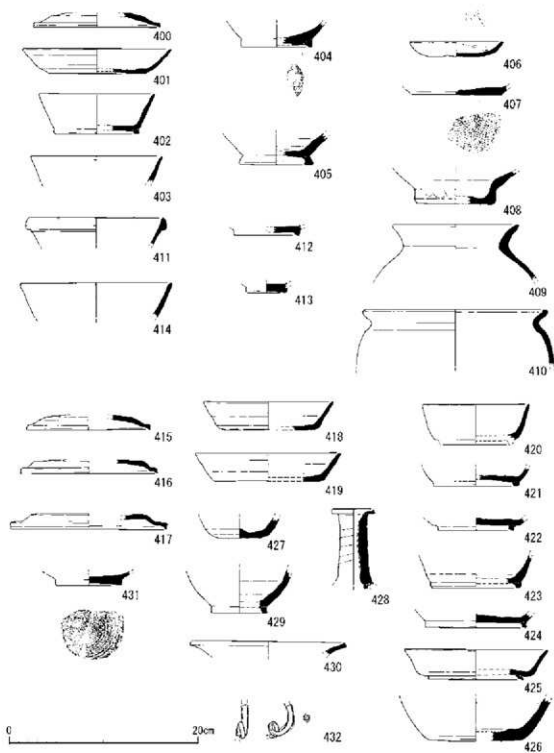
る。東側は「Y」字状に分かれている。その形状と、砂礫を多量に含む堆積物から自然流路と考えられる。出土遺物がなく時期は不明であるが、溝 S D 3 よりも上層の堆積であることから、8～9世紀頃以降の流路と考えられる。

③出土遺物

遺構精査時(第77図400～403・406～410・412・414) 400は須恵器蓋の口縁部である。401は須恵器の杯である。402は須恵器杯Bである。403は須恵器杯の口縁部である。404は須恵器碗の底部で、糸切りの後に高台が付けられている。406は土師器小皿である。407は土師器皿の底部で、糸切り痕がある。408は土師器壺の底部である。409・410は土師器甕の口縁部である。412は無軸陶器の高台部分である。414は青磁碗の口縁部である。

溝 S D 3(第77図415～430・432) 415～417は須恵器蓋の口縁部である。418・419は須恵器皿である。420～425は須恵器の杯Bである。423は須恵器杯である。高台は張り付け高台になっている。高台を貼り付けている位置が底部から口縁への立ち上がりの屈曲部にあるので9世紀頃のものと考えられる。426は細片であり特定は難しいが、須恵器壺か鉢の底部である。427は須恵器の皿の底部である。428は須恵器壺の口縁部である。自然軸がかかっている。口縁部から頸部しか残存していないが、通常の壺と違い口縁部も頸部も口径が小さくなっている。すべて9世紀頃のものである。429は須恵器壺の底部である。430は陶質の甕の口縁部片である。432は円状に曲げられた鉄製品であるが、用途不明である。

落ち込み S X 15(第77図404・405・411・413・431) 様々な時代の遺物が出土した。405は須恵器壺である。底部が貼り付け高台で、8世紀頃のものである。404は東海系の須恵器碗である。411は白磁碗である。口縁が玉縁状になっており、11世紀末～12世紀頃のものである。413は16世紀頃の天目茶碗の底部である。431は10～11世紀頃の黒色土器である。(武本典子)



第77図 Sトレンチ出土遺物実測図(1/4) 遺構面精査時・遺構

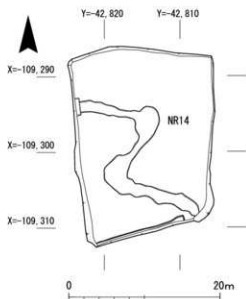
(4) 9 トレンチ

① 調査の概要

9 トレンチは、I-R 区と I-Q 区の境界上、8 トレンチの約 10m 東に位置する(第 78 図)。南北 25m、東西 19m のややいびつな長方形である。トレンチを横断するように「Z」字状に蛇行する自然流路 NR14 がある。これは位置と方向からみて、8 トレンチの自然流路 NR14 と同じものと判断している。8 トレンチの NR14 と同様に、堆積物は礫を多量に含む。

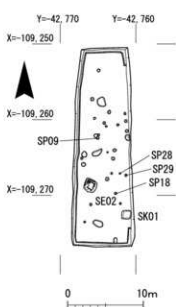
このトレンチでは、遺構や遺物は確認できなかった。

8 トレンチと同様に遺物を含まない礫層が厚さ 0.4m 堆積しており、その礫層が西から東に傾斜して堆積していることから、西側から礫の流入があったと考えられる。

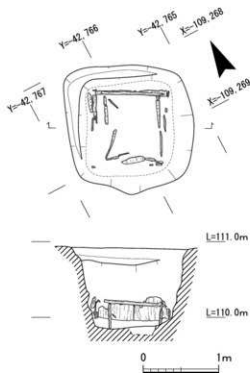


第 78 図 9 トレンチ平面図(1/500)

(武本典子)



第79図 10トレンチ遺構配置図(1/500)



第80図 10トレンチ井戸SE2実測図(1/50)

0.1mである。土師器の細片がごく少量出土した。

ビットSP28 調査区中央で検出した円形ビットである。規模は直径約0.1m、深さ約0.15mである。土師器の細片がごく少量出土した。

(5)10トレンチ

①調査の概要

10トレンチはA-1トレンチの北東側に約80m離れた位置に設定した東西8m、南北約25mの調査区である(第79図)。

基本的な層序は上層より現代の水田耕作土、床土、褐色細砂、黒褐色粗砂、暗灰黄細砂、黒褐色粗砂の順で堆積しており、黒褐色粘質土の遺構面となる。

遺構面は、耕作土と床土を除去後約0.4m掘り下げて黒褐色粘質土の上面で井戸SE02をはじめ、ビットや土坑を検出した。

②検出遺構

土坑SK01 調査区の南東隅で検出した土坑である。規模は一辺約1.2m、深さ約0.3mである。平面形は方形を呈する。井戸枠などを検出していないが、常に水が湧き出していたことから、素掘り井戸の可能性が考えられる。SK01の埋土からは、奈良～平安時代の須恵器や土師器片が出土した。

井戸SE02(第80図) 調査区の南西部で検出された井戸である。規模は一辺1.6～1.7m、深さ約1.0mである。方形の掘形を持つ。井戸の内部には、方形縦板組横棧止めの井戸枠が組まれていた。井戸枠は、井戸の底部に残りの良い部分で高さ約0.3m分の縦板を残す。縦板を支える横棧木や隅柱は、加工がされていない自然木を利用している。出土遺物は、須恵器や土師器のほかに井戸の底より桃の種など自然遺物がごく少量出土している。井戸の埋土の3層目と4層目の境目付近より軟質の緑釉陶器の細片1点が出土しており、中世には使用されなくなっていたと考えられる。

ビットSP09 調査区中央付近で検出した円形ビットである。規模は直径約0.3m、深さ約0.05mである。土師器の細片がごく少量出土した。

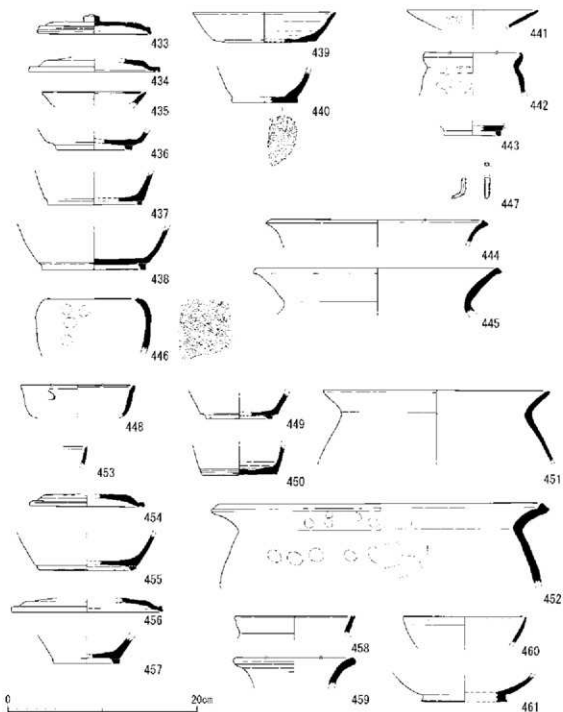
ビットSP18 SP18は調査区南側で検出した円形ビットである。規模は直径約0.2m、深さ約

ビット S P 29 S P 28 に近接して検出した円形ビットである。規模は直径約 0.2m、深さ約 0.1m である。土師器の細片がごく少量出土した。

③出土遺物

10 トレンチからは須恵器や土師器のほか緑釉陶器、灰釉陶器などが出土した。

土坑 S K 01 (第 81 図 448～452) 448・449 は須恵器杯である。448 は口径 12.0cm、残存高 3.4cm



第 81 図 10 トレンチ出土遺物実測図(1/4) 重機掘削時・遺構ほか

である。内外面に回転ナデを施す。口縁部付近に墨痕を残している。449は1層から出土した杯Bである。高台径は7.0cm、残存高1.3cmである。内外面に回転ナデを施し、底部はヘラケズリの後にナデを施す。高台は貼り付け後にナデを施す。450はS K01底部の堆積である2層から出土した須恵器壺である。高台径は8.0cm、残存高3.2cmである。内外面に回転ナデを施す。底部はヘラケズリである。高台は削り出しである。451・452は土師器甕である。451は2層から出土した。口径23.8cm、残存高7.5cmである。内外面ともに摩滅が著しく明瞭な調整痕は確認できないが、外面の一部にタタキのような痕跡がわずかに確認できる。452は口径34.0cm、残存高8.5cmである。外面はユビオサエで整形した後にナデを施す。内面は細かいヨコハケを施す。口縁部はナデである。

井戸SE02(第81図453~461) 453は緑釉陶器である。3層から出土した。残存高は2.0cmである。内外面に薄緑色の釉葉がかかる。

454は2層から出土した須恵器杯蓋である。口径12.0cm、残存高1.3cmである。内面に回転ナデを施す。口縁部付近は内外面に強いナデを施す。外面はヘラ起こしの後にナデを施す。

455は3層から出土した須恵器杯Bである。高台径10.4cm、残存高3.9cmである。内外面は回転ナデを施す。底部は回転ナデを施した後に一方向のナデを施す。高台は貼り付けである。

456は4層から出土した須恵器杯蓋である。口径16.0cm、残存高1.5cmである。内面は回転ナデである。外面はヘラ起こしの後に回転ナデを施す。

457は井戸の底部埋土である4層から出土した須恵器杯Bである。高台径7.0cm、残存高2.9cmである。内外面に回転ナデを施す。底部は回転ナデを施した後に高台を貼り付ける。

458は土師器甕である。口径12.0cm、残存高2.0cmである。内面から外面口縁部にかけてナデを施す。外面にはハケを施す。

459は瓦質壺である。井戸枠の裏込めである6層から出土した。口径6.6cm、残存高2.8cmである。外面のクビレ部にナデを施す。

460は黒色土器碗である。口径16.0cm、残存高3.0cmである。外面はヨコナデである。内面はミガキを施す。

461は灰釉陶器碗である。井戸の底から出土した。高台径9.0cm、残存高2.7cmである。内外面に回転ナデを施す。高台は削り出しである。

遺構面精査時ほか(第81図433~445) 433~445は重機掘削中に出土したものである。

433・434は須恵器杯蓋である。433は口径12.0cm、器高2.1cmである。内外面に回転ナデを施す。434は口径14.0cm、残存高1.4cmである。調整は433と同じである。

435は土師器皿である。口径10.9cm、残存高1.4cmである。内面はナデを施す。口縁部付近はヨコナデの後に再度ユビオサエで調整する。436~438は須恵器杯Bである。

436は高台径8.0cm、残存高1.9cmである。内外面に回転ナデを施す。底部はヘラケズリの後にナデを施す。高台は貼り付けである。

437は高台径10.0cm、残存高3.2cmである。調整は436と同様である。

438は高台径11.0cm、残存高4.4cmである。内外面に回転ナデを施し、底部は内面に回転ナデを施した後不定方向のナデを施す。外面は回転ヘラケズリの後にナデを施す。高台は貼り付けである。

439は須恵器杯Aである。口径15.0cm、器高3.2cmである。内外面に回転ナデを施す。底部は外面に多方向のナデ、内面に一方向のナデを施す。

440は須恵器壺である。底径7.0cm、残存高3.3cmである。内外面に回転ナデを施す。外部底部は糸切痕を残す。内面に自然釉がかかる。

441は土師器皿で、14.0cm、残存高1.9cmである。ユビオサエにより成形する。

442は土師器甕である。口径10.0cm、残存高4.4cmである。口縁部は内外面ともにヨコナデである。体部内面はナデを施し、外面にハケを施した後にユビオサエで成形する。体部外面には煤が付着する。

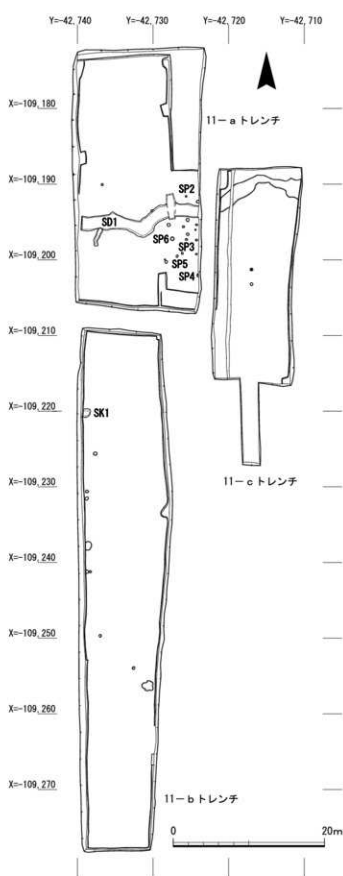
443は無軸陶器杯である。高台径6.0cm、残存高1.1cmである。底部内面は回転ナデを施し、外面はヘラ切りを施した後にヨコナデを施す。高台は削り出しである。

444・445は須恵器甕である。444は口径12.4cm、残存高2.5cmである。内外面に回転ナデを施す。口縁部付近は内外面に強いヨコナデを施す。445は口径25.3cm、残存高4.8cmである。内外面に回転ナデを施す。口縁部付近は内外面にヨコナデを施す。

446は重機掘削時に出土した製塩土器である。口径10.0cm、残存高5.4cmである。外面はユビオサエ痕が残る。内面には布目痕がある。

447は鉄釘と思われる。調査区東壁南東隅の遺構検出面から出土した。残存長2.25cm、厚さ0.4cmである。断面は方形を呈している。釘先の部分と思われる、中ほどから曲がっている。

(浅田洋輔)



第82図 11トレンチ遺構配置図(1/500)

(6)11トレンチ

①調査の概要

I-M・II-P区の境界に位置し、10トレンチの東側にあたる。調査トレンチは3地区に分け、11-a・11-b・11-cトレンチとした(第2・82図)。

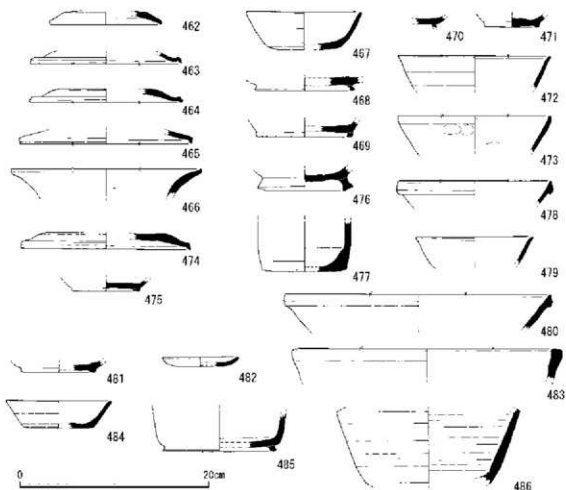
小規模調査A-2区とA-4区において、直径約0.3mのビットなどの遺構を検出したことから、遺構の広がり確認するため、A-2区の西側を拡張して11-aトレンチと統合した。また、11トレンチの東側についても、A-4区でビットを検出したため、その周囲を拡張して11-cトレンチとして調査を実施した。

11-aトレンチは、南北約30m、東西約15mの長方形である。北側は低湿地状となり、木製品などが出土したが、遺構は確認できなかった。南側では、溝やビットを検出した。11-bトレンチは、長方形で南北約70m、東西約10mを測る。全体に大きな礫や粗砂礫が全体を覆い、氾濫原であったことがうかがえる。遺構はビットや土を検出した。11-cトレンチは、南北約30m、東西約10mで設定した。11-aトレンチの溝SD1が延伸していることを確認した。

②検出遺構

a)11-aトレンチ

溝SD1 南半部で検出した蛇行する溝である。長さ16m、幅1.5~2m、深さ0.3mを測り、須恵器杯Bの底部などが出土した。



第83図 11トレンチ出土遺物実測図1 (1/4) 精査時・遺構

柱穴 SP 2 直径0.3m、深さは0.2mを測る。須恵器杯が出土した。

b) 11-b トレンチ

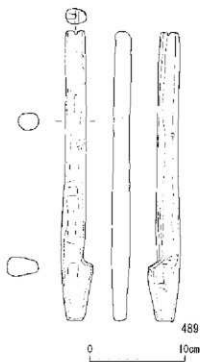
土坑 SK 1 直径 1 m、深さ0.3mを測る円形の埋土からは須恵器の壺と杯 B などが出土した。

c) 11-c トレンチ

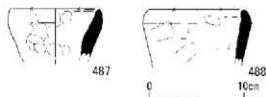
溝 SD 1 11-a トレンチで検出した溝の東延伸部である。幅を変化させつつ蛇行している。検出した長さは約12m分、幅0.4～2 m、深さ0.3mを測る。

③出土遺物

遺構精査時(第83図462～480) 462～465は、須恵器蓋である。462・465は11-a トレンチで出土した。463・464は11-b トレンチから出土した。466は11-a トレンチで出土した須恵器壺の底部である。467は11-a トレンチで出土した須恵器の杯 A である。468・469は11-a トレンチで出土した須恵器杯 B である。470・471は11-a トレンチで出土した緑釉陶器の高台部分である。472は11-a トレンチで出土した無釉陶器の腕である。473は11-a トレンチで出土した瓦器碗の口縁部である。内面にはミガキが施され、外面にはユビオサエがある。474は11-b トレンチから出土した須恵器の杯である。475は11-b トレンチから出土した須恵器杯 B の底部である。478



第84図 11トレンチ出土遺物実測図2
(1/4) 木製品



第85図 11トレンチ出土遺物実測図3(1/4) 製塩土器

は11-aトレンチで出土した玉縁の口縁部を有する白磁椀である。479は11-bトレンチから出土した灰釉陶器の椀である。480は11-bトレンチから出土した東播磨の須恵器鉢である。

溝SD1(第83図481~483) 481は11-aトレンチで出土した須恵器杯Bの底部である。482は11-aトレンチで出土した瓦器皿である。内面のヘラミガキ痕はかなり磨滅しており不明瞭である。483は11-aトレンチで出土した須恵器鉢の口縁部である。

ビットSP2(第83図484) 484は11-aトレンチで出土した須恵器杯Aである。口径11.2cm、器高3cmを測る。

土坑SK1(第83図484・485) 485・486は11-bトレンチで出土した。485は須恵器杯Bである。486は須恵器壺の体部下半の破片である。

木製品(第84図489) 489は端部を片側のみ抉りだして取手状に加工した木製品である。長さ30.5cm、幅2.2~3.4cm、厚さ1.8~2.1cmである。11-aトレンチから出土した。

製塩土器(第85図487・488) 487と489は製塩土器である。ユビオサエの痕跡が顕著で、厚みのある体部をもつ。487は11-aトレンチ、488は11-bトレンチからそれぞれ出土した。

(黒坪一樹)

(7) 12 トレンチ

① 調査区の概要

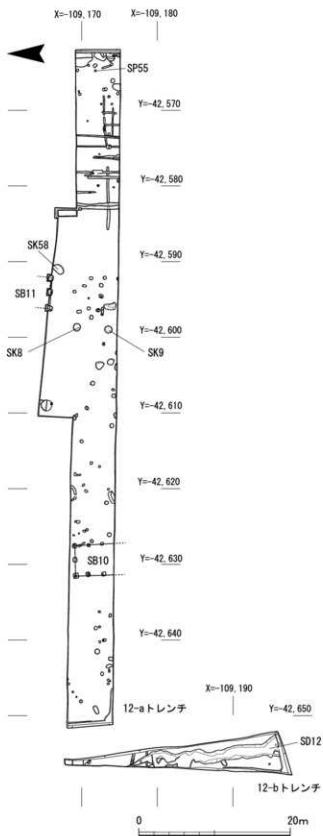
12 トレンチはⅡ-H・L区に位置し、2か所の調査区に分かれる。12-a トレンチは東西89m、南北約6mの長方形トレンチに、中央部やや東寄りに長さ27m、幅3～5m北へ突出した「凸」形を呈している。12-b トレンチは、12-a トレンチの西4mの位置にある細長い三角形を呈した調査区である。南辺が6m、西辺が30m、東辺が24mである。調査区の中央に南北方向の溝SD12を検出した(第86図)。基本層序は、約0.15mの耕作土を除去すると厚さ約0.1mの淡黄灰色シルトの床土があり、その直下で遺構を確認した。

12-a トレンチでは、トレンチ東側では耕作に伴うと思われる東西方向の素掘り溝や南北棟と思われる掘立柱建物2棟、土坑、柱穴などを検出した。トレンチ中央付近では縄文土器を伴う土坑3基を検出した。トレンチ西側ではビットや耕作に伴う素掘り溝などを検出した。

一方、12-b トレンチでは、南北方向の溝を検出した。

② 検出遺構

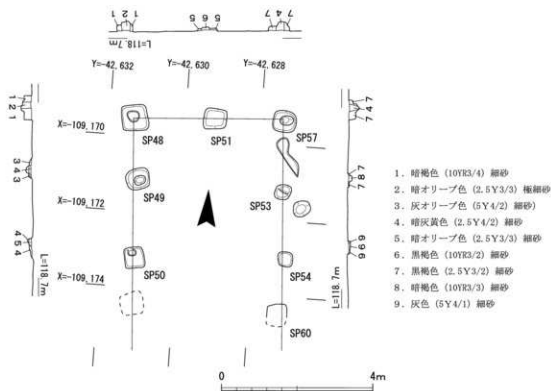
掘立柱建物SB10(第87図) 桁行3間以上(5.2m以上)、梁行2間(3.9m)を確認したが、桁行が南側調査区外へ延びるため、それ以上の規模の建物である。一辺ないし直径0.4～0.6mの円形と隅丸方形の柱穴が混在している。深さは深いもので0.2m、浅いもので0.1m程度である。北から西へ2°振る。



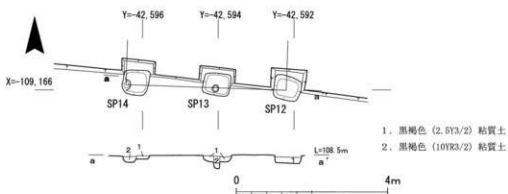
第86図 12 トレンチ遺構配置図(1/500)

掘立柱建物S B11(第88図) トレンチ突出部の北端で、掘立柱建物の南端(梁行)2間分(4.2m)を検出した。柱穴の掘形はいずれも一辺約1mの隅丸方形であり、方位を南北に揃えている。調査区外へ延びると考えられるが、12-a トレンチの北側に設けた土置場の表土を除去した際に同一建物と推定される柱穴は検出されなかったことから、その間を通る農道の下で完結すると推測される。遺物がなく、時代を特定することはできないが、同規模の柱穴が北側に設定したB-5・6 トレンチで検出していることから、奈良~平安時代のもと考えられる。

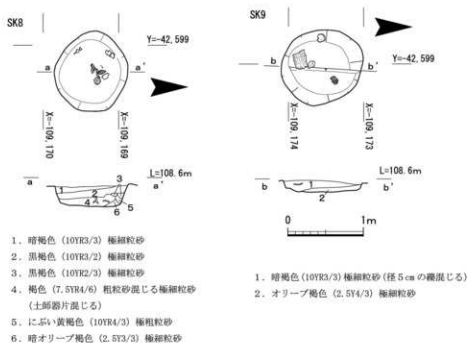
ピットS P55 調査区東端部の直径0.3m、深さ0.15mのピットである。底径22.8cmの古墳時代中期の器台が出土した。(武本典子)



第87図 12-a トレンチ掘立柱建物S B10実測図(1/100)



第88図 12-a トレンチ掘立柱建物S B11実測図(1/100)



第89図 12-a トレンチ土坑SK8・9実測図(1/50)

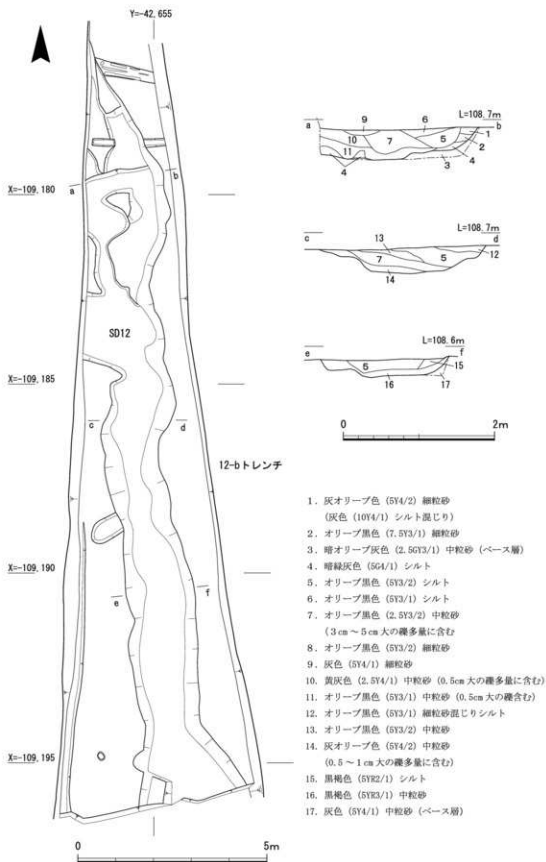
土坑SK8(第89図左) 直径1mを測る円形である。削平が進み、残存の深さは、0.25mである。埋土は、極細粒砂が堆積する。底から縄文時代後期の土器片と炭化物が出土した。

土坑SK9(第89図右) 直径約1mを測る円形土坑である。深さは約0.2mで、かなり削平されている。埋土は、暗褐色及びオリーブ褐色の極細粒砂である。そこからは深鉢の破片が出土した。後期の北白川上層C式とみられる。

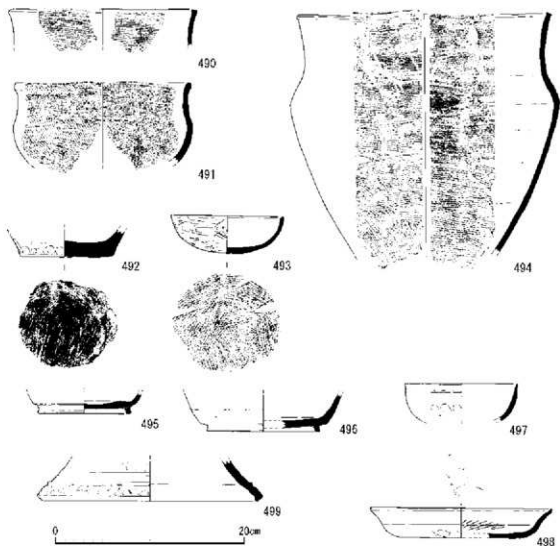
土坑SK58 トレンチ北壁中間部に接する楕円形の土坑で、長軸1.6m、短軸1m、深さ0.4mを測る。暗褐色及びオリーブ黒の極細粒砂の埋土である。土器の出土はないが、サヌカイトの加工痕のある剥片が1点出土した。風化の状態から縄文時代の所産である。(黒坪一樹)

溝SD12(第90図) 調査区南端から中央部を南北方向に流れる溝である。調査区中ほどで西へ曲がり、調査区外へと続く。幅は南端で3m、深さは深いところで0.5m、浅いところで0.2mである。セクションa-bでは、西端は調査区外となるものの検出幅2.1m、深さは0.4mである。セクションc-dでは幅2.3m、深さ0.4mである。セクションe-fでは幅1.7m、深さ0.2mである。流路の底の標高は、南部・北部とも108.2mほどであり、顕著な高低差は見られない。SD12全体にわたりベースは暗オリーブ灰色中粒砂である。北部ではその上に東寄りに黒褐色の中粒砂など(7層・10層・11層)が堆積し、その上部にオリーブ黒色シルト(5層・6層)が堆積している。セクションc-dでは、ベースの上に灰オリーブ色中粒砂(14層)が堆積し、その上に7層と5層が堆積している。セクションe-fでは、7層がなくなり5層のみとなっている。

遺物は主に5層と7層から出土し、須恵器が大半を占める。年代は8～9世紀頃のもの为主であり、一部7世紀代の甕が混入している。また、「正福」と墨書された須恵器杯1点と漆が付着した土器が1点出土した。そのほかに木片や枝などが混入している。(武本典子)



第90図 12-b トレンチ溝 SD12実測図(1/100・1/50)



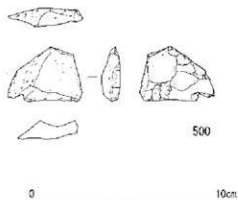
第91図 12-a トレンチ出土遺物実測図1 (1/4) 遺構

③ 出土遺物

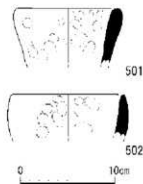
縄文土器（第91図490～494） いずれも、北白川上層式の範疇でとらえられる。

490～492は、土坑SK8から出土した。490は条痕文が内外面に横走る。491は胴部にRLの縄文が施文される。492は平底の底部で、角閃石の含有を認める。

493・494は土坑SK9から出土した。493は椀型の浅鉢で、外面全体に条痕がみられる。494はやや肩の張る胴部の深鉢である。内外面はほぼ横方向の条痕である。遺構内出土である。



第92図 12-a トレンチ出土遺物実測図2 (1/4) 石器



第93図 12-bトレンチ出土遺物
実測図1(1/4) 製塩土器

各土坑内の炭化物から放射性炭素年代測定(AMS法)を行った結果、SK9の資料が土器編年より古い値が出たが、もうSK8の資料については形態学的な編年時期と整合する。

遺構面精査時・遺構(第91図495～第92図500) 495は精査中に出土した須恵器杯の高台付きの底部である。496は須恵器杯で底部に高台が付く。497は土師器の椀である。口縁部外面には横方向のミガキ、内面には放射状のミガキが施されている。498は土師器の皿である。口径は18.2cmを測る。底部内面には暗文が施されている。499はピットSP55から出土した須恵器器台の脚部片と思われる。脚部端部には波状文があり、2条の沈線の上に波状文がある。500はサヌカイト製の石器の未成品と思われる。SK58から出土した。

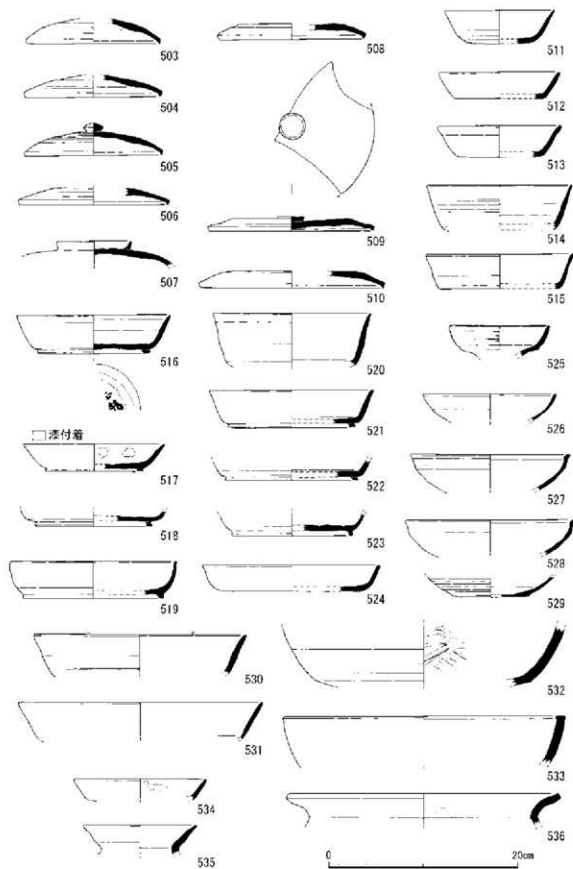
(黒坪一樹)

溝SD12(第94図) 主に須恵器が出土した。器種は杯・蓋・皿が主体である。また、7世紀代の甕(525)が1点出土した。土師器は皿と椀が1点ずつ出土した。時期は8～9世紀のものが多い。10世紀代の椀も出土した。

須恵器の杯は高台のないもの(511～515)と高台のあるもの(516～518・521～523)があり、すべて8～9世紀のものである。須恵器の蓋も8～9世紀のものであり、上部の水平部が狭く口縁部への傾斜が丸みを帯び、口縁部を内側に巻き込んだもの(503～505・507)と、水平部が広く口縁部への傾斜が直線的なもの(506・508)と水平部が広く口縁部への傾斜がわずかに凹形を呈するもの(509・510)と区別できる。上部の水平部が狭く口縁部への傾斜が丸みを帯びたものの中には、つまみが残存しているものには輪状のつまみがあるもの(507)と宝珠形のつまみがあるもの(505)が存在する。須恵器の皿は3点ある(524・530・531)。8～9世紀頃である。須恵器の椀は4点出土しており(527～529)、いずれも10世紀代のものである。

製塩土器(第93図501・502) 溝SD12から出土した。内外面にはユビオサエの調整がみられる。

(武本典子)



第94図 12-b トレンチ出土遺物実測図 2 (1/4) S D12

(8)13トレンチ

①調査の概要

Ⅱ-D区に位置し、東西に長い調査区である(第95図)。耕作に伴う南北方向と東西方向の素掘り溝や近世以降と思われる方形の土坑、拳大の礫や竹などが入った暗渠などを検出した。少量の古代・中世の土器片が出土したものの、遺構は検出できなかった。

②出土遺物

素掘り溝や暗渠の掘削時に遺物が出土している(第96図537~542)。

537は西半部の東西方向の素掘り溝から出土した土師器皿の口縁部である。

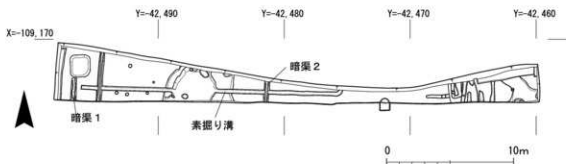
538は暗渠1から出土した緑釉陶器の口縁部である。

539は暗渠1から出土した白磁碗の口縁部である。

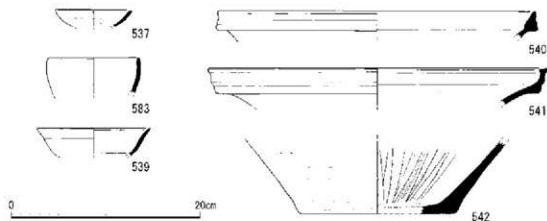
540・541は暗渠1から出土した陶器の播鉢の口縁端部である。

542は暗渠2から出土した陶器の播鉢の底部である。

(村田和弘)



第95図 13トレンチ遺構配置図(1/300)



第96図 13トレンチ出土遺物実測図(1/4)

(9) 14 トレンチ

① 調査の概要

Ⅱ-T 区の東部とⅡ-P 区の一部にかけて設定した調査区である。東側に掘立柱建物などの遺構を検出した B-2 トレンチが位置する。後述する B-2 トレンチに隣接する調査区西側で、多数の柱穴を検出した。また、調査区東側の広く調査を行った地点の北部で北に向かって下がる東西方向に広がる落ち込みを確認した。河川の氾濫に伴う粗砂や礫によって埋まっている。

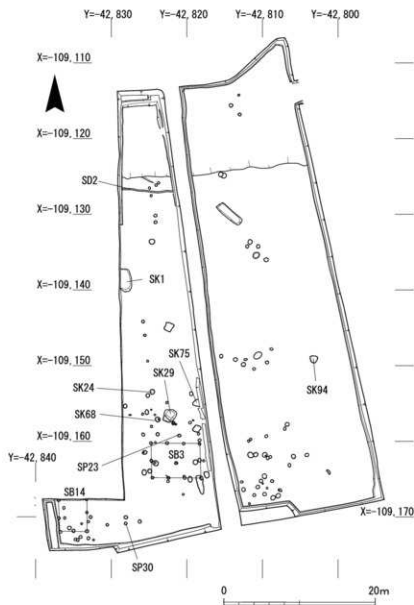
水田耕作土・床土の直下でシルト・細砂・粗礫などの混在する面となる。この面は広く河川堆積の砂礫が覆ったり、後世の削平を受けているが、遺構を検出することができた。主な遺構として、土坑 SK 1、掘立柱建物 SB 3・SB 14、溝 SD 2、土坑や多くの柱穴がある。

14 トレンチ西半部では、遺物の顕著な出土や掘立柱建物を検出したが、東半部では柱穴や土坑などを検出したが、出土遺物はほとんど無く、建物を確認することができなかった。

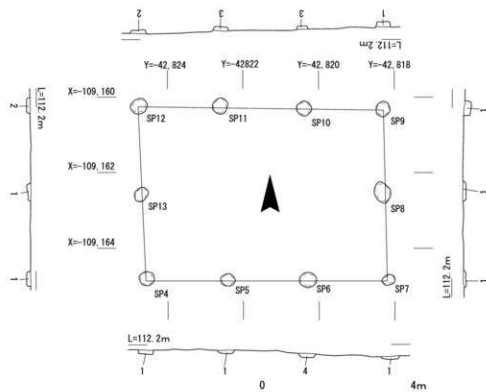
② 検出遺構

土坑 SK 1 トレンチ西側、西壁沿いで検出した。遺構の一部が調査区外に延びる。平面形は楕円形を呈し、長軸 3.0m、短軸 1.5m、深さ 0.15m を測る。埋土は暗褐色粗砂礫混じりシルトである。平安時代の須恵器や土師器皿、緑軸陶器椀などが多く出土した。

掘立柱建物 SB 3 (第 98 図) 調査区西側南半で、梁行 2 間 (5.0 m)、桁行 3 間 (6.8 m) の東西棟の建物である。柱間寸法は梁行が 2.5m、桁行が 2.2m である。柱穴の平面形

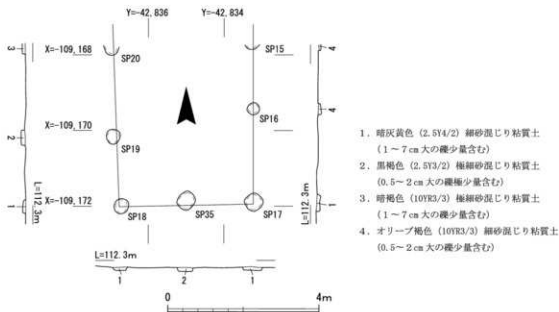


第 97 図 14 トレンチ遺構配置図 (1/500)



1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
(1~6 cm 大の礫少量含む)
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土
(1~6 cm 大の礫少量含む)
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂混じり粘質土
(1~4 cm 大の礫少量含む)
4. 暗褐色 (10YR3/3) 粗砂混じり粘質土
(1~2 cm 大の礫少量含む)

第98図 14トレンチ掘立柱建物S B 3実測図(1/100)



1. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混じり粘質土
(1~7 cm 大の礫少量含む)
2. 黒褐色 (2.5Y3/2) 極細砂混じり粘質土
(0.5~2 cm 大の礫極少量含む)
3. 暗褐色 (10YR3/3) 極細砂混じり粘質土
(1~7 cm 大の礫少量含む)
4. オリーブ褐色 (10YR3/3) 細砂混じり粘質土
(0.5~2 cm 大の礫少量含む)

第99図 14トレンチ掘立柱建物S B 14実測図(1/100)

は円形で、直径0.25～0.35mを測る。柱穴から遺物は出土しなかったが、周辺の精査中に出土した遺物から、平安時代のものであろう。

掘立柱建物 S B 14 (第99図) 調査区西側南部で、部分的に検出した建物である。建物の北半部は調査区外となるため規模等は不明である。桁行2間以上(4.2m以上)、梁行2間(3.5m)の南北棟の建物である。柱間寸法は、南北1.8m・2.4m、東西1.8mを測る。柱穴の平面形は円形で、直径0.25～0.45mである。

(黒坪一樹)

③出土遺物

遺構面精査時(第100図543～第101図593) 543は古墳時代後半に属する須恵器の杯身であるかえり端部が欠損している。544は古墳時代後半に属する須恵器の杯身である。545～548は須恵器の杯身の破片である。549は須恵器の高杯の脚部の端部片である。550は須恵器の碗の口縁部である。551は須恵器の甗の口縁部である。552は甗の体部片である。551とは別の個体である。553は土師器の壺の底部片である。554～561は須恵器の蓋の口縁部片である。561は口径が30.4cmを測る大型である。562は須恵器の皿である。563は須恵器の杯の口縁部片、564・565は須恵器の杯Bの底部片である。566～568は土師器の甕の口縁部である。569は土師器の鉢の破片である。

570・571は緑釉陶器の碗の底部片である。572～574は灰釉陶器の碗の底部片である。572の底部には「ハ」のようなヘラ記号がある。574の底部には糸切り痕が残る。575～578は無釉陶器の底部片である。579～586は須恵器碗で底部が糸切りである。587は土師器の皿の口縁部で、外面底部にはユビオサエ痕が残る。

588～590は瓦器碗の高台部分である。588は内面には横方向のミガキ、外面にはユビオサエ痕がある。590は内面底に暗文がある。591は青磁碗の高台部分である。592は焼けた土で薬が混入しており、土壁のような塊である。593は鉄滓である。

(村田和弘)

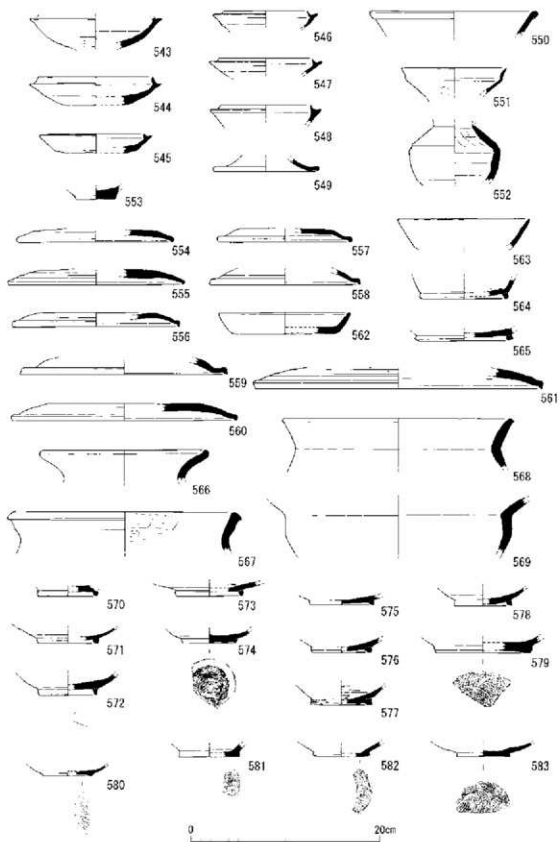
土坑 S K 1 (第102図594～618) 古墳時代後期～平安時代に至る遺物群である。

594・595は内傾する口縁部をもつ須恵器杯身である。594は古墳時代後期の陶邑 T K 43型式並行期、595はやや下り陶邑 T K 209型式併行期となろう。

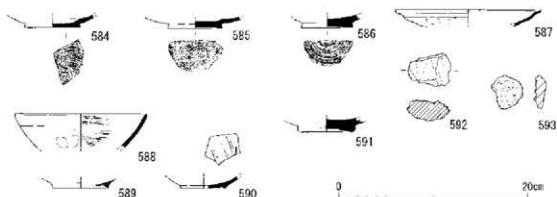
596は須恵器蓋である。597・598・600は須恵器碗である。597と598の体部は強い回転コナデにより明瞭な稜が付けられている。598は底部糸切りで低い貼り付け高台がめぐる。599は須恵器皿である。601・602は須恵器杯である。603は須恵器碗の底部で、糸切り痕をとどめる。604～610は「て」字口縁の土師器皿である。10世紀頃の年代が与えられる。611・612は土師器甕である。体部外面に明瞭なタタキ痕をもつ。亀岡盆地内の遺跡では例の少ない形態といえる。613・618は土師器の羽釜である。614は緑釉陶器の碗、615は緑釉陶器の皿である。616・617は須恵器杯の底部である。ともに底部糸切りの痕跡をとどめる。618は土師器羽釜で、鈔が水平に張り出している。

溝 S D 2 (第102図619～623) 平安時代後期～鎌倉時代の須恵器や瓦器碗などがある。

619・620は須恵器碗である。621は底部糸切りの須恵器皿である。622は瓦器碗である。摩滅が



第100図 14トレンチ出土遺物実測図1(1/4) 遺構精査時1



第101図 14トレンチ出土遺物実測図2(1/4) 遺構精査時2

進んでおり、ヘラミガキなどは観察できない。底部は三角形の低い貼り付け高台が取り付く。623は須恵器皿である。

土坑SK24(第102図624・625・628・629) 古墳時代後期～平安時代にかけての土器が出土した。624は古墳時代後期の須恵器蓋である。625は土師器の小形の甕である。体部外面にハケ、内面にケズリの痕跡がある。628は奈良時代の土師器鉢である。内面に横方向のハケメを施す。629は須恵質の播鉢である。

掘立柱建物SB3柱穴SP7(第102図626) 626は、直径28cmを測る須恵器の大形の蓋である。

ビットSP23(第102図627) 627は平坦な天井部をもつ須恵器蓋である。

土坑SK29(第103図630～632) 630～632は須恵器杯身である。内傾する短い立ち上がりをもつ。陶器TK209型式並行期のものである。

ビットSP30(第103図633～635) 奈良～平安時代の土器が出土した。

633は中国製白磁碗の破片である。634は奈良時代の須恵器碗である。

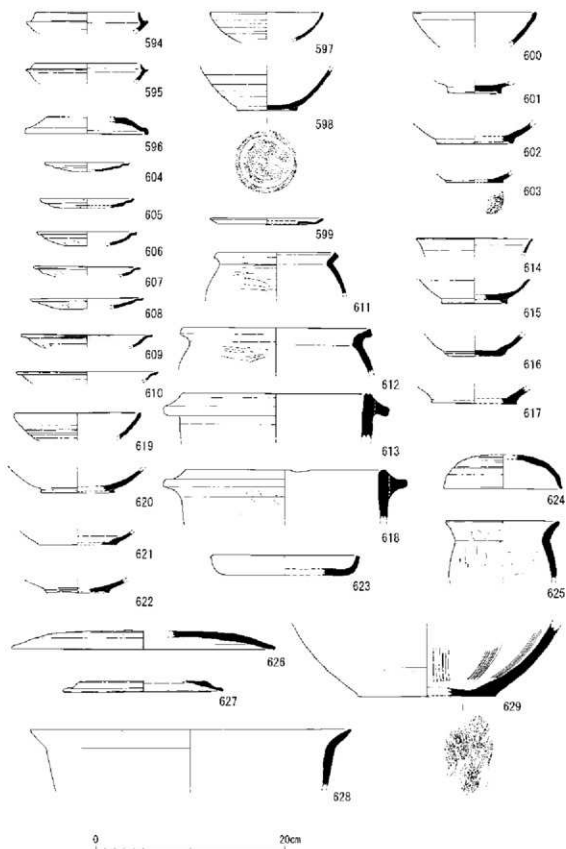
635は底部糸切り痕をもつ須恵器碗である。

土坑SK94(第103図636・637) 636は須恵器杯である。口径15.5cm、器高3cmを測る。637は土師器甕である。屈曲の緩やかな短い口縁部をもち、体部外面にハケメを施す。飛鳥時代の遺物である。

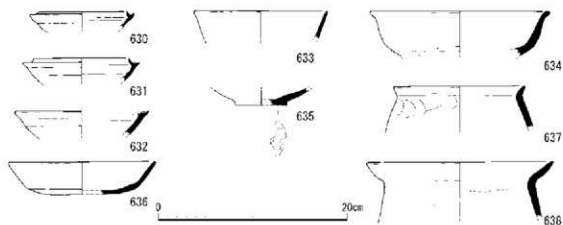
土坑SK75(第103図638) 638は土師器甕である。長胴の形態とも考えられる。体部外面はハケメ調整される。飛鳥時代の遺物である

製塩土器(第104図640～642) 製塩土器は、14トレンチで出土点数も多く、特徴的な遺物であるので、包含層中のもの3点(640～642)とともに図化した。639のみ土坑SK68から出土した。4点はいずれも厚みのあるずんぐりした形態で、内外面にユビオサエによる整形痕をとどめる。

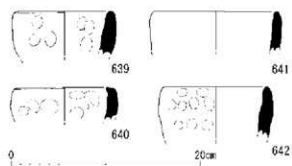
(黒坪一樹)



第102図 14トレンチ出土遺物実測図3 (1/4) 遺構1



第103図 14トレンチ出土遺物実測図4 (1/4) 遺構 2



第104図 14トレンチ出土遺物実測図5 (1/4) 製塩土器

(10)15トレンチ

①調査の概要

Ⅱ-P区に位置し、14トレンチの東側の調査区である(第105図)。東西約37.5m、南北約52.0mである。14トレンチ同様、河川の氾濫による粗砂礫の流れが北西から南東に広く覆っている。安定して生業が営まれた形跡はみられないが、ピットや土坑などの若干の遺構を検出した。

基本層序は上層より現代の耕作土、床土、暗褐色シルト・細砂・粗礫などが混在する層となる。

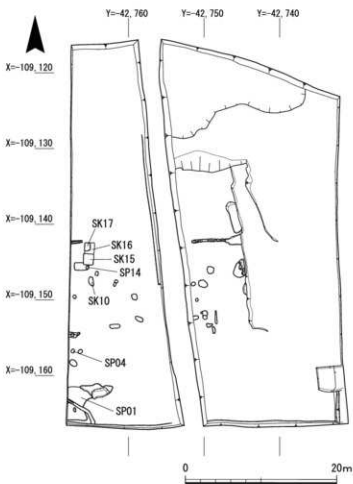
②検出遺構

溝SD01 調査区の南西隅で検出した溝である。検出長約8.2m、幅約2.4m、深さ約0.2mである。須恵器や土師器、瓦質土器の細片が少量出土した。

ピットSP04 調査区の南西部で検出し円形のピットである。規模は直径約0.4m、深さ約0.1mである。須恵器の細片が出土した。

土坑SK10 調査区の中央部西壁付近で検出した楕円形の土坑である。規模は直径0.7~1.4m、深さ約0.2mである。須恵器や土師器の細片のほか木片が出土した。

ピットSP14 調査区の中央部西壁付近で検出した円形のピットである。規模は直径約0.1m、深さ約0.2mである。須恵器の細片が出土した。



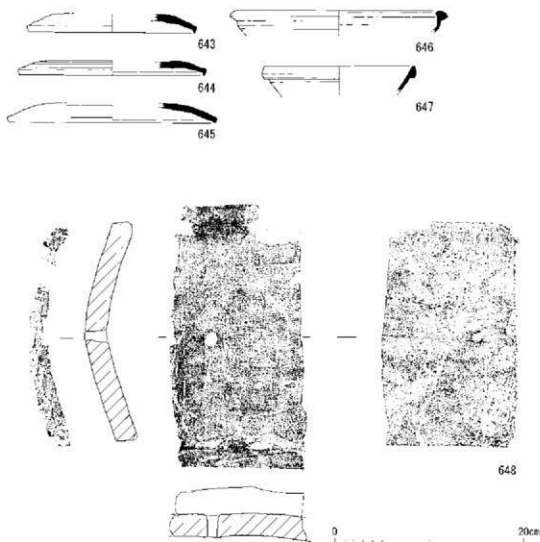
土坑SK15 調査区の中央部西壁付近で検出した隅丸方形の土坑である。規模は長辺約1.6m、短辺約1.3m、深さ約0.4mである。須恵器や土師器の細片のほか、種がごく少量出土した。

土坑SK16 調査区の中 央部西壁付近で検出した不整形の土坑である。直径約1.7m以上、深さ約0.3mである。SK15・SK17によって端部を切られている。須恵器の細片が出土した。

③出土遺物

遺構の中から少数の遺物が出土しているが、いずれも細片であるため、包含層から出土している残存度の良い遺物について報告する。

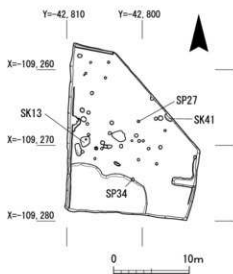
第105図 15トレンチ遺構配置図(1/500)



第106図 15トレンチ出土遺物実測図(1/4) 遺構面精査時

遺構面精査時(第106図) 643～645は須恵器蓋である。いずれも偏平な形状を呈し、天井部を欠く。643は口径17.6cm、残存高2.0cmである。644は口径19.8cm、残存高1.6cmである。645は口径21.7cm、残存高2.2cmである。646は須恵器鉢である。口径21.6cm、残存高2.6cmである。形状から篠産の鉢Cに分類されるものであり、10世紀代の製品と考えられる。647は玉縁状口縁をもつ白磁碗である。口径15.8cm、残存高3.0cmである。

648は平瓦である。凹面に布目痕跡を残す。凸面は全体をナダ消す。狭端中央付近に径5mmほどの小孔を穿つ。
(浅田洋輔)



第107図 A-1トレンチ遺構配置図(1/500)

② 検出遺構

調査の結果、土坑や柱穴などを検出した。しかし、掘立柱建物を復原することはできなかった。遺構を検出した面は東へ向かって緩やかに傾斜している地形であることを確認した。また、調査区の南側において東西約10m、南北約6mを測る土坑状の落ち込みを確認したが、出土遺物がなく、時期は不明である。遺構精査時や遺構からは平安時代の遺物が出土した。

土坑SK13 土坑の形状は方形に近く、最大長は1.3m、深さ0.1mを測る。須恵器椀が出土した。ビットSP27 直径は0.3mの円形を呈し、深さは0.5mである。須恵器杯が出土した。

ビットSP34 調査区の南側の土坑状の落ち込みの北肩付近で検出した。直径約0.3mの円形を呈し、深さ約0.1mを測る。遺物は須恵器椀が出土した。

土坑SK41 I-M区内の調査区北東部辺で検出した土坑である。円形と思われるが半分は調査区外である。最大幅は約1.2m、深さは約0.15mで、須恵器蓋や杯、製塩土器などが出土した。

③ 出土遺物

精査時出土遺物(第108図649～669) 649は須恵器蓋である。650～656は須恵器杯で、653～656の底部には高台が付く。なお、653は重機掘削時に出土した。657は須恵器椀の底部で、糸切り痕が残る。658は無軸陶器皿の高台部分である。659は緑軸陶器皿の底部である。胎土は硬質で、内面と高台の外表面と端部まで釉薬がかかる。高台は削り出し高台である。平安時代と思われる。

660は須恵器皿の高台部で糸切り痕が残る。661は須恵器の皿である。底部は未調整である。662は須恵器杯の高台部分である。663は須恵器椀の口縁部から体部にかけての破片である。664は緑軸陶器皿の底部である。胎土は硬質で、内面と高台の外表面と端部まで釉薬がかかる。底部内面には、円形の軸の溜まりがみられる。高台は削り出し高台である。平安時代と思われる。665は青磁椀で口縁から底部までが残る。666は須恵器壺の高台部分である。

667は小規模調査時に調査区東端の遺構面直上で出土した須恵器壺である。口縁端部と高台を

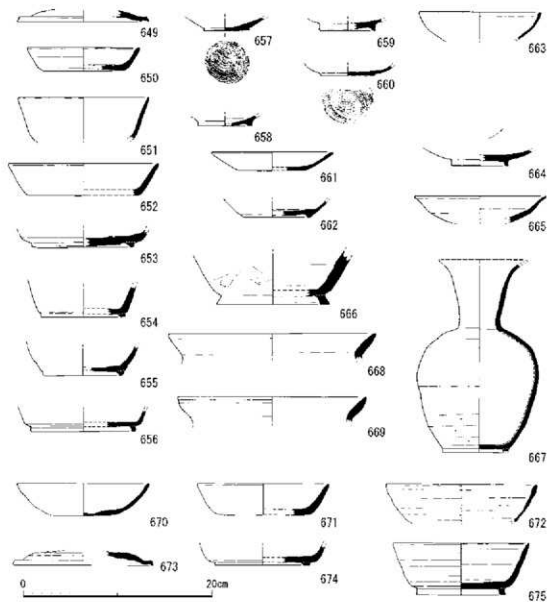
(11) A-1 トレンチ

① 調査の概要

I-M区とI-Q区の境界に位置する不定形な多角形を呈する調査区である(第107図)。当初は遺跡の広がりを確認するため、幅3mの「T」字形に調査区を設定して小規模調査区を実施した。しかし、平安時代の緑軸陶器皿や須恵器長頸壺などが出土するとともに、土坑などの遺構を確認したことから、対象となる水田区画いっぱいまで調査区を拡張した。

重機で耕作土を除去し、厚さ約0.15mの床土を掘

削したのち、遺構精査作業を行った。その結果、小規模調査の際に出土した遺物に関連するとみられる柱穴や楕円形土坑などの遺構を検出した。



第108図 A-1トレンチ出土遺物実測図1(1/4) 精査時・遺構

欠損しているが、ほぼ完形で出土した。口縁部内面と底部を除く外面全体に薄く自然釉がかかっている。668・669は土師器甕の口縁部片である。

土坑SK13(第108図670) 670は須恵器杯と思われるが、内外面ともに摩滅が著しい。

ビットSP27(第108図671) 671は須恵器杯である。

ビットSP34(第108図672) 672は須恵器椀で、内外面ともにていねいなヨコナデが施されている。

土坑SK41(第108図673～675、第109図676) 673は須恵器の蓋である。674は須恵器杯で高台が付く底部片である。675は須恵器杯で高台が付く。676は製塩土器で、内外面にはエビオサエ痕が残る。(村田和弘)



第109図 A-1トレンチ出土遺物実測図2(1/4)製塩土器

(12) B-2トレンチ

①調査の概要

B-2トレンチはⅡ-T区に位置し、14トレンチの西に隣接する東西約22m、南北約8mの調査区である(第110図)。小規模調査を行った際に柱穴や土坑を検出したことから、調査範囲を拡張した。調査の結果、新たに複数の柱穴や土坑を検出した。

基本層序は現代の耕作土、床土、遺構面の黄褐色土である。

②検出遺構

ビットSP01 調査区東端で検出した円形のビットである。直径約0.3m、深さ約0.2mである。須恵器鉢のほか、土師器細片が出土した。

土坑SK03 調査区東寄りで検出した円形の土坑である。直径約0.7m、深さ約0.3mである。北側を土坑SK30に切られている。須恵器杯身のほかに土師器の細片が出土した。

ビットSP06 調査区中央で検出した円形のビットである。直径約0.6m、深さ約0.3mである。ビットの中央部で灰軸陶器腕が伏せられた状態で出土した。そのほか須恵器や土師器の細片、砥石が出土した。

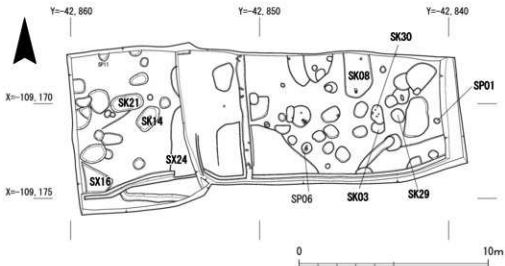
土坑SK08 調査区東北端で検出した不整形な形状の土坑である。長辺約2.6m以上、短辺約1.4m、深さ約0.1mである。土師器甕が遺構検出面で押しつぶされた状態で出土した。

土坑SK14 調査区西側で検出した隅丸方形の土坑である。長辺約1.4m、短辺約0.8m、深さ0.2mである。須恵器杯身のほかに土師器の細片が出土した。

不明遺構SX16 調査区南西隅で検出した方形の遺構である。約1.9m以上、深さ約0.3mである。遺物は出土していないが、堅穴建物の一部である可能性が考えられる。

土坑SK21 調査区西側で検出した隅丸長方形の土坑である。長辺約1.8m、短辺約0.8m、深さ0.3mである。製塩土器のほかに土師器の細片が出土した。

不明遺構SX24 調査区西側で検出した方形の遺構である。一辺約3.8m以上、深さ約0.3mで



第110図 B-2トレンチ遺構配置図(1/200)

ある。東側の大半が削平されていると考えられる。遺物は出土していないが、堅穴建物の可能性も考えられる。

土坑 S K 29 調査区東寄りで検出した円形の土坑である。直径約0.75m、深さ約0.2mである。製塩土器のほか土師器の細片が出土した。

土坑 S K 30 調査区東寄りで検出した楕円形土坑である。直径約0.7～0.9m、深さ約0.3mである。須恵器や土師器などが出土した。

③出土遺物

遺構面精査時 (第111図677～684) 677～684は遺構面精査中に出土した遺物である。677・678は須恵器杯蓋である。677は口径15.0cm、残存高1.8cm、678は口径16.0cm、残存高1.8cmである。内面は回転ナデを施す。外面は回転ヘラケズリの後にナデを施す。口縁部付近には自然軸がかかる。678の外面には別個体の口縁部と思われる一部が溶着している。679は須恵器椀である。残存高は2.5cmである。内外面に回転ナデを施す。680・681は須恵器杯Bである。680は口径13.4cm、器高4.2cm、高台径9.8cm、681は高台径9.8cm、残存高1.4cmである。内外面に回転ナデを施す。底部外面は回転ヘラ切りの後にナデを施す。高台は貼り付けである。682は土師器把手である。残存長7.15cm、残存高4.85cmである。683は土師器甕である。口径16.0cm、残存高5.0cmである。体部外面にハケメを施す。684は須恵器播鉢である。底径12.0cm、残存高3.6cmである。外面はヘラケズリの後にナデを施す。内面は掃り目を施す。

ビット S P 01 (第111図685) 685は須恵器鉢である。底径16.0cm、残存高2.4cmである。内面は回転ナデ、外面には回転ケズリを施す。

土坑 S K 03 (第111図686) 686は須恵器杯Aである。口径13.8cm、器高3.6cmである。内外面に回転ナデを施す。

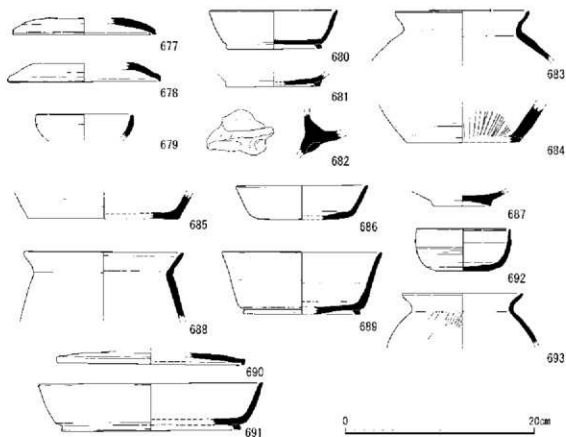
ビット S P 06 (第111図687) 687は灰軸陶器椀である。底径6.0cm、残存高1.4cmである。内面は回転ナデ、外面にはケズリが施されている。内外面には灰軸がかかる。

土坑 S K 08 (第111図688) 688は土師器甕である。口径16.8cm、残存高6.9cmである。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明である。

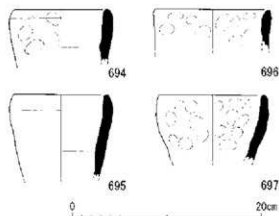
土坑 S K 14 (第111図689) 689は須恵器杯Bである。口径は16.8cm、器高6.6cm、底径12.2cmである。内外面に回転ナデを施す。高台は貼り付けである。

土坑 S K 30 (第111図690～693) 690は須恵器杯蓋である。口径19.6cm、残存高1.3cmである。内面から外面中ほどにかけて回転ナデを施す。残りの外面は回転ケズリを施す。691は須恵器杯Bである。口径23.3cm、器高5.05cm、底径18.6cmである。内外面に回転ナデを施す。高台は貼り付けである。692は須恵器杯である。口径9.8cm、器高4.45cmである。内外面に回転ナデを施す。底部内面は一方方向のナデを施す。底部外面に回転ケズリを施す。外面中位に沈線を3条施す。693は土師器甕である。口径12.6cm、残存高5.4cmである。口縁部から頭部にかけてヨコナデを施す。体部外面はハケを施す。

製塩土器 (第112図694～697) 694・695は遺構面精査中に出土した。694は口径10.0cm、残存高



第111図 B-2トレンチ出土遺物実測図1(1/4) 遺構面精査時・遺構



第112図 B-2トレンチ出土遺物実測図2(1/4)
製塩土器

5.4cmである。外面にユビオサエ痕を残す。695は口径10.0cm、残存高8.8cmである。内外面ともに摩滅している。696は土坑SK21から出土した。口径12.0cm、残存高4.2cmである。内外面にユビオサエ痕を残す。697は土坑SK29から出土した。口径11.0cm、残存高6.4cmである。内外面にユビオサエ痕を残す。

石製品(第113図698) 698はビットSP06から出土した砥石である。縦10.3cm、横10.9cm、厚さ6.3cm、重さ785gである。材

質は花崗岩である。石材の全面を砥面として利用している。

(浅田洋輔)

(13) B-3 トレンチ

①調査の概要

II-P区に位置する。小規模調査で遺物が出土したことから本調査となった(第114図)。

基本的な層序は、耕作土、床土と続き、暗褐色粘質土を除去していくと遺物が出土した。遺物が出土した暗褐色粘質土層の厚さは、約0.1m前後である。

人力で暗褐色粘土層を掘削し、その直下で遺構面精査を行ったが、顕著な遺構や遺物は検出できなかった。

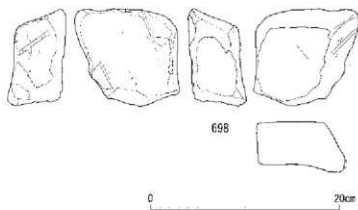
これらの状況から、遺構は後世に削平を受け、そのあとに2次堆積として遺物を含む暗褐色粘質土層が堆積したと考えられる。

②出土遺物

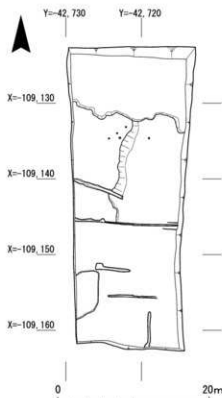
遺物包含層(第115図699～718) いずれも暗褐色粘質土層の掘削中に出土した遺物である。出土した土器はすべて摩滅が著しく小片である。

699は須恵器蓋のつまみである。700は須恵器蓋の口縁部である。701は須恵器杯Bの高台である。702・703は須恵器皿の口縁部である。704は須恵器碗の口縁部である。705は須恵器壺の高台である。706～711は瓦器碗である。707・708・710・711には内面にミガキ調整が残る。

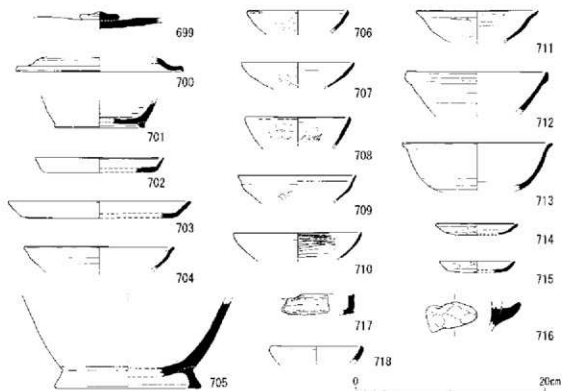
712は白磁碗の口縁部である。713は青磁碗の口縁部から底部にかけての破片である。714・715は土師器の小皿である。外面にはユビオサエ痕が残る。716は土師器の鍋の把手部分である。717は陶器の鉢の口縁端部である。718は陶器の碗の口縁部である。



第113図 B-2 トレンチ出土遺物実測図3(1/4)

第114図 B-3 トレンチ
平面図(1/500)

(村田和弘)



第115図 B-3トレンチ出土遺物実測図(1/4) 遺物包含層

(14) B-4 トレンチ

① 調査の概要

今回の整備範囲の北東部、II-H・L地区に位置する。東西約35m、南北約19mを長方形のトレンチである。標高は約108.5mを測る。

小規模調査で、約0.3mの耕作土(のちに3層に細分)を除去したその直下で遺構を検出したため、調査区を全域に拡張し調査することとなった。

基本的な層序は、耕作土・床土・黒褐色シルト・灰黄色シルトである。耕作土は2層あり、1層目は暗灰黄色シルト質極細～細粒砂層で、B-5・6トレンチまで広がる。植生に影響するマンガンの沈着が強く、繰り返し耕作を行っていたことがわかる。2層目はオリブ褐色シルト質極細～細粒砂層で、細礫を少量包含するが、B-5トレンチまでは拡がらない。次に黄褐色質極細～細粒砂で、断面観察の結果、1層目比べてマンガンの沈着が弱いことから、2層の耕作土の床土と判断した。次には黒褐色シルト質極細粒砂層、または灰黄色シルト質極細粒砂で遺構を検出した。

(村田和弘・竹村亮仁)

② 検出遺構

掘立柱建物 SB126 (第117図) トレンチ中央で検出した。南北方向に並行して2列に並ぶ柱穴列を確認した。梁間の中間の柱穴は検出できなかった。後世の削平によって消失した可能性がある。西側は柱穴 S P 71・70・69・68・30、東側は柱穴 S P 67・66・65・31・64で構成される。柱穴からは遺物が出土せず、時期は不明である。建物の主軸は北から東に35°振る。

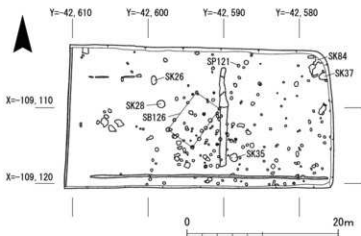
土坑 SK26 南北方向に長い楕円形を呈する土坑である。南北約1.2m、東西約0.7m、深さ約0.3mを測る。

土坑 SK84 トレンチ北東隅、土坑 SK37の北側で検出した不定形な土坑である。最長は約2mを測る。底の一部で炭の若干の堆積がみられるが、周囲に焼土もなく用途不明の土坑である。

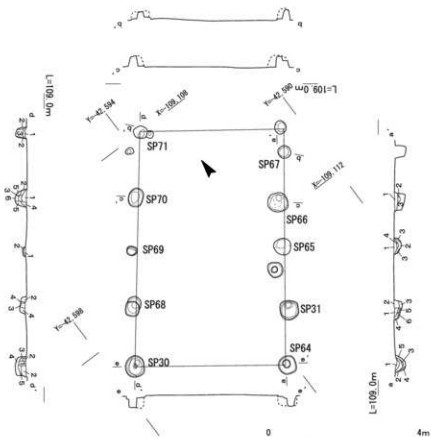
土坑 SK35 (第119図左中) ほぼ円形の土坑である。直径約1m、深さ約1.1mを測る。掘形の断面形は、上半が垂直で、下半はわずかにオーバーハングする。底面は皿状となる。埋土は暗褐色シルト、黒褐色シルト、灰褐色極細砂である。検出面から底まで縄文土器の破片が出土したが、中間層位と底近くにおいて顕著な集積がみられた。縄文土器以外に遺物は出土しなかった。

土坑 SK28 (第119図右上) 円形の土坑である。直径1.1～1.2m、深さ12cmである。断面形は皿形である。埋土は黒褐色中粒砂及び細砂である。縄文土器の破片と小型の敲石の破片が出土した。

ビット SP121 直径約0.25m、深さ約0.3mを測る。石鏃が出土した。



第116図 B-4トレンチ遺構配置図(1/500)



- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1. 黒褐色 (10YR 3/2) シルト混極細砂 | 4. 黒褐色 (10YR 3/6) シルト混極細砂 |
| 2. 暗褐色 (10YR 3/3) 極細砂 (やや粘質) | 5. 黒褐色 (10YR 3/6) 極細砂 |
| 3. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細砂 (やや粘質) | 6. 暗褐色 (10YR 3/3) 粗粒砂 |

第117図 B-4 トレンチ掘立柱建物S B126実測図(1/100)

③出土遺物(第120・121図)

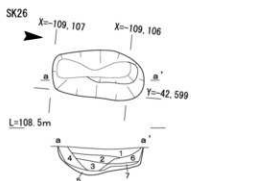
縄文土器(第119図719~726) 719~724は、土坑S K35から出土した縄文時代後期の北白川上層式で深鉢である。胴部の内外面に条痕が横走る。719・720・721は、口縁端部にみられる縄文と胴部外面の条痕との間が無文となる当該期の特徴がみられる。

725と726は、土坑S K28から出土した鉢形土器である。器形・法量は不明であるが、縄文時代後期(北白川上層式)のものであろう。

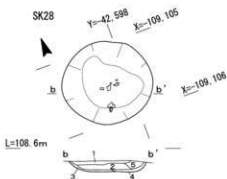
土坑S K28(第119図729) 729は敲石である。半分以上を欠損するが、扁平な円盤の周囲に帯状の敲打痕が廻る。石器作りなどに用いられる工具であらう。

ビットSP121(第119図730) 730はから出土したサヌカイト製の石鏃である。

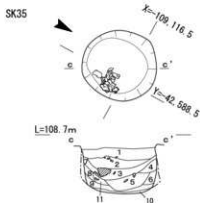
(黒坪一樹)



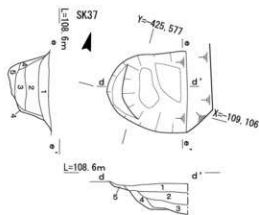
1. 黒褐色 (7.5YR 2/1) やや粘質あり極細砂 (礫なし)
2. 黒褐色 (10YR 2/2) 極細砂 (礫なし)
3. 黒褐色 (10YR 3/2) 粘質あり極細砂 (礫なし)
4. 暗褐色 (10YR 3/3) 細砂 (礫なし)
5. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 細砂 (礫なし・地山)
6. 黒褐色 (2.5YR 3/2) 細砂 (礫なし)
7. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 細砂 (礫なし)



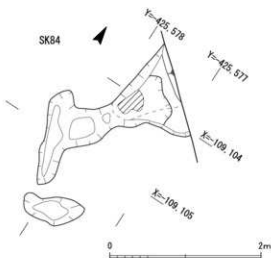
1. 黒褐色 (7.5YR2/1) 極細砂
2. 黒褐色 (10YR2/2) 極細砂
3. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細砂
4. オリーブ褐色 (2.5Y4/5) 細砂
5. 暗褐色 (10YR3/3) 極細砂



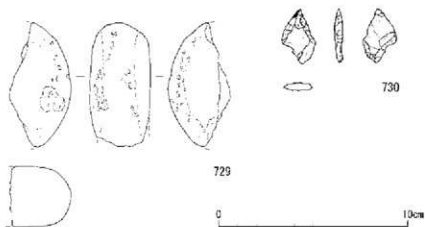
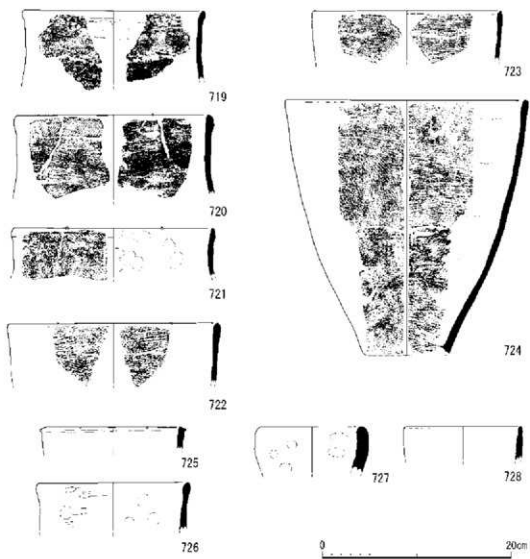
1. 黒褐色 (7.5YR2/2) 極細粒砂
(やや粘性、土器片が少量・炭化物を微量含む)
2. 極暗褐色 (7.5YR2/3) 極細砂
(やや粘性、土器片が少量・炭化物を微量含む)
3. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト混じり極細砂
(炭化物を微量含む)
4. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト混じり極細砂
(炭化物を少量含む)
5. 黒色 (7.5YR2/1) 極細砂
(やや粘性、土器片が少量・炭化物を多く含む)
6. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト混じり極細砂
(炭化物を微量含む)
7. 黒褐色 (7.5YR2/2) シルト混じり極細砂
(炭化物を微量含む)
8. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト混じり極細砂
(炭化物を微量含む)
9. 黒褐色 (7.5YR2/2) 極細砂
(やや粘性、炭化物を微量含む)
10. 黒褐色 (7.5YR3/2) シルト混じり極細砂
(やや粘性、炭化物を少量含む)
11. 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト混じり極細砂
(炭化物を少量含む)



1. 黒褐色 (10YR 2/2) 極細砂 (礫なし)
2. 黒褐色 (7.5YR 2/2) 細砂 (礫なし)
3. 暗褐色 (10YR 3/3) (礫なし)
4. 黒褐色 (2.5YR 3/2) 細砂 (礫なし)
5. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 細砂 (礫なし) 粘質なし



第118図 B-4 トレンチ土坑 S K 26・28・35・37・84 実測図 (1/50)



第119図 B-4トレンチ出土遺物実測図(1/4)

(15) B-5・6 トレンチ

①調査の概要

調査区は、II-H・L区にわたり、御霊神社から東に約300mのところ（第120図）。すぐ北側にはB-4 トレンチが位置する。B-5・B-6 両トレンチは、現在の当初水田区画に合わせて西側をB-5、東側をB-6として設定したが、実際の調査の際には1つの調査区として調査を行った。遺構面は過去のは場整備などで、かなり削平されており、現地表面から約0.2～0.4m下の同一面で、縄文時代～中世までの遺構を確認した。

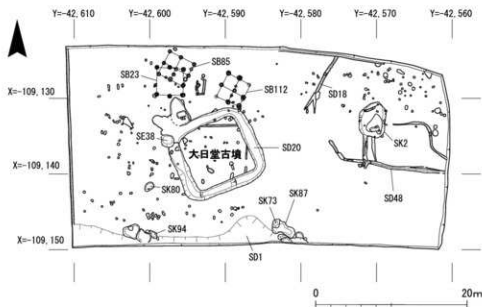
トレンチの層序は南壁で観察している。1層は黒褐色シルト質細粒砂で、B-4 トレンチから続く現代耕作土である。2層は暗オリーブ褐色シルト質細粒砂で現代耕作土であるが、B-4 トレンチには認められず、畑が異なることに由来していると考えられる。3層はオリーブ黒色粗粒砂質シルトは2層に伴う床土である。4層は暗褐色シルト質細粒砂層で若干の遺物を包含する。5層は黒色シルト質中粒砂層でSD01最下層埋土にあたる。5層の下に地山である灰黄色シルト質極細粒砂が認められる。

B-5 トレンチでは、掘立柱建物3棟、古墳1基、井戸1基などを検出し、B-6 トレンチでは、土坑1基とそれに伴う溝1条を検出した。

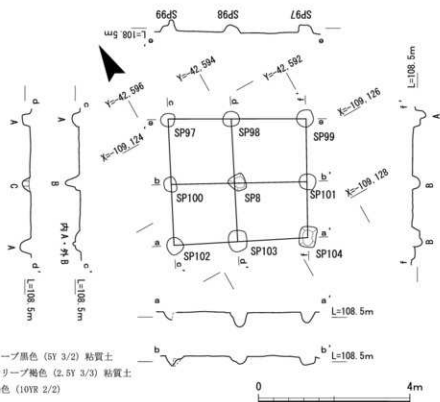
②検出遺構

掘立柱建物SB85（第121図） 2間四方（3.3～3.6m）の総柱建物である。柱間寸法は1.8mを測る。柱穴SP8・SP97～104で構成される。SP97～100は、径0.2～0.3mの楕円形の掘形をもつ。SP8・99では柱当たりを確認している。SP8は約0.3mの方形の柱穴である。SP101～103は径ないし一辺0.3～0.4mの掘形をもつ。SP8、SP104は隅丸方形を呈している。

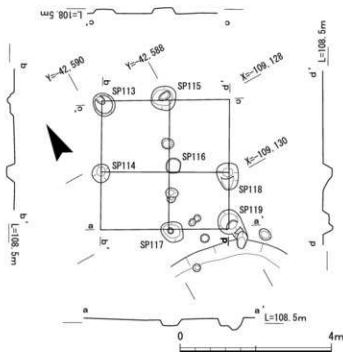
掘立柱建物SB112（第122図） 掘立柱建物SB85から東へ4.8mのところ（第120図）



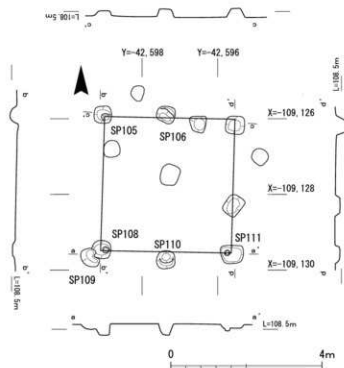
第120図 B-5・6 トレンチ遺構配置図(1/500)



第121図 B-5トレンチ掘立柱建物S B85実測図(1/100)



第122図 B-5トレンチ掘立柱建物S B112実測図(1/100)



第123図 B-5 トレンチ掘立柱建物 S B23 実測図 (L/100)

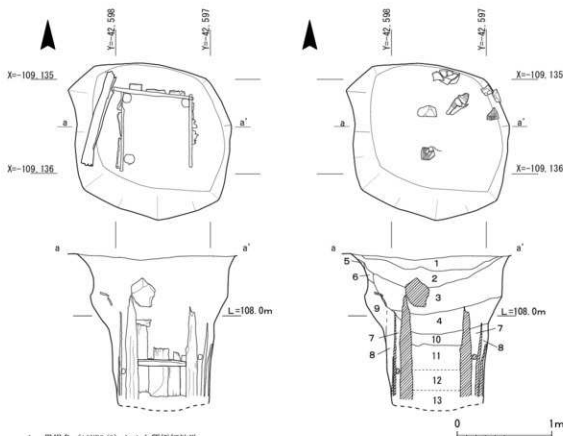
(3.3～3.5m)の総柱建物である。柱間寸法は1.8mを測る。ただし北東角と南西角の柱穴は検出できなかった。検出した柱穴は後世の削平により、残りは悪いが、S P 115では一辺0.6mの隅丸方形で、柱当たりは直径0.3m、深さ0.2mを測る。

掘立柱建物 S B23 (第123図) 掘立柱建物 S B85と重複する桁行2間(約3.3m)、梁行1間(3.5m)の掘立柱建物である。東西列の柱間寸法は1.1m、南北列の柱間寸法は2.4mを測る。南北列には中間に柱穴がなく、東西に比べて柱間が広い。柱穴は一辺0.45mの隅丸方形を呈している。柱穴の配列から門の可能性が考えられるが、堀の痕跡なども確認できないことから、現状としては掘立柱建物として報告する。

以上3棟の掘立柱建物は、S B85・112が主軸方位が北に対して約30°西へ振っているのに対し、S B23の主軸は正方位である。また、S B85とS B23は一部重なるように建てられているが、その前後関係は不明である。S B85とS B112は方位性、規模から同時期のものと考えられる。また、北側に位置するB-4 トレンチで主軸が北に対して約30°西へ振っている掘立柱建物 S B126を検出しており、この3棟は同時期の建物群として考えられる。

井戸 S E38 (第124図) 後述する大日堂古墳の北西角付近に掘られた井戸である。おおむね方形掘形を呈し、南北1.7m、東西1.6m、深さ1.6mを測る。井戸枠は縦板組横棧構造である。四隅には1m以上の隅柱が立てられ、隅柱は多角形に加工されている。縦板は厚さ2cm程度に加工され、一辺0.4m程度の角材状に加工された横棧に支えられている。検出時に須恵器破片が出土している。

井戸内の堆積状況から、1～4層は井戸が廃絶した後に流入したものと考えられる。また、9



- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色 (10YR3/2) シルト質極細粒砂 2. 黒褐色 (2.5YR3/2) シルト質極細粒砂 3. 暗オリーブ黒色 (7.5Y4/2) シルト質中粒砂 4. 灰色 (7.5Y5/1) シルト質細粒砂 5. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト質極細粒砂 6. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト質中粒砂 7. オリーブ黒色 (5Y3/2) 極細粒砂質シルト | <ol style="list-style-type: none"> 8. 黒色 (5Y2/1) 極細粒砂質シルト 10 がブロック状に混じる 9. オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト質中粒砂 10. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 細粒質シルト 11. 黒色 (2.5Y2/1) 細粒砂質シルト 12. 青灰色 (10B6/1) 細粒砂質シルト 13. 明緑灰色 (10GY7/1) シルト質細粒砂 湧水層 |
|---|---|

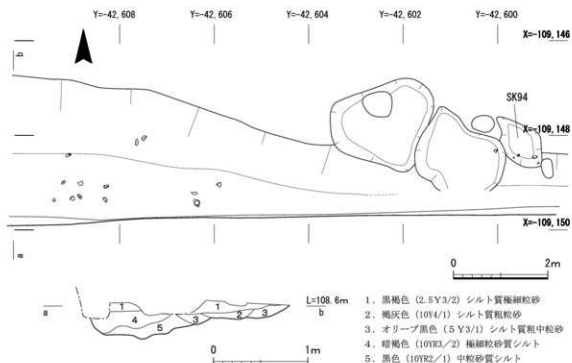
第124図 B-5トレンチ井戸SE38実測図(1/40)

層上面には枠板と思われる材が認められ、13層が湧水層で、縦板が13層中で途切れることから、ここが井戸の底と考えられる。12層から飛鳥時代の須恵器杯蓋が出土した(第130図759)ので、掘削時期は不明であるが、飛鳥時代には機能していたと考えられる。

溝SD1(第125図) 調査区の南辺に沿って検出した溝である。検出長31m、深さ0.42mを測る。最初期の溝に堆積したのは4・5層の暗褐色極細～黒色中粒砂質シルトである。4層からは土師器片、5層からは須恵器が出土している。3層のオリーブ黒色シルト質粗中粒砂、2層の褐灰色シルト質粗粒砂がラミナ状に堆積していることから、水流による堆積と推定する。

最終埋土である1層の黒褐色シルト質極細粒砂が堆積して、溝は埋まったと考えられる。堆積状況から人為的に埋め戻された痕跡は認められない。自然流路の可能性が高い。飛鳥Ⅱ～Ⅲ並行期の遺物が出土している。

大日堂古墳(第126図) 大日堂古墳は、今回の調査で新たに見つかった古墳である。調査地周辺の字名から大日堂古墳と名付けられた。大日堂古墳は方墳で、南北10.6m、東西11.6mを測る。調査前には古墳は完全に埋没しており、墳丘や主体部は削平されていた。古墳の主軸は北に対し



第125図 B-5 トレンチ溝 S D 1 遺物出土状況図・土層断面図(1/80・1/40)

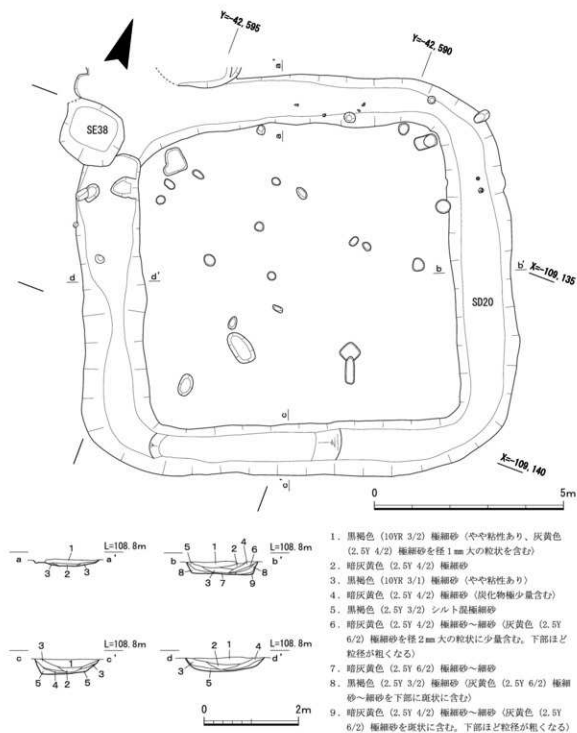
て25°西に振る。

大日堂古墳の周溝 S D 20は古墳の周囲をめくり、幅1.7m、深さ0.13～0.3mを測る。周溝の南東側(C-C')が最も深く掘削されている。周溝内の堆積状況は、3～9層が周溝として機能していた時期に堆積した自然堆積と考えられる。4層に炭化物を含む。5層は周溝側に堆積していることから、墳丘盛土が流れ込んだものであろう。また、9層は古墳の周囲から流れ込んだ堆積層と考えられる。2層は周溝の大半が埋没し、溝状に残存した窪地に堆積したものであろう。1層は周溝が完全に埋没した際の堆積層である。

周溝の北辺から東辺にかけて遺物が出土しており、6層中に認められることから、周溝に埋まっていく際に流れ込んだものと考えられる。TK47型式並行期の須恵器が主体であることから、古墳時代後期初めの古墳と考えられるが、布留式土器が出土していることから、さらに古くなる可能性もある。

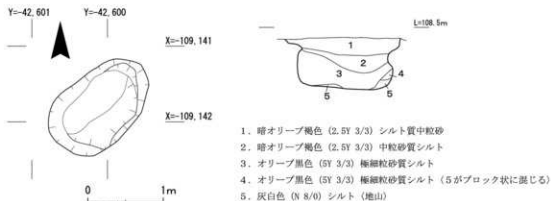
土坑SK80(第127図) 平面形は楕円形を呈し、南北0.92m、東西1.5m、深さ0.69mを測る。断面形は深さ0.2mのところまで一旦すぼまり、底は水平になるように掘削されており、不定形ながらフラスコ状を呈している。3層から縄文土器片が出土しているが、小片のため図示していない。

土坑SK2(第128図) 平面形は楕円形を呈し、南北5.0m、東西3.4m、深さ0.22mを測る。南に向かって溝SD48が延びる。瓦器、土師器が出土したので中世以降の遺構と考えられる。6層に焼土が若干混じること、鉄滓が出土していること、床面の一部が被熱していることなどから鍛冶作業に関連する遺構の可能性もある。また、土坑の東辺に沿ってピットが3基認められることから、東側に傾斜する簡易な上部構造が設置されていた可能性がある。



第126図 B-5 トレンチ大日堂古墳実測図 (1/100)

溝SD48(第120図) 土坑SK2の南から延びる「L」字状を呈する溝である。検出長14.0m、深さ0.2mを測り、SK2から南へ4m付近のところで東へ折れる。SK2と接続する付近では、0.2m大の礫を複数検出した。溝全体に認められるものではないため、溝に伴うものかは不明である。



1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) シルト質中粒砂
2. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 中粒砂質シルト
3. オリーブ黒色 (5Y 3/3) 極細粒砂質シルト
4. オリーブ黒色 (5Y 3/3) 極細粒砂質シルト (5がブロック状に混じる)
5. 灰白色 (N 8/0) シルト (地山)

第127図 B-5 トレンチ土坑 S K 80 実測図 (1/50)

③ 出土遺物

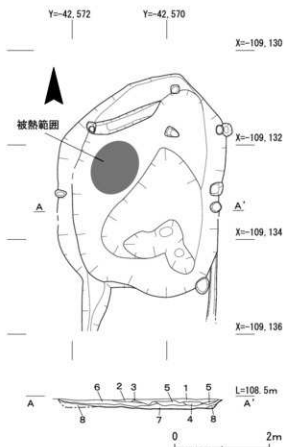
a) 遺構精査時 (第129図731～739) 731は、須恵器の杯身である。732・433は須恵器の蓋である。734は須恵器杯の口縁部である。735・736は土師器小皿である。737は土師器皿である。外面にはユビオサエが残る。738は白磁碗の口縁部である。739は、東播系の鉢口縁部である。

b) B-5 トレンチ出土遺物

溝 S D 1 (第130図740～757) 740～742は須恵器蓋である。いずれもやや扁平な宝珠つまみが付く。口縁端部内面にかえりを持たない。743は須恵器杯Hで、器高は低く、立ち上がりは低く内傾している。T K 43型式並行期と考えられる。

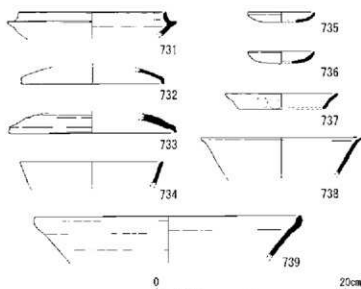
746・747・750・751は須恵器杯Gである。

744・745・748・749は須恵器杯Bである。744は全体に小ぶりである。745は底部が浅く、若干後出するタイプのものか。749は口縁部を外上方へ丸くおさめる。753は腿の口縁部である。口縁部と頸部の境に稜を設け、それぞれに4～5条の拂描きによる波状文を施す。T K 43型式並行期のものであろうか。754は土師器杯である。内面に2段の放射状暗文を施す。



1. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト質極細粒砂 (大礫を包含する)
2. 黒褐色シルト質 (2.5Y 3/2) シルト質極細粒砂
3. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) シルト質極細粒砂
4. 黒褐色シルト質 (2.5Y 3/2) シルト質極細粒砂
5. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 極細～細粒砂質シルト
6. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト質中粒砂 (粘土若干包含する)
7. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 極細～細粒砂質シルト (大礫を包含する)
8. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 極細～細粒砂質シルト

第128図 B-6 トレンチ土坑 S K 2 実測図 (1/80)



第129図 B-5トレンチ出土遺物実測図1(1/4)

溝SD18(第130図758) 758は須恵器皿である。

大日堂古墳周溝SD20(第130図759~763) 759・764は須恵器蓋である。759は口径に対して器高が高い。天井部と口縁部を分ける稜は明瞭である。764は天井部と口縁部を分ける稜は不明瞭である。ともにTK47型式並行期と考えられる。

761は甕である。波状文などの文様は施されていない。肩部と体部の境には浅い沈線がめぐる。TK209型式並行期と考えられる。762は小形丸底壺である。底部に人為的に穿孔した痕跡が認められる。また、底部外面には赤色顔料が付着している。外面にはハケメが上半部は縦方向に、下半部は不定方向に施される。内面にはハケメが横方向に施される。布留式土器と考えられる。763は土師器甕である。外面にはハケメが施される。

井戸SE38(第130図765・766) 765は須恵器蓋である。766は須恵器杯Gである。

土坑SK87(第130図768) 768は須恵器杯Bである。

土坑SK94(第130図769~771) 769は瓦器椀である。外面は摩滅しているが、ミガキの痕跡が認められる。また、内面に暗文を施す。770は須恵器杯Gである。771は須恵器杯Bである。焼きひずみが著しい。

土坑SK73(第130図767) 767は土師器鉢である。外面は粗いナデ、縦方向のハケメが施される。

製塩土器(第131図772~777) B-5トレンチの遺構面精査時に出土した。外面にユビオサエの痕跡が残る。775では粘土紐の痕跡が口縁部の直下に認められる。

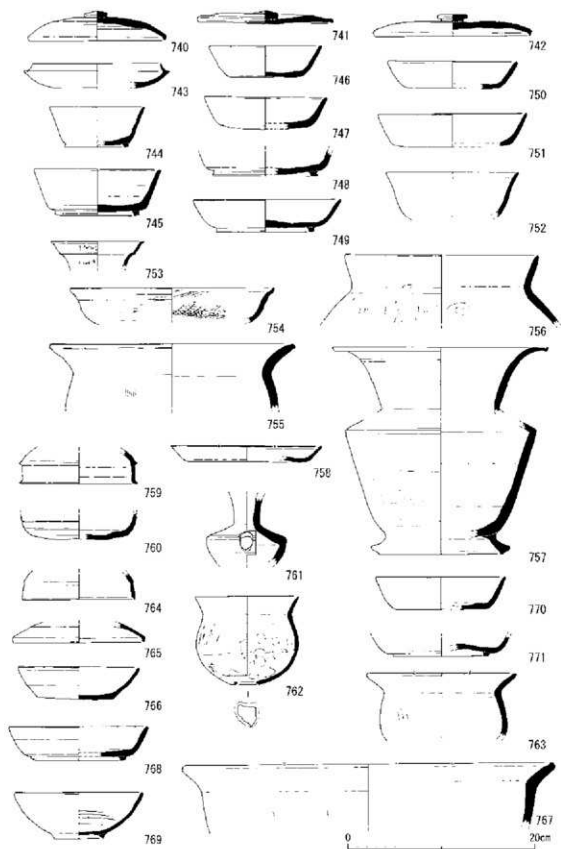
石器(第131図778・780) 778は大日堂古墳周溝SD20から出土したサヌカイト製の石鏃である。自然面が残っており、未成品である。

鉄製品(第131図779) 779は溝SD1から出土した刀子である。形状から切先と考えられる。780はB-6トレンチ土坑SK2から出土した鉄滓である。不定形の鍛造滓で表面には気孔が認められる。

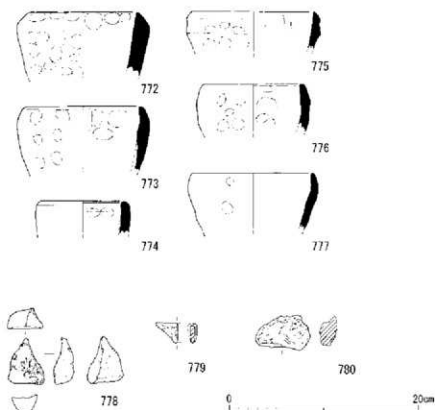
756は須恵器壺である。口縁部は外上方に開き気味である。外面にはタタキ、内面には同心円文が認められる。

755は土師器甕である。外面には5~6条を単位としたハケメが施される。

757は須恵器広口壺の口縁部から頸部である。頸部に2条の沈線を施す。体部から底部とは接合しないが同一個体と思われる。肩部と体部の境には浅い沈線がめぐる。



第130図 B-5 トレンチ出土遺物実測図2 (1/4) 遺構



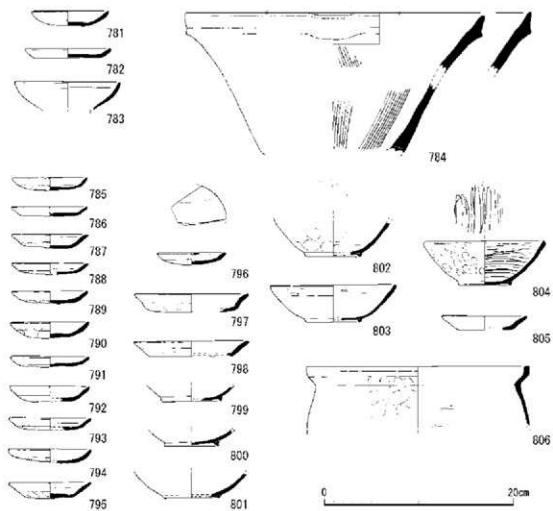
第131図 B-5・B-6トレンチ出土遺物実測図(1/4)

c) B-6トレンチ出土遺物

遺構面精査時(第132図781~784) 781・782は土師器皿である。783は瓦器碗である。784は陶質の播鉢である。

土坑SK2(第132図785~787・789~806) 785~787・789~795は土師器皿である。796・793~795は直径8cm、797・798は直径12cmを測る。785は内面にミガキの痕跡が認められる。799~804は瓦器碗である。43は内面全体にミガキ、底部に暗文を施す。805・788は土師器皿である。806は瓦質の鍋である。内面には15本/2cmの工具によりハケメが施される。

(竹村亮仁)



第132図 B-6トレンチ出土遺物実測図(1/4) 遺構ほか

3)平成29年度の調査

(1)16トレンチ

①調査の概要

16トレンチは、Ⅱ-X区で後述するC-1トレンチの南に隣接する水田に設定した調査区である(第133図)。東西約66m、南北約28mにわたる逆「T」字形を呈する。調査区全体にわたって自然流路を検出しており、掘立柱建物などの人為的な遺構は検出されなかった。基本的な層序は上層より現代の耕作土、床土、暗褐色細砂、遺構検出面となる暗褐色極細砂となる。

②検出した遺構(第133図)

溝S D95 調査区の北西部で検出した溝である。検出長約9.7m、幅0.5~0.8m、深さ約0.4mである。須恵器、土師器、瓦器の細片が少量出土した。

溝S D96 調査区の南西隅から北東隅にかけて検出した自然流路である。検出長約36.0m、幅0.6~4.9m、深さ約0.9mである。溝の底は南西から北東へ向かって低くなる。調査区の南西隅で溝S D97と分岐する。自然流路なので流路幅が一定しない。S D96はC-1トレンチの南東隅で検出した自然流路N R05と同一のものである可能性がある。遺物は出土しなかった。

溝S D97 調査区の南西隅から東にかけて検出した自然流路である。検出長約28m、幅1.2~2.1m、深さ0.1~0.7mである。溝の底は西から東へ向かって低くなり、中央付近が最も深くなる。この付近から東へ向かって少しずつ高くなる。調査区の南西隅で溝S D96と分岐している。遺物は出土しなかった。

③出土遺物

調査区内の掘削や精査の際に須恵器や土師器などの遺物が出土したが、いずれも細片である。また、床土の直下からも遺物が出土しているが、いずれも近世の瓦や陶器片などである。このため今回は報告しない。

(浅田洋輔)

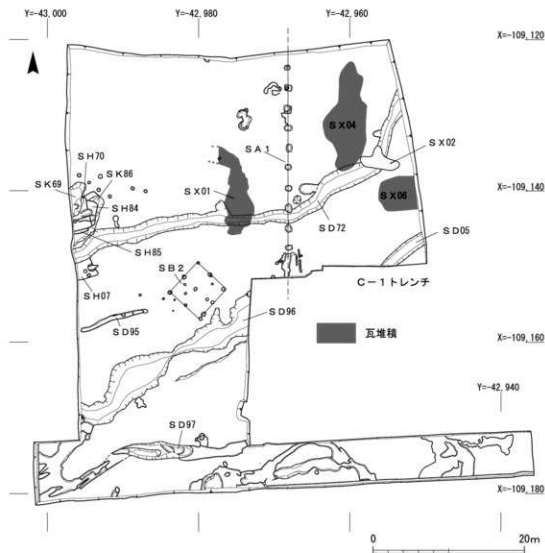
(2)C-1トレンチ

①調査の概要

C-1トレンチはⅡ-X区にあり、御霊神社の南に位置する調査区である(第2・133図)。14トレンチから西へ約160m、16トレンチの北側に位置する。小規模調査C-1a区及びC-1b区を設定して調査を行ったところ、両調査区において軒瓦片を含む多量の瓦片が出土した。また、C-1b区では隅丸方形の柱穴を抽出した。以上のような遺構・遺物を確認したため調査対象地全体に調査区を拡げて本調査を実施した(以下、調査区名をC-1トレンチとした)。

なお、基本的な層序は上層より現代の耕作土、床土、黒褐色シルトとなり、この層から瓦類が出土する。黒褐色シルト層の下層は黒褐色極細砂、遺構面である暗褐色極細砂となる。

調査では、床土から0.2~0.3m掘り下げると瓦溜まりが複数検出された。瓦溜まりを掘り進める前に小地区割りのラインに沿って複数箇所ですち割りを行った。断面の観察から、これらの瓦溜まりは瓦を使用していた施設の廃絶に伴う遺構ではないことが判明した。瓦溜まりの分布範囲



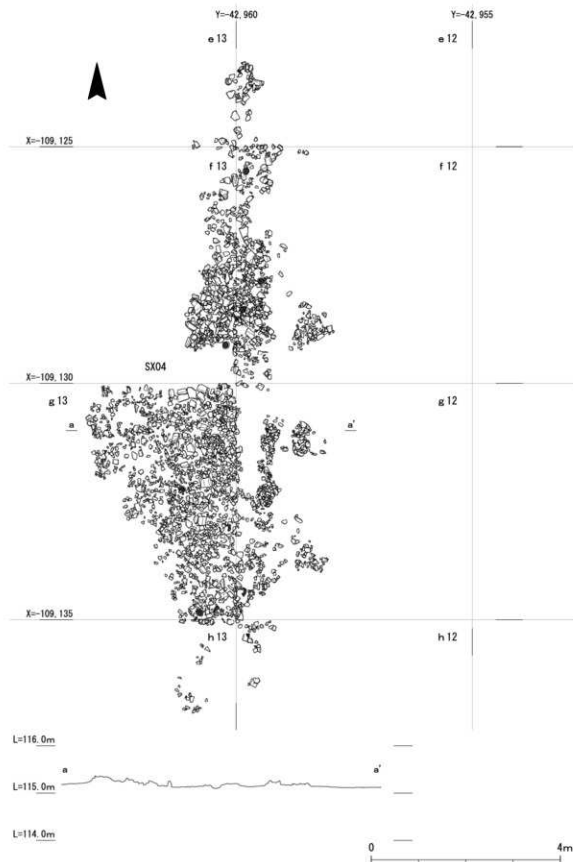
第133図 16・C-1 トレンチ遺構配置図1 (1/500)

を確定させた後に図面等の作業を進めた。図化作業の終了後、瓦類の分布域と出土量を把握するために5m四方の小地区割りごとに掘り下げを行い、瓦を取り上げた。瓦の取上げを行った後、小規模調査で確認していた遺構面まで黒褐色極細砂層を重機で掘削を行い、精査を行った。

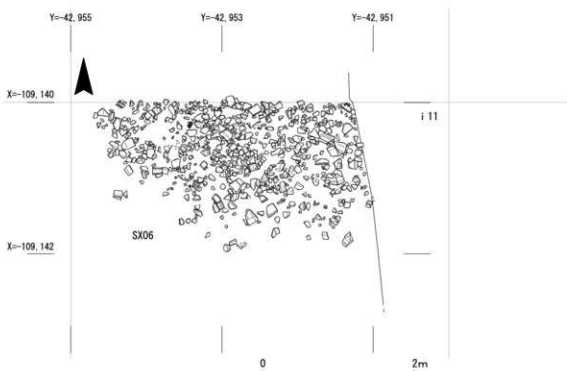
② 検出遺構

平成28年度の小規模調査では瓦片が集中して出土した。C-1 a区では、調査区東壁中央部付近で瓦が出土しており、これが瓦溜まりSX01の一部である。C-1 b区では、調査区の東端部で瓦片が集中して出土しており、これが瓦溜まりSX06の西端部にあたる。

瓦溜まりSX01 調査区の中央で、表土から約0.6m掘り下げて検出した瓦溜まりである。規模は東西約4.8m、南北約12.0mである。遺構面より約0.2m上面で検出した。約10cm大の碟とともに多数の軒瓦を含む瓦片が出土した。軒瓦は複数の型式が出土したが細片が多い。瓦片より碟の方が相対的に多い。土器など時期を判断できる遺物が出土していないため、瓦溜まりが形成された正確な時期は不明である。後述する瓦溜まりSX04・06に比べると瓦の出土量は少ない。



第134図 C-1トレンチ瓦溜まりSX04出土状況図(1/80)



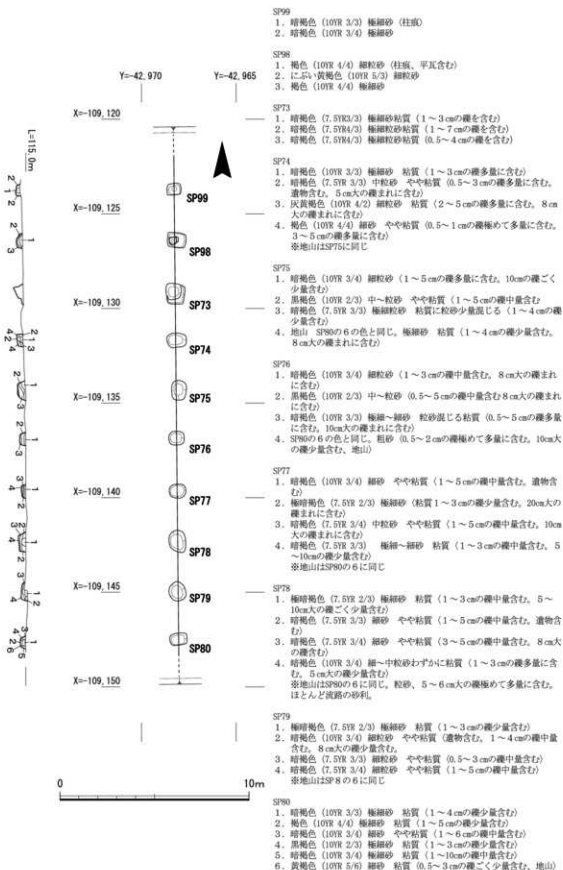
第135図 C-1 トレンチ瓦溜まり S X06出土状況図(1/50)

瓦溜まり S X04 (第134図) 調査区の東部で瓦溜まり S X01 と同一層で検出した瓦溜まりである。規模は東西約5.6m、南北約13.9mに拡がり、大量の瓦片が出土した。この中には、複数の型式の軒瓦が多数含まれている。軒瓦の中では綾中庵寺と同範の瓦が最も多く出土した。軒瓦は比較的瓦当部の残りが良いものも出土しているが、丸・平瓦の多くは細片である。遺構の検出面や断面を観察すると、明確な瓦溜まりの掘形は確認できなかった。瓦片がほとんどが細片であることや、明確な掘形が確認できないことを考えると、S X04は瓦を使用していた施設の廃絶に伴って廃棄された瓦溜まりとは考えにくい。後世の耕作等によって移動されて廃棄されたものではないかと考えられる。

瓦溜まり S X06 (第135図) 調査区の南東部で瓦溜まり S X01 と同一層で検出した瓦溜まりである。規模は東西約3.4m以上、南北約4.0m、深さ約0.3mである。軒瓦片を含む多数の瓦の細片が重なり合うように出土した。瓦を取り上げていくと、最下層付近では依存状態の良い平瓦が複数出土した。瓦溜まりは調査区外の東側に拡がっている。時期がわかる遺物が出土していないので、瓦溜まりが形成された正確な時期は不明である。

攪乱 S X02 (第133図) 調査区の南東隅で検出した攪乱である。床土直下より掘り込まれる。軒瓦片を含む少量の瓦片が出土した。

掘立柱塼 SA 1 (第136図) 調査区の中央で検出した掘立柱塼である。一辺約0.7～1.0m、深さ約0.6～0.8mの方形柱穴が2.5～2.7m間隔で南北方向に並ぶ。9間分を確認した。6か所の柱穴で直径0.2～0.6mの柱痕を確認した。柱痕埋土は暗褐色極細粒砂である。掘形は褐色系の埋土である。柱穴のうち北側の柱穴 S P98柱痕から2点、柱穴 S P99掘形から1点の瓦の細片が出土した。瓦



第136図 C-1 トレンチ掘立柱塚 SA1 実測図(1/200)

の細片以外に遺物が出土していないので、正確な時期は不明である。ただし、掘形の埋土から瓦片が出土していることから、瓦を使用した施設の整備がある程度進んだ奈良時代以降に、掘立柱塀が営まれたと考えられる。

掘立柱建物 S B 2 (第133図) 調査区南端の C-1 トレンチと 16 トレンチの境界部付近で検出した掘立柱建物である。2 間四方 (約 5.4m 四方) の総柱建物である。柱穴は直径約 0.5～0.6m の円形掘形である。柱穴から遺物が出土していないため時期は不明である。主軸が掘立柱塀 S A 01 とは異なることから、別の時期の遺構と考えられる。

溝 S D 05 (第133図) 調査区の南東隅で検出した自然流路である。検出長約 6.7m、幅約 1.8m、深さ約 0.9m である。16 トレンチで検出した溝 S D 96 と同一の遺構である可能性がある。遺物は出土しなかった。

溝 S D 72 (第133図) 調査区の南西部から北東部にかけて検出した自然流路である。検出長約 51.5m、幅約 1.9～3.2m、深さ約 0.3～0.9m を測る。遺物が出土していないので正確な時期は不明であるが、重複関係から竪穴建物 S H 07 よりも新しく、掘立柱塀 S A 01 よりも古いことがわかる。古墳時代後期以降、奈良時代以前に形成されたと考えられる。 (浅田洋輔)

竪穴建物 S H 70 (第137図) S H 70 は、C-1 トレンチ西壁面沿いで検出した。南側 4m には竪穴建物 S H 07 が位置する。土坑 S K 86、竪穴建物 S H 84・85 を削平し、土坑 S K 69 に削平される。平面形は隅丸方形と考える。西半部は調査区外となる。東辺 4.2m、南辺は残存長 2.6m、深さ 0.2m を測る。建物の主軸は、北から 8° 西に振る。全体に残存状況は良くない。床面には厚さ 5cm 程度の貼り床が認められる。

東側周壁の中央部に竈が認められる。残存状況は悪く、竈袖部の基底部付近のみ残存する。竈は平面馬蹄形で、長軸 1.35m、短軸 0.8m を測る。煙道部分は周壁外に突出する。燃焼部中央付近に長軸 0.6m、短軸 0.25m の焼土の拡がりが見られる。竈を中心に、直径 1.5m ほどの範囲に土師器や須恵器が点在して出土した。わずかに遊離した状態で出土したこと、出土状況に規則性が見いだせないことなどから、竪穴建物廃棄時の埋没と考える。

竈から南西 1.1m の調査区壁際で、主柱穴と考えられる柱穴 S P 83 を確認した。S P 83 は径 0.46m、深さ 0.3m を測る。中央で径 0.26m の柱痕を確認した。S H 70 の貼り床検出時に土坑 S K 87 を検出した。東西 2.5m、南北 0.8m を測り、S K 87 の上面に貼り床は確認できなかった。S K 87 は S H 70 の貼り床を削平し、下層に位置する竪穴建物 S H 84 も削平している。平面・断面ともに不整形であり、遺物も出土しなかったことから、時期や性格等は不明である。

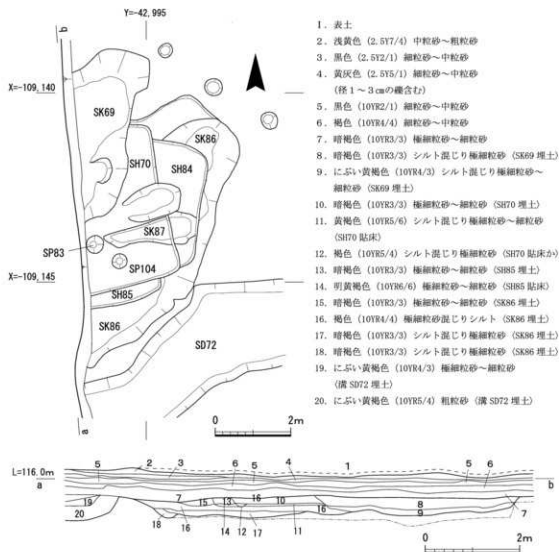
竪穴建物 S H 85 (第137図) 竪穴建物 S H 70 に削平される。後述する竪穴建物 S H 84 との前後関係は不明である。平面形は不明瞭であるが、隅丸方形である可能性がある。南辺の残存長 2.2m、深さ 0.2m を測る。残存状況は良くない。床面には厚さ 6cm 程度の貼り床が認められる。S H 85 に伴う柱穴として、柱穴 S P 104 を確認した。S P 104 は S H 70 の貼り床よりも下層で検出した。径 0.42m、深さ 0.2m を測る。

竪穴建物 S H 84 (第137図) 竪穴建物 S H 70 に削平される。竪穴建物 S H 85 との前後関係は不

明である。平面形は隅丸方形である。建物の主軸はSH70や後述する堅穴建物SH07とは異なり、北から10°東に振る。主柱穴・周壁溝・貼り床などは確認できなかった。

土坑SK69(第137図) 堅穴建物SH70・84を削平する。平面形・断面形ともに不整形で、具体的な使用目的をもって掘削された遺構とは考え難い。西半部は調査区外となり、正確な平面形は不明であるが、検出した範囲では、南北方向に長軸を採る。長軸4.3m、深さ0.4mを測る。埋土は大きく2層に分かれる。埋土から須恵器杯身片が出土した。

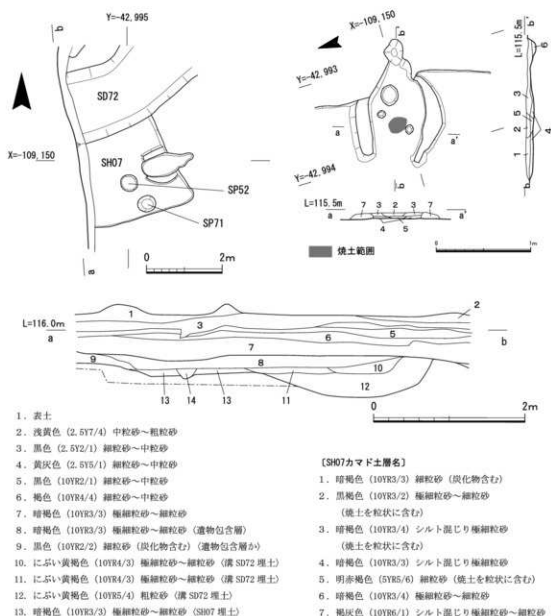
土坑SK86(第137図) 最下層に位置しており、堅穴建物SH70・84・85や土坑SK69に削平される。平面形・断面形ともに不整形である。南北4.6m、東西4.0mを測る。土坑の底には挟られたような不整形な円形の痕跡が複数確認できる。埋土から須恵器片が出土した。SK86は、底面が不整形であることから人為的な掘削か、土石流などの自然現象による痕跡なのか、不明であるが、埋土にブロック混じりの土を認められることから、人為的に埋められたと考えられる。し



第137図 C-1 トレンチ堅穴建物SH70・84・85実測図(1/100)

かし、何を目的として埋められたかが明らかにすることはできなかった。出土した須恵器も細片であり、上層に位置する S H84・85・70との時期差も不明瞭である。

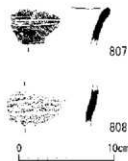
竪穴建物 S H07(第138図) C-1 トレンチ西壁面沿いで検出した。西半部は調査区外となる。自然流路の可能性のある溝 S D72に削平される。平面形は方形で、東辺の残存長は2.6m、南辺の残存長は2.8mを測る。深さは0.1mである。残存状況は良くなく、特に南辺は不明瞭な箇所がある。建物の主軸は北から30°西に振っており、竪穴建物 S H70と方位が類似する。床面上で柱穴 S P52・71を検出した。S P71は深さ0.3mを測り、主柱穴となる可能性がある。竪穴建物の南東隅から東壁沿いに北へ0.8mの地点に竈が造りつけられている。竈の残存状況も良くなく、両袖部の基底部分約6cmのみが残存する。煙道部分が竪穴建物の周壁外に約0.4m突出している。



第138図 C-1 トレンチ竪穴建物 S H07実測図(1/100)

竈袖部の平面形は、倒卵形に近い。竈の燃焼部付近では、径40cmの範囲に焼土を確認した。燃焼部の焼土より若干浮いた状態で、土師器片が数点出土した。出土状況から竈崩落時の埋没と考える。竪穴建物の埋土から、土師器片が数点出土した。周壁溝や貼り床は確認できなかった。SH70・84・85とは近接していることから、同時期に併存していたとは考えにくい。

(荒木瀬奈)

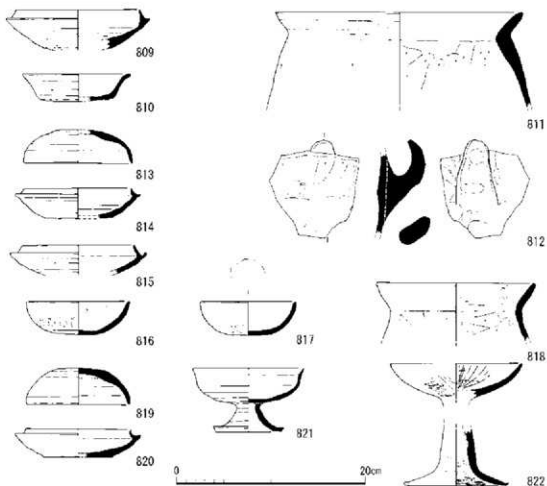


第139図 C-1トレンチ
出土遺物実測図1(1/4)
縄文土器

③出土遺物(土器)

縄文土器(第139図807・808) f18から出土した縄文土器片である。807は残存長縦4.2cm、横5.8cmである。外面口縁部付近に3本の沈線を施す。これより細い沈線で斜め方向にも3本の沈線を施す。内外面はナデを施す。808の残存長は縦3.8cm、横7.3cmである。807に比べ太い沈線を4本施す。

小規模調査(第140図809~812) 809は須恵器杯身、810は須恵器杯である。C-1b区から出土した。809は口径13.0cm、残存高4.2cmである。内外面に回転ナデを施す。外面底部はケズリを施す。810は口



第140図 C-1トレンチ出土遺物実測図2(1/4) 第8次調査小規模調査・遺構面精査時

径11.0cm、器高2.9cmである。内外面に回転ナデを施す。底部に重ね焼き痕が見られる。811・812はC-1a区で出土した。811は土師器甕である。口径26.0cm、残存高10.2cmである。体部内面にはケズリを、外面にはハケを施す。口縁部には細かいヨコハケを施す。812は土師器把手である。縦10.5cm、横9.5cmである。内面はケズリを、外面はナデを施す。

遺構面精査時(第140図813～822) 813はi14で出土した須恵器杯蓋である。口径11.4cm、器高3.5cmである。内外面に回転ナデを施す。底部は内面にナデ、外面にヘラケズリを施す。

814・815は須恵器杯身である。814はg12で出土した。口径11.4cm、残存高3.2cmである。内外面に回転ナデを施す。815はh11で出土した。口径11.8cm、残存高3.1cmである。内外面に回転ナデを施す。

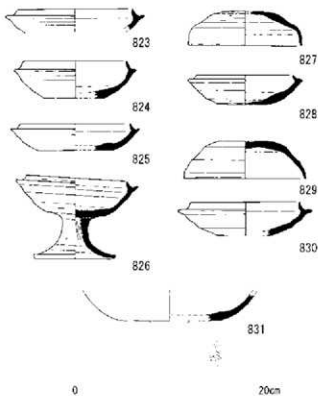
816・817はi12から出土した土師器碗である。816は口径10.9cm、器高3.6cmである。内外面にナデを施す。内面口縁部付近はミガキを施す。817は口径10.0cm、器高3.55cmである。内外面にナデを施す。口縁部はヨコナデを施す。内面に暗文を施す。底部外面はユビオサエ痕が残る。818はg12で出土した土師器甕である。口径16.4cm、残存高6.1cmである。体部内面はケズリを施し、外面はハケを施す。口縁部はハケの後にナデ消す。

819は須恵器杯蓋でf17から出土した。口径10.7cm、器高3.85cmである。内外面に回転ナデを施す。底部外面は回転ケズリを施す。820は須恵器杯身で、f18で出土した。口径11.1cm、器高3.0cmである。内外面に回転ナデを施す。

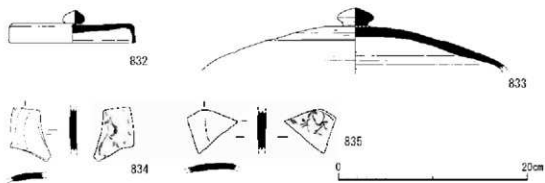
外面底部はケズリ残す。821はe18から出土した須恵器高杯である。口径11.7cm、器高6.75cm、脚部径6.9cmである。内外面に回転ナデを施す。杯底部は回転ケズリを施す。822はf18で出土した土師器高杯である。杯身は口径13.8cm、残存高3.7cmである。外面は口縁部付近にヨコナデを施し、ほかはケズリの後にミガキを施す。内面は全体ミガキである。高杯脚部は脚部径10.4cm、残存高4.5cmである。外面は縦方向にナデを施し、底部はヨコナデを施す。内面はヨコハケを施す。内面に絞り痕を残す。

(浅田洋輔)

土坑S K 69(第141図823) 823は須恵器杯身である。S K 69の層から出土した。口径は12.2cmを測る。口縁部はやや内傾しながら、端部を上方へつまみ上げる。



第141図 C-1トレンチ出土遺物実測図3(1/4)
土坑S K 69・堅穴建物S H 70ほか



第142図 C-1トレンチ出土遺物実測図4(1/4) 瓦溜まりSX04

竪穴建物SH70(第141図824~826・831) 824~826・831は須恵器である。824・826は甕付近で出土しており、竪穴建物廃棄時に埋没したものと考える。825は貼り床掘削時に出土した。

824・825は杯身である。口径11.0~11.9cmを測る。いずれも受け部が付くタイプであり、底部付近を平底状に整形し、ヘラケズリを施す。825はやや扁平な印象を受ける。826は低脚高杯である。正面観はやや傾く。杯部は口径14cmを測り、受け部が付くタイプであり、その形状は竪穴建物内で出土しているほかの須恵器杯身と類似する。脚部にスカシ孔はなく、脚裾部は「ハ」の字状に開き、端部に面をつくる。以上3点の時期は古墳時代後期後半~末と考える。

831はSH70掘削時に出土した須恵器杯身であり、底部から立ち上がり付近のみ残存する。底部端と立ち上がりの境目付近に長軸3cm、短軸1.5cm程の線刻が確認できる。線刻は、山椒の葉のような形状のものが1単位表現されているが、詳細は不明である。

竪穴建物上面精査中遺物(第141図827~830) 827~830は、トレンチ西壁付近の竪穴建物検出時に、竪穴建物の上層付近を精査中に出土した。いずれも須恵器である。827・829は杯蓋である。天井部に約6cmの平坦面をつくる。口径12.0~12.8cmを測り、口縁端部は丸くおさめる。828・830は杯身である。828は口径10.2cmを測り、内傾する短い受け部が付く。器厚は6mm前後であり、やや厚みのある印象を受ける。830は口径11.6cmを測り、内傾する受け部が付く。口縁端部は上方につまみ上げる。いずれも古墳時代後期後半~末と考える。

(荒木瀬奈)

瓦溜まりSX04(第142図832~835) 832~835は須恵器蓋である。832は口径13.4cm、器高3.5cmである。833は残存高6.55cmである。内面が研磨によって摩耗している。わずかに墨が付着しているので転用視の可能性がある。834は残存長5.8cm、残存幅4.35cmである。835は残存長4.55cm、残存幅5.3cmである。834・835の調整は内面に回転ナデを施し、外面は回転ケズリの後にナデを施す。いずれも内面には全体に墨が付着する。

④出土遺物(瓦類)

C-1トレンチの水田では、過去に亀岡市教育委員会の試掘調査において布目瓦が出土した。⁽⁸⁷⁾第9次調査では、第8次調査(平成28年度)の小規模調査C-1a区、C-1b区で出土した型式以外の複数の型式を含む遺物整理箱約190箱分の瓦片が出土した。もっとも数量が多いのは丸・平瓦片であり、遺物整理箱約170箱分であった。軒瓦は7型式12種類152点に及ぶ。ほかにも垂木

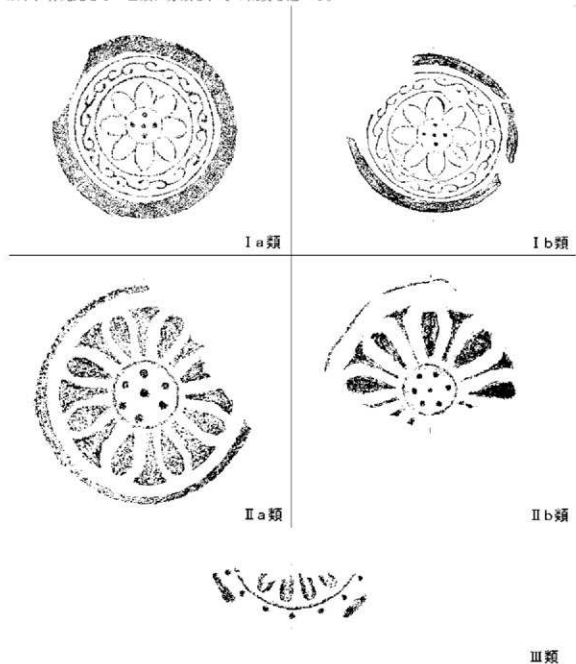
先瓦と思われる瓦片など道具瓦がごく少量出土した。瓦類の大半は瓦溜まり S X 01・04・06 から出土しており、これらの遺構は掘立柱塼の検出面より上層で検出している。

出土した瓦片は細片がほとんどであり、断ち割り断面を観察すると明確な掘り込みがないことから、これらの瓦溜まりは掘り起こされた瓦が二次的に投棄されたものと考えられる。

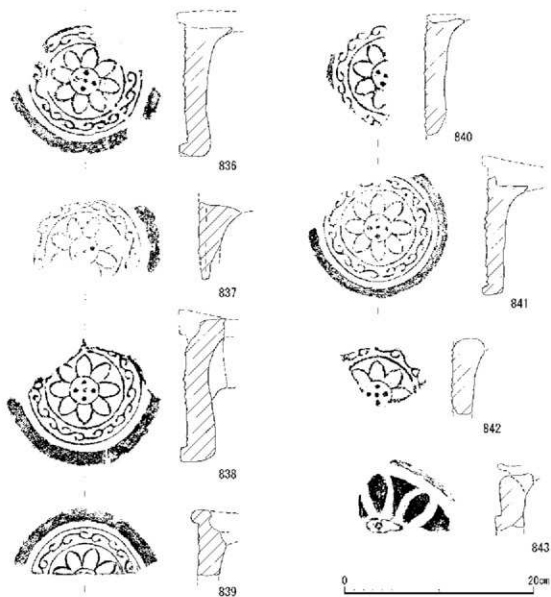
a) 軒丸瓦

ア. 軒丸瓦の分類(第143図)

軒丸瓦は3型式5種類存在する。これらは瓦当文様で素弁蓮華文軒丸瓦、細弁蓮華文軒丸瓦に大別できる。内訳は素弁蓮華文軒丸瓦2型式4種類、細弁蓮華文軒丸瓦が1型式1種類である。以下、軒丸瓦をⅠ～Ⅲ類に分類し、その概要を述べる。



第143図 佐伯遺跡出土軒丸瓦分類図

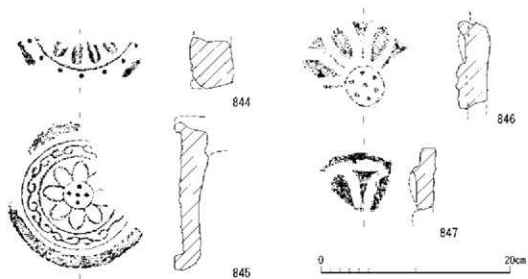


第144図 C-1トレンチ出土遺物実測図5(1/4) 軒丸瓦1

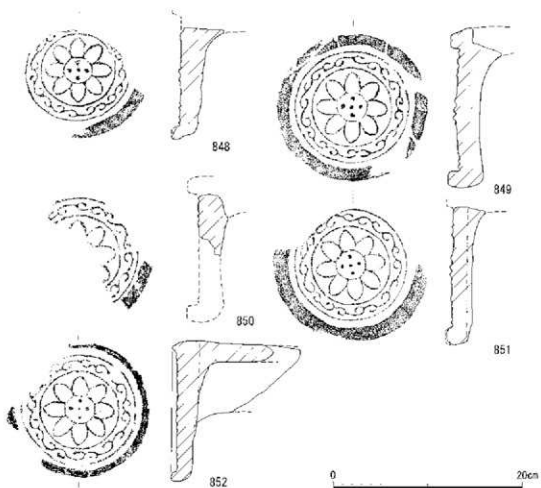
軒丸瓦Ⅰ類 素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。外縁は素縁直立である。内区の蓮弁は輪郭のみを表している。中房は圏線で表し、1+4の蓮子を配する。外区は唐草文と外側に圏線がめぐる。瓦当部に范の木目が見られる瓦が複数存在する。小さい范傷がいくつか存在する。

綾中麁寺の軒丸瓦Ⅲ類と同范⁽⁸³⁶⁾である。この型式が今回の調査では最も多く出土した。外縁の太さで2種類に細分できる。Iaは外縁が太く、文様の隆起がしっかりしているものが多い。范傷もこの種類の遺物に多く確認できる。Ibは外縁が細く、外縁の形状が丸みを帯びるものが複数存在する。

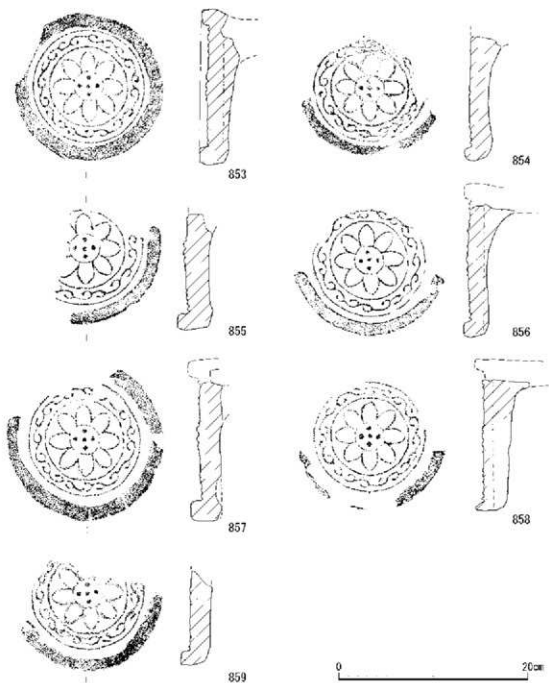
Iaは文様の彫りが深いものも多く、范傷を確認できるものが多い。Ibは彫り直しの痕跡が見られるものが複数存在し、外縁の形状もまちまちである。以上のことからIaが先行し、使用が進んだことで范が摩耗したため彫り直されたものがIbであると考えられる。Ibは外縁の側面を強く削っているものや、外縁全体を強くなでることで、Iaでは直立していた外縁が丸みを



第145図 C-1 トレンチ出土遺物実測図 6 (1/4) 軒丸瓦 2



第146図 C-1 トレンチ出土遺物実測図 7 (1/4) 軒丸瓦 3

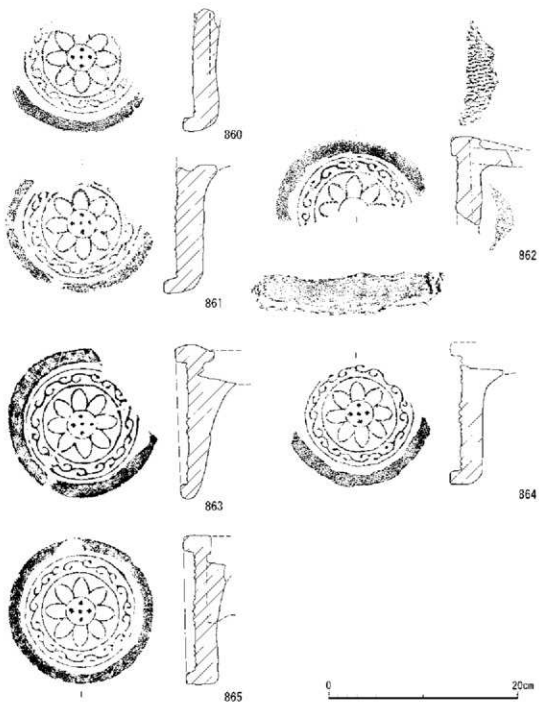


第147図 C-1トレンチ出土遺物実測図8(1/4) 軒丸瓦4

帯びる外線になっているものが複数存在する。範自体は変わらないが、影り直しや外線の調整方法を変えることで使用を続けてきたのがI bであると考えられる。

I類全体で106点の軒丸瓦片が出土した。出土した軒丸瓦I類の破片の点数は、I aが66点、I bが17点、外線が残っていないため、細分できないものが23点である。C-1トレンチにおける分布は、f12の20点が最も多くなり、g13の19点、f13で12点、i11の11点と続き、その周辺で少量出土している。

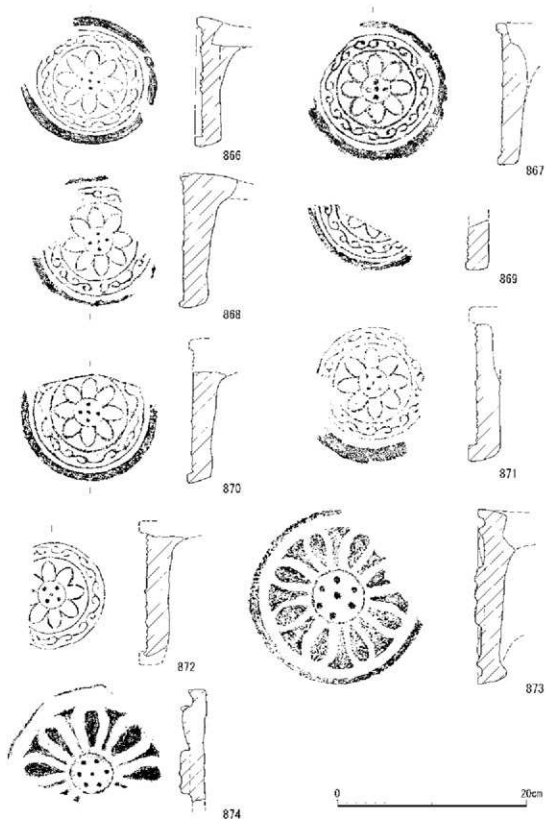
軒丸瓦II類 素弁八葉蓮華文軒丸瓦である。外線は素線直立か外線を調整する際に縁がひずん



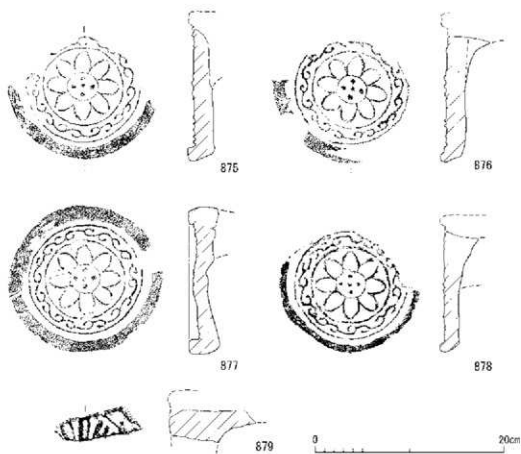
第148図 C-1トレンチ出土遺物実測図9(1/4) 軒丸瓦5

ているものがある。内区蓮弁は卵型で肉厚である。突出した中房を持ち、蓮子の配置は1+6である。間弁は中房から発生し、蓮弁と同様に肉厚の楔形である。蓮弁や間弁の形状などが向日市の宝菩提院庵寺出土の軒丸瓦などに似ている。

Ⅱaは大ぶりの范を使用している。瓦当裏面は縁が外周するように土手状になっている。ⅡbはⅡaに比べ小ぶりの范を使用している。蓮弁や間弁の長さや幅などがⅡaと異なる。Ⅱ類は縦置型一本作りで作成されたと考えられる。范が異なるためⅡ類の間での新旧関係などは不明である。



第149図 C-1 トレンチ出土遺物実測図10(1/4) 軒丸瓦6



第150図 C-1トレンチ出土遺物実測図11(1/4) 軒丸瓦7

出土したⅡ類の破片は合計5点である。Ⅱaは2点、Ⅱbは2点、小片のため細分できないものが1点出土した。C-1トレンチにおける分布は、g13で2点、h13で2点、h16で1点である。

軒丸瓦Ⅲ類 細弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。3点出土した。出土数が少なく、全体が残っている破片はない。外縁は素縁直立である。外区に小ぶりの珠文をめぐらせる。内区は蓮弁の輪線を稜線で表現する。中房が残っていないため、蓮子については不明である。瓦当部の厚みはほかの型式に比べ倍近く分厚い。断面を見ると、瓦当面に対して斜め方向に粘土を積み上げているため、横置き型一本づくりであると考えられる。通常の軒丸瓦と、丸瓦部の側面を水平に削るものの2種類が存在する。後者は1点のみで、ほかの2点に比べて瓦当の摩滅が著しく残りも悪いため、范が異なるのかは不明である。

Ⅲ類の類例は亀岡市の観音芝庵寺⁽⁸³⁰⁾や丹波国分寺⁽⁸¹¹⁾などでみられる細弁十六葉蓮華文軒丸瓦がある。佐伯遺跡での分布はi16で1点、h11で1点、i11で1点である。

イ. 小規模調査出土瓦類(第144図836～843)

836～839は軒丸瓦Ⅰaである。836はC-1 a区、837～839はC-1 b区で出土した。839は圏線や唐草の一部を彫り直す。840・841はC-1 b区で出土した軒丸瓦Ⅰbである。842はC-1 b区で出土した軒丸瓦Ⅰ類である。外縁部が残っていないため細別はできない。843は軒丸瓦Ⅱaである。

ウ. 遺構出土瓦類

瓦溜まり S X01 (第145図844) 844は i 16で出土した軒丸瓦Ⅲ類である。瓦当部が分厚く、断面を観察すると、瓦当面に対して斜め方向に粘土を積んでいる。横置き型一本作りで作られていると考えられる。

攪乱 S X02 (第145図845～847) 845は軒丸瓦Ⅰaである。846は軒丸瓦Ⅱbである。847は軒丸瓦Ⅱ類である。細片のため細別はできない。

瓦溜まり S X04 (第146図848～第149図874) 848は h 17を精査した際に出土した軒丸瓦Ⅰaである。849～851は軒丸瓦Ⅰaである。849・851は f 13、850は g 12で出土した。852は g 13で出土した軒丸瓦Ⅰbである。853は e 13で出土した軒丸瓦Ⅰaである。瓦当面全体に范の木目が残る。

854～859は軒丸瓦Ⅰaである。854～858は f 12、859は f 13から出土した。856には蓮弁の1枚に指で押さえた痕跡が残る。やわらかい段階で瓦を持ち運んだ際についたものではないかと考えられる。860～865は g 13で出土した軒丸瓦Ⅰaである。866～870は軒丸瓦Ⅰbである。866・867は f 12、868は g 12、869・870は g 13で出土した。866には影り直しの痕跡が残る。

871は S X04掘削中に出土した軒丸瓦Ⅰaである。872は S X04掘削中に出土した軒丸瓦Ⅰ類である。外縁が残されていないので細分はできない。蓮弁や唐草、圏線に影り直しの痕跡が残る。873は h 13で出土した軒丸瓦Ⅱaである。瓦当の直径がⅡbに対して大きく、中房の直径も大きくなっている。874は g 13で出土した軒丸瓦Ⅱbである。Ⅱaに対して全体的に小ぶりである。

瓦溜まり S X06 (第150図) 875～878は S X06を掘り下げた際に i 11から出土した軒丸瓦Ⅰ類である。875～877は軒丸瓦Ⅰaである。878は軒丸瓦Ⅰbである。879は h 11から出土した軒丸瓦Ⅲ類である。丸瓦部の側面を水平に削っている。

b) 軒平瓦

ア. 軒平瓦の分類(第151図)

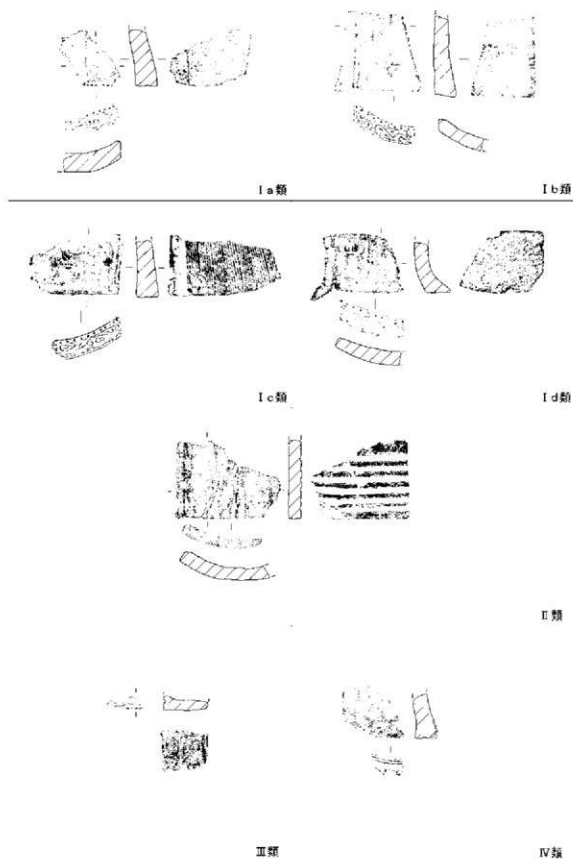
軒平瓦は4型式7種類存在する。内区の文様によって変形忍冬唐草文、無文、重弧文、唐草文に大別できる。内訳は変形忍冬唐草文軒平瓦Ⅰ型式3種類34点、無文顎部施文軒平瓦Ⅰ型式1種類2点、重弧文軒平瓦Ⅰ型式1種類1点、唐草文軒平瓦Ⅰ型式1種類1点である。今後それぞれをⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類と呼称する。

軒平瓦Ⅰ類 珠文線鋸歯文帯忍冬唐草文軒平瓦である。最も多く出土している。上外区は細かい珠文をめぐらせる。珠文の間隔は不均一である。下外区と脇区は線鋸歯文をめぐらせる。内区は変形忍冬唐草文である。顎部の調整方法などで4種類に細分できる。

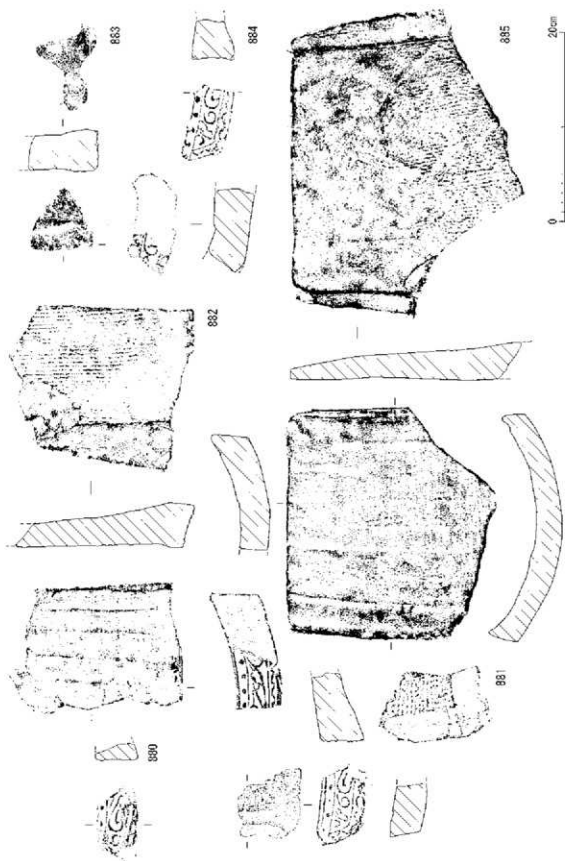
I aはⅠ類の中でも最も多く出土している種類である。顎部を横ケズリやヨコナデによって2～10cm程度縄タキ痕を消している。

I bは顎部を大きく削り込むものである。平瓦部と約0.5cm段差ができるほど削る。凸面の瓦当面から狭端面に向かって残る長さが短く、I aとI bの判別がつかないものが複数存在する。

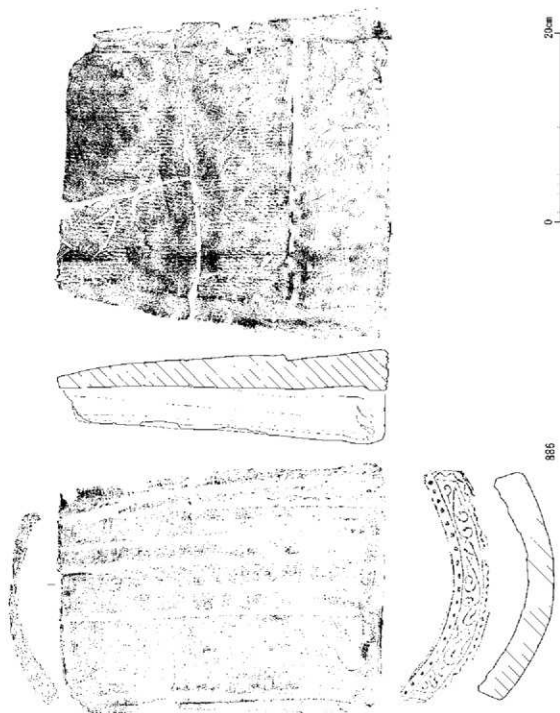
I cは凸面顎部を調整しないものである。I dは折曲技法の軒平瓦である。Ⅰ類全体で25点の軒平瓦片が出土した。出土した軒平瓦Ⅰ類の破片の点数は、I aが19点、I bが4点、細分できな



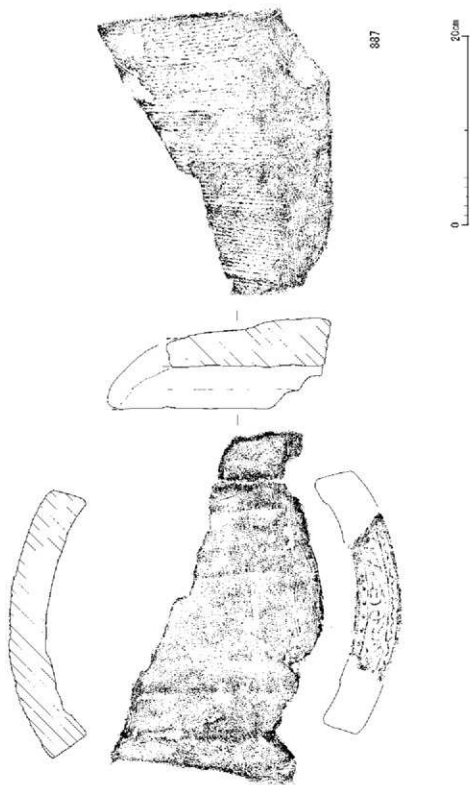
第151図 佐伯遺跡軒平瓦分類図



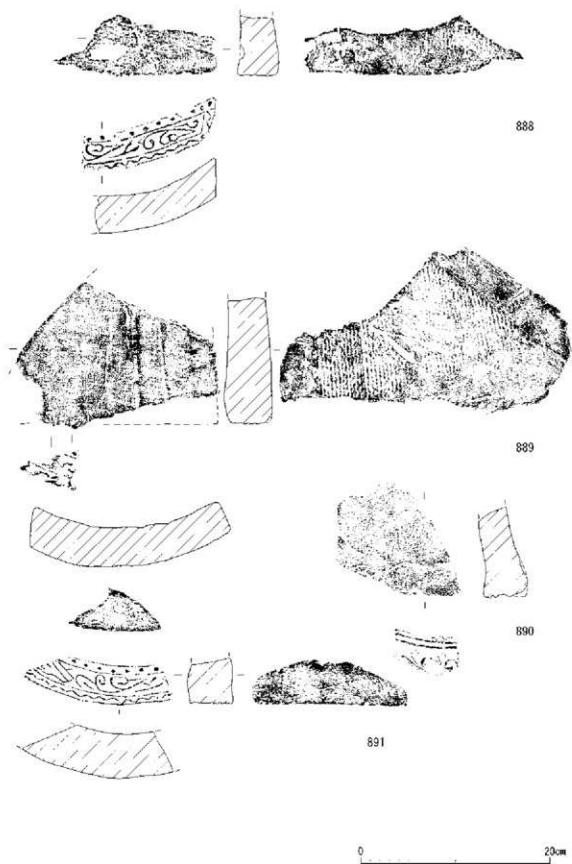
第152図 C-1トレンチ出土遺物実測図12(U4) 軒平瓦1



第153図 C-1 トレンチ出土遺物実測図13(1/4) 軒平瓦 2



第154図 C-1トレンチ出土遺物実測図14(L/4) 軒平瓦3



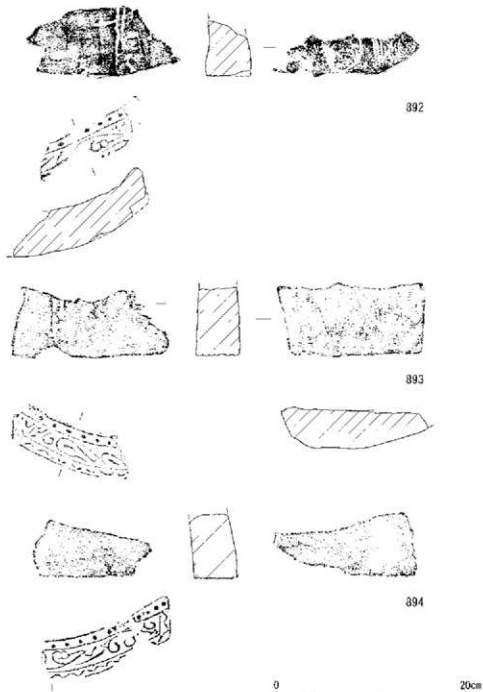
第155図 C-1 トレンチ出土遺物実測図15(1/4) 軒平瓦4

いものが9点、Icが1点、Idが1点である。

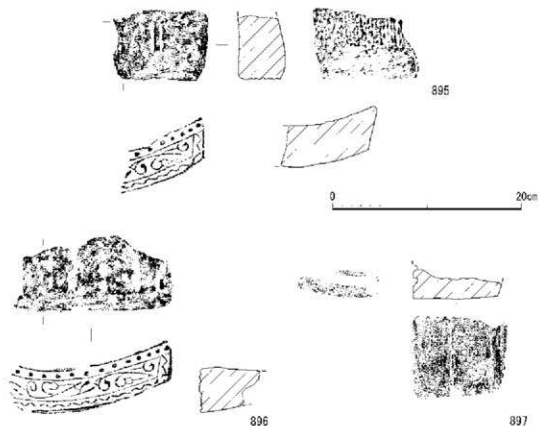
C-1トレンチにおける軒平瓦Ⅰ類の分布は、e12で1点、f12で3点、f13で6点、g12で3点、g13で6点、h12で2点、h13で1点、i11で3点である。

軒平瓦Ⅱ類 顎部施文軒平瓦である。瓦当面は無文である。顎部に蒲鉾状の凹凸を繰り返す。i11で2点出土した。類例として南山城の志水庵寺や普賢寺などに同様の蒲鉾状凹凸を顎部に持つ重弧文軒平瓦がある。⁽⁸¹²⁾

軒平瓦Ⅲ類 重弧文軒平瓦である。貼り付け段顎の顎部の破片が1点出土した。瓦当全体がわ



第156図 C-1トレンチ出土遺物実測図16(1/4) 軒平瓦5



第157図 C-1トレンチ出土遺物実測図17(1/4) 軒平瓦6

かる資料が出土していない。最下層の弧文は上の弧文に対し太くなっている。

C-1トレンチにおける分布はe14で1点である。

軒平瓦IV類 唐草文軒平瓦である。細片が1点出土した。破片が小さく、全体像はわからない。内区は唐草をめぐらし、外区に圓線をめぐらせている。

C-1トレンチにおける分布はg12である。

イ. 小規模調査出土瓦類(第152図880～885)

880～882は軒平瓦Iaである。880はC-1a区、881・882はC-1b区から出土した。883・884はC-1b区から出土した軒平瓦I類である。凸面の瓦当面から狭端に向かって残っている長さが短く、細分はできない。885はC-1b区から出土した軒平瓦の平瓦部である。狭端から広端に向かって分厚くなっている。軒平瓦の凸面は、中央部にあたる部分の縄タキ痕が残ったままである。狭端付近は縄タキ痕をナデ消す。凹面は調整しない。

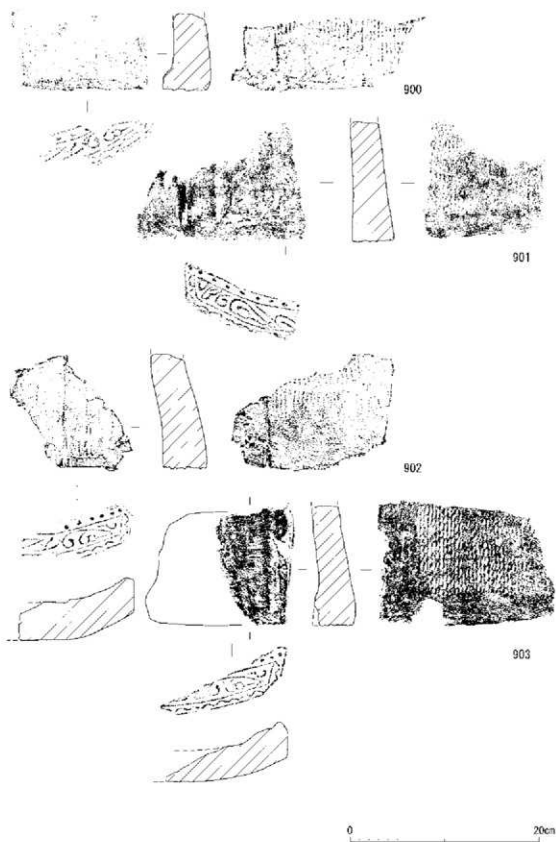
ウ. 遺構出土軒平瓦

擾乱SX02(第153図886) 886はh13から出土した軒平瓦Ibである。佐伯遺跡出土の軒平瓦で唯一の全形が残る軒瓦である。頸部は凸面を瓦当面から10cm程度大きく削り込み、頸部を元の平瓦より低くする。平瓦部は桶巻作りである。

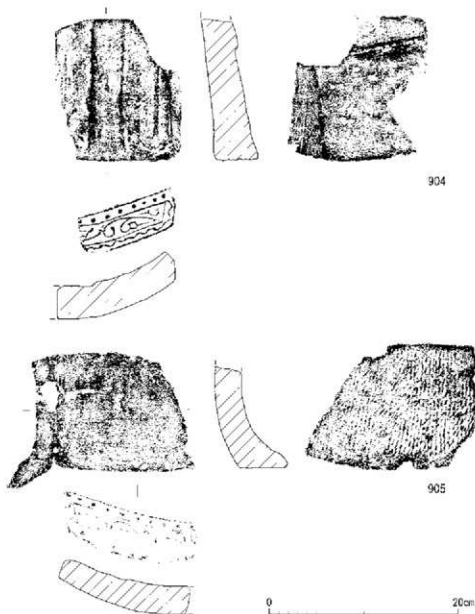
瓦溜まりSX04(第154図887～第160図905) 887はf13から出土した軒平瓦I類である。凸面



第158図 C-1トレンチ出土遺物実測図18(1/4) 軒平瓦7



第159図 C-1 トレンチ出土遺物実測図19(1/4) 軒平瓦 8

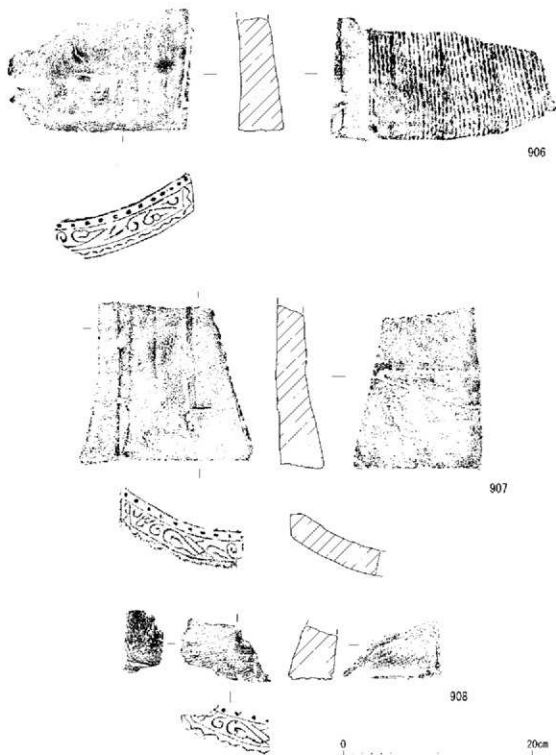


第160図 C-1トレンチ出土遺物実測図20(1/4) 軒平瓦9

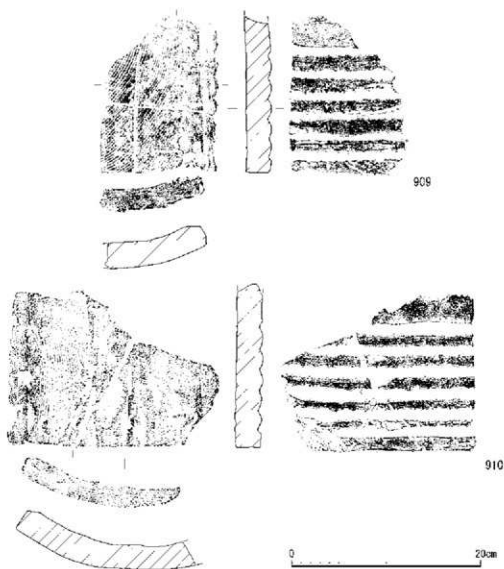
の縄タタキの単位がよくわかる。888・889はf13から出土した軒平瓦Iaである。

889は平瓦部を斜めに切り隅軒平瓦として使用している。890はg12から出土した軒平瓦IV類である。891はg12から出土した軒平瓦I類である。凸面の瓦当面から狭端に向かって残っている長さが短く、細分できない。892はe12、893・894はf12で出土した。892・893は軒平瓦Iaである。894は軒平瓦I類である。凸面の瓦当面から狭端に向かって残っている長さが短く、細分できない。895・896はf13から出土した軒平瓦I類である。895は軒平瓦Iaである。896は軒平瓦I類である。凸面の瓦当面から狭端に向かって残っている長さが短く、細分できない。

897はg12で出土した軒平瓦III類である。重弧文の頸部である。2本の弧線を残す。下の弧線が上の弧線に対して太くなっている。898・899は軒平瓦Iaである。898はg12から、899はg13



第161図 C-1 トレンチ出土遺物実測図21(1/4) 軒平瓦10



第162図 C-1トレンチ出土遺物実測図22(1/4) 軒平瓦11

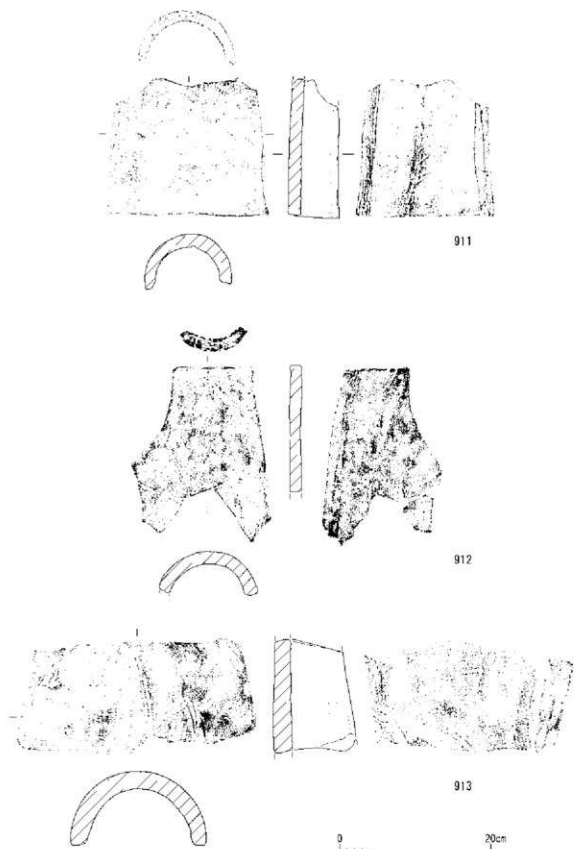
から出土した。900～903は g13から出土した軒平瓦 I aである。904は g12から出土した軒平瓦 I bである。905は g13から出土した軒平瓦 I dである。凸面の縄タタキは瓦当部付近まで残る。

瓦溜まり S X O6 (第161図906～第162図910) 906は軒平瓦 I cである。907は軒平瓦 I bである。908は軒平瓦 I 類である。瓦当部からの残りが悪いため細分できない。いずれも i 11から出土した。909・910は軒平瓦 II 類である。i 11から出土した。凸面は広端より 1cm程度離れた場所から 5本の蒲鉾状の凹凸を形成する。凹面は両遺物共に粘土板切り出しの際のコビキ痕を残す。910はコビキ痕のほかに、粘土板貼り付け痕、布目、布綴痕を残す。

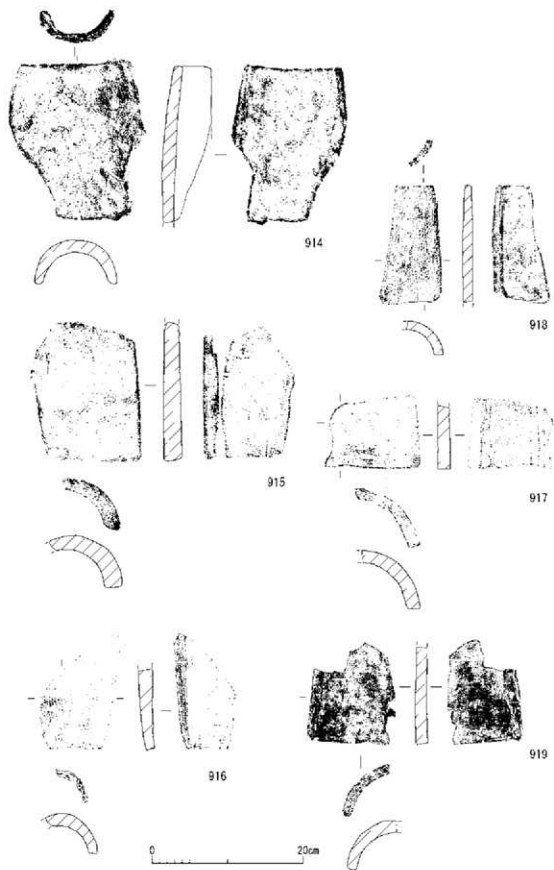
c) 丸瓦

ア. 丸瓦の分類

C-1トレンチでは多数の丸瓦片が出土したが、細片が多く、実測したものは9点である。凸



第163図 C-1トレンチ出土遺物実測図23(1/4) 丸瓦1



第164図 C-1トレンチ出土遺物実測図24(1/5) 丸瓦2

面の調整方法で 2 型式に大別できる。以下、Ⅰ類・Ⅱ類と呼称する。

丸瓦Ⅰ類 凸面の一部をナデ消しているものである。縄タタキ痕が明瞭に残っているものから縄タタキ痕がほとんど確認できないものまで存在する。凹面は布目痕などを残したままである。Ⅰ類で実測したものは 7 点である。C-1 トレンチにおける分布は e12 で 1 点、g12 で 1 点、g13 で 2 点、i11 で 1 点、h11 で 2 点である。

丸瓦Ⅱ類 凸面全体をナデ消すものである。工具で横方向に縄タタキ痕を削ったのちにナデを施す。凹面は布目痕などを残したままである。多くの丸瓦片と比較するとかなり大きな丸瓦である。Ⅱ類で実測したものは 2 点のみである。

C-1 トレンチにおける分布は f13 で 1 点、g12 で 1 点である。

イ. 遺構出土丸瓦

瓦溜まり SX04 (第163・164図) 911・912は13ラインの断ち割りから出土した丸瓦Ⅰ類である。911はg12、912はe12から出土した。911は凸面の広端部付近の縄タタキ痕をまばらにナデ消す。凹面は布目のほかに布縞じ痕を残す。側端はケズリを施し凹面側の角を削る。912は凸面の大部分をナデ消す。凹面は布目痕のほかに布縞じ痕を残す。側端はケズリを施し、凹面側の角を少し削る。後述する916と接合する。高さは30.7cmである。

913はg12から出土した丸瓦Ⅱ類である。瓦溜まりの下層から出土した。凸面の調整痕を工具で削り、横方向のナデを施す。凹面は布目を残す。側端付近はケズリを施す。914・915は丸瓦Ⅰ類である。914・915はg13、917はf13から出土した。915の凸面は部分的にナデを施す。凹面は摩擦により分かりにくい布目痕がわずかに残る。側端はナデを施す。915の凸面は全体が摩擦しているがわずかに縄タタキ痕を残す。凹面は布目痕のほかに棒状の工具によって彫られた6本の凹線が残る。917は丸瓦Ⅱ類である。凸面の縄タタキ痕は全体をナデ消す。凹面は布目痕を残す。側端はケズリを施す。

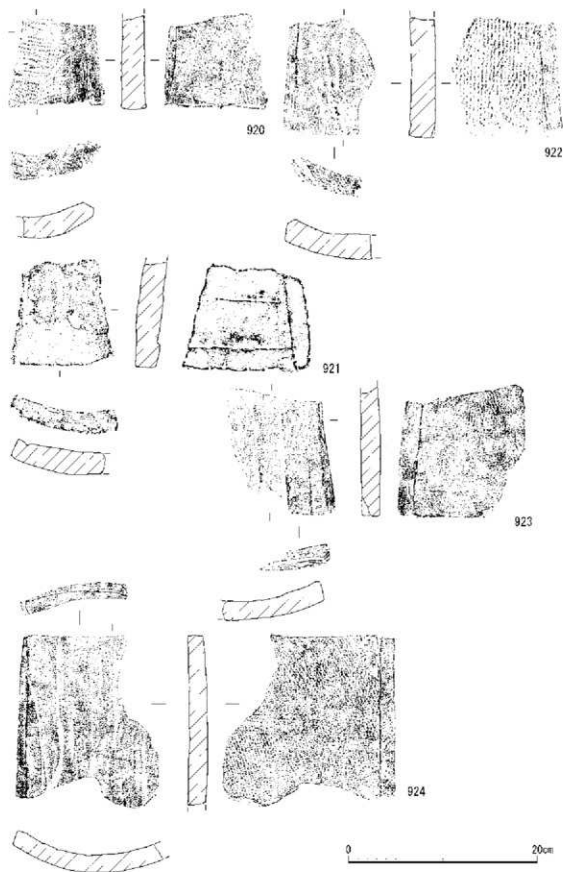
瓦溜まり SX06 (第165図) 916・918・919は丸瓦Ⅰ類である。918はi11、919・925はh11から出土した。916は先述の912と接合する。凸面の縄タタキ痕はわずかにナデ消す。布目痕を残す。狭端はタタキにより凹面側に傾く。側端はケズリを施す。918は凸面の縄タタキ痕を横方向に複数箇所ナデ消す。凹面は布目痕を残す。919の凸面は縄タタキ痕を部分的に横方向のケズリで消す。凹面は布目痕を残す。

d) 平瓦

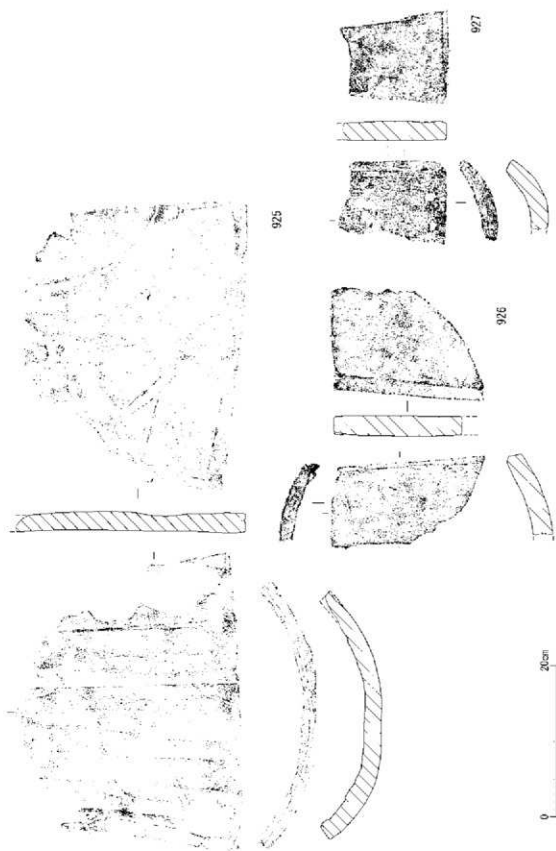
ア. 平瓦の分類

丸瓦と同様に平瓦片も多数出土したが、細片が多く実測したものは 22 点である。凸面の調整方法で 3 型式に大別できる。今後Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類と呼称する。

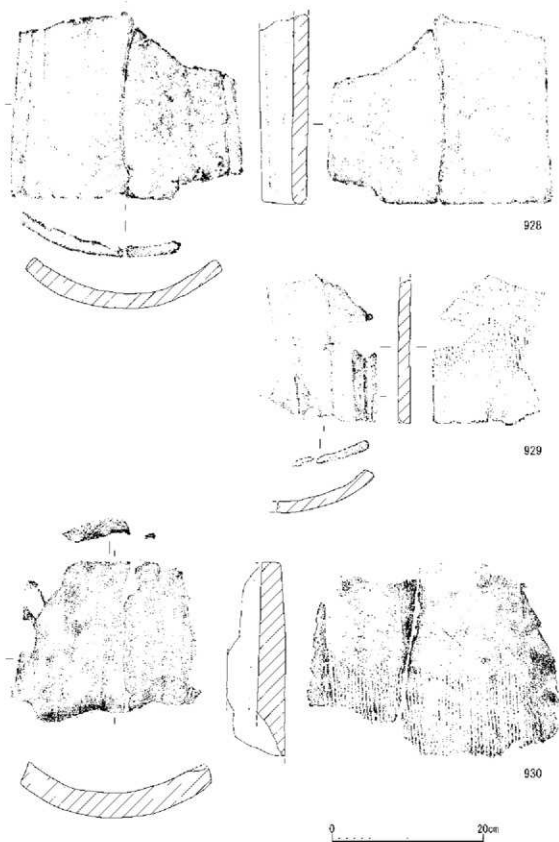
平瓦Ⅰ類 凸面の縄タタキ痕を全面工具で削った後にナデを施したものである。平瓦の製作技法によって 2 種類に細分できる。Ia は平瓦は桶巻作りである。凹面に桶の模骨痕が残されているものが多く存在する。Ib は平瓦は一枚作りである。模骨痕は確認できない。凸型の成形台を使用した場合側端が垂直になるものである。Ⅰ類で実測したものは 9 点である。



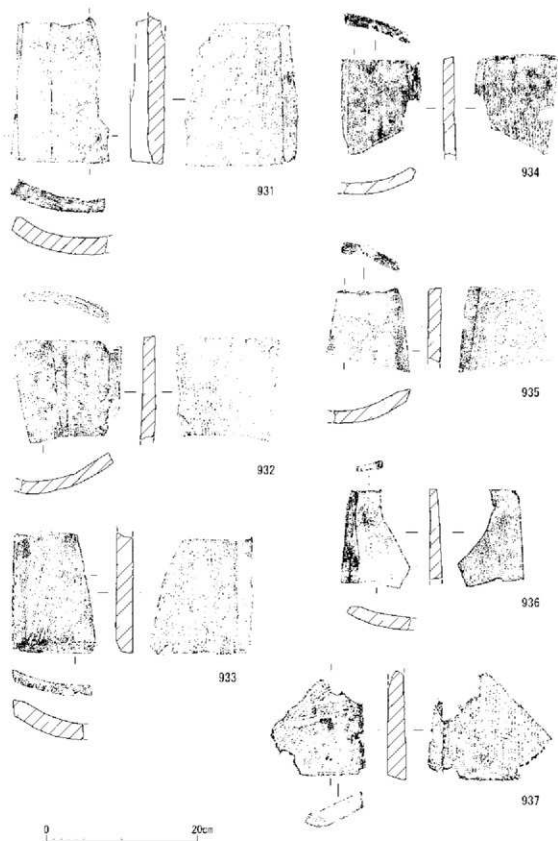
第165図 C-1トレンチ出土遺物実測図25(1/5) 平瓦1



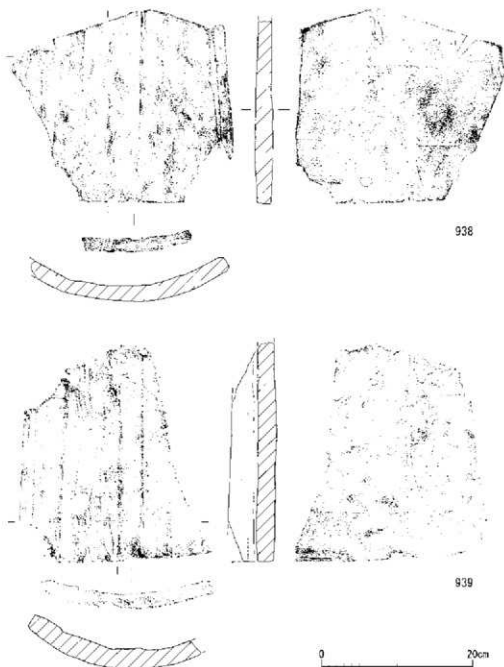
第166図 C-1トレンチ出土遺物実測図26(1/5) 平瓦2



第167図 C-1 トレンチ出土遺物実測図27(1/5) 平瓦3



第168図 C-1 トレンチ出土遺物実測図28(1/5) 平瓦4

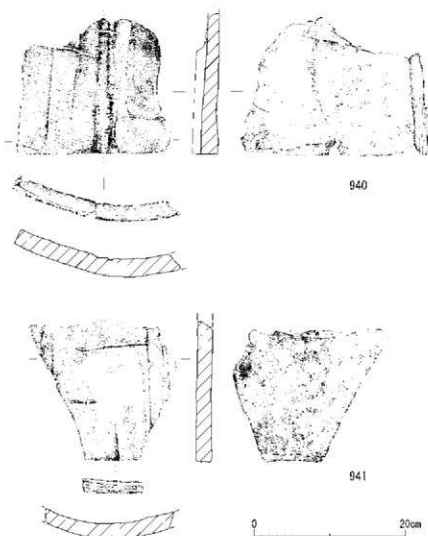


第169図 C-1トレンチ出土遺物実測図29(1/5) 平瓦5

C-1トレンチにおける平瓦Ⅰ類の分布はC-1 a区で1点、C-1 b区で1点、f12で1点、g12で1点、f13で1点、i11で4点である。

平瓦Ⅱ類 凸面の縄タキ痕を部分的に工具で削った後にナデを施すものである。平瓦は桶巻作りで作られている。Ⅱ類で実測したものは7点である。C-1トレンチにおける平瓦Ⅱ類の分布はC-1 b区で2点、f12で1点、f13で3点、g13で1点である。

平瓦Ⅲ類 凸面の縄タキ痕を削らないものである。平瓦の製作方法で2種類に細分できる。Ⅲaは平瓦を桶巻作りで作ったものである。Ⅲbは平瓦を一枚作りで作ったものである。Ⅲ類で実測したものは6点である。C-1トレンチにおける平瓦Ⅲ類の分布はC-1 a区で1点、f12



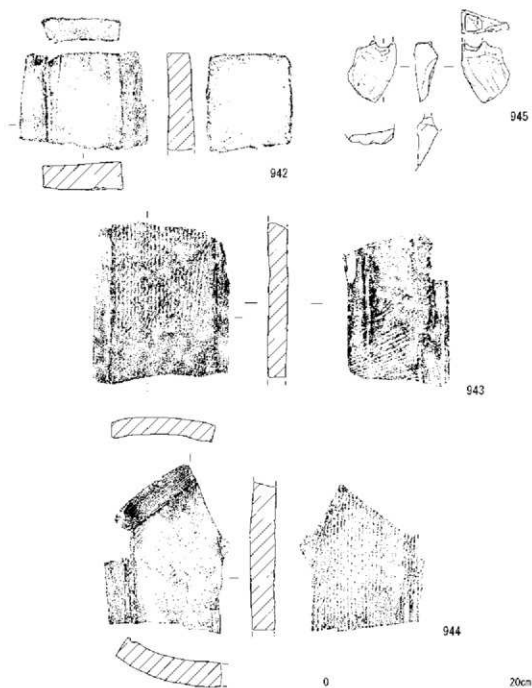
第170図 C-1トレンチ出土遺物実測図30(1/5) 平瓦6

で1点、f13で2点、g13で2点である。

小規模調査(第165図) 920・921は平瓦Ⅰaである。920はC-1a区から出土した。凸面の調整をケズリの後にナデ消す。921はC-1b区から出土した。凸面を削って調整痕をすべて工具によって削った後にナデを施している。922はC-1a区から出土した平瓦Ⅲaである。凹面・凸面ともに調整痕は残したままである。凹面には布目痕のほかには布綴じ痕を残す。923・924はC-1b区から出土した平瓦Ⅱaである。923・924は凹面・凸面ともに調整痕を残す。凸面は部分的にナデを施している。凹面には布目痕のほかには横骨痕を残す。

イ. 遺構出土平瓦

瓦溜まりS X04(第166図925～第168図937) 925・927は平瓦Ⅰaである。925はg12、927はf12から、925は下層から出土した。凸面は工具によって全面を削った後にナデを施す。凹面は布目痕のほかには横骨痕を残す。926はf13から出土した平瓦Ⅰbである。凸面には縄タキ痕を残さない。凹面には部分的にケズリやナデを施し、布目痕は一部にしか残していない。928～930は平瓦Ⅱ類である。928・929はf13、930はg13から出土した。いずれも凸面の一部に横方向のケズリ



第171図 C-1トレンチ出土遺物実測図31(1/4) 道具瓦

の後にナデを施すことで縄タキ痕を消す。凹面は布目痕のほか程度差はあるが、模骨痕を残す。931・932・937は平瓦Ⅲaである。931はg13、932・937はf13から出土した。凸面の縄タキ痕は残したままである。凹面は布目痕のほか模骨痕を残す。933・935は平瓦Ⅲbである。933はg13、935はf12から出土した。凸面は縄タキ痕を残したままである。凹面には布目痕を残す。模骨痕は確認できず、凹面と側端の角度が鋭角になることなどから一枚作りの平瓦である。

934・936は平瓦Ⅱ類である。934はf13、936はf12から出土した。いずれも凸面の一部に横方

向のケズリの後にナデを施すことで縄タキ痕を消す。凹面は布目痕のほか程度差はあるが模骨痕を残す。

瓦溜まり S X06 (第169図938～第170図941)

938～941は i 11から出土した平瓦 Iaである。いずれも凸面の縄タキ痕を工具によって削り、ナデを施す。

凹面は布目痕のほか模骨痕を残す。940・941は広端にケズリの際に移動した石粒によってできた深さ0.1cm程度の凹線が残る。

e) 道具瓦類

瓦溜まり S X04 (第171図942・943) 942・943は甍斗瓦である。942は g 13、943は h 12から出土した。両側端を削っていることから、最初から甍斗瓦として作られたものである。

瓦溜まり S X06 (第171図944・945) 944は i 11から出土した隅切瓦である。側端面は削っている。945は i 11から出土した垂木先瓦ではないかと考えられる瓦製品である。全形は半円形に近い形である。中心には1.2cmの四角い穴が開いている。釘を通すための穴と考えられる。

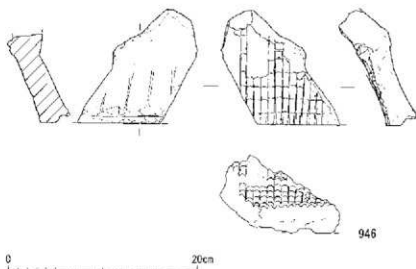
f) 瓦塔 (第172図946)

946はC-1 トレンチを拡張した際に重機掘削中から見つかった瓦塔の破片である。京都府内においては3例目の出土である。大きさは縦12.0cm、横12.4cm、高さ8.2cmを測る。表は竹管状の工具を用いて瓦葺きを表現している。裏面は粘土をつまむことで筋状にし、扇垂木を表現している。出土がこの1点のみであるため、具体的に瓦塔のどの部位であるのかは不明である。

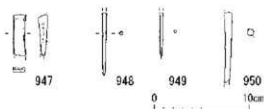
③ 出土遺物 (鉄製品) (第173図947～950)

947は i 11から出土した鉄製品である。残存長4.3cm、幅1.3cmである。どのような製品であったかは不明であるが、5mmの厚さの鉄を折り返している。948～950は釘である。948は e 12で出土した。残存長6.7cm、幅0.4cmである。949は i 16で出土した。残存長4.9cm、幅0.3cmである。950は h 12で出土した。残存長7.4cm、幅0.7cmである。いずれの鉄製品も周囲に癒着物が付く。

(浅田洋輔)



第172図 C-1 トレンチ出土遺物実測図32(1/4) 瓦塔



第173図 C-1 トレンチ出土遺物実測図33(1/4) 鉄製品

(3) C-5 トレンチ

① 調査の概要

平成28年度の小規模調査C-5 a トレンチ (I-U・II-X区)の南側で遺物を含む層があり、溝または土坑とみられる遺構を確認した。この結果を受けて、平成29年度に本調査を実施した(第174図)。基本層序は、耕作土・床土・褐色細砂(S D01検出)・黒褐色極細砂(S D02検出)となる。

調査区を調査対象の全域まで拡張し、遺構精査作業を開始したところ、調査区の南側で土器や木製品が出土する溝S D02の一部を検出した。しかし、溝の南岸が調査区外に拡がるとみられ、溝の幅を確認するために南側をさらに拡張した。調査の結果、東西方向に流れる溝を2条検出した。

② 検出遺構

溝S D01(第174図) 溝S D02を検出した面より約0.2mの上層面である褐色細砂層上面で検出した湾曲する溝である。褐色細砂層より掘り込まれており、溝S D02よりは新しい時期の溝であることが確認できた。検出長約



第174図 C-5 a トレンチ遺構配置図(1/300)

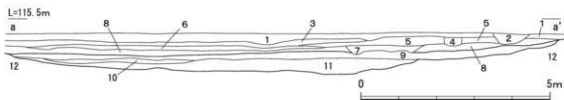
21m、幅約3m、深さ約0.2mを測る。遺物が出土していないため、時期は不明である。

溝S D02(第174・175図) 検出長約13m、溝の最大幅約11m、深さ約0.4mを測る溝である。溝の埋土である黒褐色極細砂層から、須恵器杯や蓋など、平安時代前期～中期(9～10世紀)の土器を中心に多量の遺物が出土した。

出土遺物としては、土器では、ヘラ記号がある土器(第184図1217)や、「福」や「田屋」などと墨書された須恵器杯Bなどが多量に出土した(第183～185図)。また、C-1 トレンチで出土した軒丸瓦I類が1点出土した(第189図)。

木製品では、「□益継」と書かれた木筒1点をはじめ、皿や下駄などの木製品や未成品が多量に出土した(第191～201図)。

出土した土器から、溝の埋没時期は平安時代中期と考えられる。



1. 暗灰色 (10YR4/1) 極細砂 (粘質、径 1～3 cm の礫を含む) <床土>
2. 黒褐色 (2.5Y3/1) 細砂 (径 0.5～5 cm の礫を含む) <水路>
3. 暗褐色 (10YR3/3) 粗砂混じり細砂 (径 1～4 cm の礫を含む)
4. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細砂 (径 0.5～2 cm の礫を少量含む) <暗渠>
5. 褐色 (10YR4/6) 細砂 (径 1～5 cm の礫を少量含む)
6. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘性極細砂 (径 0.5～4 cm の礫を含む)
7. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂混じりシルト (径 0.5～4 cm の礫を含む)
8. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂 (径 3～7 cm の礫を多く含む) <S D01 検出面>
9. 黒褐色 (2.5Y3/2) 極細砂 (径 1～3 cm の礫を少量含む) <S D01 埋土>
10. 黒褐色 (7.5Y3/1) 極細砂 (粘質、径 2～4 cm の礫を少量含む) <S D01 埋土>
11. 黒褐色 (10YR3/2) 極細砂 (粘質、径 0.5～3 cm の礫を少量含む) <S D01 埋土>
12. 黒褐色 (2.5Y3/1) 細砂 (径 0.5～5 cm の礫を多く含む) <地山>

第175図 C-5 a トレンチ S D02断面図(1/100)

③出土遺物

a) 土器

遺構面精査時(第176図951～993) 951～993は平成29年度の拡張調査時の遺構精査時に出土した。951は平安時代前期(9世紀中頃)の須恵器杯Bで底部に高台が付く。952は須恵器の提瓶の体部片で、口縁部は欠損している。953～958は平安時代前期の須恵器の蓋の口縁部である。959・960は土師器の甕の口縁部である。959は頸部内面にハケメが残る。960は外面にはハケメが残り、内面には煤が付着している。

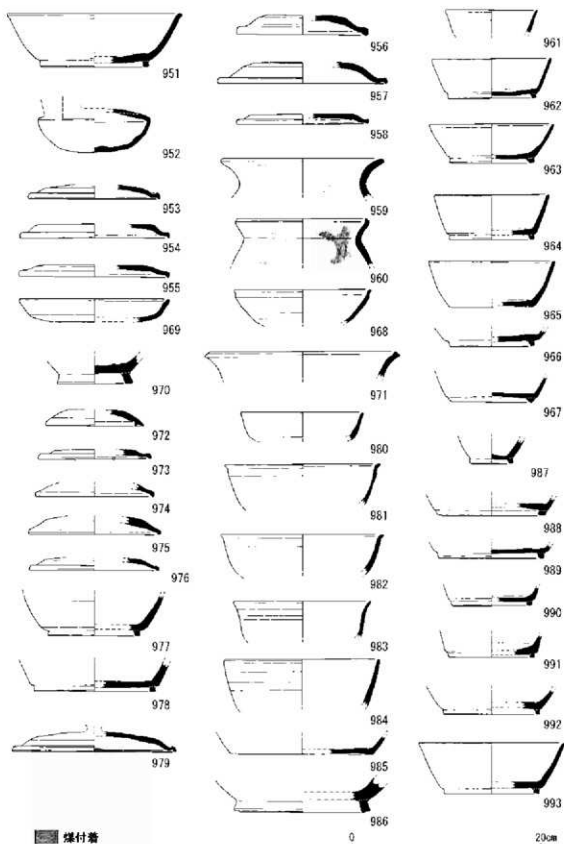
961は須恵器杯の口縁部、962～967は須恵器杯Bで、底部に高台が付く。968は須恵器碗の口縁部である。969は須恵器皿Aである。970は須恵器壺の高台部分である。971は須恵器甕の口縁部である。972は須恵器杯蓋の口縁部片である。

973～976は平安時代前期の須恵器蓋の口縁部片である。977・978は須恵器杯Bの底部の高台部分である。979は須恵器蓋で、本来は天井部につまみが付く。内面には煤が付着する。

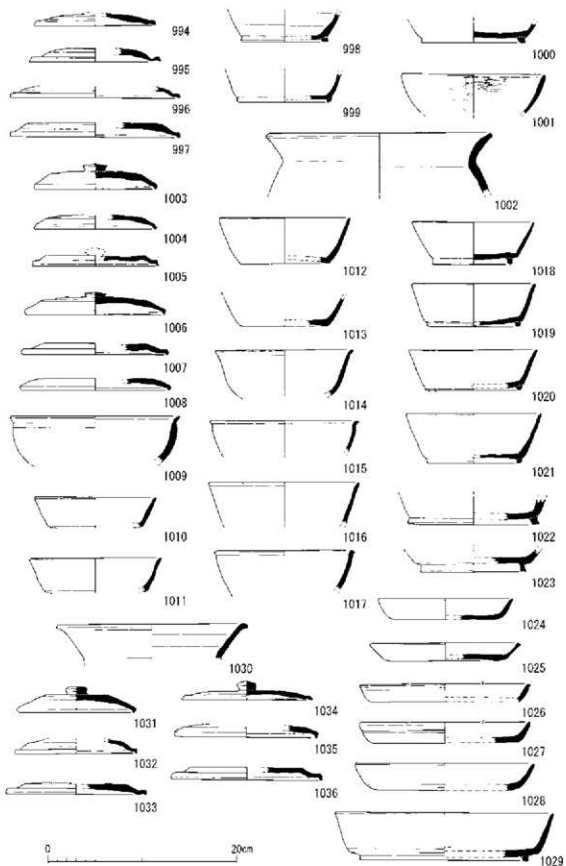
980～984は須恵器碗の口縁部である。985は須恵器皿Aの底部である。986は須恵器壺Lの底部高台部分である。987は須恵器小形壺の底部高台部分である。988～993は須恵器杯Bの底部高台部分である。

小規模調査遺構精査時(第177図994～1002) 994～1002は平成28年度の小規模調査C-5 a区の南側を精査した時に出土した遺物である。994～997は平安時代前期に属する須恵器蓋の口縁部である。998～1000は須恵器杯Bの底部高台部分である。1001は瓦器碗の口縁部で、内外面の上段部には横方向のミガキが残る。1002は土師器の甕の口縁部から頸部にかけての破片で、内外面ともに摩滅しており調整は不明である。

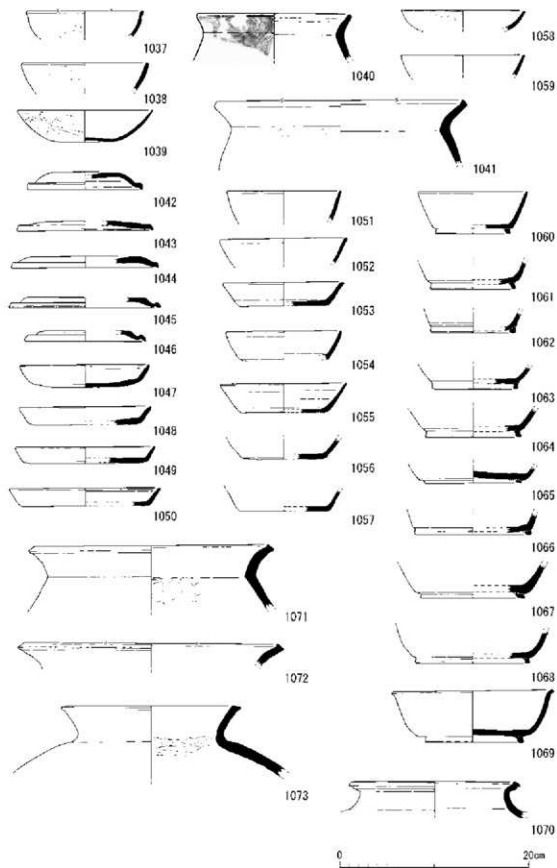
溝 S D02上面精査時(第177図1003～第179図1083) 1003～1083は平成29年度調査時の溝 S D02の上面付近での精査時に出土した土器である。1003～1008は平安時代前期に属する須恵器の蓋



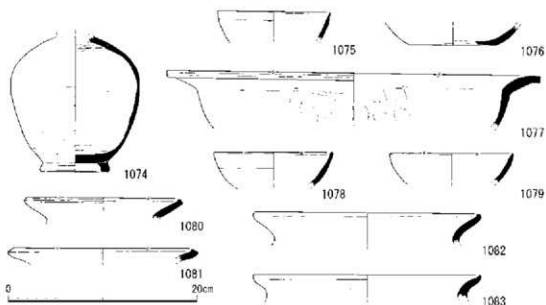
第176図 C-5トレンチ出土遺物実測図1 遺構面精査時



第177図 C-5トレンチ出土遺物実測図2 遺構面精査時



第178図 C-5トレンチ出土遺物実測図3 遺構面精査時



第179図 C-5トレンチ出土遺物実測図4 遺構面精査時

である。1003と1006には宝珠つまみが残る。

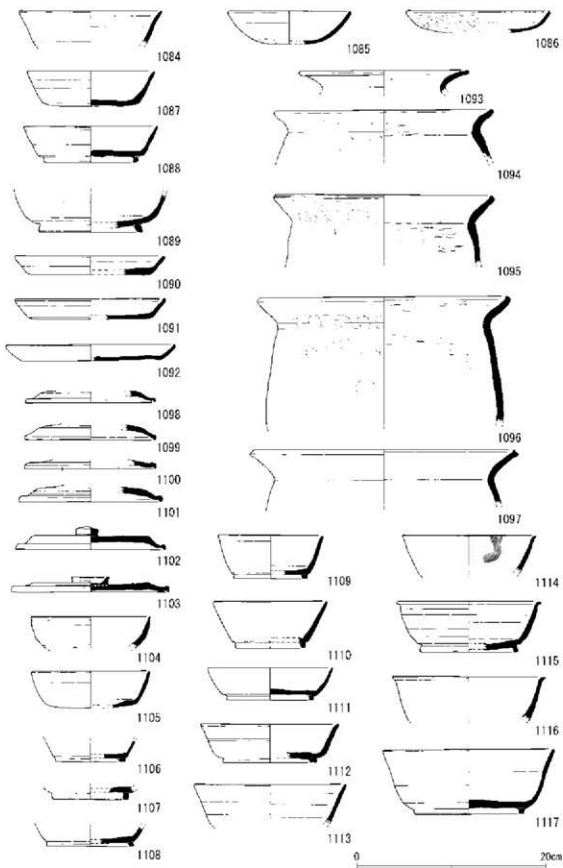
1009は須恵器の椀または鉢の口縁部と思われる。1010～1017は須恵器杯の口縁部である。1018～1023は須恵器杯Bである。底部に高台が張り付く。

1024～1029は須恵器の皿Aの口縁部である。1030は須恵器壺の口縁部である。1031～1036は平安時代前期に属する須恵器蓋で、1031と1034にはつまみが残る。1037・1038は土師器の杯の口縁部である。1039は土師器の杯で外面の調整はヘラケズリのちなデ、内面の底部は不定方向のナデ、杯部はヨコナデである。1040は土師器の甕の口縁部で、外面には煤が付着している。1041は土師器の甕の口縁部から頸部にかけての破片で、外面には縦方向のハケメが残る。1042～1046は平安時代前期に属する須恵器の蓋の口縁部である。

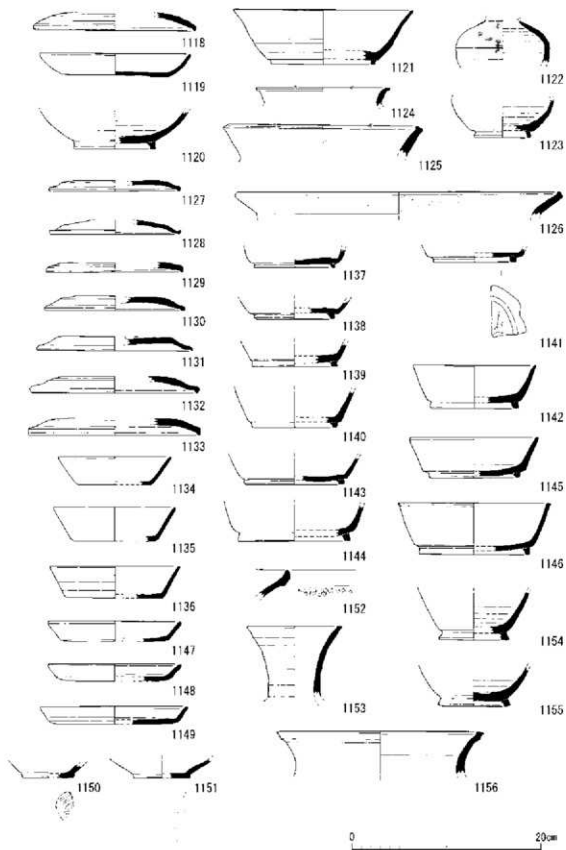
1047～1050は須恵器の皿Aの口縁部から底部にかけての破片である。1051・1052は須恵器杯の口縁部である。1053は須恵器皿Aの口縁部である。1054～1057は須恵器杯Aの口縁部である。1058は土師器の皿である。1059は土師器の杯の口縁部である。1060～1069は須恵器の杯Bである。1070～1073は須恵器の甕の口縁部である。1074は須恵器の壺で、口縁部から頸部までが欠損している。

1075は土師器の杯の口縁部片で内面にハケメが一部残る。1076は土師器杯の底部片である。1077は土師器の鉢または盤の口縁部片である。調整は外面には縦方向の粗いハケメ、口縁部の内面には横方向のハケメが残る。1078・1079は土師器の杯の口縁部である。1080～1083は土師器の甕の口縁部片である。

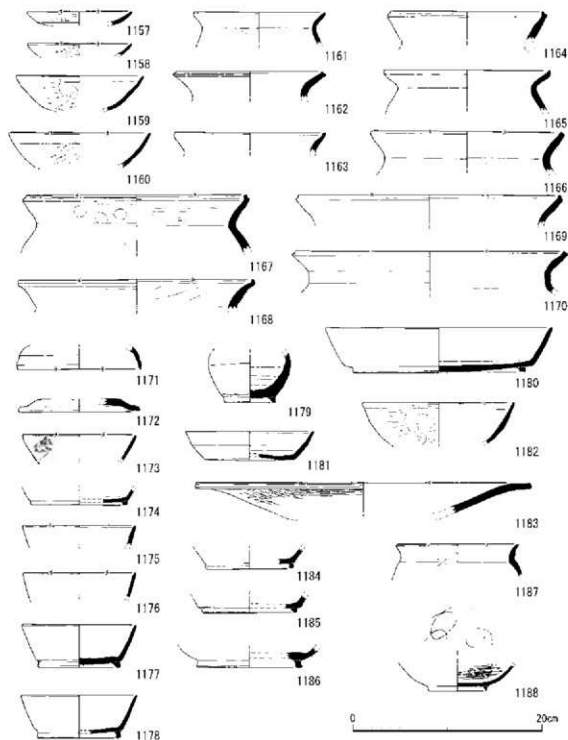
溝 S D02 (第180図1084～第182図1188) 1084～1188は、溝 S D02の埋土から出土した土器である。1084は須恵器の杯Aである。1085は土師器の杯である。1086は土師器の皿である。外面は成形のためにヘラケズリをし、内面にはヨコナデの調整がみられる。1087～1089は須恵器の杯Bである。1090～1092は須恵器の皿Aである。1093～1097は土師器の甕の口縁部である。1094～1096の体部外面に縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメが施されている。



第180図 C-5トレンチ出土遺物実測図5 溝SD02



第181図 C-5トレンチ出土遺物実測図6 溝SD02



第182図 C-5トレンチ出土遺物実測図7 溝SD02

1098～1103は平安時代前期の属する須恵器の蓋である。1102には天井部に宝珠つまみが付く。1103は須恵器蓋の環状のつまみが付く。1104・1105は須恵器杯Aの口縁部である。1106～1117は須恵器Bである。1118は須恵器蓋の口縁部である。1119は土師器の皿Aである。1120は須恵器の壺の高台部分である。1121は須恵器の杯Bである。1122は須恵器の壺の頸部片で、外面の一部に墨が付着している。1123は須恵器の壺の底部高台部分である。

1124は土師器の甕の口縁部である。1125・1126は土師器の甕の口縁部である。1127～1133は須恵器の蓋の口縁部片で、平安時代前期に属するものである。1134～1136は須恵器の杯Aである。

1137～1146は須恵器の杯Bである。1141の外面の高台底部にはヘラ記号らしきヘラの痕が残るが解読は不明である。1147～1149は須恵器の皿Aである。1150・1151は須恵器椀で、高台には糸切り痕が残る。1152は須恵器甕の口縁部片で、外面に波状文が残る。1153は須恵器の壺の口縁部である。1154・1155は須恵器壺の高台部分である。1156は須恵器の甕の口縁部である。

1157・1158は土師器皿である。外面には成形のための横方向のヘラケズリ、内面にヨコナデが残る。1159・1160は土師器杯である。外面には成形のための横方向のヘラケズリ、内面にヨコナデが残る。1161～1170は土師器甕の口縁部である。1171は須恵器蓋の口縁部である。1172は須恵器蓋の口縁部である。1173・1175・1176は須恵器杯の口縁部である。1174・1174・1177は須恵器杯Bである。1173の口縁部の内面に墨が付着している。1179は須恵器の小形壺の高台部分である。1180は須恵器皿Bである。1181は須恵器杯Aである。

1182は土師器の杯である。外面には成形のための横方向のヘラケズリ、内面にはヨコナデが残る。1183は土師器の盤の口縁部である。1184～1186は須恵器杯Bの底部高台部分である。1187は土師器の甕の口縁部分である。体部外面の一部に煤が付着している。1188は瓦器椀の高台部分で、内面底部にミガキと暗文がある。

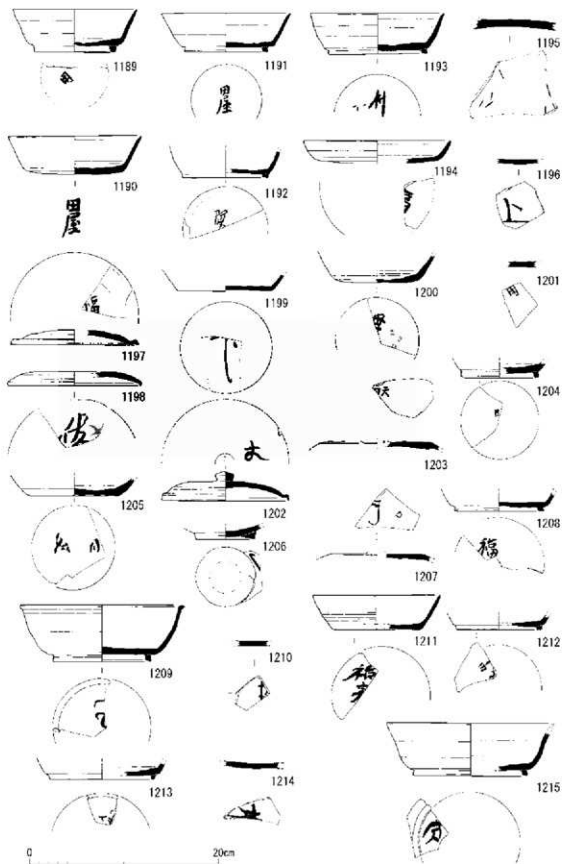
溝S D02出土墨書土器(第183～185図)

1189は須恵器杯Bである。外面の底部の高台内側には「用」と文字が書かれている。1190は須恵器杯Aである。外面の底部の高台内側には「田屋」と文字が書かれている。⁽⁹³⁾1191は須恵器杯Bである。外面の底部の高台内側には「田屋」と文字が書かれている。1192は須恵器杯Bで外面の底部に1文字または2文字がみられるが判読できなかった。1193は須恵器杯Bで外面の底部に2文字がみられるが判読できなかった。

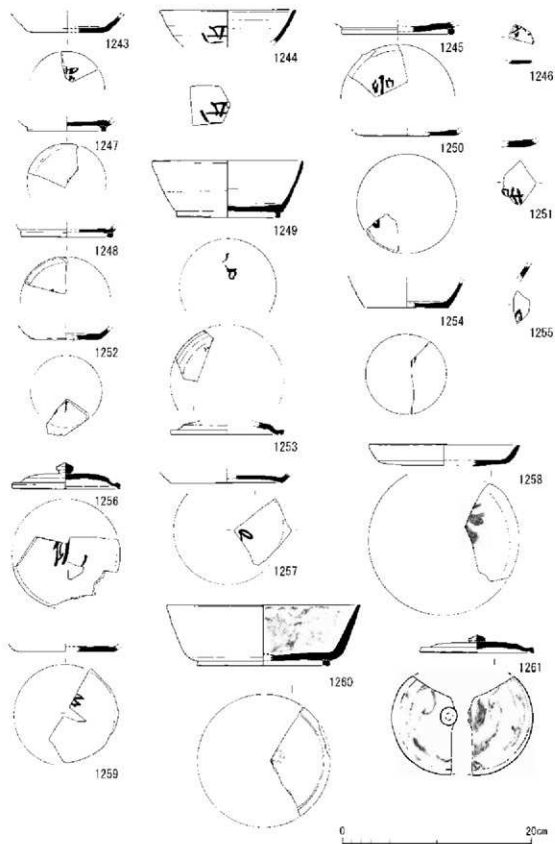
1194は須恵器皿Aで、外面底部には欠損しているが「福」の傍の部分と思われる。1195は須恵器の蓋と思われる。内面には墨痕がみられるが判読できなかった。1196は須恵器杯の底部片で、「上」と書かれている。1197は須恵器の蓋の外面に「福」と書かれている。1198は須恵器の蓋で、内面には「佐」と読める文字が書かれていた。1199は須恵器杯Aの外面底部である。墨痕はあるが文字は判読できなかった。1200は須恵器杯の底部で、外面底部に「田」の文字がみられるが、ほかの「田屋」のように下に文字があるのかは不明である。1201は須恵器杯底部である。外面底部には「用」の文字が書かれている。1202は須恵器の蓋である。内面には「丈」の文字を書く。1203は須恵器の蓋で、外面に横に2文字と思われる墨痕があり、「田天」とも読み取れる。

1204は須恵器杯Bであり、外面底部に墨痕があるが判読できなかった。1205は須恵器杯の底部で、底部に2文字の墨痕があるが、判読できなかった。1206は無釉陶器の高台で、外面に墨痕があるが、判読できなかった。1207は須恵器の蓋で、外面に墨痕がみられるが判読できなかった。

1208は須恵器杯Bで、外面の底部には「福」の1文字が書かれている。下に文字が続くかどうかは欠損しているため不明である。1209は須恵器杯Bである。外面底部には墨痕がみられるが判



第183図 C-5 トレンチ出土遺物実測図8 黒書土器1



第185図 C-5 トレンチ出土遺物実測図10 黒書土器3

読できない。1210は須恵器の破片で、墨痕が見えるが判読できなかった。

1211は須恵器杯Aである。外面底部には「福」という字と「家」と思われる2文字が縦書きで判読できた。1212は須恵器杯Bの底部である。外面底部には墨痕があるが判読できなかった。1213は須恵器杯Bの破片で、墨痕が残るが判読できなかった。1214は須恵器の破片で、墨痕が残るが判読できなかった。1215は須恵器杯Bである。外面底部には墨痕が残るが判読できなかった。1216は須恵器杯Aである。外面底部には墨痕があるが文字は判読できなかった。

1217は須恵器の杯Bであり、外面の底部には「×」と思われるヘラ記号がある。1218は須恵器杯Bの高台部分である。外面底部には2文字らしき墨痕があるが判読できなかった。1219は須恵器杯Aの底部で、外面底部に墨痕があるが判読はできなかった。

1220は須恵器皿Aで、外面の底部には「屋」が判読できる。欠損しているために「田」が書かれていたかは不明である。1221は須恵器杯Aの底部に「キ」のような墨痕があるが文字として判読できない。1222は須恵器杯Aの底部で、「×」の墨痕がみられるが、小片のため判読できなかった。1223は須恵器で1文字もしくは2文字の墨痕がみられ、上部は「上」ようにも見える。

1224は須恵器の蓋の内面に墨痕がみられ、文字というより転用硯の可能性がある。1225は須恵器杯Bの高台部分で、外面底部には「仿」（人偏に旁は方）と判読できる。1226は須恵器杯Bの高台部分である。外面底部には墨痕があるが文字は判読できなかった。

1227は須恵器蓋である。内面には2文字あり、1文字目は「西」、2文字目は「家」と読める。1文字目は偏に何か付く可能性がある。1228は土師器皿の底部である。外面には「小殿」の文字が判読できる。1229は須恵器で「府」または「序」の可能性ある。1230は須恵器の蓋で、外面に「知」と読める文字がある。1231は須恵器で外面に墨痕があるが判読できなかった。1232は須恵器で外面に墨痕があるが判読できなかった。1233は須恵器蓋で頂部につまみが付く。内面には「家」が判読できる。

1234は須恵器杯Aの底部で、外面には花びらのような模様が描かれている。破片であるが花びらは3葉ある。1235は須恵器の蓋で外面に墨痕があるが判読できなかった。1236は須恵器に花びらのような模様が描かれている。

1237は須恵器の杯Bである。外面底部には墨痕があるが欠損しているため判読できなかった。1238は須恵器で、外面に墨痕があり、「幻」のようにも見えるが判読できなかった。

1239は須恵器杯Bの底部で、外面底部に墨痕が残る。文字としては判読できなかった。1240は須恵器杯Aの底部で、外面底部に墨痕があるが判読できなかった。1241は須恵器杯Bの高台部分で、外面底部に墨痕があるが判読できなかった。1242は須恵器杯Aである。外面底部に墨痕があるが判読できなかった。また、外面の杯部にも墨痕がある。1243は須恵器杯Aの底部で、外面底部に墨痕があるが判読できなかった。

1244は須恵器杯である。外面の体部に「西」と思われる文字が判読できる。1245は須恵器杯Bの高台部分で、外面に墨痕があるが判読できなかった。1246は須恵器で外面に墨痕があるが判読できなかった。1247は須恵器杯Bの高台部分で、外面に墨痕があるが判読できなかった。1248

は須恵器杯Bの高台部分で、外面に墨痕があるが判読できなかった。1249は須恵器杯Bであり、外面に墨痕があるが判読できなかった。1250は須恵器杯Aの底部で、外面に墨痕があるが判読できなかった。1251は須恵器杯の底部片で、外面に墨痕があるが判読できなかった。1252は須恵器杯Aで、外面底部に墨痕があるが判読できなかった。1253は須恵器蓋である。頂部に墨痕があるが判読できなかった。1254は須恵器杯Aの底部である。外面底部に墨痕があるが判読できなかった。1255は須恵器片で墨痕があるが判読できなかった。1256は須恵器の蓋で頂部にはつまみが付く。内面には墨痕があるが欠損もあり判読できない。

1257は須恵器の杯Aの底部で、花びらの模様が1葉みられる。1258は須恵器皿Aである。外面底部に墨痕がみられるが、文字かどうか判別できない。1259は須恵器杯Aの底部で、ほとんどが欠損しており墨痕があるが判読できない。

1260は須恵器の杯Bである。外面底部には墨痕がある。また、内面にもほぼ全面に墨痕がある。1261は須恵器の蓋で頂部につまみが付く。つまみ部分や蓋の内外面に墨痕がある。

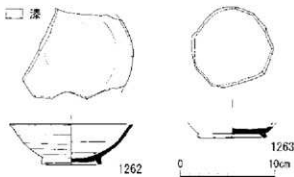
漆付着土器 (第186図1262・1263) 1262は須恵器の椀である。内面の口縁部や底の一部には、漆が付着している部分や剝がれた痕跡がある。1263は須恵器の杯Bの底部である。内面の底には漆が付着している部分や剝がれた痕跡がある。

b) 製塩土器 (第187図1264～第188図1323)

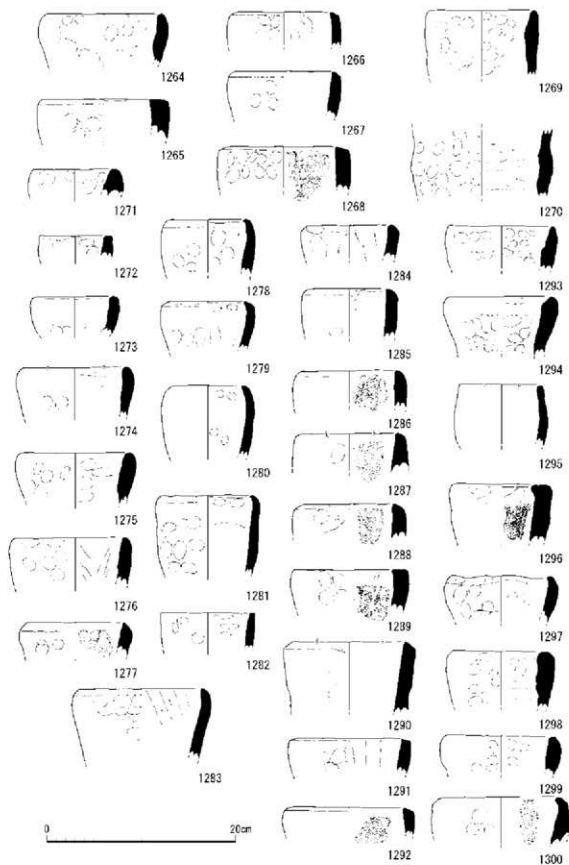
1264～1323は溝S D02から出土した製塩土器である。口縁端部には端部が丸いもの、先端が内に入るもの、端部に面を持つものなど形状が異なる。

1264は内外面ともユビオサエが残る。1265は外面はユビオサエ、内面は剥離しているが布目痕がわずかに残る。1266は内外面ともユビオサエが残る。1267は、外面はユビオサエ、内面は摩滅して不明である。1268は、外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。1269は内外面ともにユビオサエが残る。1270は、外面はユビオサエ、内面は粗いナデで粘土紐の痕跡が残る。1271は内外面ともユビオサエが残る。1272は内外面ともユビオサエが残る。1273は内外面ともユビオサエが残る。1274は、やや摩滅しているが内外面ともにユビオサエが残る。1275は内外面ともユビオサエが残る。1276は、外面はユビオサエ、内面に布目痕が残る。1277は、外面はユビオサエ、内面に布目痕が残る。

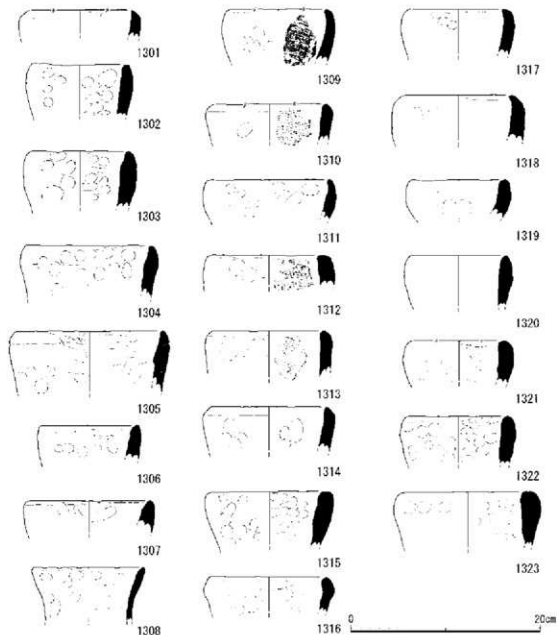
1278は内外面ともユビオサエが残る。1279は内外面ともにユビオサエが残る。1280は外面がやや摩滅しているが、内面にユビオサエが残る。1281は、外面はユビオサエ、内面には布目痕がわずかに残る。1282は内外面ともにユビオサエが残る。1283は、外面はユビオサエ、内面にはナデ調整が残る。1284は、外面はユビオサエ、内面にはナデ調整が残る。1285は内外面ともにユビオサエが残る。1286は、外面は摩滅のため調整は不明、内面には布目痕が残る。1287は、外面はユビ



第186図 C-5 トレンチ出土遺物実測図11 漆付着土器



第187図 C-5 トレンチ出土遺物実測図12 製塩土器 1



第188図 C-5 トレンチ出土遺物実測図13 製塩土器 2

オサエ、内面には布目痕が残る。1288は、外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。1289は、外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。1290は、摩滅が著しいが外面はユビオサエ、内面には布目痕がわずかに残る。1291は、外面はユビオサエ、内面にはナデ調整が残る。1292は、外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。

1293は内外面ともにユビオサエが残る。1294は内外面ともにユビオサエが残る。1295は摩滅が著しいが、内外面にはナデ調整がわずかに残る。1296は、外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。1297は内外面ともにユビオサエが残る。1298は内外面ともにユビオサエが残る。1299は内外面ともにユビオサエが残る。1300は、外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。

1301は内外面ともに摩滅しており、一部にナデ調整が残る。1302は内外面ともにユビオサエが

残る。1303は内外面ともにユビオサエが残る。1304は内外面ともにユビオサエが残る。1305は内外面ともにユビオサエが残る。1306は内外面ともにユビオサエが残る。1307はやや摩滅しているが、内外面ともにユビオサエが残る。1308は内外面ともにユビオサエが、内面には粘土紐痕が残る。

1309は、外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。1310は外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。1311は内外面ともにユビオサエが残る。1312は外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。1313は外面はユビオサエ、内面には布目痕が残る。1314は内外面ともにユビオサエが残る。1315は内外面ともにユビオサエが残る。1316は内外面ともにユビオサエが残る。

1317は摩滅しており外面はユビオサエ、内面には布目痕がわずかに残る。1318は、外面はユビオサエ、内面にはナデ調整が残る。1319は外面はユビオサエ、内面にはナデ調整が残る。1320は、内外面にナデ調整が残る。1321は外面はユビオサエ、内面にはナデ調整とユビオサエが残る。1322は内外面ともにユビオサエが残る。1323は内外面ともにユビオサエが残る。

c) 軒丸瓦 (第189図1324)

1324は溝 S D02から出土した軒丸瓦で、分類では佐伯 I 類の軒丸瓦である。

d) 石製品 (第190図1325)

1325は溝 S D02から出土した台石である。破片であるがおそらくは円形であったと思われる。表裏平坦部には摩擦痕があり、一部に墨が付着している。

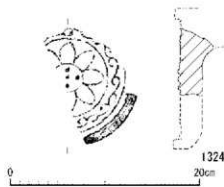
e) 木簡 (第191図1326～1328)

1326～1328は溝 S D02から出土した木簡である。

1326は縦に3文字書かれているが、1文字目が欠損していることから判読できず、2・3文字目は、「益」・「継」と判読できる。「□益継」となる。先端部が尖っており、荷札木簡の可能性もある。1327は縦に4文字あるようにみえる。2文字目には「桑」と判読できるが、あとは判読できない。「□桑□□」となる。1328は3文字あるように見えるが、判読できなかった。先端部が尖っており、荷札木簡の可能性もある。

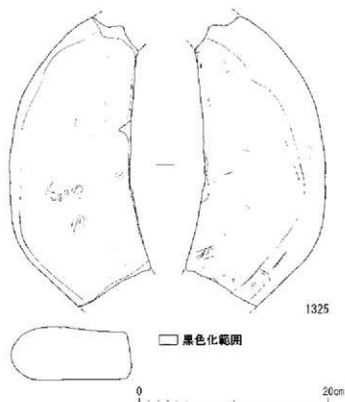
f) 木製品

木製皿 (第192図1329～第193図1342、第193図1345～第194図1355) 1329は、ほぼ完形品である。直径は21.5cmを測る。内外面の底部には、極めて細かい切り傷が無数に残る。1330の内外面の底部には、極めて細かい切り傷が無数に残る。1331は口縁端部が残る。内外面の底部には、極めて細かい切り傷が無数に残る。1332は口縁の破片であるが、端部は剥離している。1333も内外面の底部には、極めて細かい切り傷が無数に残る。1334は直径約22cmを測る。1/2欠損している。内外面の底部には、極めて細かい切り傷が無数に残る。1335は8割ほど残存する。内外面の底部には、極めて細かい切り傷が無数に残る。



第189図 C-5トレンチ出土遺物
実測図14(1/4) 軒丸瓦

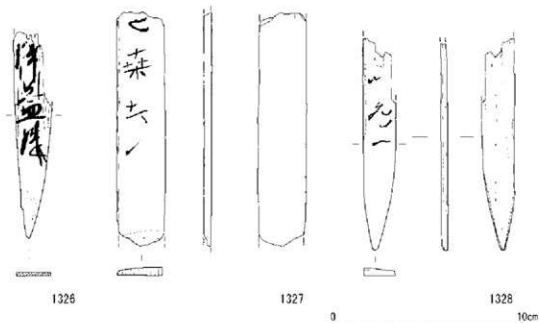
1336～1338は約3割残存する。内外面の底部に極めて細い切り傷が無数に残る。1339は木材の腐植が進み、凹みや穴がある。1340は浅い皿で、直径約13.3cmを測る。1341・1342は内外面の底部に極めて細い切り傷が無数に残る。1345～1347は口縁部分で内外面の底部に細い切り傷が残る。1348の内外面の底部には、極めて細い切り傷が無数に残る。1349は2つの破片が同一個体と思われる。



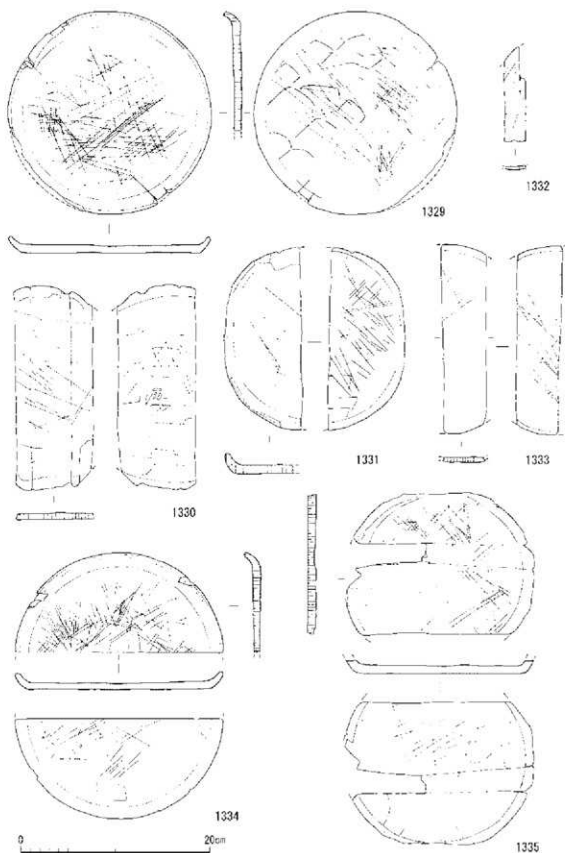
内外面の底部には、極めて細い切り傷が無数に残る。1350は木材が腐植しており、残存状態が良くない。1351の内外面の底部には、極めて細い切り傷が無数に残る。また、底部にはロクロケズリの痕跡が残る。1352の口縁端部は欠損しており、外面の底部には極めて細い切り傷が無数に残る。1353の内面底部には極めて細い切り傷が残る。1354は一部に口縁部が残る。内外面の底部には、極めて細い切り傷が無数に残る。1355は口縁部が欠損している。直径は約13.4cmを測る。

木製桶(第193図1343・1344、第195図1356、第197図1385)

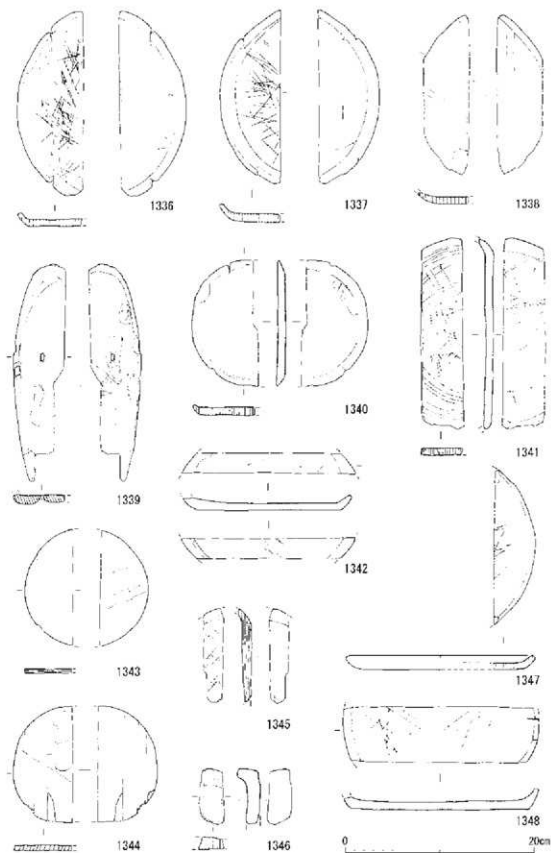
第190図 C-5トレンチ出土遺物実測図15(1/4) 石製品



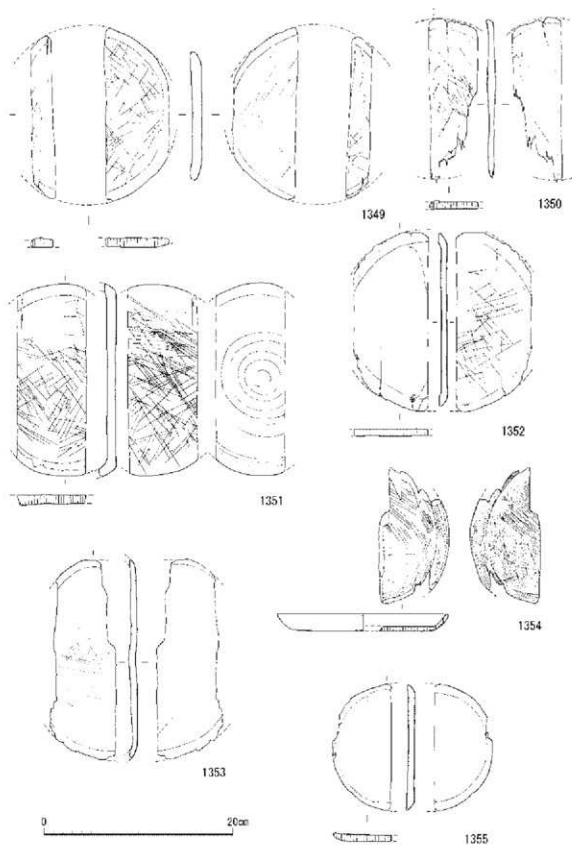
第191図 C-5トレンチ出土遺物実測図16 木筒



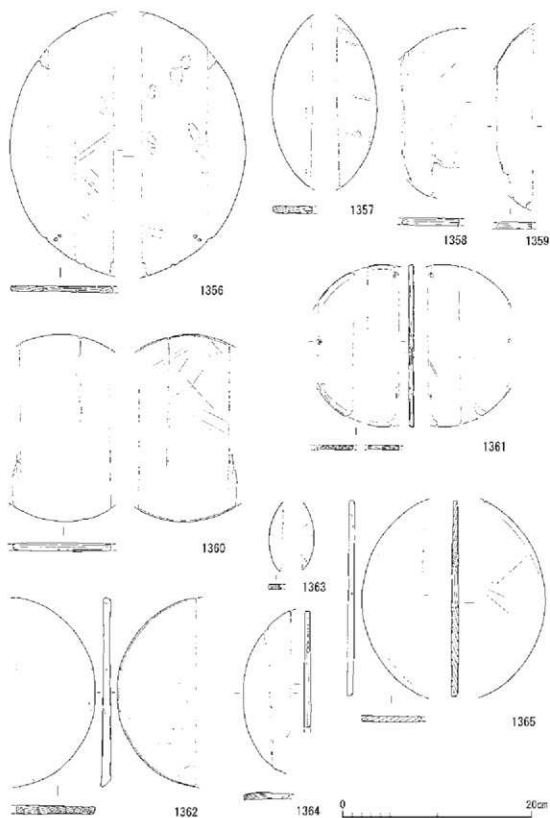
第192図 C-5トレンチ出土遺物実測図17 木製品1



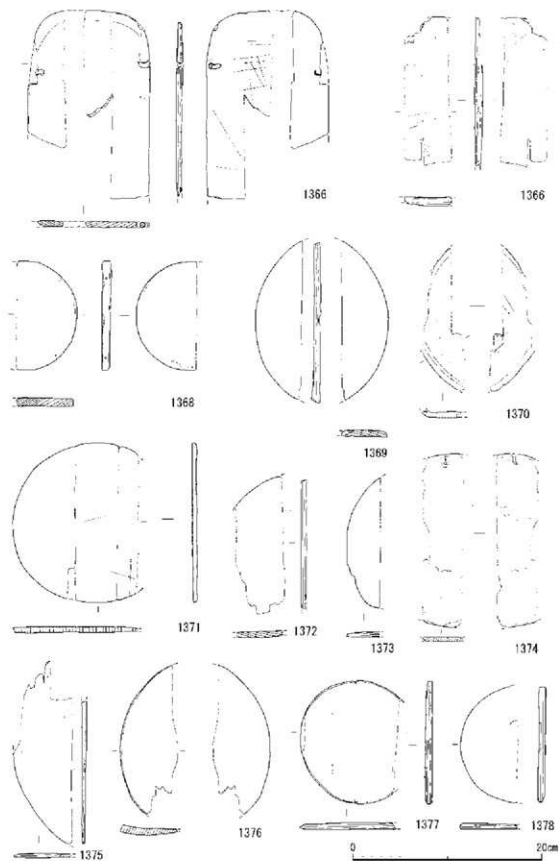
第193図 C-5トレンチ出土遺物実測図18 木製品2



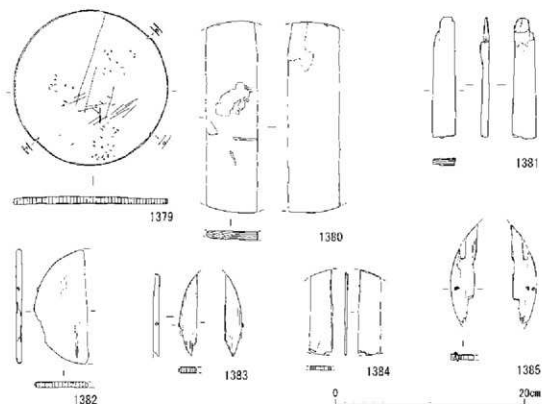
第194図 C-5 トレンチ出土遺物実測図19 木製品 3



第195図 C-5トレンチ出土遺物実測図20 木製品4



第196図 C-5トレンチ出土遺物実測図21 木製品5



第197図 C-5トレンチ出土遺物実測図22 木製品6

1343・1344は桶の底板である。

1356～1385は木製の桶の底板である。1361の底部には、曲物を止めるための穿穴が2か所ある。1366は長方形の曲物の底板である。2か所に曲物を止めるための穿穴が2か所ある。1374にも穴の痕跡が1か所ある。1379は桶底板の完形で、直径は16.2cmを測る。

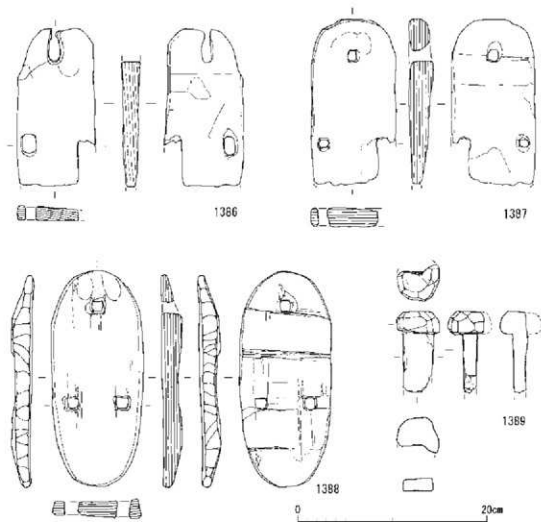
下駄ほか(第198図1386～1389) 1386～1388は木製の下駄(足駄)である。3点とも足を乗せる木板上に「歯」と呼ばれる接地用の突起部を付け、「眼」と呼ぶ孔を3つ穿ち鼻緒を通すもので、1386・1387は歯が欠損するが、1388には前後の歯の部分が残る。1386～1388には眼が3か所残る。

1389は栓のような形をする。頭の部分は削られ、成形される。何に使用されたかは不明である。

棒状木製品(第199図1390～1412) 1390～1412は棒状の木製品で、用途不明または未成品である。1390は先端部に沈線を彫り込んだ加工品で、用途は不明である。1391は断面が多角形になり、先端部が尖るように削られている。箸と思われる。1392も1391と同様に箸と思われる。断面が多角形に削られている。1393は細長い断面が長方形になる加工品である。

1394は断面が円形の加工品である。1395・1396は断面が多角形に削られた棒状加工品である。1397は火を移すために使用したと思われる火付け木で、先端部が焼け焦げている。1398・1399は断面が多角形になるように、成形されており先端部が尖ることから、箸と思われる。1400は断面が円形になるように成形された加工品である。1401は断面が多角形になるように成形された加工品である。1402は断面が円形になるように成形された加工品である。

1403は杭状のもので、中心には約3mmの穴が通り空洞になる。現存する長さは335cmを測る。



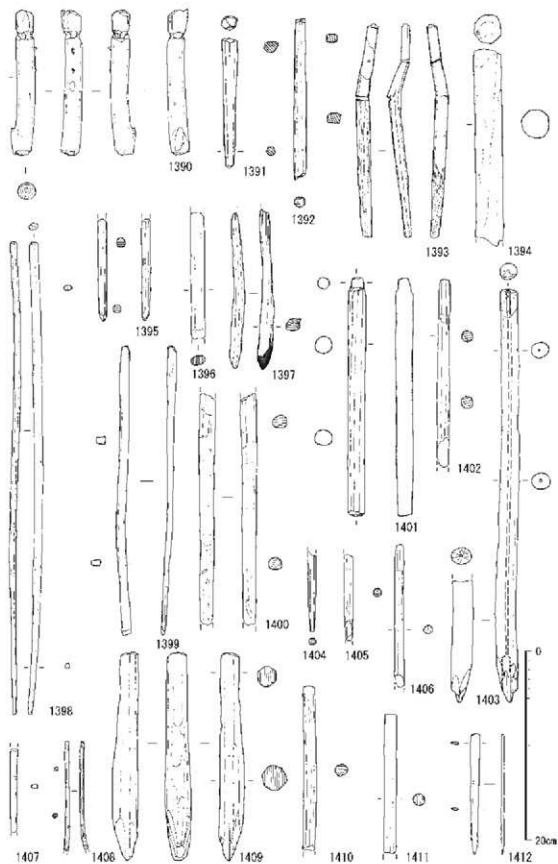
第198図 C-5トレンチ出土遺物実測図23 木製品7

1404～1408は箸の破片と思われる。1409は断面が多角形になるように削られているが、未成品の可能性もある。1410～1412は断面が多角形になるように成形されており、箸の破片と思われる。

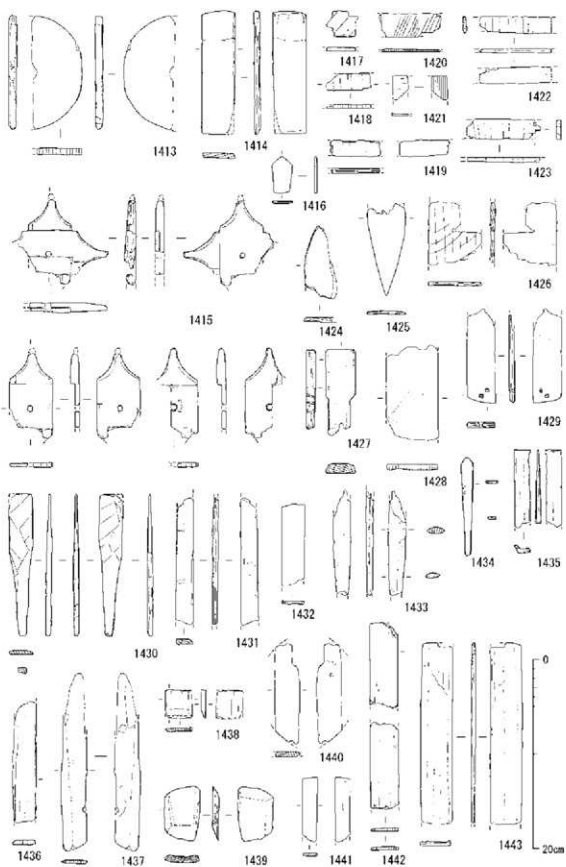
加工品(第200図1413～1443) 1413～1443は加工品であるが、用途は不明である。1413は円形の板状加工品である。中央に穴がある。1414は板状加工品である。1415は同じ形状の加工品が重なっている状態で出土した。中央には2つを通す穴が開いている。用途は不明である。

1416は先端がとがった板状の加工品である。1417～1423は加工した木材の削り屑と思われる。1424は先端が丸みを帯びて尖るように加工されている。1425は先端が鋭角に加工された板状加工品である。1426は板状に加工されているが、用途不明である。1427はくびれを作った板状の加工品である。1428は板状の加工品である。1429は先端部に2か所の穴があげられた板状加工品である。

1430～1432は板状に削られた加工品である。1433は加工されているが凹凸が残り、未成品と思われる。1434は両先端部が加工された板状の加工品である。1435は用途不明な加工品である。1436は板状加工品である。1437は未成品である。1438・1439は加工した木材の削り屑と思われる。1440～1443は板状の加工品である。



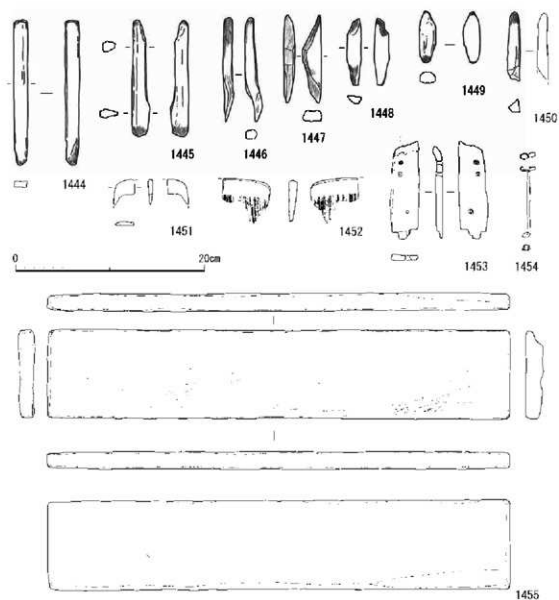
第199図 C-5トレンチ出土遺物実測図24 木製品8



第200図 C-5トレンチ出土遺物実測図25 木製品9

火付け木・櫛など(第201図1444~1455) 1444~1450は火を移すために使用したと思われる火付け木である。1444・1445・1448・1449は、先端部の両側に焼け焦げた跡がある。枝や加工品の削り屑を利用したものと思われる。1451・1452は櫛の破片である。1452には櫛の歯が残っている。1453は用途不明の加工品で、3か所に穴があけられている。1454は結束紐のようなものと思われる。木の皮で何かを結んでいたと思われるが不明である。1455は長さ48.8cm、幅9.3cm、厚さ3.2cmを測る長方形の板状加工品である。

(村田和弘)



第201図 C-5トレンチ出土遺物実測図26 木製品10

(4) D-1 トレンチ

① 調査の概要

IV-H区にあり、C-1 トレンチから西に約180mの位置する。小規模調査のD-1 a区において須恵器が出土する南北方向の溝などを確認したため、D-1 a、D-1 b、D-1 cの調査対象地全域に拡張する形で東西約100m、南北約20mにわたる不整形な調査区を設定した(第203図)。

基本層序は上層より近代の耕作土、床土、暗褐色細砂、地山と思われる明黄褐色細砂である。

② 検出遺構

溝 S D 01 調査区東側で検出された自然流路と考えられる溝である。検出した規模は、長さが東西に約16m、幅約2.5～3.0m、深さ約0.2～0.3mである。北西から南東へ向かって低くなる。蛇行する2本の自然流路が検出された。

調査区の南東隅はかつて水路が存在し、これを埋めて水田にしていたと地元の作業員より聞き取った。S D 01はこの水路によって削られ、南東隅は深く青灰色の粘土が堆積していた。

S D 01の堆積土第1層の暗オリーブ褐色土からは、奈良～平安時代にかけての土器が出土した。

溝 S D 02 調査区西側で検出された溝である。検出した規模は長さ約5.0m、幅1.5～2.5m、深さ約0.5mである。溝の埋土は暗灰黄粗砂礫である。遺物は出土しなかった。

溝 S D 03 調査区中央で検出された蛇行する自然流路と考えられる溝である。検出した規模は、長さが東西約11.0m、幅約1.5～2.5m、深さ0.5mである。緩やかに円弧を描く。全体的に西側の南壁から東側の南壁にかけて低くなる。S D 03が北側のS D 04を切っている。この場所付近が最も深くなっており、奈良時代の土器が多く出土している。埋土は下層より粘土が多く混じる灰オリーブ色中粒砂、暗灰黄色粗粒砂、オリーブ褐色粗粒砂となっている。

溝の底にあたる第3層からは奈良時代の須恵器のほかには鬼板の破片が出土した。

溝 S D 04 調査区中央で検出された溝である。検出した規模は、長さが南北約4.0m、幅約2.0～2.5m、深さ約0.3mである。北から南に向かって低くなり、東へ向かって蛇行する。南側はS D 03によって切られている。溝の埋土は下層よりオリーブ黒色粗粒砂、灰オリーブ色粗粒砂となっている。遺物は見つからなかった。

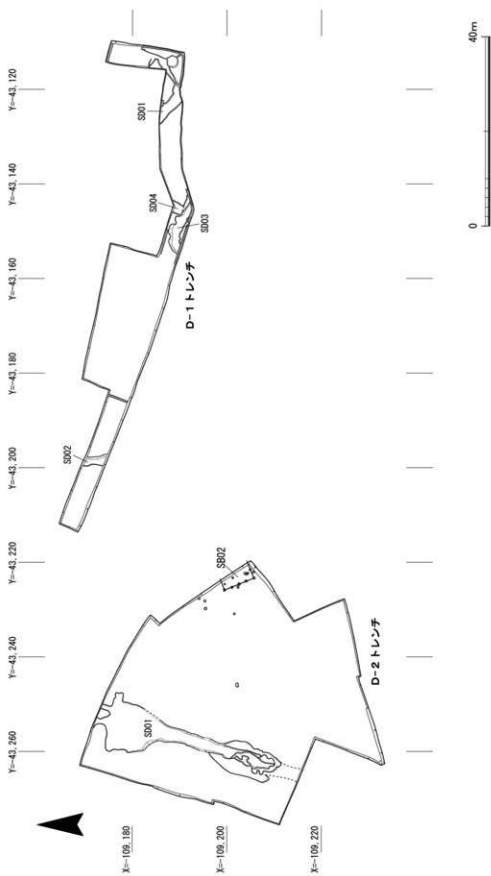
③ 出土遺物

a) 土器類

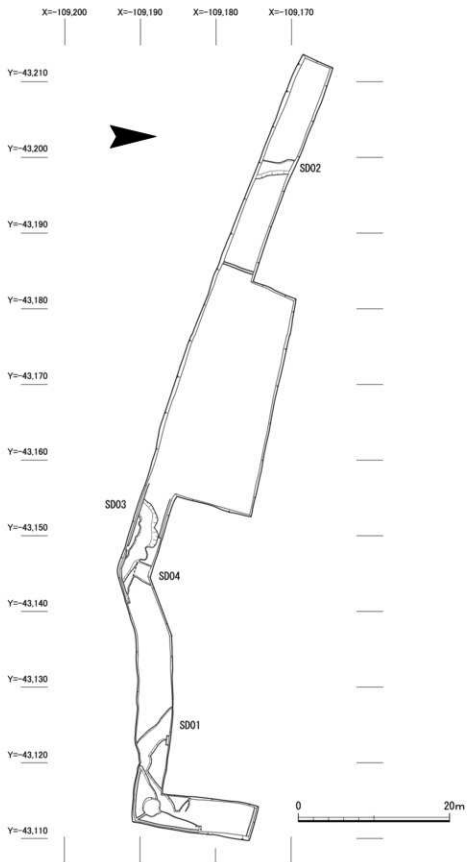
土師器や須恵器の細片が多く、実測できないため、残りが良好な遺物について報告する。

溝 S D 01 (第204図1456～1460) 1456・1457は須恵器杯Aである。1456は1層より出土した。口径14.3cm、器高4.4cmである。内外面の2/3に回転ナデを施す。底部はヘラ切りの後狙いナデを施す。1457は、口径15.0cm、器高3.65cmである。内外面に回転ナデを施す。底部はヘラ切りにより切り離している。

1458～1460は須恵器杯Bである。1458は、口径11.0cm、器高4.15cm、高台径7.7cmである。内外面に口縁部から高台にかけて回転ナデを施す。底部はヘラケズリを施す。高台は貼り付けに伴うナデを施す。



第202図 D-1・2トレンチ全体平面図



第203図 D-1 トレンチ遺構配置図



第204図 D-1トレンチ出土遺物実測図1(1/4) 溝S D01

1459は、口径14.6cm、器高4.0cm、高台径10.0cmである。内外面に回転ナデを施す。外面には自然軸がかかる。底部は回転ケズリを施す。高台は貼り付けに伴うナデが施されている。

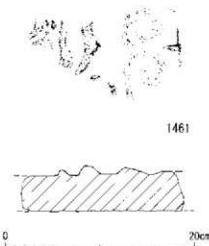
1460は1層から出土した。口径20.0cm、器高5.95cm、高台径11.4cmである。内外面の2/3に回転ナデを施し、残りは高台に向かって回転ケズリを施す。底部は回転ケズリを施す。高台は貼り付けに伴うナデを施す。外面には2か所の線刻を施す。

b) 瓦類

出土した瓦類は鬼板片1点、瓦片数点である。

溝S D03(第205図1461) 1461は、鬼板である。出土したのはこの1点のみであるため、全体像は不明である。

残存する大きさは縦10.7cm、横17.1cm、厚さ4.9cmである。正面は型に粘土を詰めることで模様を作っていると考えられる。中央の下部を直角にヘラで削り出している。裏面はケズリを施したのちに全体にナデを施す。



第205図 D-1トレンチ出土遺物実測図2 溝S D03

(5) D-2トレンチ

①調査の概要

Ⅲ-I・Ⅳ-L区の境界に位置する。D-2地区は、当初は小規模a~hの合計8か所のトレンチを設けて掘削した。それらのうち東側のhトレンチからは柱穴を、北西側a・b・c・dの4つのトレンチからは流路S D01を検出し、これらのトレンチを包括するように拡張し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、調査区東側から柱穴群及び、掘立柱建物S B02などの遺構を検出した。

水田耕作土、水田床土以下は、遺構を検出した東側を除き、河川堆積による粗砂や粗礫の厚い堆積がみられ、顕著な遺構・遺物を確認することはできなかった。

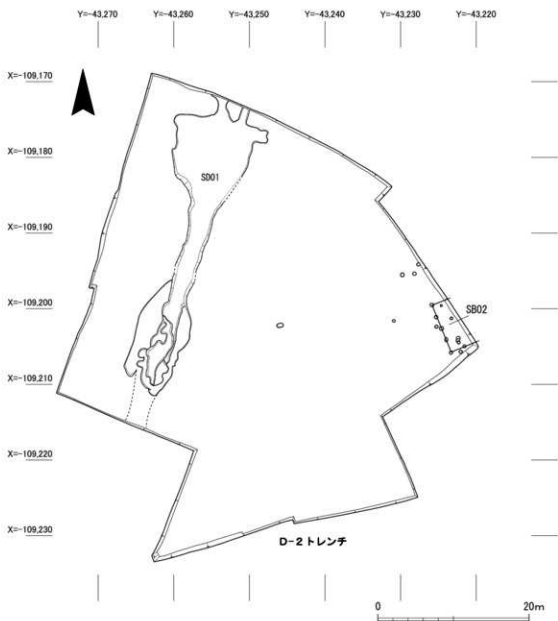
②検出遺構

掘立柱建物S B02(第207図) 南北4間、東西1間分の部分的な検出であり、東側は調査区外となる。暗灰褐色の埋土を有する柱穴は、直径約0.4~0.5mを測る円形で、柱間距離は1.8~2mである。柱穴から、飛鳥時代の須恵器蓋が出土しており、当該期の建物である可能性がある。建物周辺を面的に精査したところ、須恵器、土師器の断片とともに、古墳時代の金環1点が出土した。

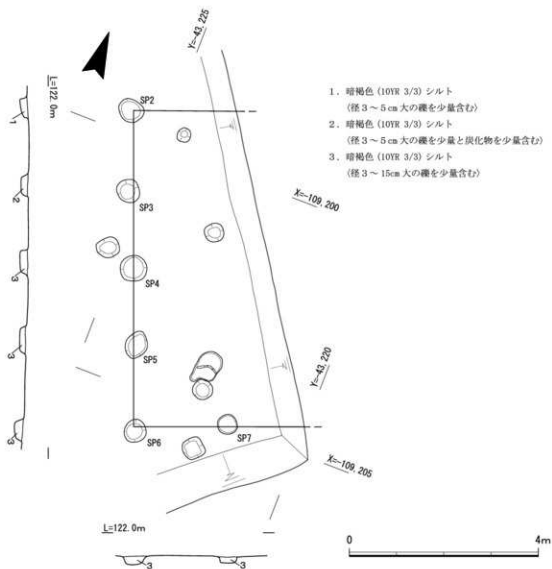
溝 S D 01 はほぼ南北に約40m分検出した。幅は狭いところで3m、広いところでは約10mを測る。出土遺物がないことや、洪水砂礫の急激な流れ込みを示す堆積状況などから、自然流路と考えられる。

③出土遺物

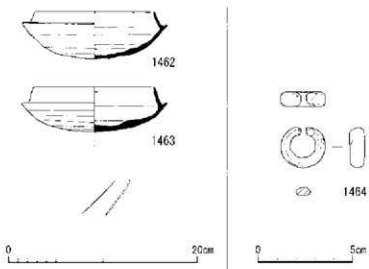
遺構面精査時(第208図1462～1464) 1462・1463は須恵器の杯身で、6世紀中頃(陶邑編年TK10並行期)に属すると思われる。1463の外表面底部には2条のヘラで描かれた線がみられる。1464は耳環である。銀製の中実で、一部に金メッキが残る。(浅田洋輔)



第206図 D-2 トレンチ遺構配置図



第207図 D-2トレンチ掘立柱建物SB02実測図



第208図 D-2トレンチ出土遺物実測図(1/4・1/2)

6. 遺構と遺物の検討

1) 大日堂古墳について

今回の調査で、新たに大日堂古墳 1 基が見つかった。周辺の調査では、太田遺跡でほぼ同規模の太田 2 号墳があり、出土遺物から古墳時代中期と考えられている。太田古墳群はその背後に行者山があり、周辺には鹿谷古墳群や稗田西山古墳群なども所在し、太田古墳群に先行した古墳群が形成されている。

新たに確認された大日堂古墳は出土遺物から古墳時代後期初め頃に築造されたと考えられる。古墳は平地に位置しており、古墳周辺には同時期の遺構が確認できないことから、築造集団の墓域であったと考えられる。西側の山裾には、横穴式石室を主体とする佐伯古墳群が位置している。また、2 基 1 組で古墳が築造される類例は天神塚古墳、馬場ヶ崎古墳群などで見られ、首長が 2 世代にわたって造墓活動を行っていたと指摘されている⁽²⁵⁾。また、山裾に横穴式石室、平地に方墳ないし円墳というあり方は、小金岐古墳群と馬場ヶ崎古墳群、鹿谷古墳群と太田古墳群、佐伯古墳群と大日堂古墳は類似している。佐伯遺跡で確認した大日堂古墳では方墳 1 基のみであったが、これまでの事例から、近くに一对になる古墳が、埋没もしくは破壊された古墳が存在する可能性がある。

今後の課題としては、佐伯古墳群と大日堂古墳の築造集団の差異や、鹿谷 18 号墳がその副葬品から首長墓として位置付けられるが、佐伯遺跡まで包括する首長であったのか、小地域間で集団の違いがあるのかなど検討していかなければならない。

(竹村亮仁)

2) 掘立柱塼について

C-1 トレンチの調査で、南北方向に延びる掘立柱塼を検出した。各柱穴は、一辺約 0.7～1 m、深さ約 0.6～0.8 m の隅丸方形の掘形を有する、かなり規模の大きな塼であった。一辺が 1 m に迫るような隅丸方形の掘形を持つ掘立柱塼が、一般の集落で使用されていたとは考えにくい。佐伯遺跡の調査成果や類例を踏まえて、この掘立柱塼がどのような塼であったのかを考えてみる。

掘立柱塼の類例 日本各地の発掘調査で掘立柱塼は見つかっている。藤原京では築地塼が導入されるよりも前であるため、掘立柱塼である。平城京では、築地を築く前の仮設や工期短縮のために掘立柱塼を築く例や築地塼を整備する前の仮設の目隠しとして掘立柱塼を築いている。恭仁宮では、朝堂院の東側や大極殿院の南面が掘立柱塼であったことがわかっていて⁽²⁶⁾。恭仁宮では大極殿院南面の築地塼や南門を造営する時間や予算がなくなったため、掘立柱塼で間に合せたことが調査成果でわかっている。仮設や工期の短縮などと推測される掘立柱塼のほかにも、継続して掘立柱塼を建て直している例がある。上野国分寺の講堂の北に位置する掘立柱塼は規模がよく似ている。佐伯遺跡とは異なり、東西方向の掘立柱塼が設けられている。1 m 前後の掘形が 2.7 m 前後の間隔で並び、何らかの意図があって建てられた目隠し塼と位置付けている⁽²⁷⁾。古相を持つ掘形を新たな掘形が切っていることから、仮設の塼ではなく、何らかの意図があってこの場所に必要があったために築地ではなく掘立柱塼を選んだと考えられる。

佐伯遺跡の掘立柱塼 今回検出した掘立柱塼は、南北23.7m以上にわたって延びる掘立柱塼を検出した。それぞれの掘形は、2.5～2.7m間隔で並んでいる。最初に述べたが、それぞれの掘形の規模は大きい。検出した柱列の北側は調査区外で2m以上先に掘り進めず、南側は掘形がありそうな場所に攪乱が存在したため9間分しか検出することができなかった。柱列北端部の柱穴の東西には、屈折する掘形を検出することができなかったため、北へはさらに延びると推測する。南側については、南隣の16トレンチで柱穴は確認できず、中間の調査区外で東に屈折する可能性がある。

この掘立柱塼がいつ作られたのかは、明確に時期がわかる遺物が出土していないので不明である。しかし、北側の柱穴S P 99の掘形内からは、瓦の細片が1点出土している。S P 99の掘形内に瓦片が含まれているということは、寺院が整備された最初の時期に作られたものではない可能性が高い。細片とはいえ、瓦片を含んでいるため、屋根の補修などで壊れた瓦片が掘立柱塼を整備した際に混入した可能性が考えられる。

柱の掘形は、0.7～1.0mと大きく、深さも0.6～0.8mと佐伯遺跡の柱穴の中ではかなり深い。これだけ深ければかなりしっかりとした塼を立てることができたと考えられる。掘立柱塼と断定できるような構造を持つ遺構の出土や遺物の出土はない。しかし、この深さがあれば、屋根に多少の重みがかかっても耐えることができるのではないかと考えられる。掘立柱塼を検出した場所の東側では、遺構面より上層で瓦溜まりを検出している。この瓦溜まりからは、軒瓦を含む多数の瓦が出土している。この瓦溜まりの付近で掘立柱塼のほか瓦を使用していたような遺構は見つかっていない。C-1トレンチで見つかった瓦は、掘立柱塼で葺棟として使用されていた可能性も考えられる。

小結 佐伯遺跡で見つかった掘立柱塼は、検出した柱穴の中でもかなり立派なものであった。塼は目隠しや、区画をするためのものである。塼の屋根に棟のみでも採用していたのであれば重量がかかるのでしっかりとした掘形が必要となる。仮設ではなくしっかりとした塼を最初から作っていたのであれば、このように大きな掘形の掘立柱塼を作った意図もわかる。掘立柱塼の柱穴掘形や柱痕の中から瓦片が出土したことは先に述べた。以上のことから考えると、寺院などの整備の最終段階で周囲との区画あるいは目隠しとして、しっかりとした掘立柱塼を整備したのではないかと考えられる。この塼が何を区画していたのかは、今回の調査では伽藍配置などの建物が検出できなかったためわからない。今後の周囲の調査成果に期待したい。

(浅田洋輔)

3)佐伯遺跡の軒瓦について

今回の佐伯遺跡の調査では、複数の型式の軒瓦が出土した。これまでの調査では、佐伯遺跡において布目瓦が出土した以外は軒瓦の存在は知られていなかった。今回、存在が知られていなかった軒瓦が出土したことによって、亀岡盆地における佐伯遺跡の歴史的意義を考えるための資料となった。これらの軒瓦を考察することで、佐伯遺跡における文化交流を考えてみたい。

まず、軒丸瓦について考察する。佐伯遺跡からは、7型式12種類の軒瓦が出土した。

佐伯遺跡出土の軒丸瓦Ⅰ類には、いずれも小さいが4か所の范傷が存在する(第209図)。

范傷①は資料調査を行った際に確認した綾中庵寺出土の軒丸瓦Ⅲ類にも存在する、運弁から内区圏線にかけて延びる范傷である。佐伯遺跡出土の軒丸瓦Ⅰ類の該当部分が残るもののうち、9割以上に確認できた。

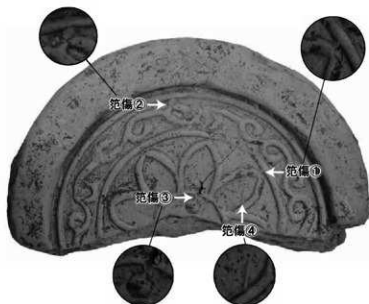
范傷②は外区唐草に新たに見つかった范傷である。約4割の破片で確認できた。范傷①に対して平行に傷ができています。同范瓦を実見したが、綾中庵寺出土の軒丸瓦Ⅲ類は出土数が少なく、該当部分が残されたものを確認できなかった。傷の形状は細長い線状の形ではなく、彫れた形になっている。軒丸瓦を作瓦した際に范の木目に石粒が挟まり、隙間が広がったと考えられる。

范傷③は、外側の蓮子1つから中房の圏線に向かって傷が伸びている。約4割の破片で確認できた。この傷も范傷①に対して平行にできています。

范傷④は范傷①がある運弁の内側に傷ができています。范傷①に対して平行方向に傷ができています。浅くわずかなものを含めて10点のみ確認できた。

以上のように、4か所の范傷は全て平行に傷ができています。范を彫った際にできた傷ではなく、作瓦を重ねることで木目に隙間が広がり、傷が増えていったと考えられる。范傷②が残っているもののうち、范傷③がない破片が複数存在するため、傷ができた順番は上記の順番通りと推測できる。

綾中庵寺との同范関係であるが、綾中庵寺の軒瓦を実見した結果、范傷①以外にはほかの范傷を確認できなかった。綾中庵寺の軒丸瓦におけるⅢ類の出土量の割合は最も少ない。佐伯遺跡出土の軒丸瓦Ⅰ類は、瓦当部の文様全体が摩耗した資料や、范を彫り直した資料が複数確認できる。以上のことから佐伯遺跡出土の軒丸瓦Ⅰ類を製作していた瓦窯は佐伯遺跡に軒丸瓦Ⅰ類を供給していた早期の段階で、綾中庵寺の軒先を補修する目的などで少数の軒丸瓦が持ち込まれたと考えられる。



第209図 佐伯遺跡出土軒丸瓦Ⅰ類范傷

佐伯遺跡軒丸瓦Ⅱ類は合計で5点出土した。外縁は素縁で、内区は卵型の素弁と大ぶりの間弁を持つ。佐伯遺跡で出土した軒丸瓦の中では、最も古い要素を持った瓦である。類例を調べてみると、宝菩提院廃寺瓦窯跡に類例がある^(B19)。軒丸瓦Ⅱaは、瓦当表面の縁に土手状のものがある。はめ込み式の縦置き型一本作りで作られた可能性がある。軒丸瓦の中で最も古い様相を持つが、5点しか出土していない為、主体となる軒丸瓦ではない。

佐伯遺跡軒丸瓦Ⅲ類は、合計で3点出土した。いずれも全体を残している瓦はなく、詳細は不明である。文様構成を見ると、同じ亀岡盆地の観音芝廃寺や丹波国分寺にみられる瓦である。これらに比べると、佐伯遺跡出土の軒丸瓦Ⅲ類は、弁端が角ばったものから丸みを持ったものになっていることから後出的と考えられる。

次に、佐伯遺跡出土の軒平瓦について考察する。

佐伯遺跡出土の軒平瓦Ⅰ類は、軒平瓦の中で最も多く出土した形式である。綾中廃寺の軒平瓦を資料調査した際に複数の范傷が存在し、双方の軒平瓦で同じ位置に確認した。軒丸瓦Ⅰ類の范傷と同様に、いずれも小さいものである。范傷のほかにも、范を彫った際にできたと思われる痕跡が同じ位置に残っていた(第210図)。痕跡は上外区の圏線の両端で確認できる。また、范傷は内区の変形忍冬唐草文(范傷①)と、その上部にある上外区の珠文と内区圏線の間(范傷②)に存在する(第210図上)。

綾中廃寺出土の軒平瓦は彫りが深いものばかりであるが、佐伯遺跡出土の軒平瓦Ⅰ類は文様全体が摩耗しているものが多く存在する。また、瓦当部の調整も複数の種類が存在する。1点しか出土していないが、折曲技法によって製作された軒平瓦も存在する。

同范の綾中廃寺の軒平瓦Ⅱ類について綾中廃寺の報告書では、文様が左右逆になっていることから片岡尼寺の軒平瓦を見ながら綾中廃寺の瓦范が製作された可能性も指摘されている^(B22)。

綾中廃寺の軒平瓦については新倉香氏の先行研究があり、氏によると、綾中廃寺の変形忍冬文軒平瓦は、6645A型式の退化型式であると述べている。この瓦当文様と逆流れのものが尼寺廃寺にも見られ、尼寺廃寺の方が精巧であり綾中廃寺の方が簡略化されていることから、尼寺廃寺の軒平瓦が先行すると指摘している^(B23)。

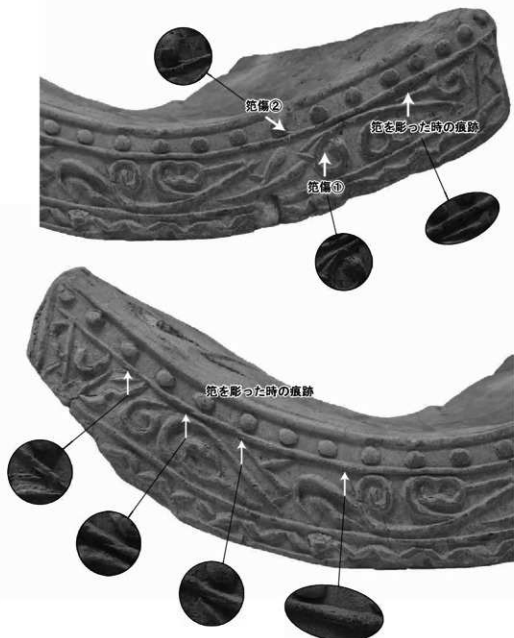
軒平瓦Ⅱ類は、無文頸部施文軒平瓦である。C-1トレンチの報告でも述べたが南山城地域で類例が見られる^(B24)。瓦当部が無文であり頸部に施文を施しているため、古い様相を持つが出土点数は2点のみであり、軒平瓦の中で主体であるとは言えない。

軒平瓦Ⅲ・Ⅳ類は、重弧文軒平瓦と唐草文軒平瓦であるが、細片が1点ずつしか出土していないため、詳細は不明である。それぞれ1点ずつしか出土していないため主体であるとは言えない。

軒平瓦の組み合わせと時期について 佐伯遺跡で最も出土している割合が高い軒瓦のセットは、軒丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅰ類である。このセットは綾中廃寺でも出土しており、先述したようにこの軒瓦は同范関係にある。軒丸瓦の文様は綾中廃寺以外に同じ文様は管見では見えていない。外区の唐草文は、新羅系瓦当文様の要素とされ、特に北九州から山陰にかけて多く分布すると綾中廃寺の報告書でも指摘している^(B25)。この要素を持つ瓦は7世紀末から12世紀まで存在する。

佐伯遺跡で見つかった瓦溜まりは二次的に移動されていることから、共伴する土器が瓦の廃棄された時期のものであるという確証はない。よって軒丸瓦のみで時期を決定するのは困難である。では、軒平瓦Ⅰ類はどうか。変形忍冬唐草文は藤原京の時代に流行した文様である。一部の例を除けば奈良時代には廃れる文様である。先に挙げた新倉氏の研究では、寺院系である退化した変形忍冬文である6645A型式の亜式である尼寺廃寺のものを模倣したのが綾中廃寺である^(註3)としている。

上記のことを考えると、佐伯遺跡の軒平瓦Ⅰ類は8世紀中頃としたい。軒瓦のⅠ類についてまとめると、8世紀中頃に作瓦されたものではないかと推測できる。これらの瓦が綾中廃寺の軒先の修繕で持ち込まれたと推測すると、綾中廃寺の報告で考えられていた奈良時代末～平安時代初



第210図 佐伯遺跡出土軒平瓦Ⅰ類範傷

頭の年代観もあながち間違っていないと考えられる。

次に多く出土しているのは、軒丸瓦Ⅱ類と軒平瓦Ⅱ類である。軒丸瓦Ⅱ類は5点、軒平瓦Ⅱ類は2点出土している。それぞれ軒瓦の中では最も古い様相を持つが、出土点数はⅠ類に比べ少ない。補修などのために持ち込まれたか、周囲に別の建物があるかのどちらかであろう。

文様などから時期は7世紀後半のものではないかと思われる。軒丸瓦Ⅲ類は3点のみ出土した細弁十六葉軒丸瓦である。外区に珠文をめぐらせている点や観音芝蔴寺や丹波国分寺で出土しているものの退化であると思われる点から8世紀後半と思われる。確実に組み合わせられる軒平瓦はない。軒平瓦Ⅲ類は、1点のみ出土した重弧文の破片であるが、確実に組み合わせられる軒丸瓦はない。細片であるので時期の詳細は不明である。軒平瓦Ⅳ類は、1点のみ出土した唐草文軒平瓦である。内区に唐草、外区に圓線をめぐらせている。細片であるため、時期の詳細は不明である。

小結 佐伯遺跡8次・9次調査では、今まで存在を知られていなかった軒瓦が多数出土した。これまで、亀岡盆地において複数の古代寺院の存在が発掘調査の成果などにより知られていた。これらの寺院はそれぞれ扇状地にあり、亀岡盆地から山を越えてはかの地域へ行く際の交通の要衝といえる場所に位置していた。この中で、これまで佐伯遺跡の位置する扇状地だけが古代寺院の存在を知られていなかった。

今回の調査成果で伽藍配置や建物などの寺院と断定できる遺構を見つけることはできなかったが、その可能性を示す瓦や瓦塔といった寺院に関わる遺物などの成果を上げることができた。大規模な発掘調査が行われたことで、このように今まで知られていなかった寺院の可能性を示すことができた。今後の周辺での調査成果の増加によって、寺院の建物や瓦の生産遺跡等が見つかることを期待したい。

(浅田洋輔)

4)瓦塔について

西日本において、瓦塔はあまり存在を知られていない。出土例が東日本の一部地域に比べて極端に少なく、出土しても破片であることが多く、まとまって出土しないためである。今回1点のみではあるが、佐伯遺跡においても瓦塔が出土した。出土した破片は大きなものではなく、情報量も限られているが、わかる範囲内で佐伯遺跡の瓦塔について評価していきたい。

佐伯遺跡の瓦塔の特徴 今回の調査で出土した瓦塔は、屋根瓦部である。先述のC-1トレンチ出土遺物で触れたが、竹管状の工具を利用して丸瓦のみを表現している。工具を連続して押し付けることで行基葺きの瓦屋根を表現している。

破片を正面から見たときに縦方向に瓦は並んでいる。しかし、1枚分だけ横方向の瓦と斜め方向の瓦の表現が存在する。屋根の隅降り棟と正面とは別の面の瓦列であると考えられる。裏面は細い粘土筋を複数つけることで垂木を表現している。瓦塔の実測図を見ると、やや緩やかに粘土筋が放射状に拡がっているように見える。隅に向かって扇状に垂木を配する扇垂木を表現しているものと考えられる。

扇垂木は、発掘された四天王寺講堂(182)や法隆寺玉虫厨子など、限られた建物や造形物でみられる

垂木構造であり、復元以外では現存する扇垂木の建物は、瓦塔よりも年代の新しい大仏様や禪宗様の建物以外に存在しない。

京都府を含む近畿の瓦塔との比較 最初に述べたが、西日本における瓦塔の出土例は極端に少ない。石田成年氏は摂河泉における瓦塔についてまとめる過程で、1997年時点の日本における瓦塔の出土地を一覧表にしている。これによると、近畿における瓦塔の出土地は20か所にも満たない。関東の栃木・群馬・埼玉・神奈川や北陸の石川、東海の愛知に比べると驚くほど少ない。先に挙げた地域が各県で10か所から多い県で30か所近くになるのに対し、近畿は大阪府の6か所が最多である。近年の出土例を追加しても、遠くこれらの地域の出土地点数に及ばない。関東では静岡県宇志遺跡や千葉県馬込遺跡のように完全な形に復元できるものがある。それに対し、近畿で完全な形に復元できるのは、瀬後谷瓦窯から出土した瓦塔のみである。関東では、掘立柱建物の中や近傍で瓦塔が出土している遺跡が複数存在する。遺存状態の違いは、おそらく屋外で使用していたか屋内に安置していたかの違いを生んだのではないかと考えられる。

今回の佐伯遺跡の出土例が京都府内では3例目となった。

京都府内においてはじめて瓦塔が出土したのは瀬後谷瓦窯である。⁽¹⁰⁰⁾この遺跡からは、状態の良い瓦塔が出土した。屋根瓦部以外にも高欄や相輪なども出土している。瓦屋根は丸瓦と平瓦を表現している。2例目は小倉町別当町遺跡で出土した多角塔である。先の瀬後谷瓦窯の例や佐伯遺跡出土の瓦塔とは異なり、瓦葺きの細かい文様を施していない。通常の塔と異なり、軸部分の内角が六角形に復元できたことから六角形の多角塔と推測されている。⁽¹⁰¹⁾

近畿で出土している瓦塔のほとんどが屋根瓦の丸瓦と平瓦を表現するタイプである。竹管状の工具で丸瓦のみを表現しているのは、佐伯遺跡と滋賀県衣川廃寺、大阪府神感寺跡の3か所のみである。近畿の中では少ない種類である。垂木の表現は、粘土帯を裏面につけて方形の垂木をつけるか、垂木の表現をしていないものが多い。管見では、扇垂木の表現をしている近畿の瓦塔は佐伯遺跡出土のもののみである。近畿の瓦塔の中でも珍しい特徴を持った遺物である。

小結 佐伯遺跡において出土した瓦塔は、近畿における瓦塔とは屋根瓦の表現や垂木の表現などの点でみられない特徴を持っている。一方、関東や愛知などでは佐伯遺跡と同様の表現で製作された瓦塔は多い。生産された場所であるが、破片が小さく、この1点のみの出土であるので確定できるだけの情報がない。

愛知県の猿投窯跡群で生産された瓦塔に、竹管状工具を使用して丸瓦を表現するものが存在している。猿投窯跡群の製品は、約50km圏内に供給されている。しかし、佐伯遺跡と猿投窯跡群は直線距離で約140kmあり、ここから持ち込まれたとは考えづらい。近畿の中では生産遺跡が判明しているのは瀬後谷瓦窯のみである。

先述したとおり、この瓦窯で出土した瓦塔と佐伯遺跡出土のものは表現の特徴が似ていない。焼き上がりも瀬後谷瓦窯のものが土師質の部分が多いのに対し、佐伯遺跡のものは須恵質である。以上のことから考えると、佐伯遺跡の瓦塔は瀬後谷瓦窯で生産されたものではないと考えても良いだろう。

佐伯遺跡の瓦塔の表現についてもいくつかわからない点がある。降り棟と考えられる粘土剥離痕が存在するが、丸瓦3列分にも及んでいる。隅降り棟ではないかと思われる斜めの瓦が1列分のみであるため現実の建物構造とは異なる。また、隅降り棟の隣に横方向の瓦があると先述したが、この瓦が隅降り棟の瓦と思われるものの上に表現されている。現実の建物の構造ではあり得ない表現である。ほかにも瓦塔の軸ではないかと思われる粘土の一部が裏側に存在するが、この軸の内側が隅降り棟と考えられるものより外側に向かっている。破片が1点しかなく全体像の復元は困難である。

佐伯遺跡の瓦塔は、調査区の拡張中に出土した。また、C-1トレンチの瓦溜りは東に向かってさらに伸びていることから、ほかの場所から破片が出土してくる可能性もある。今後のほかの遺跡での出土事例を含めて情報の増加を期待したい。

(浅田洋輔)

7. 総括

(1) 佐伯遺跡の調査成果

今回調査を実施した佐伯遺跡の多くの調査地区では、後世の土地利用による遺構の遺存状況が良くなく、遺跡の全容については明らかにすることはできなかった。

また、今回の発掘調査が農地整備にかかわる国営農地再編事業に伴う発掘調査対象区の都合上、切り土となり失われる部分のみの調査となるため、断片的ではあるが検出した遺構や出土遺物から、複数の時代で遺跡の性格をうかがい知る重要な成果を得ることができた。

① 平成27年度

第7次調査では、遺跡範囲の南東部の1トレンチで、これまで佐伯遺跡では確認されていなかった縄文土器が出土した。南西部の4トレンチでは、古墳時代中期～後期にかけての竪穴建物群や奈良～平安時代にかけての掘立柱建物群を検出し、その時期の集落の一部を確認した。

② 平成28年度

第8次調査では、南西部の6トレンチでさらなる古墳時代の集落の拡がりを確認した。7トレンチや12トレンチでは、奈良時代と思われる方位を真北に揃えた掘立柱建物などを確認した。さらに7トレンチでは、一般的な集落では出土例が稀な踏脚面硯が出土し、官衙関連の様相を持つ遺構・遺物を確認した。

また、北東部のB-5トレンチでは、縄文時代の土坑や墳丘が削平された方墳などを検出した。新たに見つかった方墳は、小字名から取って「大日堂古墳(1号墳)」となった。

③ 平成29年度

第9次調査では、御霊神社の南側のC-1トレンチで検出した瓦堆積で奈良時代前期を中心とした多量の瓦が出土した。また、その下層面では、何らかを区画するために設けられた一辺が約0.5mの方形の柱掘形が南北方向に一列に並ぶ一般集落では稀な規模が大きな掘立柱塼を検出した。また、仏塔を模した小形の塔である瓦塔片が出土した。瓦塔は屋根部分の一部で、精巧に屋根瓦や扇垂木などが表現されている。

C-5トレンチの溝SD02からは、多量の皿などの木製品とともに「□益継」と書かれた木簡や「田屋」や「福」などの文字が書かれた多量の墨書土器が出土した。出土した土器は、平安時代前期(9世紀)に属するもので、一般の集落では出土しない遺物が一括して出土した。木製品には火付け木などがあり、近隣で何らかの儀式などを行ったのち、溝に廃棄し堆積したものと考えられる。また、木製品や墨書土器と同じ層から、I類の軒丸瓦(綾中庵寺と同范)も出土している。

そのほか、C-1トレンチの瓦堆積から南東へ約160mの位置で調査した、D-1トレンチの溝SD03から鬼瓦が出土した。近隣に鬼瓦を使用した建物があった可能性も考えられる。D-2トレンチでは、遺構密度は希薄ではあるが、掘立柱建物などの遺構を確認した。

(2) まとめ

御霊神社に近接するC-1トレンチでは、大量の瓦の出土状況や南北方向の掘立柱塼の存在、信仰の対象である瓦塔が出土したことなどから、状況証拠ではあるが総合的に判断して近隣には

寺院があったことが想定できる。寺院の名称は、所在する藤田野町佐伯の地名を冠して、あらたに「佐伯廃寺」と名付けられた。

特筆する遺物としては、まず、C-1トレンチで綾中廃寺と同範の瓦を含む多量に出土した瓦は、別の場所で倒壊または解体した瓦を移動させ、投棄し堆積した状況であった。出土した軒丸瓦には7型式あり、最も多くⅠ類とする軒丸瓦が出土量の9割を占める。この軒丸瓦Ⅰ類とした素弁八葉蓮華文軒丸瓦と同じく最も量が多い軒平瓦Ⅰ類の偏向唐草文軒平瓦である。これらは古い形式の要素を持つことから、寺院の創建瓦、または主要瓦として使用されたと考えるのが妥当であろう。

これらの佐伯軒丸瓦Ⅰ類と軒平瓦Ⅰ類とした瓦は、綾部市の綾中廃寺で出土しているものと同範であることが判明した(軒丸瓦Ⅲ類、軒平瓦Ⅱ類)。綾中廃寺は佐伯遺跡より約40km離れており、綾中廃寺を建立した氏族との何らかの強い関係があったと推測される。この同範の瓦がどこで作られ焼かれたのか、現時点では綾部市や亀岡でも確認されておらず生産地は不明である。

両遺跡の瓦出土量から比率を比較すると、綾中廃寺では軒丸瓦Ⅲ類4点・軒平瓦Ⅱ類11点と少数にとどまり、佐伯廃寺では瓦当のバリエーションの多さや出土量から考えると、都に近い佐伯廃寺から綾中廃寺へ渡った可能性が高いと考えられる。

さらに、寺院関連で重要な遺物として挙げられるのは、瓦塔の出土である。瓦塔は、奈良～平安時代にかけて仏塔を模して造られた焼物製の小型の塔である。実際の木造で建てられた仏塔の代わりに安置され、信仰の対象にされたと考えられている。その出土例は、群馬や埼玉、千葉を中心に関東で多く250例以上が確認されており、近畿では13例、京都では木津川市の瀬後谷瓦窯、京都市の北白川別当遺跡で出土しており、今回で3例目となり、寺院建立や仏塔信仰を考える上で貴重な資料である。

また、寺院関連の遺構・遺物のほかに、方位を北に揃えた掘立柱建物が存在することや、蹄脚円面硯や木簡の出土、農業に関連する役所の名称である「田屋」と書かれた墨書土器など、官衙を想定する遺構・遺物も確認しており、遺跡の性格を知る上で重要な資料である。

今回の発掘調査の成果から、佐伯遺跡の性格を整理してみる。

同範の瓦が出土している綾部市の綾中廃寺は、何鹿郡漢部郷の中心に位置し、郡衙の施設が隣接していることから郡寺とも考えられている。

佐伯遺跡においても、官衙に関連する遺構・遺物が確認されており、さらに寺院も存在していたことを想定すると、郡寺のような性格を持っていた可能性が考えられる。また、C-1トレンチで検出した南北方向の掘立柱堀がさらに北へ延びることと、北隣に鎮座している創祀が大同元(806)年とされる御雲神社との関連や、平安時代では御雲神社の北側に山陰道(篠山街道・丹波街道)が想定されており、交通の要所でもあったと考えられ、その関連も注目される遺跡といえる。

(村田和弘)

- 注1 中澤勝「佐伯地区府営ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書－佐伯遺跡第2次調査－」（「市内遺跡発掘調査報告書」亀岡市文化財調査報告書第79冊 亀岡市教育委員会）2007
「京都府埋蔵文化財調査報告書 平成26年度」京都府教育委員会 2017
- 注2 黒坪一樹「佐伯遺跡・佐伯館跡試掘調査概要」（「京都府遺跡調査概報」第122冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2007
- 注3 泉拓良「3、後期の土器 近畿地方の土器」（『縄文文化の研究4 縄文土器』 雄山閣 1981
- 注4 富井眞編『総覧縄文土器』 アム・プロモーション 2008
- 注5 田代 弘・筒井崇史「蔵垣内遺跡第12次発掘調査報告」（「京都府遺跡調査報告集」第141冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2010
- 注6 吉田恵二「日本古代陶磁の特質と系譜」（『文房具が語る古代東アジア』同成社）2018
- 注7 注1に同じ
- 注8 綾中庵寺の軒瓦を資料調査した際に范傷の存在を確認した。
- 注9 新倉香・梅本康広「宝善提院庵寺瓦窯跡」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第64集（第2分冊）財団法人向日市埋蔵文化財センター）2001
- 注10 樋口隆久「観音芝庵寺発掘調査報告」（『亀岡市文化財調査報告書』第20集 亀岡市教育委員会）1988
- 注11 樋口隆久「丹波国分寺跡第3次発掘調査」（『亀岡市文化財調査報告書』第14集 亀岡市教育委員会）1985
- 注12 大洞真白・八十島豊成・鷹野一太郎「南山城の古代寺院」同志社大学歴史資料館調査研究報告第9集 同志社大学歴史資料館 2010
- 注13 小林昌二・相沢 央「新潟県内出土文字資料集成」（『新潟大学大城プロジェクト研究資料叢刊1』新潟大学）2004
- 注14 富山大学人文学部の鈴木景二教授にご教授を得た。
- 注15 亀岡市史編さん委員会『新修亀岡市史』第一巻 京都府亀岡市）1995
- 注16 恭仁宮跡現地説明会資料「史跡恭仁宮跡 平成30年度発掘調査の成果」京都府教育庁文化財保護課 2019
- 注17 橋本淳「史跡上野国分寺跡第2期発掘調査報告書－総括編－」群馬県教育委員会事務局文化財保護課 2018
- 注18 注1に同じ
- 注19 注9に同じ
- 注20 注10に同じ
- 注21 注11に同じ
- 注22 中村孝行「綾中庵寺跡第1次・第2次発掘調査概報」綾部市文化財調査報告書第8集 綾部市教育委員会 1981
- 注23 新倉香「瓦当文様にみる技術伝播・交流の様相」（『帝塚山考古学研究所研究報告1』帝塚山考古学研究所）1998
- 注24 注12に同じ
- 注25 注22に同じ
- 注26 注23に同じ

- 注27 浅野清「第3章 遺跡 第8節 講堂」(『四天王寺 埋蔵文化財発掘調査報告』第6 文化財保護委員) 1967
- 注28 石田成年「摂河泉の瓦塔」(『河内古文化研究論集』柏原市古文化研究会) 1997
- 注29 石井清司「3.木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要(1)瀬後谷遺跡」(『京都府遺跡調査概要』第51冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注30 長戸演男「19 小倉町別当町遺跡」(『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所) 1996

付編 12・B-4 トレンチの縄文土坑出土試料の放射性炭素年代測定・ 花粉分析結果

(株)パレオ・ラボ 森 将志ほか

1. 放射性炭素年代測定

①12トレンチ

土坑SK8 土坑の底部から出土した土器の底部に付着していた炭化材を測定した。その結果は2104-2036calBCの暦年代を示した。縄文時代後期前葉～中葉に位置付けられる。木材の場合、最終形成年輪から内側であるほど古木効果により古い年代が得られる。SK8の炭化材は最終形成年輪を欠く部位不明のもので、古木効果の影響で木材が枯死もしくは伐採された年代よりも古い年代を示している可能性もある。しかし、土器型式による遺構の時期に対しては総合的な結果である。

土坑SK9 土坑の底から出土した土器(第91図494)の口縁部から体部外面に付着していた炭化物を測定した。結果は、5469-5328calBCで、縄文時代早期後半の年代が出た。この数値は、本土器の形態的特徴からみて明らかに古い。理由は、炭化物の中に含まれる土壤中の鉄分・マンガンもしくは燃料材を測ってしまったことによる。

②B-4トレンチ

土坑SK35 多量の縄文土器が出土している。中間部でまとまった土器の集積がみられた。その地点から採取した黒色シルト土壌のブロックを提出した。測定作業に入って、シルト塊の中から炭化した子葉を抽出することができ、その炭化した子葉を測定した。その結果、2036-1909calBCで、縄文時代後期前葉～中葉となった。

表1 分析試料一覧

遺構	トレンチ	層位	時期	土層
SK8	12a トレンチ	2層	縄文時代後期	炭化物、砂礫混じりオリーブ黒色(5Y3/1)粘土
SK9				砂礫混じり黒褐色(2.5Y3/2)粘土
SK35	B-4 トレンチ	5層		炭化物混じり黒色(2.5Y2/1)粘土

2. 花粉分析結果

放射性炭素年代測定した3つの土坑(縄文時代後期前葉～中葉)の埋土を用いて、古植生を検討するため、土壌の花粉分析をあわせて実施した。

分析の結果、花粉化石はほとんど含まれず、SK8からイネ科花粉が、SK35からシダ植物孢子がわずかに確認できたのみである。花粉分布図の作成もかなわなかった。

試料中には微粒炭は多く含まれていたものの、花粉化石が含まれなかった理由は、花粉は湿乾

を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解されて消失する。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉は残りにくい。土坑の用途は不明であるが、乾いた環境の土坑であったため、酸化の影響を強く受けて分解・消失した可能性がある。

表2 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	SK8	SK9	SK35
草本				
Gramineae	イネ科	2	-	-
シダ植物				
monolete type spore	単条溝孢子	-	-	1
Arboreal pollen	樹木花粉	-	-	-
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	-	-
Spores	シダ植物孢子	-	-	1
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	2	-	1

2. 平成25～27・29年度主要地方道亀岡園部線 防災・安全交付金事業関係遺跡発掘調査報告 出雲遺跡第17・19・20次、中古墳群第2・3次、 三日市遺跡第12～14次、車塚遺跡第11・12次

1. はじめに

この調査は、主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業に伴い、京都府南丹土木事務所の依頼を受けて実施した。主要地方道亀岡園部線防災・安全交付金事業は、亀岡盆地東部のほ場整備事業と併行して、亀岡市千歳町・馬路町における道路整備を目的として計画されたものである。今回の報告は、府道建設に伴い、路線内に遺跡範囲が含まれる出雲遺跡・三日市遺跡・車塚遺跡・中古墳群を対象とし、平成25年度から4か年にわたり実施した調査報告である。

出雲遺跡は、亀岡市千歳町千歳に所在する遺跡である。過去に、当調査研究センターや京都府教育委員会、亀岡市教育委員会による発掘調査が実施され、縄文時代から中世に至る複合集落遺跡であることが知られる。ほ場整備事業に伴う平成25年度の発掘調査では、居館の区画溝の可能性がある中世の大規模な溝を検出している。三日市遺跡・車塚遺跡は、出雲遺跡の西部に位置し、亀岡市馬路町三日市・千歳町千歳に所在する。三日市遺跡では、丹波国分寺の創建瓦を焼成した瓦窯に関連する遺構が検出され、車塚遺跡では、縄文時代中期末～後期の遺物包含層が確認されている。また、中古墳群は出雲遺跡と分布域が一部重なり、葺石・埴輪をもつ1号墳を中心に構成される古墳群である。

今回報告する各年度の調査については、平成25年度は、計画路線の南部と北部中央の対象地において、出雲遺跡第17次・中古墳群第2次・三日市遺跡第12次調査を実施した。平成26年度は、対象地の南部を中心に、出雲遺跡第19次・中古墳群第3次調査を実施した。また、平成27年度は、平成25年度・平成26年度の小規模調査の成果に基づき、対象地の北部と南部において出雲遺跡第20次・三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次調査を実施した。さらに、平成29年度は、対象地の北部において、三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次調査を実施した。本報告書は、平成30年度にこれらの調査成果の整理作業を実施し、作成したものである。

本報告書の執筆は、現地調査を担当した高野陽子・黒坪一樹・筒井崇史と、伊賀高広(当調査研究センター)が担当した。また、付編の花粉分析を京都府立大学生命環境学部教授高原光氏と同大学院生の河合孝則氏に、火山灰分析を檀原徹・山下透・奥野博子氏(京都フィッシュントラック)にご執筆いただいた。

各調査年度ともに現地調査にあたっては、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会はじめ各関係機関のご指導・ご協力を得た。また、京都府南丹土木事務所、千歳町自治会・馬路町自治会ならびに調査に参加していただいた地元住民の方々や調査補助員、整理員の方々には、調査・報告を通じて多大なご協力をいただいた。以上の関係機関、関係者の方々に深く感謝の意を表したい。



第1図 調査年度別調査区位置図

なお、調査に係る経費は、京都府南丹土木事務所が全額を負担した。

(高野陽子)

〔調査体制等〕

平成25年度調査(出雲遺跡第17次・中古墳群第2次・三日市遺跡第12次)

現地調査責任者	調査第2課長	水谷寿克
現地調査担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 主任	筒井崇史
	同 専門調査員	黒坪一樹

調査場所 亀岡市千歳町千歳他

現地調査期間 平成25年7月11日～平成25年11月7日

調査面積 1,250㎡

平成26年度調査(出雲遺跡第19次・中古墳群第3次)

現地調査責任者	調査課長	石井清司
現地調査担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 主査	高野陽子

調査場所 亀岡市千歳町千歳他

現地調査期間 平成26年8月22日～平成27年3月6日

調査面積 1,700㎡

平成27年度調査(出雲遺跡第20次・三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次)

現地調査責任者	調査課長	有井広幸
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 主査	黒坪一樹
	同 主査	高野陽子
	同 調査員	武本典子

調査場所 亀岡市千歳町千歳他

現地調査期間 平成27年5月7日～平成27年12月4日

調査面積 2,600㎡

付表1 年度別府営ほ場整備・府道建設に伴う発掘調査一覧(平成24～29年度)

年度	事業内容	遺跡調査回数			文献	
24年度	ほ場道路整備	出雲遺跡第15次	-	-	-	注1文献
25年度	ほ場道路整備	出雲遺跡第16次	-	-	-	注1文献
25年度	府道建設	出雲遺跡第17次	三日市遺跡第12次	-	中古墳群第2次	本報告
26年度	ほ場道路整備	出雲遺跡第18次	-	-	-	注1文献
26年度	府道建設	出雲遺跡第19次	-	-	中古墳群第3次	本報告
27年度	府道建設	出雲遺跡第20次	三日市遺跡第13次	車塚遺跡第11次	-	本報告
29年度	府道建設	-	三日市遺跡第14次	車塚遺跡第12次	-	本報告



【北部調査区】



【南部調査区】

第2図 調査対象区南部・北部調査地点配置図

平成29年度調査(三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次)

現地調査責任者	調査課長	森 正
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 主 査	高野陽子
調査場所	亀岡市馬路町上三日市	
現地調査期間	平成29年12月5日～平成30年1月24日	
調査面積	300㎡	

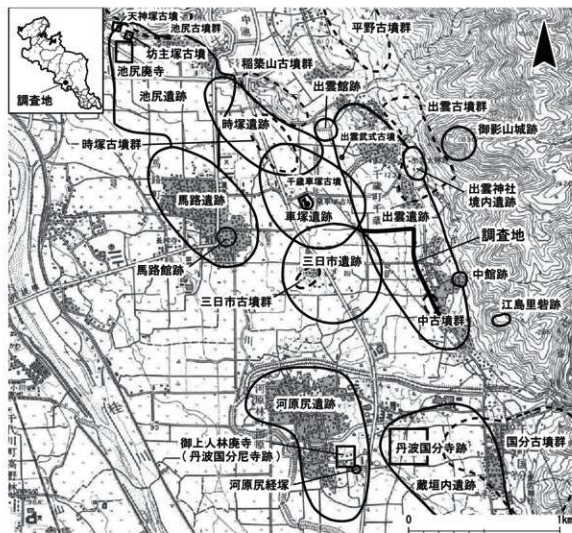
平成30年度整理報告

整理報告責任者	調査課長	小池 寛
整理報告担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 副主査	黒坪一樹

2. 位置と歴史的環境

亀岡盆地は、盆地中央部を貫流する大堰川(桂川中流)を挟み東西の山地裾部に低位段丘が形成されるが、今回の調査対象となった出雲遺跡・三日市遺跡・車塚遺跡と中古墳群は、盆地東側の山地の三郎ヶ岳(613m)から緩やかに西に派生した尾根裾に形成された中位段丘上に立地する。周辺の地層は、丹波山地の古生層として知られる丹波帯のチャートや頁岩及び珪質頁岩を主体とする礫層を基盤とする。東側の山地(若丹山地)が開析されて河川の谷に流出してくる土砂礫は、断層崖の斜面や扇状地を造り、段丘化した地形が出雲遺跡を含めた周辺に広がっている。

この地域の歴史的環境について、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を中心にみておきたい。弥生時代前期の遺跡は、大堰川西岸では大規模環壕集落として知られる太田遺跡が立地するが、出雲遺跡の所在する東岸の調査例は乏しく、蔵垣内遺跡や大淵遺跡などでわずかに土坑等の遺構がみられるに過ぎない。中期には、盆地各所で大きく集落遺跡が展開するようになるが、出雲遺跡周辺でも中期前葉の方形周溝墓群を確認した池尻遺跡を端緒に、中期中葉以降、時塚遺跡などの大規模な集落遺跡が展開する。時塚遺跡では、在地で作られた土器のほか河内地方・近江地方の土器や、遠く東海地方の影響を受けた円窓付き土器なども出土し、各地との地域間交流のあとが伺える。弥生時代後期後半には、出雲遺跡南部で多角形住居などが確認され、特に山地裾部に弥生後期の集落の拡がりが見えてくる。古墳時代に入ると、大堰川東岸辺では前期から後期まで首長墳が各時期に相次いで築造される。前期古墳としては、出雲遺跡の西側に大形円墳である出雲武式古墳(径35m)が築かれ、続いて中期中頃には甲冑などの鉄製武器類を出土し亀岡盆地の盟主墳とされる坊主塚古墳(一辺40m)や邪視の盾持ち人形埴輪を出土した時塚1号墳(一辺30m)など、方墳を特色とした首長墳が築造されるようになる。池上遺跡は、古墳時代の集落遺跡でもあり、古墳時代中期後半以降に盛期をむかえ、大溝から子持ち勾玉が出土している。後期前葉には、出雲遺跡の西方に丹波最大の前方後円墳である千歳車塚古墳(全長81m)が出現し、以



第3図 調査地及び周辺主要遺跡分布図(国土地理院1/25,000 亀岡)

降、この一帯は丹波の地域勢力の中核地域となる。

歴史時代の遺跡としては、出雲遺跡の北西約3kmに位置する池上遺跡で、奈良時代の厩付大型掘立柱建物群が検出され、丹波国府に関わる建物の可能性があると指摘される。周辺では時塚遺跡などでも同時期の官衙級的大型掘立柱建物群が検出され、官衙に関連する建物群の拡がりが見られ、奈良時代末期には、南約2kmに丹波国分僧寺・国分尼寺が創建されたと推定される。また、出雲遺跡東方の御影山の麓に位置する出雲神社は、平安時代の延喜式内社であり、古代から中世を通じて丹波国一宮として崇歌を集めた神社である。境内からは、藤王子窯で生産されたとみられる平安時代末期の瓦が出土し、この時期には神宮寺が建立されたと考えられている。中世においては、亀岡盆地北東部は「丹波国吉富庄絵図写」に、国八丁の国衙関連の建物の描写などとともに詳細に描かれ、出雲神社もこの時期には後白河法皇の蓮華王院領となり、一帯は王家領として寺社を中心に大きく栄えたとみられる。

(黒坪一樹・高野陽子)

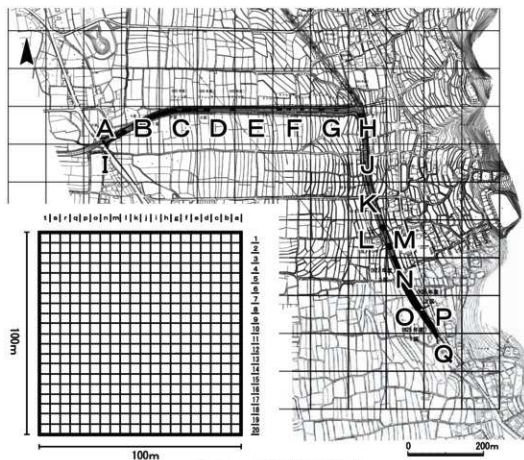
3. 調査内容

調査の方法

調査にあたっては、今回の調査対象地全体を覆う地区割りを国土座標に基づいて設定した。100m四方の区割りを基準として大地区割りを設定し、アルファベット大文字を用いた地区名を配した。さらにその中を、一辺を20等分して5m四方のグリッドを設定し、小区画とした。グリッドの基準線は国土座標と一致させ、東西の基準線にはアルファベット小文字を用い、南北の基準線には算用数字を用い、その組み合わせによって、小地区名とした(第4図)。

調査区名については、調査地点は同一年度内においても南北に大きく離れるため、北部調査地点、南部調査地点として分け、遺跡ごとに複数年度にわたって、連続する地区名を配した。出雲遺跡の南部調査地点では、平成25年度調査区を1区、平成26年度調査区を2区、さらに平成27年度調査区を3区とした。このうち、平成25年度調査区と平成26年度調査区は、中古墳群の分布範囲と重なるものである。また、北部では、三日市遺跡・車塚遺跡の地区名に関して、平成27年度調査区を1～3区、平成29年度調査区を4・5区とした^(注2)。なお、出雲遺跡及び、三日市遺跡・車塚遺跡において、平成26年度に実施した小規模調査についても、各年度を通じて、連続するトレンチ名を配している。

(高野陽子)



第4図 調査対象地地区割り図

〔1〕平成25年度調査

出雲遺跡第17次・中古墳群第2次・三日市遺跡第12次

平成25年度は出雲遺跡17次・中古墳群2次・三日市遺跡12次の調査を実施した。中古墳群は、亀岡市東部の丘陵斜面上に立地し、出雲遺跡と重複する。中古墳群は平成18年度の調査で新たに確認された古墳群である。平成25年度の調査地は平成18年度調査地の南東側に当たり、古墳群の拡がり予想された。中古墳群・出雲遺跡の調査としては、道路建設予定地を対象に1,000㎡の調査区を設定して調査を実施した。また、三日市遺跡では調査範囲を確認することを目的に調査対象地内に4か所の小規模なトレンチを設定して調査を実施した。

(1) 検出遺構

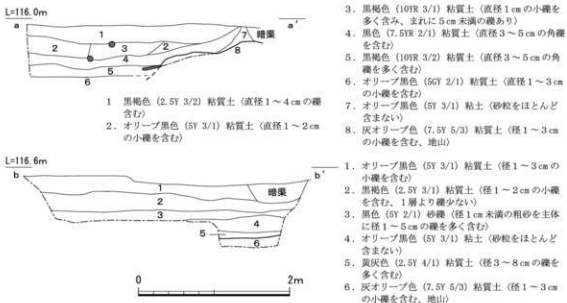
1) 南部調査地点(1区：出雲遺跡・中古墳群)

① 中古墳群第2次

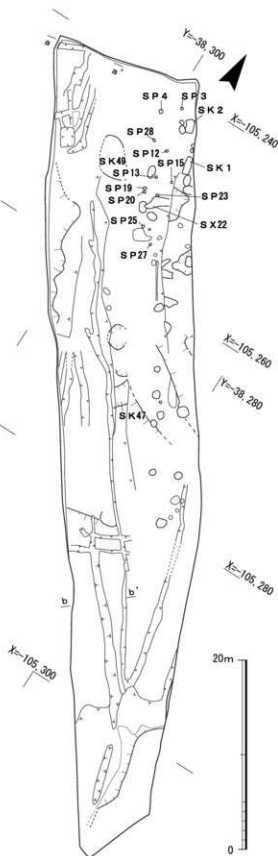
調査地の西端付近に中1号墳の周溝外堤角が検出される可能性があったものの、調査の結果、この付近では現代の暗渠や攪乱などによって、古墳の素材を示すものは確認できなかった。ただ、調査地北壁西半分の土層断面によると(第5図上段)、標高115.2m付近まで掘り下げたものの、ベースは確認できなかった。周囲からは近現代の陶器等が出土したことや作業範囲が狭小であったため、十分な調査を行うことができなかった。平成26年度の調査成果を踏まえると、古墳周溝の一部である可能性がある。また、調査地南西側の斜面部に形成された遺物包含層から、古墳時代中期末から後期初めにかけての須恵器や勾玉1点・管玉2点などが出土した(第11図20~29・45~47)。これらの遺物から、調査地周辺に古墳が存在した可能性が指摘できる。

② 出雲遺跡第17次

調査の結果、柱穴や土坑状の遺構を多数検出したが、このうち遺物が出土し、明らかに遺構と判断できるものはそれほど多くない。また、調査地周辺の本来の地形は、丘陵斜面に沿って東側



第5図 南部調査地点1区(出雲遺跡第17次)土層断面図



第6図 1区平面図

が高く西側に向かって傾斜しているが、この地形が水田の造成に伴って、大きく改変されていることが確認できた。この地形の改変に伴う2次的な堆積層からも多数の遺物が出土した。このほか、調査地の南半部では谷状の地形を確認したが、埋土最上層から土師器や瓦器が出土したのみで、詳細な時期は不明である。

以下、検出した遺構の概要を述べる。

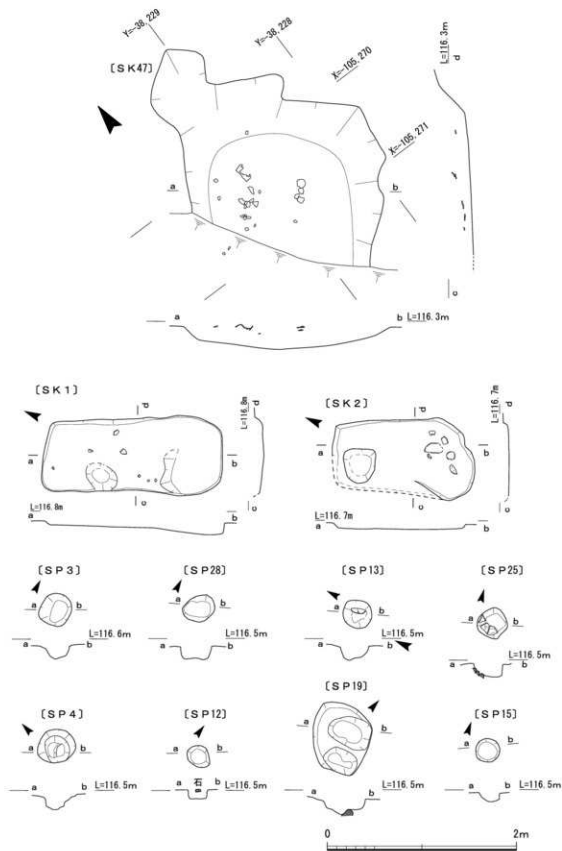
土坑SK47（第7図上段） 調査区のほぼ中央で検出した。不整形な平面形であるが、南北1.7m、東西2.1m以上、深さ0.3mを測る。弥生土器が出土したが、細片が多く図示できたものは少ない（第10図1～4）。弥生時代後期後半に位置付けられる。

土坑SK1（第7図中段左） 調査区の北部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、全長1.9m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。内部から瓦器碗の破片などが出土した（第10図16）。中世前半に位置付けられる。

土坑SK2（第7図中段右） 土坑SK1の北2.5mで検出した。SK1同様、平面形は隅丸長方形を呈し、全長1.5m、幅0.85m、深さ0.1mを測る。遺構内から土師器皿や瓦器碗などが多数出土した（第10図5～11）。SK1と同じく中世前半に位置付けられる（第6図）。

土坑SK49 調査区の北部で検出した。平面形は楕円形を呈し、南北4m、幅2.8m、深さ0.1mを測る。土師器皿や白磁碗の破片などが出土した（第10図12～15）。中世前半と推定される。

ピットSP20 調査区の北部で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径0.3m、深さ0.2mを測る。大形の土師器皿が出土



第7図 1区土坑S K 47及び柱穴平面・断面図

した(第10図17)。

ビットSP13 調査区の北部で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径0.3m、深さ0.15mを測る。瓦器碗が出土した(第10図18)。

(筒井崇史)

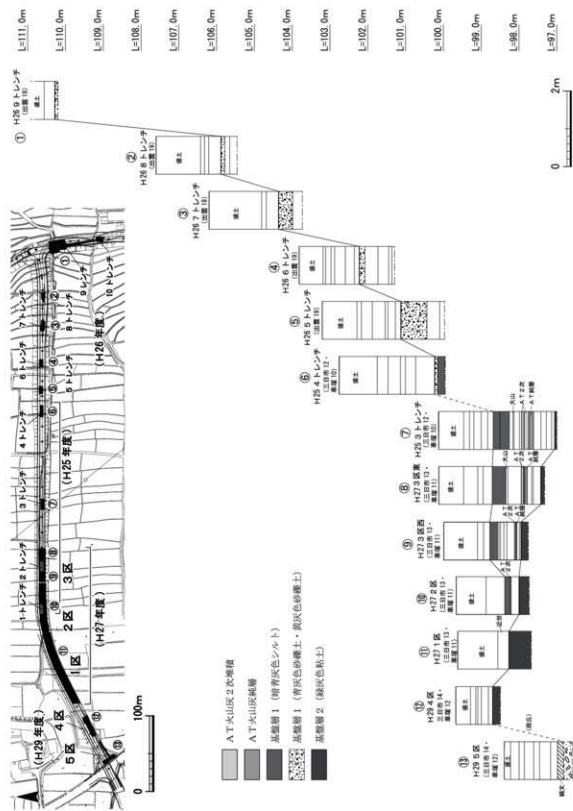
2)北部調査地点(3・4トレンチ：三日市遺跡12次)

調査対象地内における遺構・遺物の拡がりを確認するための調査区(1～4トレンチ)を設定し、4か所で合計して250mの調査を実施した。調査の結果、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、2・3トレンチにおいて始良Tn火山灰(以下、AT火山灰とする)層を確認した。このうち2トレンチとその西側に位置する1トレンチについては、平成27年度に調査区を拡張して本調査を実施していたため、詳細は平成27年度報告に譲る。以下では平成25年度に調査を実施した3・4トレンチについて報告する。

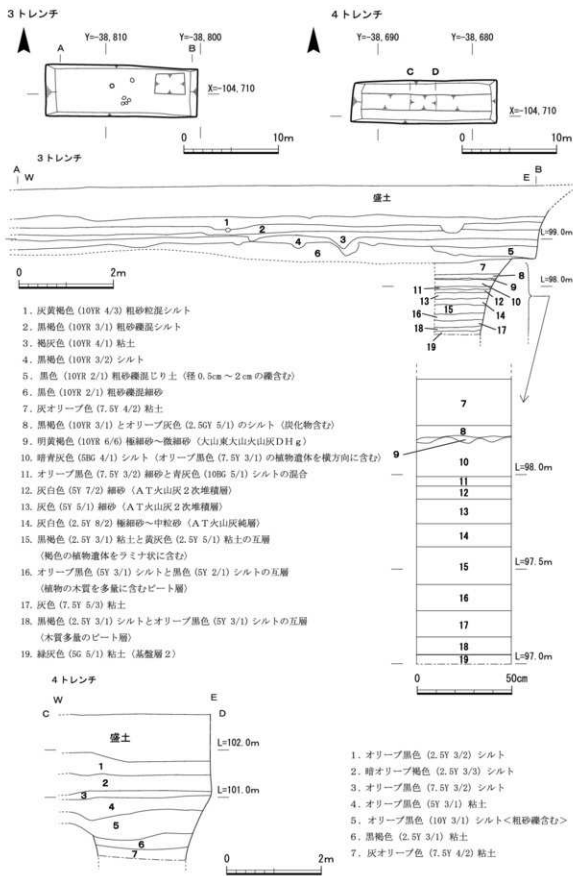
①はじめに

3トレンチ・4トレンチでは顕著な遺構・遺物はなかったが、3トレンチの下層から後期旧石器時代の始良Tn火山灰(以下AT)と大山東大山火山灰(以下DHg)が検出された。さらに、次年度の2区と3区でも検出され、東西の路線に沿って広く残存していることがわかった。そこで各調査区の土層断面図から、基本層位を捉えている部分の柱状図を提示し、そこから推測される旧地形についてみておきたい(第8図)。取り上げるのは、上位から基盤層1、DHg、AT、基盤層2である。基盤層1は遺構検出の基盤となる層位で、基盤層2はAT下位でそれぞれ検出した無遺物層の地山である。

AT火山灰層は、中世遺物包含層直下の基盤層1を断ち割り、約0.8～1.0m下層の標高約97.8mで検出した。さらに、AT火山灰層の下層で緑灰色粘土層の安定した層位を確認し、これを基盤層2とした。まずATとDHgが検出された範囲は、平成26年度3トレンチ～平成27年度2区までの間である(第8図)。特に3トレンチにおけるAT及び植物遺体の残存状態は良好で、AT下位の緑灰色の基盤層2も捉えることができた。この3トレンチにおいて火山灰層及び基盤層2の標高が最も低くなり、この地点は湖沼内または湿地であったようである。DHgより上の基盤層1はこの3トレンチから東に向かって段丘上位へと標高を上げていく。4トレンチから9トレンチにかけては火山灰層はみられず、この基盤層1が捉えられるのみである。一方、3トレンチから西に向かつては、AT下位の緑灰色粘土の基盤層2がみられる。そして西側の平成27年度3区、2区に向かつて緩やかに高度を上げていくが、平成29年度の三日市遺跡14次・車塚遺跡12次5区の段丘崖から急傾斜で基盤層2は落ち込む。このように、段丘上位から沖積地に向かつて標高を下げ、3トレンチ辺りで抉られたように基盤が最も低くなり、西側の3区、2区にかけて緩やかに標高をあげていく。火山灰が良く残っている地点を中心に湖沼や湿地が広がっていたとみられる。付編に掲載した理化学分析の成果である火山灰降下による植生の変化とともに、当時の自然環境を復元することができた。



第8図 北部調査地点土層柱状図



第9図 北部調査地点(3・4トレンチ)平面・断面図

②3 トレンチ(A T火山灰層の検出地区)

3 トレンチはピットが数基検出されただけで、顕著な遺構はなかった。ただ下層遺構の確認のために深く重機掘りした結果、DH gとATの火山灰層、植物遺体を多量に含む層を検出するに至った。以下、これらの標高・層厚・特徴について確認しておきたい(第9図)。

第9層は明黄褐色(10YR4/3)粗砂粒混シルトで、これにはDH gが含まれている。残存厚は0.04~0.05mで、標高は98.15mである。DH gの降下年代は、福井県三方五湖の水月湖での測定・研究により28,846±196cal.KaBPとされ(Smith al., 2013)、およそ29,000年前の後期旧石器時代に当たる。

さらに、第12~14層はAT火山灰層である。降下年代は、30,009±189cal.Ka BPとされる(Smith al., 2013)。

ATの純層は第14層である。灰白色(2.5Y8/2)極細砂~中粒砂で、残存厚13~14cm、上面の標高97.75mを測る。第13層はATの2次堆積層である。灰色(5Y5/1)細砂で、残存厚0.12~0.14m、上面の標高97.88mである。第12層もATの二次堆積層である。灰白色(5Y7/2)細砂で、残存厚0.07~0.08m、上面の標高97.95mを測る。

植物遺体の層は複数確認した。上層からみていく。DH gより下層の第10層である。暗青灰色(5BG4/1)シルトの中に、オリーブ黒色の植物質有機物が横方向に挟まれていた。

AT下位の第16層は植物遺体を大量に含むピート層である。オリーブ黒色(5Y3/1)と黒色(5Y2/1)のシルトの互層で、そこに多量の有機質化した植物遺体が含まれていた。層の残存は0.13~0.15mの厚さで、上面での標高は97.4mである。ATとともに湖沼内における水成堆積の状況がよく保存されている。第17層の灰色粘土を挟み、第18層もピート層である。黒褐色(2.5Y3/1)とオリーブ黒色(5Y3/1)のシルトの互層で、層厚は0.1m、標高は97.15mを測る。最下層は緑灰色(5G5/1)粘土で、AT下位の基盤を形成している層(基盤層2)と考えている。

③4 トレンチ

4 トレンチは、長辺16m、短辺5mの四角に設定した80㎡の調査区である。現地表下約1.1~1.2mの深さで掘削して遺構検出に努めた。さらに調査区長軸に沿って重機で深掘りし、下層遺構の有無についても調べた。いずれの層位においても遺構は確認できなかった。

土層の堆積状況を見る。現代の盛土より下層にて、第1層：オリーブ黒色(2.5Y3/2)シルト、第2層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト、第3層：オリーブ黒色(7.5Y3/2)シルト、第4層：オリーブ黒(5Y3/1)粘土、第5層：オリーブ黒(10Y3/1)シルト、第6層：黒褐色(2.5Y3/1)粘土、第7層：灰オリーブ(7.5Y4/2)粘土となる。第7層以下の堆積状況は明らかではない。

(黒坪一樹)

(2)出土遺物(南部調査地点：1区)

土坑SK47(第10図1~4) いずれも弥生土器である。1は広口壺である。口縁部が大きく外反し、端部は粘土を下端に貼り付け、垂下口縁としている。この端面には5条前後の波状文を施したのちに直径0.7cm前後の竹管文を施す。外面と口縁部・頸部内面に密にヘラミガキを施す。

2は有段口縁をなす甕である。外面は全体にタタキを施したのちに、上半部はさらにハケを施している。3は口縁部が単純「く」字状を呈する小形の甕である。2に比べやや粗雑な作りで、外面はユビオサエで成形した際の痕跡が残る。4は平底の壺の底部とみられる。

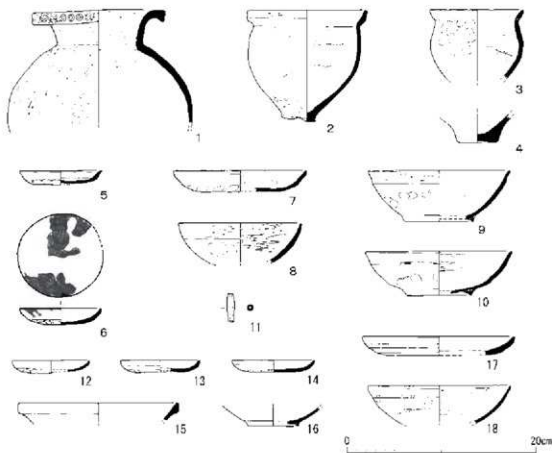
土坑SK2(第10図5～11) 5～7は土師器皿である。5・6はほぼ同法量の小形の皿であるが、5は口縁部がヨコナデにより外反気味であるのに対して、6は内湾気味に仕上げて口縁端部がやや直立する。6は灯明皿として使用されていた痕跡が残る。7は大形の皿で、口縁部は2段にヨコナデを施す。8～10は瓦器碗である。いずれも口縁部外面と内面の上部にミガキを密に施す。9・10の高台は断面三角形を呈する。11は土錘である。

土坑SK49(第10図12～15) 12～14はほぼ同形同大の土師器皿である。土坑SK22日出土の5に類似するがやや器高が低い。15は白磁碗の口縁部である。口縁端部外面を玉縁状に肥厚させる。

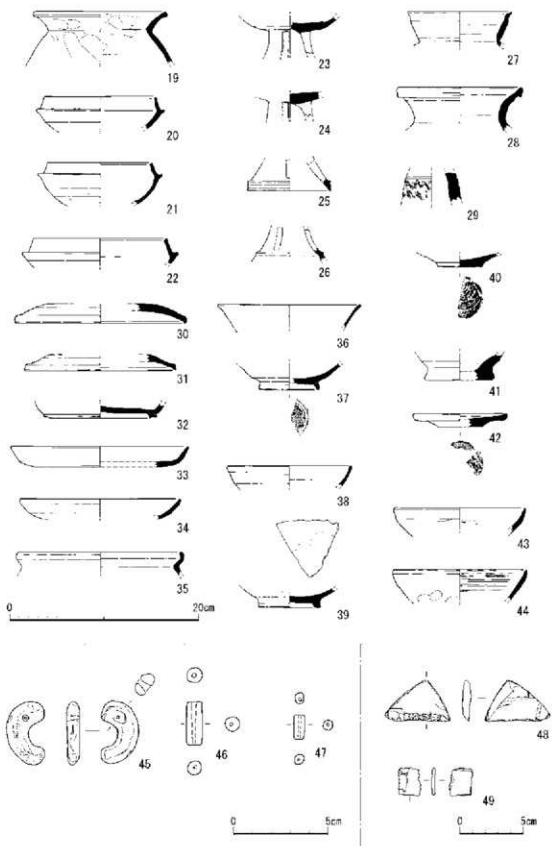
土坑SK1(第10図16) 16は瓦器碗の底部である。土坑SK2出土の9・10に比べ、やや小型化した高台を貼り付ける。

ビットSP20(第10図17) 17は大形の土師器皿である。土坑SK2出土の7に比べ、厚手な作りである。

ビットSP13(第10図18) 18は瓦器碗である。底部を欠損するが、特徴は土坑SK2出土の8～10に類似する。ただ、口縁部に強めのヨコナデを施して、やや直立気味にしている。



第10図 平成25年度調査出土遺物実測図(1)



第11図 平成25年度調査出土遺物実測図(2)

遺物包含層(第11図19～49) 重機による表土掘削や遺物包含層の掘削中、遺構面の精査中に出土したものである。

19は弥生土器甕である。口縁部は単純「く」字状を呈し、体部外面をナデで仕上げる。

20～29は古墳時代の須恵器である。45～47の玉類と合わせて中古墳群の時期や副葬品を検討する上で重要な資料である。20～22は須恵器杯身である。いずれも口縁部の立ち上がりが高く、口縁端部に面を有する。底部外面には回転ヘラケズリを施す。復元法量に違いがあるが、陶邑編年TK47～MT15型式に位置付けられるものであろう。なお、これらは高杯の杯部である可能性もある。23・24は高杯の杯部と脚部の接合部である。長方形のスカシが施されているのは確認できるものの、小破片のため個数まではわからない。25・26は高杯の脚部である。こちらも長方形のスカシが施されているものの、個数はわからない。25・26は器形に若干の違いがあり、25は直線的に脚端部に至り、脚端面に凹線状の沈線が2条巡る。26はやや「ハ」字状に開いて下部に稜を設け、再び外反もしくは内湾して脚端部に至ると思われる。27・28は壺の口縁部である。27は口縁端部を外方につまみ出すように強いヨコナデを施し、ややくぼんだ縁面を形成する。28は外反する口縁部の端部をやや拡張して多面を形成し、下部に沈線を1条施す。29は器台の脚部である。外面に6～7条を1組とする波状文を少なくとも2組施し、上端には沈線を1条施す。さらにその上部には形状や個数は不明であるが、スカシが施されている。

30～40は奈良・平安時代の土器や陶器である。30・31は須恵器の蓋である。天井部を欠損するが、どちらも笠形状の器形を呈する。32は須恵器杯である。やや扁平な高台を有する。33は須恵器皿である。口縁部は外上方に直線的に延びる。

34は土師器皿である。土坑SK2出土の7に類似する。35は瓦質土器の鍋や羽釜の口縁部と推定される。口縁部は大きく屈曲して内傾する。36は緑釉陶器碗の口縁部の破片である。淡い緑色を呈する。37は灰釉陶器碗の底部である。内湾気味の高台を貼り付け、底部外面に糸切り痕が残る。38は須恵器碗の口縁部である。口縁端部がやや肥厚気味となる。39は無釉陶器の底部である。須恵器と同じ胎土・焼成であるが内外面にミガキを施す。高台は削り出し高台である。

40は土師器碗あるいは皿の底部である。回転台成形で、底部外面に糸切り痕が残る。41は土師器碗の底部である。大型、厚手の器形を呈すると思われる。

42～44は中世前半の土器である。42は土師器皿である。回転台成形で底部外面に糸切り痕が残る。口縁端部をわずかにつまみあげて口縁部外面に面を作る。43・44は瓦器碗である。土坑SK02やビットSP13出土瓦器碗に類似する。

45～47は古墳時代の玉類である。上述の20～29の須恵器と同様、中古墳群の時期や副葬品を検討する資料として重要である。45は瑪瑙製の勾玉である。片面穿孔である。全長2.35cm、厚さ0.7cmを測る。にぶい赤褐色を呈する。46・47は管玉である。46は碧玉製の管玉である。全長2.3cm、直径0.9cmを測る。濃緑色を呈する。47は緑色凝灰岩製の管玉である。全長1.3cm、直径0.6cmを測り、46よりも一回り小さい。淡緑色を呈する。48・49はともにサスカイト製の石器である。48は削器、49は加工痕がある剝片であろう。

(筒井崇史)

〔2〕平成26年度調査
出雲遺跡第19次・中古墳群第3次
(1)検出遺構

1)北部調査地点(5～15トレンチ：出雲遺跡)

平成26年度調査地点は、約1km離れた南北2地点に分かれ、北部調査区、南部調査区とする。北部調査地では、小規模調査によって遺構・遺物の拡がりが確認された地点を拡張する形で実施した。計画路線の対象となっている遺跡の中央部から南部にかけて、11か所(5～15トレンチ)の調査区を設けて小規模調査を実施した。まず平成25年度調査地の4トレンチの東に5トレンチから順に東側へ8トレンチまで設定した。丘陵裾部の傾斜面上にあり、東側に徐々に高所へ移動するため、各トレンチには大きな高低差がある。さらに南北路線上に9～15トレンチを設定した。これらのうち9トレンチでは、遺構・遺物の拡がりが見られたため、面積を拡張して調査を進めた。調査面積は、9トレンチで400㎡を測るほか、各トレンチは40～60㎡を測り、北部調査区全体で890㎡を対象とした。

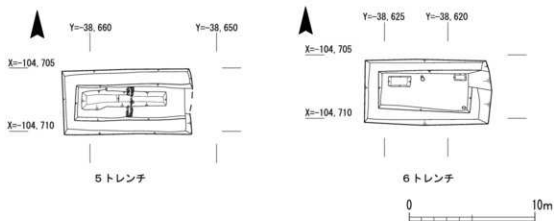
以下に、各トレンチの概要を述べる。

①5トレンチ

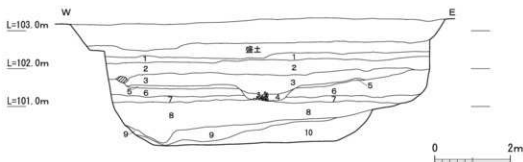
東西路線上の最も西に設定した調査区である。対象地の標高は103.3mである。発掘調査は、小型重機を使用し、遺構面まで掘り下げ進めた。層序は、上層から約0.6mは盛土層であり、これらを除去し、表土下1.7m、標高101.5mで南北方向に掘削された近世の茶掘り溝を確認した。さらに、標高101.3mで



第12図 平成26年度北部調査地点(出雲遺跡第19次)配置図

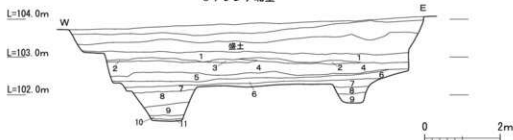


5 トレンチ北壁



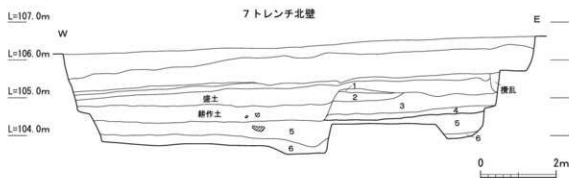
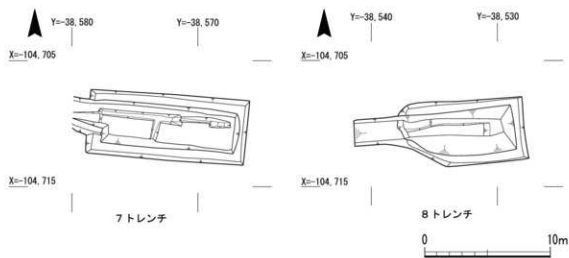
- | | |
|--|---|
| 1. 緑灰色 (5G 2/1) 砂礫土 (径2～5cm 大の礫多量を含む) | 7. オリーブ黒色 (10Y 3/2) シルト
(古代～中世遺物包含層) |
| 2. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1)
砂礫土 (径10～20cm 大の礫多く含む) | 8. 青黒色 (5BG 2/1) 砂礫混じりシルト
(径3～5cm 大の礫多く含む) |
| 3. オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト質粘質土 | 9. オリーブ黒色 (7.5Y 2/2) シルト
(よく締まっている、肥地性堆積) |
| 4. 同色礫混りシルト (径2～3cm 大の礫含む) | 10. オリーブ黒色 (7.5Y 2/2) 砂礫混じりシルト |
| 5. オリーブ灰色 (10Y 6/2) シルト | |
| 6. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) シルト質粘質土 (中世遺物包含層) | |

6 トレンチ北壁

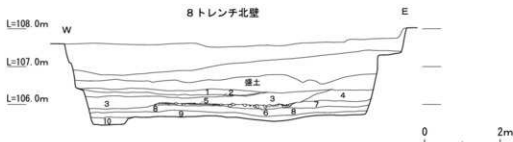


- | | |
|--|---|
| 1. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) シルト質極細砂 | 7. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 礫混じり極細砂 (径5cm 大の礫を疎らに含む) |
| 2. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 礫混じり細砂 (径3～8cm 大の礫含む) | 8. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 礫混じりシルト質細砂 (径2～3cm 大の礫多く含む) |
| 3. 灰黄色 (2.5Y 6/2) シルト | 9. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 礫混じりシルト質細砂 (径2～3cm 大の礫含む) |
| 4. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) シルト質極細砂 | 10. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) シルト (強い粘性をもつ) |
| 5. 暗オリーブ色 (5Y 4/2) シルト質細砂 (4よりやや粗) | 11. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 礫混じり細砂 |
| 6. オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト質極細砂 | |

第13図 5・6トレンチ平面・土層断面図



- | | |
|---|---|
| 1. にぶい黄褐色 (2.5Y 6/4) シルト質極細砂
(上面に鉄分より多く沈着) | 4. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) 礫混じり極細砂
(遺物包含層、径2~5cm大の礫含む) |
| 2. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト質極細砂 | 5. オリーブ黒色 (10Y 3/2) 礫混じり粘質土 |
| 3. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) シルト質細砂 | 6. オリーブ灰色 (10Y 5/2) シルト質極細砂
(礫ほとんど含まない) |



- | | |
|---|--|
| 1. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト質極細砂
(よく締まっている、下部に鉄分沈着) | 6. オリーブ黒色 (10Y 3/1) 礫混じり極細砂〜シルト
(流路の基底、径10~15cm大の礫含む) |
| 2. 灰色 (5Y 5/1) シルト混じり砂礫土 | 7. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト質細砂 |
| 3. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト質細砂 | 8. 灰色 (10Y 4/1) 礫混じり細砂 (径2~5cm大の礫含む) |
| 4. 暗緑灰色 (5GY 4/1) シルト質極細砂 | 9. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト質細砂 (もろく崩れやすい) |
| 5. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 礫混じりシルト
(径5cm大の礫多く含む) | 10. 暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) シルト混じり砂礫土
(径5~10cm大の礫多く含む) |

第14図 7・8トレンチ平面・土層断面図

中世遺物包含層の灰オリーブ黒色シルト層を検出し、その下層で基盤層と認識する暗オリーブ灰色砂礫混じりシルト層を確認した。最終的に基盤層を断ち割り、標高約100.0mまで掘り下げ、最下層でオリーブ黒色シルト層を確認したが、火山灰層と認識される層位は確認されなかった。包含層中から小片ながら、須恵器、土師器、瓦器等が出土している。

②6 トレンチ

5 トレンチ東に設定したトレンチである。5 トレンチから緩やかに傾斜して上がり、対象地の標高は103.9mである。表土下1.5mで中世遺物を包含する層位を確認し、その下層で基盤層と認識する暗オリーブ灰色砂礫混じり極細砂を検出した。基盤層で径0.3m、深さ3cmを測る楕円形状の浅い落ち込みを検出したが、明瞭な遺構は確認されなかった。包含層中から土師器、瓦器の小片が出土している。基盤層を断ち割り、表土下2.5mまで掘り下げたが、遺物や火山灰層等は認められなかった。

③7 トレンチ

対象地の標高は106.4mで、表土下に約1.5mの層厚で盛土層が堆積し、その下層の標高104.8mで、厚さ約0.2mの近世遺物包含層を確認した。標高103.5mで、厚さ約0.6mオリーブ黒色砂礫混じり粘質土層を検出したが、この層位中からは遺物は出土していない。最終的に、表土下約3mの標高103.5mまで掘削したが、顕著な遺構や遺物は確認できなかった。

④8 トレンチ

平坦地にある5 トレンチから約4m高い傾斜面上に設定した。標高107.6mを測る。層位は、表土下約1.6mは盛土であり、標高106.0mで0.1～0.3m大の礫を多量に含む層位の拡がりを帯状に部分的に確認した。掘削層位から、近世の流路跡と推定される。この下層では、湧水が激しく、一部の断ち割りを実施したが、中世の包含層等は確認していない。

⑤9 トレンチ

8 トレンチ南東の丘陵斜面上に立地し、標高は約112.0mを測る。小規模調査によって、遺構の拡がりが確認されたため、拡張して調査を実施した。また、南側の丘陵高所となる平坦地が拡がるため、調査区を南に約45mまで拡張して、遺構・遺物の拡がりを確認した。南側拡張部では、近世の素掘り溝を検出したが、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

9 トレンチでは、弥生時代の土坑や、中世の溝、柱穴等を検出した。

層序は、表土下約1.5mまで盛土であり、北部ではその下層に中世遺物包含層を約0.2mの層厚で残すが、中央から南部にかけては基盤層の直上まで後世の削平を受けていた。基盤層は、調査区東壁北部では標高111.1mで、また中央部では111.6mで検出した。

土坑 S K 903 調査区中央西壁周辺で一部を検出した。一部は調査範囲外となるが、平面形はおおよそ楕円形状の土坑と推定される。径2.6m、深さ約0.2mを測る。上層は近代以降に大きく削平されたとみられる。土坑内から弥生土器が出土しているが、小片のため正確な時期は不明である。

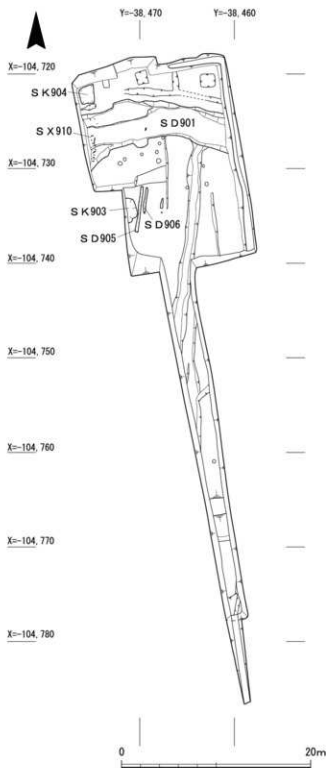
土坑 S K 904 調査区北西隅で一部を検出した浅い落ち込みである。一辺約2m、深さ0.15m

を測り、重なる方形を呈する。遺物はわずかながら瓦器小片が出土し、中世の落ち込みと推定される。

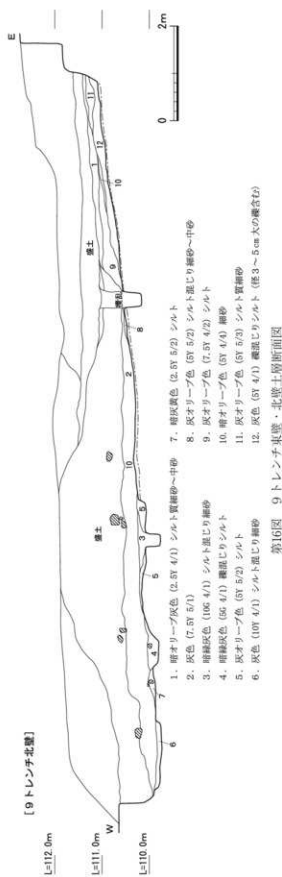
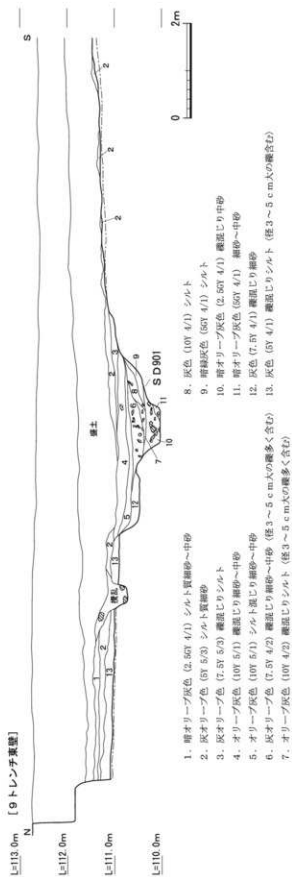
流路 S D 901 調査区北部で検出した流路である。規模は、幅3～3.5m、深さ約0.8mを測り、長さ約10mにわたって検出した。S D 901の南側に平坦な高台が舌状に拡がり、その縁辺を山側から平野部側へ向けて流れる流路である。層位は上層と下層に大きく分かれ、上層は中粒～粗砂を含むシルト質の堆積を基調とするが、下層は0.1～0.2m大の多量の砂礫を含む。堆積状況から、S D 901は下層の自然流路を再掘削したものとみられる。流路中央で、原位置を残すとみられる矢板1本を検出した。出土遺物は、須恵器甕、土師器皿、瓦器椀のほか、白磁椀などの輸入陶磁器や下駄などの木製品がある。出土遺物から、平安時代後期～鎌倉時代前期の流路と推定される。

(杭列 S X 910) S D 901の西端で検出した南北方向の杭列である。杭は原位置を保つもの9本を確認した。樹皮を残す丸杭を使用している。杭の間隔や杭の大きさは不揃いで、杭先は下層に達しないものがある。また、一部が炭化し被火した杭が認められる。周辺では、桃核が50点以上出土しており、集落の縁辺の水辺において、桃を用いた祭祀が行われた可能性がある。

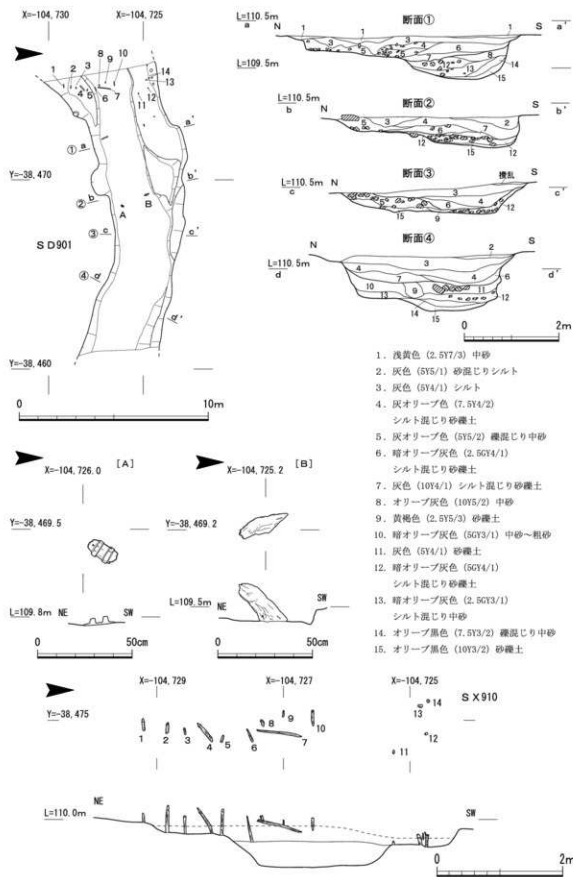
溝 S D 905・S D 906 調査区中央で検出した平行する素掘り溝である。幅0.2～0.3mを測る。遺物は出土していないが、埋土の状況から、中世の素掘り溝とみられる。東側で確認した近世の溝はこれらの溝に平行して掘削され、中世以降、周辺の地割りに大きな変化が生じていないと推定される。



第15図 9トレンチ平面図



第16図 9トレンチ東壁・北壁土層断面図



第17図 9トレンチ溝 S D901・杭列 S X910平面・断面及び遺物出土状況図

⑥10トレンチ

表土下約0.8mの標高111.6mで基盤層の黄褐色礫混じり細砂層を確認した。この面で、陶磁器類を出土する東西方向の近世素掘り溝を検出した。近世の溝と重複して、削平を受ける径1.2mの楕円形状の落ち込みを一部確認したが、遺物は出土しておらず、時期は不明である。また、基盤層の一部を断ち割り、基盤と認識する砂礫層が表土下約1.5mまで続くことを確認した。

⑦11トレンチ

表土下約0.4mの標高111.4mで基盤層を検出した。楕円形状の土色変化を検出したが、堆積状況から風倒木痕であることを確認した。顕著な遺構、遺物は認められなかった。また、基盤層の一部の断ち割りによって、標高110.5mまで基盤層とみる黄褐色砂礫土層が続くことを確認した。

⑧12トレンチ

表土下0.6mの標高111.8mで基盤層の黄褐色シルト質細砂層を確認した。基盤層の直上には、近世の耕作床土層があり、包含層は削平されたとみられる。遺構は、基盤層で中世の素掘り溝1条を検出した。

溝SD1201(第18図) トレンチ中央を北東から南西へ掘削された溝である。溝の主軸は、N25°Eを測り、斜行する。規模は幅0.25m、深さ0.15mを測り、上層は大きく削平されたとみられる。溝底から瓦器片が出土し、12世紀後半～13世紀初めの溝と推定される。SD1201と平行して、同一基盤面に、竹管を用いた近世の暗渠を検出した。主軸を同じくすることから、9トレンチと同様、中世から近世にかけて、調査区周辺の地割りに大きな変化が生じなかったとみられる。なお、調査前の周辺耕作地の地割りは、トレンチとほぼ平行する南北方向の地割りが確認され、大きく異なるものである。

⑨13トレンチ

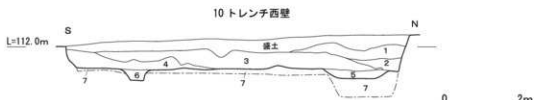
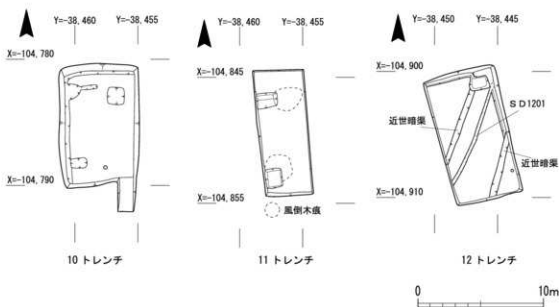
表土下0.9mの標高113.1mで基盤層を確認した。基盤層まで近現代の攪乱が著しく、遺物包含層や遺構・遺物はみられなかった。

⑩14トレンチ

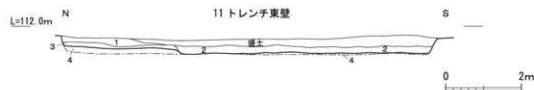
南部において、表土下0.9mの標高114.9mで旧表土の耕作面を確認し、その下層で部分的に近世遺物包含層を確認した。トレンチ中央から北部にかけては、近現代の攪乱が著しい。攪乱層の直下で近世～近代の陶磁器類を含む幅約0.5～1.3mの流路を検出したが、顕著な遺構や遺物は確認されなかった。

⑪15トレンチ

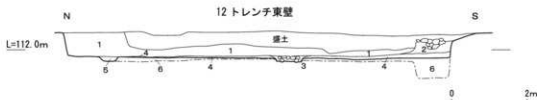
北部調査地の最も南に設定したトレンチである。調査前の標高は、約115.8mを測る。地形は南部から北部にかけて傾斜し、基盤層は南部で114.7m、北部で113.7mで検出した。トレンチ北端で全体に地形の落ち込みがみられるが、断ち割りの結果、北側の傾斜面に続く自然地形によるものと判断した。15トレンチでは、柱穴1基を検出したが時期は不明である。遺物包含層は認められないが、攪乱層から白磁等が出土している。



1. 灰黄褐色 (10YR 4/2) シルト (よく締まっている)
2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト質極細砂
3. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) シルト質極細砂
4. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 細砂 (ややもろい)
5. オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) 礫混じり細砂 (径2~5cm 大の礫多く含む)
6. 灰色 (5Y 4/1) シルト
7. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 礫混じり細砂

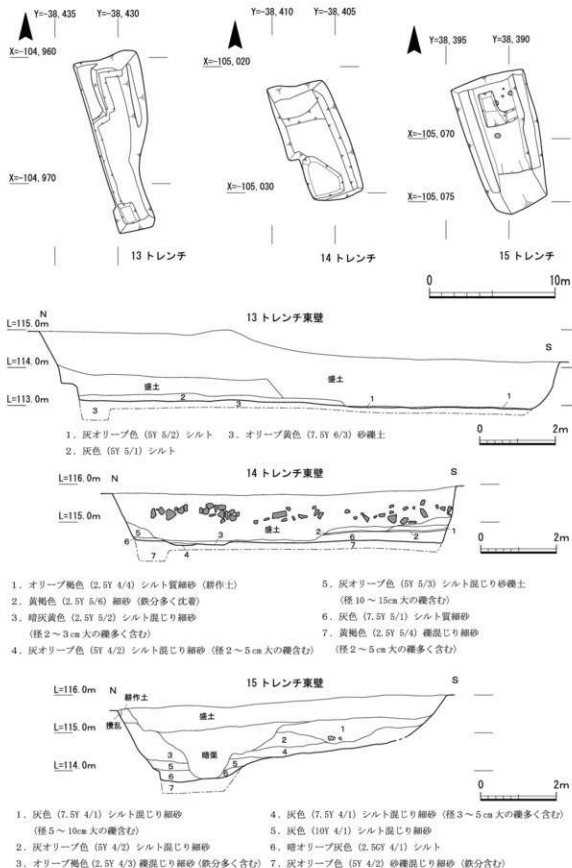


1. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト質極細砂 (耕作土)
2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/3) シルト質細砂
3. 明黄褐色 (2.5Y 6/6) シルト質細砂 (径2~3cm 大の礫多く含む)
4. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 礫混じり細砂 (径5~10cm 大の礫含む)



1. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト質細砂 (耕作土)
2. 暗オリーブ色 (5Y 4/3) シルト混じり細砂
3. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 礫混じりシルト
4. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト
5. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) シルト (中世末礫り溝SD1201)
6. 黄褐色 (2.5Y 5/6) シルト質細砂 (径2~5cm 大の礫多く含む)

第18図 10・11・12トレンチ平面・土層断面図



第19図 13・14・15トレンチ平面・土層断面図

2) 南部調査地点(2区：出雲遺跡・中古墳群)

2区は、出雲遺跡の遺跡範囲南部において、平成25年度に発掘調査を実施した1区の北側に隣接して設定した調査区である。調査面積は、810m²を測る。調査対象地は、中古墳群の推定分布範囲と重複する。中古墳群は、平成19年度に実施された亀岡市教育委員会による発掘調査によって、はじめて周知された古墳群である。全体で6基の埋没古墳が調査され、1号墳(一辺28mの方墳)を中心とする中期の古墳群であることが明らかにされた。

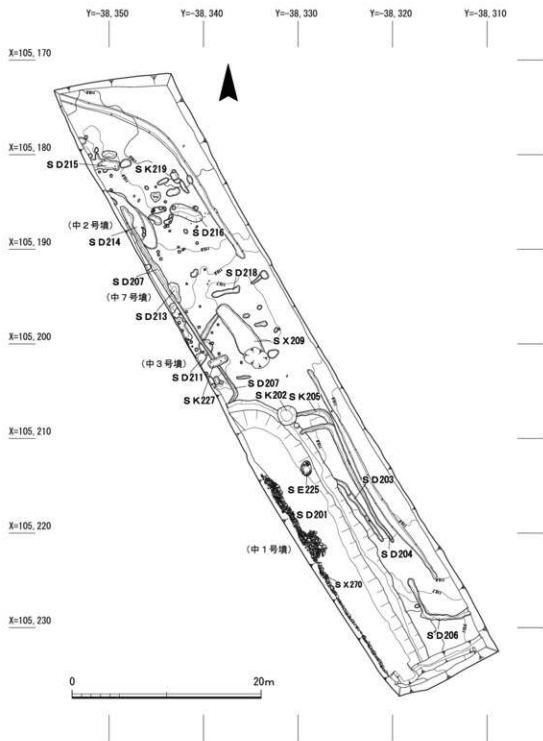
本報告では、前節で述べたとおり、平成25年度に実施した当調査研究センターによる第2次調査において、調査区北壁西端で1号墳の周溝の一部の可能性のある土色変化が確認された。しかしながら、新たな古墳に関連する明確な遺構は検出されず、古墳群の広がり認められないことから、南東部における分布範囲が確定された。第2次調査のこうした成果を受け、本節で報告する第3次調査は、第2次調査地(第20図1区)の北側を対象として発掘調査を実施し、第1次調査で確認された中1号墳の東墳丘裾部や周溝を検出した。また、同時に1号墳の北側に展開する2号墳や3号墳などの周溝を検出し、当古墳群が7基以上から構成される古墳群であることを確認した。

調査区の基本層序は、東壁(第22図)の上層から、表土下、第1層は灰色礫混じりシルト質細砂、第4層は暗オリーブ褐色シルト質細砂、第9層はオリーブ黒色シルト混じり極細砂である。第1層は旧耕作土、第4層は近世遺物包含層である。また、第9層は中世以降の遺物包含層である。第18層は基盤層とする灰オリーブ色砂礫混じり粘土である。調査前には耕作面としてほぼ平坦な地形を呈していたが、基盤層は北から南にかけて徐々に下降しており、基盤層の標高は東壁北端で約116.0m、南端で116.2mを測る。北部では基盤層まで近現代に大きく削平を受けるが、南部では中近世遺物包含層が約0.1～0.4mの層厚で遺存する。

2区の検出遺構は、古墳時代の遺構として、中1号墳をはじめとする4基の中期古墳を確認したほか、中世以降の遺構として、中1号墳の周溝を再掘削した中世の区画溝



第20図 平成26年度南部調査地点配置図

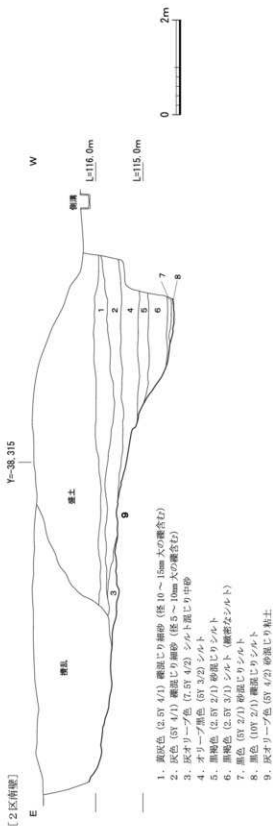
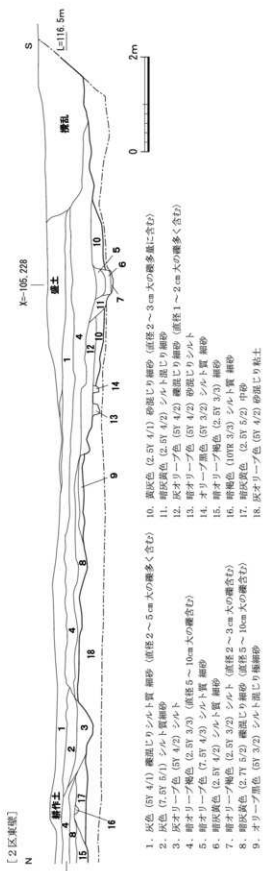


第21図 中古墳群第3次・出雲遺跡第19次(2区)平面図

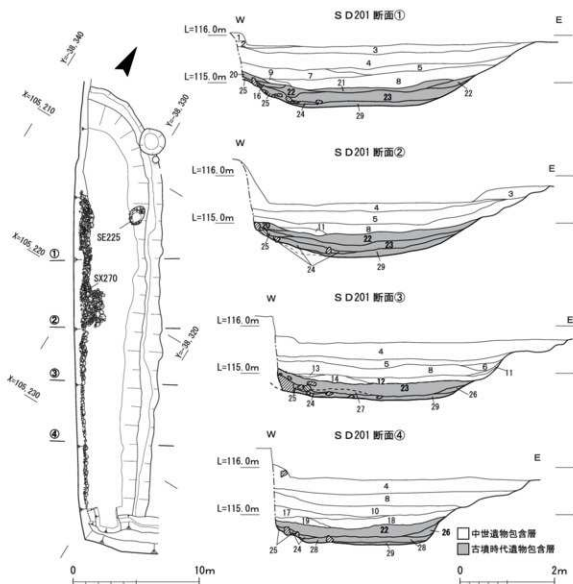
や、素掘り溝群、柱穴群や土坑、井戸等を検出した。

①古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、いずれも中古墳群にともなう遺構群である。検出した4基のうち、1号墳と2号墳はこれまで周知されてきた古墳であるが、第1次調査で報告された3号墳は、今回の調



第22図 2区東壁・南壁土層断面図



1. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質極細砂
2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 礫混じりシルト質極細砂
3. にぶい黄褐色 (10Y4/3) 礫混じりシルト質極細砂
4. 暗褐色 (10YR3/3) シルト質極細砂
5. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) シルト
6. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 礫混じりシルト (径3～5cm大の礫含む)
7. 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂礫混じりシルト
8. 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト
9. オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂礫混じりシルト (径1～2cm大の礫)
10. 暗褐色 (10YR3/3) シルト質細砂 (径2～3cm大の礫多く含む)
11. 灰オリーブ褐色 (7.5Y4/2) シルト混じり砂礫土 (径1～2cm大の礫多く含む)
12. 黒色 (5Y2/1) シルト
13. オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト
14. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト混じり砂礫土 (径1～2cm大の礫多く含む)
15. オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト
16. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 砂混じりシルト
17. 黒色 (5Y2/1) シルト
18. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 砂礫混じりシルト (径1～2cm大の礫多く含む)
19. オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト
20. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) シルト混じり砂礫土 (径1cm大の細礫・粗砂多く含む)
21. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト混じり砂礫土 (径1cm以下の砂礫多く含む)
22. オリーブ黒色 (7.5Y2/2) シルト
23. オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト
24. 黒色 (10Y2/1) 礫混じりシルト (径2～3cm大の砂礫含む)
25. オリーブ黒色 (2.5Y3/1) 砂礫混じりシルト
26. 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1)
27. 黒色 (7.5Y2/1) シルト
28. 黒色 (7.5Y2/1) シルト (強いシルト質)
29. 黒色 (10Y2/1) 礫混じりシルト

第23図 2区周濠SD201平面・断面図

査によって2基の小規模な方墳であることが判明した。本報告では、これらのうち、南側で検出された古墳を3号墳とし、北側で検出された古墳を新たに7号墳とする。これによって、中古墳群は7基以上の古墳からなる中期の古墳群であることが明らかとなった。

2区の調査では、調査区南部で、1号墳の墳丘東辺と東周濠(S D201)を検出し、北部で2号墳・3号墳・7号墳の周溝の一部を確認した。

中古墳群の調査

i) 1号墳(周濠S D201下層・葦石S X270)(第23～28図)

周濠(S D201下層) S D201は、調査区南部西側で検出した北西から南東に延びる濠である。検出面で、長さ34mの規模をなすが、上層は中世の溝によって再掘削されたものである。下層に古墳時代中期の遺物を含み、西側に隣接する過去の調査から、中1号墳の周濠の一部とみられる。調査区内では確認できないが、西側に「L」字に屈曲する濠である。

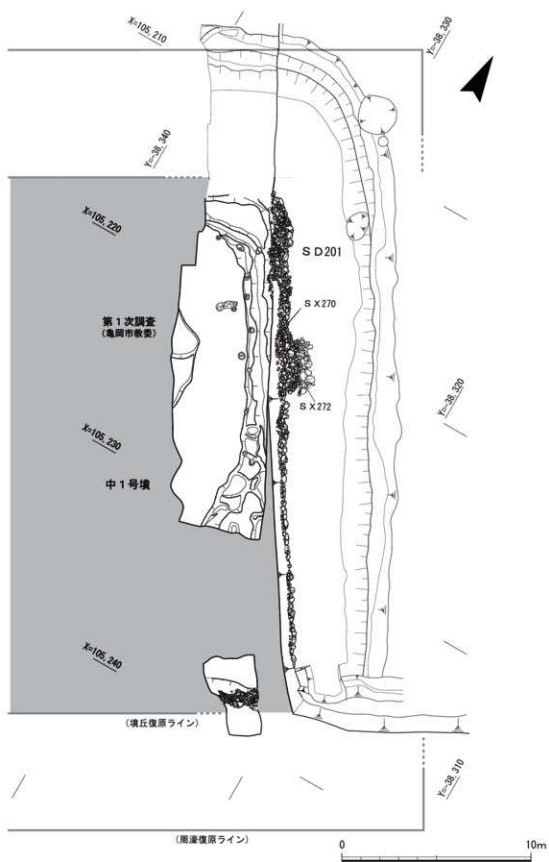
S D201の掘削状況は、上層は検出面から約0.8～1.0mの深さで再掘削される。出土遺物から再掘削の上限の時期は、平安時代後期～末期の12世紀前半と推定される。濠は、基底部から約0.5m前後まで45°前後の急な掘削角度をなすが、上面は緩やかに立ち上がり、傾斜変換点から上位が中世の削平面となっている。1号墳の周濠の掘削は、再掘削によって完全に上層が削平されて失われ、下層部分にのみ古墳周濠の本来の掘削が遺存することが判明した。

1号墳の周濠の規模は、下層北部で幅4.7m以上、南部で幅3.9m以上を測る。基底からの立ち上がり角度から推定される周濠の本来の幅は、推定幅約6.5mを測る。また、検出長は、南東隅が調査区外となるが、下層に残存する1号墳の周濠の規模は32m以上であることを確認した。周濠の深さについては、最も遺存状況が良好な北部で約1.6mを測る。上層は再掘削されるが、基盤層まで達していることから、上層は削平され、本来はさらに深い濠であったとみられる。また、周濠の基底の形状は、約2.5mの幅で基盤の削り出しによる平坦面が形成され、深さは葦石基底石のレベルよりもさらに約0.2～0.3m程度深く掘削されている。

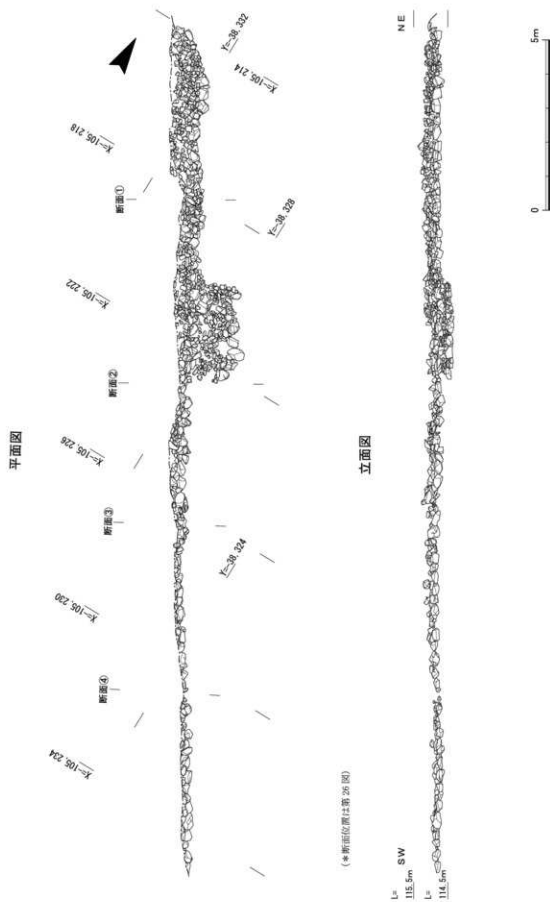
S D201の層位は、基盤から0.4～0.6mの層厚で古墳時代と推定する堆積層が残存し、最下層で墳丘からの初期流土と推定される黒色礫混じりシルトを検出した。この層位から、小片ながら円筒埴輪が出土している。その上層には、約0.4～0.6mの層厚でシルト層が堆積するが、層中には強いシルト質を呈する黒色シルト層の層位(第23図28層)や、人為的な掘削によるとみられる基盤土ブロックを含む層(第23図4・6層)がみられ、古墳築造後にも滞水を繰り返しながら再掘削された状況が伺える。

周濠S D201下層から、須恵器甕の肩部と推定される土器が出土している。頸部径や肩部の張りから陶器TK208型式前後の時期に帰属するとみられる。また、S D201中～上層の中世の掘削層位から、1号墳の築造時の埴輪や追善祭祀に伴うとみられる器台や杯身など少量の須恵器が出土している。

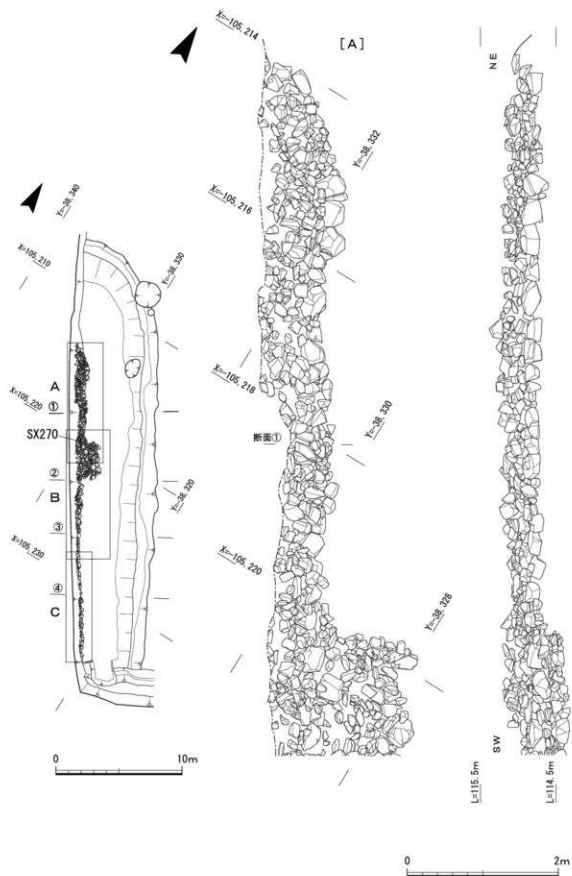
墳丘 墳丘は、調査区南部において一部を確認し、周濠S D201の中央から北部にかけて墳丘の東傾斜面を部分的に検出した。墳丘上面は調査区外となり、墳丘高の規模は不明であるが、調



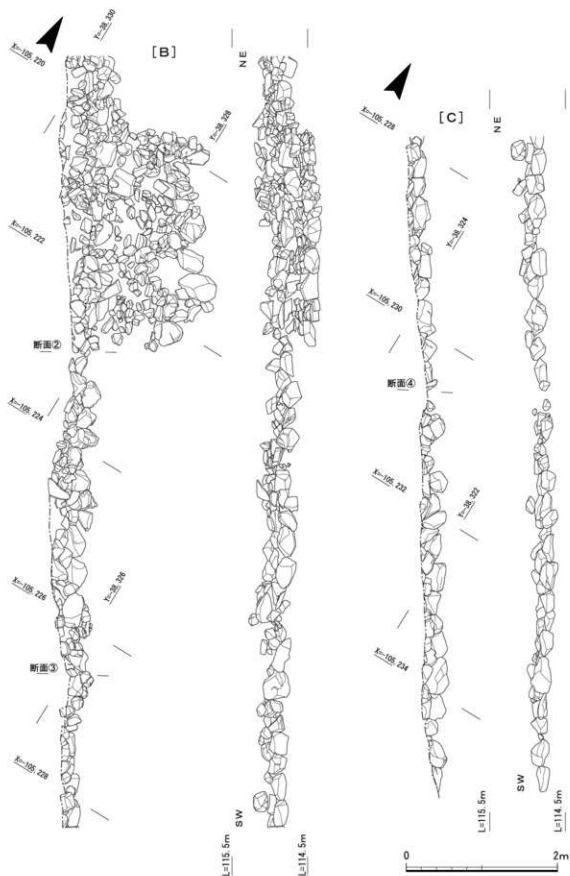
第24図 2区周濠S D201平面合成図



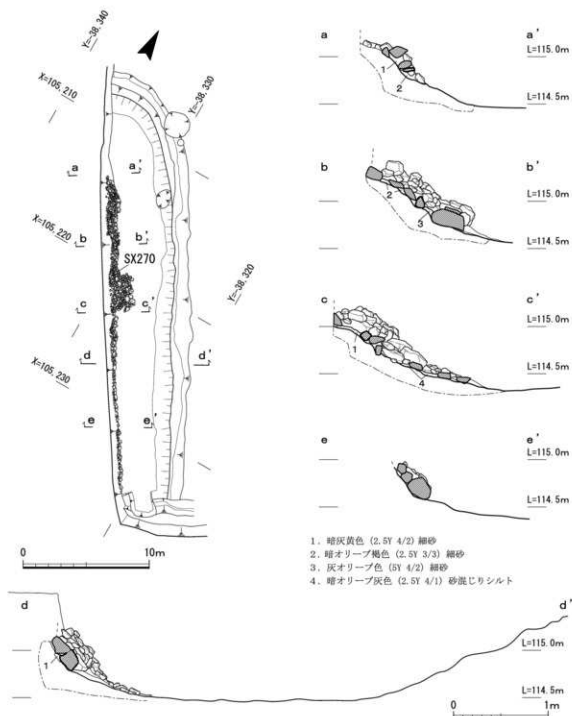
第25図 2区周家 S D201下層、葦石 S X270平面・立面図(1)



第26図 2区周濠S D201下層、葺石S X 270平面・立面図(2)



第27図 2区周濠SD201下層、葺石SX270平面・立面図(3)



第28図 2区周濠SD201下層断ち割り葺石断面・立面図

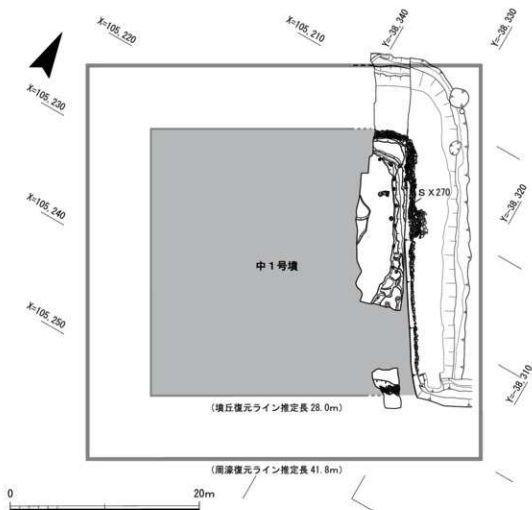
査区内では葺石基底のレベルから最大で約0.8mの高さまで墳丘を確認している(第28図)。墳丘東辺の斜面勾配は、約35°の傾斜角度をなす。墳丘の断ち割りによって、墳丘下部では構築土に盛土は確認できず、基盤土の削り出しと整形により墳丘を構築していることが判明した。

墳丘外表には葺石(SX270)を施工する。葺石は、調査区西壁付近で24.8mにわたって検出した。北部から中央部にかけて4～5段の葺石を確認し、南部では1～2段を検出した。葺石は、基底石にやや大きな0.4～0.5m、幅0.2～0.3mの石材を配置し上部の石材を施工する。上部の石材につ

いては、長さ0.2m、幅0.1～0.2mmのやや小形の石材を、基盤土を一部削り込み約43～46°の勾配をつけて施工する。葺石の施工単位については、葺石の最下段周辺の調査に限られるため明瞭ではないが、約4.5～5mごとに基底にやや大きな石材を用いる傾向があり、その間には基底にも小石材を多用している。また、北東角の位置での葺石は小形石材が3～4段に確認されたが、大形の石材は認められず、北東角の基底石については崩落流失したものと推定される。基底石の設置面の高さは、墳丘北端、中央部、南端ともに標高114.7mを測り、ほぼ水平に設置されている。

墳丘裾部外周において、中央北寄り、葺石基底ラインから張り出す集石(S X 272)を検出した。長さ2.9m、幅1.2mの範囲でほぼ方形に敷き置かれることから、人為的に造成された石敷きとみられる。おおよそ面を揃えるが、石材の大きさはやや不揃いである。西側は葺石基底に接続し、東側は周濠底部に向けて緩やかに下降する勾配をつけて配される。基盤層との間に約5～10cm程度の墳丘からの流土とみられる堆積層が確認されることから、古墳の墳丘築成後に付設されたとみられる。葬送儀礼あるいは追善祭祀にともなう祭壇的な性格をもつ施設の可能性が高い。

葺石の石材は頁岩・チャートを中心とする。いずれも周辺山麓に分布する石材である。



第29図 2区中1号墳墳丘復元図

墳丘斜面の葺石上から、小片ながら円筒埴輪が出土している。埴輪は、円筒埴輪川西Ⅲ期～Ⅳ期のものである。

1号墳の時期と規模 1号墳の墳丘は、東辺を長さ238mにわたって検出した。墳丘は、調査区南西端で調査範囲外へと続き、墳丘北辺と南辺を確認した亀岡市教育委員会による第1次調査では、墳丘規模は南北長280mであることが判明している。今回の調査成果によって、周濠の幅が6.9mに復元されることから、1号墳の周濠を含めた規模は、一辺41.8mと復元される。

築造時期については後述するが、周溝内から川西編年Ⅲ期～Ⅳ期の円筒埴輪や須臾器が出土しており、古墳の築造時期は中期中葉の中でも早い段階のものともみられる。

ii) 2号墳(周溝SD214) (第30・31図)

調査区北部で2号墳の周溝とみられるSD214を確認した。隣接地を対象とした第1次調査から、SD214は方墳とされる2号墳の東周溝と推定される。SD214の規模は、長さ80m、幅0.8～2.0m、深さ0.4～0.5mを測る。2号墳は、削平が著しいが、墳丘規模はおおよそ1辺約5.0mの方墳として復元され、周溝を含めた規模は1辺約8mを測る。北西端で「L」字に屈曲し、調査外の西に延びる。遺物は出土していないが、第1次調査において北周溝内で須臾器杯身・杯蓋・高杯等が出土している。須臾器は陶器TK23型式に帰属するものであり、おおよそ中期後葉～末の築造と推定される。

iii) 3号墳(周溝SD211) (第30・31図)

1号墳の周濠SD201の北側で、3号墳の周溝の一部とみられるSD211を検出した。「L」字状に屈曲して西に延びる溝である。幅0.9～1.4m、深さ0.2～0.5mの規模を測る。3号墳の復元される墳丘規模は約4.5m、周溝を含めた規模は1辺約6mと推定される。今回の調査では、遺物は出土していないが、第1次調査では、SD211の延長部から、須臾器杯身が出土している。陶器TK208型式に帰属するものであり、古墳時代中期中葉～後葉の築造と推定される。

3号墳は、第1次調査では一辺9.5mの方墳としてされるが、同規模で復元した場合に想定される位置で周溝は確認されなかった。今回の調査では、3号墳の南周溝と推定されるSD211と2号墳の間に、新たに「L」字に屈曲するSD213を検出したことから、3号墳の墳丘は、SD213を周溝とする古墳とSD211を周溝とする古墳に二分されることが判明した。今回の報告では、前者を3号墳とし、後者を新たに7号墳とする。

iv) 7号墳(周溝SD213) (第30・31図)

2号墳の南側で検出した「L」に屈曲するSD213を南周溝・東周溝とする古墳である。前述したように、SD213は、幅0.5～0.8m、深さ0.3～0.5mを測る。第1次調査における3号墳をおおよそ南北に二分する位置にあり、7号墳は今回の調査で新たに確認した古墳である。7号墳の墳丘規模は約5m、周溝を含めた規模は一辺約6.4mを測る。

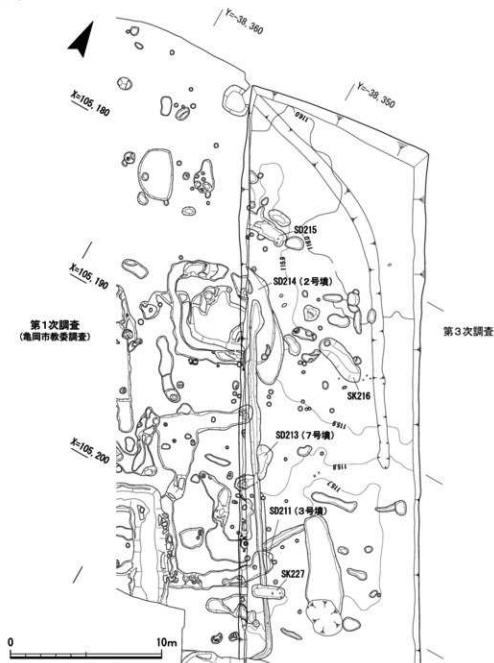
v) 古墳時代の周辺遺構

溝SD215 (第30図) 調査区北端で検出した溝である。長さ28、幅1.1m、深さは0.4～0.6mを測る。遺物は出土していないが、堆積状況から古墳時代の溝と推定するものである。第1次調査

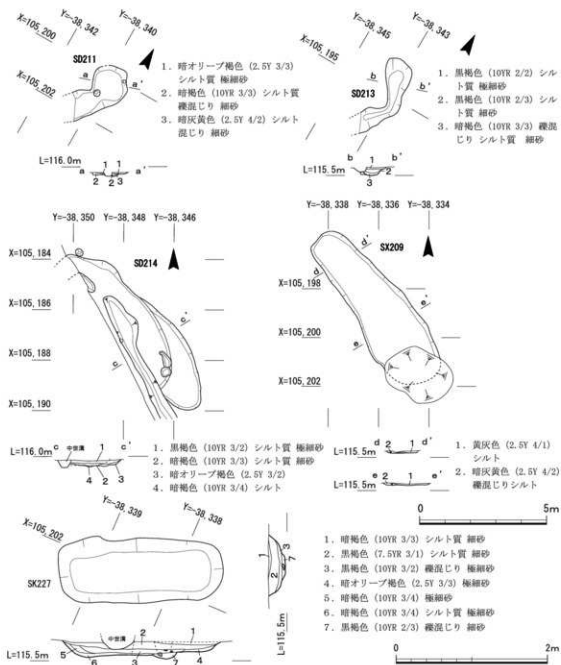
では、S D215の延長部とみられる溝の一部が確認されたが、周辺に溝は確認されず、墳丘を区画する古墳の溝としては復元できない。

土坑 S K227 (第31図) 調査区中央寄りで検出した土坑である。平面形は長方形をなし、規模は長さ2.0m、幅0.8mを測る。中世のS D207と重複し、中央部を削平される。近接する3号墳の周溝S D211などと埋土の堆積状況が類似することから、古墳時代の土坑と推定するものである。土坑床面は平坦で、形状から埋葬施設の可能性があるが、棺痕跡等は確認されなかった。

土坑 S K216 (第30図) 北部で検出した不整形の土坑である。長さ3.6m、幅1.3m、深さ0.5mを測る。堆積状況から古墳時代の溝の可能性が高いが、遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。



第30図 2区北部遺構平面図



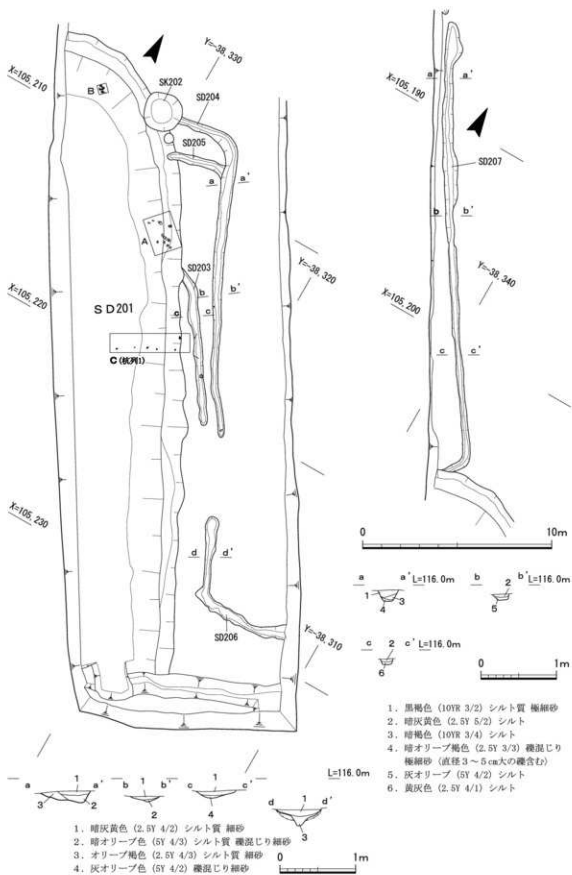
第31図 2区北部遺構平面・断面図(古墳時代)

土坑 S K 219 (第21図) 北部中央で検出した 1 辺約1.2mのいびつな方形の土坑である。深さ0.7mを測る。遺物は出土していないが、堆積状況から古墳時代の土坑の可能性がある。

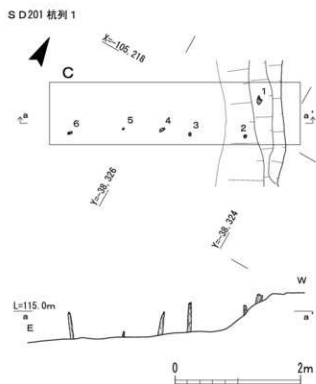
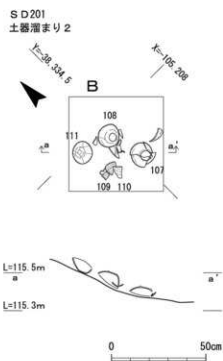
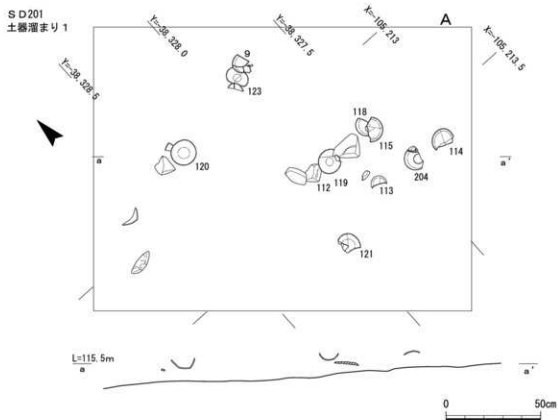
②中世の遺構

2区では、中古墳群周辺で、一部重複する平安時代末期～鎌倉時代前期の溝群や柱穴群、土坑、井戸等を検出した。

i) 溝 S D 201 (第23・32・33図) 中1号墳の周濠と重複して掘削された溝である。幅約6.5m以上を測るが、溝の西側立ち上がり上部は調査区外となっている。検出面からの深さは約0.8～0.9mを測り、断面は台形状をなし、東側は緩やかに立ち上がる。溝底部は、おおそ標高約



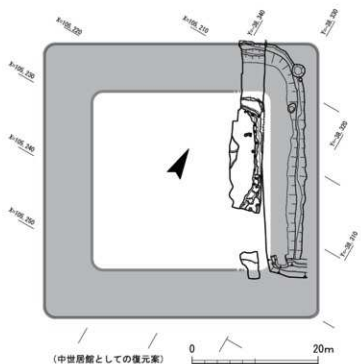
第32図 2区中世遺構平面図



第33図 2区溝SD201土器溜まり1・2、杭列1平面・断面図

114.8m～115.0mの深さまで掘削されている。埋土は、中世遺物包含層のうち下層には黒褐色シルトが堆積し、上層には暗褐色シルト質細砂～暗オリーブ褐色シルトが堆積する。下層の土質は上層よりも強いシルト質を示し、滞水していたと推定される。また、上層の堆積層は、地山の小粘土塊を多く含み、人為的に埋め戻された層位とみられる。

S D201は、北西部で周濠と同様に「L」字に西側へ屈曲し、中1号墳の周濠の落ち込みを利用して再掘削されたと推定



第34図 2区溝S D201による中世遺物復元案

される。西側を調査した第1次調査では、1号墳の周濠上層で多量の中世土器が出土していることから、中世の溝であるS D201は西側に続き、1号墳の周濠の形状と同様に、方形に区画する溝として掘削された可能性がある。第1次調査区周辺は、段丘平坦面が広がる居住域に適する地形であり、S D201はその規模や形状から西側に展開する居館の濠となる可能性がある。

S D201からは、各層から多量の中世土器が出土した。出土遺物の中には、灰軸陶器などの陶磁器類のほか、青白磁、白磁、青磁などの輸入陶磁器類が多く含まれる。出土土器には時期幅があるが、おもに12世紀中葉を中心とする遺物であるが、一部に新しい様相を示す土器を含み、S D201は12世紀後葉に最終的に埋め戻されたと推定される。また、S D201からは、奈良時代から平安時代前期にかけての須恵器や緑軸陶器等が少量ながら出土しており、周辺における該期の遺跡の拡がりが見られる。

杭列1 (第33図) S D201の中央部で東西に検出した杭列である。杭は、径6～8cm、残存長0.3～0.6mを測り、0.3～0.9mの不規則な間隔で5本が東西方向に穿たれていた。杭列の北側で柱材の一部残す径0.4mの柱穴を検出しており、溝の架設に関わる施設の可能性がある。杭はS D201の検出面では確認されず、中層掘削中に検出したものであり、中世のS D201にともなう杭列とみられる。

土器溜まり1 (第33図) S D201の中央南寄りで検出した土器溜まりである。中世の溝掘削面の基底で、南北1.5m、東西1mの範囲に広がる。ほぼ完形の瓦器椀や土師皿を主体とし、溝の東側から一括廃棄されたとみられる。瓦器椀の年代から時期は12世紀中葉～後葉と推定される。

土器溜まり2 (第33図) S D201の北部で検出した。中世溝掘削面の基底から、ほぼ完形の5

～6点の瓦器碗がままとって出土し、北側から一括して廃棄されたと推定される。

ii) 素掘り溝群(第32図)

中世の素掘り溝群を7条検出した。直線的に30m以上にわたって延びるものがあり、一端や中央部が「L」字形に屈曲する。道路側溝の可能性を含めて調査を進めたが、路面と想定される層位は確認されず、一方、溜め井戸とみられる遺構と接続する水路があることから、耕作地に伴う水路と推定するものである。調査地周辺は、扇状地の傾斜面に立地することから、湧水点が多く、近代まで石組の溜め井戸が多数掘削され、水路と併用して耕作地への水の供給を行っている。こうしたものに類する機能をもつ水路群と推定する。

溝 S D 203(第32図) 調査区南部で検出した南北方向の溝である。長さ8.3mにわたって検出した。幅0.6m、深さ0.3mを測る。北西で西に振れ、S D 201に重複する。S D 201の上層から掘削された溝とみられる。出土遺物には瓦器碗等を含み、12世紀後半の溝と推定される。

溝 S D 204(第32図) S D 204は、S D 203と平行して東側で検出した。幅0.7m、深さ0.4mを測り、北部で西に屈曲する。また、S D 204の延長上でS D 206を検出し、埋土の状況から連続する溝の可能性がある。S D 204は、水溜めとしての性格をもつと推定する S K 202と接続し、ほぼ同時期の遺構であることから、水路としての機能をもつ溝と考えられる。溝内から、瓦器碗や土師皿が出土し、12世紀後半の素掘り溝とみられる。

溝 S D 205(第32図) S D 204の南側で検出したもので、S D 204 と平行して西に延びる溝である。幅0.5mを測る。東端でS D 204と重複するが、検出状況からS D 205が先行し、S D 204によって再掘削されている。

溝 S D 206(第32図) 調査区南部で検出した「L」字に屈曲する溝である。上層は大きく削平され、幅0.7m、深さ0.3mを測る。遺物は、瓦器小片が出土し、中世の溝と推定される。北延長上のS D 204と同一の溝の可能性ある。

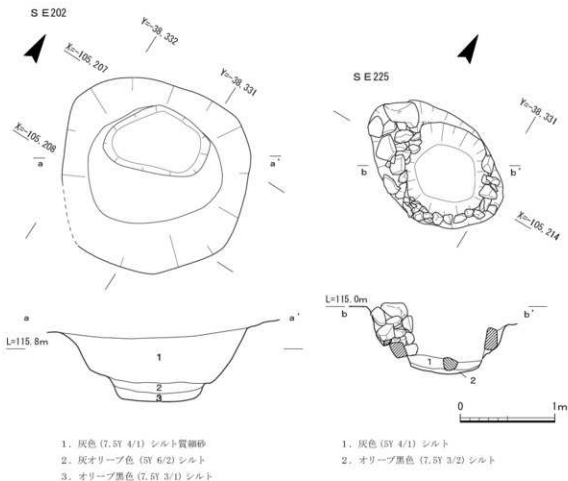
溝 S D 207(第32図) 調査区北部で、長さ24mにわたって検出した。幅約0.5m、深さ0.3mを測る。南端でS D 201に重複し、西へ「L」字に屈曲する。西壁層位から、S D 201の埋没後に掘削された溝とみられる。「L」字に屈曲する点や、出土遺物や埋土の状況から、S D 203～206と同時期に掘削された溝と推定され、耕作等に伴う水路としての機能をもつ溝と推定される。

溝 S D 218(第21図) 北部中央で検出した東西方向の溝である。幅0.4～0.6m、長さ3.3mを測る。遺物は出土していないが、堆積状況から中世遺構の溝と推定される。

iii) 周辺の遺構

落ち込み S X 209(第21図) 調査区中央北寄りて検出した不整形の落ち込みである。長さ6m、幅1.2～1.8mを測る。遺物はわずかながら土師器皿等が出土しており、中世以降の落ち込みと推定される。

土坑 S K 202(第35図) S D 201の北東隅で、S D 201を削平して掘削された円形の土坑である。断面は2段に落ち込む逆台形状をなす。上層は大きく削平され、径2.0m、検出面での深さ0.5mを測る。部分的にラミナを挟むシルト層を埋土とする。瓦質土器の鉢等が出土し、周辺で検出し



第35図 2区土坑SK202・井戸SE225平面・断面図

た小規模な溝群とはほぼ同時期の12世紀後半～13世紀初の井戸と推定される。東側でSD204と接続し、SK202は水路に付設する溜め井戸の可能性がある。

井戸SE225(第35図) SD201の北東で一部を検出した円形の石組み井戸である。石材はほとんどが抜き取られているが、東側の一部で基底から4～5段の石組みを確認した。井戸の内径は0.8m、残存する深さ0.7mを測る。土師器皿等を埋土に含み、中世以降の井戸と推定される。

(高野陽子)

(2)出土遺物

1) 北部調査地点(5～15トレンチ：出雲遺跡)

北部調査地点では、出土遺物は9トレンチを中心に整理箱8箱が出土した。

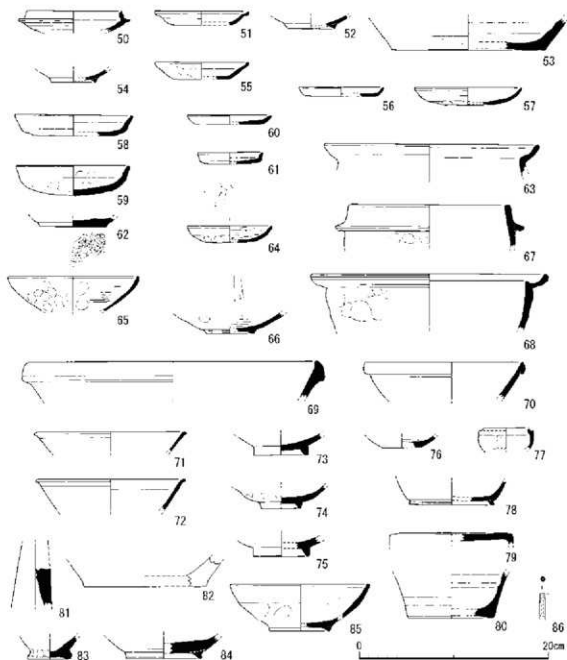
①土器

5トレンチ(第36図50～53) 50は、須恵器杯身である。杯部は浅く、短く内傾する返りをもつ。おおよそ陶邑TK209併型式に併行する古墳時代後期末の資料である。51は「て」字口縁の土師器皿である。52は瓦器碗の底部で、断面三角形の貼り付け高台をもつ。53は須恵器鉢の底部片である。東播系とみられる。

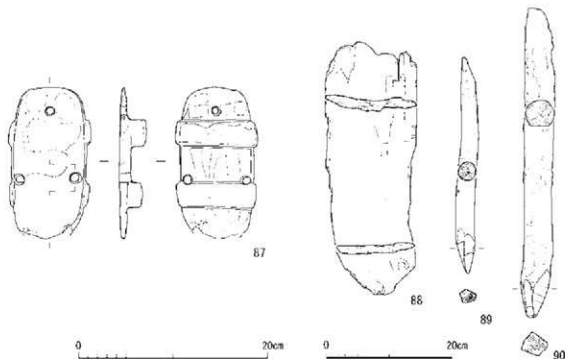
6トレンチ(第36図54・55) 54は52と同タイプの瓦器碗の底部である。55は土師器杯である。

7 トレンチ(第36図56・57) 56・57は土師器皿である。57は土師器杯である。

9 トレンチ(第36図58～83・86) 58は土師器杯である。59は土師器杯である。肉厚の器壁をもち、内外面をナデ調整される。60・61は土師器皿である。62は底部糸切り痕をもつ土師器皿である。63は土師器甕の口縁部である。64は瓦器皿である。内面は細かくヘラミガキされ、見込み部にジグザグの暗文をとどめる。65・66は丹波型の瓦器碗である。ともに内面は細かくヘラミガキされ、66は見込部にジグザグの暗文がみられる。67は瓦質土器(土師器か)の羽釜である。68は瓦質土器の鍋である。69は東播系の須恵器鉢の口縁部である。70は玉縁の口縁部をもつ中国製白磁碗である。大宰府陶磁器分類の白磁Ⅳ類である。71・72は端反りの白磁碗の断片である。73～75



第36図 平成26年度調査出土遺物実測図(1)



第37図 平成26年度調査出土遺物実測図(2)

は白磁碗の削り出し高台の底部片である。76は白磁皿の底部である。軸の発色は灰白色を呈する。77は青白磁合子である。軸の発色は内外面とも灰白色である。78は須恵器杯Bである。79は須恵器蓋である。80は焼成の甘い須恵質陶器で、壺または鉢の下半部とみられる。81は土師器高杯の脚柱部片である。

82は滑石裂石鍋の底部縁辺である。83は土師器鉢または壺の台部である。86は小形で管状の土鍾である。

以上はすべてS D 901より出土した。時期は平安時代後期～鎌倉時代初めである。

11トレンチ(第36図84) 84は灰釉陶器(山茶碗)碗の底部である。貼り付け高台である。

12トレンチ(第36図85) 85は瓦器碗である。口縁部内面に沈線を施す。S D 1201より出土した。

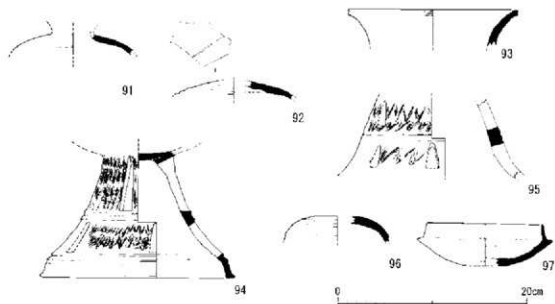
②木製品

9トレンチ(第37図87～90) 87は、S D 901から出土した削り出しの歯をもつ下駄である。長さ16cm、幅4cm、厚さ0.8～1.2cm、前後の歯の幅・厚さは前が2.8cm・1.6cm、後ろが2.7cm・1.2cmを測る。後ろの歯の減りが大きい。穿孔は3つで、鼻緒の位置はちょうど中間部となる。材の樹種は、ヒノキ製である。

88は矢板材である。残存長40.4cmを測り、偏平な板材の先端部を削り出している。89・90は丸杭である。89は残存長34.6cm、90は残存長49.6cmを測る。ともに先端部を尖らせるための加工(面取り)がみられる。90は表皮が残遺している。いずれもS D 901より出土した。

2) 南部調査地点(2区: 中1号墳)

溝S D 201 古墳時代と中世の大きく2時期の遺物が出土している。古墳時代の遺物は図化で



第38図 平成26年度調査出土土物実測図(3)

きない小片を含めて総数30点程度である。下層からわずかに出土したが、多くは中世の遺物包含層である中～上層から出土しており、混入したものとみられる。出土土器のほとんどが中世に帰属し、整理箱約30箱の土器が出土している。

①古墳時代の遺物

1) 土器(第38図91～97)

91～97は古墳時代の須恵器で、91・92は、周溝下層から出土した。91は須恵器甕の肩部とみられる。細く引き締まる頸部をなし、大きく張る肩部の特徴から、陶邑T K 208型式～T K 23型式に併行するものとみられる。92は、有蓋高杯の蓋とみられる。ヘラ描きによる沈線がみられる。93～97は、S D 201中～上層の中世遺物包含層から出土した。93は、壺の口縁部である。口縁端部に一条の沈線を施す。94・95は、器台の脚部である。95は、脚径が大きく、直線的に立ち上がり、古式の器台の特徴をもつ。圏線で区切られた上段と下段には、小ぶりの三角形スカシと、やや幅広の単位による波状文を施す。94の器台は、上部がやや締め、裾部で大きく開くもので、95よりも新しい要素をもつ。裾部はやや屈曲して立ち上がることを特徴とし、圏線によって区画された2段に細かな単位の精緻な波状文を施し、縦長方形のスカシを交互に配する。95は、おおよそ陶邑T K 208型式に、94はT K 23型式に併行するものであろう。96は、細かな回転ヘラケズリを施す杯蓋で、やや小形化している。97の杯身は、底部から口縁部の立ち上がりはやや浅く、口縁端部には明瞭な段はみられないことから、T K 10型式に併行するものとみられる。

以上のように、S D 201から出土した須恵器には時期幅があり、T K 208型式を下限とするものと(95)とT K 23型式(94)と推定するものがある。中1号墳の築造時期が問題となるところであるが、周囲の従属的な古墳のなかでも新しい2号墳は過去の調査でT K 23型式期の須恵器を出土しており、S D 201出土土器のなかには、新たな古墳の築造時に追善祭祀として1号墳に奉献され

た土器が含まれているとみることができよう。

(黒坪一樹・高野陽子)

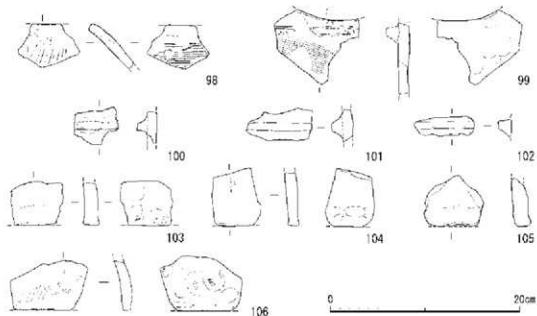
ii) 埴輪(第39図98~106)

周濠内の埴輪類は、出土量は少なくいずれも小片で、器表面の摩耗が進行しているものが多い。断面に曲率がない平板な個体は認められず、断面が緩い円弧を呈するものが大半で、全て円筒埴輪の破片と考える。これらは厚さ1cm程度の個体が多く、焼成は土師質で器表面は淡い黄色系である。基本的には酸化炎焼成を示すが、大半に断面黒色の変色帯を内包する。明らかな黒斑は確認できない。以下、個別の資料に補足を加える。

98は朝顔形円筒埴輪の口縁部である。口縁部はやや先細り、端部は方頭状につくるが、摩滅が進行して角が丸みを帯びる。外面調整はタテハケ(放射状ハケ)の痕跡がわずかに残る。内面は工具の当たりが強いヨコハケで、条線密度は粗い。

99は、タガ状突帯が剝離した部分を残す円筒埴輪の体部片である。外面の調整は突帯剝離部分に、上位がやや左に傾くタテハケ(条線密度10本/cm)が確認され、突帯貼り付け以前に円筒部外面を平滑に均す一次調整のタテハケが存在することが判明する。突帯領域外は二次調整のヨコハケ(条線密度4本/cm)が観察される。残存最大10cmの中で工具の静止痕跡は認められず、ハケの走行がやや波打つため、B種ヨコハケではない可能性がある。突帯を張り付ける位置の明示として幅2~3mmの浅い条線を横位に2~3条加える。内面は粘土紐の接合を均す成形段階の断続的な縦方向ナデのみで、ハケによる調整を加えた形跡はない。

100・101・102はタガ状突帯を残す資料である。100の突帯上縁と円筒部の接合部は鋭く屈折しており、板状工具による成形が想像できる。101は、底幅2.0cm、高さ1.1cm、平坦な面をなす側面(幅0.8cm)を測り突出度がやや大きな台形断面を呈する。突帯下縁に円筒部のタテハケが観察



第39図 平成26年度調査出土遺物実測図(4)

できる。102は各面がわずかにくぼむ「M」字形断面で、やや高い突出度を示す。タガの下縁は円筒本体に充分に接合されており、二次調整として加えられたタテハケがタガ下縁に大きく斜めに傾き残る。突出度及び形状は中期的である。各辺が大きくくびれることはない。

103～106は円筒埴輪の基部である。103は、底端部は製作台の平面を写し取り平坦面をつくる。器壁の肥厚はわずかで、内面は成形台に成立させた状態で指先による断続的な押圧を横方向に連続させて、横方向の溝状にくぼませる。外面はその反力で外側にわずかに膨らむ。調整は摩耗が著しく観察できない。同様の底部調整を施す104では、最下部の粘土紐（底部輪台）の接合部分が観察できる。粘土帯の小口の接合は上から見て右回りに螺旋を描くように接合する。外面は底端部に板状の工具原体を器壁に押し付けるように当ててそのまま縦方向に引き上げてタテハケを形成する。106は大きく逆「ハ」字状に開く形状に復元できる。器面の調整は上記と同様、内面ナデ、外面タテハケで調整する。タテハケは条線密度3.5本/cmと粗い工具を使用する。内面のナデは、底端より約1cm上位を始点として、3本指を描えた状態で器面を強く押圧し（この部分に指紋が残る）、そのまま左上がりにナデ上げる。右利き工人が想定できる。復元底径は23～25cmと小型である。

これらの埴輪片を総覧すると、ほとんど小破片で遺存状態は決してよくないが、川西編年のⅤ期にみられるような器体の小形化や焼成歪は認められず、後期的な要素は認められない。一方、明瞭な黒斑は小片のため確認できないが、埴輪断面は黒褐色を呈しており、基本的には野焼き焼成によったものとみられる。以上の点から、本資料群は、川西編年のⅢ期～Ⅳ期の特徴を示すものとみることができよう。

(伊賀高広)

②古代～中世の遺物

S D201からは、400点以上の多量の中世土器が出土している。これらの遺物は、溝断面によって区割り(第26図)し、取り上げを行った。古墳時代の層位を下層(第23図20～29層)としたうえで、中世の層位を上層(同1～5層)と中層(同6層～19層)に分け、層位ごとに取り上げたが、層位別に土器様相に大きな型式差はみられなかった。こうした点から、中世溝掘削基底部から出土した土器溜まり資料を除き、一括で報告する(遺物ごとの出土層位は、観察表に提示)。

土器溜まり2(第40図107～111) 丹波型の瓦器碗5点である。111は風化による摩滅がすすみ内外面の調整はみられないが、他のものは体部外面ナデ、内面ミガキで、見込み部にはジグザグに折り返された暗文がみられる。貼り付け高台は低い三角形を呈する。法量は、107～110は口径13.0cmを前後し、内面に緻密なヘラミガキが認められる。111は、調整は摩耗のため確認できないが、口径12.1cmと小さい。前者は12世紀中葉の資料とみられるが、111は新しい要素をもち、12世紀後葉に帰属する。

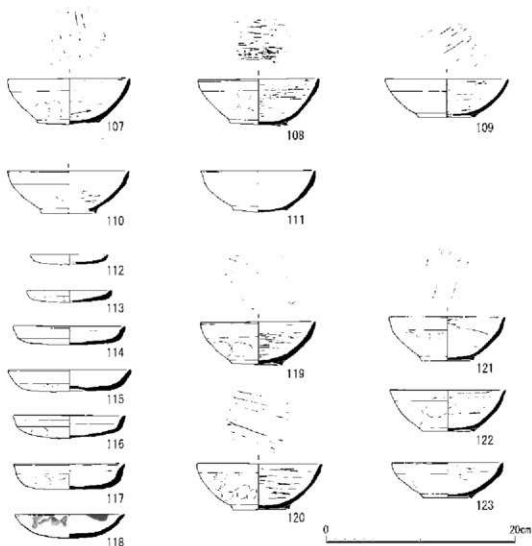
土器溜まり1(第40図112～123) 手づくねによる京都系土師器皿7点(112～118)と丹波型の瓦器碗5点(119～123)である。土師皿の色調は淡赤褐色を基調とする。土師器皿で最も小形の112は口径8.2cm、器高1.1cm、115が最も大きく口径13cm、器高2.3cmを測る。113は口縁部を厚くしている。114～117は底面から口縁部にかけて角度をつけて立ち上がる。7点すべて内外面ナデに

よる成形で、外面にユビオサエ痕をとどめるものもある。118はやや外反する口縁端部から滑らかに底部に至る。内外面に煤状および油性の炭化物が付着し、灯明皿とみられる。

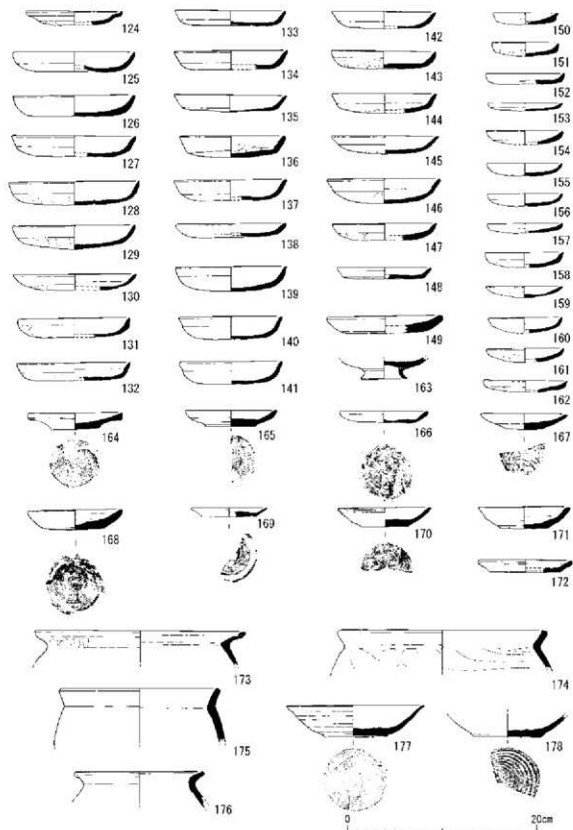
瓦器碗は前述の土器溜まり2のものと同形態である。形ばかりの低い断面三角形の高台部をもち、口縁部から体部にかけて滑らかなラインを描く。119と123は口縁端部をわずかに肥厚させているが、そのほかは先細りに丸くおさめている。法量の平均値は、口径12.3cm、器高4.5cmを測る。体部外面にミガキはなくナデ、内面はミガキで、119、120、121は見込み部にジグザグに折り返す暗文がみられる。12世紀中葉～後葉にかけての特徴がみられる。

溝S D201内出土遺物(第41図124～第45図266)

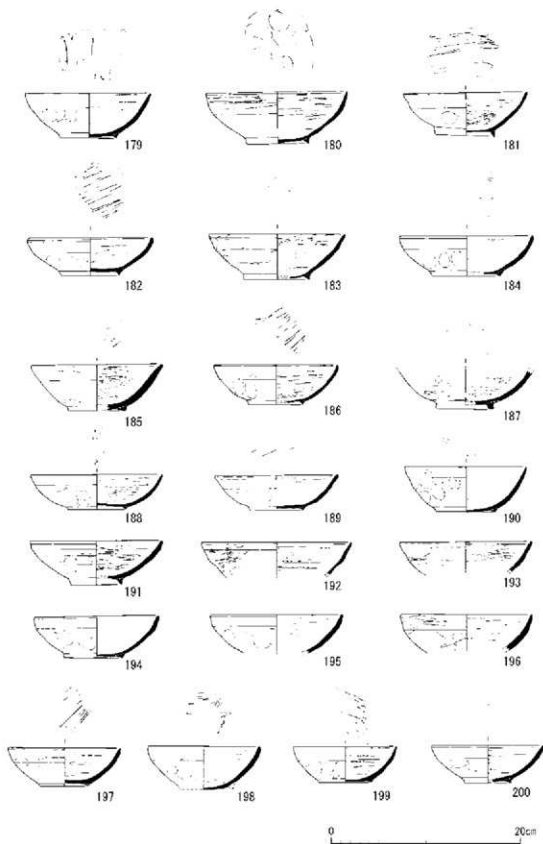
124～172は土師器皿である(第41図)。口径から、10cm以内の小形のもの、10～12cmの中形、それ以上の大形のものがある。形態は、「て」字口縁の小皿(124)、内湾する体部をもつもの(125～131)、底部から体部にかけて角度をつけるもの(132～136)、口縁端部がナデにより外反するもの(139～148)、口縁部を肥厚させた小形のもの(150～162)、内外面ナデ成形で高台付きのもの(163)、糸切り底をもつもの(164～172)がある。なお、糸切り底をもつタイプには、高台状の底



第40図 平成26年度調査出土遺物実測図(5)



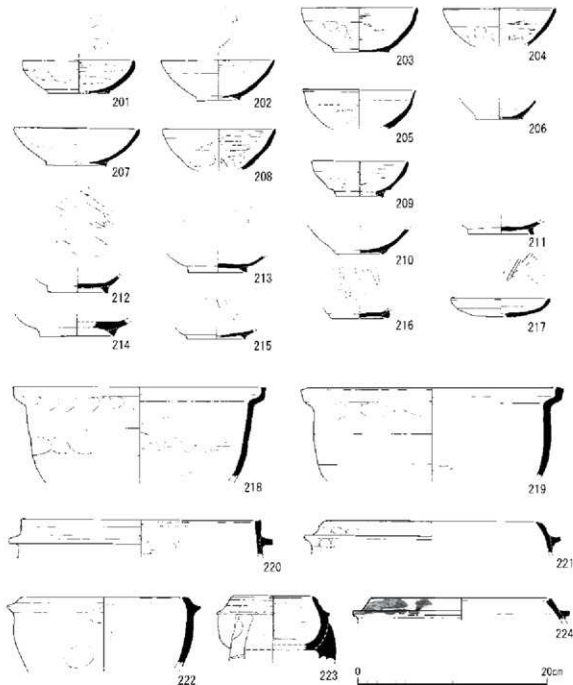
第41図 平成26年度調査出土遺物実測図(6)



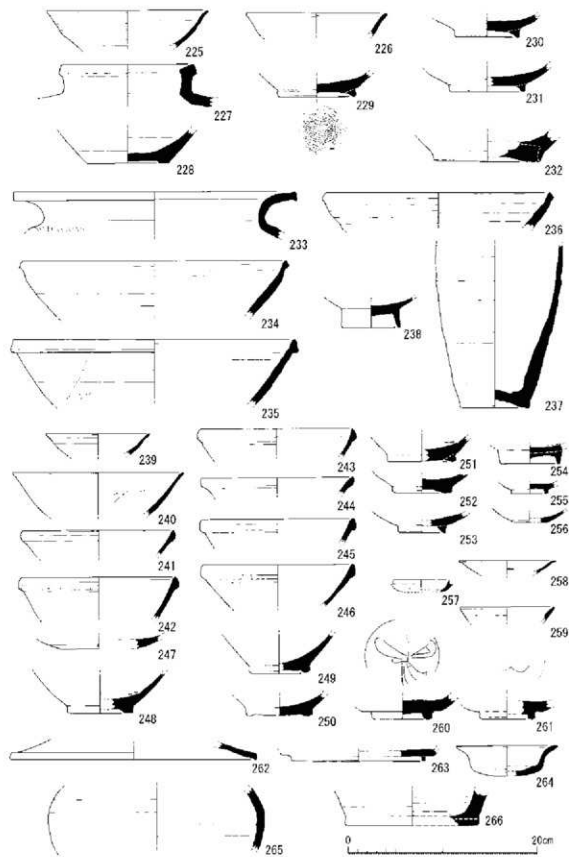
第42図 平成26年度調査出土遺物実測図(7)

部で外反する端部が面をもつもの(164)と丸くおさめるもの(165)、平底から滑らかに体部へ移行するもの(166・167)、口縁部が角度をつけて立ち上がるもの(168～172)がある。また分布状況は、SD201内の1～4区、さらに層序も上層～中層にかけての出土で、顕著な偏りはみられない。

173～176はタイプを異にする土師器の甕である(第41図)。173は屈曲部外面に強いユビナデを施し、端部をシャープに折り返す。174は緩やかな「く」の字に屈曲する口縁断片である。体部内面はケズリのちナデによる調整がみられる。175は緩やかな屈曲部をもち、端部は丸くおさめる。口縁および体部をハケメ調整する。176は弧状に開く短い端部を有するものである。



第43図 平成26年度調査出土遺物実測図(8)



第44図 平成26年度調査出土遺物実測図(9)

177と178は糸切り底をもつ土師器杯である(第41図)。177は回転ナデにより、厚みのある底部からやや外反する口縁部をもつ。178は口縁部を欠くが、同様の形態である。

179～216は瓦器碗である(第42・43図)。底部から体部にかけて緩やかに立ち上がり、底部の高台は断面三角形をなす。212～215は比較的高い高台で残りがよい。口縁端部は先細りに丸くおさめるものが多い。185・193は端部内面に細い沈線を形成している。内面に稠密なミガキが、見込み部に細かなミガキと、ジグザグ文の暗文がみられる。180の見込み部の暗文は連結輪状文で、やや古式的特徴がみられる。さらに、外面に細かなミガキや暗文の施されたものも少なからず存在しており、時期幅がある。217は瓦器皿である。見込みに暗文を施す。218～224は瓦質土器である。有段をなすものと、鐔状の把手をもつものがある。219は鍋、220～224は羽釜である。223は小形の三足羽釜である。

225・226は須恵器碗である。口縁部が外反気味に立ち上がるものである。225は外面に明確な稜が形成されている。これらは青磁碗を模したものとされる。

227は陶器壺の口縁部である。228・229は須恵器の壺である。230・231は灰釉陶器または山茶碗の底部である。削り出しの幅広高台のつくもの(228)と三角形高台のもの(229～231)がある。12世紀中葉～後葉と推定される。232は中世陶器の壺の底部である。233は口縁部が大きく外反する須恵器甕である。体部にタタキ痕をとどめる。234～236は東播磨系須恵器の片口鉢である。口縁端部の上下への拡張がみられるものの、それほど顕著ではない。235は大型のもので、復元口径は30cmを越える。237は陶器の壺で、体部が上半にいくほど薄くなり、焼成も特異で、中国製の可能性がある。

238～256は白磁類である(第44図)。238は碗の底部とみられる。内面の釉の発色は、淡黄灰色で被熱によるとみられる。239は皿の口縁部片である。口縁部はやや外反し、薄いつくりである。微細な白色斑粒を含む。太宰府陶磁器分類の白磁皿V類1aに属する。240は碗である。灰白色で底部を欠損するが、丸みをもつ体部にわずかながら外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。内面に櫛目文がみられる。同分類の白磁碗V類である。241～246は玉縁状の口縁部をもつIV類の碗である。色調は灰白色で、厚みのある器内である。胎土に微細な黒色・白色斑粒を含むものが目立つ。247～256は白磁碗及び皿の底部片である。247は底部近くの断片で、内面は灰白色、外面は露胎部となる。高台は欠損している。248～252は玉縁口縁をもつIV類の底部で、削り出し高台である。248は見込み部に細い段がめぐる。253は、断面三角形の高台をもち、内面を浅黄色、外面を灰白色に施釉される。255は断面四角形の高台をもつ皿である。内面は浅黄橙色に施釉され、外面の露胎面は灰白色である。256は平底の皿である。内外面の釉の色調は灰白である。

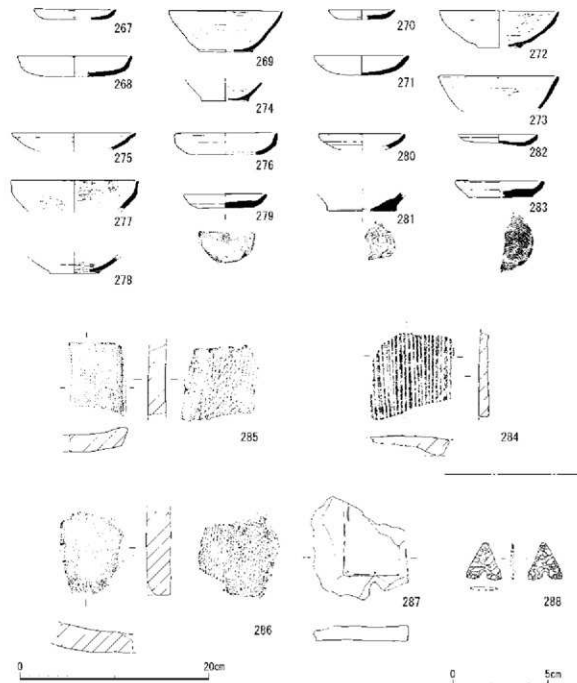
257はやや青味を帯びた青白磁合子の身である。体部に蓮弁がみられ、下半の底近くは褐灰色の露胎部となる。

258と259は青磁片である。258は龍泉窯系の高台付の皿または浅形碗であろう。内面に彫られた陰刻がみえる。露胎部は灰白色、内外面は浅黄色である。259は同安窯系青磁皿の口縁部片である。精良な胎土で、微細な黒色砂粒を含む。釉の発色は灰オリブ色である。

260、261は龍泉窯系青磁碗の底部である。260は肉厚で断面四角形の高台を有し、見込みに3単位の花文を描く。261も高台内側の縁りが浅く肉厚である。深いオリーブ色の釉が厚く、見込み部に彫られた花文の一部がみられる。

262は回転ナデによる須恵器蓋の断片である。263は須恵器皿の底部片である。細く短い高台は体部との境からやや内側をめぐる。

264は小形の須恵器鉢である。丸底で碗形の体部から大きく外湾して開く珍しい形態である。



第45図 平成26年度調査出土遺物実測図(10)

265は緑釉陶器壺の体部中間の断片である。両面施釉され、光沢のある暗緑色である。266は緑釉陶器壺の底部片である。内外面は施釉により深緑色を呈し、底に軸溜まりができています。

3) 南部出土地点(2区：出雲遺跡・中古墳群)

① 土器

溝SD203(第45図267～269) 267・268は土師器皿である。内外面ナデの手づくね成形である。267は小形、268は中～大形である。269は瓦器椀である。底部の高台は断面三角形で低い。体部内面に細かなミガキ、見込み部には暗文がみられる。

溝SD204(第45図270～274) 270・271は土師器皿である。内外面ナデによる成形である。272～274は瓦器椀である。272は低い断面三角形の高台底部から体部は内湾し、口縁端部は丸くおさめる。外面にユビオサエをとどめ、内面は細かなミガキを施す。273・274も同じ形態とみられる。

土坑SK202(第45図275～278) 275・276は内外面ナデによる土師器皿である。275は口縁部がヨコナデによりやや外反する。276はやや深い皿で、口縁部に強いヨコナデがかかる。

277・278は瓦器椀である。277は口縁部がナデによりやや角度がつく。端部は丸くおさめる。体部外面にはユビオサエの痕跡、内面は細かなミガキをとどめる。278は底部から体部下半の断片である。低い断面三角形の高台、内面の細かなミガキがみられる。

井戸SE225(第45図279～282) 279～282は土師器皿である。280・282は、内外面ナデによる手づくね成形である。279・281はロクロによる底部糸切り痕をとどめ、厚みのある底部から短く立ち上がる。

柱穴SP221(第45図283) 283は土師器皿である。ロクロによる底部糸切り痕が認められる。

② 瓦(第45図284～286)

284～286は平瓦である。3点とも凸面に縄タキの痕跡をとどめる。284の凹面は剥落しているが、285と286は明瞭な布目痕がみられる。平安～鎌倉時代初頭の特徴を留めている。いずれも溝SD201から出土した。

③ 石製品(第45図287・288)

287は硯の破損した断片とみられる。幅6cmで四角形に成形された陸とみられる部分は非常に滑らかに磨かれている。わずかに墨痕がみられる。溝SD201の1区上層から出土した。

288は縄文時代の凹基式石鉄である。長さ1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.25cm、重さ0.7gである。表裏面は細かな剥離により精緻な仕上がりをみせる。石材は赤色チャートである。遺物包含層中からの出土である。

〔3〕平成27年度調査

出雲遺跡第20次・三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次

(1)検出遺構

調査は南北に約1km離れた2か所の地点で実施した。平成25年度の計画路線における小規模調査の成果を受け、三日市遺跡の範囲となる北部調査地では、1～3区の調査区を設定して調査を実施した。また、出雲遺跡と中古墳群の遺跡範囲にある南部調査地では、平成25・26年度の調査(1・2区)を受け、3区の調査区を設定した。中古墳群については、今回の調査によって、その範囲は調査地の南を中心に展開し、調査対象地にまで拡がらないことが判明した。北部調査地点の調査面積は1,900㎡を測り、南部調査地点では700㎡を測る。

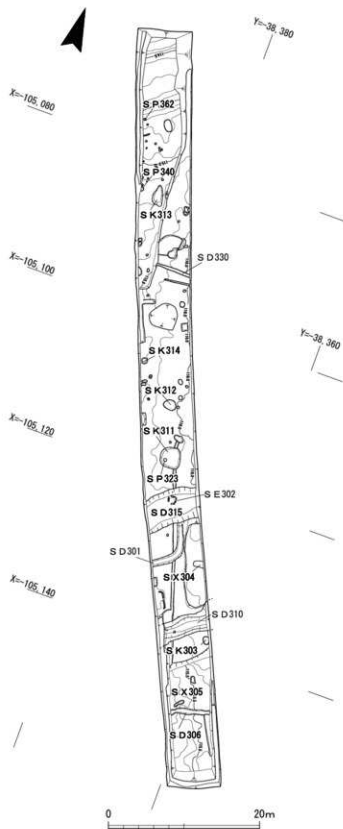
1)南部調査地点(3区：出雲遺跡)

平成27年度南部調査地点として出雲遺跡の遺跡範囲の南部に3区を設定した。3区は、第19次調査における2区の約15m北側に位置し、調査面積は810㎡を測る。3区では、弥生時代後期の流路、平安時代前期の溝や土坑、平安時代後期の溝や石組み井戸、柱穴や土坑等を検出した。柱穴群は、出土土器から平安時代後期以降と推定されるが、建物を復原するには至っていない。また、古墳時代の遺構は検出されず、中古墳群の分布範囲は平成26年度調査区の北側には及ばないことが判明した。

南部調査地点は、丘陵傾斜面上に等高線に沿うように南北に設定したもので、南部から中央にかけて平坦な地形をなし、北部は現代の棚田の耕作面によって大きく削平されている。中央付近で標高約116mを測る。層序は、中央部では、層厚約0.5mの盛土層の下層に、近世の耕作土層とみられる灰オリーブ色シルト混じり細砂層が約0.15mの層厚で堆積し、その直下の標高116.0mで第2層である基盤層の灰オリーブ色礫混じり細砂層を確認した。



第46図 平成27年度平調査地点配置図



第47図 出雲遺跡第20次(3区)平面図

①弥生時代の遺構

流路S D310(第48図) 調査区南部で検出した流路である。山側の東から平野部側の西へ流れ、規模は幅1.4～1.6m、深さ約0.5mを測る。断面は「V」字形をなし、埋土には0.1～0.2mの礫や粗砂を多く含み、洪水性の堆積層である。出土土器には、壺・甕・高杯等の弥生土器が多く含まれ、時期は弥生時代後期後葉と推定される。隣接地の丘陵下方の平野部側を対象とした第1次調査では、弥生時代後期の土坑等が検出されており、周辺の山側にも当該期の集落が拡がるものとみられる。

②古代～中世の遺構

土坑S K303(第47図) 調査区南部の東壁で検出した土坑である。長さ0.8m以上、幅0.8m、深さ0.3mを測る。断面は、逆台形状をなし、埋土は暗灰色シルト質細砂を基調とする。須恵器杯Bが出土し、奈良～平安時代前期の土坑と推定される。

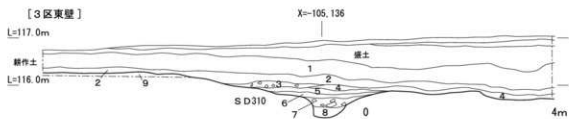
土坑S K311(第47図) 調査区中央で検出した土坑である。長さ2.8m、幅2.4m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していないが、中世土器を出土する柱穴S P323と重複し、削平されることから、中世以前の土坑と推定される。

土坑S K313(第49図) 調

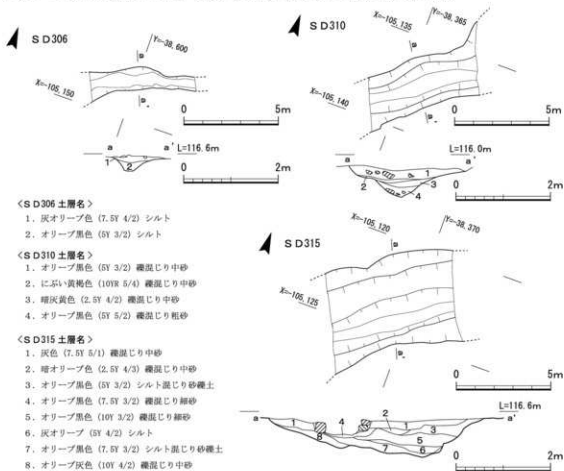
査区北部で検出した土坑である。平面形はいびつな舟形状を呈し、規模は長さ2.9m、最大幅1.9m、深さ0.2~0.3mを測る。床面は緩やかな「U」字形をなし、埋土には0.1~0.3mの大小の礫が含まれる。土坑内から、須恵器杯Bが出土し、奈良~平安時代前期の廃棄土坑と推定される。

土坑SK312(第49図) 調査区中央北寄りで検出した土坑である。平面形は楕円形状を呈し、規模は長径1.8m、短径1.3m、深さ0.3mを測る。断面は楕鉢状に緩やかに立ち上がる。遺物は出土していないが、埋土の状況から中世以前の土坑と推定される。

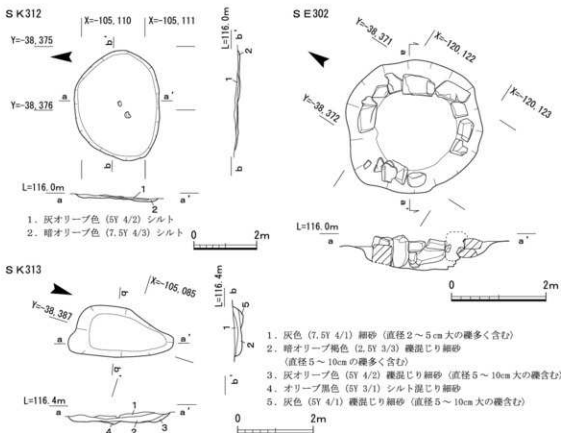
落ち込みSX304(第47図) SD301の東側で一部を検出した。溝の一部である可能性がある。



1. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) シルト混じり細砂
2. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 礫混じり中砂 (径2~5cm大の礫多く含む)
3. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) シルト混じり細砂
4. オリーブ灰色 (10Y 5/2) 礫混じり中砂 (径2~5cm大の礫多く含む)
5. 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 礫混じり中砂 (径2~5cm大の礫多く含む)
6. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 礫混じり中砂 (径2~5cm大の礫多く含む、鉄分少量)
7. オリーブ黒色 (5Y 5/2) 粗礫混じり粗砂 (径10~30cm大の礫含む)
8. オリーブ黒色 (10Y 3/1) 礫混じり中砂 (径5~10cm大の礫含む)
9. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 砂混じり粘土



第48図 3区溝SD310・306・315平面・断面図



第49図 3区土坑S K 312・313、井戸S E 302平面・断面図

幅0.8m、長さ1.6m、深さ0.4mを測る。土師器皿が出土し、12世紀後半の落ち込みと推定される。

落ち込み X S 305 (第47図) 調査区南部の落ち込みである。南部壁から北へ約15mにわたって検出した。標高約115.5m前後を測り、東壁層位から、深さ約1.0mで基盤層を約0.4m掘り下げ、ほぼ平坦に削り出されている。須恵器や瓦器碗、陶磁器類などが出土し、時期は平安時代後期～末期と推定される。出土土器のなかには、周辺から流入したとみられる平安時代前期の須恵器等も含まれる。

井戸 S E 302 (第49図) 調査区中央部で検出した石組みの井戸である。平面形は円形を呈する。井戸側は基底から1～2段の石積みを残すが、上層はS D 315に大きく削平される。規模は、基底の内径1.6m、残存する高さ0.6mを測る。基底石は、砂礫層を削り込んで据え置かれ、上層は削平のため掘形は確認されなかった。井戸は、自然流路S D 315の上層から掘り込まれており、埋没した流路下層の水脈を水源として掘削されたとみられる。

柱穴 S P 323 (第47図) 落ち込み S K 311を削平して掘削された柱穴である。規模は、径0.3m、深さ0.2cmを測る。柱穴内から土師器皿が出土し、時期は13世紀前半と推定される。

柱穴 S P 340 (第47図) 北部の西壁周辺で一部を確認した。規模は、径0.6m、深さ0.3mを測る柱穴あるいは土坑である。埋土から土師器皿が出土し、時期は12世紀後半とみられる。

柱穴 S P 362 (第47図) 調査区北端の西壁周辺で検出した。径0.3m、深さ0.2mを測る。遺物

は土師器皿が出土し、時期は12世紀後半とみられる。

溝 S D 306 (第48図) 調査区南端において、落ち込み S X 305を掘り下げ、標高116.4mの基盤層で検出した溝である。山側から平野部側へ掘削され、検出長は5.6mを測る。溝の東側は拡がり、幅は0.7~1.5m、深さは0.25mを測る。埋土は灰オリーブとオリーブ黒のシルトである。須恵器杯Bや緑釉陶器が出土し、平安時代前期の溝と推定される。

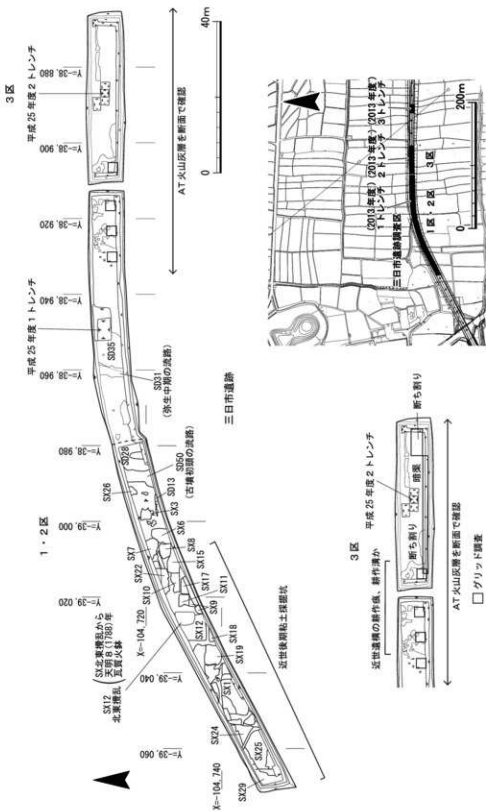
溝 S D 301 (第48図) S D 315の南側で検出した溝である。中央で「L」字形に屈曲する。幅0.5~0.7m、深さ0.3mを測る。溝内から瓦器椀が出土し、12世紀後半~13世紀初めの溝と推定される。S D 301は、流路 S D 315と重複し、出土遺物から井戸 S E 302とほぼ同時期の溝と推定される。2区における S E 202と S D 204(第21図)と同様、S D 301は S E 302を水源とする水路として掘削された可能性が高い。

溝 S D 330 (第47図) 調査区北部で検出した素掘り溝である。山側から平野部側へ東西方向に掘削される。規模は幅0.3m、深さ0.15mを測り、上層は大きく削平されたとみられる。わずかながら瓦器が出土し、中世の溝と推定される。

流路 S D 315 (第48図) 調査区中央南寄りで検出した流路である。山側から平野部側へ流れる流路である。幅約4.7m、深さ0.8mを測る。埋土には、各層位に径5cm前後の多量の礫が細砂中に含まれ、自然流路とみられる。流路の上層は、中世の井戸 S E 302によって削平を受けることから、中世以前の流路と推定される。



第50図 三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次調査地点(1~3区)配置図



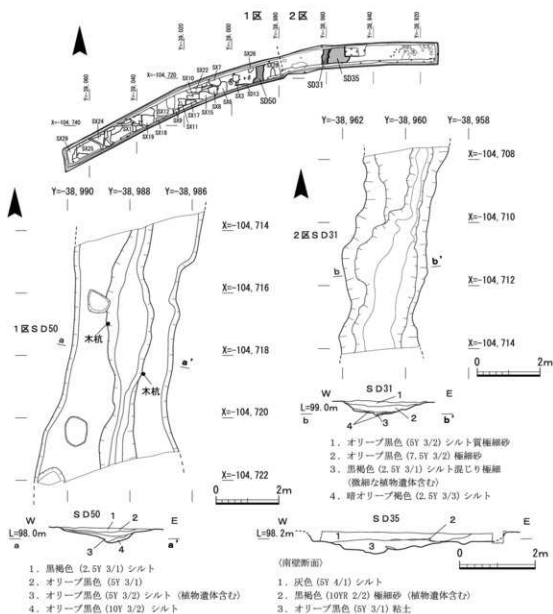
第51図 三日月道線・車塚遺跡(1～3区)平面図

2) 北部調査地点(1～3区：三日市遺跡・車塚遺跡)

三日市遺跡・車塚遺跡の範囲となる北部調査地では、1～3区の調査区を設定して実施した。1区と2区は遺構が密に連続する状況が確認され、ひと続きの調査区となった。

基本の層序は火山灰層が確認された3区南壁(第56図)を例にとると、以下のとおりである。

第4層：オリブ灰色(5GY5/1)極細砂、第5層：灰色(10Y4/1)シルト質細砂 第4層以下上層から、第6層：暗緑灰色(10BG4/1)シルト、第7層：オリブ黒色(7.5Y3/2)シルト、第8層：灰色(5Y6/1)砂混じりシルト、第9層：オリブ黒色(5Y3/2)シルト、第10層：暗青灰色(5BG4/1)シルト、第11層：灰色(5Y5/1)細砂(A T火山灰2次堆積)、第12層：灰白色(2.5Y8/2)極細砂質灰(A T火山灰純層)、第13層：黒褐色(2.5Y3/1)シルト、第14層：青灰色(5BG5/1)シルト、第15



第53図 1・2区溝S D 50・31・35平面・断面図

層：緑灰色(5G5/1)粘土からなる。

第4層は旧耕作土、第5層は近世遺物包含層、第7層はDHgを含む層、第11層はAT火山灰含む二次堆積、第10層はAT火山灰の純層、第15層はAT火山灰降下以前の基盤層である。AT火山灰純層は、標高98mで検出し、層厚は3区東で0.2m、3区中央で0.1mを測る。3区西端では、純層は確認できず、二次堆積層のみとなる。平成25年度調査区の3トレンチにおける純層は、層厚約0.4mを検出していることから、東に向かって旧地形は低くなると考えられる。なお、AT火山灰層の上位0.3mの層位となる第7層(第56図)で、DHg火山灰を含む層位を層厚約0.05mで部分的に検出した。DHg火山灰の降下年代は、約28,500年前、AT火山灰は約30,000年前である。

以上、2区南部では、AT火山灰層の2次堆積層直上まで、AT火山灰層の良好な堆積状況を確認することができた。

①1・2区の調査

検出された遺構には、中世の不整形土坑群、弥生～古墳時代初頭の溝3条、さらに西半部に密集して検出された江戸時代後期～近現代の瓦用粘土採掘土坑などがある(第54図)。

i) 中世土坑群(第54図)

中世土坑群は、長軸3～4mを測る大型の土坑である。土坑底面は不規則な平面形状を呈し、深さ0.5～0.8mを測る。この周辺の基盤層は良好な緑灰色粘土であり、土坑の形状から粘土採掘土坑である可能性が高い。

土坑SX5 北側を土坑SX6により大きく壊されているが、幅4mを測り、土坑底面は凹凸のある断面形である。

土坑SX6 隅丸三角形のような平面形で、長・短軸ともに5mを測る大型の土坑である。残存深さは約0.4～0.5mで、底面の形状は凹凸がある。埋土は3層に分かれ、上層から黄灰色、オリブ黒色、オリブ灰色のシルト(粘質土)である。出土遺物として、平安時代後期～末の土器とともに合子形の曲物が出土した。

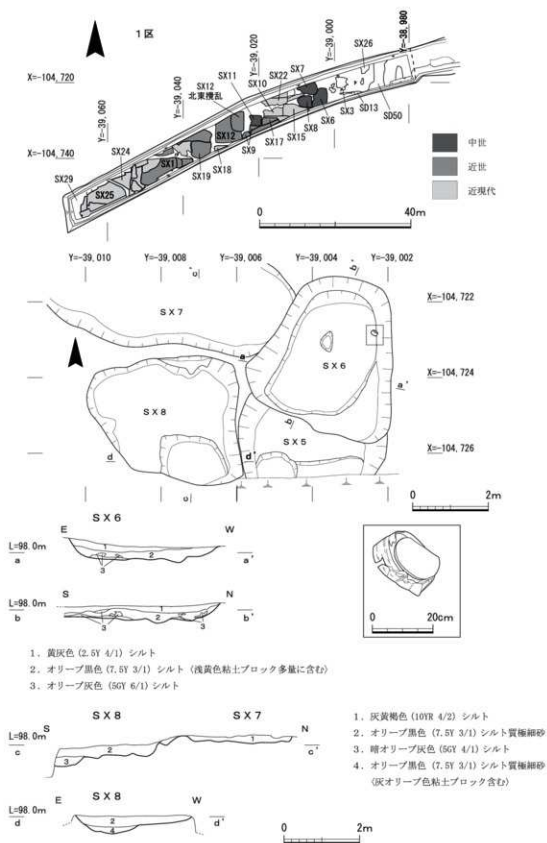
土坑SX7 不整形楕円の土坑で、長軸6m以上、短軸2.5m、残存深さ0.25mを測る。埋土は灰黄褐色土である。出土遺物から時期は平安時代後期～末である。

土坑SX8 隅丸台形を呈する土坑で、長軸4m、短軸3.4m、残存深さ0.3～0.55mを測る。埋土は南側の調査区南壁寄りに深く抉られた部分があり、オリブ灰色シルト質細砂が堆積し、上層はオリブ黒色シルトが覆う。出土遺物及びそれらからみた所属時期は、平安時代後期である。

土坑SX10 江戸時代の採掘土坑により一部削平されているが、平安時代の遺物をともなう不整形土坑である。長軸5m以上、短軸2～2.5m、深さ0.8mを測る。底面は凸凹はなく、平坦である。埋土はシルトの層で大きく4層に分かれる。暗オリブ灰色シルトに基盤層の暗緑灰色粘土を含む。

ii) 粘土採掘土坑群(第54図)

1区西半は攪乱が著しく、これらは江戸時代後期～近現代に至る大型の方形攪乱土坑群で、瓦造りのための粘土採掘土坑とみられる。平面形は方形が多く、底面は不規則に凹凸しているのが



第54図 1区中世土坑群平面・断面図

特徴である。主なものについてみていく。

土坑S X 11 南辺は不明ながら幅3.5m、残存深さ0.1～0.2mの規模で、方形に近い土坑とみられる。埋土は上下2層あり、上から黒褐色シルト質極細砂、暗灰黄色シルト質極細砂である。

土坑S X 12 隅丸方形に近い大型土坑である。長軸5.2m、短軸3.5m、深さ0.5mである。上層落ち込みから、多量の瓦や埴、焼土とともに、天明八(1788)年の銘をもつ瓦質土器の火舎が出土した。粘土探掘後に、廃棄されたとみられる。S X 12からは、瓦質土器が5点以上出土しており、瓦や埴とともに、受注生産に応じていたものとみられる。

土坑S X 15 平安時代土坑のS X 10を壊している大型方形土坑である。長軸8m以上、短軸2.5m、深さ0.4～0.7mの大きさである。埋土は3層に分けられ、上層から灰黄褐色シルト、灰色シルト(黄褐色粘土ブロック含む)、灰色シルトの堆積状況である。

土坑S X 19 隅丸方形に掘られた土坑で、長軸5.2m、短軸4.2m、深さ0.4～0.75mである。底面は凹凸があり、不規則な平面形である。埋土は5層に分かれ、黄灰色、灰色、オリーブ黒色などのシルトである。

土坑S X 21・S X 23 新旧の切り合いを有する大形の方形土坑である。S X 23が新しい。S X 21は長軸6.2m以上、S X 21は長軸3.4m以上である。埋土は両方ともオリーブ黒色及び灰色のシルトである。

Ⅲ) 流路群

流路は合計3条検出している。それらは、1区東半における幅約2mの古墳時代初頭の流路S D 50、2区の幅約1.5mの弥生時代中期の流路S D 31、さらにその下層で推定幅4～5mの弥生時代中期以前の流路S D 35の3条である。流路S D 35は縄文時代までさかのぼる可能性をもつ。いずれの流路も旧地形に規制され、北東から南西に流れる。

流路S D 50(第52図) 長さ7.5m以上、幅3.2～4.5m、残存深さ0.2～0.45mを測る。皿状に浅く傾斜していき、中軸部で幅0.7～1.6mの深みを形成している。埋土は3層に分けられ、黒褐～オリーブ黒色のシルトとなる。弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土し、当該期に掘られた溝である。

流路S D 31(第53図) 2区中央で検出した流路である。規模は、長さ6.3m以上、幅2～2.6m、残存深さ0.45mを測る。溝の断面は深い皿形または「U」字形で、底には凹凸がある。埋土は4層に分かれ、オリーブ黒、黒褐色、暗オリーブ褐色のシルト及び極細砂である。弥生時代中期後葉の土器が出土していることからその当時の流路であろう。

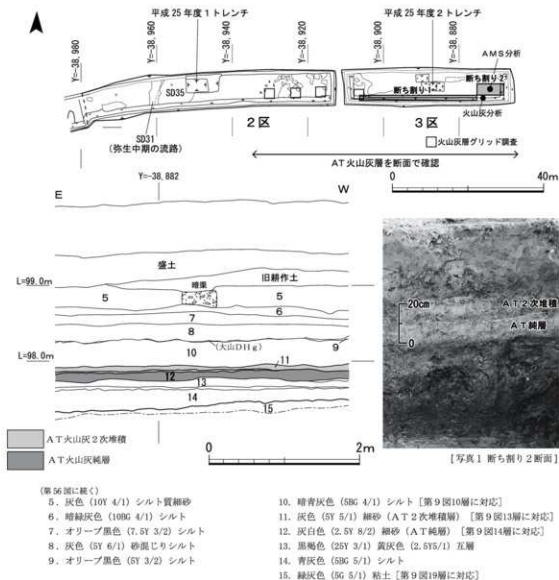
流路S D 35(第53図) S D 31と重複し、その下層で検出した流路である。規模は、長さ7.5m以上、幅3.5～6m、残存深さ1.2mを測る。埋土は中間にピート状の植物遺存体を含む黒褐色(10YR2/2)極細砂の薄い層を挟み、あわせて3層に分かれる。出土遺物は確認されなかったが、本流路は弥生時代中期の検出面よりも下層から掘り込まれており、弥生時代前期もしくは縄文時代にまでさかのぼる可能性がある。放射性炭素年代分析では、¹⁴C年代が2420±2014C BP(紀元前8世紀後半～5世紀末)、およそ縄文時代晩期後半～弥生時代前期の年代値を得ている。

iv) 2区東部土坑群(第54図)

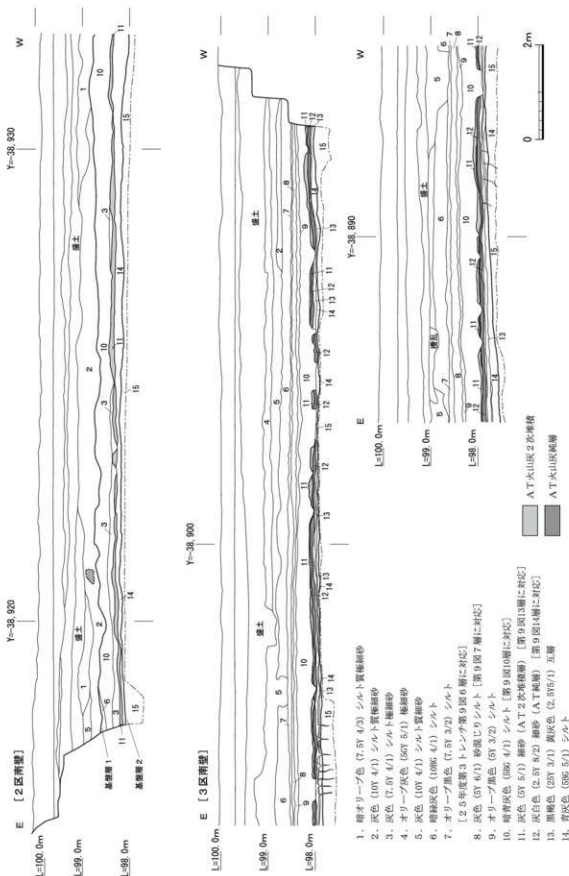
肥前系染付などを出土する近世の畑地耕作にともなう土坑状痕跡である。方形、楕円、不整形な平面形の中で、方形のものが多い。大きさは一辺1m以下のものが約半数を占め、2mを超えるものは数基しかない。残存深さは0.15～0.20mのものが多く、浅い残りである。検出面のレベルは標高98.5m前後である。先述の南壁の基本層序でみると、AT火山灰層(2次堆積層)の上約0.5mにまで達している。

②3区の調査

3区では近世の擾乱のほか、顕著な遺構を確認することはできなかった。しかしながら、2区に続き本地区でも土層断面によりDHg火山灰とAT火山灰の存在を捉えることができた。東壁断面南端の柱状図は、2区の南壁断面とほぼ同様の堆積状況である。火山灰は表土下1.7～2.2m(標



第55図 3区南壁土層断面図



第566図 2区南壁土層断面図

高97.8～98.3m)の間で、DHg火山灰とAT火山灰の2層のテフラを検出した。約3万年前に降下したAT火山灰は、3区東端から2区中央までの範囲で検出し、3区東半では水成堆積とみられる良好な状態で約0.2mの厚さで検出している。こうした点から、周辺部は湖沼から水際を含む湿原にあったと考えられるが、旧石器時代の石器等は出土していない。

出雲遺跡を対象とした南部調査地点では、弥生時代後期後半の流路、平安時代前期の溝や、平安時代後期と推定される石組み井戸や柱穴群などを検出した。柱穴群は、出土土器から平安時代後期以降と推定されるが、建物を復原するには至っていない。

三日月遺跡・車塚遺跡の範囲にある北部調査地では、旧石器時代のAT火山灰層など2層の火山灰層を確認し、旧石器時代の古環境を復原する資料を得た。また、弥生時代中期後半と古墳時代初期の流路などを検出したことから、調査地の周辺に弥生～古墳時代の集落が近在するとみられる。一方、平安時代後期の土坑群は、粘土採掘土坑の可能性が高いものである。三日月遺跡では、丹波国分寺の創建瓦を生産した平安時代前期の三日月瓦窯の灰原が検出されており、今回の調査で検出した土坑群は、平安時代の瓦生産との関係が注目される。南部調査地の出雲遺跡では、弥生時代後期の流路のほか、平安時代の溝や井戸、柱穴群を確認した。とくに、平安時代後期を中心に遺跡南部にも集落が拡大することが明らかとなった。

(黒坪一樹・高野陽子)

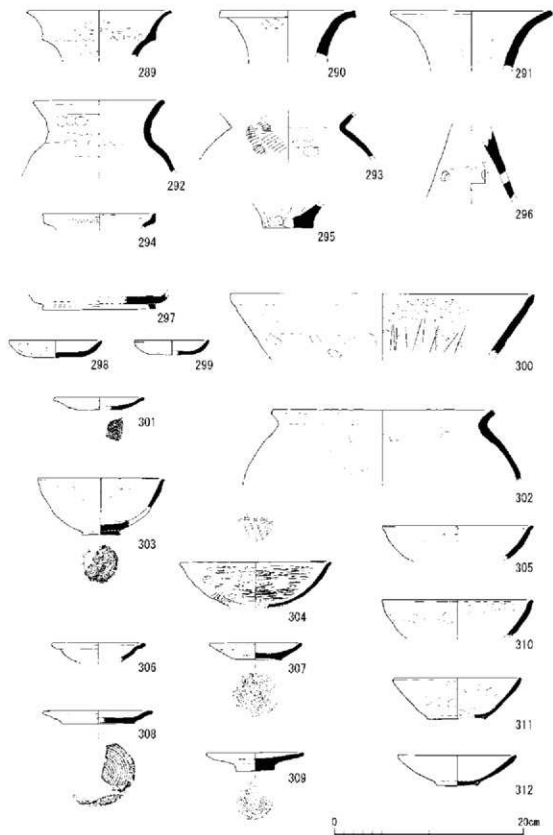
(2) 出土遺物(出雲遺跡第20次、三日月遺跡第13次・車塚遺跡第11次)

1) 南部調査地点(3区: 出雲遺跡)

流路 S D 310(第56図289～296) 289～296は弥生土器である。289は二重口縁をもつ壺である。頸部が外反し、2次口縁が大きく外反する二重口縁壺である。口縁部の屈曲部下縁にキザミが施され、口縁端部の内側に強いナデをめぐらせる。内外面にミガキ調整を施し、頸部に一部ハケメ調整を残す。290と291は長頸壺で、なだらかに外反する口縁部を有する。291は内面に細かなミガキ痕をとどめる。292の広口壺は、頸部と体部の間をゆるやかに絞り込むもので、頸部外面に粘土積み上げ痕を残す粗製の壺である。293の甕は、口縁端部を欠損するが、いわゆる第V様式系のタタキ調整による甕である。屈曲部から体部外面に右上がりのタタキ痕をとどめ、内面はナデ調整を施す。294は甕であり、近江系の受け口状口縁をなす甕である。口縁部外面下半に細かな刺突文を施す。295は、壺または甕の底部で、平底をなす。296は高杯の脚部であり、三方に円形のスカシを配する。裾部は欠損するが、直線的に延びる脚柱部を特徴とする。外面は摩耗するが、一部にハケ調整が認められる。以上の土器群のうち、293の二重口縁壺は頸部が外反するタイプで古式の形態を示すことや、直線的な脚柱部を特徴とする高杯や近江系甕を含むことから、これらは弥生時代後期後葉～末に帰属する資料とみられる。

土坑 S K 313(第56図297) 297は須恵器杯または皿の底部片である。断面四角形の貼り付け高台は、体部立ち上がり部からやや内側にめぐらされる。

落ち込み S X 304(第56図298・299) 298・299は土師器皿である。口縁は緩やかに立ち上がり、内外面ナデ及びユビオサエによる成形である。



第57図 平成27年度調査出土遺物実測図(1)

井戸SE302(第56図300) 300は瓦質土器の鉢である。口径40cm以上の大形品である。大きく開く体部から口縁部はやや肥厚する。外面はナデ及び下半にハケメ調整が残る。内面は左上がりのハケメ調整ながら、口縁部付近は水平方向のハケメ調整もみられる。さらに体部下半に縦方向に引かれた揃り目がみられる。

落ち込みSX305(第56・57図301～322) 301は底部糸切り痕をとどめる土師器皿である。体部から口縁部はヨコナデによる稜がつき端部を外反させる。

302は土師器甕である。球形に張り出す体部から短く屈曲させた口縁部をもつ。体部外面は火掬ねにより剥落が顕著で、中間に煤も付着している。内面は口縁部との境に水平方向のケズリ、下方はナデ調整である。

303～305は瓦器椀である。303は高い高台をもち、底部に回転糸切り痕をとどめる。丹波西部から播磨東部にかけて分布する特徴的なもので、東播系須恵器椀との共通性が指摘される。304は内湾する体部、細く繊細なヘラミガキがみられる。305は磨減がすすみ、調整は不明である。306は「て」字口縁の土師器皿である。口径9.8cmを測り、内外面をナデ調整する。307～309は回転糸切り痕の底部を有する土師器皿である。307はやや内湾気味に口縁部まで延びる。308は強いナデにより端部が外反する。309は厚い高台となり、直線的に延びるものである。

310～312は瓦器椀である。3点とも磨減が顕著で、ヘラミガキなどの痕跡は確認できない。310は底部を欠損し、内湾する体部をもつ。口径15.7cmを測る大形のものである。内外面にユビオサエの痕跡をとどめる。311・312は断面三角形の低い貼り付け高台を有し、直線的に延びる体部に特徴がある。312の口縁端部はやや肥厚する。

313～315は玉縁の白磁椀である。太宰府陶磁器分類のⅣ類である。施釉の色調は灰白色である。316は極めて繊細に薄く仕上げた白磁椀である。底部は欠損しているが、体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。

317は須恵器の高台付の椀である。体部は回転ナデによる明瞭な稜が形成されている。底部は回転糸切り痕を留める。

318は須恵質陶器の壺の底部から体部の断片である。粘土紐の痕跡もみられるが、内外面とも回転ナデによりいねいに成形されている。

319は須恵質陶器の壺の底部から体部立ち上がりにかけての断片である。厚い器壁で無骨なつくりで、外面には煤が付着している。内面は滑らかなミガキ状の調整が施されている。320は滑石裂石鍋の底部である。

321・322は、弥生土器壺と古墳時代の土師器甕である。321は絞られた頸部から水平方向に大きく開き、垂直に口縁部が立ち上がる。体部から頸部にかけての内外面にハケメ、口縁部外面に右上がりの列点文がみられる。

322は甕である。内外面ナデ調整である。口縁部は中間でやや肥厚し、端部は丸くおさめる。

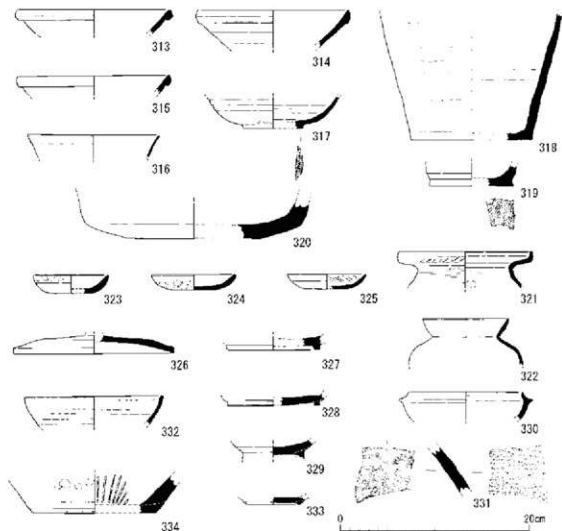
3区柱穴内(第58図323～325) 323～325は土師器皿である。323・324は内外面ナデにより成形され、外面のユビオサエの痕跡が顕著である。325は内面に斜め方向のハケメ調整がみられる。

323はS P 323、324はS P 340、325はS P 362より出土した。

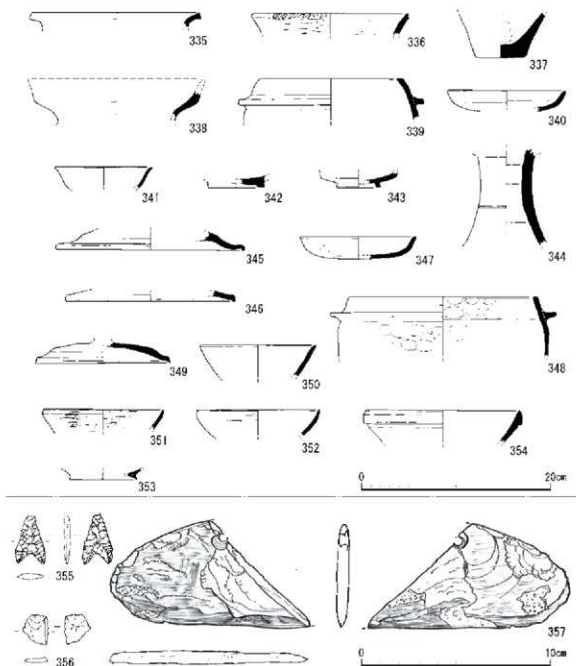
溝SD301(第58図326・327・331) 326は須恵器蓋である。天井部から口縁部にかけてはなだらかな仕上がりで、端部にかかる回転ナデは弱い。327は須恵器の高台付き底部片である。器種は杯または皿とみられる。331は須恵器甕の断片である。

溝SD306(第58図328・329) 328は須恵器の高台付き底部片で、杯または皿とみられる。329は緑釉陶器碗の底部片である。高台端部を欠損する。底部内面は施釉されず露胎部となる。緑釉の色調は緑青色である。近江産の緑釉陶器とみられる。

遺物包含層(第58図330・332~334) 330は須恵器杯身の断片である。内外面は回転ナデにより成形される。口縁部の返りは短く立ち上がる。古墳時代後期(6世紀末)のものである。332は、東播磨系の須恵器碗である。口縁部は丸くおさめ、体部は回転ナデにより明瞭な稜がつけられている。333は瓦器碗の底部片である。断面三角形の低い貼り付け高台をもつ。334は陶器播鉢の底部立ち上がりの断片である。体部内面に一本引きの播り目をとどめる。



第58図 平成27年度調査出土遺物実測図(2)



第59図 平成27年度調査出土遺物実測図(3)

2) 北部調査地点1・2区(三日市遺跡・車塚遺跡)

①土器

溝SD31(第59図335～337) 335～337は弥生土器である。335は甕の口縁部である。大きく外反し、端部は面をもつ。内外面ナデ調整である。336も甕の口縁部である。内面ハケ、外面ナデ調整され、口縁端部の外側にハケ状工具による細かなキザミが施される。337は甕または壺の底部である。形態から、後期(第V様式)のものであるとみられる。

溝SD50(第59図338) 338は弥生土器二段口縁甕の口縁部である。二段目の立ち上がり部に

小さな竹管文がみられる。内面の調整はハケメである。

土坑S X 6 (第59図339・340) 339は瓦質土器羽釜である。内傾する口縁部と断面台形の鐙をめぐらせる。340は土師器皿である。摩擦がすすんでいるが、内外面ナデ調整である。

土坑S X 10 (第59図341) 341は白磁碗の体部片である。口縁部端部は端反りである。

土坑S X 3 (第59図342) 342は須恵器碗の底部である。削り出し高台である。色調は灰白色を呈する。

土坑S X 23 (第59図343) 343は白磁碗の底部である。釉薬の発色は灰白色で、削り出し高台である。

土坑S X 7 (第59図345・346) 345・346は須恵器蓋である。345は回転ナデにより口縁部と天井部の境が明確である。

土坑S X 1 (第59図347) 347は土師器皿である。内外面ナデ調整する。

土坑S X 19 (第59図348) 348は瓦質土器羽釜である。内傾する口縁部で、やや上方向に丸くおさめた鐙がめぐる。

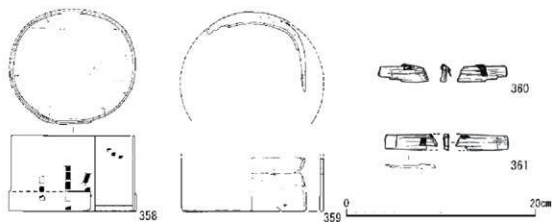
1区遺物包含層 (第59図344・349～354) 344は須恵器高杯脚柱部である。349は須恵器杯蓋、350～353は瓦器碗である。350は直線的に延びる体部を、352は内湾する体部をもつ。351・352は、体部外面及び内面に横方向の細かなヘラミガキをとどめる。353の底部は断面三角形の貼り付け高台である。354は玉縁の白磁碗Ⅳ類の口縁部である。近世土坑群が検出された地点を精査中に出土した。

②石製品

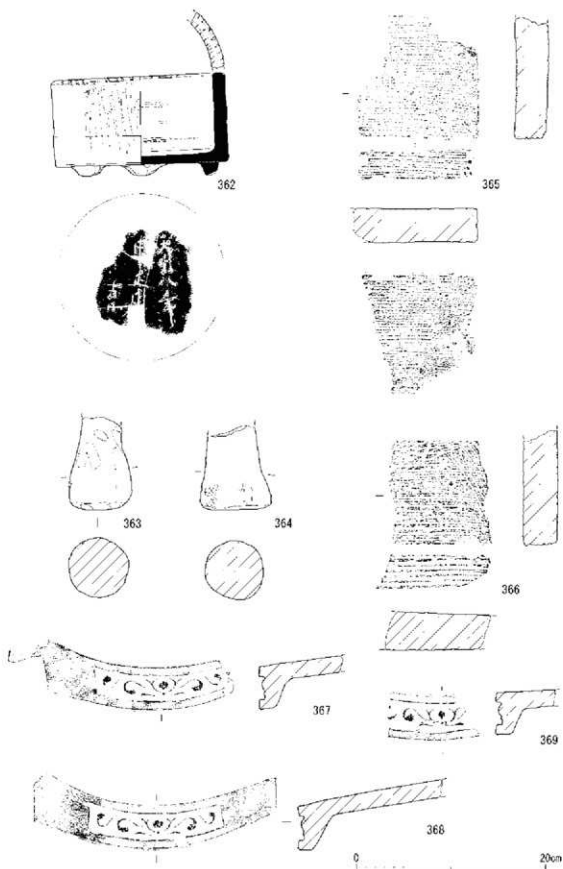
土坑S X 20 (第59図355・356) 355は縄文時代における赤色チャートの凹基式石鏃である。先端部を欠損しており、重さ1.1gを測る。表裏面とも精緻な斜雕が施されている。

356はサヌカイト剥片である。黒灰色の表面で、風化があまり進んでおらず、縄文時代以降の所産である。鉄分沈殿が多くみられる層より出土した。

溝S D 31 (第59図357) 357は、弥生時代の直刃の石包丁である。半分以上を欠損しているが、



第60図 平成27年度調査出土遺物実測図(4)



第61図 平成27年度調査出土遺物実測図(5)

刃部を含め表裏面とも滑らかに研磨されている。両面穿孔の部分が観察される。黒灰色の良質な粘板岩製である。S D31の東側より出土した。

③木製品

土坑S X 6 (第60図358) 358は曲物容器の側板と底板である。薄い側板は曲げられ、樹皮で綴じ合わされている。底板は側板の内側にはめ込まれ、木釘で固定されたようである。

土坑S X 1 (第60図359～361) 359は曲物の容器または柄杓の一部であろう。内面の底板がはめ込まれていた箇所に木釘の穴がみえる。また、内面の一部に、形は明瞭ではないが、圧痕を観察することができる。柄杓の柄の先端が側板に当たっていた部分とも考えられる。なお、359は保存処理(復元を含む)と樹種同定を行った。材質はヒノキ科ヒノキ属であった。

360・361は曲物の樹皮により綴じ合わされた部分の断片である。同一個体の可能性はあるが、358・359の部材かどうかは不明である。材の厚みは360・361とも0.4cmである。

④近世瓦生産関連遺物

土坑S X 12 (第61図362) 362は瓦質土器の火鉢である。口縁部内外のエッジに刻みをめぐらせ、平坦な底部に3か所の高台と中心部に「天明八年申正月 吉日」の線刻がみられる。S X 12上層より出土した。

土坑S X 1 (第61図363・364) 363・364は土師質の瓦用トチンである。溶けてガラス質になった自然釉や燃料材などの混じり合った炭化物が付着している。

土坑S X 12 (第61図365～369) 365・366は構築部材である埴である。366は表面の一部に曲線が線刻されている。367～369は軒棧瓦である。中心飾りから展開する橋文がみられる。

(黒坪一樹・高野陽子)

〔4〕平成29年度調査

三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次

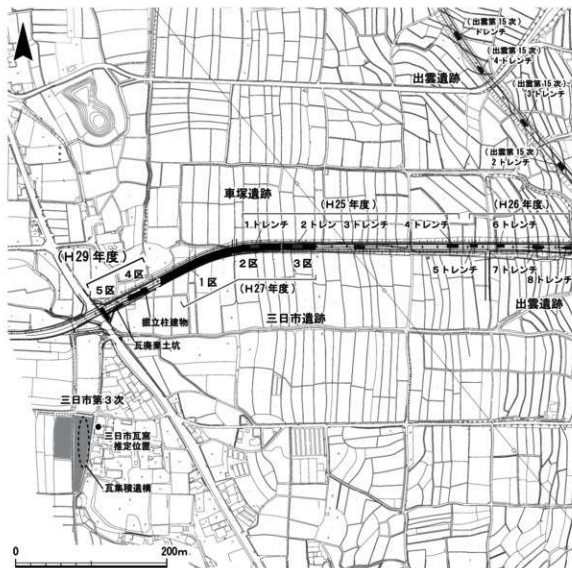
(1) 検出遺構

調査地は、平安時代の瓦窯と推定される遺構が発見された三日市遺跡の北部域と、縄文土器が出土した車塚遺跡の南部域が重複する地点に立地する。

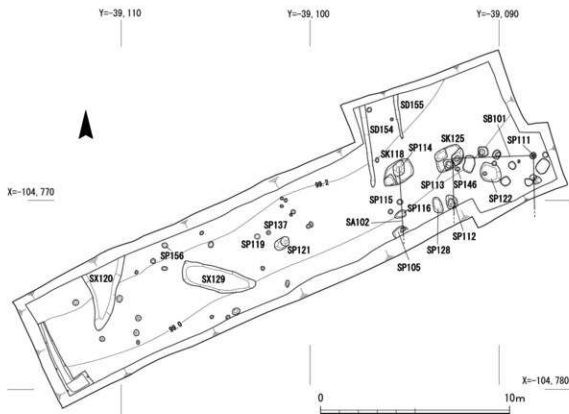
平成29年度の発掘調査は、計画路線の西端の地点を対象とし、平成27年度調査区の西側隣接地で実施した。2か所の調査区(4区・5区)を東西に設定し、調査面積は4区150㎡、5区150㎡であり、計300㎡を測る。

1) 4区の調査

4区は、東に設定した調査区であり、標高約99.8mを測る。奈良～平安時代の建物跡や柱列、柱穴のほか、時期不明の溝や落ち込み等を検出した。

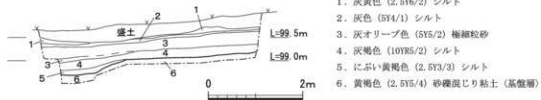


第62図 平成29年度調査区配置図

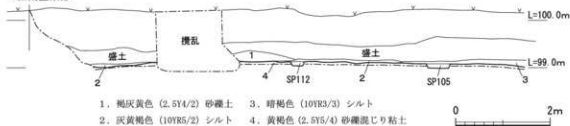


第63図 三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次(4区)平面図

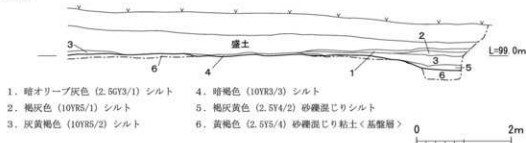
4区西壁



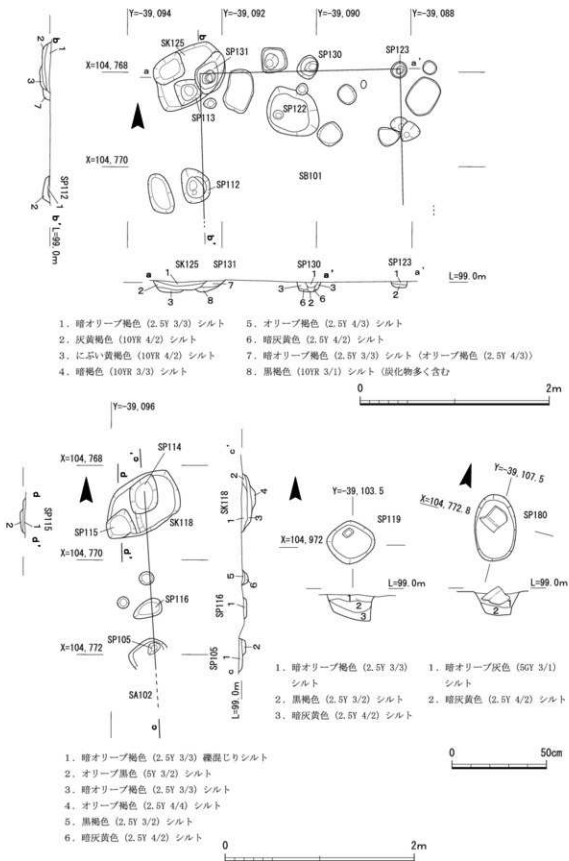
4区南壁東部



4区南壁西部



第64図 4区西壁・南壁土層断面図



第65図 4区掘立柱建物SB101、柱列SA102、SP119・180平面・断面図

掘立柱建物S B 101(第65図) 東部で検出した2間×1間以上の建物跡である。正方位の主軸をもち、N2°W、柱間約20～22mを測る。S B 101を構成するP 118から杯蓋等の須恵器や布目瓦、が出土している。出土遺物から奈良～平安時代前期との建物跡と推定される。

柱列S A 102(第65図) 掘立柱建物S B 101の西側で検出した南北方向の柱列である。出土遺物から、奈良～平安時代前期と推定される。

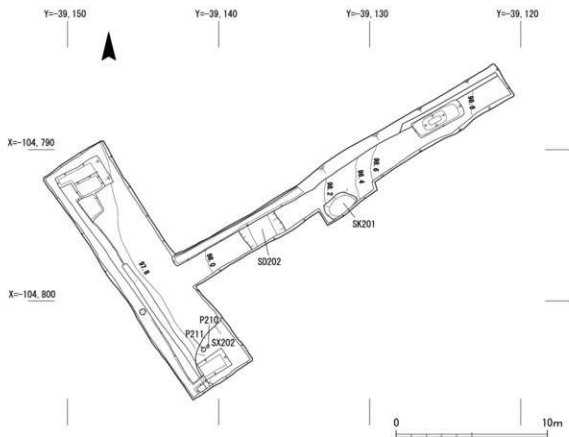
溝S D 154・S D 155(第63図) 調査区北東で検出した平行する2条の溝である。約2mの距離を保ち、南北方向に掘削されている。上層は大きく削平されているとみられ、各溝幅は約0.2mを測る。埋土は灰色シルトで、中世以降の溝と推定される。

落ち込みS X 129(第63図) 調査区中央西寄りで検出した落ち込みである。楕円形状をなし、規模は長さ35m、深さ0.2mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

落ち込みS X 120(第63図) 調査区北西隅で検出した落ち込みである。埋土に0.2～0.3mの礫を多く含み、流路の可能性がある。

柱穴S P 156(第65図) 調査区北西壁際で検出した。径0.3m、深さ0.2mを測る。柱穴から土師器甕が出土した。時期は、およそ8世紀半から9世紀初めの柱穴とみられる。

柱穴S P 119(第65図) 調査区中央で検出した柱穴である。須恵器壺が出土し、平安時代前期の柱穴と推定される。



第66図 三田市遺跡第14次・車塚遺跡第12次(5区)平面図

2) 5区の調査

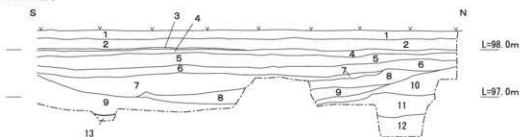
4区と里道を挟み、西側に設定した調査区である。奈良～平安時代前期と推定される瓦が出土した土坑や、時期不明の柱穴・落ち込み等を検出した。5区西側では、砂礫層の拡がりを確認し、奈良～平安時代前期を中心とする須恵器や瓦が出土した。また、断ち割り調査では、礫層から少

[5区東部北壁]



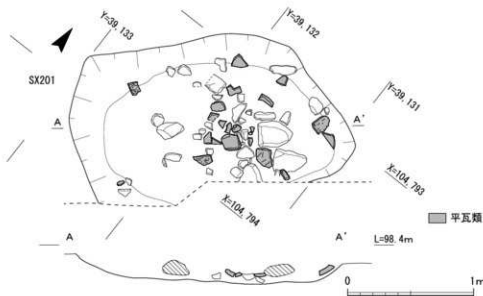
- | | |
|--------------------------------|---|
| 1. 灰オリーブ(5Y5/2)砂礫多量に含む(洪水性の堆積) | 7. 暗褐色(10YR3/3)砂礫混じりシルト
(平安時代遺物包含層) |
| 2. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト(砂礫含む) | 8. 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト混じり砂礫土(径
1～2cm大の礫多量に含む) |
| 3. 灰オリーブ(5Y5/2)砂礫土(洪水性の堆積) | 9. 暗オリーブ色(7.5Y4/3)粗砂(径2～3cm
大の礫含む) |
| 4. オリーブ褐色(2.5Y4/4)礫混じりシルト | 10. 黄褐色(2.5Y5/6)シルト |
| 5. オリーブ褐色礫混じりシルト | |
| 6. 暗オリーブ褐色シルト | |

[5区西部西壁]



- | | |
|--|---|
| 1. 灰色(7.5Y4/1)シルト | 8. 暗オリーブ色(5Y4/3)シルト(均質な層位・礫均質でよく
締まっている) |
| 2. 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト<近世耕作土> | 9. オリーブ黒色(5Y3/1)シルト(植物遗体含む) |
| 3. オリーブ褐色(2.5Y4/3)礫混じりシルト(鉄分沈着) | 10. オリーブ黒色(10Y3/2)シルト混じり砂礫土
(径1～3cm大の礫多く含む)<縄文時代遺物包含層> |
| 4. 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂礫混じりシルト(径1～3cm
大の礫多く含む)<奈良～平安時代遺物包含層> | 11. 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂礫混じりシルト
(径5～10cm大の礫多量に含む) |
| 5. にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト(よく締まっている) | 12. 暗オリーブ灰色(5GY4/1)砂礫混じりシルト |
| 6. オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト
(上部に鉄分沈着5層より暗く黄味強い) | 13. 灰オリーブ色(5Y5/3)砂礫混じりシルト
(径10～20cm大の礫多く含む) |
| 7. 黄灰色(2.5Y5/1)砂礫混じりシルト(径1～3cm大の礫多
く含む) | |

第67図 5区北壁・西壁土層断面図



第68図 5区土坑S K 201平面・断面図

量の縄文土器や、弥生土器、石器等が出土したが、遺構は検出されなかった。

土坑S K 201 (第68図) 東部で検出した楕円形状をなす土坑である。長辺1.3m、短辺0.8m以上の規模をもち、深さ0.3mを測る。東側に南北に土坑内から縄目タタキをもつ多量の平瓦が出土した。平瓦には完形品は含まれておらず、厚さ、焼成等は多様である。瓦とともにわずかながら須恵器小片が出土し、時期はおよそ奈良～平安時代前期の土坑とみられる。

土坑の上層は耕作によって大きく削平されているが、調査地点の周辺は、段丘崖の縁辺で東西に数kmにわたって約1.5m～2.0mの高低差を生じている地点であり、土坑は段丘崖直下であり、東側の段丘崖上から一括廃棄されたものと推定する。出土した瓦には、焼けひずみを生じているものや高温焼成により発泡しているものがあり、瓦窯及び瓦生産に由来すると考えられる。共存する須恵器の時期から、近在するとみられる三日市瓦窯とほぼ同様な時期であり、瓦生産に関わる遺構とみることができよう。

流路S D 202 (第66図) 調査区西側中央で検出した流路である。幅2.7m、深さ0.4mを測り、断面は緩やかな「U」字形をなす。長さ0.1～0.2mの礫を多量に含み、自然流路の一部とみられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

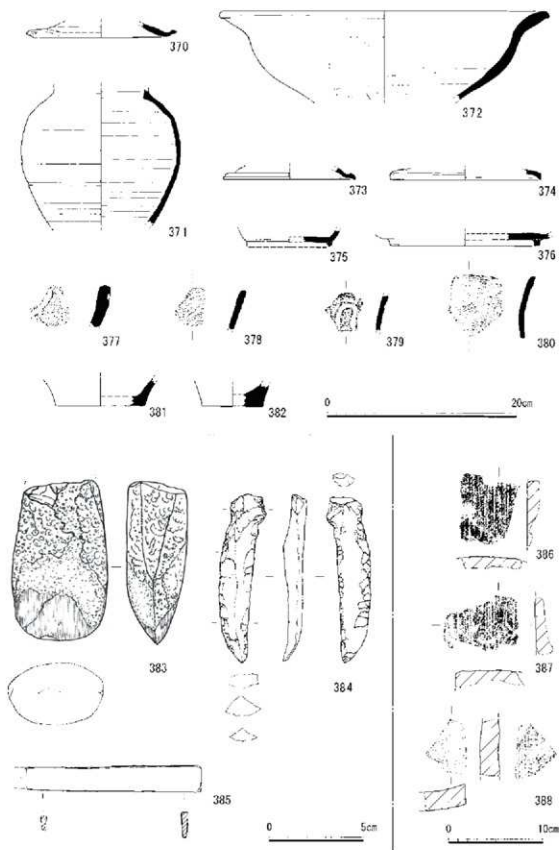
礫層4層 (第67図4層) 調査区東側中央で検出した薄い小礫層の拡がりである。層厚約0.1～0.2mを測り、トレンチ東部中央から西部にかけて拡がる。当初、道路状遺構の路面の可能性を含めて調査を進めたが、礫層は幅15m以上の拡がりをもつことから、旧河道の氾濫原における洪水性の堆積とみられる。奈良～平安時代の遺物を出土している。

(高野陽子)

(2)出土遺物(4・5区：三日市遺跡・車塚遺跡)

1)土器

4区柱穴(第69図370～372) 370は須恵器蓋である。口縁部の焼きひずみが著しい。371は須恵



第69図 平成29年度調査出土遺物実測図(1)

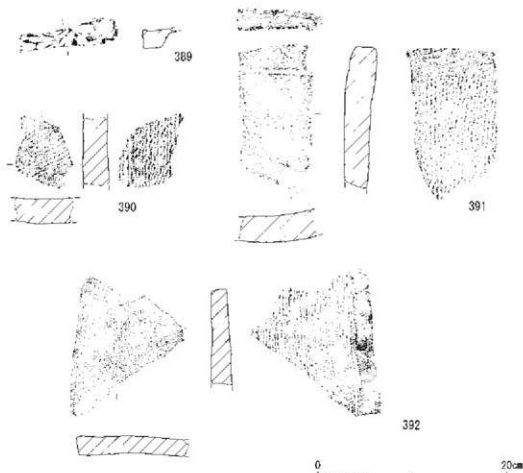
器蓋の体部である。内外面ともナデ調整される。372は土師器鍋である。内外面を粗くハケメ調整する。体部中間部に煤が付着している。370はS P 116、371はS P 121、372はS P 156より出土した。奈良時代から平安時代のものである。

5区SK201(第69図373・374) 373・374は須恵器蓋である。内外面を回転ナデにより仕上げられる。奈良～平安時代の所産である。

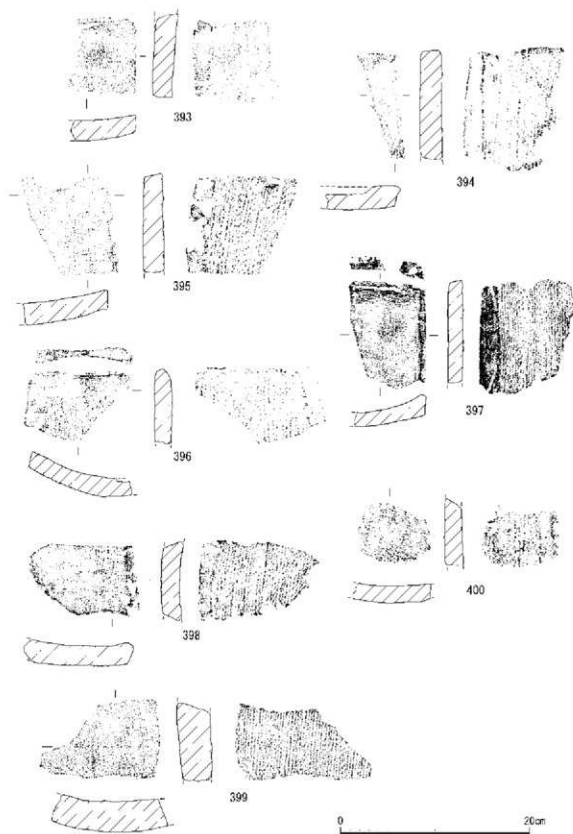
5区遺物包含層(第69図375～382) 375は貼り付け高台をもつ須恵器杯Bである。376は須恵器皿の底部で貼り付け高台をもつ。377～380は縄文土器である。377は、波状口縁の深鉢口縁部である。口縁に沿って一条の沈線を施す。器壁は、厚手のつくりである。378は深鉢の体部であり、連続する沈線を施す。379は磨消縄文を施す深鉢の口縁部とみられる。沈線は太く、時期は縄文時代中期末の北白川C式に属する資料とみられる。380は深鉢口縁部である。条痕が一部に確認できる。時期は、北白川上層式と推定される。381、382は弥生土器の底部である。

2) 石製品(第69図383・384)

383は磨製石斧である。基部側を欠損する。刃部は両刃でよく研磨され、体部は敲打により成



第70図 平成29年度調査出土遺物実測図(2)



第71図 平成29年度調査出土遺物実測図(3)

形している。残存長8.55cm、幅5.0cm、厚さ3.2cmである。弥生時代のものである。

384はササカイト製の石小刀である。端部に抉りによりツマミを作出した石匙の一形態である。万能ナイフのような切削するための工具である。長さ8.7cm、幅1.7cm、厚さ1.2cm、重さ17.5gを測る。石材は二上山ササカイトである。弥生時代のものである。5区の遺物包含層より出土した。

3) 銅製品(第69図385)

385は板状銅製品である。薄い板状の素材を折り重ねており、内部に何かの芯が残遺している。所属時期や用途については不明である。5区の遺物包含層より出土した。

4) 瓦(第69～71図386～400)

386～388は平瓦の破片である。389は軒平瓦の段顎部の断片で、均整唐草文の下辺(凸面)が生きていることから、範押し失敗品である。390～400は平安時代の平瓦である。いずれも模骨痕がなく一枚造りである。凹面の細かな布目痕と凸面の縄目タタキをとどめる。

なお、386・388は4区S P 114、387は4区S P 128から出土した。389・391・392は5区の遺物包含層から、390・393～400は5区S K 201より出土した。色調は暗灰白～青灰色を基調とするが、396は橙褐色を呈し、焼成の軟質なものを含む。393・398は一部彎曲している。399は、強い被熱により、断面に発泡がみられる。

4. 総括

(1) 概要

本報告は、平成25～27年度、平成29年度の4か年に府道建設の事前調査として実施した出雲遺跡・三日市遺跡・車塚遺跡・中古墳群の発掘調査の報告をまとめたものである。府道建設に伴う発掘調査は、おもに亀岡市千歳町域を対象とした川東地区は場整備事業とともに進められたものであり、ほ場整備関連調査については、平成28年度にその成果を報告したところである。^(注3) 総括にあたって、川東地区東部を対象とした府道建設及びほ場整備事業に伴う周辺における調査について検出遺構の概要を述べたい。

旧石器時代 旧石器時代の調査としては、周辺の地形では最も低位の三日市遺跡東部を中心とした第13次調査(平成25・27年度)において、A T火山灰層を検出した。これまで、旧石器時代の遺構や遺物は、周辺遺跡の調査では確認されておらず、古環境を復原する貴重な資料となった。

縄文時代 縄文時代の成果としては、府道計画路線の西端にあたる車塚遺跡南東部の第12次調査(平成29年度調査)^(注4)において、縄文時代中期末の北白川C式～後期前葉の北白川上層式の土器片をわずかに包含する砂礫土層を確認した。縄文時代の自然流路の一部と推定される。車塚遺跡では、西部における第7次調査で、縄文時代遺物の再堆積層が確認され、やはり縄文時代中期末の北白川C式～後期前葉の北白川上層式の土器や遺物が多量に出土し、同時期の集落の存在が想定されるところである。^(注5) また、府道計画路線の中央部にあたる三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次調査(平成27年度調査)では、AMS分析によって縄文時代晩期～弥生時代前期と推定される流路SD31を検出している。

弥生時代 弥生時代の主要遺構は、三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次調査(平成27年度調査)において、弥生時代中期後半の弥生土器や石包丁などを出土した流路を検出したほか、出雲遺跡南部を対象とした第20次調査(平成27年度調査)で弥生時代後期後葉の流路を検出している。周辺では、これまでにほ場整備調査の出雲遺跡10次調査で弥生時代後期後葉の竪穴建物や土坑が検出され、同時期の集落の拡がり^(注6)が想定できる。また、出雲遺跡第20次調査地の南東丘陵斜面^(注7)上では、ほ場整備に関連する第9次調査において、弥生時代後期の多角形住居が検出され、出雲遺跡の南部の丘陵上に弥生時代後期の集落の拡がり^(注7)が想定される。

古墳時代 古墳時代には、計画路線の南西端における古墳時代中期の中古墳群の第2次・第3次調査(平成25年度・同27年度調査)において、主墳となる中1号墳の周濠SD201と葺石をもつ墳丘の一部を検出するとともに、その北側に立地する従属的な古墳3基(2・3・7号墳)を確認した。また、ほ場整備関連の調査においては、出雲遺跡北部で新たに発見された前期古墳である出雲武式古墳が調査されている。盆地内では、篠町向山古墳とともに確認された数少ない前期の円墳(推定径19m)であり、葺石を外表施設とし、埋葬施設は割平されたとみられるが、周濠内からは石剣1点^(注8)が出土している。また、集落関係の調査では、ほ場整備に伴う出雲遺跡第12次調査や、第16次調査など丘陵傾斜面上を削り出して構築された古墳時代の竪穴建物が検出されている。いずれも、散在して立地しており、大規模な集落は中期～後期の集落が、平野部側の低地に下つ



第72図 発掘調査地点と主な検出遺構

た池尻遺跡や時塚古墳の周辺で確認されている^(R9)。

古代 飛鳥～平安時代の古代の遺構については、府道計画路線西端で実施した三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次調査(平成29年度)で、奈良～平安時代前期の瓦廃棄土坑S K201や掘立柱建物S B101を検出した。三日市遺跡では、ほ場整備の調査において、第14次調査地から南西に約200mの地点で、多量の瓦の集積遺構が検出され、国分寺創建瓦を焼成した瓦窯に関わる遺構と考えられている。瓦窯本体は発掘調査では未確認であるが、周辺において磁気探査などにより、窯本体の位置が想定されている。今回確認した瓦廃棄土坑には、高温の被熱により発泡・変形した瓦が含まれており、調査地の一帯が三日市瓦窯の工人の居住域であった可能性がある。一方、出雲遺跡南部の第20次調査(平成27年度)では、平安時代前期と推定される溝S D306を検出し、緑軸陶器などが出土している。ほ場整備に関連し、第20次調査地点の東の丘陵斜面で実施された出雲遺跡第8次調査では、緩やかな丘陵傾斜地において方形掘形をもつ柱穴からなる柱列が確認されている^(R11)。

中世～近世 計画路線南西端の遺跡南部における今回報告の出雲遺跡第19次調査(平成26年度調査)で、中1号墳の東周濠を再掘削した幅約6m以上の規模をもつ中世の大溝S D201を検出した。亀岡市教育委員会が平成20年度にS D201の西側を調査した際、中1号墳の周濠の調査の際に今回と同様の多量の中世土器が出土している。周濠の小規模調査であったために中世の濠あるいは溝として認識されたものではなかったが、上～中層における多量の土器の出土は、今回の調査のS D201にみる土器出土状況と一致し、S D201は西側に「L」字に屈曲する大規模な溝とみられる。古墳の濠の落ち込みを中世段階に再掘削し、利用したものであろう。中1号墳の西側の周濠は未調査ではあるが、古墳の周濠落ち込みに沿って掘削されたものであれば、方形に囲むように掘削されている可能性があり、中世居館の濠の可能性を指摘することができる。墳丘上で検出された柱列等からは遺物が出土しておらず、時期が問題となるところであるが、中世居館であるか否か今後の調査における課題となるところである。こうした中世の大規模な溝は、出雲遺跡では、遺跡北部のほ場整備に伴う出雲遺跡第16次調査においても、幅約4mの直線的に延びる溝を長さ20m以上にわたって検出している。輸入陶磁器や灰軸陶器などを含む中世土器が多量に出土しており、調査地周辺に有力者の居住域が存在すると推定される^(R12)。出雲遺跡では、既往の各調査において平安時代後期～鎌倉時代前期の遺構や遺物の出土が顕著であり、南北で大規模な溝が確認されたことは、遺跡範囲の中に所在する丹波一の宮である出雲神社のもとに中世においてこの地域が大きく興隆したことを示すものであろう。

計画路線北部の三日市遺跡13次・車塚遺跡第11次調査(平成27年度)では、中世の粘土採掘坑とみられる土坑群や、瓦や瓦質土器等が出土する近世の粘土採掘坑を検出した。とくに後者は、廃棄土坑から近世の軒平瓦などを含む棧瓦や磚、瓦質土器などが出土しており、瓦生産に関わる遺構として注目される。瓦生産のための粘土採掘は、近代にもさかに行われており、良質な粘土が得られたことにより、瓦を中心とした窯業が地域的に継続して行われてきたことが明らかとなった。

以上のように、今回の発掘調査における成果は、各時代において多岐にわたるものであるが、特に大きな成果として4点をあげることができる。第一には、三日市遺跡・車塚遺跡の調査(平成25・27年度)において、広域テフラである始良Tn火山灰(AT火山灰)の堆積層を良好な形で検出し、その前後の花粉分析により、旧石器時代の古環境を明らかにできたことであり、第二に、中古墳群の群構成や主墳の規模や時期が明らかになったこと、第三に、古代から中・近世における瓦生産に関連するとみられる遺構を検出したこと、そして最後に、中1号墳の周濠を再掘削した居館の漆の可能性ある中世大溝を検出したことである。以下には、これらのうち、とくに火山灰層検出による古環境の復原と中古墳群の形成時期やその位置づけについて、さらに具体的に詳述しておきたい。

(高野陽子)

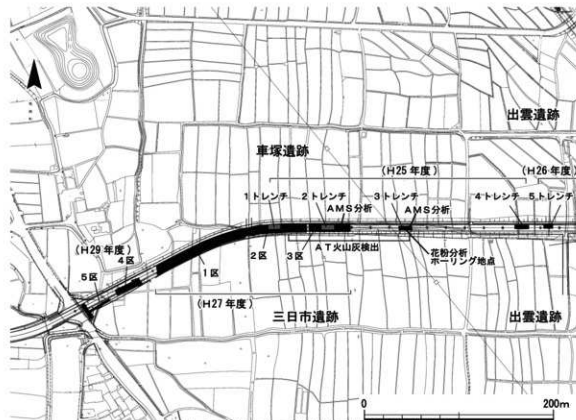
(2) 主要な調査成果

1) 広域テフラの検出と古環境の復原

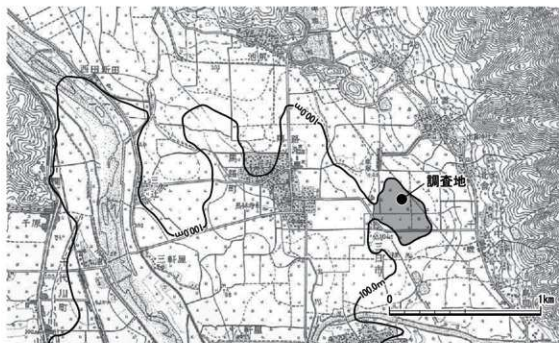
① 広域テフラの検出

平成25・27年度の三日市遺跡第12次調査と第13次調査において、上下2層の広域降下火山灰層を検出した(第8図)。これらは下層遺構の有無を確認するため、重機による深掘りによって検出された。

検出箇所は、12次調査3トレンチと、13次調査2～3区の間である(第73図)。理化学分析により、上層は大山東大山火山灰(DHg)で、下層は始良Tn火山灰(AT)であると特定された。その詳細な分析過程は、付編に述べられているとおりである。降下年代は、最新の第四紀学の成果



第73図 火山灰検出範囲、理化学分析試料採取地点位置図



第74図 昭和40年地形図における調査地位置図 (国土地理院 1/25,000)

によると、DH gは約29,000年前(28,846±196cal.ka.BP)、A Tは約30,000年前(30,009±189cal.ka.BP)で、ウルム氷期の寒冷期で後旧石器時代に当たる。

DH gとA Tの堆積状況について3トレンチ南壁でみると、DH gは明黄褐色の粗砂混じりシルトで、厚さ0.04～0.05mを測り、やや起伏をもつ不安定な層である。およそ標高98mに堆積していた。A Tの純層は灰白色の極細砂～中粒砂で、厚さ0.13～0.14mを測る。下層に行くほどやや中粒砂で粗くなる。A T 2次堆積層は2層ある。灰以外の不純物を含み、純層とは色調・粒度を異にする。灰色及び灰白色の細砂である。厚さは2層合わせて0.2m前後を測る。

今回のような火山灰の検出例は少ないが、亀岡市域では曾我部町の京都学園大学の図書館背後の崖面で、厚さ0.2mのA T火山灰が確認されている。また、同大学建設時において、山麓斜面の表層からアカホヤ火山灰(以下、A h火山灰とする)も検出されている^(R13)。

火山灰が発掘調査で確認された遺跡は、丹波では、旧石器時代の遺跡である兵庫県篠山市春日七日市^(R14)が著名で、京都市府内でも京都市岡崎遺跡^(R15)、亀岡市案察使遺跡^(R16)などで確認されている。案察使遺跡は同じ亀岡盆地東部の丘陵裾部に立地する遺跡であり、縄文時代早期の押型土器の上層でA h火山灰層が検出された。このように、亀岡盆地における中位段丘及び丘陵裾では火山灰がみついている。さらに南丹市神吉盆地では、A Tや大山系火山灰が検出され、花粉分析の成果とともに自然環境の復原研究がすすんでいる^(R17)。

② 古環境の復原

火山灰の検出された地点を中心に調査地周辺の地形を観察する。東に位置する三郎ヶ岳から牛松山の丘陵裾部から段丘面が徐々に下降し、3区(第73図)で最も低くなり、西に向かって徐々に上昇する地形となる。亀岡盆地は、洪積世においては湖沼であったとされるが、三郎ヶ岳の丘陵裾部から盆地中央を流れる大堰川まで傾斜して下降するわけではなく、三日月遺跡周辺において

現地地形は播鉢状を呈する地形となっている。昭和40年の国土地理院による地形図(第74図)によって標高100mのラインを追うと、大堰川東岸から西に走る等高線は調査地周辺において閉じており、大堰川の氾濫原の影響を受けない湖沼が帯に形成されていたことが伺える。湖沼の静穏な環境が維持されたことによって、A T火山灰純層が堆積状況そのままに温存されたのであろう。現地調査においては、洪積世の湖沼として良質なシルト層が堆積し、平成27年度調査の3区では、遺構の基盤層とする緑灰色粘土層の直上にA T火山灰層が堆積することを確認した。この粘土層が、のちに瓦生産に利用される良質な粘土層である。

さらに火山灰層とともに注目されるのは、有機質のピート層になって堆積している多量の植物遺体である。特に顕著な堆積はA T下位において複数みられる。層は厚いところでは0.2mを超える。湖沼や湿地にA Tとともに堆積し、良好な状態で保存されたものといえる。これらを含む土壌と炭化物を採取し、放射性炭素年代測定と花粉分析を京都府立大学の高原光氏のご協力をいただき実施した。その結果、D H g及びA Tの降灰前後の植生から、気候の変化を捉えることができた。詳しくは付編における高原氏の分析結果のとおりである。その成果を踏まえてまとめると、30,000年前のA T降灰前(KM1帯)では、マツ属などの針葉樹種花粉とともに、コナラ亜属、クマシデ属、ブナなどの落葉広葉樹花粉が比較的多く、針葉樹と広葉樹が混じり合った植生が東側の山地を中心に拡がっていたとみられる。対してA T降灰後(KM2帯)ではコナラ亜属やブナの花粉が激減し、代わってマツ科針葉樹の花粉が70~85%の高率になる。降灰が直接的に土壌を荒廃させ、西日本でも最終氷期最盛期の寒冷化の中で針葉樹林化が促進された。先にあげた旧石器時代の板井寺ヶ谷遺跡でもA T降灰以降、針葉樹と広葉樹の混交林からコナラ亜属の落葉広葉樹が減少し、モミ属・トウヒ属・マツ属などの針葉樹が優先する植生に移り変わっていく⁽¹¹⁾。

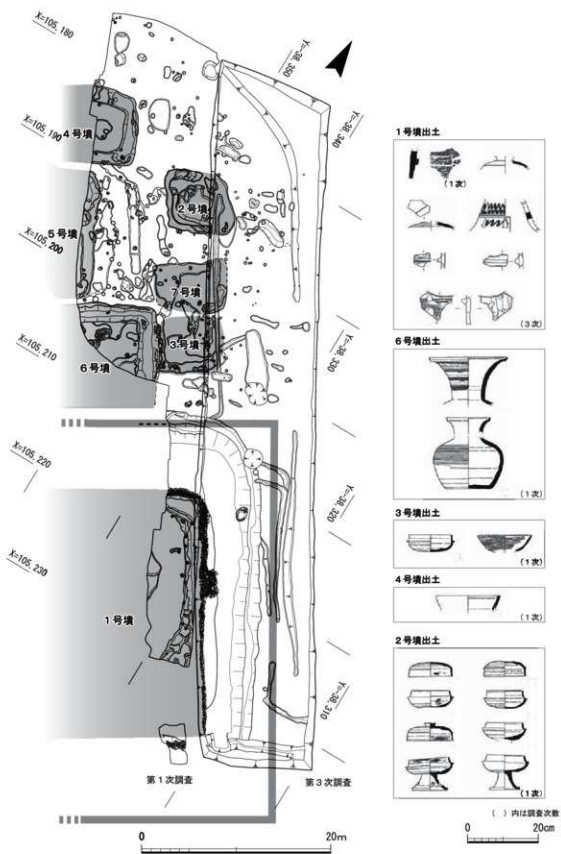
A T降灰後の乾燥・寒冷化は共通して認められる。針広混交林から針葉樹の植生下、考古学的視点として旧石器時代人の植物食利用の対象となるものを考えると、草本類のヨモギ、セリ、五葉松であればチョウセンゴヨウの種子、さらにコナラ亜属のドングリ類があげられる。コナラ亜属のドングリはアク抜きが必要で、旧石器時代に利用できたかは定かではない。油性のマツの種子やブナは生食可能であるが、これらの大量採集及び消費は考えにくく、植物食利用はかなり低調であることが推察される。

今回の調査では、旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかったが、火山灰の影響による植生の変化や湖沼の拡がりなど、旧石器時代人の生業に深く関わる自然環境の一端を明らかにした。旧石器時代の遺構・遺物はなかったが、火山灰の影響による植生の変化や湖沼の拡がりなど、旧石器時代人の生業に深く関わる自然環境の一端が明らかになった意義は大きい。

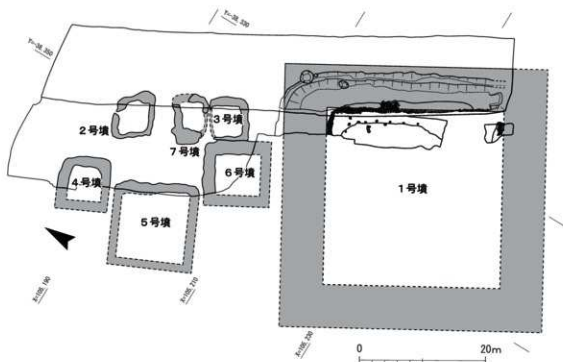
(黒坪一樹)

2) 中古墳群の築造時期とその位置付け

中古墳群は、第1次調査(亀岡市教育委員会)で総計6基の古墳が確認されていたが、今回の第3次調査で7基の古墳を確認した。まず、主墳となる周濠と葺石を検出した1号墳について、時期や規模に関して得られた知見を述べておきたい。



第75図 中古墳群と出土遺物



第76図 中古墳群の群構成復原配置図

① 中1号墳の墳丘規模

中1号墳は、第1次調査で葺石をもつ墳丘規模28mの方墳として復元される場所であるが、これまで不明であった周濠の規模が今回の調査で明らかになった。周濠は、上層を中世の大溝の掘削により削平されるが、周濠の断面立ち上がりラインの推定から、東側周濠を幅約7mとして復元することができる。墳丘の高さについては、葺石を基底石から最大5段まで、高さ1.2mまで検出したが、この範囲の中で段築は認められなかった。第1次調査でも、墳丘の高さは北辺で残存高1.2mとされ、段築は確認されていない。しかしながら、第1次調査では、削平された墳丘平坦面で柱穴が列状に検出され、いわゆる木の埴輪の可能性が指摘される場所であり、通常これらが段築1段目と2段目のテラス面に樹立される事例が多いことから、墳丘は2段築成の方墳として復元できる可能性が高いと言えるだろう。柱穴の検出面は後世の耕作面で大きく削平され、本来はさらに高い墳丘を持っていたと考えられる。また、墳丘東辺には葺石基底に接して石材の集積遺構がみられるが、この遺構については方墳の築造後に付設された墓前祭祀に伴う施設とみておきたい。周溝内から出土する土器に時期幅がみられることから、周辺に近接して位置する従属的な古墳の築造に際して、新たに敷設された可能性がある。

以上から、中1号墳の規模についてまとめると、墳丘規模28m、周濠を含めた規模41.8mを測る2段築成の方墳と推定される。

② 中1号墳の築造時期

中1号墳の築造年代について、出土土器と円筒埴輪から検討したい。1号墳の埴輪は、いずれも周濠から出土したものである。図化した8点のうち、6点までが断面色調から野焼き焼成による円筒埴輪あるいは朝顔形埴輪と判断されるものであり、2点が窯焼成によるとみられる円筒埴輪である。攪乱を受けない周濠S D201下層からは、いずれも断面が黒褐色を呈し、軟質の野焼き焼成とみる4点が出土している。また、断面が橙褐色を呈し、窑室焼成とみられる埴輪に関しても、一次調整にタテハケが確認され、円筒埴輪の製作手法としてⅣ期としては古式の手法が認められるものである。以上から、中1号墳の埴輪は、円筒埴輪編年Ⅲ期からⅣ期への過渡的な様相を示す資料と言える。一方、Ⅳ期埴輪の指標とされる静止痕をもつB種ヨコハケは、4種に細分され、須恵器との対応関係から中期古墳の編年の指標に用いられるところであるが、中1号墳におけるB種ヨコハケの有無については、二次調整を確認できる部分が少なく、残念ながらB種ヨコハケは未確認である。亀岡盆地における最も規模が大きな中期古墳は、中1号墳から約2kmの距離にある坊主塚古墳であるが、埴輪はⅢ期におもにみられるB b種ヨコハケが多用され、いずれも窑室焼成によるⅣ期の埴輪であることから、伝統的な埴輪製作技法が残ることが指摘されるところである。⁽²¹⁹⁾ これら坊主塚古墳の埴輪は、現在確認されている資料はⅣ期の埴輪のみで構成されており、中1号墳のようにⅢ期の野焼き焼成による埴輪は確認されていない。また、坊主塚古墳の築造時期は、副葬品の横別板鉄留短甲に関する近年の甲冑研究の成果から、その技法は



第77図 中古墳群周辺古墳分布図

中期中葉を降りない時期とされる。また、埴輪生産において野焼きの下限はおおむねTK 208型式に先行する段階とされることから、中1号墳の埴輪は坊主塚古墳に先行する段階、窑室焼成への過渡期とされるON46型式～TK 208型式と並行する時期を下限とみることが妥当であろう。

一方、出土須恵器には、時期幅がある。器台の脚のほか、壺(あるいは罎)、有蓋高杯、杯身などが出土してい

るが、杯身は陶邑TK23型式(第38図96)、TK10型式(同図97)併行のものを含む。TK10型式段階の資料は、古墳群の築造が完全に終息してから一定期間を経た時期のものであり、追善祭祀としての性格をもつものとみる。1号墳の時期を検討する上で、問題となる資料のうち、器台については中世溝の層位から2点が出土したが、脚径が大きく、小さな三角形スカシを配する古式の要素をみるものと(第38図95)、脚上部がやや絞り込まれ、裾端部が内側に折り込まれるものがある。前者はおおよそ陶邑TK208型式を下限に、後者の特徴はおおよそTK23型式に並行するものとして捉えられる。また、小片のため図化できなかったが、周濠下層から布留系甕の口縁部が出土している。南丹波における布留系の肥厚する口縁をもつ甕の下限はおおよそ陶邑TK208型式併行とみられる⁽¹⁸²⁾。このように、出土土器には時期幅があるが、その背景については1号墳に従属的な中小規模の古墳が接して築かれることや、東墳丘裾に築造後に石材集積遺構が付設されることから、周辺古墳の新たな築造時に、1号墳への土器供献祭祀が行われたことを示すものと推定する。

以上、出土遺物の状況から中1号墳の築造時期は、5世紀中葉の陶邑TK216～TK208型式に併行する時期の古墳とみることができよう。第1次調査でいわゆる木の埴輪が樹立された可能性が指摘されるという問題を残すが、おおよそ古墳編年7期に帰属するとみられる⁽¹⁸²⁾。

③ 中古墳群の群形成

中古墳群の築造過程を、第1次調査(亀岡市教委)の成果を含めて、検討しておきたい。第1次調査では、1号墳のほか、2～4・6号墳で遺物が出土している。その築造過程について、位置関係や出土遺物から1号墳を築造契機とし、3・5・6号墳が次に築造され、その後2号墳と4号墳が築かれたとし、古墳群の築造時期を、5世紀後半～6世紀初頭としている。

第1次調査の出土土器から、古墳群の築造時期を再検討すると、最も北側で検出された2号墳周溝から出土した須恵器一括資料をまずその下限と捉えることができよう。2号墳出土の有蓋高杯は、脚形態と大ぶりの円形スカシをもつ特徴から圓部窯跡群と推定するものだが、水平な天井部をもち、やや内傾気味に立ち上がる深い受け部をなすもので、陶邑TK23型式に併行する須恵器群とみることができる。次に、3号墳に関しては、周溝は今回の調査で想定された復元ラインで周溝は検出されず、3号墳北辺を新たに7号墳として切り離したもののだが、3号墳周溝南東において須恵器が出土しており、築造年代の基準資料とできるものである。出土した須恵器杯身は、口径が大きく、口縁部の立ち上がり直線的で受け部が水平に延びる特徴をもち、おおよそTK208型式に併行するものとみられる。つぎに、6号墳の出土土器であるが、2点の壺が出土し、平底の短頸壺については百濟系土器との関係が指摘できる希少な資料である⁽¹⁸²⁾。共伴する多条の波状文を施した長頸壺も定型化以降に例をみないものであり、TK208型式期を下限とするものと捉えられよう。一方、4号墳については、布留系の肥厚する口縁をなす甕が出土しており、須恵器との併行関係ではTK208型式以降には下らないものとみられる。主墳となる中1号墳については、前節において時期幅があることを示したところであり、1号墳に伴うとみる土器群は、いずれもTK208型式を下限とみるものである。また、出土した埴輪は小片を中心とした限られた資料ではあるが、野焼き焼成を基調とし、亀岡市篠町柘塚古墳と並び古相を示す資料であり、円

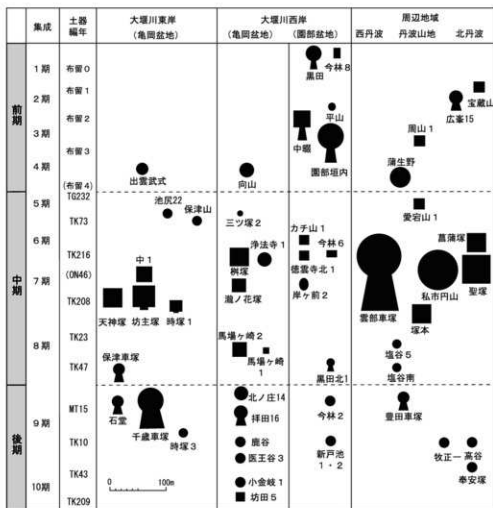
筒埴輪編年Ⅲ～Ⅳ期への変換期の様相を示すものである。

中古墳群の群形成は、古地と規模から最も南に位置し、規模の大きな1号墳の築造が契機となっていることは明らかである。円筒埴輪編年Ⅲ～Ⅳ期の変換期にある埴輪を出土する中1号墳の築造を契機とし、第2段階としてTK208型式段階に3・7・4・6号墳が相前後して築かれ、その後最も北に位置する2号墳がTK23型式期に築造されたと推定される。したがって、中古墳群は、古墳時代中期中葉～後葉にかけて相次いで築造されたものであり、古墳時代中期末には終息したとみることができよう。

④ 丹波地域における中1号墳の位置付け

中1号墳は、南丹波における中期首長系列墓における方墳として新たな一例を加えるものになった。最後に、丹波地域及び亀岡盆地の古墳変遷に位置付けておきたい。

古墳時代中期の丹波は、丹波最大の前方後円墳である篠山市雲部車塚古墳(全長140m)と綾部市私市円山古墳(全長81m、造り出し付き円墳)を除き、首長墳のほとんどが方墳であり、古墳築造に畿内政権から大きな規制を受けた地域として早くから指摘されてきた。こうした方墳が卓越する中期古墳の在り方については、近年では、山陰の出雲地方と並び特徴あるものとして、その



第78図 丹波地域主要古墳消長図

間係性が指摘されるところである。⁽⁸²⁰⁾丹波における方墳を採用する首長系列墓は、中期前半に、北丹波に綾部市聖塚古墳(一辺54m)と同菟圃塚古墳(一辺32m)が出現する一方、南丹波では規模が小さく、中期前半のⅢ期埴輪をもつ亀岡市栴塚古墳(一辺46m)が確認されるのみであった。大堰川東岸における首長墳の出現は、坊主塚古墳(一辺35m)をはじめとして、同天神塚古墳(一辺30m)、同時塚1古墳(一辺24m)があり、園部盆地では徳雲寺北1号墳(一辺18m)や神吉地区に塚本古墳(一辺36m)などが築造されるが、いずれも時期が下がり、中期後半に築造を開始することが判明している。

中1号墳が立地する大堰川東部では、ほ場整備による一連の調査で、前期古墳である出雲武式古墳(径19m、円墳)が確認され、前期の段階にすでに大堰川東部地域に有力な地域勢力基盤が形成されていたことが明らかとなっている。出雲武式古墳に後続する古墳は、中期前半においてはこれまで大堰川東部では確認されず、亀岡盆地最大の中期の方墳である坊主塚古墳の築造まで空白期があると考えられてきた。しかしながら、今回報告した中1号墳は、前節で述べたように、坊主塚古墳に先行する中期中葉の古墳として評価できることが明らかとなり、坊主塚古墳築造の前段階の空白を埋める古墳となった。

坊主塚古墳は、墳丘規模38m(二重周濠を含め68m)の規模を測る2段築成の方墳であり、墳丘規模28m(周濠を含め41m)の2段築成の方墳と推定される中1号墳とは大きな格差があるが、こうした古墳の規模だけでなく、古墳の立地の上でも中1号墳は出雲武式古墳と同様、丘陵斜面上に位置するが、坊主塚古墳の段階には平野部に移動しており、この間にも占地の画期がある。⁽⁸²¹⁾また、中1号墳と墳丘規模が近い時塚1号墳(一辺23m)は、最古式の「f」字鏡板などの馬具の出土から、坊主塚古墳と時期を隔てずに築造された古墳とされるが、平野部に占地して単独で築造されたものであり、主墳を中心に古墳群を形成する中1号墳の群形成の在り方はより古相を示していると言える。以上、副葬品の在り方だけでなく、古墳群の占地を含め、亀岡盆地東部の中期首長系列墓は、前期に出雲武式古墳が築かれたのち、中期中葉に中1号墳が築かれ、その後、中期後葉に坊主塚古墳から時塚1号墳へという築造過程を経たものとみることができよう。

丹波における中期古墳の全体的な動態からみると、傑出した規模を誇り畿内大王陵との関係性が指摘される篠山盆地の雲部車塚古墳は、近年の研究ではその築造時期はTK208型式を下らない古墳時代中期中葉に比定されており、坊主塚古墳にやや先行する時期とみられる。中1号墳の帰属時期も、雲部車塚古墳とはほぼ同時期の古墳と推定されるものである。古墳時代中期中葉は、古墳の墳形と規模に階層序列が最も反映し、複雑に進行した時期とされる。丹波という地域首長連合の頂点に河内王権と密接な関係をもち、傑出した規模を誇る雲部車塚古墳があることは疑いないが、北丹波の綾部市私市円山古墳や聖塚古墳などが墳形に規制を受けつつも、50mを超える大規模な墳丘を築く一方、おおよそ同時期にある中1号墳をはじめとする南丹波の古墳規模は小さく、その背景が問題となるところである。丹波各地域の古墳がどのような序列のもとに構成され畿内政権に組み込まれたのか、今回の発掘調査成果は、丹波の古墳時代中期における地域関係を考える上で貴重な資料となろう。

(高野陽子)

謝辞) 本報告の作成において、中古墳群の出土遺物に関して、一瀬和夫氏(京都橋大学)、辻川哲郎氏(公益財団法人滋賀県文化財保護協会)、藤井陽輔氏(大阪府教育委員会)から、また、AMS分析について小林克也氏(株バレオ・ラボ)から、有益なご教示を得た。記して、深く感謝いたします。

- 注1 高野陽子・黒坪一樹・武本典子「出雲遺跡第15次・16次・18次」(「京都府遺跡調査報告集」第166冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2016
- 注2 調査時には、東側の調査区を1区、西側の調査区を2区として調査を行ったが、整理の都合上、東側を4区、西側を5区として報告を行った。
- 注3 前掲注1
- 注4 前掲注1
- 注5 引原茂治・黒坪一樹ほか「車塚遺跡第7次」(「京都府遺跡調査概報」第123冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 注6 中澤勝「国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査 蔵垣内遺跡・出雲遺跡(中古墳群)」(「亀岡市文化財調査報告書」第76集 亀岡市教育委員会) 2008
- 注7 藤井整「出雲遺跡第9次」(「京都府埋蔵文化財調査報告書」平成19年度 京都府教育委員会) 2007
- 注8 中澤勝「国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査報告書 出雲遺跡第13次発掘調査 出雲武式古墳発掘調査 出雲遺跡第14次発掘調査」(「亀岡市文化財調査報告書」第78集 亀岡市教育委員会) 2009
- 注9 岡崎研一「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡(平成16・17年度) 池尻遺跡第12次」(「京都府遺跡調査概報」第123冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 注10 石崎善久「三日市遺跡第3次」(「京都府遺跡調査概報」第114冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 注11 中澤勝「国営農地再編整備事業関連遺跡発掘調査 出雲遺跡第8次ほか」(「亀岡市文化財調査報告書」第75集 亀岡市教育委員会) 2007
- 注12 前掲注1
出雲遺跡第15次調査において、丹波一宮出雲神社の西約100mの地点で、居住域の区画溝と推定される直線的に延びる大規模な溝を検出している。12世紀後半の溝と推定され、今回報告する出雲遺跡第19次調査2区で検出したS D201と近い時期の溝である。この溝については、「L」字状に屈曲する部分は確認されず、傾斜地に掘削されていることから、方形居館の溝の可能性は少ないと考えるが、輸入陶磁器をはじめとする多量の土器を出土しており、丘陵上方に有力者の居住域が近在すると推定される。出雲遺跡の遺跡範囲の南北で上層は大きく削平されていたが、幅4m以上の規模で長さ20m以上にわたって検出し、居住域の区画溝の可能性が高いと推定される。
- 注13 井上顕績「第1章亀岡の自然環境、第4節亀岡の地形誌」(『新修 亀岡市史本文編第一巻』亀岡市教育委員会) 1995
- 注14 山口卓也他「多紀郡西紀町 板井寺ヶ谷遺跡-旧石器時代の調査-」(「兵庫県文化財調査報告書」第96-1冊 兵庫県教育委員会 西紀・丹南町教育委員会) 1991
- 注15 有井広幸「成勝寺・岡崎遺跡」(「京都府遺跡調査概報」第86冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999

- 注16 中川和哉「按察使遺跡第5・6次」(『京都府遺跡調査概報』第116冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 注17 植村善博「自然環境」(『図説 丹波八木の歴史』第1巻 考古・地理・文化財編 八木町教育委員会) 2012
 植村善博「亀岡北東、神吉断層の活動履歴と神吉盆地の形成過程」(『史学論集 佛教学史学科30周年記念誌』佛教学史学科創設三十周年記念論集刊行会) 1999
 小滝 篤夫 加藤 茂弘 木谷 幹一「京都府南丹市、神吉盆地のボーリングコア中の大火山起源の中期更新世テフラとその意義」(『第四紀研究』The Quaternary research 50(1)35-48) 2011
- 注18 前掲注13
- 注19 高橋克壽「埴輪からみた丹波の方墳」(『平成28年度 京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書〈丹波編〉』京都府立京都学歴彩館) 2017
- 注20 川畑純「古墳時代甲冑の系統と授受」(『史林』第101巻第2号 史学研究会) 2018
 坊主塚古墳の甲冑の組み合わせには新古があることが指摘される。横別板鍬留短甲は、従来の衝角付冑や頸甲の型式による年代観よりも古く、授受の時期や従来の坊主塚古墳の編年の位置についても再検討の必要が求められる。
- 注21 高野陽子「南丹波における古墳時代中期集落の動向」(『古代学研究』201 古代学研究会) 2014
 田中清美「鳥足文タケキと百濟系土器」(『韓式系土器研究』5 韓式系土器研究会) 1994
- 注22 近藤義郎編「前方後円墳集成〈近畿編〉」山川出版社 1992
- 注23 平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注24 前掲注19
- 注25 福島孝行・石崎善久・筒井崇史ほか「時塚遺跡第6・8・10次」(『京都府遺跡調査報告集』第127冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008
- 注26 兵庫県立考古博物館編「雲部塚古墳の研究」(『兵庫県立考古博物館研究紀要』第3号 兵庫県立考古博物館) 2010

〈参考文献〉

- ・石崎善久・藤井整ほか「蒲生野遺跡第1次・蒲生野古墳群第1次」(『京丹波町文化財調査報告書』1 京丹波市教育委員会) 2017
- ・坂口英毅・下垣仁志・諫早直人・河野正調・川畑 純・金 宇大・土屋隆史・新宮領泰絵「綾部市聖塚古墳出土遺物報告—京都大学総合博物館所蔵資料—」(『古代学研究』197 古代学研究会) 2013
- ・辻健二郎「王に仕える人々」(『図説 園部の歴史』園部町・園部町教育委員会) 2005
- ・亀岡市教育委員会「新修 亀岡市史本文編第一巻」 1995

付編 1 亀岡市三日市遺跡堆積物の花粉分析

高原 光・河合貴則(京都府立大学生命環境科学研究科)

1. 試料

亀岡市三日市遺跡において2013年10月に第3トレンチ(第1図)から花粉分析用の堆積物を採取した。この堆積物試料は、深度0～263cm(盛土直下を深度0cmとした)をトレンチ断面から約5～20cm厚ごとのブロックとして採取し、トレンチ壁面よりも下層の深度269～423cmをシンウォールサンプラー(第2図)で、深度423～568cmをヒラー型ハンドボーラーで採取した。試料採取前の断面を第3図に示した。また、第4図には堆積物採取地における堆積物の柱状図を示した。

採取したブロックは空気に触れないように1つ1つをラップで巻き、シンウォールサンプラーで採取した堆積物試料の1回の掘削を単位としてロット番号を割り振り、各採取試料を空気に触れないようにラップとアルミ箔で包んだ上から塩ビ管で保護し、さらにビニールで包んだ状態で、それぞれ冷蔵庫内に保存した。また、ヒラー型ハンドボーラーで採取した堆積物試料の1回の掘削を単位としてロット番号を割り振り、各採取試料を空気に触れないようにラップで巻き、プラスチック容器に入れて冷蔵庫内に保存した。

採取した堆積物は深度0cmから568cmまでであるが、花粉の含有量が低いと考えられる層を除き、深度119～244cmの有機質含有量が多い層準について、15試料を花粉分析に供した。また、深度128.5～129.0cmの有機質粘土、深度223.5～224.5cmの植物遺体、深度239.5～240.0cmの植物遺体について、AMS放射性炭素年代測定を加速器分析研究所及びパレオ・ラボに依頼した。深度135～136cm及び深度160～191cm(分析には190～191cmの試料を供した)に認められた火山灰について、京都フィッシュントラックに分析依頼した。



第1図 第3トレンチ全景(2013年)



第2図 シンウォールサンプラーによるボーリング

2. 花粉分析法

1) 化学処理

- ①試料から1cm³を計量。
- ②各試料に一定濃度のマイクロシフェアー(直径約17μmの球形プラスチック)の懸濁



第3図 試料採取地点第3トレンチ断面
(京都府埋蔵文化財調査研究センター提供)

液を、マーカーとして1ml添加。

- ③10%の水酸化カリウム溶液処理(90℃、10分間)を行い、腐植酸の分解と試料の泥化。
- ④各試料を180μmのメッシュに通し、大型の植物遺体や鉱物などを除去。
- ⑤フッ化水素酸処理(70℃、10分間)を行い、シリカ状物質を溶解。
- ⑥アセトリシス処理(無水酢酸：濃硫酸=9：1の混酸液、100℃、3分)によって、有機物の除去。
- ⑦エタノールに脱水後、第三ブチルアルコール(TBA)に置き換え、シリコンオイルに封入。

2) 同定・計数

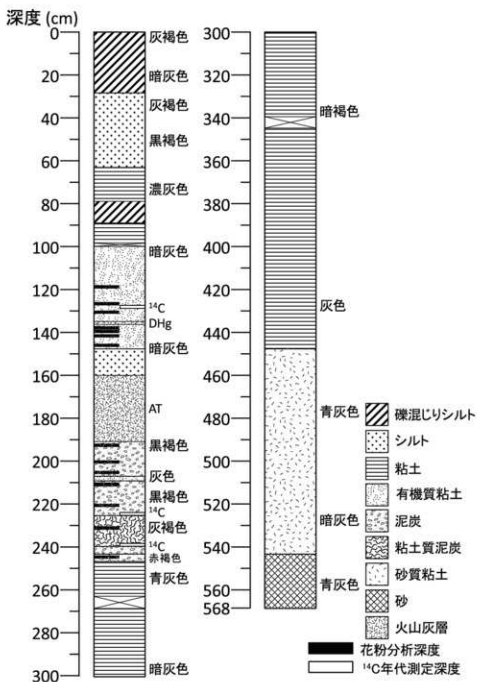
シリコンオイルに封入した分析試料を十分に攪拌し、一滴をスライドガラスに落とした後、カバーガラスをかけ、プレパラートを作成した。プレパラートの作成に関しては、化石花粉の識別がしやすいように、試料濃度をシリコンオイルで調節した。

作成したプレパラートについて、オリンパス製の光学顕微鏡(OLYMPUS BX40とOLYMPUS

BX50)を用いて検鏡し、化石花粉の同定、計数を行った。同定、計数には対物レンズ40~60倍、接眼レンズ10倍を使用した。

化石花粉の計数に際しては、偏りのないようにプレパラート全面を走査した。検鏡時には、プレパラートに含まれる花粉と胞子を同定、計数し、同時に出現したマーカーの個数も記録した。なお、1分析試料につき花粉総数が300個以上計数を行なった。

化石花粉の同定は、一般に種の段階まで同定することは困難な場合が多く、通常、科、属の段階での同定を行った。しかし、*Fagus crenata*や*Fagus japonica*など、種段階まで同定可能な分類群もある。また、*Carpinus*と*Ostrya*、*Castanea*と*Castanopsis*、*Ulmus*と*Zelkova*、*Celtis*と*Aphananthe*、*Typha*と*Sparganium*、*Haloragis*と*Myriophyllum*の花粉については、識別が困難なため、それぞれ*Carpinus/Ostrya*、*Castanea/Castanopsis*、*Ulmus/Zelkova*、*Celtis/Aphananthe*、*Sparganium/Typha*、*Haloragis/Myriophyllum*花粉として、同定した。同様に、*Taxaceae*、*Cephalotaxaceae*、*Cupressaceae*花粉については、*Cupressaceae* type花粉として合わせて同定した。なお、本研究において同定した各花粉胞子分類群について、学名と和名の対照表を表1に示した。



第4図 亀岡市三日市遺跡堆積物(花粉分析試料)柱状図

3. 結果

1) 放射性炭素年代測定結果

3層準でAMS放射性炭素年代測定を行った結果を表2に示した。いずれも暦年代で、深度128.5～129.0cmの有機質粘土は27,387 cal yr. BP、深度223.5～224.5cmの植物遺体は29,017cal yr. BP、深度239.5～240.0cmの植物遺体は30,156cal yr. BPであった。

2) 火山灰

深度135～136cmの火山灰層は、火山ガラス屈折率範囲の平均値と火山ガラス形態から、大山

東大山(上のホーキ)火山灰(以下、DHgと表記する)であると同定された。また、深度160~191 cmの火山灰層は、深度190~191cmを供試料として分析したところ、火山ガラス屈折率範囲の平均値と火山ガラス形態から、AT火山灰と同定された。本遺跡内の3区南側露頭面における、上記2層準に対比される試料についての火山灰分析結果について、檀原・山下・奥野による本報告書付編に詳細が示されている。それぞれの火山灰の降灰年代は、水月湖SG06コアに基づく、DHgが 28848 ± 196 cal yr. BP、ATが 30009 ± 189 cal yr. BPである(Smith et al, 2013)。

3) 花粉分析

堆積物中から検出された、各花粉分類群の花粉ダイアグラムを第5図及び第6図に示した。各花粉分類群の出現率は高木花粉総数を基数として百分率で示した。

花粉分析結果の各深度における高木花粉の出現率を基に、クラスター分析(CONISS (Grimm, 1987))を行い、深度244~191cmをKM1帯、深度146~119cmをKM2帯として、2つの花粉帯を設定した。さらに、それぞれをKM1-a亜帯(深度244~220cm)とKM1-b亜帯(深度220~191cm)、KM2-a亜帯(深度146~135cm)とKM2-b亜帯(深度135~119cm)に細分した。以下にこれらの花粉帯における花粉・孢子出現率の特徴について述べる。

KM1帯(深度244~191cm)

KM1帯の特徴は、Tsuga花粉、Pinus subg. Haploxyylon花粉、Cupressaceae type花粉とQuercus subg. Lepidobalanus花粉が比較的高率で出現することである。

高木花粉では、Tsuga花粉が約15~30%、Quercus subg. Lepidobalanus花粉が約10~20%、Pinus (Pinus subg. HaploxyylonとPinus undiff (五葉型と二葉型が区別困難な花粉)の合計)花粉が約20~30%で、比較的高い出現率である。Carpinus/Ostrya花粉は5%前後の出現率を示し、Cryptomeria花粉、Fagus crenata花粉は5%以下であるが連続的に出現する。

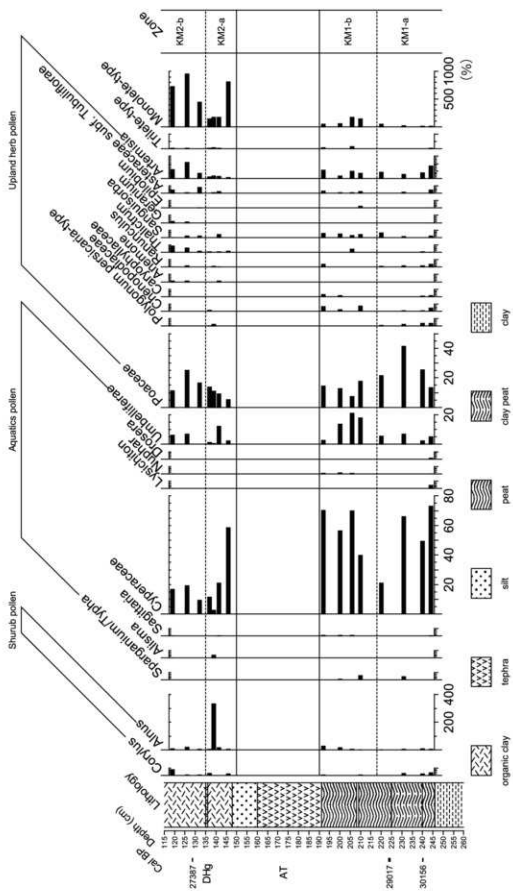
前半のKM1-a亜帯(深度244~220cm)では、これらに加えて、Cupressaceae type花粉が7~18%を示しているが、後半のKM1-b亜帯(深度220~191cm)には数%以下に減少する。

草本花粉では、Cyperaceae花粉が樹木花粉総数に対して20~70%の間で増減し、高い出現率を示す。Poaceae花粉は概ね15%以上を示すが、前半のKM1-a亜帯では、40%以上の高い出現率を示す。Umbelliferae花粉は13~12.8%で、KM1-a亜帯では、5%前後であったが、後半のKM1-b亜帯では、20%以上に増加する。Artemisia花粉は出現率5%前後の出現率で連続的に出現する。

KM2帯(深度146~119cm)

KM2帯の特徴は、高木花粉では、Abies、Picea、Tsuga、Pinusのマツ科針葉樹花粉が、約70~85%を示し、最も優勢であることである。

前半のKM2-a亜帯(深度146~135cm)では、マツ科針葉樹花粉が80%以上を示し、全花粉帯で出現率の高かったQuercus subg. Lepidobalanus花粉は数%程度の出現率に減少する。また、低率ながら連続的に出現していたFagus crenata花粉は断続的な出現となる。また、Cryptomeria花粉はほとんど出現しなくなる。



第6図 亀岡市三日市遺跡 低木・草本花粉ダイアグラム(各分類群の出現率は、樹木花粉総数に対する百分率で示した。)

表1 出現花粉・胞子分類群学名一和名対照表

グループ	学名	和名	グループ	学名	和名	グループ	学名	和名
TR	Abies	モミ属	SH	Corylus	ハシバミ属	UPHE	Sanguisorba	フレモコウ属
TR	Picea	トウヒ属	SH	Alnus	ハンノキ属	UPHE	Geranium	フウロソウ属
TR	Tsuga	ツガ属	SH	Rosaceae	バラ科	UPHE	Leguminosae	マメ科
TR	Pinus subg. Haploxyton	マツ属亜群単葉亜属	SH	Rhus	ウルシ属	UPHE	Impatiens	ワカバネソウ属
TR	Pinus subg. Diploxyton	マツ属亜群双葉亜属	SH	Ericaceae	ツツジ科	UPHE	Epilobium	アカバナ属
TR	Sciadopitys	コウヤマキ属	SH	Symplocos	ハイノキ属	UPHE	Asteraceae subf. Tubuliflorae	キク亜科
TR	Cryptomeria	スギ	SH	Ligustrum	イボタノキ属	UPHE	Artemisia	ヨモギ属
TR	Cupressaceae-type	ヒノキ科型	SH	Ilex	モチノキ属	UPHE	Asteraceae subf. Liguliflorae	タンポポ草科
TR	Salix	ヤナギ属	SH	Weigela	タニウツギ属			
TR	Pterocarya	サワグルミ属	AQVP	Sporangium/Typha	ミクリ属/ガマ属	VACR	Lycopodium inundatum-type	ヒカゲノカズラ属サチスギラ
TR	Juglans	オニグルミ属	AQVP	Alisma	ササモエダカ属			シノ属
TR	Carpinus/Ostrya	タマシダ属/アサダ属	AQVP	Sagittaria	オモモカ属	VACR	Lycopodium serratum-type	ヒカゲノカズラ属トウゲシノ
TR	Carpinus tchonoskii-type	イヌシダ	AQVP	Cyperaceae	カヤウリグサ科			シノ型
TR	Betula	カハノキ属	AQVP	Lysichiton	ミスバシヨウ属	VACR	Lycopodium clavatum-type	ヒカゲノカズラ属ヒカゲノカ
TR	Fagus crenata	ブナ	AQVP	Nuphar	コウホネ属			シノ型
TR	Fagus japonica	イヌブナ	AQVP	Drosera	モウセンゴケ属	VACR	Trilete	三溝型胞子
TR	Quercus subg. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	AQVP	Umbelliferae	セリ科	VACR	Monolete	単溝型胞子
TR	Quercus subg. Cyclobalanopsis	コナラ属/カガシ亜属	AQVP	Menyanthes	ミツガシロ属			
TR	Castanea/Castanopsis	クリ属/シイ属						
TR	Ulmus/Zelkova	ニレ属/ケヤキ属	UPHE	Ponaceae	イネ科			
TR	Hemipetes	エノキ属/ムクノキ属	UPHE	Liliaceae	ユリ科			
TR	Celtis/Aphananthe	キハダ属	UPHE	Polygonum perisperm type	サナエタデ節			
TR	Philodendron	カエデ属	UPHE	Chenopodiaceae	アカザ科			
TR	Acer	トナリノキ属	UPHE	Caryophyllaceae	ナナシコ科			
TR	Aesculus	シナノキ属	UPHE	Anemone	イネリンソウ属			
TR	Tilia	ウツギ科	UPHE	Ranunculus	キンボウケ属			
TR	Araliaceae	ワコキ科	UPHE	Thalictrum	カタマツソウ属			
TR	Fraxinus	トネリコ属						

TR: 高木, SH: 低木, AQVP: 低木, AQP: 水生植物, UPHE: 陸上草本, VACR: シダ植物

後半のKM2-b亜帯(深度135~119cm)では、マツ科針葉樹花粉の優勢には変化ないが、Betula花粉の出現率が増加し20%近くに達する。

低木花粉では、Alnus花粉が深度139cmでは330%まで急増する。

草本花粉では、Cyperaceae花粉はKM2-b亜帯の下層の60%から中層に向かって減少し10~20%となる。Poaceae花粉はKM2-a亜帯からKM2-b亜帯にかけて約5%から25%まで上層に向かって増加する。Artemisia花粉は後半のKM2-b亜帯で増加し、10%に達する胞子では、Monoletesが150~950%に達し、特に後半のKM2-b亜帯で極めて高い出現率を示す。

4. 考察

第四紀の後半には、氷期-間氷期変動が約十数万年の周期で繰り返されてきたことが、海洋底堆積物の有孔虫の殻や、南極やグリーンランドの水床の酸素同位体比などの研究によって明らかにされている(大河内、2008など)。最終氷期は、酸素同位体ステージ(Marine Isotope Stage: MIS)、MIS 5dからMIS 2にあたる。その中でも、MIS 3は約60,000年前から約30,000年前の亜間氷期にあたり、現在よりもやや涼しい時期であったといわれている。また、亜氷期であるMIS 2はAT火山灰が降灰した約30,000年前から約12,000年前に相当する。2万数千年前頃の最終氷期最盛期(Last Glacial Maximum: LGM)は、最終氷期で最も寒冷で乾燥していたといわれている。

亀岡市三日市遺跡堆積物について、実施した花粉分析層準は、火山灰(DH g火山灰、AT火山灰)分析や放射性炭素年代値(表2)から3万年前前後に相当し、この花粉分析結果は、MIS 3の終盤からMIS 2の初期の植生変遷を示しているものと考えられる。

以下、花粉分析結果に基づき、MIS 3の終盤からMIS 2の初期の植生変遷について考察する。

1) 30000年前直前(AT降灰前)-MIS3

結果に示したKM1-a亜帯の花粉組成は、Abies, Picea, Tsuga, Pinus subg. Haploxylyonのマツ科針葉樹花粉と前半ではCupressaceae type花粉、さらにQuercus subg. Lepidobalanusなどの落葉広葉樹花粉の出現率が比較的高いことから、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属(五葉松型)の常緑針葉樹とヒノキ科、イチイ科、イヌガヤ科の樹木、さらに、コナラ亜属、クマシデ属、ブナなどの落葉広葉樹が比較的多い植生であったと考えられる。ヒノキ科等の樹木がどの樹種に由来するかは明らかでない。今後、葉や種子などの大型植物遺体分析による種段階の同定に期待される。

同じ時期のこのような植生は、亀岡盆地の北に位置する神吉盆地(標高335m)の堆積物の花粉

表2 亀岡市三日市遺跡堆積物(花粉分析用試料)放射性炭素年代結果

試料名	深度 (cm)	測定試料	14C年代 (yr. BP)	暦年代 (2σ) (cal yr. BP) * 3	Median probability (cal yr. BP)	測定番号
KCSI3-1-129	*1 128.5-129.5	有機質粘土	23070 ± 70	27194-27563	27387	PLD-37494
KCSI3-1-224	*1 235.4-224.5	植物遺体	25000 ± 70	28758-29324	29017	PLD-37495
KCS-1-240	*2 240-240.5	植物遺体 (種子)	25910 ± 100	29715-30576	30156	IAAA-141619

*1は公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターによる測定、*2は京都府立大学による測定

*3 Calib Rev 7.1.0 (Stuiver, M. and Reimer, P.J. 1993, Radiocarbon, 35, 215-230.) によって校正

分析からも認められている(Takahara et al, 2000; Hayashi et al, 2009)。このMIS3期においては、近畿地方の日本海側ではスギが優占している(Takahara and Takeoka, 1992; 高原ほか, 1999)。MIS3の植生は、西日本では、ヒノキ科等やスギが、東日本ではマツ科針葉樹が顕著であるが、両者共にコナラ亜属、ブナなどの落葉広葉樹の出現率が高く、落葉広葉樹の多い植生であったことが指摘されている(Takahara & Hayashi, 2015)。

本報告におけるKM1-a亜帯において、マツ科針葉樹、ヒノキ科型花粉とともに落葉広葉樹花粉の出現率が比較的高く、KM1-b亜帯においてヒノキ科型花粉が減少することは、この時期は、MIS3期の終末に対応すると考えられる。

2) 30,000年前以降(AT降灰後) - MIS2

AT降灰後の花粉組成は、マツ科針葉樹が80%以上を示し、落葉広葉樹のコナラ亜属は減少する。これらのことは、MIS3からMIS2への寒冷、乾燥化に対応した植生変遷であると考えられる。ATの降灰後は、各地で、さらにマツ科針葉樹林が発達し最終氷期最盛期の針葉樹林へと移行していく。このAT降灰後の植生変化は、辻・小杉(1991)が指摘したように、AT噴火による森林植生の針葉樹林化の促進によって起こった可能性が考えられる。

DHg火山灰降灰後のKM2-b亜帯では、マツ科針葉樹に加えて、カバノキ属花粉が増加している。このような、花粉組成は、日本列島各地で認められている最終氷期最盛期(LGM)の植生を示しており、このKM2-b亜帯の約27,000年前の年代ともほぼ調和している。

草本花粉では、陽生陸上草本であるイネ科、ヨモギ属花粉が高い出現率を示すことから、森林は疎林状あるいはパッチ状に生育していたと考えられる。

以上述べたように、亀岡市三日市遺跡における堆積物の花粉分析の結果、亀岡盆地において、約30,000年前のAT火山灰降灰以前には、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束東亜属(五葉松型)の常緑針葉樹とヒノキ科の樹木、さらに、コナラ亜属、クマシデ属、ブナなどの落葉広葉樹が比較的多い植生が広がっていたが、寒冷化と共に、マツ科針葉樹が増加し、AT降灰以降には、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束東亜属(五葉松型)の常緑針葉樹とカバノキ属からなる針葉樹中心の植生が発達したことが明らかになった。

謝辞

本研究試料採取の機会を与えていただきました公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター及び、試料採取に多大なご協力をいただいた、京都府立大学 佐々木高子博士、植苗幸司氏、滋賀県立琵琶湖博物館 林竜馬博士に、心から御礼申し上げます。

なお、この研究は、日本学術振興会科学研究費(代表者：高原 光、課題番号：26292087)の一部を用いて実施しました。

引用文献

- Calib Rev 7.0.2(2013) CALIB Radiocarbon Calibration, <http://calib.qub.ac.uk/calib/>
- Grimm E. C. (1987) CONISS: A Fortran 77 program for stratigraphically constrained cluster analysis by the method of incremental sum of squares. *Computer & Geoscience* 13: 13-35.
- Hayashi, R., Takahara, H., Tanida, K., Danhara, T. (2009) Vegetation response to East Asian monsoon fluctuations from the penultimate to last glacial period based on a terrestrial pollen record from the inland Kamiyoshi Basin, western Japan. *Palaeogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology* 284: 246-256.
- 大河内直彦(2008) チェンジング・ブルー—気候変動の謎に迫る。346+56pp, 岩波書店
- Smith, V. C., Staff, R. A., Blockley, S. P. E., Ramsey, C. B., Nakagawa, T., Mark, D. F., Takemura, K., Danhara, T., and Suigetsu 2006 Project Members (2013) Identification and correlation of visible tephra in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronising of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. *Quaternary Science Reviews* 67: 121-137.
- Stuiver, M., Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C data base and revised CALIB 3.0 ^{14}C age calibration program. *Radiocarbon* 35: 215-30.
- Takahara, H. and Hayashi, R. (2015) Palaeovegetation during Marine Isotope Stage 3 in East Asia. In *The Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Palaeolithic Asia* (edited by Yousuke Kaifu, Masami Izuhou, Ted Goebel, Hiroyuki Sato, and Akira Ono), 314-324. Texas A&M Press
- 高原 光・植村善博・壇原 徹・竹村恵二・西田史朗(1999) : 丹後半島大フケ湿原周辺における最終氷期以降における植生変遷. *日本花粉学会会誌* 45 : 115-129.
- Takahara, H. and Takeoka, M. (1992) : Postglacial vegetation history around Torihama, Fukui Prefecture, Japan. *Ecological Research* 7: 79-85.
- Takahara, H., Uemura, Y. and Danhara, T. (2000) : The vegetation and climate history during the early and mid last glacial period in Kamiyoshi Basin, Kyoto, Japan. *Jpn. J. Palynology* 46 : 133-146.
- 辻 誠一郎・小杉正人(1991) 始良Tn火山灰(AT)噴火が生態系に及ぼした影響. *第四紀研究* 30 : 419-426.

付編 2 亀岡市三日市遺跡の火山灰分析

檀原 徹・山下 透・奥野博子
(京都フィッシュン・トラック)

1. 試料

分析試料は、2015年9月18日午前、三日市遺跡調査区の3区南側露頭面より、京都府立大学高原光教授、武庫川女子大学佐々木尚子講師、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター高野陽子氏立ち合いのもとに、㈱京都フィッシュン・トラック檀原徹が採取した(第2～4図参照)。火山灰層は、暗灰色の粘土層中に20cmの間隔をもち、上下2層準に挟まれる。そのうち下位のもの(試料名:KCS15-Lower 1)は層厚が22cmの灰白色のガラス質火山灰層である。本火山灰の下部10cmは上方細粒化した中粒～細粒のガラス質火山灰で、下半部が淡緑色～黄褐色を呈する。その上位に厚さ2cmの粘土質細粒の白色層が載り、さらに上部10cm(試料名:KCS15-Lower 2として参考までに採取)は細粒の灰白色ガラス質火山灰層で、下部層で観察される粒径変化は認められず、再堆積層と野外では観察された。一方これらのガラス質火山灰層の上方20cmの層準には、黄白色の細～中粒軽石質火山灰層(試料名:KCS15-Upper 1)がmax 2cm厚でボール状に離散して粘土層中に含まれる。本調査ではこれら上下2層準の火山灰を採取し、以下に述べる方法で分析した。

2. 分析方法

以下に処理工程について説明を加える。

1) 前処理

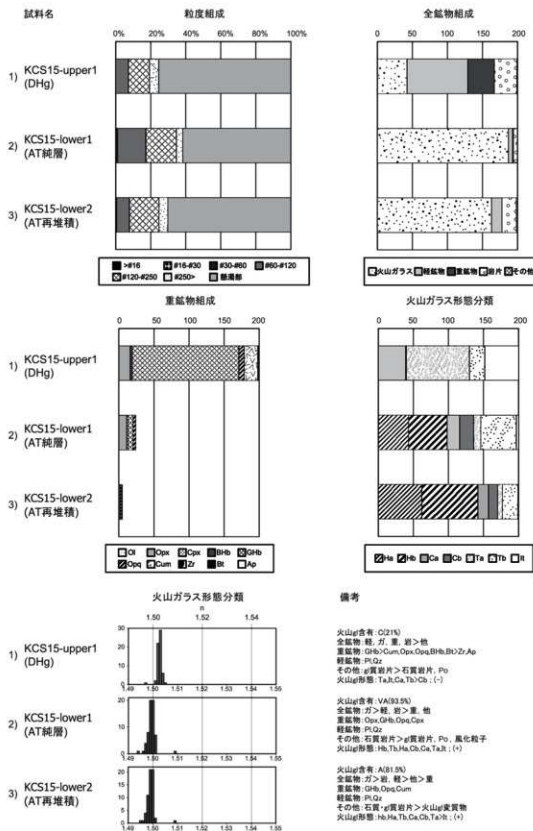
まず半湿状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、21ピーカー中で数回水替えしながら水洗し、そののち超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を濃度1～2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別(60,120,250mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120-250mesh(1/8-1/16mm)粒径試料を比重分別処理を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石薄片を作成した。

2) 全鉱物組成分析

前述の封入薄片を用い、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の5項目について、1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

3) 重鉱物分析

主要重鉱物であるカンラン石(Ol)・斜方輝石(Opx)・単斜輝石(Cpx)・褐色普通角閃石(Bhb)・



第1図 亀岡市三日市遺跡・車塚遺跡のテフラ分析結果一覧表



写真1

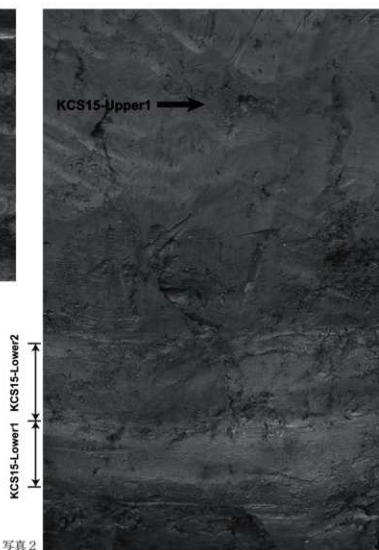


写真2

第2図 火山灰採取露頭及び採取位置

緑色普通角閃石 (Ghb)・不透明(鉄) 鉱物 (Opq)・カミングトン閃石 (Cum)・ジルコン (Zr)・黒雲母 (Bt)・アバタイト (Ap) を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有の少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため重液処理過程で除外される危険性がある。さらに風化による比重変化や粒径の違いが分析結果に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

4) 火山ガラス形態分類

前処理で作成した検鏡用薄片中に含まれる火山ガラス形態を、吉川(1976)^(R1)に準拠してH:扁平型(Ha, Hb)、C:中間型(Ca, Cb)、T:多孔質型(Ta, Tb)に分類した。またこれらの形態に属さないものを、It:不規則型として一括示した。なお含有率を測定するため200個の粒子を測定した。その過程で着色したもののヤスコリア質のもの及び亀ノ甲型と呼ばれる特異な形態をもつ火山ガラスの有無もチェックした。さらに火山ガラスの水和現象を観察し、山下・檀原(1995)^(R2)に基づき水和(hydration)やスーパーハイドレーション(super hydration)の程度についても可能な限り半定量的に記載した。

5) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120-250mesh(1/8-1/16mm)粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS)^(R3,4)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり50個以上の火山ガラス片を測定するが、火山ガラスの含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

温度変化型屈折率測定法は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算温度から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名(Series及びSample Name)が表示され、次に測定者名、Materialは対象鉱物名、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。カッコ内の式は浸液温度tから浸液の屈折率を算出するのに用いたものである。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count,min,max,range,mean,st.dev,skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。*1つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

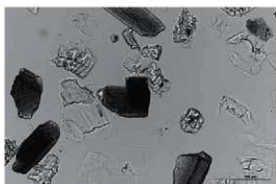
6) 顕微鏡写真撮影

前処理で作成された岩石薄片を用い、顕微鏡写真撮影を行った(第3図)。撮影画面の設定は、分析結果を最もよく反映するように火山ガラス・軽鉱物・重鉱物・岩片・その他の粒子がバランスよく取まるよう配慮した。しかしすべての要素を撮り込むことは困難であり、しばしば火山ガラスや重鉱物など特定の粒子を選択して撮影せざるをえなかったことを、お断りしておきたい。

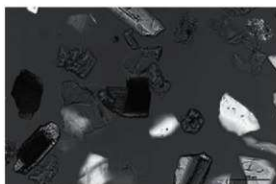
なお、重鉱物のように特徴的な色や晶癖をもつものは、通常の明視野撮影のみからでも識別は容易であるが、無色透明な火山ガラスや軽鉱物結晶は識別が難しい。そのため巻末の岩石用偏光顕微鏡を用いた記録写真では、左右2枚の写真を対照することで、火山ガラスや軽鉱物の判定を写真上で行えるよう工夫しており、その要領を以下に略記する。

一般に火山ガラスは無色透明であり、同一粒子を右側の写真上で追うと、モノクロ写真では濃淡はあるが背景とほぼ同様な無地(カラー写真では赤紫あるいは青紫色)を示す場合には、ほぼ火

KCS15 upper1

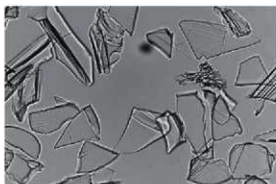


Open nicol



Sensitive color (Cross nicol + gypsum plate)

KCS15 lower1



Open nicol



Sensitive color (Cross nicol + gypsum plate)

第3図 顕微鏡写真

山ガラス(光学的等方体)と判断してよい。しかし左の画面で無色透明であっても、カラー写真の場合には右の画面で虹色や白・黄・青など紫以外の色調を示すものは光学的異方体であり、一般に鉱物と判断してよい。このように左右の画面を見比べることにより、多くの火山ガラスや鉱物の識別が可能である。

3. 結果と考察

分析結果は、前掲の第1図に集約して示されるほか、テフラ分析結果表にカード形式で表示される。これらの分析結果をもとに以下に試料ごとにテフラ対比を行う。

1) KCS15-Upper1

珪長質pm型ガラスを含む結晶質テフラ層である。構成粒子は斜長石と石英からなる軽鉱物が約43.5%と最も卓越し、火山ガラス21%、重鉱物19%及びガラス質・石質の岩片16%からなる。火山ガラスは屈折率 $n=1.5013-1.5049$ (モード: 1.503)を示す軽石型で、水和層厚が4～8 μ m程度を示す。重鉱物は緑色普通角閃石(GHb)が76.0%と多く、カミングトナイト(Cum)が9.5%、斜方輝石(Opx)が8%と続き、その他に不透明鉱物(Opq)4%、褐色普通角閃石(BHb)が1.5%、黒雲母(Bt)1%とジルコン(Zr)・アパタイト(Ap)を含む。本テフラ層の20cm下位にAT純層がある

ことから、本テフラは大山系の大山東大山(DHg)か大山笹ヶ平(DSs)テフラのどちらかに対比される可能性が高い。このうち後者のDSsは給源の大山地域ではAT層の直上に接して位置し、かつ火山ガラスの大部分がマイクロライトや塵状物質を多く含むIt型ガラスで構成されるため、対比の候補から除外される。そのため残るDHgテフラに対比される。

ちなみに本テフラの最新の年代値は、水月湖(Lake Suigetsu SG06)^(註6)での研究(Smith et al.2013)による28,846±196 cal.Ka BPである。

2) KCS15-Lower1

典型的な柱長質バブル・ウォール型火山ガラスを主とする、ガラス質テフラである。構成粒子のうち93.5%は火山ガラスからなり、その他の粒子は斜長石と石英で構成される軽鉱物3.0%、岩片3.0%及びわずかに0.5%を占める重鉱物からなる。このうちテフラ対比について最も重要なものは火山ガラスの特徴である。形態的には前述のようにバブル・ウォール型を主とするが、軽石型(Ta,Tb型)を30%以上含み、水和層厚が10 μm程度である。そのため20 μm以上の厚みをもつガラス片では内部に未水和のコアが観察され、テフラ対比上で重要な情報となる。火山ガラスの屈折率は $n=1.497-1.501$ (モード:1.499-1.500)でよく集中する。以上の特徴のみからでも、近畿圏内で該当するテフラはATのみに限定される。

なお、ATテフラの最新の年代値は上述のSmith et al.(2013)^(註6)によるもので、30,009±189 cal.Ka BPである。

- 注1 吉川周作「大阪層群中の火山灰層について」(『地質学雑誌』82巻第8号 1976) p497-515.
- 注2 山下透・檀原徹「火山ガラスのhydrationとsuper hydration-日本の広域テフラについて」(『フィクション・トラックニュースレター』第8号 1995) p41-46.
- 注3 横山卓雄・檀原徹・山下透「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」(『第四紀研究』第25巻第1号 1986) p21-30.
- 注4 Danhara T., Yamashita T., Iwano H. and Kasuya M. 「An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method.」(『Quaternary International』13/14 1992) p89-91.
- 注5 檀原徹「温度変化型屈折率測定法」(日本第四紀学会編『第四紀試料分析法2.研究対象別分析法』東京大学出版会 1993) p149-157
なお温度変化型屈折率測定装置 RIMSTMと測定方法は、PAT.1803336,1888831で特許登録及び商標登録されています。
- 注6 Smith, V. C., Staff, R. A., Blockley, S. P. E., Ramsey, C. B., Nakagawa, T., Mark, D. F., Takemura, K., Danhara, T., and Suigetsu 2006 Project Members (2013) Identification and correlation of visible tephtras in the Lake Suigetsu SG06 sedimentary archive, Japan: chronostratigraphic markers for synchronising of east Asian/west Pacific palaeoclimatic records across the last 150 ka. Quaternary Science Reviews 67

付表1 保存用試料一覧表

No.	試料名	処理生試料 湿潤重量 (g)	篩別試料重量 (g)				色調判定	備考
			> 1/4 mm	1/4- 1/8 mm	1/8- 1/16 mm	< 1/16 mm		
1	KCS15-upper1 (DHg?)	25.2	0.008	1.819	3.033	1.339		
2	KCS15-lower1 (AT純層)	30.5	0.344	4.917	5.342	1.080		
3	KCS15-lower2 (AT再堆積)	30.0	0.179	2.165	5.081	1.481		

注：※ (1) 表中の数字は保存試料の重量を示す。

(2) 1/8 - 1/16 段階の保存試料は、一部岩石薄片作成に使用したため
実際よりわずかに少なくなっている。

(3) 色調判定は、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修、1970）による。

付表2 火山ガラスの屈折率測定結果一覧表

No	試料名	屈折率範囲 ¹⁾		屈折率 平均値 ²⁾	測定 個体数 ³⁾	屈折率 最頻値 ⁴⁾	火山ガラス 形態 ⁵⁾	備考 ⁶⁾
		最小	最大					
1	KCS15-upper1 (DHg?)	1.4972 1.5013	1.4972 1.5049	1.4972 1.5027	1 60	— 1.503	H T, II, C	gl含有: C(21%) 水和層薄4～8umが主。水和飽和含 量高: GHb+Cum, Opx, Cpx, Bt, Il+Zr, Ap 軽鉱物: Pl, Qz
2	KCS15-lower1 (AT純層)	1.4939 1.4964 1.5091	1.4939 1.5010 1.5091	1.4939 1.4992 1.5091	1 60 1	— 1.499-1.500 —	It H, T, C C	gl含有: VA(93.5%) 水和飽和(コア残る破片微量) 重鉱物: Opx, Ghb, Opx, Cpx 軽鉱物: Pl, Qz
2	KCS15-lower2 (AT再堆積)	1.4950 1.4961 1.5090	1.4950 1.5006 1.5090	1.4950 1.4991 1.5090	1 60 1	— 1.499-1.500 —	It H>T, C>It C	gl含有: A(81.5%) 水和飽和(コア残る破片微量) 重鉱物: GHb, Opx, Cum 軽鉱物: Pl, Qz

1) 屈折率範囲: 個体ごとの屈折率測定値を小数点第4位まで表示する。ヒストグラム上で完全に分離され、異なるグループとみなされるものは、グループごとに表示する。未水和部の測定値には下線を付す。

2) 屈折率平均値: 同一グループに属するとみなした場合の平均屈折率値。下線は未水和部の値。

3) 測定個体数: 測定対象とした個体数。

4) 屈折率最頻値: ヒストグラム中で最頻値を判断し、四捨五入により少数点第3位で表示する。
(ex. 1.500: 1.4995≦nd<1.5005)

5) 火山ガラス形態: 吉川(1976)に準拠し、形態をH:扁平型, C:中間型, T:多孔質型に分け、定性的に示す。
いずれにも属さないものをIt:不規則型。鉱物表面に付くものを付着として表示する。

6) 備考: 火山ガラス含有、水和・超水和の程度を定性的に示す。また、その試料固有の特徴について記す。
火山ガラス含有は、VA(≧90%), A(≧50%), C(≧10%), R(≧5%), VR(≧1%), VVR(≧1%), N(0%)の
7段階に分類する。水和はhydration、超水和はsuper-hydrationの意。

付表3 テフラ分析結果表(1)

分析試料名: 1. KCSI5 - Upper1

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	その他	合計	備 考
42	87	38	32	1	200	火山 g l : 珪長質 pm 型主。 大山東大山 (DHg) テフラ 軽鉱物: pl・Qz。 重鉱物: Ghb,Cum,Opq,Opq 主。BHb,Bt,Zr,Ap 含む。 岩 片: g 質 > 石質。 その他: Po。
21.0	43.5	19.0	16.0	0.5	100.0	

bw: ハ'フ'のウ'ル、pm: 軽石、seo: スコリア、pl: 斜長石、Qz: 石英、af: ア'カ'長石、Kf: カ'長石、chal: カ'セ'ニ、
Px: プラント・ホ'ニ

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	16	-	3	152	8	19	0+	2	0+	200	
0.0	8.0	0.0	1.5	76.0	4.0	9.5	tr	1.0	tr	100.0	

Ol: オ'ラン石、Opx,Cpx: 斜方、単斜輝石、BHb,GHb: 緑色・褐色角閃石、Opq: 不透明鉱物、
Cum: カ'シ'ト'閃石、Zr: ジ'ロ'ン、Bt: 黒雲母、Ap: ア'パ'イト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付 gl	備 考
-	-	39	1	90	22	48	200	-	珪長質 pm 型 > It 型。It 型は microlite や微気泡などを含む。dusty な pm 型やフ ワ'ク'状 gl。
0.0	0.0	19.5	0.5	45.0	11.0	24.0	100.0		

H: 扁平、C: 中間型、T: 多孔質、It: 不規則型、incl: イ'ン'ク'ル'ジ'ョン、devt: 失透化、Rl: 屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4972	1.4972	1.4972	1	-	H ← AT
1.5013	1.5049	1.5027	60	1.503	T,It,C ← DHg

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類
最小	最大				
					測定対象外

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 \approx \gamma$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_2 < \gamma)$ 、
斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (a < n_1 < \beta)$

付表4 テフラ分析結果表(2)

分析試料名: 2 KCS15 - Lower1

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	その他	合計	備 考
187	6	1	6	0+	200	火山 gl : 珪長質 bw>pm 型主。 AT 純層。 軽鉱物: pl・Qz。 重鉱物: Opx,GHb,Opq,Cpx。 岩 片: 石質>gl 質。
93.5	3.0	0.5	3.0	tr	100.0	その他: Po・風化粒子。

bw: バウワール、pm: 軽石、scs: スコリア、pl: 斜長石、Qz: 石英、af: フォカ長石、Kf: カ長石、chal: チャール、Pcx: プラント・カーネル

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	11	2	-	7	4	-	-	-	-	24	
0.0	45.8	8.3	0.0	29.2	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	

Ol: オlivin石、Opx/Cpx: 斜方、単斜輝石、BHb/GHb: 緑色・褐色角閃石、Opq: 不透明鉱物、Cum: カムチン閃石、Zr: ジルコン、Bt: 黒雲母、Ap: アパタイト

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付 gl	備 考
43	55	18	20	10	51	3	200	+	珪長質 bw>pm 型。水和層厚 $\approx 10 \mu m$ 。 亀ノ甲 gl 含む。
21.5	27.5	9.0	10.0	5.0	25.5	1.5	100.0		

H: 扁平、C: 中間型、T: 多孔質、It: 不規則型、incl: インクルージョン、devt: 失透化、RI: 屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4939	1.4939	1.4939	1	-	It ← It
1.4964	1.5010	1.4992	60	1.499 - 1.500	H.T.C ← AT
1.5091	1.5091	1.5091	1	-	C ← C

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類
最小	最大				
					測定対象外

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 \approx \gamma$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_2 < \gamma)$ 、斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (a < n_1 < \beta)$

付表5 テフラ分析結果表(3)

分析試料名: 3. KCS15 - Lower2

全 鉱 物 組 成

火山 ガラス	軽 鉱物	重 鉱物	岩片	その他	合計	備 考
163	15	0+	20	2	200	火山 gl 1: 珪長質 bw > pm 型。 AT (再堆積層か)。 軽鉱物: pl・Qz。 重鉱物: 微量の Gfb, Opq, Cum。
81.5	7.5	tr	10.0	1.0	100.0	岩片: 石質 > gl 質。 その他: 火山 gl 変質物。

bw: ハ'フ'のウ'ー'ル, pm: 軽石, sco: スコ'ア, pl: 斜長石, Qz: 石英, af: ア'カ'長石, Kf: カ'長石, cha: ｶ'ｽ'ニ'。
Pex: プ'ラ'ント'・'ホ'ー'ル

重 鉱 物 分 析

Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bt	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHb	GHb							
-	-	-	-	2	2	1	-	-	-	5	
				tr	tr	tr				tr	

Ol: オ'ラ'石, Opx, Cpx: 斜方、単斜輝石、BHb, GHb: 緑色・褐色角閃石、Opq: 不透明鉱物、
Cum: カ'シ'ト'閃石、Zr: ズ'ル'コ'ン、Bt: 黒雲母、Ap: ア'ピ'タ'イ

火山ガラス形態分類

Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It	合計	色付 gl	備 考
62	80	15	13	7	22	1	200	+	珪長質 bw > pm 型。下位の純層に比較して bw 型の含有が増大→再堆積の効果。亀/甲 gl 含む。
31.0	40.0	7.5	6.5	3.5	11.0	0.5	100.0		

H: 扁平、C: 中間型、T: 多孔質、It: 不規則型、incl: イ'ン'ク'ル'ジ'ョ'ン、devt: 失透化、RI: 屈折率

火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最小	最大				
1.4950	1.4950	1.4950	1	-	It
1.4961	1.5006	1.4991	60	1.499 - 1.500	H>T,C>It ← AT
1.5090	1.5090	1.5090	1	-	C

鉱物の屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測 定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	鉱物の種類
最小	最大				
					測定対象外

斜方輝石: 劈開片上での最大屈折率 $n_2 \approx \gamma$ 、角閃石 $n_2 (\beta < n_2 < \gamma)$ 、斜長石: 劈開片上での最小屈折率 $n_1 (\alpha < n_1 < \beta)$

付編3 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

1. はじめに

京都府亀岡市の三日市遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、3区の断ち割り南壁(ブロックA)から採取された試料3点(試料No.1～3: PLD-37490～37492)、2区の南壁SD35(ブロックB)植物遺体包含層から採取された試料1点(試料No.4: PLD-37493)、火山灰層DHgより上位の層から採取された試料1点(試料No.KCSI3-1-129: PLD-37494)、AT降灰層準より35cm下の泥炭層から採取された試料1点(試料No.KCSI3-1-224: PLD-37495)の、計6点である。

3区の断ち割り南壁(ブロックA)から採取された試料はいずれもAT火山灰降下直後の試料であり、試料No.1が最も上層、試料No.3が最も下層となる。そのため想定年代は、AT火山灰(30000～29000 cal BP: 工藤, 2012)より新しいと考えられる。試料No.4の出土したSD35は発掘調査所見では縄文時代の流路と考えられている。試料No.KCSI3-1-129は火山灰層DHg(29044-28652 cal BP: Smith et al., 2013)より上位の層から採取されている。試料No.KCSI3-1-224はAT降灰層準より35cm下の泥炭層から採取されている。

試料No.1～3、KCSI3-1-129は、黒色の有機質土壌を用いて、ヒューミンを対象試料として測定を行なった。試料No.4は生の種実を使用した。試料No.KCSI3-1-224は生の植物遺体を使用した。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1・2に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、

^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が98.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、地点ごとに層位順に結果を整理する。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD37490	試料No.1 調査区：平成27年度三日市道跡3区 位置：断ち割り南壁 遺物No.ブロックA	種類：土塊(ヒューミン) 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD37491	試料No.2 調査区：平成27年度三日市道跡3区 位置：断ち割り南壁 遺物No.ブロックA	種類：土塊(ヒューミン) 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD37492	試料No.3 調査区：平成27年度三日市道跡3区 位置：断ち割り南壁 遺物No.ブロックA	種類：土塊(ヒューミン) 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD37493	試料No.4 調査区：平成27年度三日市道跡2区 位置：南壁 遺構：SD35 層位：植物遺体包含層 遺物No.ブロックB	種類：生の種実 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD37494	試料No.KCSI3-1-129 平成25年度三日市道跡第3トレンチ 層位：火山灰層DHgより上位の層	種類：土塊(ヒューミン) 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD37495	試料No.KCSI3-1-224 平成25年度三日市道跡第3トレンチ 層位：AT降灰層より35cm下の泥炭層	種類：生の植物遺体 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)

表2 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正前年代 ($\text{yBP} \pm 1 \sigma$)	^{14}C 年代 ($\text{yBP} \pm 1 \sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に校正した年代範囲		^{13}C 年代を暦年年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-37490 試料 No. 1	21.55 \pm 0.20	19281 \pm 51	19200 \pm 50	21119-21151 cal BC (96.2%)	21332-21918 cal BC (95.6%)	23068-23200 cal BP (98.2%)	23481-22997 cal BP (95.6%)
PLD-37491 試料 No. 2	27.71 \pm 0.11	16661 \pm 43	16605 \pm 35	18364-18884 cal BC (96.2%)	18306-17997 cal BC (95.6%)	20213-20403 cal BP (98.2%)	20315-19946 cal BP (95.6%)
PLD-37492 試料 No. 3	20.67 \pm 0.15	23217 \pm 67	23220 \pm 70	25646-25473 cal BC (96.2%)	25730-25389 cal BC (95.6%)	27305-27522 cal BP (98.2%)	27679-27338 cal BP (95.6%)
PLD-37493 試料 No. 4	28.81 \pm 0.15	2121 \pm 20	2120 \pm 20	516-415 cal BC (98.2%)	731-691 cal BC (9.8%) 660-651 cal BC (1.6%) 544-407 cal BC (84.0%)	2165-2264 cal BP (96.2%)	2680-2610 cal BP (9.8%) 2609-2600 cal BP (1.6%) 2593-2356 cal BP (84.0%)
PLD-37494 試料 No.KCS13-1129	25.96 \pm 0.21	23070 \pm 65	23007 \pm 70	25531-25352 cal BC (98.2%)	25615-25213 cal BC (95.6%)	27480-27301 cal BP (98.2%)	27564-27192 cal BP (95.6%)
PLD-37495 試料 No.KCS13-1221	29.29 \pm 0.16	21996 \pm 71	25000 \pm 70	27209-26921 cal BC (96.2%)	27379-26869 cal BC (95.6%)	29119-28970 cal BP (98.2%)	29225-28758 cal BP (95.6%)

試料No.KCS13-1-224 (PLD-37495) は29325-28758 cal BP (95.4%)となった。試料はAT降灰層準より35cm下の泥炭層から採取されており、AT火山灰の降灰年代(30000～29000 cal BP)よりも古い測定結果を示し、整合的である。

試料No.KCS13-1-129 (PLD-37494) は27564-27192 cal BP (95.4%)となった。試料は火山灰層DHgより上位の層から採取されており、DHg火山灰の降灰年代(29044-28652 cal BP)よりも新しい測定結果を示し、整合的である。

3区の断ち割り南壁(ブロックA)では、最も上層の試料No.1 (PLD-37490) は23481-22997 cal BP (95.4%)となった。また試料No.2 (PLD-37491) は、20315-19946 cal BP (95.4%)となった。最も下層の試料No.3は、27679-27338 cal BP (95.4%)となった。試料はいずれもAT火山灰降灰直後に堆積したと考えられており、AT火山灰の降灰年代(30000～29000 cal BP)よりも新しい測定結果を示し、整合的である。ただし、測定結果は最も下層の試料No.3が最も古くなったが、次いで最も上層の試料No.1、中間層の試料No.2の順に新しい測定結果を示し、層序と測定結果は不整合となった。

2区の南壁S D35 (ブロックB) 植物遺体包含層から出土した試料No. 4 は、 ^{14}C 年代が 2420 ± 20 ^{14}C BP、2 σ 暦年代範囲が731-691 cal BC (9.8%)、660-651 cal BC (1.6%)、544-407 cal BC (84.0%)で、紀元前8世紀後半～5世紀末の暦年代を示した。これは、小林(2008・2009)、工藤(2012)、中村(2008)を参照すると、縄文時代晩期後半～弥生時代前期に相当する。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 Katoh, S., HANDA, K., HYODO, M., SATO, H., NAKAMURA, T., YAMASHITA, T., DANHARA, T. (2007) Estimation of eruptive ages of the late Pleistocene tephra layers derived from Daisen and Sambu Volcanoes based on AMS- ^{14}C dating of the moor sediments at Ohnuma Moor in the

Chugoku Mountains, Western Japan. Nature and Human Activities. no.11, 29-50.

- 小林謙一(2008)縄文時代の暦年代。小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」:257-269, 同成社。
- 小林謙一(2009)近畿地方以東の地域への拡散。西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」:55-82, 雄山閣。
- 工藤雄一郎(2012)旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—, 373p, 神泉社。
- 中村健二(2008)凸帯文系土器(中四国・近畿・東海地方)。小林達雄編「総覧縄文土器」:798-805, アム・プロモーション。
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」:3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

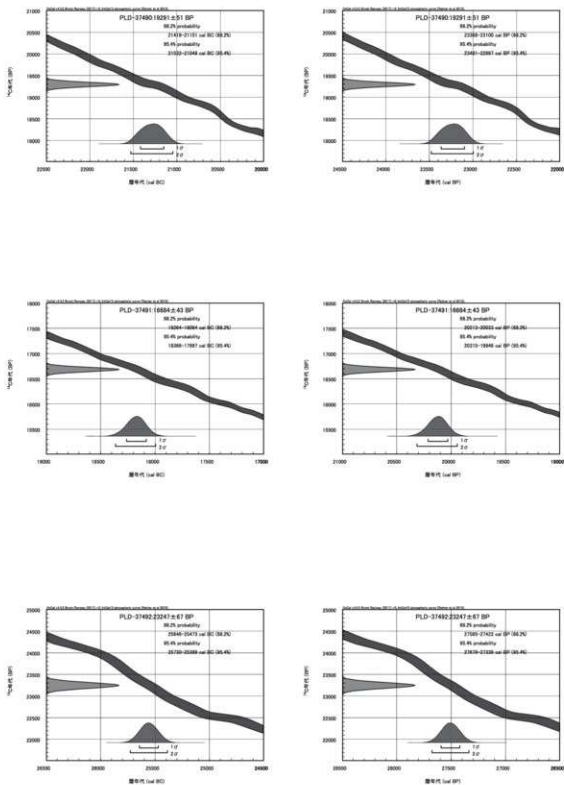


図1 暦年較正結果(1)

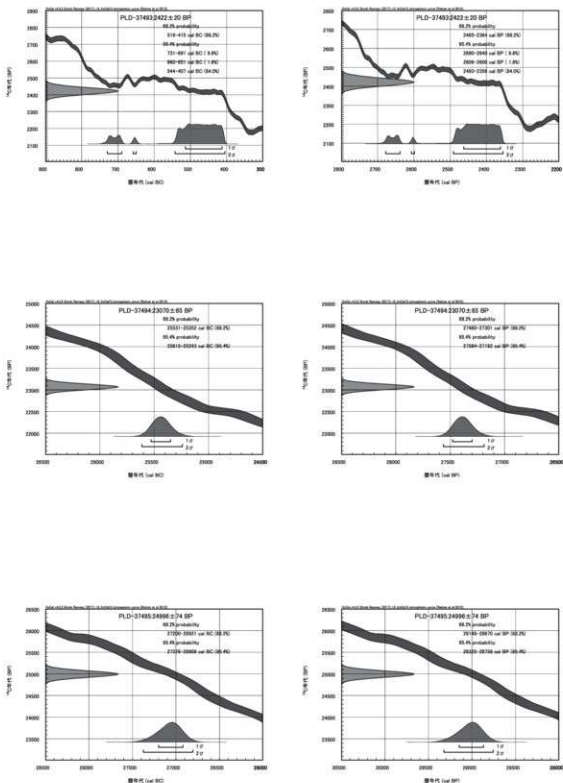


図2 暦年較正結果(2)

付表2 出土遺物観察表

(凡例)

・口径欄の記号 () : 復元径 - : 該当部位なし ・地区名:() 内アルファベットは
 ・器高欄の記号 * : 底径 / : 測定不能 大地区別り名 (第4図参照)
 () : 残存高 ・小数字第2位を四捨五入、第1位で表示 ・残存率: * 底部の残存率

平成25年度 出雲遺跡第17次・中古墳群第2次・三日市遺跡第12次

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法 (調整)	備考	
1	甕生土器	広口壺	1区	SK47	14.0	(120)		口縁のみ定存	靑 7.5YR6/6	外面: ミガキ、波状文、竹管文 内面: ミガキ、ナデ	
2	甕生土器	壺	1区	SK47	12.5 * 3.7		11.9	8/12	にぶい靑 5YR7/4	外面: ヨコナデ、ハケ、タタキ 内面: ハケ	
3	甕生土器	壺	1区	SK47	9.8	(7.5)	3/12	3/12	浅黄靑 10YR8/3-8/4	外面: ナデ、ユビオサエ 内面: ヨコナデ、ハケ、ナデ	
4	甕生土器	壺	1区	SK47	/	* 4.2	(3.1)	* 12/12	浅黄 25Y7/3	内面: ハケ・ナデ、 外面: ハケ後ナデか、ナデ	
5	土師器	皿	1区	SK 2	8.6	1.5	6/12	灰 N4/0	内面: ヨコナデ、ナデ 外面: ナデ、ユビオサエ		
6	土師器	皿	1区	SK 2	8.8	1.3	ほぼ定形	にぶい黄靑 10YR7/3	内面: ヨコナデ、ナデ 外面: ナデ、ユビオサエ	内外面スス・油膜痕	
7	土師器	皿	1区	SK 2	14.0	2.3	3/12	にぶい靑 7.5YR7/3	内面: ヨコナデ、ナデ 外面: ナデ・ユビオサエ	内外面スス	
8	瓦器	椀	1区	SK 2	(12.9)	(4.9)	2/12	灰 N5/0	内外面: ヨコナデ後ミガキ 外面: ナデ、ユビオサエ		
9	瓦器	椀	1区	SK 2	(14.8) * 7.2		5.4	2/12	灰 N5/0	内外面: ヨコナデ後ミガキ、 外面: ナデ、ユビオサエ	
10	瓦器	椀	1区	SK 2	(15.6) * 6.8		4.7	1/12	灰 N5/0	内外面: ヨコナデ後ミガキ、 外面: ナデ、ユビオサエ	
11	土製品	土鉢	1区	SK 2	長 3.1	径 0.8	定存	にぶい靑 7.5YR6/4	外面: ナデ、	孔径 0.3cm	
12	土師器	皿	1区	SK49	8.1	1.4	9/12	灰黄 25Y7/2	内面: ヨコナデ、ナデ、 外面: ナデ、ユビオサエ		
13	土師器	皿	1区	SK49	8.2	1.3	4/12	灰白 10YR8/2	内面: ヨコナデ、ナデ 外面: ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ		
14	土師器	皿	1区	SK49	8.6	1.4	3/12	灰白 10YR8/2	内面: ヨコナデ、ナデ、外面: ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ	内外面スス・油膜痕	
15	白磁	椀	1区	SK49	(16.6)	(2.0)	1/12		内外面: 回転ナデ	口縁部内外面釉施	
16	瓦器	椀	1区	SK 1	/	* 5.2	(2.0)	* 2/12	灰 N4/0	外面: ナデ	
17	土師器	皿	1区	SP20	(16.0)	2.0	1/12	にぶい黄靑 10YR7/2	内外面: ヨコナデ、ナデ		
18	瓦器	椀	1区	SP13	15.0	(4.1)	5/12	暗灰 N3/0	内面: ミガキ、ナデ、外面: ミガキ、ナデ、ユビオサエ		
19	甕生土器	壺	1区	-	13.8~ 14.4	(5.5)	7/12	にぶい黄靑 10YR7/3	内外面: ヨコナデ、ナデ	口縁部外面スス、径3~4mmの濁・灰色砂粒含む	
20	須恵器	杯身	1区	-	(11.8)	(3.5)	1/12	灰 N6/0	内外面: 回転ナデ		
21	須恵器	杯身	1区	-	(11.0)	(4.4)	1/12	灰 N7/0	内外面: 回転ナデ 外面: 回転ヘラケズリ		
22	須恵器	杯身	1区	-	(14.0)	(2.8)	1/12	灰 N6/0	内外面: 回転ナデ		
23	須恵器	高杯	1区	-	/	(4.3)	-	灰 N6/0	内外面: 回転ナデ 外面: 回転ヘラケズリ後ナデ	スカシ孔4	
24	須恵器	高杯	1区	-	/	(2.9)	-	灰 N5/0	内外面: 回転ナデ	スカシ孔4	
25	須恵器	高杯	1区	-	/	* 8.7	(3.1)	* 2/12	灰白 5Y7/1	内外面: 回転ナデ	
26	須恵器	高杯	1区	-	/	(3.4)	/	灰 N5/0	内外面: 回転ナデ		
27	須恵器	壺	1区	-	(10.9)	(3.8)	3/12	灰 N6/0	内外面: 回転ナデ		
28	須恵器	壺	1区	-	(13.0)	(4.7)	2/12	灰 N5/0	内外面: 回転ナデ		
29	須恵器	器台	1区	-	/	(2.9)	-	灰 N5/0	内外面: ナデ 外面: 波状文、沈線	スカシ孔複数	
30	須恵器	杯蓋	1区	-	(1.80)	(2.1)	1.5/12	灰白 7.5Y7/1	内外面: 回転ナデ、 外面: 回転ヘラケズリ		
31	須恵器	杯蓋	1区	-	(1.60)	(1.7)	1/12	灰 N6/0	内外面: 回転ナデ 外面: 回転ヘラケズリ		
32	須恵器	杯	1区	-	/	* 10.6	(1.5)	4/12	灰 N6/0	内面: 回転ナデ 外面: 回転 ナデ、ヘラケリ後ナデ	転用履か
33	須恵器	皿	1区	-	(1.98)	2.2	1.5/12	灰 N6/1	内外面: 回転ナデ 外面: ヘラケリ後ナデ	底部内外面に摩滅痕転用履か	
34	土師器	皿	1区	-	(16.9)	(2.2)	1/12	灰白 10YR8/2	内外面: ヨコナデ、ナデ		

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口徑 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法 (調整)	備考
35	瓦葺土器	鍋/羽釜	1区	-	(17.2)	(26)	1/12	暗灰 N3/3	摩滅著しく調整不明	径0.5mm以下の白・半透明の砂粒含む
36	緑釉陶器	椀	1区	-	(15.0)	(25)	1/12以下		内外面：ヨコナデ	口縁内外面施釉
37	灰釉陶器	椀	1区	-	/ [6.2]	(28)	* 3.5/12	灰白 75Y7/1	内外面：回転ナデ	糸切り痕、貼り付け高台
38	須恵器	椀	1区	-	(13.0)	(23)	15/12	灰 N6/0	内外面：回転ナデ	
39	黒釉陶器	椀か	1区	-	* 6.4	(21)	* 3/12	灰 N6/0	内面：回転ナデ後ミガキ 外面：回転ヘラケズリ後ミガキ	削り出し高台
40	土師器	椀/皿	1区	-	* 4.6	(14)	* 6/12	渋黄 2.5Y8/3	内外面：回転ナデ	糸切り痕
41	土師器	椀	1区	-	7.0 * 7.0	(27)	* 1/12	にぶい橙 7.5YR7/3	内面：ナデ 外面：ナデ、ヨコナデ	
42	土師器	皿	1区	-	9.8 * 4.7	1.8	5/12	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面：ナデ	糸切り痕
43	瓦葺土器	椀	1区	-	(13.8)	(27)	2/12	暗灰 N3/0	内面：ヨコナデ、ナデのちミガキ、外面：ヨコナデ、ナデ	
44	瓦葺土器	椀	1区	-	(14.0)	(32)	1/12	灰白 2.5Y8/2	内面：ヨコナデ、ミガキ、外面：ヨコナデ、ナデ・ユビオサエ	
45	玉類	勾玉	1区	-	長24 幅1.3	厚0.7	完形	黄褐 10YR5/8	-	重量7.0g、穿孔径1.8~3.2mm
46	玉類	管玉	1区	-	径0.9	長2.3	完形	暗緑灰 10G3/1	-	重量3.4g
47	玉類	管玉	1区	-	径0.6	長1.3	完形	明緑灰 10G7/1	-	
48	石製品	削器	1区	-	長3.3 厚0.7	幅5.2	完形	灰 N5/0	-	重量12.5g
49	石製品	削片	1区	-	長2.3 厚0.3	幅1.8	完形	灰 N4/0	-	重量1.2g

平成26年度 出雲遺跡第19次・中古墳群第3次

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口徑 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法 (調整)	備考
50	須恵器	杯身	5 tr (F区)	-	(10.0)	(23)	15/12	灰 N5/0	外面・口縁部：回転ナデ 内面：ロクロナデ	
51	土師器	皿	5 tr (F区)	-	(10.0)	1.5	15/12	にぶい橙 5YR7/4	外面：ユビオサエ 口縁部：ヨコナデ 内面：ユビオサエ	
52	瓦葺土器	椀	5 tr (F区)	-	* (6.0)	1.5	* 1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	外面：摩滅、内面：ミガキ	貼り付け高台
53	陶器	鉢	5 tr (F区)	-	* (16.4)	(35)	* 2/12	輪) 灰赤色 5YR4/2 胎) 灰白色 N 7/0	外面：ケズリ、底部：露胎部	
54	瓦葺土器	椀	6 tr (F区)	-	* (4.6)	(15)	* 3/12	灰色 N4/0	外面：ナデ 内面：調整不明瞭	貼り付け高台
55	土師器	杯	6 tr (F区)	-	(9.7)	1.9	1/12	灰白色 7.5YR8/2 外) 黒色 7.5YR17/1	外面：ナデ、指頭直有り 口縁部：ヨコナデ 内面：やや強めのナデ	外面スス
56	土師器	皿	7 tr (G区)	-	9.0	1.0	15/12	にぶい黄橙 10YR7/2	ナデ	
57	土師器	杯	7 tr (G区)	-	(11.2)	1.9	4/12	灰白色 7.5YR8/2	外面：ナデ、ヨコナデ、内面：ヨコナデ、ヘラ状工具痕	
58	土師器	杯	9 tr (H区)	SD901 (上層)	(12.3)	(23)	2/12	灰黄 2.5Y7/2	外面：ナデ 口縁部・内面：横ナデ	径1mm以下の赤色砂粒含む
59	土師器	杯	9 tr (H区)	SD901	11.8	3.2	4/12	にぶい橙 7.5YR7/6	外面：ナデ 内面：ナデ	径2mm以下の赤色砂粒含む
60	土師器	皿	9 tr (H区)	SD901	(8.8)	(1.0)	3/12	暗黄褐色 10YR7/6	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：一方向ナデ	
61	土師器	皿	9 tr (H区)	SD901 (上層)	(6.9)	1.3	3/12	にぶい黄橙 10YR7/4	外面：ナデ 内面：ナデ	
62	土師器	皿	9 tr (H区)	SD901	(6.9)	(0.9)	1/12	にぶい橙 7.5YR7/4	外面：ナデ 内面：ナデ	糸切り痕
63	土師器	葉	9 tr (H区)	SD901	(11.0)	(3.5)	1/12以下	にぶい褐 7.5Y5/4	内外面：ナデ	内側スス、径2mm以下の白色・黒灰色・茶色砂粒含む
64	瓦葺土器	皿	9 tr (H区)	SD901	(8.9)	(1.8)	2/12	灰 N6/0 ~ 暗灰 N3/0	外面：ヨコナデ、ナデ、ユビオサエ 内面：ミガキ	
65	瓦葺土器	椀	9 tr (H区)	SD901	(13.8)	(3.8)	1/12	暗灰 N3/0	外面：ユビオサエ 内面：ミガキ、ユビオサエ、沈積	
66	瓦葺土器	椀	9 tr (H区)	SD901 (上層)	5.0	(2.2)	5/12	灰 N 4/0	外面：ナデ、ユビオサエ、ミガキ 内面：ミガキ	貼り付け高台

報告 番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法 (調整)	備 考
67	瓦質 土器	羽釜	9tr (H区)	SD901	17.0	4.5	1/12	黒25Y2/1	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ	
68	瓦質 土器	鍋	9tr (H区)	SD901	34.0	(5.7)	1/12	灰N4/0	外面：ヨコナデ、指頭痕、 内面：ハケ後ナデ	口縁部に沈線
69	須恵器	鉢	9tr (H区)	SD901 (上層)	30.0	3.9	1/12	灰N 6/0	外面：ナデ 内面：ナデ	
70	白磁	碗	9tr (H区)	SD901 (上層)	18.0	(3.8)	1/12	灰白5Y7/2	施釉	玉縁口縁
71	白磁	碗	9tr (H区)	SD901	(15.5)	(2.2)	1/12	灰白N8/0	施釉 (灰白75Y7/1)	
72	白磁	碗	9tr (H区)	SD901	(15.4)	(3.3)	1/12 以下	灰白N8/0	施釉 (灰白75Y7/1)	
73	白磁	碗	9tr (H区)	SD901 (上層)	- * 5.6	(2.3)	6/12	灰白5Y7/1	施釉 (灰オリーブ5Y6/2)、外 面：ケズリ	削り出し高台
74	白磁	碗	9tr (H区)	SD901	4.2	(2.4)	3/12	灰5Y6/1	施釉 (灰オリーブ5Y5/3)	削り出し高台、重ね焼き痕
75	白磁	碗	9tr (H区)	SD901	7.7	(2.0)	2/12	灰白25Y8/1	施釉 (灰オリーブ75Y6/2)、 ケズリ	削り出し高台
76	白磁	皿	9tr (H区)	SD901	- * 4.0	(1.1)	2/12	灰白5Y8/1	内外面：施釉 (灰白5Y7/2) 内面：沈線	
77	青白磁	合子	9tr (H区)	SD901	5.9	(2.3)	1/12	灰白75Y8/1	施釉 (灰白75Y7/1)	
78	須恵器	杯B	9tr (H区)	SD901 (上層)	8.8	(2.7)	* 2/12	灰75Y6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	貼り付け高台
79	須恵器	蓋	9tr (H区)	SD901 (上層)	13.0	(1.4)	1/12	灰白N7/0	回転ナデ	
80	陶器	壺/鉢	9tr (H区)	SD901	8.9	(4.9)	3/12	洗黄25Y8/3	外面：ナデ 内面：ナデ、自然釉	
81	土師器	高杯	9tr (H区)	SD901 (上層)	最大径 4.2	(6.5)	-	灰白10YR8/2	ナデ	
82	石製品	石鍋	9tr (H区)	SD901	13.0	(3.2)	-	オリーブ灰 2.5GY6/1	-	滑石製
83	土師器	壺/鉢	9tr (H区)	SD901	-	(2.5)	*ほぼ 定形	灰白5Y7/1	外面：ケズリ、ナデ 内面：ハケ	
84	灰釉 陶器	壺	11tr (J区)	包含層	(8.0)	(2.4)	1/12 以下	灰白75Y7/1	外面：回転ナデ、 内面：施釉、回転ナデ	貼り付け高台
85	瓦器	碗	12tr (K区)	SD901	14.6	(5.0)	1/12	灰25Y6/1	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ミガキ、摩滅	貼り付け高台
86	土製品	土鉢	9tr (H区)	SD901 (上層)	長 (1.9)	幅0.7	-	灰白10YR8/2	外面：ナデ	
87	木製品	下駄	9tr (H区)	SD901	長 (16.0)	幅8.8	11/12	-	-	ヒノキ製
88	木製品	矢板材	9tr (H区)	SD901	長 (40.4)	幅 (14.7)	-	-	-	
89	木製品	丸杖	9tr (H区)	SD901	長 (34.6)	最大径 3.0	-	-	-	
90	木製品	丸杖	9tr (H区)	SD901	長 (49.6)	最大径 4.7	-	-	-	
91	須恵器	皿	2区	SD201	不明	(3.2)	-	灰N6/0	外面：回転ナデ、カキメカ 内面：回転ナデ	
92	須恵器	高杯蓋	2区	SD201	不明	(1.9)	-	灰N5/0	外面：回転ヘラケズリ、沈線状 の刷印	
93	須恵器	壺	2区	SD201	18.0	(4.0)	1/12	灰N4/0	外面：回転ナデ、カキメ 内面：回転ナデ	口縁部沈線
94	須恵器	器台	2区	SD201	脚 20.7	(13.5)	脚 2/12	青灰色5P6/1	外面：波状文 内面：回転ナデ	スカシ残存
95	須恵器	器台	2区	SD201 (上層)	最大径 9.0	-	-	灰オリーブ5Y6/2	外面：波状文 内面：ナデ	スカシ残存
96	須恵器	杯蓋	2区	SD201 (上層)	/	(2.8)	3/12	灰白N8/0	外面：回転ナデ、ヨコナデ 内面：回転ナデ	
97	須恵器	杯身	2区	SD201 (上層)	14.6	(4.5)	1/12	陶灰10YR5/1	外面：ナデ・ヘラ切り 内面：回転ナデ	
98	円筒 埴輪	口縁部	2区	SD201 (中層)	幅 (6.6)	(4.6) 厚1.1	-	にぶい黄橙10YR7/2	ヨコナデ、ハケ	赤色斑粒含む
99	円筒 埴輪	体部	2区	SD201 (上層)	幅 (9.0)	(6.9) 厚1.2	-	浅黄橙10YR8/4	タテ・ヨコハケ、ナデ	
100	円筒 埴輪	突起部	2区	SD201	幅 (4.6)	(4.0) 厚2.2	-	灰白25Y8/2	摩滅	

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	残存率	色調	整形技法(調整)	備考
101	円筒埴輪	突帯部	2区	SD201	幅(69)	(35) 厚24	-	浅黄 25Y7/3	摩滅	
102	円筒埴輪	突帯部	2区	SD201 (中層)	幅(64)	(20) 厚14	-	にぶい黄橙 10YR7/3	摩滅	
103	円筒埴輪	基部	2区	SD201 (上層)	幅(55)	(46) 厚17	-	にぶい黄橙 10YR7/3	外面:摩滅 内面:ユビナデ	
104	円筒埴輪	底部	2区	SD201 (上層)	幅(51)	(61) 厚12	-	にぶい黄橙 10YR7/3	外面:ハケか(摩滅) 内面:ユビナデか(摩滅)	赤色珪粒含む
105	円筒埴輪	底部	2区	SD201 (中層)	幅(62)	(54) 厚17	-	橙 5YR7/6	摩滅	赤色珪粒含む
106	円筒埴輪	基部	2区	SD201 (中層)	幅(83)	(53) 厚12	-	浅黄橙 10YR8/3	外面:ハケ 内面:ユビナデ	
107	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり2	132 ~ 128	4.8	完形	灰N 4/0 ~ 灰6/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
108	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり2	12.7	5.0	完形	灰N4/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
109	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり2	13.0	4.1	6/12	灰N 5/6 ~ 暗灰 N3/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
110	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり2	13.0	4.5	7/12	灰N4/0	外面:ナデ、暗文か、 内面:ミガキ	貼り付け高台
111	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり2	12.1	4.4	完形	灰N3/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
112	土師器	皿	2区	SD201 土器溜まり	8.2	1.1	7/12	橙 7.5YR7/6	外面:ユビナデ 内面:ナデ	
113	土師器	皿	2区	SD201 土器溜まり	8.8	1.3	6/12	にぶい黄橙 10YR7/3	外面:ヨコナデ 内面:ナデ	
114	土師器	皿	2区	SD201 土器溜まり	11.8	2.0	8/12	にぶい橙 7.5YR7/4	内面:ナデ	
115	土師器	皿	2区	SD201 土器溜まり	13.0	2.3	6/12	灰白 10YR8/2	外面:ヨコナデ 内面:ナデ	
116	土師器	皿	2区	SD201 土器溜まり	11.8	2.4	14/12 完形	橙 7.5YR7/6	外面:ナデ 内面:ナデ	
117	土師器	皿	2区	SD201 土器溜まり	11.6	3.2	6/12	にぶい橙 7.5YR7/4	外面:ナデ 内面:ナデ	
118	土師器	皿	2区	SD201 土器溜まり	11.6	2.5	4/12	橙 7.5YR7/6	外面:ユビナデ 内面:ナデ	
119	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり	12.1	4.6	9.5/12	褐灰 7.5YR4/1 ~ 暗 灰N 3/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
120	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり	13.2	4.9	完形	灰N5/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
121	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり	12.2	4.6	6/12	黒褐色 10YR3/1	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
122	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり	12.2	4.4	6.5/12	暗灰N 3/0 ~ 灰 N6/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
123	瓦器	椀	2区	SD201 土器溜まり	11.8	3.8	完形	灰N3/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
124	土師器	皿	2区	SD201	(10.0)	2.0	2.5/12	灰白 10YR8/2	外面:ナデ 内面:ナデ	
125	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(12.8)	2.1	1/12	浅黄橙 7.5YR7/4	外面:ナデ 内面:ナデ	
126	土師器	皿	2区	SD201(上層)	12.8	2.2	5/12	浅黄橙 10YR8/4	外面:ナデ 内面:ナデ	
127	土師器	皿	2区	SD201	(13.0)	1.2	2.5/12	白灰 10YR7/1 ~ に ぶい橙 7.5YR7/4	外面:ナデ 内面:ナデ	雲母含む
128	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(13.8)	2.5	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	外面:ヨコナデ、ユビナデ ユビオキエ 内面:ナデ	
129	土師器	皿	2区	SD201(中層)	(12.8)	2.5	2/12	浅黄橙 10YR8/3	内外面:ナデ	
130	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(13.0)	1.7	2.5/12	橙 5YR7/6	外面:ユビナデ 内面:ナデ	
131	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.7)	2.0	2.5/12	橙 5YR7/6	内外面:ナデ	赤色珪粒含む
132	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.8)	1.9	3/12	にぶい橙 7.5YR7/3	外面:ユビナデ 内面:ナデ	赤色珪粒含む
133	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.6)	1.6	1.5/12	橙 7.5YR7/6	内外面:ナデ	
134	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.9)	(2.0)	2/12	浅黄橙 7.5YR	内外面:ナデ	
135	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(12.0)	1.8	3/12	浅黄橙 7.5YR8/3	外面:ヨコナデ 内面:ナデ	
136	土師器	皿	2区	SD201(中層)	11.0	2.3	7.5/12	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面:ナデ	

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法(調整)	備考
137	土師器	皿	2区	SD201(上層)	11.8	2.2	4/12	浅黄橙 75YR8/3-8/4	外面: ヌビナデ 内面: ナデ	
138	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.6)	1.5	1.5/12	浅黄橙 10YR8/3	内外面: ナデ	
139	土師器	皿	2区	SD201(上層)	11.6	2.6	4/12	橙 75YR7/4	内外面: ナデ	径1mm以下の赤色粒を含む
140	土師器	皿	2区	SD201	(10.8)	2.4	3/12	にぶい橙 75YR7/3	内外面: ナデ	
141	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.6)	(21)	3/12	灰白 2.5Y8/2	内外面: ナデ	黒灰色砂粒・赤色粒を含む
142	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.0)	1.8	3/12	橙 75YR7/6	内外面: ナデ	径1mm以下の赤色粒を含む
143	土師器	皿	2区	SD201	30.9	2.0	4/12	橙 5YR7/6	内外面: ナデ	
144	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.0)	(21)	2/12	橙 5YR7/7	内外面: ナデ	雲母・赤色粒少量含む
145	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(11.2)	(20)	2/12	橙 5YR7/6	内外面: ナデ	雲母・赤色粒少量含む
146	土師器	皿	2区	SD201	11.8	2.6	6/12	橙 75YR7/6 ~ 浅黄橙 75YR8/3	外面: ヨコナデ, ヌビオサエ内面: ヨコナデ, ナデ	
147	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(10.8)	1.8	2/12	にぶい橙 75YR7/4	内外面: ナデ	
148	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(10.0)	1.2	3/12	橙 5YR6/6	外面: ヨコナデ, ヌビナデ 内面: ナデ	黒斑あり
149	土師器	皿	2区	SD201(中層)	(12.0)	1.8	1/12	浅黄橙 75YR8/3	内外面: ナデ	糸切り痕
150	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(6.9)	1.3	3/12	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面: ナデ	赤色粒を含む
151	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(6.9)	1.5	3/12	橙 75YR7/6 ~ にぶい橙 75YR7/4	内外面: ナデ	赤色粒を含む
152	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(8.4)	(1.2)	3/12	橙 5YR7/6	内外面: ナデ	雲母・赤色粒を含む
153	土師器	皿	2区	SD201(上層)	(8.0)	0.9	3/12	にぶい橙 75YR7/4	内外面: ナデ	
154	土師器	皿	2区	SD201(上層)	8.0	1.5	5.5/12	にぶい橙 75YR7/4	内外面: ナデ	
155	土師器	皿	2区	SD201(上層)	8.0	1.8	6/12	にぶい橙 75YR7/4	外面: ヨコナデ, ヌビナデ 内面: ナデ	
156	土師器	皿	2区	SD201(上層)	8.0	1.6	8/12	にぶい橙 75YR7/4	外面: ヨコナデ, ヌビオサエ内面: ヨコナデ, ナデ	赤色粒焼結粒子を含む
157	土師器	皿	2区	SD201(上層)	8.0	1.0	6/12	橙 75YR6/6	外面: ヨコナデ, ナデ, ヌビオサエ 内面: ナデ	
158	土師器	皿	2区	SD201(上層)	8.2	1.6	5/12	にぶい橙 75YR7/4	外面: ヨコナデ, ナデ 内面: ヌビオサエ	
159	土師器	皿	2区	SD201(上層)	8.2	1.2	6/12	灰白 10YR8/2	内外面: ナデ	
160	土師器	皿	2区	SD201(上層)	7.8	1.7	7.5/12	にぶい橙 75YR7/4	内外面: ナデ	
161	土師器	皿	2区	SD201(上層)	8.2	1.5	4/12	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面: ナデ	
162	土師器	皿	2区	SD201(上層)	8.8	1.2	4.5/12	灰白 10YR8/2 ~ にぶい橙 75YR7/3	外面: ヨコナデ, ナデ, ヌビオサエ 内面: ナデ	
163	土師器	皿	2区	SD201	5.0	(2.2)	* 4/12	灰白 10YR8/2	内外面: ナデ	貼り付け高台
164	土師器	皿	2区	SD201(中層)	10.0	1.9	10/12	灰白 2.5Y8/2	内外面: ナデ	糸切り痕
165	土師器	皿	2区	SD201(中層)	9.6	1.7	5/12	灰白 10YR8/2	内外面: ナデ	糸切り痕
166	土師器	皿	2区	SD201(中層)	9.2	1.2	ほぼ 定形	橙 75YR7/6	内外面: ナデ	糸切り痕
167	土師器	皿	2区	SD201(中層)	9.0	1.2	6/12	浅黄橙 75YR8/4	内外面: ナデ	糸切り痕
168	土師器	皿	2区	SD201	9.9	2.1	ほぼ 定形	灰白 10YR8/2 ~ にぶい橙 75YR7/4	内外面: ナデ	糸切り痕
169	土師器	皿	2区	SD201	7.9	1.0	4/12	浅黄橙 10YR8/3 ~ 淡黄 2.5Y8/3	内外面: ナデ	糸切り痕
170	土師器	皿	2区	SD201	9.6	2.1	4/12	にぶい橙 75YR7/4	内外面: ナデ	赤色粒を含む
171	土師器	皿	2区	SD201	9.8	2.3	9/12	淡黄 2.5Y8/3	内外面: 回転ナデ	糸切り痕
172	土師器	皿	2区	SD201	(9.8)	1.3	2.5/12	灰白 10YR8/2	外面: ナデ 内面: 摩滅著しい	赤色粒を含む
173	土師器	甕	2区	SD201(上層)	(22.4)	(3.7)	1/12	にぶい黄 75YR6/3	内外面: ナデ	
174	土師器	甕	2区	SD201	(21.4)	(4.4)	2/12	にぶい黄橙 10YR7/3 ~ 濁灰 75YR4/1	外面: ナデ 内面: ケズリ残ナデ	
175	土師器	甕	2区	SD201	(16.4)	(5.8)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	外面: ナデ, ハケ 内面: ナデ	
176	土師器	甕	2区	SD201	(13.6)	(3.9)	2/12 具下	灰黄釉 10YR5/2 ~ にぶい橙 75YR7/3	内外面: ナデ	
177	土師器	杯	2区	SD201(中層)	(14.6)	3.3	1.5/12	浅黄橙 10YR8/3	内外面: 回転ナデ	糸切り痕
178	土師器	杯	2区	SD201(中層)	7.2	(2.4)	* 5/12	にぶい橙 5YR7/4	外面: ナデ 内面: 回転ナデ	糸切り痕、赤色粒を含む
179	瓦器	椀	2区	SD201	13.2	4.8	8/12	灰 4/0	外面: ナデ 内面: ミガキ	
180	瓦器	椀	2区	SD201(中層)	15.0	5.5	6.5/12	灰 N 5/0 ~ 硝灰 3/0	外面: ナデ 内面: ミガキ	貼り付け高台

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	残存率	色調	整形技法(調整)	備考
181	瓦器	椀	2区	SD201	130	46	11/12	灰N5/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
182	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(130)	41	1/12	灰N4/10	外面:ヨコナデ、エビナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
183	瓦器	椀	2区	SD201	(142)	49	25/12	灰N4/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
184	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(140)	43	3/12	灰N4/0~N5/0	外面:ヨコナデ、エビナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
185	瓦器	椀	2区	SD201	(138)	49	1/12	灰N4/0~灰N6/0	外面:ミガキ 内面:洗滌、ミガキ	
186	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	130	42	5/12	灰N4/0	外面:ナデ、ヨコナデ 内面:ミガキ	
187	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	62	(43)	5/12	灰N4/0	外面:ミガキ、エビオサエ 内面:ミガキ	貼り付け高台
188	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(138)	37	3/12	灰N4/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
189	瓦器	椀	2区	SD201	130	37	7/12	灰N4/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
190	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	130	48	12/12	暗灰N3/0	外面:ナデ、爪、指任痕 内面:ミガキ	
191	瓦器	椀	2区	SD201(中層)	(138)	47	2/12	灰N5/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
192	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(160)	(35)	15/12	灰白N6/0~灰N5/6	内外面:ミガキ、ヨコナデ	口縁部洗滌
193	瓦器	椀	2区	SD201(中層)	(140)	(33)	15/12	灰N4/0	内外面:ミガキ、ヨコナデ、ナデ	口縁部洗滌
194	瓦器	椀	2区	SD201	131	45	8/12	灰N4/0	外面:ナデ、エビオサエ 内面:ナデ(摩滅著しい)	貼り付け高台
195	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(138)	(42)	3/12	灰N4/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
196	瓦器	椀	2区	SD201(中層)	(138)	(39)	25/12	灰N4/6	外面:ナデ 内面:ミガキ	
197	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(118)	41	25/12	暗灰N3/0	外面:ナデ、指任痕 内面:ミガキ	貼り付け高台
198	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(117)	(46)	35/12	暗灰N3/0	外面:エビナデ、指任痕、ナデ、 内面:ミガキ	貼り付け高台痕
199	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	108	38	7/12	灰N5/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
200	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	118	40	4/12	灰白4/0~灰白10YR8/1	外面:ナデ、指任痕 内面:ミガキ	貼り付け高台
201	瓦器	椀	2区	SD201	116	35	9/12	灰N4/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
202	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(120)	43	3/12	暗灰N3/0	外面:ヨコナデ、エビナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
203	瓦器	椀	2区	SD201	122	48	10/12	灰N4/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	
204	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	118	(39)	45/12	灰N4/0~灰N6/0	外面:ナデ、エビオサエ、ヨコ ナデ 内面:ミガキ	
205	瓦器	椀	2区	SD201	(120)	(41)	3/12	灰N4/0~灰白N7/0	内外面:ナデ	
206	瓦器	椀	2区	SD201	50	(21)	4/12	灰N4/0	外面:ナデ 内面:ミガキ	貼り付け高台
207	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(132)	40	15/12	灰白8/0	外面:ナデ、エビオサエ 内面:ミガキか(摩滅)	貼り付け高台
208	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	(118)	(44)	15/12	灰N4/0	外面:ナデ、指任痕、ミガキ 内面:ミガキ	
209	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	100	38	6/12	灰N4/6	外面:ナデ、指任痕 内面:ミガキ	貼り付け高台
210	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	* 5.0	(27)		灰N4/0	外面:ナデ 内面:摩滅	貼り付け高台
211	瓦器	椀	2区	SD201(中層)	* 7.0	(14)		灰N4/0	外面:ナデ 内面:暗文	貼り付け高台
212	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	* 6.4	(17)		灰N4/0	外面:ナデ 内面:暗文	貼り付け高台
213	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	* 6.0	(18)		灰N4/0	外面:ナデ、ミガキ 内面:ミガキ	貼り付け高台
214	灰釉陶器	山系椀	2区	SD201(上層)	* (80)	(21)		灰白5YR/1	内外面:ナデ	貼り付け高台
215	瓦器	椀	2区	SD201(上層)	* 6.2	(11)		灰N4/0	外面:ナデ 内面:暗文	

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法 (調整)	備考
216	瓦器	椀	2区	SD201 (上層)	★6.2	(08)	7/12	灰白 5Y8/1	外面：ナデ 内面：暗文	
217	瓦器	皿	2区	SD201 (中層)	(106)	20	05/12	灰 N4/0	外面：ヨコナデ 内面：ナデ、ミガキ	
218	瓦質土器	羽釜	2区	SD201 (上層)	(262)	(97)	35/12	灰 N4/0	外面：ユビオサエ、ヨコナデ 内面：ハケ、ヨコナデ	
219	瓦質土器	鍋	2区	SD201 (上層)	(264)	(95)	2/12	灰 N4/0	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ハケ	
220	瓦質土器	釜	2区	SD201 (上層)	(252)	(37)	1/12	灰 N6/0	外面：ヨコナデ 内面：ハケ	
221	瓦質土器	羽釜	2区	SD201 (中層)	(222)	(32)	1/12	灰 N4/0	内外面：ナデ	
222	瓦質土器	鍋	2区	SD201 (上層)	(187)	(75)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ハケ	
223	瓦質土器	三足羽釜	2区	SD201 (上層)	8.4	(68)	9/12	灰白 2.5Y8/1	外面：ナデ 内面：ナゲ上げ	スス付着
224	瓦質土器	羽釜	2区	SD201 (上層)	(189)	(23)	15/12	灰 N4/0	外面：ユビオサエ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	スス付着
225	須恵器	椀	2区	SD201	16.8	(40)	5/12	灰 5Y5/1～褐灰 10YR6/1	外面：ナデ 内面：ナデ	径4mm大の石粒、径2mm以下の長石・灰色砂粒多く含む
226	灰釉陶器	椀	2区	SD201 (上層)	(150)	(25)	1/12	灰白 5Y7/1	外面：回転ナデ、ヨコナデ 内面：回転ナデ	内
227	陶器	壺	2区	SD201 (上層)	(140)	(45)	2/12	暗赤褐色 2.5YR3/2 ～赤灰 2.5YR5/1	内外面：ナデ	
228	陶器	壺	2区	SD201 (中層)	8.7	(37)	4/12	灰 5Y6/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	削り出し高台
229	須恵器	壺	2区	SD201 (中層)	★8.3	(26)	11/12	灰白 5Y7/1	外面：ナデ 内面：ナデ	糸切り痕、貼り付け高台
230	灰釉陶器	底部	2区	SD201 (中層)	★6.9	(21)	★ 11/12	灰白 2.5Y8/1	外面：回転ナデ、ユビナデ、 内面：ナデ、暗文	糸切り痕、貼り付け高台、 内
231	灰釉陶器	底部	2区	SD201 (上層)	★8.0	(30)	★ 6/12	灰黄 2.5Y7/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、自然釉か	糸切り痕、貼り付け高台
232	陶器	壺	2区	SD201 (中層)	★ (112)	(33)	★ 2/12	褐灰 7.5YR6/1	内面：施釉	
233	須恵器	壺	2区	SD201 (上層)	(300)	(49)	05/12	灰 N6/0～灰白 N7/0	外面：回転ナデ、タタキ 内面：回転ナデ	
234	須恵器	片口鉢	2区	SD201 (上層)	(280)	(59)	05/12	灰 N6/0	外面：ナデ 内面：ナデ	
235	須恵器	片口鉢	2区	SD201 (上層)	(296)	(70)	1/12	灰 N6/0	外面：回転ナデ、ユビオサエ 内面：回転ナデ	
236	須恵器	片口鉢	2区	SD201 (上層)	(237)	(38)	1/12	灰白 N7/0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	赤色度粒含む
237	陶器	壺	2区	SD201 (上層)	7.5	(173)	★ 12/12	灰白 10YR7/1～褐 灰 10YR5/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
238	白磁	碗か	2区	SD201 (中層)	(63)	(33)	2/12	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面：施釉 (灰白 5Y8/1)	
239	白磁	皿	2区	SD201 (上層)	(110)	(24)	1.5/12	灰白 5Y8/2	内外面：施釉、回転ナデ、ヨコ ナデ	
240	白磁	椀	2区	SD201 (上層)	(180)	(46)	1/12	灰白 5Y7/1～灰白 5Y7/2	内外面：施釉	
241	白磁	椀	2区	SD201 (上層)	(160)	(28)	0.5/12	灰白 7.5Y8/1	内外面：施釉 ヨコナデ	
242	白磁	椀	2区	SD201 (中層)	(160)	(44)	1/12	灰白 2.5Y8/2	内外面：施釉	玉縁口縁
243	白磁	椀	2区	SD201	(160)	(31)	1/12	灰白 5Y7/2	内外面：施釉、回転ナデ、ヨコ ナデ	
244	白磁	椀	2区	SD201	(159)	(19)	1/12	灰白 5Y8/1	内外面：施釉	
245	白磁	椀	2区	SD201 (上層)	(160)	(27)	1/12	灰白 5Y7/1	内外面：施釉	玉縁口縁
246	白磁	椀	2区	SD201 (中層)	(158)	(45)	1/12	灰白 2.5Y8/2	内外面：施釉	
247	白磁	皿/椀	2区	SD201 (中層)	(80)	(15)	1/12 以下	灰白 2.5Y7/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、施釉	
248	白磁	皿/椀	2区	SD201	★7.0	(43)	5/12	灰白 7.5Y8/1	外面：施釉 内面：施釉、黒線	削り出し高台
249	白磁	皿/椀	2区	SD201 (中層)	★6.6	(36)	★ 3/12	灰白 2.5Y8/2	内面：施釉 (灰白 5Y8/1)	
250	白磁	皿/椀	2区	SD201 (中層)	★7.0	(24)	★ 12/12	灰白 7.5Y8/1	外面：施釉、露胎 内面：施釉、黒線	削り出し高台
251	白磁	皿	2区	畦3東	★7.3	(27)	★ 6/12	淡黄 2.5Y8/3	内面：施釉、黒線	貼り付け高台

報告 番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法(調整)	備 考
252	白磁	皿/椀	-	-	* 6.2	(20)	2/12	灰白 25Y8/2	内面: 施釉	貼り付け高台
253	白磁	皿/椀	2区	SD201(上層)	* (5.0)	(21)	* 3/12	灰白 25Y8/1	内面: 施釉	貼り付け高台
254	白磁	皿/椀	2区	SD201	* 6.4	(21)	* 10/12	灰白 25Y8/2	内外面: ナデ	
255	白磁	皿	2区	SD201(上層)	* (4.0)	(12)	* 2/12	灰白 10YR8/1	内面: 施釉(浅黄緑 10YR8/3)	
256	白磁	皿	2区	SD201(上層)	* (3.6)	(12)	* 3/12	灰白 5Y8/1	内外面: 施釉(灰白 5Y7/1)	
257	青白磁	合子	2区	SD201(上層)	(6.0)	(13)	15/12	灰白 25Y8/1	内外面: 施釉	
258	青磁	皿/椀	2区	SD201(上層)	(10.1)	(15)	1/12	灰白 N8/0	施釉(浅黄緑 5Y7/2)	輪割ぎ、見込に除割有り
259	青磁	皿	2区	SD201	(9.8)	(16)	0.5/12	灰オリーブ 5Y6/2	全体に施釉 ヨコナデ	
260	青磁	椀	2区	SD201	* 6.4	(20)	* 12/12	灰白 5Y7/1	全体に施釉(オリーブ灰 2.5GY6/2)	見込に片切期による縦割花文有り
261	青磁	椀	2区	SD201(中層)	* (6.0)	(20)	* 1/12	灰オリーブ 5Y5/2	全体に施釉 底部: 露胎	見込に片切期による縦割花文有り
262	須恵器	蓋	2区	SD201(上層)	(26.1)	(19)	0.5/12	灰白 N8/0~灰白 N7/0	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	
263	須恵器	皿	2区	SD201(上層)	* (14.2)	(14)	* 0.5/12	灰白 25Y7/1	内外面: 回転ナデ	貼り付け高台
264	須恵器	鉢	2区	SD201	(5.8)	(32)	2/12	灰 N6/0	内外面: 回転ナデ	
265	緑釉陶器	壺	2区	SD201	-	(6.7)	-	灰オリーブ 5Y6/2	内外面: 施釉(暗オリーブ 7.5Y4/3)	
266	緑釉陶器	壺	2区	SD201(中層)	* (14.2)	(3.8)	* 2/12	深緑	内外面: 施釉 底に輪だまり	貼り付け高台
267	土師器	皿	2区	SD203	8.6	11	4/12	にぶい黄緑 10YR6/3	外面: ヨコナデ、エビオサエ後ナデ 内面: ナデ	
268	土師器	皿	2区	SD203	(12.0)	22	2/12 以下	にぶい橙 5YR7/4	外面: ナデ、エビオサエ後ナデ 内面: ナデ	
269	瓦器	椀	2区	SD203	(12.0)	4.4	2/12	暗オリーブ灰 2.5GY3/1	外面: エビオサエ、ヨコナデ、ナデ 内面: ミガキ	
270	土師器	皿	2区	SD204	(6.8)	(10)	1/12	にぶい黄緑 7.5YR6/4	内外面: ヨコナデ、ナデ 外面: エビオサエ	
271	土師器	皿	2区	SD204	(10.0)	(21)	1/12 以下	橙 5YR7/6	外面: ナデ 内面: ナデ 口縁部: ヨコナデ	白雲母含む
272	瓦器	椀	2区	SD204	(12.6)	(3.9)	1/12	灰 N5/0	外面: ナデ(エビオサエ) 内面: ミガキ、暗文	貼り付け高台
273	瓦器	椀	2区	SD204	(15.0)	(3.4)	1/12 以下	灰 N4/0	ミガキ	
274	瓦器	椀	2区	SD204	* 5.0	(21)	4/12	灰 N4/0	外面: ナデ 内面: ミガキ、暗文	貼り付け高台
275	土師器	皿	2区	SK202	(13.0)	(18)	1/12	灰黄 2.5Y7/2	外面: ナデ 口縁部・内面: ヨコナデ	
276	土師器	皿	2区	SK202	(10.7)	(23)	1/12	浅黄緑 7.5YR8/4	外面: ナデ 口縁部・内面: ヨコナデ	赤色斑粒含む
277	瓦器	椀	2区	SK202	(13.4)	(3.1)	1/12	灰 N4/0	外面: ナデ、エビオサエ 内側: ミガキ	
278	瓦器	椀	2区	SK202	* (5.2)	(18)	2/12	灰 N3/0	外面: ナデ 内面: ミガキ	貼り付け高台、赤色斑粒含む
279	土師器	皿	2区	SE225	(8.8)	(1.4)	2/12	にぶい黄緑 10YR7/3	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	赤切り痕
280	土師器	皿	2区	SE225	(9.1)	(1.6)	1/12 以上	灰白 10YR8/2	外面: ヨコナデ、ナデ 内面: ヨコナデ	
281	土師器	皿	2区	SE225	-	(2.0)	-	にぶい橙 7.5YR7/3	外面: ナデ 内面: ナデ	赤切り痕
282	土師器	皿	2区	SE225	8.4	1.3	ほぼ 完形	淡赤橙 2.5YR7/3~ 淡橙 5YR8/3	外面: ナデ 内面: ナデ	
283	土師器	2区	SP221	9.0	1.8	6/12	にぶい黄緑 10YR7/2	外面: ナデ、内面: ナデ	赤切り痕	
284	平瓦	-	2区	SD201(中層)	長(8.7)	幅(8.7)	-	にぶい黄緑 10YR7/2	襷目痕、割痕	
285	平瓦	-	2区	SD201	長(7.5)	幅(6.2)	-	灰白 N7/0	襷目痕、襷目痕 断面: ケズリ	
286	平瓦	-	2区	SD201	長(8.0)	幅(8.0)	-	灰 7.5Y6/1	襷目痕、襷目痕 断面: ケズリ	
287	石製品	硯	2区	SD201(上層)	長(7.6)	幅(6.0) 厚1.1	-	オリーブ灰 5GY6/1	-	
288	石製品	石皿	2区	包含層	長1.9	幅1.8 厚0.3	完形	暗赤褐色 2.5YR3/3	-	チャート製、重さ0.7g

平成27年度 出雲遺跡第20次・三日市遺跡第13次・車塚遺跡第11次

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	高さ (cm)	残存率	色調	整形技法(調整)	備考
289	弥生土器	壺	3区	SD310(中層)	(150)	(50)	2/12	灰白 10YR8/2	外面:ハケ・ケズリ後ナデ消し 内面:ナデ 沈線か	
290	弥生土器	長頸壺	3区	SD310	(141)	(51)	1/12	浅黄橙 7.5YR8/3	外面:ヨコナデ(磨滅) 内面:ケズリ後ナデか	
291	弥生土器	長頸壺	3区	SD310	(169)	(70)	2/12	浅黄橙 7.5YR8/3	外面:ヨコナデ、ミガキ、ハケ 内面:ナデ、ミガキ	
292	弥生土器	広口壺	3区	SD310	(135)	(78)	1/12	にぶい橙 7.5YR7/4	外面:ナデ 内面:ヨコナデ、ケズリ後ナデ消し	
293	弥生土器	壺	3区	SD310(中層)	-	(47)	1/12	浅黄橙 7.5YR8/3	外面:ヨコナデ、タタキ 内面:ナデ、ケズリ	雲母含む
294	弥生土器	壺	3区	SD310(中層)	(119)	(15)	1/12	灰白 10YR8/2	ヨコナデ 外面:刺突文	
295	弥生土器	壺/甕	3区	SD310	- * 5.0	(26)	* 4/12	にぶい褐 7.5YR5/3	外面:ケズリ後ヨコナデ、エビオサエカ、内面:ハケ	
296	弥生土器	高杯	3区	SD310(中層)	(脚) (7.3)	(7.4)	3/12	浅黄橙 7.5YR8/3	外面:ハケ 内面:ナデ	
297	須恵器	杯/皿	3区	SK313	- * 12.0	(1.3)	* 3/12	灰 5Y6/1	回転ナデ	貼り付け高台
298	土師器	皿	3区	SX304	9.8	(1.8)	5/12	にぶい橙 10YR7/3	全体磨滅、エビオサエ	
299	土師器	皿	3区	SX304	(7.8)	(1.6)	3/12	にぶい橙 7.5YR7/4	外面:ナデ、エビオサエ 内面:ナデ	
300	瓦葺土器	鉢	3区	SE302	(32.2)	(6.6)	1/12	黒 N2/0	外面:ナデ、指頭圧痕 内面:ナデ後ハケ、カキメ	
301	土師器	皿	3区	SX305	(9.2)	1.3	1/12	灰白 10YR8/1	ナデ、ヨコナデ	糸切り痕
302	土師器	壺	3区	SX305	(23.0)	(7.7)	1/12	にぶい黄橙 10YR6/3	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ケズリ	雲母含む
303	瓦器	碗	3区	SX305	13.0 * 4.0	6.1	6/12	黒褐色 2.5Y3/1	外面:ナデ、ナデ後ミガキ、内面:ナデ後ミガキ	糸切り痕
304	瓦器	碗	3区	SX305	(15.8)	(4.7)	2/12	黒 M1.5/0	外面:エビオサエ、ミガキ内面:ミガキ	見込みに格子状磨文
305	瓦器	碗	3区	SX305	(15.8)	(3.6)	1.5/12	灰黄 2.5Y7/2	内面:磨滅、ヨコナデ 外面:ヨコナデ、凹線か	
306	土師器	皿	3区	SX305	(9.6)	(1.9)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	ナデ	「て」字口縁
307	土師器	皿	3区	SX305	9.6	1.8	完形	にぶい橙 5YR7/4	ナデ	糸切り痕、赤色顔粒含む
308	土師器	皿	3区	SX305(中層)	11.6	1.4	6/12	明褐色 7.5YR/7-2	ナデ、ヨコナデ	糸切り痕
309	土師器	皿	3区	SX305	10.4	2.0	7/12	灰白 2.5Y8/1	ナデ	糸切り痕、茶色顔粒含む
310	瓦器	碗	3区	SX305	(15.7)	(3.8)	3/12	灰 5Y4/1	内外面:ヨコナデ、エビオサエ、内面:沈線	雲母含む
311	瓦器	碗	3区	SX305	(13.4)	(4.4)	1/12	灰 N4/0	磨滅、エビオサエ 外面:ナデ	
312	瓦器	碗	3区	SX305	(12.4) * 4.3	3.3	1/12	灰白 10YR8/2	外面:ヨコナデ、ミガキか、内面:調整不明	貼り付け高台
313	白磁	碗	3区	SX305	(20.0)	(2.6)	1/12	灰白 2.5GY8/1	施釉(明オリブ灰 2.5GY7/1)	
314	白磁	碗	3区	SX305	(15.8)	(4.1)	1/12	灰白 N8/0	施釉(灰白 5Y7/2)	内外共に貫入多い
315	白磁	碗	3区	SX305(中層)	(16.0)	2.1	1.5/12	灰白 2.5Y7/1	施釉 外面:ケズリ	
316	白磁	碗	3区	SX305	(13.9)	(2.5)	1/12	灰白 2.5GY8/1	施釉(明オリブ灰 2.5GY7/1)	
317	須恵器	碗	3区	SX305	- * (6.2)	(3.5)	* 2/12	灰 5Y6/1	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ	糸切り痕
318	須恵質陶器	壺	3区	SX305	- * 12.7	(13.3)	4/12	灰 N5/0	外面:回転ナデ、ケズリ、内面:回転ナデ	
319	須恵器	壺底部	3区	SX305(中層)	(9.0)	2.4	1.5/12	灰 6/0	ロクロナデ	糸切り痕
320	石製品	石鐮	3区	SX305	- * (24.0)	(3.8)	* 2/12	灰 N6/0	外面:ケズリ 内面:ミガキ	滑石製
321	弥生土器	壺	3区	SX305(中層)	(141)	(3.9)	1/12	浅黄橙 10YR8/3	外面:刺突文、ハケ、沈線か、タタキ 内面:ナデ、ハケ	
322	土師器	壺	3区	SX305	(9.0)	5.0	2/12	橙 5YR6/6	外面:ナデ、内面:ヨコナデ、磨滅、エビオサエカ	
323	土師器	皿	3区	SP323	(8.0)	(2.0)	2/12	にぶい橙 7.5YR7/3	外面:ナデ、エビオサエ(口縁部) 内面:ナデ	赤色顔粒含む
324	土師器	皿	3区	SP340	(8.7)	1.7	2/12	にぶい黄橙 10YR7/3	外面:ヨコナデ、エビオサエ、ナデ 内面:ナデ	

報告 番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法(調整)	備考
325	土師器	皿	3区	SP362	82	1.6	4/12	にぶい橙 7.5YR6/4	外面:ナデ、エビオサエ ナデ、一部ハケ	内面: 赤色斑粒含む
326	須恵器	蓋	3区	SD301	(16.9)	(2.0)	2/12	灰 N6/0	外面:回転ナデ、回転ケズリ 内面:回転ナデ	
327	須恵器	杯/皿	3区	SD301	★ (9.5)	(1.5)	★ 2/12	灰白 N7/0	外面:ナデ、ケズリ 内面: ナデ	
328	須恵器	杯/皿	3区	SD306	★ (9.8)	(1.4)	1/12	灰 N6/0	回転ナデ	貼り付け高台
329	緑釉 陶器	椀	3区	SD306(上層)	-	(1.7)	-	灰白 5Y8/1	施釉、底部露胎	
330	須恵器	杯身	3区	包含層	(12.0)	(3.0)	1/12	灰 N6/0	回転ナデ	
331	須恵器	壺	3区	SD301	-	(4.8)	-	灰 N5/0	格子タタキ	
332	須恵器	椀	3区	包含層(上層)	(14.6)	(3.2)	2/12	灰 5Y6/1	回転ナデ	
333	瓦器	椀	3区	包含層	★ (6.3)	(0.8)	★ 2/12	灰 N4/10	外面:エビオサエ 内面:ナデ (磨滅)	貼り付け高台
334	陶器	播鉢	3区	包含層	(13.3)	(4.1)	-	橙 5YR6/6	外面:ナデ、エビオサエ 内面: 播目(1本引き)	
335	養生 土器	壺	2区	SD31	(18.0)	(1.6)	1.5/12	灰白 10YR8/2	内外面:ナデ	茶色斑粒多く含む
336	養生 土器	壺	2区	SD31	(16.2)	(2.5)	2/12	にぶい黄橙 10YR7/3	外面:キザミ、ナデ 内面:ハケ	赤色斑粒含む
337	養生 土器	壺/甕	2区	SD31	- ★ 5.3	(5.0)	9/12	淡黄 2.5Y8/3	外面:ナデ 内面:ケズリ	赤色斑粒含む
338	養生 土器	甕	1区	SD50	(18.6)	(3.4)	-	灰黄 2.5Y7/2	外面:摩滅、竹管文 内面:ハケ	
339	瓦質 土器	羽釜	1区	SX6	(15.0)	(4.5)	1/12	灰 N4/0	外面:ナデ、摩滅 内面:摩滅	
340	土師器	皿	1区	SX6	(12.4)	(2.2)	2/12	にぶい黄橙 7.5YR7/4	摩滅、ヨコナデ	赤色斑粒含む
341	白磁	椀	1区	SX10	(10.4)	(2.3)	2/12	灰白 7.5Y 8/1	施釉	
342	須恵器	椀	1区	SX3	- ★ 5.8	(1.4)	4/12	灰白 N7/0	内面:回転ナデ	削り出し高台
343	白磁	椀	1区	SX23	- ★ 4.6	(1.7)	3/12	灰白 5Y8/2	施釉(灰白 5Y8/2)	削り出し高台
344	須恵器	高杯	1区	包含層	/	(10.4)	-	灰白 7.5Y7/1	内面:回転ナデ、自然釉 外面:沈澱あり	
345	須恵器	蓋	1区	SX7	(20.0)	2.0	1.5/12	灰白 2.5Y8/1	回転ナデ	
346	須恵器	蓋	1区	SX7	(17.8)	(1.1)	1/12	灰白 N6/0	回転ナデ	
347	土師器	皿	1区	SX1	(12.1)	2.4	2/12	にぶい黄橙 7.5YR7/4	外面:ヨコナデ、エビオサエ 内面:ヨコナデ、ナデ	赤色斑粒含む
348	瓦質 土器	羽釜	1区	SX19	(19.9)	(6.3)	1/12	黒黒 2.5Y3/1	外面:ナデ、エビオサエ 内面:ハケ	
349	須恵器	杯蓋	1区	包含層	(17.4)	(2.1)	1/12	灰白 2.5Y7/1	外面:回転へう削り、回転ナ デ 内面:ナデ	
350	瓦器	椀	1区	包含層	(12.2)	(3.4)	1/12	灰白 2.5Y8/2	ナデ(全体摩滅)	
351	瓦器	椀	1区	包含層	(12.7)	(2.2)	1/12	灰 N4/0	ミガキ	
352	瓦器	椀	1区	包含層	(13.0)	(2.8)	1/12	灰 N4/0	外面:ミガキ 内面:割摩	
353	瓦器	椀	1区	包含層	- ★ (7.0)	(1.2)	2/12	灰 N4/0	外面:ナデ 内面:摩滅	貼り付け高台
354	白磁	椀	1区	包含層	(16.0)	(3.5)	1/12	灰白 5Y7/2	施釉	
355	石製品	石鏃	1区	SX20	長 (2.55)	幅 1.6	-	にぶい赤黒 2.5YR4/4	-	チャート製、重さ 1.1g
356	石製品	削片	2区	SX20	長(1.6)	幅 1.4	-	暗灰 N3/0	-	サヌカイト製
357	石製品	石包丁	2区	SD31	長 (10.6)	幅(5.1)	-	灰 N4/0	-	結核岩製
358	木製品	曲物	1区	SX6	径 11.2 ~ 12.6	(8.0)	底板 変形	-	-	底板厚 0.6cm、側板厚 0.2cm、 ヒノキ製、板樹皮
359	木製品	曲物/ 柄杓	1区	SX1	径 15.0	(5.9)	-	-	-	内面に圧痕、ヒノキ製、板樹 皮
360	木製品	部材	1区	SX1	長(5.3)	厚(0.4)	-	-	-	板樹皮
361	木製品	部材	1区	SX1	長(5.5)	厚(0.4)	-	-	-	板樹皮
362	瓦質 土器	火鉢	1区	SX12上層	18.5	(10.3~ 10.8)	5/12	暗灰 N3/0	外面:ヨコナデ後ミガキ 内 面:ナデ、ミガキ 口縁部:キザミ	底部外面に線刻「天明八(1788) 年 申 正月 吉日」
363	土師 器	瓦用 トナシ	1区	SX1	長 (10.0)	幅 6.4	-	にぶい橙 7.5YR7/4	工具によるナデ、指圧痕	

報告番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法 (調整)	備 考
364	土師器 甕	瓦用 トナシ	1区	SX1	長 (9.1)	幅 6.2	-	灰白 75Y7/1 ~ 灰 N5/0	ナデ	底部にガラス質付着
365	埴	-	1区	SX12	長 (12.8)	幅 (13.8)	-	にぶい黄橙 10YR7/4	ヘラ状工具による連続する沈 澱	厚 3.6cm
366	埴	-	1区	SX12	長 (11.1)	幅 (12.2)	-	にぶい黄橙 10YR7/3	ハケ状工具による連続する沈 澱	厚 4.05cm
367	軒椀瓦	-	1区	SX12	長 (9.0)	幅 (24.0)	-	暗灰 N4/0	ミガキ、ナデ、ケズリ、面取 り	径 3mm 大の石粒含む
368	軒椀瓦	-	1区	SX12	長 (15.0)	幅 25.5	-	灰 N4/0	ミガキ、ヨコナデ、ケズリ、 面取り	
369	軒椀瓦	-	1区	SX12	長 (6.3)	幅 (9.5)	-	暗灰 N4/0	ミガキ、ナデ、ケズリ、面取 り	

平成29年度 三日市遺跡第14次・車塚遺跡第12次

調査番号	種類	器種	地区名	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	残存率	色調	整形技法(調整)	備考
370	須恵器	蓋	4区	SP116	(16.0)	(1.5)	1/12	灰N5/0	外面:回転ケズリ、回転ナデ、重ね焼き痕 内面:回転ナデ	
371	須恵器	蓋	4区	SP121	/	(14.8)	1/12	灰N4/0	外面:回転ケズリ後回転ナデ、沈腐か 内面:回転ナデ	
372	土師器	鍋	4区	SP156	(34.0)	(9.5)	2/12	明焼灰 7.5YR7/2	外面:ヨコナデ、荒いハケ 内面:ナデ、ケズリ後ハケ	外面下方にスス付着
373	須恵器	蓋	5区	SK201	(13.9)	(1.3)	1/12	灰白 5Y7/1	回転ナデ	
374	須恵器	蓋	5区	SK201	(15.9)	(1.1)	1/12	灰白 N7/0	外面:回転ナデ、回転ケズリ 内面:回転ナデ	
375	須恵器	杯B	5区	包含層	★(9.0)	(1.6)	★2/12	灰白 5Y7/1	外面:回転ナデ、ケズリか 内面:回転ナデ	貼り付け高台
376	須恵器	皿	5区	包含層	★(15.6)	(1.4)	★1/12	灰白 N7/0	回転ナデ	貼り付け高台
377	縄文土器	深鉢	5区	包含層	-	(4.4)	-	に灰+黄橙 10YR5/3	外面:薄塗、八の字に凹線 内面:ナデ	
378	縄文土器	深鉢	5区	包含層	-	(4.3)	-	に灰+黄橙 10YR7/4	外面:凹線ナデ、黒塗 内面:ナデ	
379	縄文土器	深鉢	5区	包含層	長4.5	厚4.5~6.0	-	橙 7.5YR6/6	外面:縄目文	
380	縄文土器	深鉢	5区	包含層	-	(6.6)	-	灰黄橙 10YR5/2	ナデ	
381	弥生土器	底部	5区	包含層	★(9.5)	(3.0)	★2/12	灰白 10YR8/2	不明瞭	
382	弥生土器	底部	5区	包含層	★(6.6)	(2.5)	★3/12	橙 5YR7/8	外面:ナデ 内面:ケズリ痕	
383	石製品	石斧	5区	包含層	長8.6	幅5.1	-	灰白 N6/0	Peckingによる整形	砂岩製、厚さ3.2cm
384	石製品	石匙	5区	包含層	長8.7	幅1.7	-	灰白 N4/0	-	石小刀、サヌカイト製、定形品、厚さ1.2cm(最大)、重さ17.5g
385	銅製品	不明	5区	包含層	長9.6	幅1.45	-	-	-	厚さ0.5cm
386	平瓦	-	4区	SP114	長(7.0)	幅(6.3)厚1.3	-	に灰+黄橙 10YR7/3	刺刺、縄目痕	
387	平瓦	-	4区	SP128	長(6.0)	幅(7.3)厚1.7	-	に灰+黄橙 10YR7/3	刺刺、縄目痕	
388	平瓦	-	4区	SP114	長(6.0)	幅(4.6)厚2.1	-	灰 N6/0	布日痕、縄目痕、ケズリ	
389	軒平瓦	-	5区	包含層	長(3.8)	瓦当高2.0	-	橙 7.5YR7/6	ナデ、調整不明	雲母・クサリ礫含む
390	平瓦	-	5区	SK201	長(5.4)	幅5.5厚2.9	-	灰 5/1	布日、ハケ、ナデ、縄目	
391	平瓦	-	5区	包含層	長(15.1)	幅8.2厚2.7	-	灰白 N7/0	ナデ、工具ナデ、縄目、布日、ケズリ	
392	平瓦	-	5区	包含層	長(10.2)	幅(11.5)	-	灰白 N6/1	ナデ、ヘラ削り、面取り、縄目、布日	
393	平瓦	-	5区	SK201	長(8.0)	幅(7.5)	-	灰白 25V7/1	ヘラナデ、ケズリ、縄目、布日	
394	平瓦	-	5区	SK201	長(11.7)	幅(7.8)	-	黄橙 10YR8/6	ケズリ、縄目、布日、面取り	チャート・クサリ礫を含む
395	平瓦	-	5区	SK201	長(10.8)	幅(10.3)	-	灰 N6/0	ケズリ、縄目、布日	
396	平瓦	-	5区	SK201	長(7.7)	幅(10.9)	-	灰 N6/1	ヘラ削り、ナデ、縄目、布日、横骨痕	
397	平瓦	-	5区	SK201	長(10.9)	幅(7.5)	-	灰 5Y6/1	ヘラナデ、ヘラケズリ、縄目、布日	
398	平瓦	-	5区	SK201	長(7.8)	幅(11.6)	-	灰 N5/10	ケズリ、縄目、布日	
399	平瓦	-	5区	SK201	長(8.1)	幅(12.5)	-	黄灰 2.5Y6/0	縄目、布日	
400	平瓦	-	5区	SK201	長6.0	幅8.3	-	灰白 5Y7/1	縄目、布日	

圖 版

佐伯遺跡第7～9次

(1) A-3a区全景(南から)



(2) A-3b区全景(南から)



(3) A-5区全景(西から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) A-6区全景(南から)



(2) B-1区全景(南から)



(3) C-2区全景(西から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) C-4a区全景(北から)



(2) C-4b区全景(北西から)



(3) C-5c区全景(南東から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) D-1d区全景(西から)



(2) D-1e区全景(西から)



(3) E-1a区全景(南西から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) E-1b区全景(北から)



(2) E-2b区全景(北西から)



(3) E-2c区全景(北東から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) E-3a区全景(南東から)



(2) E-3b区全景(西から)



(3) E-3c区全景(西から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) E-3d・e区全景(西から)



(2) E-3区全景(北東から)



(3) E-3g区全景(西から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) E-3h区全景(西から)



(2) E-3k区全景(北から)



(3) E-3l区全景(北から)

佐伯遺跡第7～9次



(1) 第7次調査地全景(北西から)



(2) 1トレンチ全景(南から)



(3) 2トレンチ全景(西から)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 3 トレンチ全景(北から)



(2) 4・5 トレンチ遠景(東から)



(3) 4 トレンチ全景(上が北)

佐伯遺跡第7～9次

(1) 4トレンチ掘削建物SH101
全景(南から)



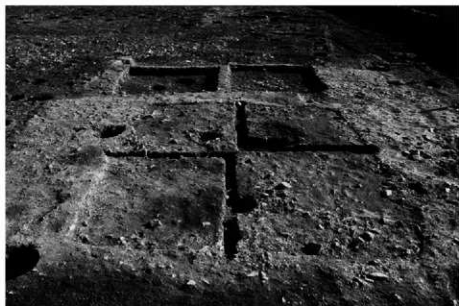
(2) 4トレンチ掘削建物SH101
須恵器出土状況(南から)



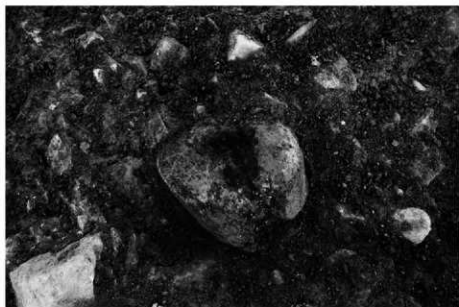
(3) 4トレンチ掘削建物SH102
全景(南東から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) 4トレンチ堅穴建物SH103
全景(西から)



(2) 4トレンチ堅穴建物SH103
ピットSP113遺物出土状況
(西から)



(3) 4トレンチ堅穴建物SH104
全景(西から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) 4トレンチ型穴建物S H105
全景(西から)



(2) 4トレンチ型穴建物S H133・
134全景(南から)



(3) 4トレンチ型穴建物S H172
全景(西から)



佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 4トレンチ堅穴建物 SH225・226 全景(西から)



(2) 4トレンチ掘立柱建物群全景(南から)



(3) 4トレンチ掘立柱建物 SB14 全景(南から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) 4トレンチ掘立柱建物S B15
全景(南から)



(2) 4トレンチ掘立柱建物S B17
全景(南から)



(3) 4トレンチ掘立柱建物S B18
全景(北西から)



佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 4 トレンチ掘立柱建物 S B 19
全景(南から)



(2) 4 トレンチ土坑 S K 118 全景
(南東から)



(3) 4 トレンチ土坑 S K 180 全景
(南から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) 4トレンチ土坑S K180遺物
出土状況(南東から)



(2) 4トレンチピットS P63遺物
出土状況(東から)



(3) 4トレンチピットS P331遺物
出土状況(南から)



佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 5 トレンチ全景(南から)



(2) 5 トレンチ堅穴建物 SH01 全景
(北から)



(3) 5 トレンチ SK07 遺物出土状況
(東から)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 6～11トレンチ遠景(南から)



(2) 6トレンチ全景(垂直上が北)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 7 トレンチ全景(垂直左が北)



(2) 8 トレンチ全景(垂直右が北)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 9 トレンチ全景(垂直右が北)



(2) 10・11 トレンチ全景(垂直右が北)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 12～15・B-4～B-6 トレンチ遠景(南東から)



(2) 12・B-4～B-6 トレンチ全景(垂直上が北)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 13トレンチ全景(垂直上が北)



(2) 14・B-2トレンチ全景(垂直上が北)

佐伯遺跡第7～9次



(1) 15トレンチ全景(垂直下が北)



(2) A-1トレンチ全景(垂直右が北)

佐伯遺跡第 7～9 次

(1) 6 トレンチ全景(西から)



(2) 6 トレンチ竪穴建物 S H17 全景
(南東から)



(3) 6 トレンチ竪穴建物 S H20 全景
(西から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) 6トレンチ土坑SK176
全景(東から)



(2) 7トレンチ全景(西から)



(3) 7トレンチ掘立柱建物SB1
全景(北から)

佐伯遺跡第 7～9 次

(1) 8 トレンチ溝 S D 3 完掘状況
(北から)



(2) 8 トレンチ自然流路 N R 14
完掘状況(東から)



(3) 9 トレンチ自然流路 N R 14
完掘状況(西から)



佐伯遺跡第7～9次



(1)10トレンチ全景(南から)



(2)10トレンチ井戸SE02全景
(北西から)



(3)11-aトレンチ全景(北から)

佐伯遺跡第7～9次

(1)11-a トレンチ溝SD1 全景
(西から)



(2)11-b トレンチ全景(南から)



(3)11-c トレンチ全景(北から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) 12-a トレンチ全景
(垂直上が北)



(2) 12-a トレンチ掘立柱建物
S B10全景(北から)



(3) 12-a トレンチ掘立柱建物
S B11全景(南東から)

佐伯遺跡第 7～9 次

(1) 12-a トレンチ土坑 S K 9
遺物出土状況(東から)



(2) 12-b トレンチ全景(南から)



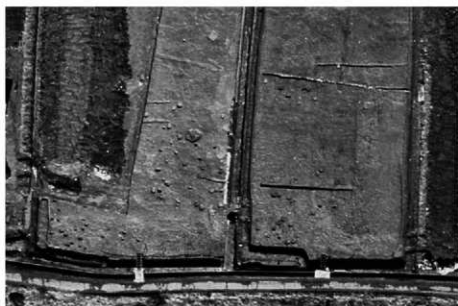
(3) 12-b トレンチ溝 S D12
土層断面(南から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) 13トレンチ全景(南西から)



(2) 14トレンチ南半部(垂直上が北)



(3) 14トレンチ掘立柱建物SB3
検出状況(西から)

佐伯遺跡第7～9次

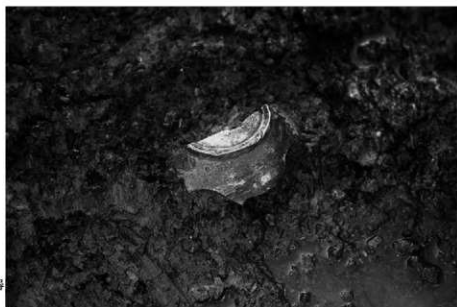
(1) 14トレンチ掘立柱建物S B14
検出状況(東から)



(2) 14トレンチ土坑S K 1完掘状況
(東から)



(3) 14トレンチ土坑S K 1 緑釉陶器
出土状況(南から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) A-1 トレンチ全景(北東から)



(2) B-2 トレンチ全景(西から)



(3) B-2 トレンチピット S P06
灰軸陶器出土状況(北から)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) B-3 トレンチ全景(北から)



(2) B-4 トレンチ全景
(垂直上が北)



(3) B-4 トレンチ掘立柱建物
S B126 全景(南西から)

佐伯遺跡第7～9次



(1) B-4 トレンチ土坑SK35遺物
出土状況(西から)



(2) B-5・B-6 トレンチ全景
(垂直上が北)



(3) B-5 トレンチ掘立柱建物
SB85全景(南西から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) B-5トレンチ掘立柱建物
S B 23全景(東から)



(2) B-5トレンチ井戸S E 38
井戸枠検出状況(南から)



(3) B-5トレンチ大日堂古墳
検出状況(西から)



佐伯遺跡第 7～9 次



(1) B-5 トレンチ大日堂古墳全景
(垂直左が北)



(2) B-5・B-6 トレンチ
溝 SD1 全景(北西から)



(3) B-6 トレンチ土坑 SK2
全景(南から)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 16トレンチ全景(西から)



(2) C-1トレンチ全景(上が北)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) 16 トレンチ溝 S D96 全景
(西から)



(2) 16 トレンチ溝 S D97 全景
(西から)



(3) 16 トレンチ南半部全景
(西から)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) C-1 トレンチ瓦溜まり S X04・06検出状況(南から)



(2) C-1 トレンチ掘立柱塼 SA1 全景(西から)

佐伯遺跡第7～9次



(1) C-1 トレンチ瓦溜まり S X01
検出状況(北から)



(2) C-1 トレンチ瓦溜まり S X01
軒丸瓦Ⅲ類出土状況(西から)



(3) C-1 トレンチ瓦溜まり S X06
検出状況(西から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) C-1 トレンチ瓦溜まり S X04
(部分) 検出状況(北西から)



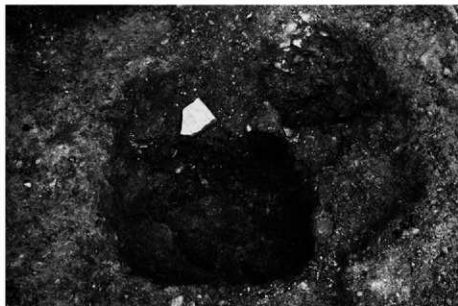
(2) C-1 トレンチ瓦溜まり S X04
軒平瓦IV類出土状況(北東から)



(3) C-1 トレンチ溝 S D05 全景
(南西から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) C-1 トレンチ掘立柱罫 S A 1
柱穴 S P99瓦片出土状況
(南から)



(2) C-1 トレンチ掘立柱建物
S B 2 全景(北西から)



(3) C-1 トレンチ竪穴建物
S H07 全景(西から)

佐伯遺跡第7～9次



(1) C-5 トレンチ全景(垂直上が北)



(2) C-5 a トレンチ溝 S D02 全景(北西から)

佐伯遺跡第 7～9 次



(1) C-5 a トレンチ溝 S D 02
墨書土器出土状況(西から)



(2) C-5 a トレンチ溝 S D 02
墨書土器出土状況(北から)



(3) C-5 a トレンチ溝 S D 02
木簡出土状況(北から)

佐伯遺跡第7～9次

(1) C-5 a トレンチ溝 S D02 下駄
出土状況(北から)



(2) C-5 a トレンチ溝 S D02 木製
皿出土状況(西から)



(3) C-5 a トレンチ溝 S D02 木製
品出土状況(北から)



佐伯遺跡第 7～9 次



(1) D-1 トレンチ全景(垂直下が北)



(2) D-2 トレンチ全景(垂直右が北)

佐伯遺跡第7～9次

(1) D-1 トレンチ溝 S D01 全景
(北から)



(2) D-1 トレンチ溝 S D02 全景
(南東から)



(3) D-1 トレンチ溝 S D03 全景
(北から)



佐伯遺跡第7～9次



(1) D-1 トレンチ溝 S D03 鬼板
出土状況(西から)

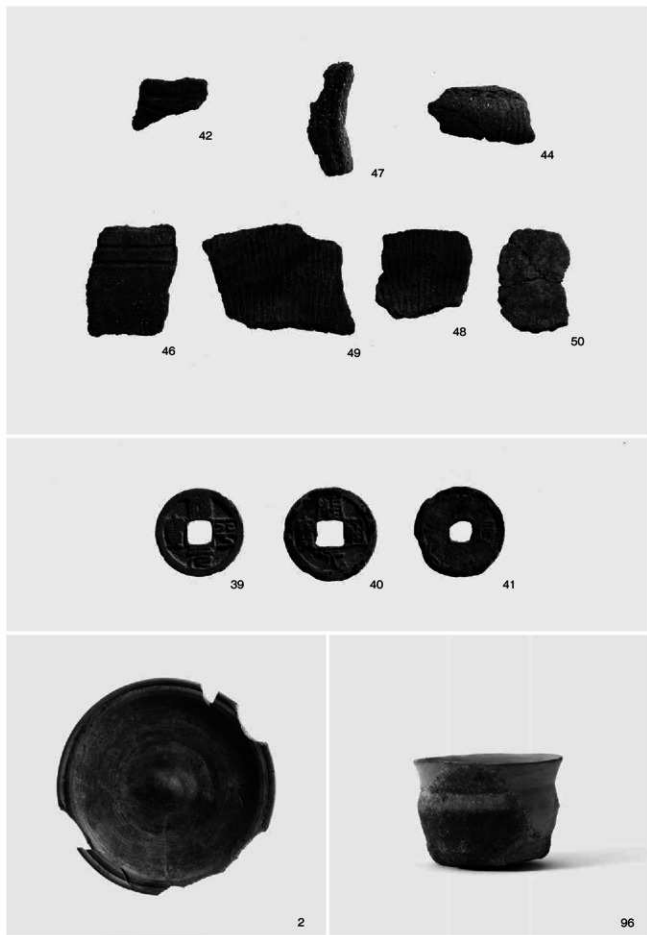


(2) D-2 トレンチ掘立柱建物
S B02 全景(南東から)



(3) D-2 トレンチ溝 S D01 全景
(南から)

佐伯遺跡第7～9次



佐伯遺跡第 7～9 次



167



177



209



218

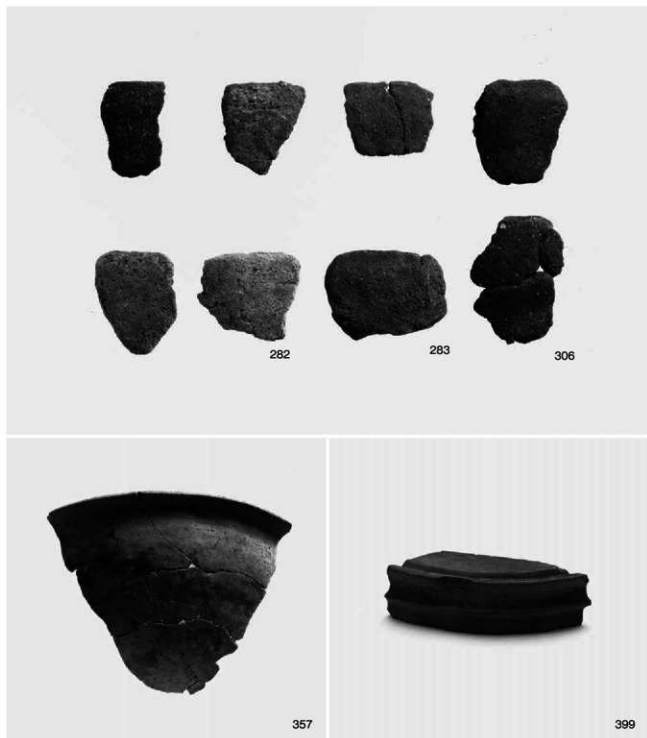


221



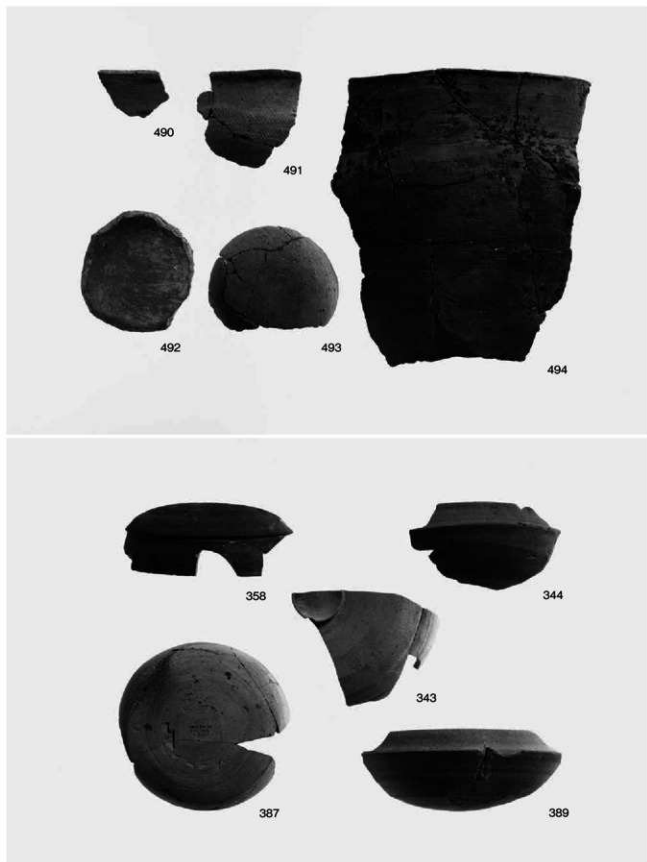
226

佐伯遺跡第 7～9 次



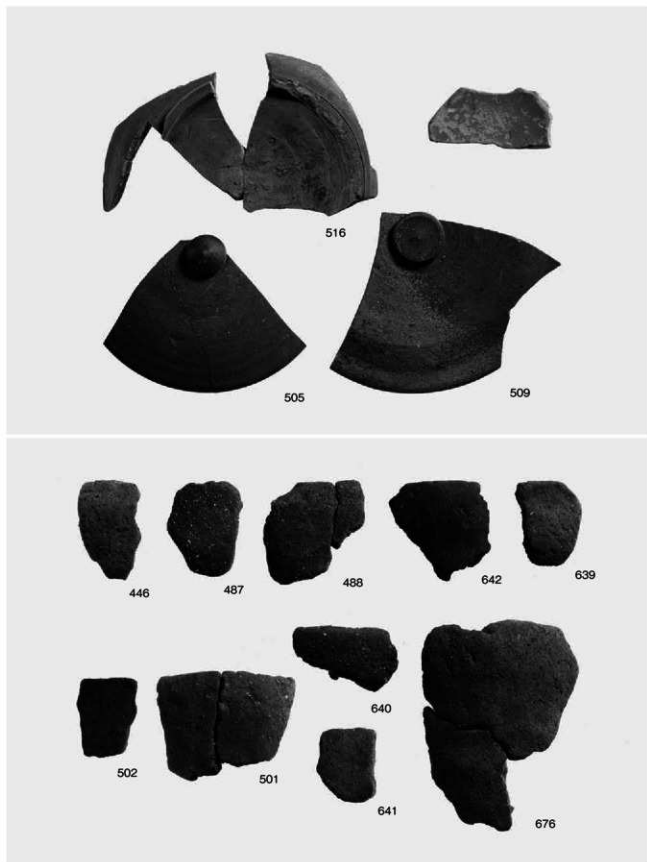
出土遺物 3

佐伯遺跡第7～9次



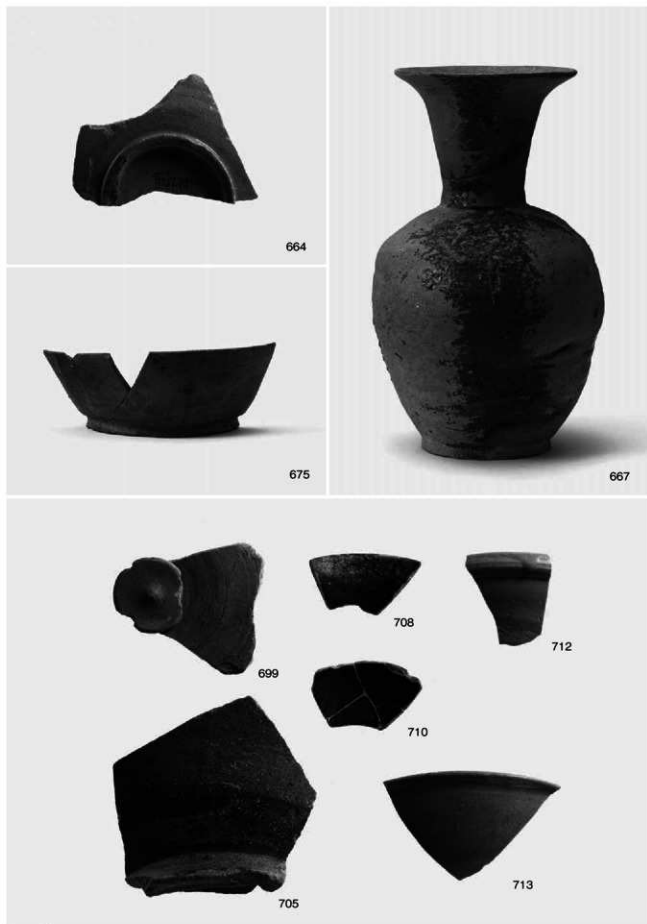
出土遺物 4

佐伯遺跡第 7～9 次

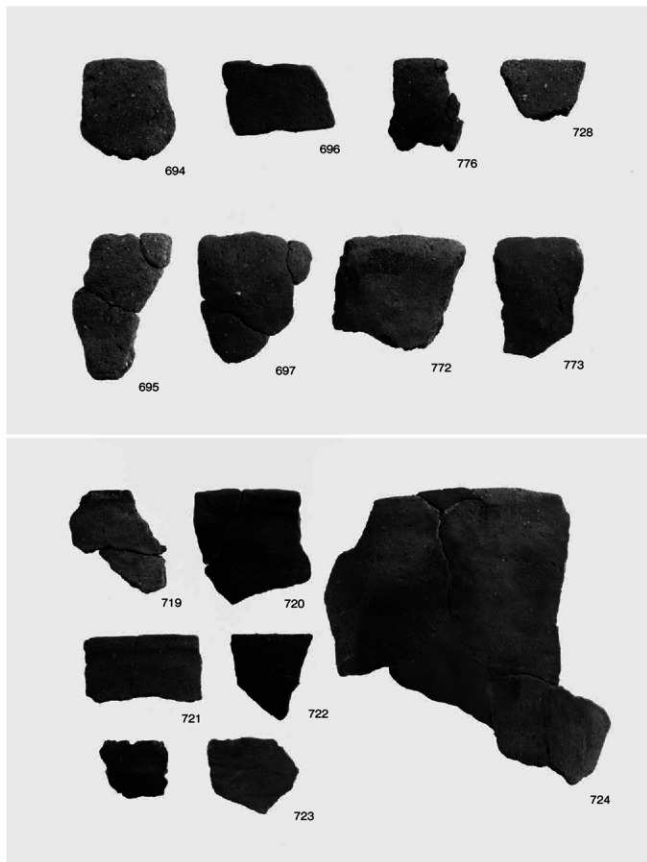


出土遺物 5

佐伯遺跡第 7～9 次

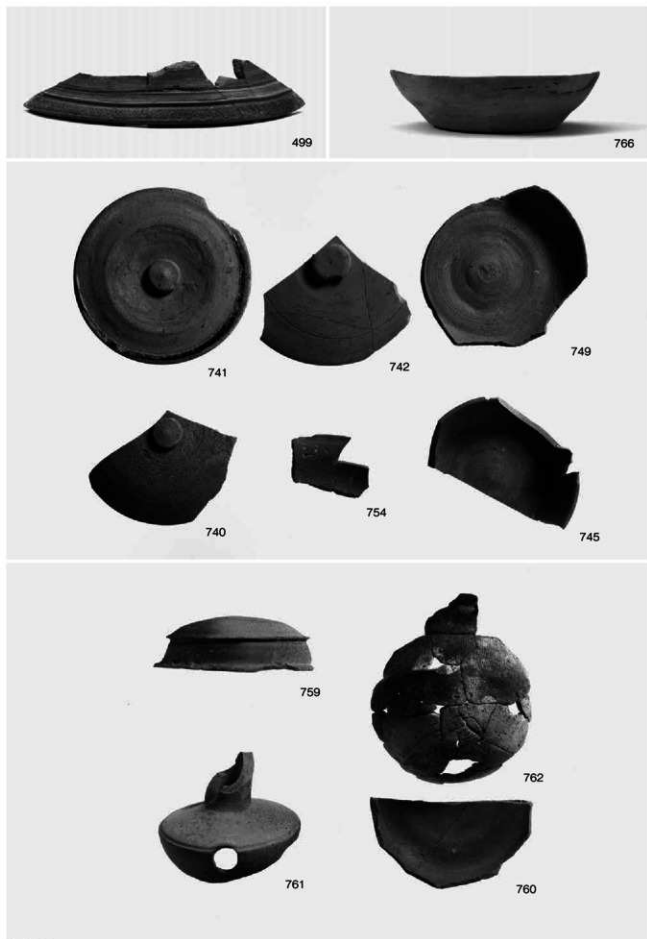


佐伯遺跡第 7～9 次



出土遺物 7

佐伯遺跡第 7～9 次



佐伯遺跡第 7～9 次



785



786



787



792



793



795



791



804



807

佐伯遺跡第7～9次



817



821



831



826



832



833

佐伯遺跡第7～9次



852



853



857



862



865



858



877



859



856



841

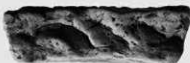
佐伯遺跡第 7～9 次



866



844



844



873



844



874



879



879

佐伯遺跡第 7～9 次



886



887



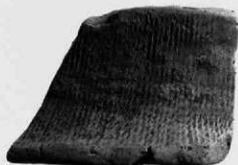
886



887



906



905

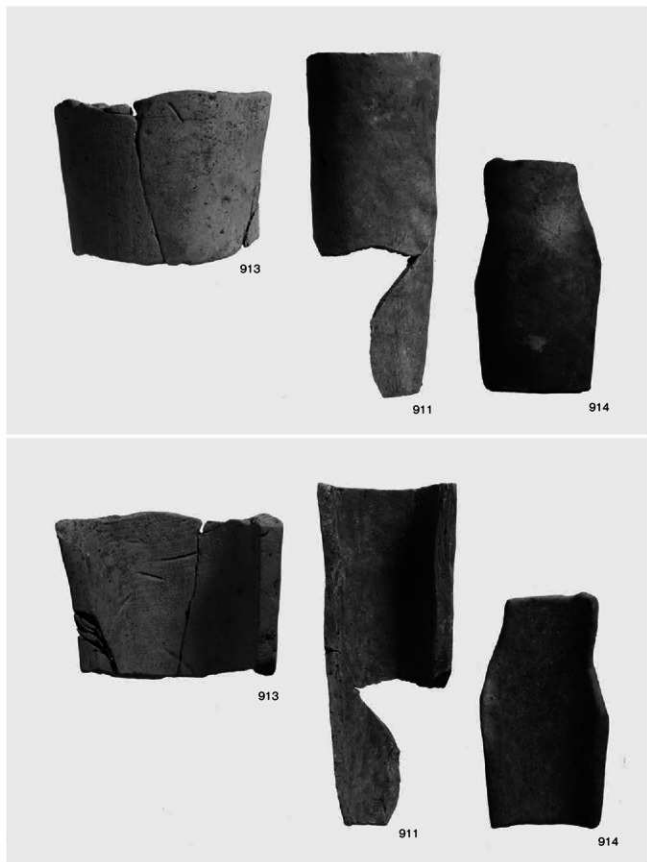


906



905

佐伯遺跡第7～9次



出土遺物14

佐伯遺跡第7～9次



910



910

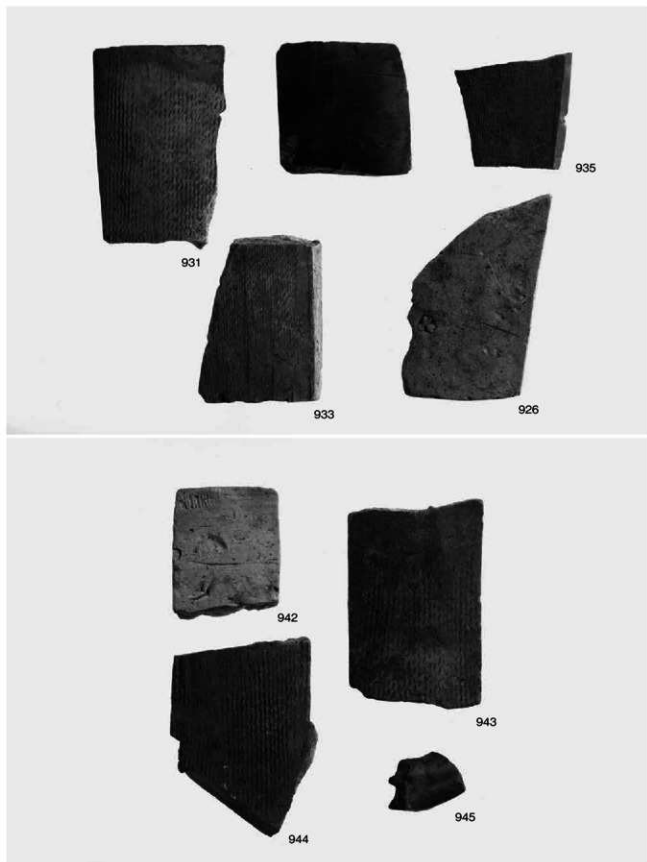


925



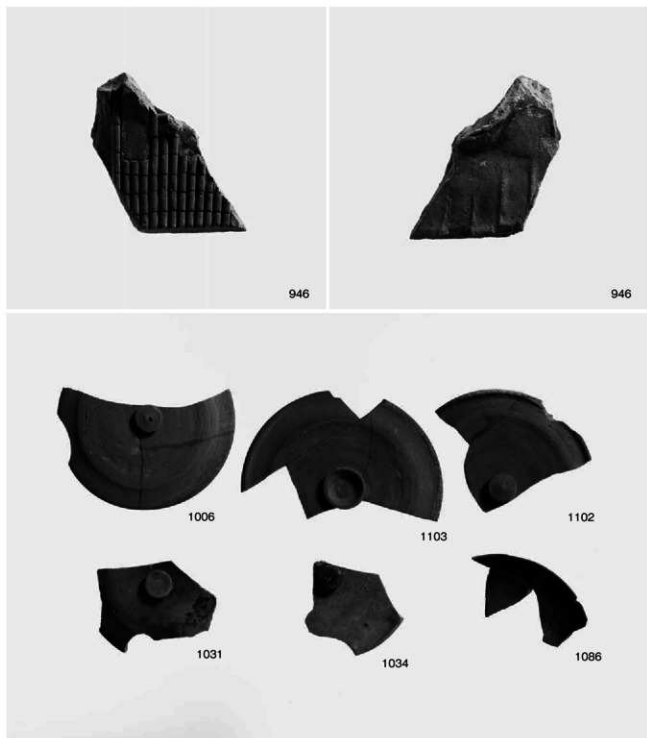
925

佐伯遺跡第 7～9 次



出土遺物16

佐伯遺跡第 7～9 次



出土遺物17

佐伯遺跡第 7～9 次



1189



1190



1191



1192



1194



1197

佐伯遺跡第7～9次



1198



1201



1202



1208



1211



1220

佐伯遺跡第 7～9 次



1227



1228



1234



1244

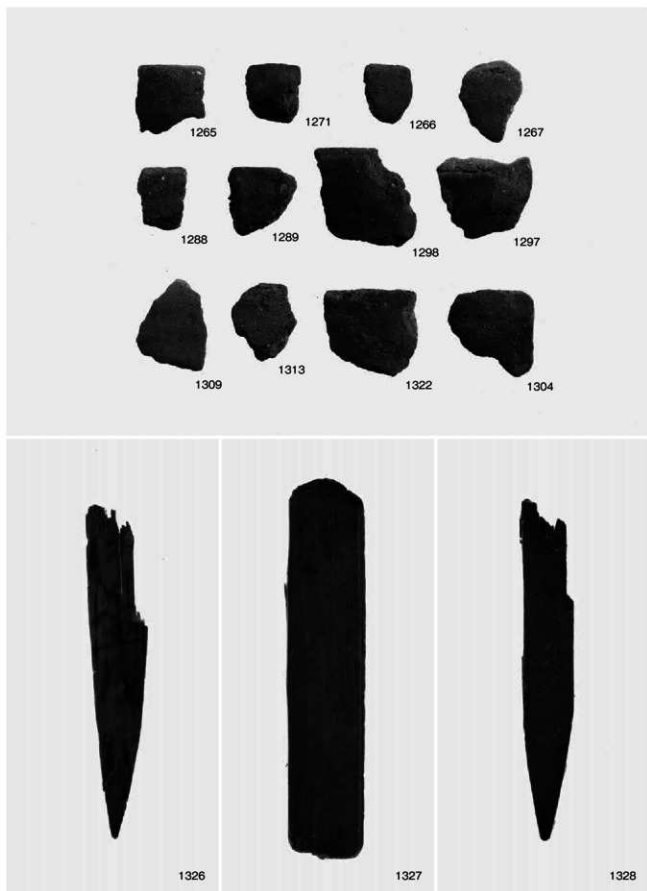


1262



1263

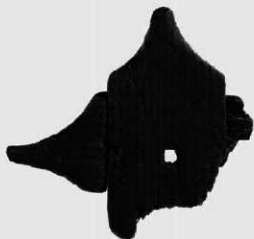
佐伯遺跡第 7～9 次



佐伯遺跡第 7～9 次



1329



1415



1388



1386



1387



1452



1461



(1) 南部調査対象区全景(空中写真、南から)



(2) 1区全景(北西から)



(1) 1区南西部全景(南東から)



(2) 土坑SK1(東から)



(3) 柱穴SP13(南西から)

(1) 北部調査地点調査前全景
(東から)



(2) 3トレンチ(東から)



(3) 4トレンチ(東から)





(1) 3トレンチ北壁(南から)



(2) 同 A T層検出部分(南から)

(1) 北部調査地点調査前(東から)



(2) 5トレンチ(東から)



(3) 5トレンチ北壁(南から)





(1) 6トレンチ全景(東から)



(2) 7トレンチ(南東から)



(3) 8トレンチ北横(南から)

(1) 9トレンチ(北から)



(2) 溝S D901(西から)



(3) 溝S D901土層断面(西から)





(1) 溝 S D 901 西端杭列 S X 910
(東から)



(2) 溝 S D 901 矢板検出状況
(北東から)



(3) 溝 S D 901 下駄出土状況
(西から)



(1)10トレンチ(南から)



(2)11トレンチ(南から)



(3)12トレンチ(南から)



(1)13 トレンチ(南から)



(2)14 トレンチ(南から)



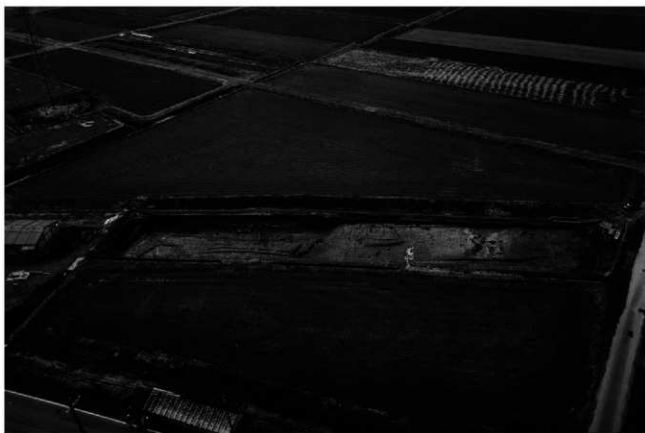
(3)15 トレンチ(南東から)



2区中1号墳葺石検出状況(南東から)



(1) 2区全景(北から)



(2) 2区全景(東から)



(1) 2区全景(南から)



(2) 2区南部全景(上が西)



(1) 2区中1号墳周濠S D201下層、葦石S X270(東から)



(2) 2区中1号墳周濠S D201下層、葦石S X270(北東から)



(1) 2区中1号墳周濠S D201下層、葺石S X270北部(東から)



(2) 2区中1号墳周濠、葺石S X270中央部(東から)



(1) 2区中1号墳周濠、葦石S X 270南部(東から)



(2) 2区中1号墳周濠、葦石S X 270南端(東から)



(1) 2区中1号墳周濠、葺石 S X 270北部1 (東から)



(2) 2区中1号墳周濠、葺石 S X 270北部2 (東から)



(1) 2区中1号墳周濠、葺石S X 270北部3(東から)



(2) 2区中1号墳周濠、葺石張り出し部S X 272(東から)



(1) 2区中1号墳周濠北部(東から)



(2) 2区中1号墳周濠、
断ち割り断面②(南東から)



(3) 2区中1号墳周濠、
断ち割り断面①(南から)



(1) 2区中1号墳周濠、断ち割り
断面③(東から)



(2) 2区中1号墳周濠、断ち割り
c - c' 断面(南から)



(3) 2区中1号墳周濠、断ち割り
e - e' 断面(南東から)

(1) 2区北部全景(南から)



(2) 2区S D213(7号墳周溝)断面
(南から)



(3) 2区土坑S K227(東から)





(1) 2区溝 S D201 (南から)



(2) 2区溝 S D201断面② (南から)



(3) 2区溝 S D201 杭列 1
(南西から)

(1) 2区溝 S D201土器溜まり 1
(南から)



(2) 2区溝 S D201土器溜まり 2
(南西から)



(3) 2区井戸 S E225(西から)





(1) 2区溝 S D204・205(東から)



(2) 2区溝 S D207(南東から)



(3) 2区溝 S D201掘削作業
(南から)



(1) 出雲遺跡第20次3区全景(空中写真、南東から)



(2) 出雲遺跡第20次3区全景(空中写真、北西から)



(1) 出雲遺跡第20次3区全景(空中写真、東から)



(2) 出雲遺跡第20次3区全景(南から)

(1) 3区 北部(南から)



(2) 3区溝 S D310(西から)



(3) 3区溝 S D315(南西から)



平成 27 年度出雲遺跡第 20 次



(1) 3区溝 S D306(西から)



(2) 3区溝 S D301(南から)



(3) 3区井戸 S E302(北西から)



(1) 1～3区遠景(空中写真、東から)



(2) 1～3区遠景(空中写真、西から)



1～3区全景(空中写真、西から)



(1) 1 区全景(東から)



(2) 2・3区(西から)



(1) 1区溝 S D50(北から)



(2) 2区溝 S D31(南から)



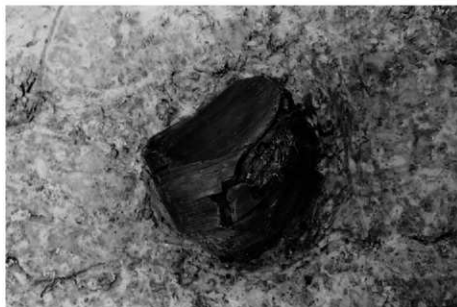
(3) 2区溝 S D35(南西から)



(1) 1 区西部遺構群(西から)



(2) 1 区土坑 S X 6 検出状況
(東から)



(3) 1 区土坑 S X 6 出土曲物
(南から)



(1) 1区西部土坑 S X19(南東から)



(2) 1区西部土坑 S X22(南東から)



(3) 1区土坑 S X17(北東から)

(1) 2区東部火山灰層検出面
(東から)



(2) 2区南壁断面火山灰検出状況
(北から)



(3) 3区全景(西から)





(1) 3区東部断ち割り火山灰層検出状況(北から)



(2) 3区東部断ち割り南壁AT火山灰層(北から)



(3) 3区南壁東端火山灰検出状況(北から)



(1) 4 区全景(南西から)



(2) 5 区全景(北東から)



(1) 4区掘立柱建物S B101・柱列
S A102検出状況(北から)



(2) 4区土坑S K118(南東から)



(3) 5区西部全景(南東から)

(1) 5 区土坑 S K 201(北西から)

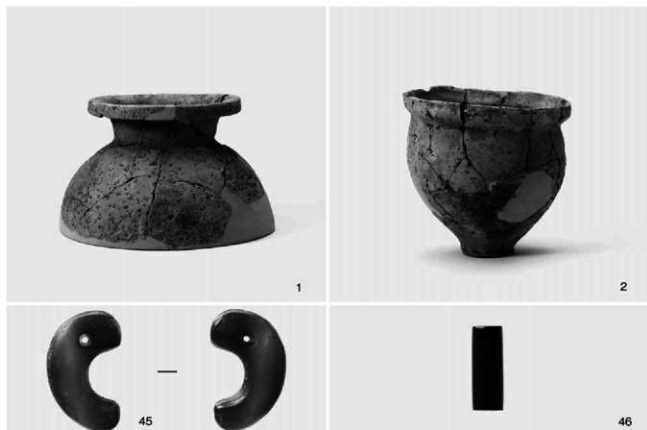


(2) 5 区東部北壁断面(南から)

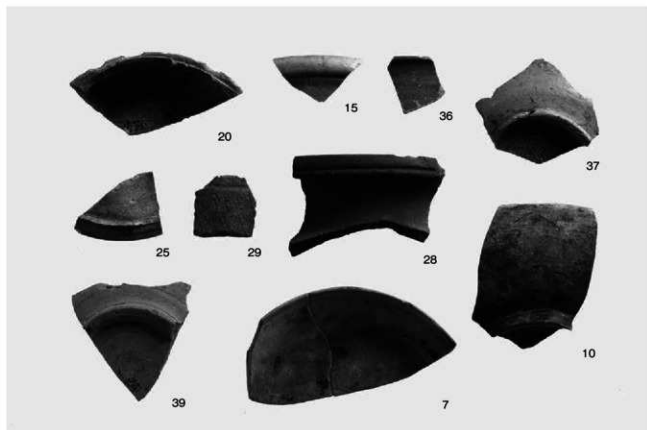


(3) 5 区北西端断ち割り(南東から)

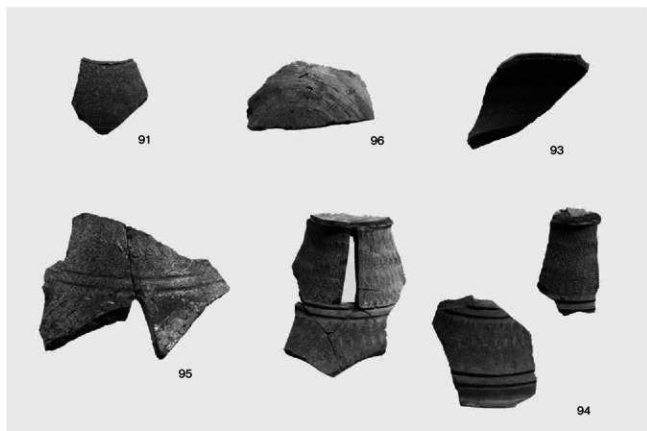




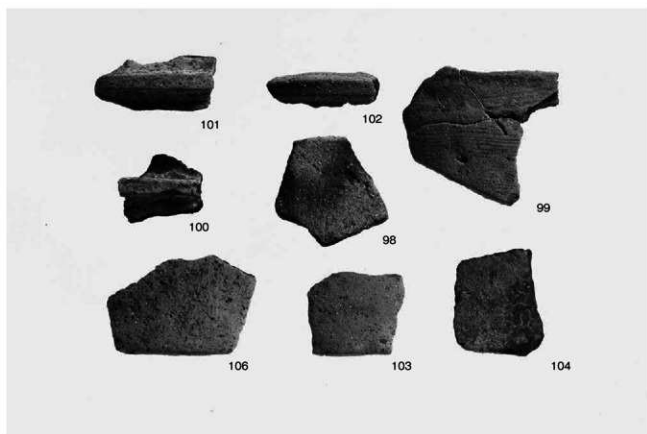
(1)出土遺物 1 1区出土弥生土器・玉類



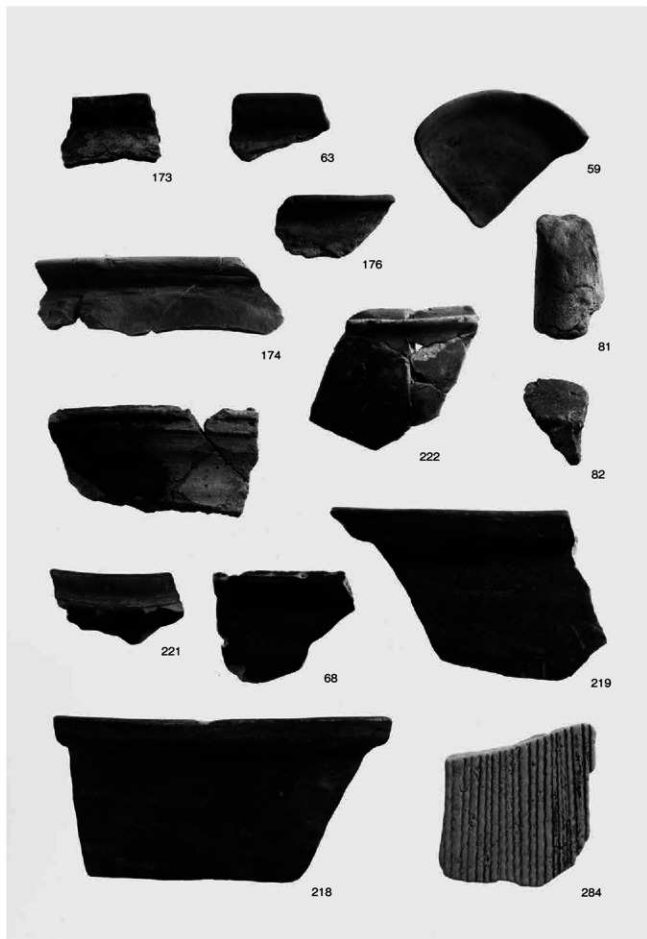
(2)出土遺物 2 1区出土土器(古墳時代～中世)



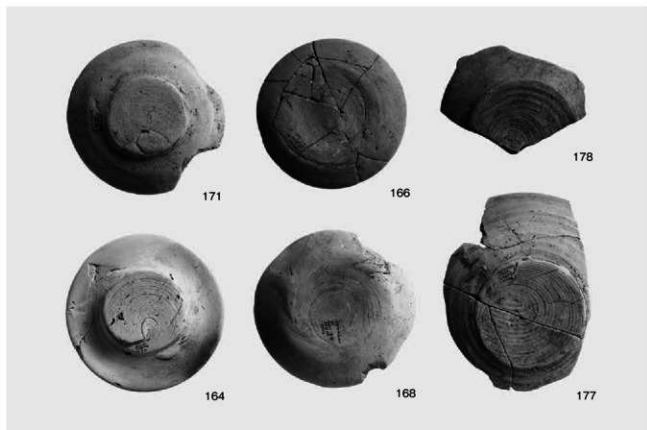
(1)出土遺物 3 2区中1号墳 出土土器



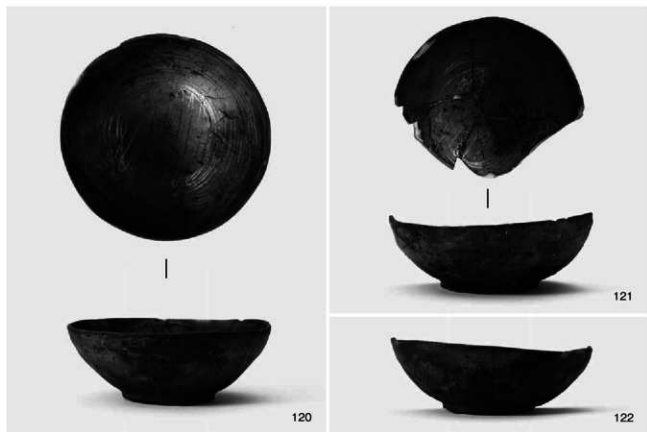
(2)出土遺物 4 2区中1号墳 埴輪



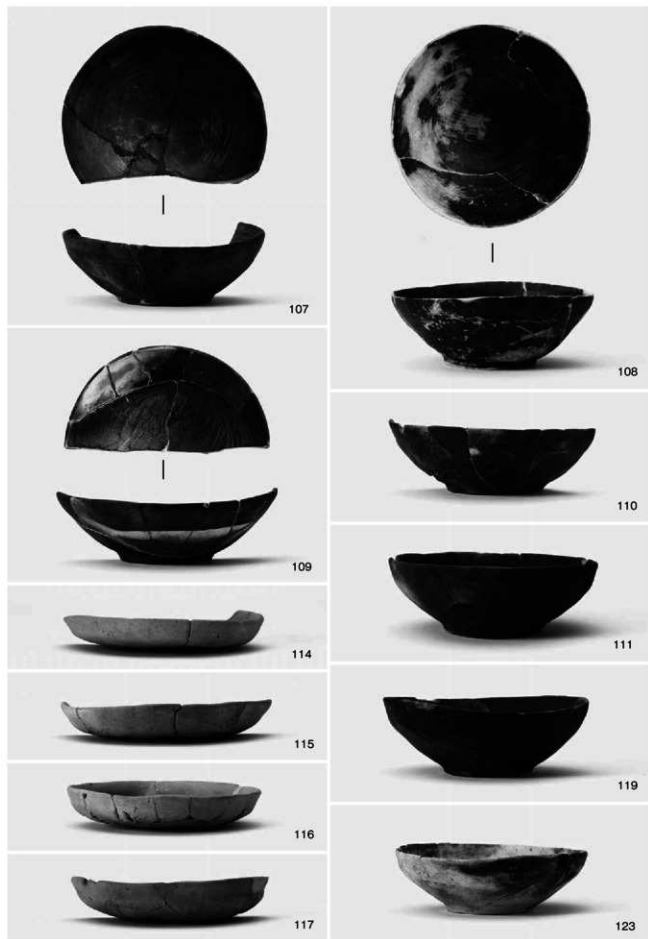
出土遺物 5 2区溝SD201、9トレンチ溝SD901・902出土土器



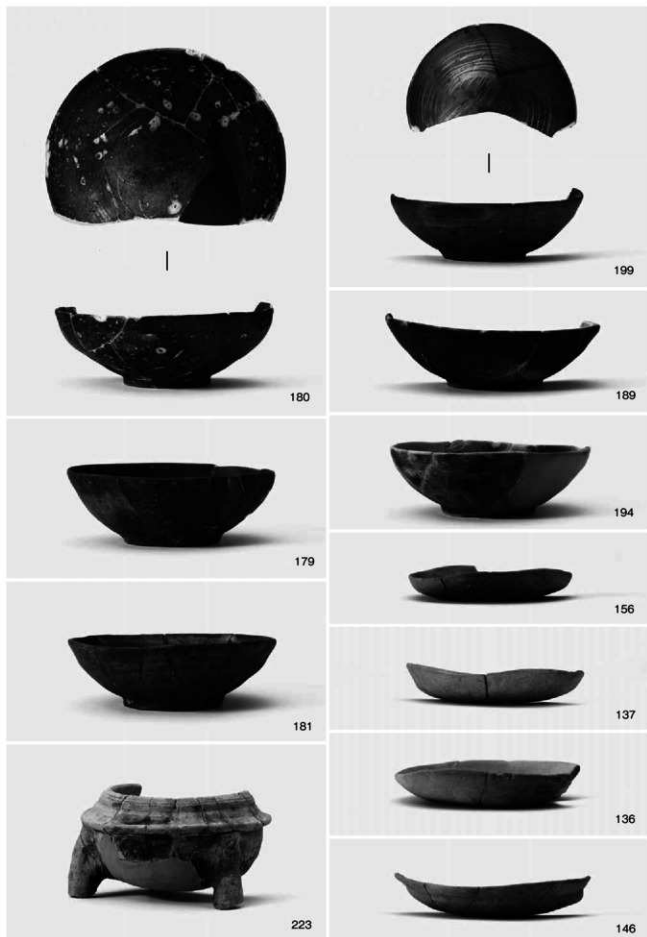
(1)出土遺物 6 2区溝 S D201出土土師器皿



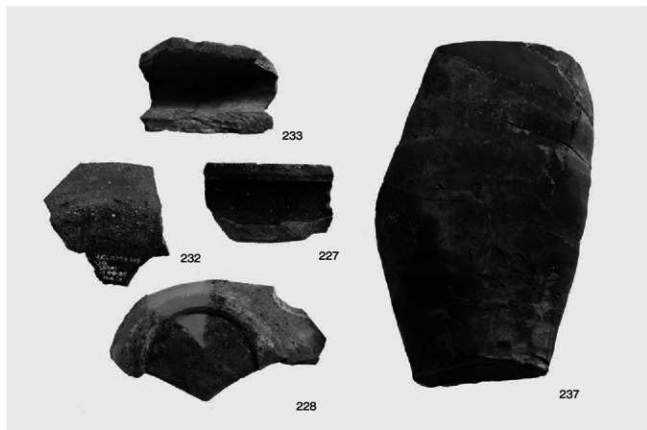
(2)出土遺物 7 2区溝 S D201出土瓦器碗



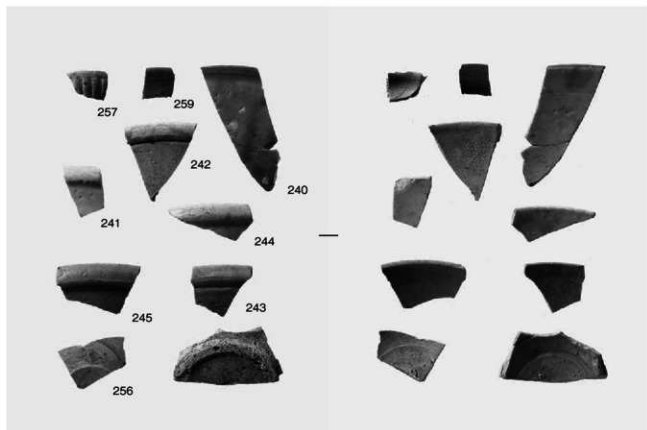
出土遺物 8 2区溝SD201出土瓦器碗・土師皿



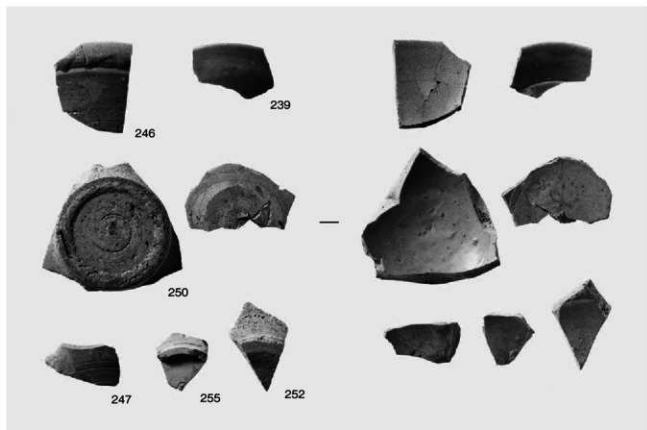
出土遺物 9 2区溝SD201出土瓦器碗・瓦質羽釜・土師器皿



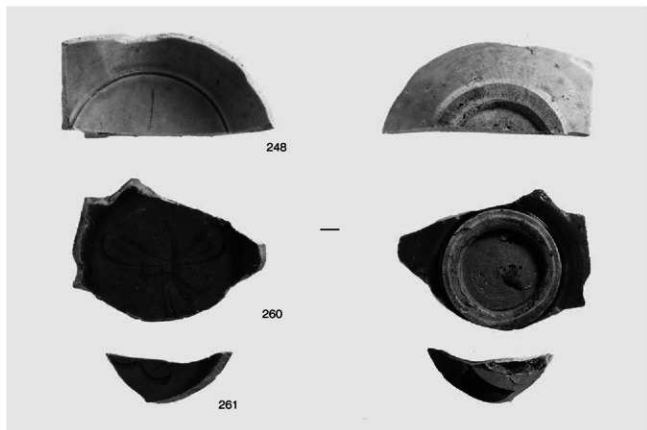
(1)出土遺物10 2区溝S D201出土須恵器・陶器類



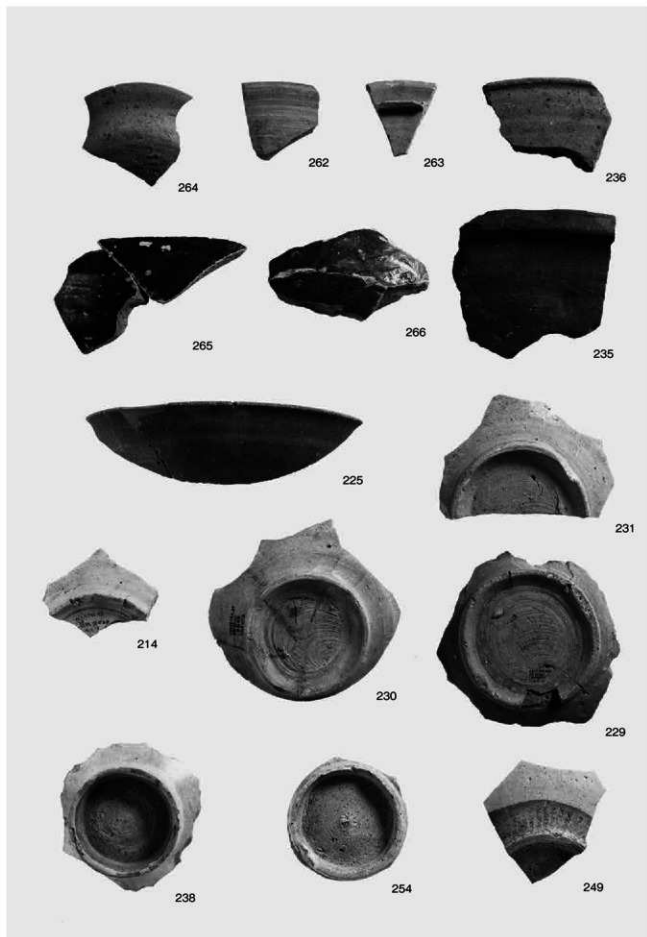
(2)出土遺物11 2区溝S D201出土青白磁・青磁・白磁類



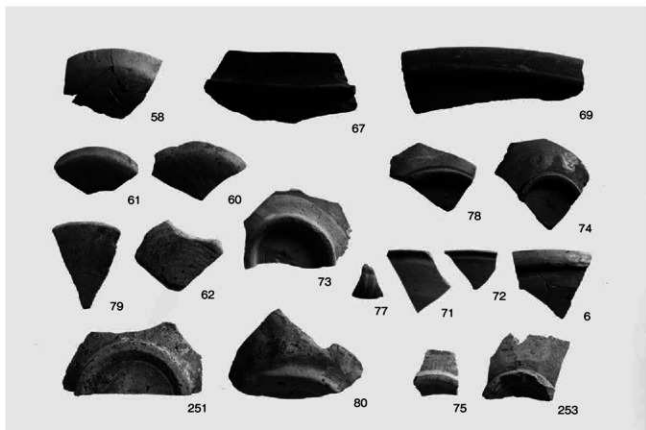
(1)出土遺物12 2区溝S D201区出土白磁類



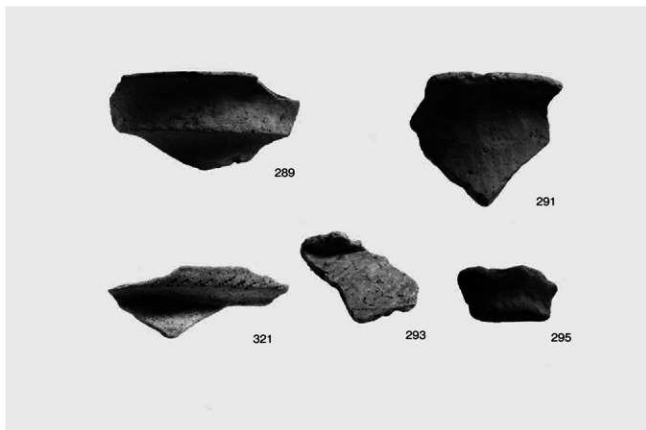
(2)出土遺物13 2区溝S D201出土白磁・青磁椀



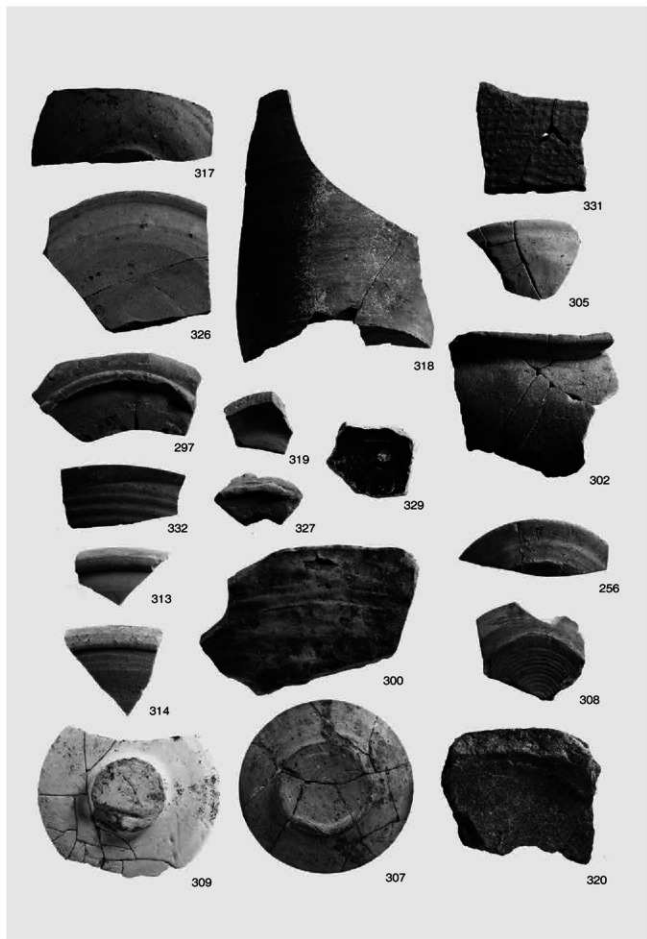
出土遺物14 2区溝SD201出土土器(須恵器・緑釉陶器・白磁他)



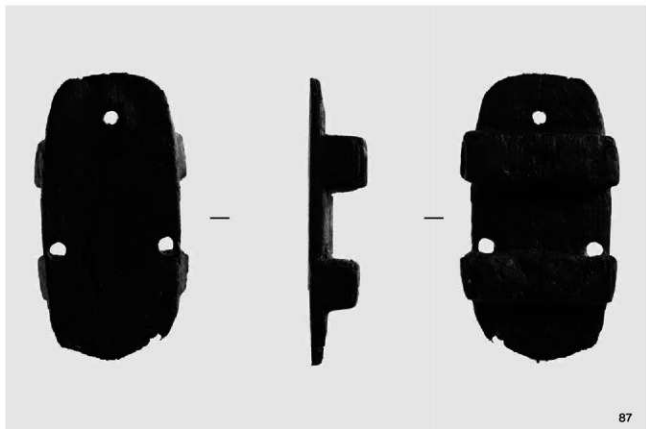
(1)出土遺物15 平成26年度9トレンチ溝S D901・2区溝S D201他出土土器



(2)出土遺物16 平成27年度3区出土弥生土器

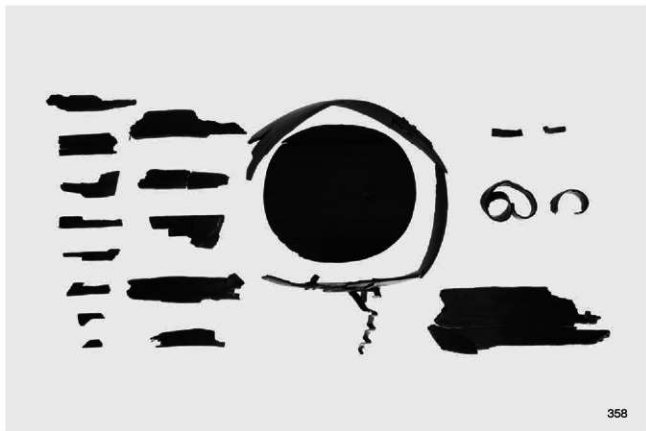


平成 26 年度出雲遺跡第 19 次・中古墳群第 3 次 平成 27 年度三日市遺跡第 13 次・車塚遺跡第 11 次



87

(1)出土遺物18 平成26年度9トレンチ溝S D901出土下駄

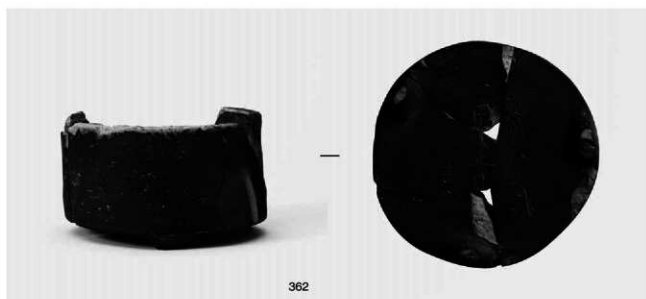


358

(2)出土遺物19 平成27年度1・2区土坑S X 6出土曲物

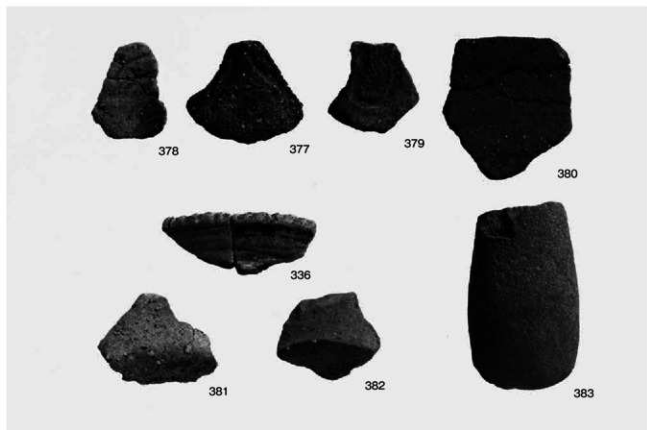


(1)出土遺物20 1区近世瓦生産関連遺物

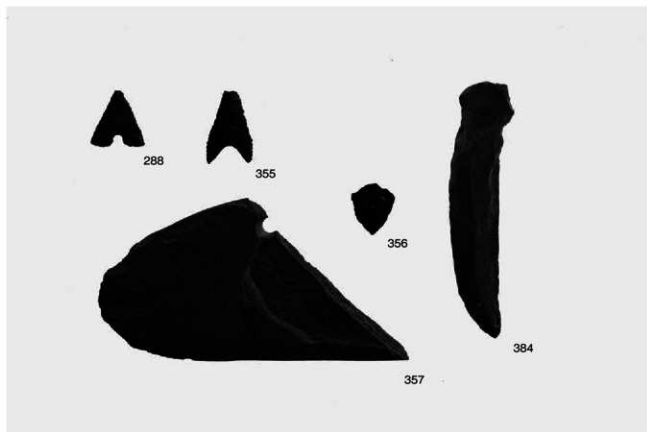


(2)出土遺物21 1区瓦質土器火鉢(天明八年銘)

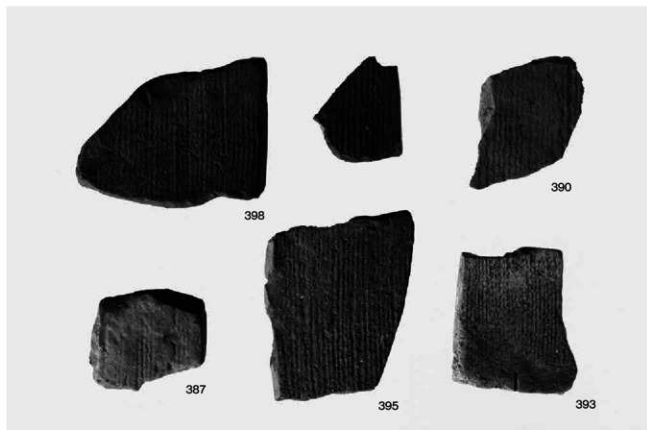
出雲遺跡第 19 次、中古墳群第 3 次、三日市遺跡第 13・14 次、お車塚遺跡第 11・12 次



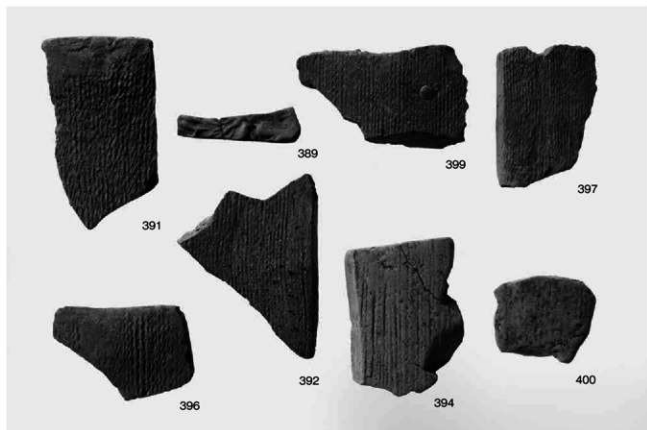
(1)出土遺物22 平成29年度5区出土縄文土器・弥生土器・石斧



(2)出土遺物23 平成26・27年度出土石器類



(1)出土遺物24 4・5区出土瓦



(2)出土遺物25 5区出土瓦

報告書抄録

ふりがな	京都府遺跡調査報告集
書名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副書名	
巻次	第178冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第178冊
編著者名	村田和弘・黒坪一樹・竹村亮仁・荒木瀬奈・武本典子・浅田洋輔・高野陽子・筒井崇史・伊賀高広
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番#3 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2019年3月29日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	m ²		
さえきいせき	きょうとふかめおかしひえだのちようさえき				20150525 ～ 20151204	4,920		
佐伯遺跡第7～9次	京都府亀岡市碑田野町佐伯	26206	44	35° 00' 55"	135° 31' 45"	14,500	農地整備	
					20170302 ～ 20170509 ～ 20180219	7,342		
なかこふんぐんだい2・3次	きょうとふかめおかしちとせちようちとせ	26206	260	35° 03' 06"	135° 34' 44"			
中古墳群第2・3次	京都府亀岡市千歳町千歳				20130711 ～ 20131107	1,250		
いずもいせきだい17・19・20次	きょうとふかめおかしちとせちようちとせ	26206	112	35° 03' 19"	135° 34' 39"	20140822 ～ 20150306	1,700	道路建設
出雲遺跡第17・19・20次	京都府亀岡市千歳町千歳				20150507 ～ 20151204	2,600		
みっかいちいせきだい12～14次	きょうとふかめおかしうまじちようかみみっかいち	26206	12	35° 03' 19"	135° 34' 21"	20171205 ～ 20180124	300	
三日市遺跡第12～14次	京都府亀岡市馬路町上三日市							
くるまづかいせきだい11・12次	きょうとふかめおかしうまじちようかみみっかいち	26206	7	35° 03' 19"	135° 34' 21"			
車塚遺跡第11・12次	京都府亀岡市馬路町上三日市							

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐伯遺跡第7～9次	集落跡	縄文～中世	堅穴建物・掘立柱建物・古墳・井戸・土坑・溝・自然流路	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・木簡・墨書土器・瓦類・瓦塔	
中古墳群第2・3次 出雲遺跡第17・19・20次 三日市遺跡第12～14次 車塚遺跡11・12次	古墳 集落跡	縄文～近世	土坑・流路・古墳(周濠・墳丘・葺石)・流路・掘立柱建物・柱列・粘土採掘土坑	縄文土器・弥生土器・須恵器・円筒埴輪・瓦器・陶磁器・瓦・木製品・玉類	
所収遺跡名	要 約				
佐伯遺跡第7～9次	佐伯遺跡の発掘調査を行い、縄文時代中期の流路や後期の土坑等を検出した。古墳時代中期から後期の堅穴建物群や奈良時代から平安時代の掘立柱建物等を検出した。また、同時期前後の多量の瓦や墨書土器、瓦塔、蹄脚円面硯等が出土し、寺院跡や官衙等に関わる遺跡であるとみられる。				
中古墳群第2・3次 出雲遺跡第17・19・20次 三日月遺跡第12～14次 車塚遺跡10～12次	三日市遺跡ほかの発掘調査を行いA T火山灰の堆積層を確認した。古墳時代中期頃を中心とする中古墳群を新たに検出し、1号墳は埴輪、葺石、周濠を備える方墳であることが明らかとなった。1号墳の周濠は、中世に居館の濠として利用された可能性がある。また、奈良～平安時代の掘立柱建物や瓦廃棄土坑、中世～近世の粘土採掘土坑を検出した。瓦生産に関わる遺構である可能性がある。				

京都府遺跡調査報告集 第178冊

平成31年3月29日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141